文學士佐成謙太郎著

謡曲大觀

第五巻

東京 明治書院

例言

全般に亘つて

能樂の演奏には、シテ方・ワキ方・狂言方・囃子方等の役柄がありますが、その主體をなすものはシテ方で、一般に行はれてゐる謠本も亦シテ方のものであります。そして、このシテ方には觀世・寶生・金春・金剛・喜多の五流（梅若も一流を樹立しましたが、その謠本は觀世流のものを踏襲してゐます。）がありまして、各流二百十番乃至百八十番を現行曲としてゐます。そして、その大部分は各流共通のものでありますが、その間に多少の出入がありまして、五流現行曲は凡て二百三十五番となるのであります。（最近金剛・喜多の二流で廢曲としたものは、當然これを削除し、金剛流で新しく加へることとしたものも、未だ流布してゐないのでありますから、これを省略しました。）

本書は上述二百三十五番を、〔翁〕は別曲として第一に擧げ、〔鸚鵡小町〕以下を曲名の五十音順に從ひ、每曲、解說・本文・語釋・口語譯・考異の五部門に分つて、これを掲げました。そして、本文・語釋・口語譯の三項は、彼此對照する便宜を考へて、上中下の三段に、互に相對するやうに記しましたが、その間に自ら繁簡の差異があつて、多少前後するこ

とを免れませんから、一曲を數節に分つて【一】【二】【三】等の符號を附し、識別し易いやうにしました。

なほ、各部門を通じて、謠曲名には必ず「」の符號を附けてこれを表示し、流名には往々觀（觀世）・寶（寶生）、春（金春）、剛（金剛）、喜（喜多）の略符號を用ゐました。

解說について

解說に於ては、また能柄・人物・所・時・異稱・作者・梗槪・出典・槪評の諸項に細分して記しました。

イ能柄

能樂五番立の分類、脇能・二番目・三番目等の分類は、確乎たる根據のあるものともいへませんが、その曲柄を知るのには甚だ便宜なものであり、夢幻能・劇能等の名稱は、著者の私に與へたものでありますが、これも脚色の大體を知るのに便宜でなからうかと思ひましたので、兩者とも每曲にこれを掲げました。

ロ人物

舞臺に登場する每曲の役柄・人物は、發聲順又は登場順によつて掲げました。

ハ　所

謡曲に描かれてゐる場所は、一曲の中でも多少移動するのが普通でありますが、ここには、その主要な場所を擧げました。前後の二段に於て主要場所の移る場合には、これを表示しました。

ニ　時

謡曲に描かれた時は、明確でないものが少くありません。さうした場合には、能樂實演の取扱上指定してゐる季節を、括弧を施して、(一月)(二月)のやうに記しました。

ホ　作者

謡曲の最も著しい作者が世阿彌であることには疑ひがありませんが、どの曲がだれの作であるかは、明言し難いものが少くありません。本書には、世阿彌の著書によつて明らかなものは勿論これを明示し、なほ後世の書ではありますが、作者目録として相當有力なものと認められてゐる吉田兼持の能本作者註文、觀世元章の二百十番謡目錄の說をも掲げて置きました。なほこの外、作者、制作時代等を知る傍證となるべき古記錄、金春禪竹の著書、室町時代公卿日記等の所見をも掲げました。この項に就ては、丸岡桂氏の古今謡曲解題から得たものが多いのでありますが、著

者自身も亦同樣の搜索を試みましたので、同書の遺漏を多少補ひ得ました。なほ筧文學士の言經卿記に就ての研究に負ふ所も少くありません。

ヘ梗概

一曲を通じた口語譯を試みたのでありますから、梗概は一見してその大要を知り得る程度にとゞめました。

ト出典

謠曲の主材は大部分先進文藝から得たものでありまして、これを知ることは、謠曲作者の創作態度を見る上にも、謠曲を正しく解釋する上にも、必要なことでありますから、典據の索め得たものは、なるべく詳しくこれを引いて、謠曲文と對照する便に供へました。

チ概評

すべて文學藝術の批評鑑賞は、その人々の主觀から出るもので、客觀的な一定の基準は定め難いものだと思ひます。著者の主觀から出發した批評などを述べるのは、誠にをこがましいことではありますが、初心の人々には多少參考になることもあらうかと思つて、敢て卑見を略述しました。

本文について

イ底本の選定

謠曲の本文は、諸流とも大體同一でありますが、その間に多少詞章の出入した所があります。それで、本書の底本には、謠曲の大成者觀阿彌・世阿彌の流系であり、その後引續いて現在も最も流布してゐる觀世流のものを採り、觀世流で行はれてゐないものは、上懸として觀世に最も近い、そして現在觀世に次いで廣く行はれてゐる寶生流を採り、上懸一流に行はれてゐないものは、下懸三流の中で流系の最も古い金春流を採り、次いで金剛流を採り、最後に五流の中最も新しい喜多流の文を採りました。

ロ本文の校訂

本文の底本には、その流の現行謠本を採りましたが、漢字・假名遣等は、古謠本及び諸流謠本を參酌して、その穩當なものに從ひました。

用語・用字は各流を通じて、一定の樣式に統一しましたが、句讀はすべてその流現行曲の主張に從ひました。

漢字には「何々にて候」「何々にて候へば」の外は「さん候」などと候を濁音で謠ふ場合も

すべて振假名を施しました。そしてその振假名は字音假名遣、歴史假名遣に從ひましたが、謠曲には特殊な謠ひ方が少くありませんので、さうした場合にはすべてその謠ひ方の發音に從つて、「御宇」「青墓」「危く」などと記し、「謠ふ」「榮うる」なども、「うたう」「さかうる」と謠はないことを明示する爲に、「謠ふ」「榮うる」と記し、假名でも讀み誤る恐れのあるものは、「今日見ずは」などと、特に片假名を傍につけて、これを明示しました。

謠曲では、上の音が字音のタ行又は撥音ンで、その次の音がア行・ヤ行・ワ行、又はハ行「は」である時は、その音がタ行又はナ行或はその拗音に轉じて、「今日は」「御入り候」「陰陽」などと謠ふものであります。かうした場合、漢字の振假名にはその發音假名を記しましたが、假名書きの場合には、これに一々傍訓を施すのは、餘りに煩はしいので、省略しました。それらはすべて、「善神は」「他生の緣ありて」「利物を」などと謠ふのであります。

章句・節附の名稱、次第・道行・下歌・上歌・クリ・サシ・クセ・ロンギ等は、すべて謠本の指定に從つてこれを附し、呼掛・語・待謠等の名稱も括弧を施してこれを記しました。たゞ、カヽル・打切は本書の如き性質のものには、煩はしいばかりで必要のないものと思

つて省きました。
なほ謠がかりの部分と節をつけないたゞ詞の部分とは、その句頭に、前者には『後者には「の印を附けて、これを辨別しました。（口語譯等に附けた「』は、會話文又は引用文を表示したもので、これとは全く意味を異にしてゐます）

ハ本文の補修

能樂の實演を一度でも觀たことのある人は、誰でもすぐ氣づくやうに、謠本や從來の謠曲註釋書に記してゐる詞章は、能樂詞章の全部ではありません。謠本に記されてゐない狂言詞やワキ詞（時としてはシテ詞をも）を知らなくては、精細に謠曲を理解することが出來ないのであります。たゞこれらの詞は寫本として、役者の家家に相傳してゐるだけで、世間には殆ど出てゐないのでありますが、著者は幸ひにしてこれを見出すことが出來ましたので、すべての曲を通じて、舞臺で述べられるほどの詞は、洩れなくこれを收めるやうに力めました。その中、
シテ詞・ツレ詞　は、その流現行のものに從ひ、
ワキ詞　は、現在家元の存續してゐる唯一のワキ方である脇寶生流の古寫本により、寶生流に求め得なかつたものは、高安流・春藤流などに從ひました。（寶生流以外

に據つた場合は、その都度その旨を斷つて置きます）

狂言詞　は、もと狂言には大藏・和泉・鷺の三流があり、現在はその中大藏・和泉の二流が行はれてゐるのでありますが、その詞は謠曲の他の部分に比べて流動性の多いものでありまして、現在行はれてゐるものでも、同じ流の中にも、例へば大藏流の茂山派と山本派、和泉流の三宅派と山脇派と野村派など、それ〴〵可なりの相違があるのであります。それで、本書では成るべく古い原形に近いものに據りたいと思ひ、森川杜園舊藏の大藏流古寫本（推定寛政頃）に據り、大藏流にないものは和泉流に據りました。

二　型附

能樂は一種の劇であり、從つて謠曲は一種の脚本と見られるのであります。それで、「ト書き」のない脚本が、舞臺を想像するに不都合であるやうに、型附の記されてゐない謠曲文は、能樂の演奏を想察することの困難な、從つて謠曲として十分に鑑賞することの出來ないものだと思ひます。それで、本書にはこの型附を「ト書き」風に記して見ました。そして、その型附は著者所藏の觀世大夫清親型附本を本とし、帝國圖書館所藏觀世流舞本その他の型附本、木下敬賢氏の能樂蘊奥集、大和田建樹氏

の「能の栞」、池内信嘉氏の「能の見方と謠の聞き方」、謠曲界連載の「うたひ通解」、大觀世連載の「能の型」等を參酌し、殊に著者の觀能手控を參考としました。

尤も、能の型附は極めて些細な點まで嚴密に規定してゐますと同時に、變型の少くないものでありますが、さうした詳細な型附の記載は本書の目的とするところでもなく、又却つて全篇通讀の妨げともなるものでありますから、たゞ演出の大體を想像し得る程度に略記することにとゞめました。

なほ、現行曲二百三十餘番のうち、凡そ百番内外が屢〻實演せられるもので、型附本等の參照すべきものも多いのでありますが、他の百數十番は實演せられる機會が少く、型附も殆ど見當らないのであります。 著者はなるべく廣く求めて、その大概を知るに力めましたが、一二の曲に就ては、裝束附及び登場人物の出入を記すにとゞまつたものがあります。

ホ 活字の差別

以上擧げました、謠本以外の狂言・ワキ等の詞及び型附は、謠曲として完全な本文を作る爲に必要な條件であると信じますが、謠本に記されてゐる部分とその他の部分とには、可なり輕重の差がつけられてゐるやうに思はれます。 その上、謠本以外

の部分は、著者が必要と認めて新しく加へたものでありますから、その差別を明らかにする爲に、謠本に記されてゐる部分は十二ポイント、その他の詞は九ポイント、型附は八ポイントとして、活字の大小を以てこれを辨別しました。——狂言詞は、謠本にも時折記してゐることがあります。その場合、その文は實演に使用してゐるものと同樣のものである時にはこれに從ひ、大差ある時には著者の用ゐた狂言底本の文に從ひ、謠本の文を參考として上欄に掲げ、いづれにしても、その都度これを明示して置きますが、その謠本に從つたと否とに拘らず、狂言詞はすべて九ポイントとして、體裁を整へました。

語釋について

謠曲の語句の解釋は、夙く豐臣氏の頃から大仕掛に行はれ、德川末期、犬井恕軒の謠曲拾葉抄に於て一度大成したのであります。その後、明治時代に入つて、大和田建樹氏の謠曲評釋、丸岡桂氏の觀世流改訂謠本(刊行會本)餘解等に於て、更にこれを修補せられて、著者の新しく加へ得る所は甚だ少かつたのでありますが、多少は修正し得たかと思つて居ります。

本書に掲げた語釋は、なるべく煩雜にならないやうに、要領を記すやうに注意しましたが、引歌・引用句などはなるべく洩れなく掲げるやうにし、緣語・掛詞なども一々指摘するやうに心掛けました。

語釋は本文の上段に置いたのでありますが、それではいひ足りない時には、その曲の末尾に「附記」として掲げました。

口語譯について

謠曲の口語譯、謠曲文の全體を通じて、一貫した解釋を施すことは、これまでまだ試みられたことがないと思ひます。否、これまでは、謠曲は「綴れ錦のちやんちやんこ」のやうなものだ、などといはれてゐて、全篇を通じた逐語的飜譯は出來にくいものと考へてゐた人が少くないやうに思ひます。著者は大膽にもこれを試みて、その二三十を謠曲界に連載して、識者の教へを乞うたのでありますが、こゝにすべての曲に亙つて口語譯を試みることとしました。著者自身が讀んでもものの足りない節が少くない、將來大に修正せらるべきものではありますが、從來全くなかつたものだけに、讀者諸君の參考にもならうかと期待してゐるのであります。

考異について

イ諸流異同

前に述べました通り、各流の詞章には多少の異同がありまして、この差異を辨別することは、各流の主張を見る上にも、謠曲を解釋する上にも、參考となるものでありますが、些細な相異まで一一指摘しますと、非常に煩雜なものとなり、頁數も甚しく増加しますので、些細なものはこれを省略し、やゝ著しい相異は必ずこれを掲げることとしました。

ロ古謠本異同

謠曲の詞章は、殆ど原形のまゝ傳へられて來たのでありますが、元祿以前とその以後とでは、やゝ著しい差異の認められるもいかないでもありません。そして、この古謠本、從つて原形に近いものを知ることは、いづれの點から見ても、大切なことだと思ひますので、慶長光悅本をはじめ元祿以前の古謠本の索め得ましたものは、その最も古いものに從つて、これを現行曲と比較して、その相異は大小となくすべて原文のまゝで指摘しました。

なほ、世子六十以後申樂談儀、金春禪竹の五音次第・五音三曲集等に謠曲の一節を引いてゐますものは、これこそ原形を知る最も大切な資料でありますから、本項の末、又は解說の作者の項に於て、その全文を擧げ又は現行曲との異同を辨じて置きました。

能畫について

每曲冒頭に揭げました演能圖は、緖言に申し述べました通り、すべて深見坦郞畫伯の揮毫に係るものであります。これまでにも演能の版畫又は寫眞は數多くありますが、現行曲すべてを網羅したものは、深見畫伯のものが最初であると思ひます。畫伯が本書の爲に苦心して終にこれを完成せられたのは、また一には斯道の劃期的事業であつたと信じるのであります。

謡曲大観第五巻 目次

ゆ

よ

ら

り

松（まつ）風（かぜ）

観（寳　春　剛　喜）

解　説

【能柄】　三番目　單式夢幻能

【人物】　**ワキ**　旅僧、**狂言**　所の者、**シテ**　海士女（松風の靈）、**ツレ**　海士女（村雨の靈）

【所】　攝津國　須磨浦

【時】　秋・九月

【異稱】　古く「松風村雨」ともいつた。

【作者】　世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作として擧げてゐるが、能作書に「松風村雨、昔汐汲也」といつてゐるから、古曲を世阿彌が改作したのであらう。能本作者註文には世阿彌の作としてゐるが、二百十番謡目錄に觀阿の作として擧げてゐるのは、古曲を觀阿の作と見たものか。世阿彌の五音曲條々に「松風村雨の後段、班女、みそぎ川、是等は皆戀慕のもつぱら也」といひ、金春禪竹の五音三曲集に幽玄骨味の例として本曲の第二節シテサシ「心づくしの」より初同「朽ちまさり行く袂かな」までを擧げ、拾玉得花に十體風姿の第三戀慕の例に本曲を擧げ

である。春日拜殿方諸日記に寶徳四年四月十三日、糺河原勧進猿樂記に寛正五年四月七日、親元日記に寛正六年三月九日本曲を演じたこと、言經卿記に文祿四年三月二十七日本曲を註尋したことなど見えてゐる。

【梗概】諸國一見の旅僧が西國に下る途次、須磨浦で松風・村雨二人の海士女の舊跡の松を見て、あはれを催し、念佛して弔ひ、秋の日の早くも暮れて來たので、とある鹽屋に立ち寄り、二人の海士女が夜汐を汲んで歸つて來たのを待ち受け、一夜の宿をとうた。そして、行平の歌を口ずさみ、松風・村雨の跡を弔つた事を話すと、二人の女が泣くので、旅僧は不審に思つてその子細を尋ねた。二人の女は包みかねて、「私達は松風・村雨の幽靈です」とうち明け、行平に寵愛せられた次第を語り、殊に松風の方は戀慕の餘り狂はしくなつて、行平の形見の烏帽子・狩衣を着けて、舞を舞ひ、妄執の苦しみを述べて回向を乞うた、と思ふうちに、僧の夢は覺めて、二人の姿は消え失せ、たゞ松吹く風の音ばかりが殘つてゐた。

【出典】在原行平が須磨に配流せられたことは、古今集雜下に、

田村の御時(文徳)に、事にあたりて、津の國の須磨といふ所にこもり侍りけるに、宮のうちに侍りける人につかはしける

わくらはにとふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつゝわぶと答へよ　　在原行平朝臣

とあり、海士のことは、撰集抄第八「公任進レ位并行平遷流事」に、

昔行平中納言といふ人いますかりける。身にあやまつことと侍りて、須磨の浦に流されて、もしほたれつゝ浦傳ひしありき侍りしに、繪島の浦にて、かづきするあま人の中に、世に心とゞまり侍りけるに、たより給ひて、いづくにやすむ人にかと尋ね給ふに、この海士とりあへず、

白波のよする渚に世をすごす、あまの子なれば宿も定めず

とよみて紛れぬ。中納言いとゞかなしうおぼえて、涙もかきあへ給はずとなん。

とあるが、本曲は前掲古今集の歌を本とし、且源氏物語に、行平の事によつて源氏君の須磨配流の事を構想して、「おはすべき所は行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居近きわたりなりけり」といひ、

海士どもあさりして、かいつものもて參れるを、召し出でて御覽ず。浦に年ふるやうなど問はせ給ふに、さまざまの安げなき身のうれひを申す。そこはかとなくさへずるも、心のゆくゑは同じことなるかなとあはれに見給ふ。御衣どもかづけさせ給ふを、いけるか

ひありと思へり。（須磨卷）

などとあるによつて、新しく構想したものであらう。

【概評】　世阿彌は「松風村雨、寵深花風の位歟」といつて、彼自身既に會心の作として居り、爾來、戀慕曲の逸品として推賞せられ、諺にも「熊野・松風米の飯」といはれ持て囃されて來たやうに、目にも耳にも、見る度毎に聞く度毎に、美しい快い感じを與へる曲である。脚色の形式からいへば、シテの前後中入しない單式であるにも拘らず、初同の後に、シテサシに始まつて地上歌で結ぶ一節の次にロンギがあつて、はじめてワキ・シテの掛合となり、クドキがあつてクセとなり、物着の後、シテ狂亂となつて、中舞があり破舞があるといふ、世阿彌自身が「松風村雨、事多き能なれども、これはよし」といつてゐるやうに、まことに事の多い能であるが、これによつて情緒の纏綿たる趣、哀情の切なる感じを與へこそすれ、冗漫な煩しさ、陰慘乃至執拗な不快を與へないのが、さすが本曲の秀れてゐる所以である。

【一】

○津の國――攝津の古名。

○須磨の浦――攝津國武庫郡

○様ありげなる――様子のありさうな。

【一】

後見、松の立木の作物を正面先に出す。

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で名乘座に立ち、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われ未だ西國を見ず候程に。この度思ひ立ち西國行脚と志して候

といひ、はや須磨に着きたる心にて、

ワキ「あら嬉しや急ぎ候程に。これははや津の國須磨の浦とかや申し候。（作物の方に向き）又これなる磯邊を見れば。様ありげなる松の候。いかさ

【一】

舞臺は初め何處であるか明かでないが、ワキ旅僧の登場、

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧ですが、まだ西國の方へは行つたことがないので、今度思ひ立つて、西國行脚しようと思ふのです」

こゝで見物人に自己紹介をし、西國の方に出掛けて、もはや須磨まで來た態で、舞臺は攝津國須磨の海邊となる。

僧「あゝ嬉しい、旅を急いだので、もはやこゝは攝津國須磨浦といふ所ださうだ。（正面濱邊の松を見て）この濱邊を見ると、何だかわけのありさうな松がある。確かに

ま謂れのなき事は候まじ。このあたりの人に尋ねばやと思ひ候

ワキ（橋懸に向き）「須磨の在所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。これなる磯邊に一木の松の候に。札をうち短冊を掛けられて候。謂れの候か教へて給はり候へ

狂言「さん候あれは松風村雨と申したる二人の海士の舊跡にて候。御僧も弔うて御通りあれかしと存じ候

ワキ「懇に御教へ祝着申して候。さあらばあれへ立ち越え。逆縁ながら弔うて通らうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて引く。ワキ舞臺の眞中に出て作物に向き、

ワキ「さてはこの松は。古松風村雨とて。二人の海士

○祝着—喜ばしい。

○松風村雨—行平が二人の海士少女につけた名。假作の人物である。

何か謂れがあるに違ひない。このあたりの人に尋ねて見ませう。

といって、折柄來合せた在所の人に尋ねると、これは松風・村雨の舊跡であると教へる。

僧　さては、この松は昔の松風・村雨とい

○痛はしや―氣の毒なことだ。
○身は土中に埋もれぬれども―和漢朗詠集白楽天の詩句「龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」に據つた。
○緑の秋を殘す―松の一年中變らない緑色から秋の空色にかけて秋を出し、昔の樣はすべて消え失せたが、たゞ墓標の松だけが淋しく殘つてゐるといつたのである。
○經念佛―讀經念佛。
○秋の日の習ひ―秋は日が短くて暮れ易いから。
○山本の里―山の麓にある里。須磨村を指す。固有名詞ではない。
○鹽屋―鹽水を煮て鹽を造る粗末な家。

【三】

○汐汲車―汐水を汲み入れて運ぶ車。車の縁語輪にいひかけて「僅か」を呼び出した。
○浮世に廻る―浮世で暮らしを立てて行く。廻るは車の縁語。

土の舊跡かや。痛はしやその身は土中に埋もれぬれども。名は殘る世のしるしとて。變らぬ色の松一木。緑の秋を殘すことのあはれさよ。―かやうに經念佛して弔ひ候へば。(右の方に向き)げに秋の日の習ひとて程なう暮れて候。あの山本の里までは程遠く候程に。(脇座に向き)これなる海士の鹽屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

後見、汐汲車を目附柱際に出し、その上に水桶を一つ載せ置く。

眞一聲の囃子にて、シテ松風、面若女・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・赤地縫箔腰巻・白水衣・腰帯・扇の裝束、ツレ村雨、面連面・鬘・鬘帯・襟赤・着附摺箔・赤地縫箔腰巻・白水衣・腰帯・扇の裝束にて水桶を持ち、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松に立留りて向合ひ、

シテツレ 一聲「汐汲車。わづかなる。浮世に廻る。はかなさよ

二人とも正面に向き、

ふ二人の海士女の舊跡なのか。あゝ氣の毒なことだ。その身は土中に埋もれてしまつたが、名は後世まで殘つて、その墓じるしとせられた一本の松だけが、いつも變りのない緑の色をたゝへて、秋のあはれを示してゐることだ」

と讀經して、

僧「このやうに讀經念佛して回向してゐるうちに、秋の日のこととて、もはや夕暮となつた。あの山の麓の里まで行くには大分道のりがあるから、こゝの海士の鹽屋に立ち寄つて、一夜を明かすことにしませう」

といつて、鹽屋へ行き主人の歸りを待つてゐる態

【三】

シテ松風の靈、ツレ村雨の靈、在世當時の海士姿で水桶を持つて登場。

二人「汐汲車を引くやうな、辛い思ひをして、やつとのこと、この世の暮らしを立てて行かねばならないとは、ほんとに果敢ないことです。須磨浦では、波のそば近くうち寄せてくるこの淋しい汐水の爲に袂を濡らすばか

○波ここもとや—以下「關吹き越ゆる」までの語釋、本曲の末に記す。
○波の夜々は—波の寄るを夜にいひかけた。「里離れなる」—須磨の巻に「昔こそ人の住みかなどもありけれ、今はいと里離れ心すごくて、海士の家だにまれに」
○月より外は友もなし—金葉集法橋忠命の歌に「草枕この旅寝こそ思ひ知る月より外の友なかりけり」
○つたなき海士小舟の—同じ浮世の業ながら、殊にはかない海士の身上であるといひかけ、舟の縁で「渡り」とつゞけた。
○住むとやいはん—この世に住んでゐるともいひかねる、あはれな生活である。
○うたかた—泡沫。夢の世に對して出し、汐を出す料とした。
○寄るべなき—たよりのない。寄るは車の縁語。
○思ひを乾さぬ—物思ひに涙も乾く暇がない。
○かくばかり經がたく見ゆる世の中に—拾遺集藤原高光の歌。下句「羨ましくもすめる月かな」
○出汐—月の出と共にさし來る汐。滿汐。

ツレ上句「波ここもとや須磨の浦。シテ(向合ひ)ツレ「月さへ濡らす。袂かな
（と謡ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、）
シテサシ「心づくしの秋風に。海は少し遠けれども。かの行平の中納言。シテ(向合ひ)ツレ「關吹き越ゆると詠め給ふ。浦わの波の夜々は。げに音近き海士の家。里離れなる通ひ路の月より外は友もなし
シテ(正面に向き)「げにや浮世の業ながら。殊につたなき海士小舟の。ツレ(向合ひ)二人「渡りかねたる夢の世に。住むとやいはんうたかたの。汐汲車寄るべなき。身は海士人の。袖ともに。思ひを乾さぬ。心かな
地下歌「かくばかり經がたく見ゆる世の中に。羨ましくも、澄む月の出汐をいざや、汲まうよ出汐をいざや汲まうよ。上歌「影恥かしきわが姿(面

りでなく、月を見てさへ、あの悲しくなつて來て、涙に袂を濡らすことです。ここは海邊からは少し離れてゐるけれど、人の心を悲しませる秋風が強く吹いてくるので、『あの行平中納言が「關吹き越ゆる須磨の浦風」とお詠みになつたやうに、浦風がきつくて、殊に夜などは波がひどくうち寄せて來て、波音がほんとに耳近く聞えてくることです。その上、このやうな海士の住家は人里から離れてゐるので、誰一人往き來するものもなく、たゞ月を見て慰めとするより外に、話し合ふ友もない、ほんとに淋しいことです。いづれ浮世の仕事に樂しいことのあらう筈もないけれど、その中でもとりわけつまらない海士のやうな仕事をして、その日その日をも過しかねてゐるやうな者は、この世に生きてゐるといひかねる有樣で、かうして汐汲車を引いて、誰たよる者もなく過してゐる身上を思ふと、汐水の雫にかりではない、悲しい涙に袖が濡れ通しで、乾く時とてはありません。
（現在の境遇をはかなんで、互に[illegible]）
（[illegible]、[illegible]出る月を見て、）
二人「このやうに浮世は暮らしにくいものだと思つてゐるのに、あの月は何の心配もなささうに澄み渡つてゐます。まあほんとに羨ましいこと。さうだ、私たちもこんなぐちばかりこぼしてゐないで、さあ月が出て滿汐になつたのを幸ひ、氣を取り直して汐水を汲みませう

を曇らせ)。影恥かしきわが姿。忍び車を引く汐の跡に殘れる、溜り水いつまですみは果つべき。野中の草の露ならば(と右の方に向き)。日影に消えも失すべきにこれは磯邊に寄藻かく(と二足つめ)。海士の捨草徒らに朽ちまさり行く(と正面に向き二足退き)、袂かな朽ちまさり行く袂かな(と面を曇らす)

【三】シテサシ「面白や馴れても須磨の夕まぐれ。海士の呼び聲幽かにて。ツレ二「沖に小さき漁舟の。影幽かなる月の顏。雁の姿や友千鳥。野分汐風いづれもげに。かかる所の秋なりけり。あら心すごの夜すがらやな(と面を伏せ)

シテ『いざいざ汐を汲まんとて(ツレと向合ひ)。汀に滿干の汐衣の

ツレ『袖を結んで肩にかけ

シテ『汐汲むためとは思へども

○忍び車―人目を憚つて忍び〳〵に引く車。
○引く汐の―車を引くを引汐にいひかけた。
○すみは果つべき―水の澄むとこの世に住むと、兩意を兼ねた。
○寄藻かく―上げ汐で磯邊に流れ寄る藻を搔き集める
○海士の捨草―海士の捨てた海草。
○朽ちまさり行く―捨草の次第に朽ちて行く様を、わが身のこの世にあるかひもなく死んで行くのに比べ、これを思へば悲しみの涙に袂も朽ちて行くとの意。
【三】○馴れても須磨の―馴れても住むといひかけた。
○海士の呼び聲―漁師が仕事をしながら互に話し合ふ聲。須磨の巻に「沖より船どもの謠ひのゝしりて漕ぎ行くなども聞ゆ」
○影幽かなる月の顏―沖には小さな漁舟の影が幽かに見え、空には月の光が幽かに見えるとの意。顏はたゞ月に添へただけである。
○雁の姿や友千鳥―月の顏に對して雁の姿といひ、空の雁に對して水上の友千鳥を出した。須磨の巻に「か

(海際に立つて水に映るわが姿を眺め、)
二人「おゝ、水に映るこの姿が恥かしい。このやうなあさましい姿を我慢して生きながらへようとしたところで、汐の引いた跡で濱邊に殘つてゐる溜り水と同様、暫く後まで殘つたところで、いつまでも殘り通すことは出來ないのですもの。それも、同じ亡くなるにしても、野原の草の露などであれば、日がさすと一緒にきれいさつぱりと消えてしまつて、却つて氣持がよいのですが、私達は、上げ汐で磯邊にうち上げられた藻か、それも海士の搔き集めた殘りの捨草のやうに、次第次第にみぢめな姿に衰へて行くとは、何といふあはれなことでせう。これを思ふと、悲しくて〳〵、涙の爲に袂まで朽ちて行くやうです」
(暫しこの悲痛に陷つたが、また氣を取り直して)

【三】松風「いくら見馴れてゐても、須磨の夕暮の景色は、ほんとに面白いことです。沖合からは小さな漁舟で漁師の互に話し合ふ聲が幽かに聞えて來、空には月の光が幽かに輝き、上に雁の姿が見えれば、下には友千鳥が鳴き渡り、野に野分が吹けば、濱には汐風が吹く、あちらを見てもこちらを見ても、このあたりはほんとに秋らしい氣色です。まあ何といふ淋しい夜でせう。……さあ汐水を汲みませう」
(と汀に出て、)
村雨「かうして袖を結んで肩にかけ……」
松風「これも汐水を汲む爲だと思つてはゐるけれど……」

きつられ昔の事ぞ思ほゆる雁はそのよの友ならねども」又同じ卷の歌に「友千鳥諸聲に鳴く曉はひとりねざめの床も頼もし」

○野分汐風―野分は秋吹く強風、野を吹き分ける風の意で、汐風と竝べた。

○かかる所の秋なりけり―須磨の卷に「またなくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり」

○心すごの―もの寂しい。

○汀に滿干の汐衣―汀に出るといふ心で、汀の文字を出し「滿干の」を文字鎖として汐衣と續けた。汐衣は汐汲みに着る衣。

○よしそれとても―汐を汲むほどの仕事でも、女の業には渉々しく出來かねるといひかけて、女車を呼び出した。

○女車―以下この節の語釋、本曲の末に記す。

【四】

○運ぶは遠き陸奥の―前に「松島や」といつた縁で、嵯峨天皇の御時融大臣が六條河原の院に、松島に隣接した千賀の鹽竈を模造し、難波から汐を運ばせた故事を思ひ起したのである。この事「融」に作らる。

ツレ『よしそれとても

シテ「女車

地上歌「寄せては歸るかたをなみ（二人とも正面に向き、ツレは大小前に下りてシテと竝ぶ）。寄せては歸るかたをなみ。蘆邊の（シテ右の方に向き）。田鶴こそは立ち騷げ四方の嵐も（正面に直し）。音添へて夜寒何と過さん（と面伏せ）。更け行く月こそさやかなれ（と見上げ）。汲むは影なれや（下を見）。燒く鹽煙心せよ。さのみなど海士人の憂き秋のみを過さん（と二足退き面を曇らし）。松島や小島の海士の月にだに影を汲むこそ心あれ影を汲むこそ心あれ

シテ「松島や」と汐汲車の前に行き、下に居立ちて扇にて汐を汲む心を示し、次のロンギに常座に歸り、

【四】

地ロンギ『運ぶは遠き陸奥のその名や千賀の鹽竈

シテ「賤が鹽木を運びしは阿漕が浦に引く汐

地『その伊勢の、海の二見の浦二度世にも出でば

村雨「汐水を汲む位は何でもないさうですけれど……」

松風「それでも、力の弱い女には汐汲車を引くだけでも苦しくて。……おゝ、波の寄せては歸る蘆邊に、鶴が鳴き騷いでゐます。嵐もきつく吹いて來ます。この寒い夜をどうして凌ぎませう。……でも、あの夜更の月の澄み渡つてゐること。おゝ、汐水を汲むと、それに月影がうつつてゐる。どうぞ、鹽燒く煙をあまり多く立てて、月を曇らさないやうに、氣をつけておくれ。海士だからとて、いつも〳〵辛い秋を過してゐるばかりでもない、このやうに月を眺める風流な味ひもあるのです。かうして、汐水と一緒に月影を汲み入れるなどは、ほんとに風流なことです」

（二人とも汐水を桶に汲み入れながら、）

【四】

村雨「汐水を運ぶので有名な鹽竈は、所は遠い陸奥ですけれど、千賀の鹽竈といふ名を聞くと、何だか近い所のやうな感じがしますね」

松風「鹽木を運ぶので有名なのは、伊勢の阿漕が浦ですね」

村雨「伊勢といへば、あの二見の浦といふ

や

シテ『松のむら立ち霞む日に汐路や（右の方を眺め）、遠く鳴海潟

地『それは鳴海潟ここは鳴尾の松蔭に（正面に直し）。月こそさはれ蘆の屋

シテ『灘の汐汲む憂き身ぞと人にや、誰も黄楊の櫛

地『さし來る汐を汲み分けて。見れば月こそ桶にあれ（とツレ車の前に行き下に居て桶を車の上に載せ）

シテ『これにも月の入りたるや（と車の前に行きて前の桶を見）

地『嬉しやこれも月あり（と手前の桶を見）

ツレこの間に車の引紐の端を取上げて立ち、シテにこれを持たせて常座に立つ。

シテ『月は一つ（と上を見）

地『影は二つ滿つ汐の夜の車に月を載せて。憂し

名のやうに、も一度世に出たいものですけれど……」

松風「二見の浦といへば、あの松林のやうな、こんもりした松林に春日がのどかに霞み渡る時、汐路の遠くなるのは、鳴海潟が一等でせうね」

村雨「鳴海潟は遠い所ですけれど、この近い所では鳴尾の松蔭が面白うございますね。でも、蘆葺の家は月のさし入るのに、都合の悪い邪魔物でございますね」

松風「昔の歌の『蘆の屋の灘の鹽燒き』ではないけれど、私達も汐汲みのあはれな身上だといふことを、誰にも知らさないでゐることです」

村雨「おゝ、さし汐を汲んで桶に入れると、月が桶の中に映つてゐます」

松風「この桶にも月が映つてゐますよ」

村雨「あゝ嬉しい、この桶にも月があります」

松風「空に照る月は一つだけれど、桶には、あちらとこちらと、月影が二つ映つてゐる。かうして滿汐を汲み入れた汐汲車も、

○その名や千賀の鹽竈―陸奥といへば遠いが、その名は近いといふ音を持つた千賀の鹽竈であるとの意。鹽竈は陸前國宮城郡。

○賤が鹽木を運びしは―續古今集藤原家良の歌「伊勢の海あまの藻鹽木こりもせで同じうらみに年ぞ經にける」などとあるに據つた。鹽木は鹽を燒く爲の薪。

○阿漕が浦に引く汐―古今六帖讀人不知の歌「逢ふことを阿漕が浦に引く網も度重なればあらはれやせん」に據つて「引く汐」といつたのである。阿漕が浦は伊勢國安濃郡。〔阿漕〕參照。

○二見の浦―伊勢國度會郡伊勢の緣で出し、「ふた」の音を重ねて、二度を呼び起す料とした。

○松のむら立ち―金葉集大中臣輔弘の歌「玉くしげ二見の浦の貝しけみ蒔繪に見ゆる松のむら立ち」を引いた。

○鳴海潟―遠くなるといひかけた。尾張國愛知郡。

○鳴尾―攝津國武庫郡。鳴海と文字頭が同じであるから、遠近の兩所を對せしめた。

○月こそさはれ蘆の屋―月

がさし入るのに妨げとなる蘆の屋。蘆の屋は蘆で屋根を葺いた海士の家の意に、武庫郡の地名蘆屋を兼ねさせた。

○灘の汐汲む―伊勢物語の歌「蘆の屋の灘の鹽燒き暇なみつげの小櫛もさゝず來にけり」を引いた。

○誰も黄楊の櫛―誰も告げないといふのを黄楊にいひかけた。黄楊は櫛の村として古くから用ゐられた常綠灌木。

○さし來る汐を―さしは櫛の緣語。

○影は二つ滿つ汐の―空に照る月は一つ、桶に映る月影は二つ、と數へて、三つを滿つに、四つを夜にいひかけて文のあやとした。

【五】

○叶ふまじき―出來ない。

とも思はぬ汐路かなや

シテ「影は二つ」と桶を見「滿つ汐の」と紐を引きて大小前に引き、「汐路かなや」と紐を捨つ。後見、車を引く。シテ床几にかゝり、ツレはシテの右側に下に居る。ワキ立ちて、

【五】

ワキ「鹽屋の主の歸りて候。宿を借らばやと思ひ候。シテに「いかにこれなる鹽屋の内へ案内申し候

ツレ（立ちて）「誰にて渡り候ぞ

ワキ（ツレに）「これは諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ

ツレ「暫く御待ち候へ。主にその由申し候べし。（シテに向ひ下に居て）いかに申し候。旅人の御入り候が。一夜のお宿と仰せ候

シテ「餘りに見苦しき鹽屋にて候程に。お宿は叶ふまじきと申し候へ

ツレ（立ちワキに）「主にその由申して候へば。鹽屋の

月を載せて行くのだと思ふと、辛いとも思はれない、[illegible]

[illegible]に載せて鹽屋に歸る。

【五】

旅僧二人、[illegible]

僧「鹽屋の主人がお歸りに來た。宿を借りま[illegible]の鹽屋の方にお願ひします」

村雨「どなたでございます」

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。一夜お泊めください」

村雨「暫くお待ちください。主人にお傳へ致しますから」、松風にもうし、「旅人がお出でになつて、一夜宿をしてくれと仰しやいますが……」

松風「あまりに見苦しい鹽屋ですから、お宿致すことは出來ませんと、お斷りなさい」

村雨（僧に）「主人にこの事を申しましたと

○苦しからず―構はない。差支へない。
○平に―是非とも。

○世を捨人―世捨人、出家に、月の夜、世を、よし〳〵と「よ」の音を重ねた。
○松の木柱に竹の垣―須磨の巻に「竹編める垣し渡して、石の階、松の柱、おろそかなるものから珍らかにをかし」とあるを引いた。
○夜寒―竹の節(よ)を夜にいひかけた。
○蘆火―蘆を焚く火。

【六】

内見苦しく候程に。お宿は叶ふまじき由仰せ候

ワキ「いやいや見苦しきは苦しからず候。出家の事にて候へば。平に一夜を明かさせて給はり候へと重ねて御申し候へ

ツレ「いや叶ひ候まじ

シテ(ツレに)「暫く。月の夜影に見奉れば世を捨人。よしよしかかる海士の家。松の木柱に竹の垣。夜寒さこそと思へども。蘆火にあたりてお泊まりあれと申し候へ

ツレ「こなたへ御入り候へ

ワキ「あら嬉しやさらばかう參らうずるにて候

ワキ二三足出て下に居る。ツレもとの座に坐す。

【六】

シテ(ワキに)「始めよりお宿參らせたくは候ひつれども。餘りに見苦しく候程に。さて否と申して候

ころ、鹽屋が見苦しいから、お宿致すことは出來ないと申されます」

僧「いや〳〵、見苦しいのは構ひません。出家の事ですから、是非一夜お泊め下さいと、も一度賴んで下さい」

村雨「いえ、お宿することは出來ません」

松風は僧の姿を見て、村雨に、

松風「一寸お待ち。月影で旅の方をお見上げすれば、御出家でいらつしやる。それならば、まあこのやうな海士の家で、松の木を柱とし、竹で垣根を編んだあばら家で、夜寒が隨分ひどい事とは案じられますけれど、蘆火にあたつて暖みをお取りにでもなつて、一夜お泊りなさいませと、かうお傳へなさい」

村雨(僧に)「では、どうぞこちらへお入り下さいませ」

僧「あゝありがたい、では、お邪魔します」

と家に入つた態で、舞臺は鹽屋の室内となる。

【六】

松風(僧に)「始めからお泊め申しあげたいと存じたのですが、あまり見苦しいので、それで、お斷りしたのでございます」

○心あらん人—風雅な心のある人。
○わざとも佗びてこそ—次に引く行平の歌の心持を味ふ爲に、殊更佗住居をすべき所であるとの意。
○わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に藻鹽たれつつ佗ぶと答へよ—古今集在原行平の歌。（解説參照。）わくらはに—はたまさかに、稀にの意。「藻鹽たれつゝ」は鹽を作る爲に海藻に汐水を幾度もかけて鹽分を濃くする意を、悲しみ歎く意の「しほたれ」にいひかけたのである。
○逆緣—順緣に對する語。謠曲では通りがかりの緣といふ意に用ゐる。
○思ひ内にあれば—孟子告子篇に「滂于髡曰、思有二於中一、心形二於外一」新古今集眞名序に「心動レ內言顯レ外」
○執心の閻浮の涙—この世に執着の心が殘つて出る涙。閻浮は梵語 Jambu dvipa.

ワキ「御志ありがたう候。出家と申し旅といひ。泊りはつべき身ならねば。いづくを宿と定むべき。その上この須磨の浦に心あらん人は。わざとも佗びてこそ住むべけれ。わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に。藻鹽たれつつ佗ぶと答へよと。行平も詠じ給ひしとなり。（作物に向き）又あの磯邊に一木の松の候を人に尋ねて候へば。松風村雨二人の海士の舊跡とかや申し候程に。逆縁ながら弔ひてこそ通り候ひつれ。（シテ・ツレしをるワキこれを見て）あら不思議や。松風村雨の事を申して候へば。二人ともに御愁傷候。これは何と申したる事にて候ぞ

シテ ツレ（しをり乍ら）『げにや思ひ内にあれば。色外に現れさむらふぞや。わくらはに問ふ人あらばの御物語。餘りになつかしう候ひて。猶執心の閻浮

僧「御親切ありがたうございます。出家の[illegible]ことであり、旅に出てゐる身であり、どこにしたところで、落ちついて住むわけでないのですから、どういふ所に泊まりたいなどと宿擇びをする筈はないのです。殊にこの須磨の浦などでは、風流な心得のある人であれば、殊更にでも佗住居をする筈です。こゝで——

『わくらはに問ふ人あらば須磨の浦に、藻鹽たれつつ佗ぶと答へよ』

（[illegible]）

と行平もお詠みになつたといふことです。それから、あの濱邊に一本の松の木のあるのを[illegible]人に尋ねると、松風・村雨二人の海士女の舊跡だといふ事なので、通りがかりの縁で、回向して來たことです」

（松風・村雨の二人は[illegible]事をいはれ[illegible]、思はず涙を落す。僧はこれを見咎め[illegible]）

僧「これは不思議だ。松風・村雨の事を申したら、お二人ともお悲しみになるが、これは一體どうした事なのです」

二人「ほんとに、諺にいふ通り、心の中に思ひ事があると、自然様子に現れてしまふものでございます。唯今の『わくらはに問ふ人あらば』と仰しやつたお話を伺つて、あまりに昔がなつかしく思はれ、やはりこの世に執心が殘つて、涙が流れ

須彌四洲の一で、もと印度を指したのであるが、後には廣くこの世をいふこととなつた。
○汐じみて——しほじむは物に馴れること。こゝではこの世を思ひ馴れる意。須磨の巻に「世にしほじみぬる齢の人」
○こりずまの——懲りもしないでといふ意の「こりずま」を地名の須磨に、須磨の浦を恨めしにいひかけた。須磨の巻に「こりずまの浦のみるめもゆかしきを鹽やくあまの如何思はん」
○三年が程——行平が須磨に流されたことは、解説に擧げた古今集の歌の詞書に出てゐるが、三年とは何書にも見えない。源氏物語の源氏君の謫居が三年であるのに思ひ寄せたのであらう。
○月に心は須磨の——月に心は澄ますを地名にいひかけた。
○おとどい——おととえの轉兄弟姉妹。
○月にも馴るる——新後撰集藤原爲氏の歌「汐風の波かけ衣秋を經て月に馴れたる須磨の海士人」を引いた。

の涙。二度袖を濡らしさむらふ
ワキ「猶執心の閻浮の涙とは。今はこの世になき人の言葉なり。又わくらはの歌もなつかしいなどと承り候。かたがた不審に候へば。二人ともに名を御名のり候へ
シテツレ「恥かしや申さんとすればわくらはに。言問ふ人もなき跡の。世に汐じみてこりずまの。恨めしかりける心かな。(クドキ)この上は何をかさのみ包むべき。これは過ぎつる夕暮に。あの松蔭の苔の下。亡き跡弔はれ參らせつる。松風村雨二人の女の幽靈これまで來りたり。さても行平三年が程。御つれづれの御舟遊び。月に心は須磨の浦夜汐を運ぶ海士少女に。おとどい選はれ參らせつつ。折にふれたる名なれやとて。松風村雨と召されしより。月にも馴るる須磨の海

落ち、また袖を濡らしたのでございます」
僧「この世に執心が殘つて涙が出るといふのは、今現在は既にこの世にゐない人のいふ言葉です。その上『わくらはに』の歌がなつかしいなどと仰しやる所を見ると、愈〻不審に思はれます。お二人とも名をお明かし下さい」
二人「お恥かしい次第でございます。申しあげようとすれば、まづ私達の亡くなつた後、たまさかにも弔つてくれる人のない、あはれな境遇が恨めしく思はれるのでございます。かうしてお尋ね下さいます上は、何をさうお隱ししませう。私達は先程の夕暮、あの松蔭の苔の下に埋れた亡靈として御回向下さいました、松風・村雨と申す二人の女の幽靈が、こゝまで參つたのでございます。思ひ出せば、行平朝臣が三年の間この須磨の浦にお出で遊ばしました頃、御退屈なまゝに御舟遊びを遊ばしたり、月を眺めてお心をお慰めになつたり遊ばした時、夜汐を運んでゐる海士少女の中から、私達姉妹が選び出されまして、この場合にふさはしい名であるといふので、松風、村雨とお呼びになりました。そして、それ以來、お

士の

シテ「鹽焼き衣。色かへて。ツレ「緋の衣の。空焼なり

シテ「かくて三年も過ぎ行けば。行平都に上り給ひ

ツレ「いく程なくて世を早う。去り給ひぬと聞きしより

シテ「あら戀しやさるにても。又いつの世の音づれを

地「松風も村雨も袖のみ濡れてよしなやな。身にも及ばぬ戀をさへ。須磨のあまりに、罪深し跡弔ひてたび給へ（とワキに合掌）

【七】

地上歌「戀草の。露も思ひも亂れつつ（ワキ脇座、ツレ笛座前に坐す）。露も思ひも亂れつつ。心狂氣になれ衣の。巳の日の。祓や木綿四手の。神の助けも波の上。あはれに消えし、憂き身なり（とシテ面を曇らす）

側近くお馴れ申し上げて、これまで須磨の海士らしい鹽焼き衣を着てゐましたものが、すつかり樣子が變つて、美しい着物を着て、薫物までたきしめるやうになつたのでございます」

松風「かうして、三年の年月も過ぎてしまひますと、行平朝臣は都にお歸りになり……

村雨「それから間もなくお亡くなりになつたと伺ひましたので……」

松風「あゝ戀しい、このやうにお亡くなりになつた上は、いつまでお待ちしたところで、お便りの戴けよう筈もないと、松風も村雨も、二人とも涙に袖を濡らすばかりでございましたが、泣いたところで、どうにもならないのでございます。身分違ひな、及びもない戀をしましたのは、ほんとに罪業の深いことでございます。どうか御回向下さいませ」

【七】

松風「私達は戀の爲に思ひが亂れ、心が狂ひまして、神にも見離されて、どのやうにお祈りしても、お助けを受けることが出來ず、かの波の上の泡のやうに果敢なくこの世から消えてしまつた、情ない身上でございます。

「鹽焼き衣—鹽焼きに着る粗末な衣。」

○緋の衣の空焼—緋は堅織の約で、細絲で地を固くこまかく織つた薄い絹。その香が香取に通ずるので空焼と續けた。空焼はどこからともなく匂ひ來るやうに香をたきしめること。

○いつの世の音づれ—音信を待つを松風にいひかけた

○須磨のあまりに—戀をさへするを須磨に、須磨の海士を餘りにいひかけた。

【七】

○戀草—戀しく思ふ種を草に寄せていふ語。

○なれ衣を—狂氣と爲るを馴衣に、衣の身を巳の日にいひかけた。

○巳の日の祓—三月上旬の巳の日に水邊で身を祓ひ淸めること。須磨の巻に源氏君が巳の日の祓をした事を記してゐる。

○木綿四手—楮で作つた幣祓に用ゐる幣の紙を神にいひかけた。

○波の上—神の助けも無きを波に、波の泡をあはれにいひかけた。

（居クセ）。後見、次のクセに長絹に小立烏帽子を添へて持ち出で、「行平の中納言」にシテの左手に持たす。

地クセ「あはれ古を。思ひ出づればなつかしや。行平の中納言三年はここに須磨の浦。都へ上り給ひしが。この程の形見とて。御立烏帽子狩衣を。残し置き給へども。これを見る度に（シテ長絹を見て）。いや増しの思ひぐさ葉末に結ぶ露の間も。忘られぱこそあぢきなや（長絹を下して膝につけて）。形見こそ今はあだなれこれなくは（再び上げて）。忘るる隙もありなんと（見入り）。詠みしも理や猶思ひこそは深けれ（としをる）

シテ『宵々に。ぬぎてわが寝る狩衣

地かけてぞ頼む同じ世に（床几を離れて）。住むかひあらばこそ忘れ形見もよしなしと（長絹を下げて前に出で）。捨てても置かれず取れば面影に立ち増さり（長絹を両手に抱き）。起臥わかで枕より（右へ廻り）。あと

○ここに須磨の浦―こゝに住むといひかけた。

○思ひぐさ―思ひの種。戀草に同じ。

○葉末に結ぶ露の間も―草の縁で葉末に結ぶと續け、露を呼び出す料とした。露の間は暫くの間。

○あぢきなや―つまらない

○形見こそ今はあだなれこれなくは―古今集讀人不知の歌。下句「忘るゝ時もあらましものを」

○宵々にぬぎてわが寝る狩衣―古今集紀友則の歌。下句「かけて思はぬ時の間もなし」上句「かけて」の序。

○かけてぞ頼む―本歌の「かけて」は心にかけての意であるが、こゝでは將來にかけてといふ意。

○枕よりあとより戀の責めくればー古今集讀人不知の歌。下句「せんかたなみぞ床中に居る」

あゝ、昔の事を思ひ出すと、ほんとになつかしうございます。行平中納言が三年の間この須磨浦にお住ひになりましたが、その時、後、都へお歸りになりましたが、その時、また再び會ふまでの形見として、御立烏帽子と狩衣を残してお置きになりましたが、再びお會ひすることの出來ない今となつては、このお形見を見ます毎に、戀しい思ひが愈〻深くなりまさつて、ほんの束の間もお忘れすることが出來ないのでございます。ほんとにつまらないことでございます。昔の人が――

『形見こそ今は仇なれこれなくは、忘るる時もあらましものを』

（なつかしかるべき形見が、今は却つて恨めしい。もしこれがなかつたならば、少しは忘れる時もあらうが、形見を見ことよ戀しい思ひが増すばかりだ）

と詠んだのも、今の私達の身上から推して、ほんとに尤もなことだと思はれます。昔の人はまた――

『宵々に脱ぎてわが寝る狩衣、かけて思はぬ時の間もなし』

（ほんの一時もあなたの事を思はない時とてはない）

とも詠まれましたが、それも同じこの世に生きてゐて、また會ふ時があるといふあてがあつてこそ、思ひ甲斐もありますが、亡くなつてしまはれた後では、忘れ形見を見たところで、何の甲斐もないのでございます。一層のこと、捨ててしまつた方がましかとも思はれますが、でも、

より戀の責めくれば（橋懸を見廻して）せん方涙に伏し沈む事ぞ悲しき

と常座に退りて安坐し長絹を戴くやうにしてしをる【物着】

シテ水衣を脱ぎ、烏帽子・長絹を着く。物着濟みて下に居たるまゝしをりながら、

【八】

シテ「三瀬川絶えぬ。涙の憂き瀬にも、亂るゝ戀の淵はありけり。あら嬉しやあれに行平のお立ちあるが（と作物を見入りて居立ち）。松風と召されさむらふぞやいで參らう（と立ち作物へ行く）

ツレ、シテの立つを見て立ち、シテの後を追ひてその袖を控へ、

ツレ「あさましやその御心故にこそ。執心の罪にも沈み給へ。娑婆にての妄執を猶（二人とも少し退りて）忘れ給はぬぞや。（作物へ向き）あれは松にてこそ候へ。行平は御入りもさむらはぬものを

シテ「うたての人のいひ事や。あの松こそは行平よ。「たとひ暫しは別るるとも。待つとし聞かば

やはり捨てて置くことも出來ず、といつて、手に取れば、戀しい方の面影が眼にちらついて、[illegible]出來たければ、手に取るにも[illegible]捨てゝも覺めてゐても、始終戀しい思ひに責められて、どうすることも出來ず、たゞ涙に沈んでゐるより外はないのでございます。ほんとに悲しいことでございます」

（ここにて、[illegible]）

【八】

松風「涙の歎きはこの世ばかりかと思つてゐましたのに、あの世の三途の川を渡つた後にも、まだもつとつらい戀の苦しさがあつたのでございます。（狂氣して）あゝ嬉しい。あそこに行平朝臣がおいで遊ばして、『松風』とお召しになつていらつしやる。さあ參りませう」

（嬉々と松の木へ行きかかる）

村雨「まあ、あさましい。そのやうなお心だからこそ、亡くなつた後まで執心が離れず、その罪に地獄にお沈みになつたのですよ。この世での妄執がまだお忘れになれないのですか。あれは松ですよ。行平朝臣などおいでになりはしませんのに」

松風「まあ何といふ情ないことをいふ人でせう。あの松が行平朝臣ですよ。『たとひ暫くの間は別れても、待つと聞いたならば、すぐ歸つて來よう』と仰しやつたち

【八】○三瀬川絶えぬ涙の憂き瀬にも亂るゝ戀の淵はありけり―出所不明。三瀬川は地獄・餓鬼・畜生の三惡道に通ずる冥途の川、絶えぬ涙の序に用ゐた。

○娑婆―梵語Sabha、雜界と譯す。六道の衆生が雜會する所。この世。

○うたての―情ないこと。あんまりなこと。

○たとひ暫しは別るるとも―後に引く行平の歌を指していふ。

歸り來んとつらね給ひし言の葉は如何に

ツレ「げになう忘れてさむらふぞや。たとひ暫しは別るるとも。待たば來んとの言の葉を

シテ「こなたは忘れず松風の立ち歸り來ん御音づれ

ツレ「つひにも聞かば村雨の、袖暫しこそ濡るるとも

シテ『まつに變らで歸りこば

ツレ『あら頼もしの

シテ『御歌や

地「立ち別れ

とツレはしをりながら笛座前に行きて下に居り、シテは橋懸一の松へ行き、

〔中舞〕（シテ舞臺に入りて舞ひ）

シテワカ「いなばの山の峯に生ふる。まつとし聞かば。今歸りこん。それはいなばの遠山松（と橋懸の

やありませんか。さうすれば、まつ（松）といふことが何より大切ぢやありませんか」

村雨「ほんとにまあ忘れて居りました。『たとひ暫くの間は別れても、待つてゐたならば歸つて來よう』と仰しやいましたのに」

松風「こちらでは決して忘れずに、歸つて來るといふおたよりをお待ちしてゐましたのに」

村雨「たとひすぐお歸りにならないにしても、いつかは歸らうといふおたよりを伺ふことが出來れば、その間暫くの間、この村雨の袖が涙に濡れましても……』

松風「ほんとに、待つと聞いたならば歸つて來ようとの御約束に間違ひがなく、お歸り下さつたならば、それこそあの御歌がどんなにか頼もしいのですが……」

といつて（行平の心持で、

〔中舞〕（を舞ひ）

松風「行平朝臣は——

『立ち別れいなばの山の峯に生ふる、まつとし聞かば今歸りこん』

（今別れて遠く因幡國に行つても、待つてゐると聞いたならば、すぐ今歸つて來よう）

とお詠みになりました。そのお歌に詠ま

○こなたは忘れず松風の—忘れず待つを松風に、風の立つを立ち歸りにいひかけた。

○村雨の—松風に對して姉妹の名を出し、濡るるの序とした。

○まつに變らで—こちらで待つてゐるのに對し、行平の心が變らないで。まつに常緑の松をきかせた、

○立ち別れいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今歸りこむ—古今集在原行平の歌。いなばは往なばを因幡に、まつは待つを松にいひかけたのである。行平が因幡守として任國に下つた時の詠であらう。

○それは—行平の歌を指す

方を見）

地「これはなつかし君ここに（と作物へ向きて）須磨の浦わの松の行平（脇正面を見て）立ち歸りこばわれも木蔭に（大小前に行きて）。いざ立ち寄りて（作物へ行きて）磯馴松の（松に寄り添ひて）なつかしや（と少し退りてしをる）

〔破舞〕（松を一廻りして舞ひあげ）

地（キリ）「松に吹き來る風も狂じて。須磨の高波烈しき夜すがら。妄執の夢に見みゆるなり。わが跡弔ひて。たび給へ（と眞中にてワキに合掌）。暇申して（と直して立ち）歸る波の音の。須磨の浦かけて吹くや後の山颪（笛柱の方を見上げて）關路の鳥も聲々に夢も跡なく夜も明けて村雨と聞きしも今朝見れば松風ばかりや殘るらん松風ばかりや殘るらん

（と舞ひあげて常座にて留拍子を踏む。）

れた松は、遠い因幡の山に生えてゐる松ですが、これはなつかしいわが戀しい君のお住みになつた須磨浦の松で、行平卿がこのお歌の通りお歸りになつたならば、私もこの松の木蔭に立ち寄り、磯に寄つて馴れ〳〵しくお話しすることが出來ませうのに……あゝ、おなつかしい」

（[illegible]）

〔破舞〕（を舞ひ）

松に吹く風も狂ひ亂れて、須磨浦に高波の烈しくうち寄せる眞夜中に、この世に對する妄執の爲に、夢の中にお目にかかるのでございます。どうか私達の跡を御回向下さいませ。では、お暇して歸ります」

といふかと思ふと、寄せ返る波の音も澄んで、須磨浦一帶に後の山から山颪が吹き渡り、關路の鳥も聲々に鳴いて、旅僧の夢は跡かたもなく覺め、夜も明けそめて、今まで松風・村雨の聲と聞いてゐたのも、今朝見れば、たゞ松に吹き渡る風の音が殘つてゐるだけであつた

○これは—目前の松を指す。

○松の行平—松を行平に見立てていふのである。

○礒馴松の—行平に馴れ睦ばんといひかけた。

○風も狂じて—松風の狂亂に對していふ。

○見みゆる—見たり、見せたりする。會ふ。

○歸る波の—亡靈の歸ると波の歸るとを。

○須磨の浦かけて—音の澄むといひかけた。

○後の山颪—後の山は須磨寺の後にある山。須磨の卷に「後の山に柴といふものふすぶるなり」

○關路の鳥も—須磨には古く關所があつたから。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ名乘の前に（下懸ワキ次第「須磨や明石の浦傳ひ〳〵月もろともに出でうよ」　【二】ツレ二句「波こゝもとや……袂かな（下懸次第「秋に馴れたる須磨人の。〳〵。月の夜汐を汲まうよ」）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ「これは諸國一見の……われ未だ西國を見ず候程にこの度思ひ立ち（光此ほとは都に候て）。洛陽の名所舊跡のこりなく一見仕りて候。又これよりも）西國行脚と……ワキ「あら嬉しや（光ナシ）急ぎ候程にこれははや（光此あたりをは）津の國……又これなる磯邊を見ればゝ……いかさま（光ふしきやな）是なる松を見れは。札をうち短册をかけられて候。此松について）謂れのなき事は……ワキ「さてはこの松は……海士の舊跡かや（光にてありけるそや）痛はしや……　【五】ワキ「これは諸國一見の僧にて候（光旅人の道にゆき暮て候）一夜の宿を……ツレ「暫く……一夜のお（光ナシ）宿と仰せ候。シテ（光やすき程の御事なれ共）餘りに見苦しき鹽屋にて（光く）候程に……ワキ「（光心得申候）主にその由……鹽屋の内（光殊に）見苦しく……叶ふまじき由（光ナシ）……ワキ「いやいや（光おほせはさる事にて候へ共）見苦しきは……シテ「暫く（光ナシ）月の夜影に……　【六】ワキ「御志ありがたう候（光いや〳〵みくるしきはさらにくるしからす候）出家と申し……その上（光殊更）この須磨の……又あの（光あれなる）磯邊に一本の……松風村雨の（光行平の御）事を申して……御愁傷候（光のけしき見え給ひて候）これは何と申したる（光御）事にて……ワキ「猶執心の……今は（光これは）この世に……かたがた（光いかに様）不審に……

……【八】シテ「三瀬川……行平のお立ち（光御入）あるが……

附

金春禪竹の五音三曲集に引いてゐるものを現行曲に比べると「げにや浮世の業ながら」の世が身とある外、變りがない。

附記

〇波こゝもとや――源氏物語須磨の巻に「一人目をさまして枕をそばだてゝ四方の嵐を聞き給ふに、波たゞこゝもとに立ち來る心地して」とあるを引いた。

〇月さへ濡らす――汐水の爲に袂を濡らすばかりでなく、月を見てさへ、もの悲しくて涙に袂を濡らす。

〇心づくしの秋風に――須磨の巻に「心づくしの秋風に、海は少し遠けれど、行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけん浦波、夜々はげに

いと近く聞えて、又なくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり」とあるを引いた。心づくしは人の心を盡ましめるの意で、古今集に讀人知らず「木の間より漏りくる月の影見れば心づくしの秋は來にけり」

○行平の中納言―平城天皇の皇子阿保親王の第二子で、弟業平等と共に在原姓を賜はり、中納言正三位に至つた。寛平五年薨ず、年七十六。

○關吹き越ゆる―續古今集に「津の國須磨といふ所に侍りける時よみ侍りける」と詞書して、中納言行平「旅人の袂すゞしくなりにけり關吹き越ゆる須磨の浦風」

○女車―貴女の乘る牛車。こゝでは女の輓く汐汲車の意で出し、「寄せて」を呼び出す料とした。

○かたをなみ葦邊の田鶴こそ―萬葉集山部赤人の歌「和歌の浦に汐滿ちくれば潟をなみ、葦邊をさして田鶴鳴き渡る」を引いた。但し原歌の「かたをなみ」は潟がなくての意であるが、こゝでは俗說に從つて片男波の意に用ゐた。

○四方の嵐も―前掲、須磨の卷の文を引いた。

○波むは影なれや―汲み入れようとする汐水にも月影が宿つてゐる。

○燒く鹽煙心せよ―鹽を燒くにも、煙の爲に月を隱さないやうに氣をつけよ。

○さのみなど―海士と雖も辛い秋を過すばかりではない、風雅な樂しみもある。

○松島や小島の海士の―新古今集鴨長明の歌「松島や汐汲む海士の秋の袖、月は物思ふ習ひのみかは」を引いた。

松尾（まつのを）　寶

解説

【能柄】脇能　複式夢幻能

【人物】、**ワキ**　當今臣下、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　老翁（松尾明神々靈）、**前ツレ**　男、**狂言**　所の者、**後シテ**　松尾明神

【所】山城國　松尾

【時】九月

【作者】能本作者註文には世阿彌の作、二百十番謡目錄には觀阿彌の作とす。親元日記に文明十五年三月十二日演能の事が見えてゐる。

【梗概】當今に仕へ奉る臣下が松尾明神に參詣して、折柄來合はせた老翁に明神の謂れを尋ねると、老翁は種々神德を述べた後、今夜夜神樂を奏するから拜み給へといつて消え失せる。やがて松尾明神が現れて、秋の夜長にありがたい舞を舞ひ、限りなき御代の御榮えを壽ぐ。

【出典】とり立てて擧げるほどのものはない。

【概評】脚色の形式は脇能として尋常な方式をとつたもので、特異な點

ら不自然な[illegible]もない。その內容は多分に佛說をとり入れてゐるが、松尾明神を主想とした何等の[illegible]もない、[illegible]

【一】

次第の囃子にて、ツレ當今臣下、大臣烏帽子・上頭掛・[illegible]厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ツレ同樣の裝束にて舞臺に出で向合ひて、

ワキ・ツレ 次第「四方の山風靜かにて、四方の山風靜かにて梢の秋ぞ久しき

地取にツレは正面に向き、

ツレ 抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さても西山松の尾の明神は。靈神にて御座候へども。朝に隙なき身なれば。未だ參詣申さず候間。この度君に御暇を申し。唯今松の尾の明神に參詣仕り候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「嵯峨の山御幸絶えにし芹川の。御幸絶えにし芹川の。千代の古道跡ふりて。行方正しき天雲の大井の入江霧こめて。上は嵐の山風の。

【一】 梢の秋ぞ久しき—山風が靜かなので、梢の紅葉がいつまでも散らないといつて、久しい御代の太平を祝つた。○當今—今上陛下。○西山—京都の西部にある山。○松の尾の明神—山城國葛野郡松尾山の麓にあり、大山咋命・市杵島姬命を祀る。今官幣大社に列す。○朝に隙なき—朝廷に出仕して公務が忙しくて隙がない。○嵯峨の山御幸絶えにし芹川の—下句「千代の古道跡はありけり」で、後撰集に「仁和の帝嵯峨の御時の例にて、芹川に行幸し給ひける」と詞書した在原行平の歌。嵯峨は葛野郡、松尾の北、嵐山の東にあり、芹川は下嵯峨を流れる小川。○大井の入江—嵐山の麓を流れる大井河の入江。天雲の霞ひといひかけた。○嵐の山風—嵐山から吹きおろす風。

【一】 前段

[illegible]

臣下「四方の山々が、いづれも山風が靜かなので、梢のもみぢ葉がいつまでも散り落ちず、秋の美しさを永く留めてゐて、まことにのどかな太平なことだ」

[illegible]

臣下「自分は今上陛下にお仕へ申してゐる臣下です。さて京の西山松尾明神は靈驗のあらたかな神樣ですが、自分は朝廷に出仕して公務に忙しく、少しの隙もないので、まだ參詣したことがないから、この度帝から御暇を賜はつて、これから松尾明神に參詣するのです」

（見物人へ自己紹介を、）

臣下「昔の人が——『嵯峨の山御幸絶えにし芹川の、千代の古道跡はありけり』と詠まれたやうに、嵯峨の方へ行く道は隨分古いものであるが、道筋がはつきりとしてゐて、空に雲の掩うた大井河の入

（松の尾の—風の縁で松を出し、松を地名にいひかけた。）

【二】

【三】

○和光同塵—佛菩薩がその徳光を和らげその本地を隠して俗塵の世に交はり、衆生を済度し給ふことをいふ。ここでは佛が神となつて現れる意。老子に「和二其光一同二其塵一」

○忌垣—神社の玉垣。

○般若の眞文—般若は大般若經。眞文は原文、經論のまゝの經文

○利生方便の—衆生を利益する方便として現れ給うた神の社。

○如在—いますが如き。佛が眼前に居られるやうな

聲も通ひて松の尾の。神の宮居に着きにけり神の宮居に着きにけり

ワキ「上は嵐の山風の」と正面に向きて三四足出で、またもとに歸りて松尾に着きたる心。道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に松の尾の宮居に着きて候。心靜かに神拜申さうずるにて候

ワキヅレ「もつとも然るべう候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小尉・尉髪・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて杉箒を持ち、ツレ男、直面・着附熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテ・ツレ一聲「秋風の。聲吹き添へて松の尾の。神さびわたる。氣色かな

二人とも舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ「ありがたや和光同塵の忌垣の内には。年を迎へて般若の眞文を講じ。シテ・ツレ（向合ひ）「又利生方便の社の前には。日を逐うて如在の靈殿を仰

江のあたり、霧のたちこめてゐる中を、嵐山から吹き下して來る嵐が、松風と調子を合はせてゐる聲を聞きながら進んで行くうちに、松尾の社に着いた」

（道中の情景を述べ一ゐるうちに松尾に着いた態で、舞臺は山城國松尾明神の境内となる。）

【二】

【三】

シテ松尾明神の末社、老翁の姿を裝ひ、ツレ若い男と共に松尾明神に參詣する態で登場。

老翁「松の梢に秋風が吹き渡るにつけても、松尾明神のお社は、いよ〳〵神々しく感じられることだ。

あゝありがたいことだ。われ〳〵は年を送り迎へるにつけて、衆生を濟度する爲に垂跡遊ばされたこのお社で、梵文の般若經を讀誦し、又月日を過すにつけて、衆生を利益する爲に、色々の方便を示し給ふこの社に參つて、神が眼の前におはすが如き心持を以て禮拜してゐること

○納受―衆生の願望を聽き入れ給ふこと。○攝取―佛が慈悲心を以て衆生を極樂へ迎へとること。

○長月―九月。○紅葉も四方の―四方紅葉の景色で。

○立つや日數も―雲霞の立つを日數のたつにいひかけた。

○月の都路に―春の花に對して秋の月を出した。都をたゝへて、花の都とも月の都ともいふ。「秋ゆたかなる―五穀が豐かに實のつて、民の生活が豐かなのである。

【三】

○見馴れ申さぬ御事―見なれないお方。

○見てあるもの―氣のついたもの。

○神館―神社の建物。

ぐ。神明の納受疑ひなく、攝取の願望おのおの成就圓滿の靈地。今に始めぬ神拜なれどもまことに貴き。社内かな

下歌「時しも今は長月の紅葉も四方の氣色にて。上歌「春見しは花の都の雲霞。花の都の雲霞。立つや日數も移り來て。今ぞ時なる秋の空曇らぬ月の都路に。往き來も繁き諸人の。秋ゆたかなる心かな秋ゆたかなる心かな

（「秋ゆたかなる」とシテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ち、

【三】

ワキ「いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候

シテ「老人とは此方の事にて候か。まづ御姿を見奉れば。このあたりにては見馴れ申さぬ御事なり。都よりの御參詣にて御座候か

ワキ「げによく見てあるものかな。都より始めて當社參詣の者なり。山の姿神館の面白さに眺め

だ。かうして見れば、[illegible]へ取り下さるに違ひないのだ。何も今始めてこのお社に參詣したわけでもないのに、事新しさうにいふのもをかしいやうだが、ほんとにこのお社は貴いあらたかな所だ。

丁度今は九月、あちらもこちらも紅葉の美しい景色で、春見た時は都中一面の花で、雲か霞のやうに見えたものだが、それから月日の過ぎた秋の今日この頃はまた、澄み渡つた空に月が照り渡つて、春につけ秋につけ、都大路を往來する人が多く、誰も彼も皆のどかな豐かな心持でゐることだ」

（[illegible]）

【三】

臣下「おい御老人、お尋ねしたいのだが……

老翁「老人とお呼びになるのは私のことですか。……お姿をお見あげすれば、この邊では見馴れないお方でいらつしやるが、都から御參詣になつたのでございますか」

臣下「おゝ、よく分つたな。都から始めてこのお社へ參詣した者なのだ。そして、山の姿といひ、社のお建物といひ、まこ

○梅津―葛野郡、桂川を隔てゝ松尾の東にある。
○秋の葉―紅葉。
○河水に浮かむ綾錦―紅葉が桂川の水にうつつた様は綾錦を織つたやうだ。
○織りかく雲も―錦を織りかくを美しい彩雲の形容として雲を出し、雲も小暗きを小倉山にいひかけた。
○小倉山しぐる頃の朝な朝な―續後撰集藤原定家の歌。下句「昨日は薄き四方のもみぢ葉」小倉山は嵯峨の西にある。
○西ぐれなゐの―紫式部の詠と傳へられてゐる「北は黄に南は青く東白西紅に蘇命路の山」に據つたか。
○梢の秋ならで―秋になつても梢の葉は紅葉しないで
○年ふるや―時雨の降るを年月を經るにいひかけた。
○時知らぬ―四季ともに變りのない常綠の。
○塵の世に交はる―落葉だけが塵となるといつて、和光同塵の文字を和らげて用ゐた。

ゐて候。當社の御謂れ委しく申し候へ
シテ「さん候この山林は。皆神の御敷地なり。誠に御代千秋の君が住む。都は間近き神前にて
ツレ「むかふ梅津の秋の葉は。河水に浮かむ綾錦
シテ「織りかく雲も小倉山。しぐる頃の朝な朝な
ワキ『昨日は薄きもみぢ葉の
シテ『今日は濃染の色深き
ワキ『西ぐれなゐの峯續き
シテ『さながら四方の
シテワキ『錦なれども
地「松の尾の山は梢の。秋ならで。山は梢の秋ならで。ただ時雨のみ年ふるや。霜の後。雪の冬木になるまでも。時知らぬ常磐木の。幾久し神松の。落葉ばかりは塵の世に。交はる誓ひ頼もしや交

とに結構なので、眺めてゐるのだ。このお社の謂れを委しく聞かせてくれい」
老翁「はい、このあたりの山林は、皆この明神のお敷地なのです。殊にこの社は、千代八千代に限りなく御榮え遊ばす都から程近い所で……」
男「向ふの梅津のもみぢ葉が桂川の水に映るさまは、宛も綾錦を織つたやうで……」
老翁「雲の爲に薄暗く見えるあの小倉山のあたりに、時雨の降る頃は毎朝見る毎に……」
臣下「昨日までまだ色薄かつたもみぢ葉が、今朝はもう濃くなつてゐるといふわけだね」
老翁「はい一日のことで、今日はすつかり濃い紅色に染まつてゐまして……」
臣下「西の方も紅葉で眞赤になつた峯が續いてゐるわ」
老翁「はい、どこもかしこも、全く紅葉の錦でございますが、松の木の多いこの松尾山では、秋になつても、梢は秋のやうに紅葉することはなく、年々歳々、秋に時雨が降つて、それから霜が降りて、冬雪が木に降りかゝるやうになつても、わが神松は四季を通じて何の變りもなく、常に同じ綠の色をたゝへてゐまして、落葉だけが塵に交はるに過ぎないのです―

【四】
○人天―人間界と天上界。
「本地寂光の」―本來の住地たる常寂光土、極樂世界を出てといふ意。
「閻浮提」―須彌山の南方にある洲の名。轉じて廣く人間の住む世界、現世。
○五衰の眠り―天人の五衰（羽衣「楊貴妃」の項參照）といふことはあるが、こゝにはそれでは意が通じ難い。犯戒五衰（戒律を犯した人間の受ける五種の衰耗）の意か、或は生死の迷の眠りかと[illegible]
○無上正覺の月―この上もない佛の悟りを月に喩へた語。
○和光同塵は結縁の御始め―「止觀」に「和光同塵結縁之始、八相成道以論其終」―結縁は衆生と縁を結ぶこと。
○八相―佛がこの世界に出現し衆生に結縁して一生の間に示し給ふ八種の相。降都率天・托胎・降生・逾城・降魔・成道・説法・入涅槃。
○成道―佛道を成就する事。
○利物―衆生を利益する事。
○有無中道―有に偏せず、空に著せず、偏邪を離れた中正の道。佛の位、
○濟度―衆生を救つて極樂の彼岸に渡すこと。
○悲願―慈悲深い誓願。
○水波の隔て―佛は本地、

はる誓ひ頼もしや

地謡の初めにツレ笛座前に行きて坐し、ワキも下に居る。シテ讀中に行き下に居て、

【四】

地クリ「それ天は陽を以て德とし。地は陰を以て用とす

シテサシ「然れば神は人天百王の守護神として

地「本地寂光の都を出で給ひ。この閻浮提に示現し。五衰の眠りを無上正覺の月に覺まし

シテ「國土豐かに民厚かれと

地「安全を守りおはします

（居クセ）

地クセ「和光同塵は。結縁の御始め。八相成道は利物の終りを見する御誓ひ。げに目前にあらたなり。佛は又常住。不滅の相を顯し。有無中道を離れて。人を濟度の方便これ以て同じ悲願なり。神といひ佛といひただこれ。水波の隔てにて。

―いやその塵に交はることが、やがて和光同塵の[illegible]ゐるやうで、頼もしく思はれるのです」

[illegible]

【四】

地「一體天は陽の德を備へ、地は陰の働きをするもので、その間におはす神は、人間界天上界を通じて、歴代の帝王の守護神とならせられ、その本地極樂淨土から出て、この世の中に現れ、衆生の迷ひを晴らして、この上もない佛の悟りを得しめ、國土が豐かになり、民が榮えるやうにと、國土萬民の安全を御守りになるのでございます。

かうして、佛が『德光を和らげて俗塵の世に交はるのは、衆生と緣を結ぶ最初の手段であり、八相の相に變化して佛道を成就するのは、衆生を利益する最後の目的である』と仰せられた御誓願が、今目の前に現れてゐて、ほんとにあらたかなことでございます。佛は常住不滅の相を顯しておいでになるのですが、それが偏邪に陥ることのない中正の道、佛の位を離れて、衆生を濟度する爲に、色々の御方便をお示しになるのは、全く神と同じ御誓願から出たもので、結局神といひ佛と申したところで、根本には何の差別もない、譬へば水と波との差異のやうなもの

神はその垂跡で、譬へば水と波との關係の如く、本來同一のものであるとの意。この句〔道明寺〕にも見ゆ。
○本地垂跡―佛がその本地を離れ衆生利益の爲にこの土に跡を垂れて現れること
○三世了達―佛の智慧は過現未の三世を達觀して了々分明であるとの意。
〔當二世―現世と來世。
〔實相の聲―山風が實相眞如の佛法を傳へてゐるやうであるとの意。
〔聞法〕佛法を聞くこと。
○大井の波の―便りのみ多きといひかけた。
〔常樂我淨―佛果の四德、生死の無い常、煩惱のない樂、大自在を得た我、三惑を離れた淨をいふ。盛衰記祇王祇女の條に「風嵐松を吹く折は近く常樂我淨の曉を凝らす」
○桂―山城國葛野郡、松尾の東にある。
○茜さす―日も茜色にさすといひかけ、萬葉集額田女王の歌「茜さす紫野行き標野行き…」に據り、紫野を出した。こゝの紫野は京都西北の地。
○北野―松尾の東北に當り、北野神社がある。

本地垂跡とあらはれ三世了達の智慧を以て。現當二世までの道を照らし給へり。さればにやこの社。いづくもといひながら。殊に所も九重の。雲居の西の山の端を。照らすや光も夕月の。空冴えて嵐山の。峯には實相の聲滿ちて。聞法の便りのみ。大井の波の音までも。常樂我淨の結縁をなす心なり

シテ『梅津桂の色々に

地『日も茜さす紫野。北野平野や賀茂貴船。祇園林の秋の風稻荷の山のもみぢ葉の。青かりし惠みも樣々に。誓ひの色は變れども。この神はわきて世の。月常住の地を占め王城を守る神德の。久しき國に跡垂れて。慈尊三會の曉を。松の尾の神垣變らぬ色ぞ久しき

【五】

地ロンギ『げにや誓ひの秋久に。げにや誓ひの秋久

て、或は本地の佛として、或はこの地に垂跡遊ばした神として、いづれにしても過現未の三世に通達した智慧を以て、現世ばかりでなく、來世までもわれ〳〵の進むべき道をお照らしになるのです。それで、いづれの神樣にしても、あらたかでないものはないのですが、殊にこの松尾のお社は、帝都の西にあつて、西山を照らす夕月の光も殊更空に冴え渡り、嵐山から吹き下す山風は、佛法の實相眞如を傳へる聲のやうで、佛法聽聞の心を起させる便りとなり、大井河の波音までが、常樂我淨の佛果を得しめる因緣を作つてゐるやうに思はれるのです。

このあたりには、梅津や桂や、その外色色の名所がありまして、あの紫野、北野、平野、賀茂、貴船、或は秋風の吹く祇園林、或は『もみぢ葉の青かりしより』と歌に詠まれた稻荷山など、いづれの神佛も、それ〴〵惠み深い御誓願をお示しになるのですが、わけてもこの松尾の明神はこの搖ぎなき土地に垂跡遊ばされて、京の都を御守護遊ばし、遠い昔に御垂跡遊ばされてよりこの方、遙か後の世の彌勒菩薩が出生して三會をお催しになる時をお待ちになり、この久しい間、變りのないありがたい神德をお示しになるのでございます」

【五】

臣下「ほんとに遠い昔から、御代々の帝を

に。代々を守りの御神德なほ行末ぞ頼もしき

シテ「時しも今日の御神拜。ありがたしとも木綿四手の。神の夜神樂面々に神をすずしめ申さん

地「さては時しも夜神樂の。聲も普き數々に

シテツレ『すはや照りそふ夕月の

地「庭燎の光

シテツレ「榊葉を

地「謠ふ少女の袖はえて。花の裳裾も色々に（とシテ立ちて）紅葉をかざし松の尾の神の告を都人夜神樂を拜み給へとよ。神樂を拜み給へとよ

（と常座にてワキへさし、直して靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。）

御守護遊ばす御神德は、ほんとにありがたいことで、なほ將來も御誓願が久しくうち續くことと、頼もしく思はれます」

老翁「折よくも、今日御參詣下さいましたのは、ほんとにありがたいことです。われ〳〵一同で夜神樂をあげて、神をお慰めしませう」

臣下「すると、今丁度夜になつたが、では、これから多勢で夜神樂をあげるのですか」

老翁「おゝ、もう夕月が照り出して來ました」

臣下「神樂の庭燎の光も輝いてゐる」

老翁「榊葉を謠ふ少女の袖が、この夕月、庭燎の光に照り映え、その裳裾は色々に花のやうに美しく、頭には紅葉をかざしてゐる――これは松尾明神のお告ですぞ。都の方、よく夜神樂をお拜みなさい」

（といつて消え失せる態で入場。）

【間】

ワキ（ワキヅレに）「いかに誰かある

ワキヅレ（辭儀して）「御前に候

ワキ「所の者を呼びて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候。（仕手柱際に出で）所の人の渡り候か

狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

○平野―北野の西北隣で、平野神社がある。
○賀茂―山城國愛宕郡、松尾の東北に當り、上賀茂下賀茂の社がある。
○貴船―同じく愛宕郡、賀茂より遙か北に當り、貴船明神がある。
○祇園林―京都の東部、祇園社の邊。
○稻荷の山のもみぢ葉の―古今著聞集の歌「しぐれする稻荷の山のもみぢ葉はあをかりしより思ひそめてき」を引いた。稻荷山は洛南紀伊郡深草山の北部。
○慈尊三會―慈尊は彌勒菩薩で、釋迦入滅五十六億七千萬年の後この世に出生し三回の法會說教を行ひ二百八十二億人に阿羅漢を得しめる。これを三會といふ。
○松の尾の神垣―曉を待つといひかけた。

【五】
○木綿四手―楮の皮で作つた幣、言ふを木綿に、幣の紙を神にいひかけた。
○すずしめ―神の心を慰め
○庭燎―神樂の時庭上にたく火。
○榊葉―神樂の曲名。
○都人―神の告を見給へといひかけた。

【間】

○やがて―すぐに。

○寂光の都　極樂淨土。

○なんぼう―いかほど。非常に。

狂言「所の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキヅレに）所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちとものを尋ねたき由仰せ候。近う來つて給はり候へ

狂言「畏つて候（ワキヅレと共に舞臺に入り眞中に坐し）

ワキヅレ「所の者を召して參りて候（といひてもとの座につく）

狂言「所の者御前に候

ワキ「これは當今に仕へ奉る臣下なるが。この所はじめての一見の事にて候。當社の御謂れ語つて聞かされ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかかりの御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「さる程に當社松の尾の明神と申すは。君の間近く御鎭座なされ。王位を守護し御申しあり。天下安全に守り給ふ。然れば神は百王の守護神として。本地寂光の都を出で給ひ。五濁の眠りを覺まさせ。民安全に守り給ふ。これ偏に和光同塵は結緣の始め。八相成道は利物の終りを見せ給ふ。さるによつて神と申すも佛といふも。これ皆水波の隔てにて。本地垂跡と顯れ。三世了達の智恵を以て。現當二世までの道を照らし。誠にありがたき御事にて候。さて又この御社と申すは。文武天皇の御宇。大寶元年辛丑の年御建立ありてよりこの方。毎日貴賤群集仕り。參り下向は夥しき御事にて候。所は九重の西の山の端に現じ。地形も殊更に勝れ。向ひは嵯峨の原。下は大井河。その川波の音までも。常樂我淨の結緣なり。なんぼうめでたき靈地にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて

御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に老人と若き男の来られ候程に。御言葉をかはし候へば。當社の御謂れ唯今の如く懇に語り。神の告を見よといひもあへず。そのまゝ姿を見失ひ候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては當社明神現れ給ひ。御言葉を交はし給ふと存じ候間。暫く御逗留なされ。重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候

ワキ「愈々信心を致し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】ワキ ワキヅレ上歌（待謡）「げに今とても神の代の。げに今とても神の代の。誓ひは盡きぬしるしとて。神と君との御惠み。誠なりけりありがたや誠なりけりありがたや

【七】出端の囃子にて、後ジテ松尾明神、面邯鄲男・黒垂・透冠・色鉢巻・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帯・扇の装束にて橋懸一の松に出で、

後ジテ「それ千秋の松が枝には。萬歳の緑常磐にて。御代を守りの御影山。君安全に民榮え。五日

【六】

○今とても―佛法澆季の現代でも。

【七】

○御影山―愛宕郡修學院村にある。御蔭の縁で出した。

○五日の風も―太平の相。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」

後段

【六】臣下「今日のやうな末世でも、神代のありがたい御誓願は盡きず、その證據に、われわれがこのやうに神と大君との御惠みを受けることの出來るのは、ほんとにありがたい忝いことだ」

〔神德君德に感激する。〕

【七】後ジテ松尾明神登場。

明神「千年の齢を經た松の枝に、萬年の後までも變ることのない緑の色をたたへて、わが大君がそのやうに幾久しく御榮え遊ばすやうにと御守り申しあげ、大君

の風も枝を鳴らさぬ。松の尾の神とはわが事なり

地『八少女の。袖もかざしの玉かづら

シテ『かけてぞ祈る玉松の

地『光も散るや露も白縫の鈴も颯々の。舞の袂は。面白や（と舞臺に入り）

〔神舞〕

を舞ひ、引續き次の謠に合せて舞ふ。

【八】

地ロンギ『秋の夜神樂聲澄みて。秋の夜神樂聲澄みて。神さびわたる深更の朱の光はありがたや

シテ『庭燎の影も明らけき。榊葉謠ふ妙文の。こや松の尾の神風更け行く秋ぞ惜しまるる

地『げに惜しむべし惜しむべし。今宵の時も逢ひにあふ

シテ『月の光も照り添ふや

○袖もかざしの玉かづら―袖もかざすを頭のかざしとする玉葛にいひかけ、玉かづらをかけての序とした。

○玉松の―玉は美稱。散る、露は玉の緣語。

○白縫の―露の緣で白とつづけた。白縫の袂とかゝるのである。

【八】

○朱の光―玉垣の朱色の光

○こや―これや。

○更け行く―神風の吹くといひかけた。

が御安らかにおはすやうに、民も榮えるやうに、五日毎に穩かな風を吹かせて、木の枝をも鳴らさないやうに、御代の太平をお守りしてゐる松尾明神は自分である。

おゝ、多勢の少女達が袖をかざし、玉かづらをかけて、祈りの舞を奏すると、松の露が玉のやうに光を放つて散り、鈴がさら〳〵と鳴る。それにつれて白縫の舞袖の飜るさまが實に面白い」

と少女の舞に興じた態で、

〔神舞〕

を舞ひ、

【八】

臣下「夜神樂の聲が澄みわたつて、いかにも神々しい感じのする、この秋の夜の眞夜中に、玉垣の朱色の光り輝いてゐるのは、實にありがたい貴いさまだ」

明神「庭燎の火影も明らかで、ありがたい榊葉の歌を謠つてゐるうちに、かうして松尾の神風が吹いて、ほんに殘り惜しく思はれる」

臣下「あゝほんとに殘り惜しいことでございます。今晩はこのやうな都合のよい時に逢ひまして……」

明神「月の光も照り添うて、玉垣の朱色が

地「朱の玉垣

シテ「玉のとびら

地「さしひく袖の露かけて。光も散るなり小忌衣。立ち舞ふ花も白妙の。雪を廻らし千早振る。神ぞ久しき松の尾の。おのづから長き夜の。神樂ぞめでたかりける神樂ぞめでたかりける

と舞ひ納め、常座にて留拍子を踏む。

○さしひく―扉をさすといひかけた。さすも引くも舞の手の名。
○袖の露―袖括の緒の垂れた端。
○小忌衣―祭官又は舞人の着る裝束。
○雪を廻らし―舞姿の美しい形容。
○千早振る―巫女の着るちはや(襅)を神の枕詞にいひかけた。
○おのづから―松尾のおのの音を重ねた。
○長き夜の―秋の長き夜に長き世を兼ねた。

[illegible]と、お舞ひになる、さす手、ひく手の舞の手につれて、舞衣の袖のつゆの動くさまは、光が散るやうで、花のやうな美しい舞姿は雪を散らしたやうである。かうして、松尾明神が秋の夜長の長い間、御代の長久を祝つて、神樂を奏されたのは、實にめでたいことであつた。

松尾明神、めでたく舞ひ納めて退場。

松蟲

觀（寶　春　剛　喜）

解　說

【能柄】　四番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　阿倍野市人、**前シテ**　男（男の靈）、**前ツレ**　友の男（三人）、**狂言**　天王寺の者、**後シテ**　男の靈

【所】　攝津國　阿倍野

【時】　九月

【作者】　能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。申樂談儀後人加筆の項に永正十一年十月廿八日南都雨喜びの能に演能、光源院御元服記に天文十五年十二月廿二日演能、言經卿記に文祿四年四月二日本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　攝津國阿倍野の邊に住んでゐる男が、市に出て酒を賣つてゐると、いつも友と連立つて來て、酒宴をする男があつたが、或日、その男が「松蟲の音を聞いて友を忍ぶ」といつたのを聞き咎めて、その謂れを尋ねると、その男は、昔この阿倍野を二人の親しい友が通つたが、その一人が松蟲の聲にうち興じて、千草の中に分けて入つたまゝ、叢の中に死んでしまつたと語り、自分はその幽靈であると打明けて歸つてしまふ。市人がその回向をしてゐると、かの亡靈が現れ出て、酒友の情を謠ひ、千草にすだく蟲の音にうち興じて、舞

を舞ふ。

【出典】古今集の序に「富士の煙によそへて、松蟲の音に友を忍び」とある句から、想を得たものであらう。阿倍野に松蟲塚があるが、それは恐らくこの曲によつて作られたものであらう。

【概評】室町時代から男色物の文藝が現れて來て、お伽草子には幾種か作られてゐるが、謡曲にはさうしたものは見えない。たゞ本曲は、男性同志の濃やかな友情といふよりも、今一歩進んだ戀慕の情を描かうとしたもののやうに察せられるが、それが男女の戀慕、親子の愛憐のやうに鮮明に描いてゐないので、主想の捉へ難いものになつてゐる。しかし、作者の企圖したところも、秋の野にすだく蟲の音を背景として、戀慕の情をほのかに描き出し、何となくもの淋しい、もの哀しい情趣を寫さうとしたのであつて、念友の戀慕を鮮かに描くことは好まなかつたのであらう。形式方面に於ては、第四節に「人影に隠れて阿倍野の方に歸りけり」といつて、普通ならば、これで中入となるべき所を、ロンギで再び前ジテを呼び戻してゐるのが、珍しい手法である。

【一】　前段

舞臺は攝津國阿倍野。……市人登場。

市人「私は攝津國阿倍野のあたりに住んでゐる者ですが、この阿倍野の市に出て、酒を賣つてゐますと、どこから來るのか分らないが、若い男が多勢やつて來て、酒を飲み、歸りがけには酒盛りをして、そして歸つて行くのです。その様子が何だか不審に思はれるので、今日も來たならば、どういふ者か、名を尋ねて見ようと思ふのです」

こゝ見物人に自己紹介をして、事件の發端を述べ、市場で待ち受けてゐる態。

【一】

名乘笛にて、ワキ市人、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて出で名乘座に立ち、

ワキ「これは津の國阿倍野のあたりに住居する者にて候。われこの阿倍野の市に出でて酒を賣り候處に。いづくとも知らず若き男の數多來り酒を飲み。歸るさには酒宴をなして歸り候。何とやらん不審に候間。今日も來りて候はば。如何なる者ぞと名を尋ねばやと存じ候

といひて脇座に行き下に居る。

【一】

○阿倍野—大阪市の南、天王寺から住吉に至る一帶の平地。今大阪市天王寺區の阿倍野に松蟲塚といふのがある。

○歸るさ—歸り方、歸りがけ。

【三】○もとの秋をも松蟲の―昔の秋にまた逢ふことを待つを松にいひかけた。○友をしのぶらん―古今集序に「富士の煙によそへて人を戀ひ、松蟲の音に友をしのび」とあるに據つた。○更け行くままに―秋風の吹くといひかけた。○長月―九月。○有明―まだ月の入らないうちに夜の明けること。○袖ふれつづく―市人の絶え間なくうち續いて行くさまをいふ。○深緑―衣の色にかけていふ。○蓑代衣―蓑の代りに着る衣。合羽の類。色々の身を蓑にいひかけてこの語を出し、衣の縁語紐にいひかけて「日も」を呼び出す料とした。○遠里ながら―住吉の遠里小野は名は遠里であるが、實際はこの近くにあるとの意。○こや住の江の―これや住吉の。こやを攝津の昆陽池にいひかけた。住の江は東成郡住吉(今大阪市に入る)の古名。○岸野―住吉の岸。夫木抄藤原公繼の歌に「一夕されば

【三】次第の囃子にて、シテ男、直面・着附段熨斗目・絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて笠を被り、ツレ男三人、着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

シテツレ次第「もとの秋をも松蟲の、もとの秋をも松蟲の。音にもや友をしのぶらん

地取にシテは正面に向き、

シテサシ「秋の風更け行くままに長月の。有明寒き朝風に。シテツレ(向合ひ)「袖ふれつづく市人の。伴ひ出づる道のべの。草葉の露も深緑。立ち連れ行くや色々の蓑代衣日も出でて。阿倍の市路に出づるなり

シテツレ下歌「遠里ながら程近きこや住の江の浦傳ひ。

上歌「潮風も。吹くや岸野の秋の草。吹くや岸野の秋の草。松も響きて沖つ波。聞えて聲々友誘ふ。この市人の數々に。われも行き人も行く。阿倍野の原は面白や。阿倍野の原は面白や

阿倍野の原は」とツレは地謠座前に行きて立ち、シテは常

【三】シテ男の亡霊、昔の姿をして、ツレ男多勢とうち連れて登場。

男「親しい友の生きてゐた頃の、昔の秋にまた逢ふことが出來ようかと、心待ちに待たれて、松蟲の鳴く音を聞くと、とかく亡き友の事が思ひ出されることだ」

この次第に懐舊の心持を述べ、

男「秋風が吹いて、夜が次第に更けて行くにつれて、さすが九月、秋の長夜も、有明の月を空に殘したまゝ明けて行つて、朝風がうすら寒く吹き渡る。その中を、物を賣る市人達が、草葉に露のどつさりとかゝつてゐる道を、うち連れ立つて陸續として行く。そのうちに、日も空に出て來たので、自分達も色々の姿をして、阿倍野に行くのだ。遠里の小野といへば、名前は遠いやうであるが、實はこゝから餘り遠くもない所を、住吉の浦傳ひに行くと、潮風が住吉の岸の秋草に吹き渡つて、松風も響けば、沖の波も高くうち寄せ、風の聲、波の音、色々聞える中を、また友達を誘ひ合つた市人が、てんでに話しながら行く。さうした仲間に自分達も立ち交つて、同じやうに話し合ひながら、阿倍野の原に行くのは、ほんとに面白いことだ」

錦と見ゆる住吉の岸野の萩を洗ふ白波」
○松も響きて沖つ波—古今集凡河内躬恒の歌に「住の江の松を秋風吹くからに聲うち添ふる沖つ白波」

【三】
○白樂天—名は居易、樂天はその號。支那唐代の著名な詩人で、その白氏文集は最もよくわが國人に愛誦せられた。「白樂天」參照。
○酒功贊—白樂天が酒の功德を稱贊した詩の題名。和漢朗詠集にその序「唐太子賓客白樂天、亦嗜レ酒作ニ酒功贊一以繼レ之」の句を收む。
○琴詩酒の友—和漢朗詠集白樂天の寄ニ殷協律一の句に「琴詩酒友皆拋レ我、雪月花時最憶レ君」から出た語。
○市館—市の物を賣る家。
○わが宿は菊賣る市にあらねども—古歌を引いたのであらうが、出所は分らない。
○面々—各々方。
○醽酒—美酒。
○今日はいつより—今日はいつもより。
○遊樂遊舞—管絃、舞樂の遊び。
○なかなかの事—然りといふ意の時代言葉。

座に行き笠を脫ぎて手に持つ。ワキ立ち、

【三】
ワキ「傳へ聞く白樂天が酒功贊を作りし琴詩酒の友。今に知られて市館に。樽をすゑ盃を並べて。寄り來る人を待ちゐたり。（シテに向ひ）「いかに人人酒召され候へ
シテ「わが宿は菊賣る市にあらねども。四方の門邊に人騷ぐと。詠みしも古人の心なるべし。いかに人々面々に（とワキに向き）。醽酒を酌みてもてなし給へ
ワキ「又かの人の來れるぞや。「今日はいつより酒を湛へ。遊樂遊舞の和歌を詠じ。人の心を慰め給へ。早くな歸り給ひそとよ
シテ「何われを早くな歸りそとよ
ワキ「なかなかの事暮れ過ぐるとも。月をも見捨て給ふなよ

といひながら、市場に着く。

【三】
市人「話に聞けば、白樂天は酒の功德を稱讃する詩を作つて、琴と詩と酒とをわが友としたといふことだが、今もこの市場で、自分は酒樽を置いて、盃を並べ、酒を飲みに來る人を待つてゐるのだ。（男達を見て）さあ皆樣、お酒を召し上れ」
男「昔の人が「自分の家は菊を賣る市場ではないのだが、多勢の人が欲しがつて、門のところで大騷ぎをしてゐる」といふ歌を詠んだのも、かうした心持をいつたものであらう。さあ酒屋さん、皆の者に旨い酒を酌して、御馳走して下さい」
市人「おゝまた例の人が來たぞ（と獨言をいひ）今日はいつもより酒をどつさり仕込んで置きましたから、音樂や舞樂の遊びをし、また和歌をも詠んで、ゆつくりお慰み下さい。早くお歸りなさつてはいけませんよ」
男「何です、私達に早く歸るなといはれるのですか」
市人「さうです。日が暮れても、また月の景色をお見捨てなさいますな」

シテ「仰せまでもなし何とてか。この酒友をば見捨つべき。古き詠にも花のもとに
ワキ『歸らん事を忘るるは
シテ『美景に因ると作りたり
シテワキ『樽の前に醉を勸めては。これ春の風ともいへり
とシテワキの方へつめ、これより謠に合せて仕科。
地下歌「今は秋の風。暖め酒の身を知れば。藥と菊の花のもとに。歸らん事を忘れいざや、御酒を愛せん。上歌、たとひ暮るるとも。たとひ暮るるとも。夜遊の友に馴衣の。袂に受けたる月影の。移ろふ花の顔ばせの盃に向へば色も猶まさり草。千年の秋をも限らじや。松蟲の音も盡きじ。いつまで草のいつまでも。變らぬ友こそは買ひ得たる市の、寶なれ買ひ得たる市の寶なれ
と常座に立つ。

男「いや仰しやるまでもありません、どうしてこの酒飲み友達を見捨てることが出來るものですか。昔白樂天は『花の木蔭に佇んでゐると、景色の面白さに歸ることを忘れる』と詠みました……」
市人「さう〳〵、その次に『のどかな春風に浮かされて、つい酒を飲み過して醉うてしまふ』といひましたな」
男「ところが、今は秋風の吹く頃で、からだを暖める爲に酒を飲むのによい時節ですから、春の花ならぬ菊の花のもとで、家に歸ることも忘れて、百藥の長の酒を大に飲みませう。なあに、たとひ日が暮れたところで、友達と一緒に夜まで遊ぶことには馴れてゐるのだし、かうして月影の映る盃を受けてゐれば、空の色ばかりでない、顔の色も愈〻あかくなりまさるといふものです。さういへば、そのまさり草の菊は限りのない長壽を祝ふもので、松も同樣……、さうだ、松といへば、松蟲の鳴く音を聞くにつけても、いつまでも忘れられないのは無二の親友で、これこそこの市場で得た隨一の寶だ」
と、われ知らず舊友追慕の情を洩らす。

○花のもとに歸らんことを—和漢朗詠集白樂天の詩句「花下忘レ歸因ニ美景一、樽前勸レ醉是春風一」を引いた。即ち前の「古き詠」は白樂天を指す。
○暖め酒—身を暖めるために飲む酒。
○藥と菊の花の—漢書食貨志に「夫鹽食肴之將、酒百藥之長」とあり、酒は藥であると聞くといふのを菊にいひかけ、なほ彭祖が菊の水を飲んで七百歳の壽を保つた故事を匂はせた〔猩々〕にも類句がある。
○馴衣—着馴れた衣。友に馴れといひかけた。
○袂に受けたる月影—盃を月に喩へ、又眞の月が盃にうつる意を兼ねた。
○移ろふ花の—月が盃にうつる事を、色の移り衰ふ花にいひかけ、花の顔ばせと續けた。
○まさり草—菊の異名。顔色が次第に美しくなりまさるといひかけた。
○千年の秋をも—菊も松も千年の壽を祝ふめでたいものであるから、まさり草を承けて、この句を出し、松蟲の松にいひかけた。
○いつまで草—壁生草、きづた。いつまでもの序に用

ゐた。堀河百首に「壁に生ふるいつまで草のいつまでもかれずとふべき篠原の里」

【四】

◎それにつきて―刊行會本には「それについて」とある。

○心もとなく思ひ―氣がかりに思ひ。

【四】ワキ「いかに申し候。唯今の言葉の末に。松蟲の音に友をしのぶと承り候は。如何なる謂れにて候ぞ

シテ「さん候それにつきて物語の候語つて聞かせ申し候べし

ワキ「さらば御物語り候へ

シテ眞中に行きて下に居る。ツレ・ワキも下に居る。

シテ（語）「昔この阿倍野の松原を。ある人二人連れて通りしに。折節松蟲の聲面白く聞えしかば。一人の友人。かの蟲の音を慕ひ行きしに。今一人の友人。やや久しく待てども歸らざりし程に。心もとなく思ひ尋ね行き見れば。かの者草露に臥して空しくなる。『死なば一所とこそ思ひしに。こはそも何といひたる事ぞとて。泣き悲しめどかひぞなき

【四】市人「もうし、今のお話の中に、松蟲の鳴く音を聞くにつけて、友の事をなつかしく思ふと仰しやつたが、それはどうしたわけなのです」

男「さやう、それについて物語があります。話してお聞かせしませう」

市人「どうぞお話し下さい」

男「昔、或時この阿倍野の松原を、二人の仲のよい友達が連れ立つて通つたのですが、丁度その時松蟲の鳴く聲が面白く聞えたので、その中の一人の友が、その蟲の音を慕つて聞きに行つたのです。も一人の友は暫くその友の歸つてくるのを待つてゐたのですが、いつまでも歸つて來ないので、心配して、その友を探しに行つて見ると、その友は露の置いた草の上に倒れて、死んでゐたのです。『死ぬ時には後れ先立たず、必ず一緒に死なうと思つてゐたのに、これはまあ一體どうしたことであらう』と泣き悲しんだが、今はもうどうすることも出來ません。致し方も

地下歌『そのまま。土中に埋木の。人知れぬとこそ思ひしに。朽ちもせで松蟲の。音に友をしのぶ名の世に漏れけるぞ悲しき（としをり）。上歌『今もその。友をしのびて松蟲の。友をしのびて松蟲の。音に誘はれて市人の。身を變へて亡き跡の。亡靈ここに來りたり。恥かしやこれまでなり。立ちすがりたる市人の。人影に隱れて阿倍野の方に、歸りけり阿倍野の方に歸りけり

シテ「亡靈ここに來りたり」と笠を持ちて立ち橋懸一の松に行く。ツレも同時に立ちてそのまゝ幕に入る。

【五】

地ロンギ『不思議やさてはこの世にも。亡き影少し殘しつつ。この程の友人の。名殘を暫しとめ給へ

シテ『折節秋の暮。松蟲も鳴くものをわれをや待つ聲ならん（と舞臺に歸る）

地『そも心なき蟲の音の。われを待つ聲ぞとはま

なく、その友をそのまゝ土の中に埋めたのです。そして、このやうな浮名は人には知られはしまいと思つてゐましたのに、友は死んでも浮名は消えず『松蟲の鳴く音を聞くと、友の事をなつかしく思ふ』といふ浮名が、世間に漏れたのは、ほんとに悲しいことです。實は今も、その亡き友の事がなつかしく思はれて、松蟲の鳴く音に誘はれて、かうして町の人の姿を裝うて、昔の亡靈がこゝへ現れて來たのです。あゝお恥かしい、ではお暇します」

と、そこに多勢立つてゐる市人の影に隱れて、阿倍野の方へ歸りかけた。

【五】

市人はこれを呼び留めて、

市人「これは不思議だ。すると、もはやこの世にゐない人の亡靈なのですか。それにしても、今少しこゝに居殘つて、昔の友達との名殘をおしのびなさい」

男「さうだ、今は丁度晩秋で、松蟲が鳴いてゐる、あれは私を待つてゐる聲でせう」

（と立歸る）

市人「一體、何の心もない松蟲の鳴く聲を、

○土中に埋木の—土中に埋れるといひかけて、古今集序の句「色好みの家に埋木の人知れぬこととなりて」を引いた。

○朽ちもせで—浮名が朽ち消えもしないで。

○松蟲の—待つといひかけた。

○立ちすがりたる—解し難い。「多勢寄り集まつてゐる」といふ意にとりたい句である。

【五】

ことしからぬ言葉かな

シテ「蟲の音も、蟲の音も。しのぶ友をば待てばこそ言の葉にもかかるらめ

地「げにげに思ひ出だしたり。古き歌にも秋の野に

シテ「人松蟲の聲すなり

地『われかと行きて、いざとむらはんと思しめすか人々ありがたやこれぞ誠の友を。しのぶぞよ松蟲の音に。伴ひて歸りけり蟲の音につれて歸りけり

自分を待つて呼んでゐるのだ、などといはれるのは、變な、ほんとらしくもない話ですが……」

男「いやさうぢやありません。たとひ心のない蟲だといつても、その鳴くのは、戀しい友を待つ心から出ればこそ、歌にも詠まれてゐるのです」

市人「なる程、それで思ひ出しました。古歌に『秋の野に……』

男「さうです――

『秋の野に人松蟲の聲すなり、われかと行きていざとむらはむ』

（秋の野で、松蟲が人待ち顏に鳴いてゐる。その待人は自分であらうか、一つ行つて來て見よう）

と詠まれてゐるのです。あなた方も私共の回向をしてやらうと思し召すのですか。あゝありがたい、これこそ誠の友といふものです」

と、友をしのんで鳴く松蟲の音に誘はれるやうにして、この男は歸つて行つた。

○言の葉にもかかる――歌にも詠まれる。

○秋の野に人松蟲の聲すなりわれかと行きていざとむらはん――古今集讀人知らずの歌。歌の「とむらはん」は尋ね訪ふ意であるのを、回向の弔ふ意にとつて、市人が亡靈の回向をする意に轉じ、「ありがたや」とつゞけた。

【間】

○たべ――飲む。

○怠り申し候――無沙汰しました。

と左へ廻り常座にて開き靜かに中入、

【間】　狂言天王寺の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。天王寺のあたりに住居する者にて候。今日は阿倍野の市にて候間。參りて酒をもたべ申さばやと存ずる。さても〳〵今日は思ひの外の市立にて。一段と賑やかに候よ（と眞中に出で下に居て）。今日は怠り申し候

ワキ「何とてこの程は御出で候はぬぞ

狂言「尤も前々より參り申したく候へども。叶はぬ用の事候て。怠り申して候

ワキ「げに〳〵尤もにて候。さて方々に尋ねたき事の候
狂言「御尋ねなされたきとは如何やうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。松蟲の音に友を忍ぶと申す事には。樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を御尋ねなされ候ものかな。我等もこのあたりに住み候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承りたる通り物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「さる程に變らぬ友の子細と申すは。古この所に器量骨柄人に勝れたる若き者の二人ありしが。仲のよき事類ひなく。春の花秋の紅葉。何事も申し合はせ。連れ立つて歩行候が。ある時夜に入りこの阿倍野の原を通りしに。一人の者松蟲の音に聞き入り。下へ行き。今一人は立ち留まり今や今やと待ち居たるに。歸らず候間。不審に思ひ尋ね行きて見候へば。とある所に空しくなりて打臥し候故。一人の者致すべきやうもなく。日頃約せし事なれば。我等も共に空しくならんとて。そのまま自害し失せ申し候間。痛はしき事なりとて。二人ともに一つの塚に築き込み申して候。それ故に變らぬ友の事は隱れなく候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候
ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。この程いづくともなく若き男來り。某が酒を愛する者の候。則ち今日も參られ候程に。いかなる人ぞと尋ねて候へば。變らぬ友の事を身の上のやうに申され。松原に入るかと見て姿を見失うて候よ
狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては古の變らぬ友の幽靈現れ出でたると存じ候間。俗在出家にはよるまじく候間。二人の跡を御弔ひあれかしと存じ候

○俗在出家—在俗と出家。俗人と僧。

○僧俗にあらず—諺。僧も俗人も讀經回向の功德に變りはないとの意。

○草の假寢のとことはに—草の刈り、假寢の床、とことは（永久）と次第にいひかけて行つた。

○御法をなして—佛事を行つて。

○夜もすがら—終夜。

【七】

○秋霜に枯るる—秋の霜の爲に草の枯れるやうに、力が弱る。

○閻浮—須彌四洲の一、南閻浮提の略。この世。

○郊原に朽ち殘る—郊原は野原、こゝでは阿倍野を指す。和漢朗詠集藤原義孝の句に「暮爲二白骨一朽二郊原一」

○魄靈—幽靈。

ワキ「近頃不思議なる事にて候間、僧俗にあらずと申す事の候へば、かの者の跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「われらも御跡より参り弔ひ申さうずるにて候

ワキ「やがて御出で候へ

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ上歌（待謠）「松風寒きこの原の。松風寒きこの原の。草の假寢のとことはに御法をなして夜もすがら。かの跡弔ふぞ、ありがたきかの跡弔ふぞありがたき

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ男の靈、面三日月・黒頭・金緞鉢巻・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帯・扇の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテサシ「あらありがたの御弔ひやな。秋霜に枯るる蟲の音聞けば。閻浮の秋に歸る心。猶郊原に朽ち殘る。魄靈これまで來りたり。嬉しく弔ひ給ふものかな（とワキに向く）

【六】　後段

市人「松風の寒く吹き渡るこの阿倍野の草原で、一夜を過すこととして、夜通し佛事讀經をして、かの男の回向をするのは、ほんとにありがたいことだ」

といつて回向をする。

【七】

後ジテ男の亡靈、市人の夢に現れる態で登場。

男「あゝありがたい御回向でございます。秋の霜で力も弱つて、絶え〲に鳴いてゐる蟲の聲を聞くと、昔この世にゐた時の事が思ひ出されてなつかしくて、この野原に朽ち殘つた男の幽靈が、こゝまでやつて來たのです。よくこそ御回向下さいました。ほんとに嬉しうございます」

○夕影も深緑―夕影も深きを深緑に、緑を草にいひかけた。
○ありつる人―先程の人。
○浦は難波の―衣の縁語裏を浦にいひかけた。難波は今の大阪。
○いにしへ今こそ―亡靈の住んだのは昔、市人の住むのは今。
○難波人蘆火焚く屋―萬葉集巻十一の歌「難波人蘆火焚く屋の煤してあれど己が妻こそとこ珍しき」を借りた。
○忍ぶ草―草の名。忍草に對して忘草といふ草もあるので、忘れとつゞけた。

ワキ『はや夕影も深緑。草の花色露深き。そなたを見れば人影の。幽かに見ゆるはありつる人か

シテ「なかなかなれやもとよりの。昔の友を猶しのぶ。蟲の音ともに現れて。『手向を受くる草衣の

ワキ『浦は難波の里も近き

シテ『阿倍の市人馴れ馴れて

ワキ『弔ふ人も

シテ『弔はるるわれも

ワキ『いにしへ今こそ

シテ『變れども

地上歌『古里に。住みしは同じ難波人。住みしは同じ難波人。蘆火焚く屋も市館も（と正面に出で）。變らぬ契りを、忍ぶ草の忘れ得ぬ友ぞかしあら。なつかしの心や（とワキへさして行く）

市人「もう夕日もとつぷり暮れて、草の葉にも花にも露がどつさりかゝつてゐる野原の向ふの方を見ると、かすかに人影が見えるが、あれは先程逢つた人であらうか知ら」

男「さうです、もと〳〵昔の友を戀しく思つてゐた上、蟲の音を聞いて、一層なつかしく感じられたので、かうして出て來て、御囘向を受けるのです」

市人「この所は難波の里に近い所で……」

男「それで、阿倍野の市人ともお親しくすることが出來まして……」

市人「なる程、かうして囘向する私も……」

男「御囘向を受ける私も、時代こそちがへ、故郷は同じ難波の者で、焚火を燒く里人の家も、また市人の家も、昔のまゝ變りのないのを見るにつけ、行末長く變るまいと約束をした友の事が忍ばれて、忘れられないのです。あゝなつかしい」

【八】〇「忘れて年を」以下「歸る波の」まで〔融〕にも同じ句がある。〇古に歸る波の—歸るは古と波と上下にかゝる。〇難波のこと—何事といふ意。「波の」となの頭韻を履み、且難波の地名をいひかけた。〇よしあし—善惡を草の名にいひかけた。蘆は難波の名物で「よし」とも「あし」ともいひ、同じ草の名であるから、「隔てなきの序とした。〇朝に落花を踏んで—和漢朗詠集白樂天の詩句「朝踏二落花一相伴出、暮隨二飛鳥一一時歸」を引いた。友情の濃やかな樣を詠んだ詩である。〇瓊筵—玉の如く美しい宴會の席。李白の詩に「開二瓊筵一坐レ花」〇風月の友—風流な友。〇草葉にすだく—草葉に集まる。〇心の友—風雅の友。〇一樹の蔭の宿りも—平家物語福原落の條に「一樹の蔭に宿るも前世の契り淺からず、同じ流れをむすぶも他生の緣なほ深し」。說法明眼論に「宿二一樹下一、汲二一河流一…皆是先世結緣」〇奧山の深谷の下の—周穆

【八】

地クリ「忘れて年を經しものを。また古に歸る波の。難波のことのよしあしもげに隔てなき友とかや

シテこの間に大小前に行き、

シテサシ「朝に落花を踏んで相伴つて出づ

地「夕には飛鳥に隨つて一時に歸る

シテ「然れば花鳥遊樂の瓊筵

地「風月の友に誘はれて。春の山邊や秋の野の草葉にすだく蟲までも。聞けば心の。友ならずや

シテ次の謠に合せて舞ふ。(舞クセ)

地クセ「一樹の蔭の宿りも他生の緣と聞くものを。一河の流れ汲みて知るその心淺からめや。奧山の深谷の下の菊の水。汲めども汲めどもよも盡きじ。流水の盃は手まづ遮れる心なり。されば廬山の古虎溪を去らぬ室の戸の。その戒めを破りしも。志を淺からぬ。思ひの露の玉水のけ

【八】男「長い年月忘れて過してゐましたが、また昔の事が思ひ出されるのです。思へば、あの男とは、何事につけても、よきにつけ惡しきにつけ、全くわけ隔てのない友情を持つてゐたのです。古人も『友と親しくして、朝は早くから落花を踏んで、一緒に遊びに出かけ、夕暮にはまた、鳥の歸る時に歸るのを見て、一緒に連れ立つて歸つて來る』と申しましたが、私達の友情もそれと同じで、花が咲き鳥が歌ふにつけて、一緒に樂しく歌舞の宴を催し、風の吹くにつけ月の照るにつけ、互に誘ひ合つて、或は春の山邊に、或は秋の野原に遊んだものでした、かうした樂しい心持で聞けば、草葉に集まつて鳴く蟲の聲までが、風雅の友のやうに思はれるのです。世間の諺に『同じ木蔭で一緒に雨宿りをするのも、前世からの因緣事である』といはれてゐますやうに、同じ河の水を汲んだりして、一つ事を倶にするといふのは、因緣の深い、友情の厚いことだと思はれます。水といへば、かの奧山、酈縣山の深谷に流れるめでたい菊の水は、どんなに汲んでも盡きることがないといふことであり、又おめでたい曲水の宴に、水に流れる盃がわが前に來れば、詩がまだ作れなくても、まづこれを手に持つといふのも、倶に樂しむ心持から出たものでありませう。盃といへば、酒に關係し

いせきを出でし道とかや
シテ『それは賢き古の
地『世もたけ心さえて。道ある友人の數々積善の餘慶家々に普く廣き道とかや。今は濁世の人間殊に拙きわれらにて。心もうつろふや菊をたたへ竹葉の。世は皆醉へりさらばわれ一人醒めもせで。萬木皆紅葉せり。唯松蟲の獨音に。友を待ち詠をなして。舞ひかなで遊ばん

と舞ひ上げ、

【九】
シテ「盃の。雪を廻らす花の袖

〔黄鐘早舞〕

を舞ひ、引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『面白や。千草にすだく。蟲の音の
地『機織る音の
シテ『きりはたりちよう（と扇を打合せて拍子を踏み）
地『きりはたりちよう。つづりさせてふ蟋蟀茅蜩。

た故事が思ひ出されますが、昔かの廬山で、虎溪より外に一歩も出ず、庵室に籠つてゐた慧遠禪師が飲酒戒を破ったのも、深い友情から起つたことで、禪師はその爲に思はず禁戒の虎溪から外へ出たのでありました。尤もこれは昔の賢人、世間の人情にも長じ、心もさとく、聖人の道を辨へた人々が集まつて、友誼を結んだもので、色々善行を積み重ねた餘德を以て、子々孫々まで廣く榮えたのでありますが、今は濁惡の末世で、殊に私達は前世の戒行の拙いつまらない人間のことゝて、最初から飲酒戒を守らうなどといふ了簡はなく、めでたい菊を眺めては酒を飲み、誰も彼も、世間の者が皆醉つてゐて、從つて自分だけは醉はない、醒めてゐるといふ事もなく、皆眞赤な顔をしてゐる——いや、人間ばかりではない、すべての木が皆紅葉して赤くなつてゐるのです。さうだ、たゞ紅くならないのは松だけだ……いや、松といへば、松蟲が獨り淋しく鳴いて友を待つてゐる、そのやうに、私も友を待つて、歌を謠ひ舞を舞つて遊びませう」

といつて、

【九】
男「花のやうな袖を飜して舞ふ舞が、實に美しいことだ」

〔黄鐘早舞〕

を舞ひ、

男「おゝ面白いことだ。色々の草に集まつて鳴く蟲の聲が、機を織る音のやうに、き

王の臣慈童が酈縣山で菊の下水を汲み八百歳の壽を保つたといふ故事を指す。〔菊慈童〕〔枕慈童〕參照。
○流水の盃—三月三日禁中に行はせられた曲水の宴を指す。
○手まづ遮れる—和漢朗詠集曲水宴を詠んだ菅原雅規の詩句「蹊レ石遲來心竊待、牽レ流遄過手先遮」を引いた。
○廬山の古—以下この節の語釋、本曲の末に記す。

【九】
○雪を廻らす—舞姿の美しい形容。雪に對して花の袖といつた。
○きりはたりちよう—機を織る音、機織蟲の鳴く聲。
○つづりさせてふ—古今集在原棟梁の歌に「秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりす鳴く」「つづりさせ」はつゞれ、着物の綻びを刺し繕へとの意できりぎりすの擬聲。きりぎりすは今の蟋蟀（こほろぎ）である。

○茅蜩―夏の末から秋の初、主として夕暮に鳴く一種の蟬。後撰集讀人知らず一の歌に「茅蜩の聲聞くからに松蟲の名にのみ人を思ふ頃かな」

○色音―音色、聲色。

○りんりん―松蟲の鳴き聲

○めいめいたり―評釋に明、辭解には冥々の字を充つ。後者に從ふべきであらうか。光悅本にも冥々の字を充つ。

○難波の鐘―難波寺卽ち天王寺の鐘。

○あさま―朝と、あからさまと、兩意を兼ねて綴つた。

○ほのかに―尾花の穗といひかけた。

○あしたの原―大和の名所であるが、こゝでは單に朝の原といふ意。

色々の色音のなかに。わきてわが忍ぶ。松蟲の聲。りんりんりんりんとして。夜の聲めいめいたり

地すはや難波の鐘も明方の。あさまにもなりぬべし、さらばよ友人名殘の袖を。招く尾花のほのかに見えし。跡絶えて。草茫々たるあしたの原に。草茫々たるあしたの原に。蟲の音ばかりや。殘るらん蟲の音ばかりや。殘るらん

と舞ひ納め常座にて留拍子を踏む。

り・はたり・ちよう、きり・はたり・ちよう といふ、きり〴〵すはつゞれ刺せ・といふ。その外、茅蜩や色んな蟲が、色んな音色で鳴くが、その中でも、私のなつかしく思ふ松蟲はりん・りん・りん・りんと鳴いて、通夜中に淋しい聲を立てゝゐる。……おゝ、天王寺の明方の鐘が鳴つて、朝がたとなりました。かう明るくなつては、私の姿もあらはになりませう。それではお別れします。名殘は盡きませんが

と、袖をふつて招く姿がほのかに見えたかと思ふと、もう消え失せて跡かたもなく、たゞ草の茫々と生ひ茂つてゐる朝の野原に、鳴く蟲の音だけが殘つてゐるばかりであつた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ「これは津の國阿倍野のあたりに住居仕る者にて候われこの（下懸ナシ）阿倍野の市に出でて酒を賣り候處に（下懸る者にて候さてもこの程）いづくとも知らず若き（下懸ぬ）男の數多來り酒を飲み（下懸某が酒を買ひ飲み候が更に）歸るさには酒宴をなして歸り（下懸を知らず）候何とやらん不審に候間（下懸ナシ）今日も……　【三】ワキ「傳へ聞く白樂天が（春剛作りし）酒功贊を作りし（春剛の）琴詩酒の……　【四】シテ「さん候それにつきて物語（下懸語れ）の候……ワキ「さらば御物語り候へ（下懸ナシ）て、シテ「昔この阿倍野の松原をある人二人連れ（下懸この所に住みし者二人伴ひ或夕暮にこの松原を）通りしに……

古謠本（光悅本）

【一】ロキ二 これは津の國……住居する(光仕る)者……われこの(光毎日)阿倍野の……酒を飲み(光候か)歸るさには……　【四】シテ一 昔この……かの(光ナシ)蟲の音を慕ひ……今一人の友人(光ともノ)……地上歌「今もその……人影に隱れ(光まきれ)て阿倍野の……

附記

○廬山の古―昔の慧遠禪師が廬山に籠居して虎溪より外に出なかつたが、或時陶淵明、陸修靜に勸められて、禁を解いて酒を飲み、二人を送つて計らず虎溪の外に出たといふ故事を指す。(「三笑」參照。)

○室の戸―庵室。

○その戒め―飮酒の佛戒。

○志を淺からぬ―友情を深く思ふ。

○思ひの露―思ひの繁きを露に喩へた語。

○けいせき―大和田氏の評釋には「戒石または警石」、丸岡氏の辭解には「影跡」であらうといふ。「けい」は溪で、溪石でなからうか。

○世もたけ―世間の人情に長じ。

○友人の數々―慧遠は所謂十八賢と白蓮社を結んだ。

○積善の餘慶―周易繫辭傳に「積善之家必有餘慶」

○濁世―道義の廢れた濁惡の末世。

○拙きわれら―前世の戒行の不十分な我等。

○心もうつろふや―友情が移り變り易いといひかけて、霜で色のうつる菊とつゞけた。

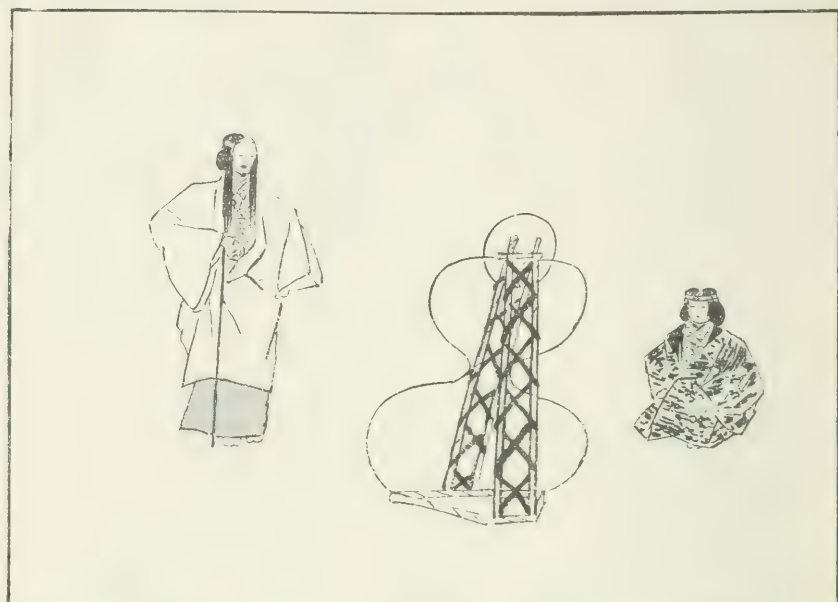
○竹葉―酒の異名。竹の節(よ)を世にいひかけた。

○世は皆醉へり―屈原の漁父辭に「擧世皆濁、我獨淸、衆人皆醉、我獨醒」

○紅葉せり―酒に醉うて顏の赤くなるに寄せていつた。

○唯松蟲の　萬木皆紅葉するのに、たゞひとり常綠である松といひかけて松蟲とつゞけた。

○獨音に―友に別れて獨寢するといひかけた。

松山鏡（まつやまかがみ）

觀（剛 喜）

解説

【能柄】五番目　劇的夢幻能

【人物】子方　姫、ワキ　越後の者（父）、ツレ　母の靈、
　　　　シテ　倶生神

【所】越後國　松の山家

【時】（無季）

【異稱】徳川初期に作られた八巻本花傳書には「松の山鏡」とある。

【作者】能本作者註文に作者不明とある外、古記錄は見當らない。

【梗概】越後國松の山家の者が、先妻の三年忌に、持佛堂に行つて燒香しようとすると、その忘形見の姫が物を隱したので、さては噂の通り、繼母を呪咀するのであらうと、姫を疑つたが、實は母の形見の鏡に映るわが姿を母と想つて、追慕してゐるのであつた。やがて母の亡靈が現れて、姫に詞をかけてゐると、倶生神が出て、母を地獄に連れ歸らうとしたが、その淨玻璃鏡に映る姿を見れば、母は姫の孝行の功德によつて、菩薩の姿となつてゐたので、倶生神は驚いて、自分ひと

りて地獄に堕ちて歸つた

【出典】　鏡は夙く神代の昔からあつたものであるが、一般には、室町時代に入つた後も、なほその珍しく思はれてゐたのであるから、鏡に映る影の不思議さから、悲劇・喜劇を演ずるものに、謠曲に本曲があり、狂言に「土産鏡」があり、小說に「鏡破翁繪詞」がある。鏡破翁繪詞は、近江國の賤の翁が鏡の靈異に恐れて、野となく山となく逃げ走つて、遂に仙境に入るといふ筋で、趣のちがつたものであるが、謠曲の「松山鏡」と狂言の「土産鏡」とは同趣な、互に因果關係のあるもので、舞臺も兩者とも同じ松の山家であり、文章も「身ともが對へば身が影が映る、扇を映せば扇の影、これほど目の前に映すものの影が見ゆる」（狂言）などと同樣の箇所があるのである。そして、その鏡に映る影を見て嫉妬する想が、法苑珠林に、若い夫婦が酒甕に映るわが姿を見て、互に仇し男・仇し女と思ひ誤つて嫉妬するとある說話から出たものとすれば、狂言の方がその本形に近いものと見られよう。

【概評】　世話物の謠曲として、興味のある題材を採つたものである。殊に男女の嫉妬を主想としないで、孝子の思慕を中心としたのは、いかにも謠曲作者らしいよい構想である。從つてワキの中入までは、劇能として穩當な圓滑な脚色であるが、その後を夢幻能の形式によつて、ツレ母の亡靈とシテ倶生神とを出したのは、甚だ不自然な、拙劣な工夫であつたと思ふ。子方姫とワキ父との囘向によつて、母の亡靈が現れるとか、或は「鵜飼」のやうに倶生神だけを出すとか、した方がよかつたやうに思ふ。結局、面白い構想であるが、全體の脚色として失敗したもので、「土産鏡」や「鏡破翁繪詞」がその種の文藝中で、相當高い地位を占めてゐるのに反し、これは謠曲中の秀れたものとは見られないのである。

【一】

後見、鏡臺を正面先に出す。

子方姫、鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて出で地謠座前に下に居る。

名乘笛にて、ワキ越後の者（父）、着附段熨斗目・素袍上下・掛絡・小刀・扇・數珠の裝束にて出で名乘座に立ち、

舞臺は越後國松の山家。ワキ越後の者（父）、登場。

○松の山家—今の越後國東頸城郡松之山村邊の郷名。

ワキ「これは越後の國松の山家に住居する者にて

父「私は越後國松の山家に住んでゐる者

○妻に後れ―妻に死別し。
○對の屋―平安朝時代の寢殿造に、中央に母屋（寢殿）を造つて主人の住む所とし、その東西に相對した棟を造つて、妻妾又は女などを住ませ、これを對の屋といつた。但し室町時代以降一般に行はれたのは書院造で、こゝのは離れ屋の意で用ゐたのかも知れない。
○持佛堂―日夕禮拜する佛や靈牌を安置した室。

【三】
○雲となり雨となり―宋玉の高唐賦に、楚襄王が陽臺といふ所に行幸した時、夢に神女が來て會合し、別れに臨んで、「妾在二巫山之陽高丘之岨一、旦爲二朝雲一暮爲二行雨一、朝々暮々陽臺之下」と誓つたとある故事を指す夫婦の契りのはかない例に擧げた。
○陽臺―四川省巫山縣にある。
○金谷の春―晉の石崇が金谷の別館で綠珠といふ美人を寵してゐたが、趙王倫に襲はれて、綠珠は樓から飛んで死に、崇は東市で斬られた故事をさす。金谷は河南省洛陽縣の西にある。
○月日の道に關守なければ

候。さても某久しく添ひなれし妻に後れ。昨日今日とは存じ候へども。はや三年になりて候。又忘れ形見に姫を一人持ちて候が。餘りに母が事を歎き候程に。對の屋を造り傍に置きて候。又今日はかれが母の命日にて候程に。持佛堂に立ち出で。燒香せばやと思ひ候

子方その場にて、

【三】

子方サシ「雲となり雨となり。陽臺の時留め難く。花と散り雪と消え。金谷の春ゆくへもなし。月日の道に關守なければ。母御に離れて今年ははや。既に三年のその日なり

ワキこれを聞きゐて、

ワキ「あら無慙や。何事やらん姫が獨言を申し候。（子方に向ひ）いかに姫があるか。父が來りたるぞ。持佛堂を開け候へ。あら不思議や。何やらん物を立ち隱すやうに候。いかに姫。さても汝が母に

です。さて私が永年連れ添つてゐた妻に死別したのは、ついこの間のこと、昨日か今日の事のやうに思つてゐたのに、もはやあれから三年になつたのです。その忘形見に一人の姫がゐるのですが、餘りに母の事を歎き悲しむので、對の屋を造つて、そこに住まはせて置くのです。ところで、今日はその母の命日に當るので、持佛堂に行つて、燒香しようと思ふのです」

（見物人に自己紹介をする。）

【三】

子方姫は對の屋にゐて、

姫「昔支那の陽臺で『朝は雲となり、夕暮には雨となつて、通つて來よう』と約束した人の契りも、はかなく絶えてしまひ、金谷で夫婦樂しく過した人も、忽ちに花の散り雪の消えるやうに、はかなくなつてしまつたといふ事ですが、私のお母樣も、そのやうに早くお亡くなりになつて、それ以來、月日の經つのはほんとに早いもので、お別れしてから、今年ははや三年、今日は丁度その御命日なのです」

（獨言をいつて母を追慕してゐる。父はこれを聞いて、）

父「あゝ可哀想に、姫が何やら獨言をいつて、悲しんでゐるわ。（姫に）これ姫はゐるか。お父さまが來たよ。さあ持佛堂をお開けなさい。……おや、これは變だぞ。何やら物を隱すやうだ。これ姫、そ

後れし時。元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども。一族どもの諫めにより。今まで浮世の住ひたり。汝男子ならば父と一所にあるべけれども。女子なれば對の屋を造り置くなり。それに父が來りて姫よと呼ばば。さも嬉しげにて立ち迎ふべきにさはなくして。何やらん物を立ち隱す氣色の見えて候。さては人の申すも眞にて候ひけるぞや。げに汝は今の母を木像に作り。明暮呪咀するといふは眞か。何とてさやうにあさましき心をば持ちてあるぞ。母を戀しく思はば。經念佛して弔ひてこそ。死したる母も成佛し。おことも同じ蓮の緣となるべきにさはなくして。さやうに恐ろしき事をたくまば。正しく浮かむべき母も奈落に沈み。おことも同じ罪に沈むべき事のあさましさよ。何とて物をば申さぬ

なたのお母さまが亡くなつた時、自分も髮を剃つて出家したいと思つたのだが、親族の者どもに諫められたので、今までかうして浮世に暮らしてゐるのだ。それにつけても、そなたが男の子であつたならば、この父と一所に暮らす筈だけれど、女の子だから、對の屋を造つて、そこに置いて置くのだ。それだのに、お父さまが來て「姫よ」と呼んだならば、いかにも嬉しさうにして、すぐ迎へに來さうなものだのに、さうはしないで、何やら物を隱す樣に見えたが、すると、人がいつてゐたのも、ほんとだつたのだな。そなたは今の母さまの木像を造つて、始終のろつてゐるといふ事なのだが、それはほんとなのか。どうしてそのやうなあさましい心を持つてゐるのだ。お母さまを戀しいと思ふのならば、讀經念佛をして回向すれば、それこそ死んだお母さまも成佛し、又そなたも同じやうに極樂に生まれることが出來ようものを、さうはしないで、このやうな恐ろしいのろひなどをしては、折角成佛せられるに違ひないお母さまも、地獄に墮ちてしまふこととなり、そなたも亦地獄に墮ちなければならないのだ。何といふあさましいことだらう。…

—月日は誰も留めることが出來ず、ずん／＼と過ぎて行くから。
○無慙や—罪を造つて自ら慚ぢないこと。轉じて殘酷なこと、三轉して可哀想な氣の毒なこと。
○元結切り—昔は男も髮を結つてゐたから。
○今の母—姫の繼母。
○呪咀—のろひ祈ること。
○おこと—そなた。
○同じ蓮の緣—倶に極樂淨土の蓮華臺に上る緣を得る
○たくまば—企て謀らば。
○浮かむべき—極樂に生まれるべき。
○奈落—梵語 Naraka 地獄

○痛はしや—氣の毒なことである。
○今を限りの御時—臨終の御時。
○わごぜ—そなた。女を親しんで呼ぶ對稱の代名詞。
○面だて—顔の氣色。
○猶若やぎて—生前よりも一層若々しく。
○亡からん跡—死後。
○添ひ添はれん—母が姫に添ひ、父姫に添はれようと。
○面影を—添はれんと思ふ、を面影にいひかけた。
○鏡山立ち寄り給へ—古今集大作黒主の歌「鏡山いざ立ち寄りて見て行かん年經ぬる身は老いやしぬると」に據つた。鏡山は近江國蒲生郡にある。

【三】
○きつと—ふつと。
○漢の武帝の后李夫人—白氏文集「漢武帝初喪二李夫人一、夫人病時不レ肯レ別、死後留二得生前恩一、君恩不レ盡念未レ已、甘泉殿裏令レ寫レ眞、丹青寫出竟何益、不レ言不

ぞ

子方「さやうに御叱り候はば。隠さず申し候べし。痛はしや母御前。今を限りの御時。この鏡をわごぜに取らするなり。母が姿を殘す形見なり。戀しき時は見るべしと。仰せ候ひし程に。ある時この鏡を見れば。母の面だて映りしより。猶若やぎて見え給へば

地上歌「さては亡からん跡までも。さては亡からん跡までも。添ひ添はれんと面影を。殘させ給ひける。母御の慈悲ぞありがたき。不審に思しめされば。見せ參らせん鏡山立ち寄り給へ父御前立ち寄り給へ父御前

【三】

ワキ「これは不思議なる事を申すものかな。空しくなりし母の何しに鏡に映りて見え候べき。但しきつと思ひ出だしたる事の候。漢の武帝の后。

…何故ものを言はないのだ」

姫「そのやうにお叱りになりますのならば、隠さないで申します。お母さまはお可哀想に、お亡くなりになる時、私に『この鏡をそなたにあげよう。これが自分の姿を殘して置く形見なのだ、母さまの戀しい時には、この鏡を見なさい』と、かう仰しやつたので、或時この鏡を見ますと、お母さまのお顔つきがそつくり映つて、前よりももつと若々しくお見えになりましたので、さてはお亡くなりになつた後までも、私に添つてゐてやらう、お母さまにお添ひするやうにと、お姿をお殘し下さつたのかと思ふと、お母さまのお慈悲がほんとにありがたいのです。もし不審にお思ひになるならば、お見せしませう。お父さま、この鏡のそばへ寄つて御覽なさいませ」

【三】

父「これは變な事をいふものだ。死んだ母さまが、どうして鏡に映つて見える筈があらう。だが、ふつと思ひ出したことがある。昔漢の武帝の后李夫人がおかくれになつた後、帝は夫人とのお別れをお悲

レ笑愁ニ殺人一、亦令三方士合二靈藥一、玉釜煎鍊金爐焚、九華帳深夜悄々、反魂香降二夫人魂一、夫人之魂在二何許一、香煙引到焚香處、既來何若不ニ須臾一、縹緲悠揚還滅去」によつた。この事「花筐」にも引かる。

○聖武皇帝の后光明皇后―聖武天皇は第四十五代の帝光明皇后は藤原不比等の女ともに佛法を最も尊崇遊ばされたが、本曲に記されてゐるやうな傳說の出所は分らない(「安宅」の勸進帳參照)
○梵天―梵天王。色界初禪天中の大梵天の主。
○閻王―地獄の主、閻魔王。

李夫人なくならせ給ひて後。帝后の御別れを悲しみ給ひ。御姿を甘泉殿の壁にうつし。明暮叡覽ありしかども。もとより繪にかける形なれば。物言はず笑はず。なかなか憂ひぞ增ると悲しみ給ふ。ある時仙人の告げて曰く。まことに后の御姿を叡覽ありたく思しめさば。月の夜の隈なからんに。反魂香を焚き給へとありしかば。敎へに任せて月の夜の隈なきに。反魂香を焚き給へば。煙のうちに后の御姿まみえ給ひしためしもあり。又わが朝の聖武皇帝の后。光明皇后なくならせ給ひて後。これも后の御別れを悲しみ給ひ。梵天に祈誓し給へば。閻王憐み給ひ。王の輿に乘せ奉り。二度娑婆に送り給ひしためしもあり。さりながらそれは上代の事。これは末世の今の世に。さやうの事のあるべきとは存じ候は

しみ遊ばして、李夫人のお姿を甘泉殿の壁に描かせて、始終御覽遊ばしたが、もとより繪に描いた姿なので、物も言はなければ、笑ひもしない、却つて歎きが增すばかりだとお悲しみ遊ばした。すると、或時仙人が「實に、夫人のお姿を御覽遊ばしたいと思しめすならば、月が隈なく照り渡つてゐる夜、反魂香をお焚き遊ばすやうに」と奏上したので、その敎のやうに、月の隈なく照り渡つた夜、反魂香をお焚き遊ばすと、その煙の中から夫人のお姿がお見えになつたといふ例もあり、又わが國でも、聖武天皇の皇后光明皇后がおかくれ遊ばした時も、帝が皇后とのお別れをお悲しみ遊ばして、梵天王にお祈り遊ばすと、閻魔王がお氣の毒に思つて、皇后を王の輿にお乘せ申して、二度この世にお送り申したといふ例もある。

しかし、それは古い昔のことで、末世澆季の今の世に、そのやうな奇特な事があらうとは思はれないが、あれの母親も娘に

○筋なき事―道理のない事つまらない事。○山鳥の―隔ての縁で出し、山鳥のをろといひかけて、おろかの序とした。萬葉集の東歌に「山鳥のをろの初尾に鏡かけとなふべみこそなによそりけめ」○おろか―おろそか。疎略。○戀衣の―戀衣は戀する人の衣、實母に寄せていふ。下ぬ袖、異妻、重ね、恨み、見えじ、いづれも衣の緣語。○たらちねの親の―拾遺集(萬葉集にも)柿本人麻呂の歌「たらちねの親の飼ふ蠶の繭ごもりいぶせくもあるか妹に逢はずて」を借りて、繭を黛にいひかけた。○いと細し―黛の緣といひかけた鏡に映る母の姿の、いと細く見えるのは、誰を戀ひて、このやうに痩せたのであらうとの意。○見ても泣く―姫を見ても母が泣くのである。○涙がすみの―涙の爲に物が霞んで見える。○曇り增鏡―曇りが增すを增鏡にいひかけた。增鏡は眞澄鏡、明かな鏡。

ねども。かれが母も姫に名殘を深く惜しみ候ひし程に。もし又さやうの事もや候らん。立ち寄りて鏡を見ばやと存じ候。(作物の前に出でゝ)や。さればこそ筋なき事を申し候。やあいかに姫。この鏡に母が影の映る事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ

子方「恨めしやあれ程母のましますを。思ひ隔てて山鳥の。おろかに見させ給ふかと。鏡の前に泣き居たり(と作物の前に行き下にゐて)、クドキ「げにや別れての。涙も未だ干ぬ袖に。異妻を重ね給ひぬれば。その恨みにや戀衣の見えじと思しめさるらめ。よし父にこそ疎くとも

地「われには見えよたらちねの。親の飼ふ蠶の黛の。いと細し誰をかも。戀ひ痩せ顏ぞ見ても泣く。涙がすみの悲しやな。底より曇り增鏡。あれ

深く名殘を惜しんだのだから、もしかすると、そのやうな事があるかも知れない。鏡の前に寄つて見ませう。(鏡の前に行って)やあ、やつぱり何でもない、つまらない事をいつてゐるのだ。これこれ姫、この鏡にお母さまの姿が映るのではないぞ。どうして、つまらない事をいふのだ」

姫「あゝ恨めしい。あれ程はつきりとお母さまがお見えになるのに、薄情なお心で、おろそかに御覽になるのでございませう

と鏡の前で泣いて、

姫「ほんとに、お父さまはお母さまがお亡くなりになつて、まだ悲しみの涙に袖も乾かないうちに、後妻をお貰ひになつたので、それで、お母さまが恨んで、お姿を見せまいとお思ひになるのでせう。たとひお父さまには、そのやうに分け隔てな遊ばしても、私にはどうぞお姿をお見せ下さいませ。……まあ、お母さまのお顏の痩せ衰へていらつしやること。誰が戀しくて、そのやうにお痩せになつたのでせう。まあ私の顏を見てお泣きになる。

こそ母よ御覽ぜよとわが影に指をさす。げにあはれなりされぱこそ幼き身の心なれ幼き身の心なれ

子方この間にもとの座に歸り坐す。

【四】リキ　言語道斷の事。わが影の鏡に映るを見て。母が影にてある由申し候はいかに。總じてこの松の山家と申すは。無佛世界の所にて。女なれども齒鐵漿をつけず。色を飾る事もなければ。まして鏡などと申すものをも知らず候ひしを。某一年都へ上りし時。鏡を一面買ひ取りてかれが母に取らせて候へば。世になき事に悦び候ひしが。今はの時姫を近づけ。われを戀しく思はん時は。この鏡を見よと申しし程に。わが影の映るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。いやいや所詮鏡のいはれを語つて。歎きをとどめばや

あゝ悲しい、涙に眼が霞んで、この明かな鏡も曇つて行つて、よくも見えません。それ、あれがお母さまです、お父さまぞれ御覽なさいませ」
と鏡に映るわが影を指して示す。幼い子供の事とて、それに氣がつかない、誠にかわいさうなことである。

【四】
父「これは驚いた。自分の姿が鏡に映るのを見て、母の姿だといつてゐるのには驚いた。一體この松の山家といふ所は、開けない片田舍で、女でも、おはぐろもつけなければ、紅おしろいもつけないので、まして鏡などといふものは、まるで知らなかつたのだが、私が先年京都へ上つた時、鏡を一つ買つて來て、この子の母にやると、母はこの上もないものとして喜んでゐたが、その死に際に、姫を側へ寄せ『私が戀しく思ふ時には、この鏡を見よ』といつたので、姫は自分の姿の映るのを見て、母だと思つて歎いてゐるのだ。あゝ可哀想なことだ。さうだ、何よりもこの鏡のわけを話して聞かせて、歎きを解いてやりませう。――

【四】
○言語道斷―いひやうもなく驚き呆れた時に發する語
○無佛世界―釋迦が入滅して後、彌勒の未だ現れない前の世界。こゝでは未開の土地の意。
○齒鐵漿―齒を黑く染めること。おはぐろ。
○色を飾る―紅・白粉をつけて化粧する。
○世になき事に―この上もなく喜ばしいこととして。
○今はの時―臨終の時、死に際。
○不便さ―いぢらしさ。

○父が立ち寄れば―以下二三句、狂言「土産鏡」に類句がある。解說參照。

○三吉野の―かくとも見るを三吉野にいひかけ、古今集紀貫之の歌「吉野川岸の山吹吹く風に底の影さへうつろひにけり」を引いた。

○欵冬の影をあやまつ―和漢朗詠集清愼公の句「欵冬誤綻暮春風」を引き、影を見て實物と思ひ誤るとの意に用ゐた。欵冬は山吹。

と思ひ候。やあいかに姫。總じて鏡といふものには。何にてもあれ向ふ物の影の映るぞとよ。これこれ見候へ。父が立ち寄れば父が影。扇を映せば扇の影。ここを以て思ひ知れ（と仕科を以て示す）

子方「げにげに父の仰せの如く。今こそかくとも三吉野の

ワキ『岸の山吹風吹けば

子方『底なる影も散れば散り

ワキ『靡けば靡く欵冬の

子方『影をあやまつ

ワキ『はかなさよ

地『子ながらもこれほど母に似けるよとわが影ながらなつかしや

ワキ『父は涙にかきくれてや（としをり）

これ姫、一體鏡といふものは、何でも鏡の前にあるものが映るのだよ。これ御覽、お父さまが側へ寄れば、お父さまの姿が映り、扇を映せば扇の影が映るのだ。これでよく合點をなさい」

姫「ほんとにお父さまの仰しやる通り、今はよく分りました」

父「吉野川の岸の山吹が風に吹かれて散ると……」

姫「水底に映る花の影も散るやうなものでございますね」

父「さうだ、山吹が風に靡けば、水に映るその影も靡くやうなものだ」

子「それを、私は自分の姿をお母さまだとまちがつてゐたのでした」

父「おゝ、ほんとにいぢらしいことだ」

子「お母さまの子であるとはいふものの、よくもまあこのやうにお母さまに似たものだと思ひますと、自分の姿ながらなつかしう思はれます」

父「わしも涙に目が霞んで、よくも見えないのだ。明るい鏡をわが心からこのやう

【五】〇「子は親に似るなるものと思はれて戀しき時は鏡をぞ見る」母の亡靈が口ずさむのである。謠曲作者の詠であらう。
〇「往事渺茫として－和漢朗詠集白樂天の詩句「往事渺茫都似夢、舊遊零落半歸泉」を引いた。泉は黄泉。
〇これを水といはんとすれば－鏡の縁で、和漢朗詠集源順の賦「花光浮水上」の句「欲謂之水、則漢女施粉之鏡清瑩、欲謂之花、亦蜀人濯文之錦燦爛」を引き、錦の縁で「故郷に立ち歸り」と續けた。漢女は漢國の女、粉は白粉、清瑩は清く曇りのない貌。蜀人は錦の産地蜀國の人、文は錦の紋樣。評釋、辭解等に「目前母の亡靈見ゆとも、母と呼ばんとすればやがて消ゆべきを喩へたり」といつてゐるのは如何であらう。
〇娑婆－この世。
〇錦の袴－錦を着て故郷に歸るといふ諺によつて、前句を承けて出し、袴を着るを君にいひかけて、君の序とした。君は姫。
〇夢驚かし給ふなよ－母の亡靈が姫の夢に現れた心で

地「われこそは曇らすれ。面目なの鏡や

ワキ幕に入る。

・アシラヒの囃子にて、ツレ母の靈、面痩女・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・白水衣・無色縫箔腰巻・腰帯の裝束にて杖をつきて出で常座に立ち、

【五】

ツレ「子は親に似るなるものと思はれて。戀しき時は。鏡をぞ見る

地クリ「往事渺茫としてすべて夢に似たり。舊遊零落して半ば。泉に歸す

この間に大小前に行きて床几にかゝり、

ツレサシ『これを水といはんとすれば

地「即ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり

ツレ「花といはんとすれば。蜀人文を洗ふ錦

地「われとても娑婆の故郷に立ち歸らば。錦の袴

君がため

ツレ『昔を語り。申すべし

地「夢驚かし。給ふなよ

に曇らすのだと思ふと、鏡に對してお恥かしく思はれる」

[illegible]

【五】

[illegible]

母『子は親に似るなるものと思はれて、戀しき時は鏡をぞ見る」

[illegible]

母「古人は『昔の事を顧みると、すべてがぼんやりして、まるで夢のやうだ。昔馴染の友も皆老い衰へて、大抵は死んでしまつた』といつた。(全くその通りだ。さういふ自分ももはや冥途の人となつてしまつたのだ。たゞいつ見ても變らないのは、鏡に映る影で、水鏡——水に映る花を見ても、古人は)『これをたゞの水と見ることは出來ない、宛も漢國の女が化粧をする鏡のやうに淸らかだ。その水に映る花の影もたゞの花と思ふことは出來ない。譬へば蜀國の人が美しい錦の紋樣を洗つてゐるやうだ』といつたことだ。私も今娑婆の故郷に歸らうと思ふにつけて故郷に錦を飾りたい（美しい姿を鏡に映したい）と思ふ。さあそなたに昔話を話して聞かせよう、夢をさまさないで、お聞きなさい。

夢をさますなといふのである。

○陳氏―陳の徐徳言の妻、陳主叔寶の妹、陳が亡びた後、徳言は妻と別れることとなり、鏡を二分して、互に形見としたといふ故事。

○三日月の、鏡の片割れを三日月に喩へ、三日月の出る宵とつゞけた。

○古里の―年月を經るといひかけた。

○夫はその國の主となり―この故事はない。徐徳言夫婦は別離の後、夫は流浪し、妻が越公楊素に寵せられてゐたのであつた。

○あらぬ妹背―自分でない他の女と夫婦になつてゐてしといひかけた。

○形見の鏡―逢ふことも難しといひかけた。

○半月の山の端に―うち傾いての序。半月は片割の鏡に寄せていつたのである。

○鵲一つ飛び來り―神異經に「昔有二夫婦一、相別、破レ鏡各執二其半一、後其妻與レ人通、鏡化レ鵲飛至二夫前一、後人鑄レ鏡、背爲二鵲形一、自レ此始也」とある破鏡の故事を陳氏の事に結びつけたのである。

（居クセ）

地クセ「唐土に陳氏とて。賢女の聞えありけるが。世の習ひ思はずも夫遠行の子細あり。これや限りと思ひけん。形見の鏡破りて猶。光ぞ殘る三日月の。宵に待ち明けて恨み。文も絶え主も來ず。憂き年月を古里の。軒端の荻の秋更けて。風のたよりのつて聞けば。夫はその國の主となりあらぬ妹背の川波の。立ち歸るべきやうもなし。さては逢ふ事も。形見の鏡われ獨り。涙ながらに影見れば。半月の山の端に。うち傾いて泣くならで。せん方もなき折節に

ツレ『いづくよりとも知らざりし

地「鵲一つ飛び來り。陳氏が肩に羽を休め。飛びめぐり飛びさがり。舞ふよと見しが不思議やな。ありし鏡の割れとなり。もとの如くになりにけ

支那に陳氏といつて、賢女の評判の高かつた人があつたが、はかない浮世のこととて、意外にも夫が遠くへ行かなければならないことが出來、もはや二度逢ふことが出來ないと思つたのでせう、鏡を破つて互の形見としたのです。そして陳氏は、その後もその三日月のやうになつた形見の鏡を見て、宵には夫が歸つて來ようかと待ち受け、夜が明ければ、今日も歸つてくれなかつたと恨み暮らしたのですが、いつまで經つても、夫は歸つても來なければ手紙も來ない、古里で辛い年月を過してゐるうちに、軒端の荻に秋風の吹く頃、噂に聞けば、夫は行つた國の國主となり、他所の女と夫婦になつてゐて、歸つて來さうな樣子もないのです。さてはもう逢ふ事も出來ない、形見の鏡をなつかしむのも自分一人で、夫は何とも思つてはくれないのかと、涙ながらにその鏡を見ては、たゞ泣くより外に術もなかつたのです。

ところが、その時、どこからともなく、一羽の鵲が飛んで來て、陳氏の肩にとまつて暫く休み、また飛び廻つたり飛び下つたりして、舞ひ遊んでゐるやうに見えたが、不思議なことに、それが形見とし

○名を磨く—名誉をかゞやかす。

【六】

○片時—暫くの間。

○冥官—冥土の官人。地獄の廳にゐて六道の衆生の罪を裁判するもの。閻魔王の臣。金剛流には「閻王」とある。

○倶生神—一切の人と倶に生じて人の善悪を記し、これを閻魔王に報告する者。

○瞋恚の燃え立つ—怒りの甚しいことを烈火に喩へて熱鐵につゞけた。

○笞—獄卒が罪人を打つ杖。

○空蟬の—振り上げて打つといひかけた。

○骸—死骸。

○魂は冥途に—禮記に「魂氣歸二于天一、形骸歸二于地一」

○もぬけの衣の—魂は冥途に行つて、この世に殘つた骸は蟬のぬけがらのやうだといふのを、源氏物語に空蟬が衣だけ脱ぎ捨てて身を隠したとある話によつて衣とつゞけ、衣の縁語張るにいひかけて玻璃を出す料とした。

○玻璃の鏡—閻魔廳にあり亡者の生前の善悪を映し出す淨玻璃鏡。

○いさぎよき—曇りなき。

り。満月の山を出で碧天を照らす如くなり。これや賢女の名を磨く鏡なるべし

ツレ床几をはなれ、脇座に行きて下に居る。

【六】早笛にて、シテ倶生神、面小癋見・赤頭・輪冠・金襴鉢巻・襟紺色・着附段厚板・法被・半切・腰帯・扇の装束にて橋懸一の松に出で、

シテ「いかに罪人何とて遅きぞ。片時の暇といひつるに。冥官怒りをなし給へば。倶生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り。瞋恚の燃え立つ熱鐵の笞を振り上げて

と扇を振り上げ、次の地謡に舞臺に入り、

地「空蟬の。空蟬の。骸は娑婆にやとまるらん(とツレを引立て)。魂は冥途にもぬけの衣の。玻璃の鏡の。いさぎよき面前に(ツレを作物の前におしすゑ)。引つさげ引き向けあれ見よ娑婆にての。罪科よ

と正面にひらき(ツレもとの座に帰る)

〔舞働〕

た鏡の片割れとなり、二つ合つて、もとのやうな完全なものとなり、譬へば満月が山から出て青空を照らしてゐるやうな、立派なものとなつたのです。これが賢女の名誉を輝かした鏡といふものでせう」

【六】倶生神、[illegible]に登場。

神「こら罪人、何をぐづ／＼してゐるのだ。ほんの暫くの間お暇を下さつたのに、いつまでもぐづ／＼してゐるといふので、閻魔廳のお役人がお怒りになつて、この倶生神に『すぐ行つて苦しい目に逢はせろ』と仰しやつたので、やつて來たのだ」

と、いかにも腹立たしい様をして、熱鐵で作つた笞を振り上げて、母の亡霊を打ち、

神「死骸はこの世に殘つてゐようが、魂はもぬけの殻となつて、冥途に行つてゐるのだ。さあ曇りのない淨玻璃の鏡の前に出ろ」

と鏡の前にひつさげて行つて、鏡の面にひき向け、

神「これ見よ、これがこの世で犯した罪科なのだ」(といつて)

〔舞働〕

に罪人を責むる様を示し、引續き次の謠に合せて仕科。

シテ「こはいかに不思議やな

地「こはいかに不思議やな、孝子の弔ふ功力によつて。鏡の影を。よくよく見れば。頭に玉釵。膚は金色兩臂をかゞみて手を合はすれば。さながら菩薩の。坐像かと御空に花降り虚空に音樂。聞かず見もせぬ冥途の奇特。すはや地獄に歸るぞとて。大地をかつぱと。踏みならし。大地をかつぱと。踏み破つて。奈落の底にぞ。入りにける

と常座に下に居て留む。

には母の亡靈を責める樣を示したが、

神「これは不思議だ。孝子の回向する功德の力によつて、今この鏡に映る女の姿をよく見ると、頭には玉のかんざしを挿し、膚は金色をなし、兩臂をかゞめて手を合はす樣は、まるで菩薩の坐像のやうだ。そして空には花が降り音樂が聞える。このやうな奇特なことは、見もしなければ聞きもしないことだ。これでは、地獄へ連れて行けるものでない。さあ自分獨りで地獄に歸るぞ」

といつて、大地をづしん〳〵と踏み鳴らし、踏み破つて、地獄の底に入つてしまつた。

○玉釵―玉のかんざし。

○かゞみて―かゞめて。

○菩薩―菩提薩埵 Bodhi-sattvaの略。佛果を證得した佛の次位にある者。

○御空に花降り―坐像かと見るといひかけた。空から花が降り音樂の聞えるのは佛菩薩の來現する時の奇瑞

○「聞かず見もせぬ」音樂聞えといひかけて、語を轉じた。

〔考異〕

諸流（觀剛喜）

【二】ワキ「あら無慙や……獨言を申し候（剛ナシ）……父が來りたるぞ……隱すやうに候いかに姫（剛ナシ）……汝男子ならば……嬉しげに立ち（剛父が來らば悅び）……

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは……住居する（元仕る）者にて候さても某（元我）……父（元ナシ）今日は……

【二】ワキ「あら無慙や（元候）……隱すやうに見えて候いかに姫（元ナシ）……存じ候ひ（元ナシ）つれども……さては人の申す（元事）も眞にて候ひ（元あり）けるぞやげに汝は（元誠や

らんか今の・・同じ罪（元業）に・・・　【三】いとこれは不思議の・・もとより（元も）絡に・・存じ候はれ（元へ）ともかれが母も・・や

あいかに頼（元惣）して・この鏡に・・　【四】いや言語道斷・・知らず候ひしを（元なし）某（元我）一年・・何にてもあれ（元なし）向ふ物

の・・

松山天狗（まつやまてんぐ）

剛

解説

【能柄】五番目　劇的夢幻能

【人物】ワキ　西行法師、前シテ　老翁、狂言　木葉天狗、後シテ　崇德上皇、後ツレ　相摸坊、同小天狗（二人又は四人）

【所】讃岐國　松山

【時】鎌倉初期　春（三月）

【異稱】觀世流元祿謠本には〔松山〕とある。

【作者】作者又は演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】西行法師が配所で崩御遊ばされた崇德上皇の御跡を弔ひ奉らうと思ひ立ち、讃岐國に渡り、老翁に導かれて、松山の御廟所を拜し、一首の詠歌を奉る。老翁は上皇の御所へは、たゞ天狗ばかりが參內した由を物語り、自分もその一人であるといつて消え失せる。やがて、上皇が西行の詠歌を愛でて現れ給ひ、舞樂を奏し給ふうちに、昔の御事を思し召し出して、御憤怒遊ばすと、相摸坊以下の天

狗が現れて、上皇をお慰め申す。

【出典】西行法師が白峯の御陵を拜したことは、山家集にも見えてゐるが、本曲は西行の作と傳へられてゐる撰集抄卷一「新院御墓讃州白峯有之事」に、

過ぎにし仁安の比、西國はるぐ修行仕り侍りし次に、……新院の御墓所を拜み奉らんとて、白峯と云ふ所に尋ね參り侍りしに、松の一村茂れるほとりに、くぎぬきしまはしたりし、是ならん御墓にやと、今更かきくらされて物も覺えず、まのあたり見奉りし事ぞかし。清涼紫宸の間にやすみし給ひて、百官にいつかれさせ、後宮後房の臺には、三千の美翠のかんざし鮮かにて、御まなじりにかゝらんとのみし給ひしぞかし。萬機の政を掌に握らせ給ふのみに非ず、春は花の宴を事とし、秋は月の前の興つきせず侍りき。あに思ひきや、今にかゝるべしとは、かけてもはかりきや、他國邊土の山中の、荊棘の下に朽ち給ふべきとは。貝鐘の聲もせず、法花三昧つとむる僧一人もなき所に、只峯の松風の烈しきのみにて、鳥だにもかけらぬ有樣、見奉らんにすゞろに涙を落し侍りき。とにもかくにも、思ひつゞくるまゝに、涙のもれ出て侍りしかば、

よしや君昔の玉の床とてもかゝらん後は何にかはせん

とうちながめられて侍りき。盛衰は今に始めぬ態なれども、こと更に心驚かれぬるに侍り、

とあるに據つて、新しく天狗參内の事を構想したのであらう。――上田秋成雨月物語の「白峯」は本曲に據つたものである。

【概評】崇徳上皇讃岐國御遷幸の御事は、上下三千年の國史を通じて、最も御悼ましい御事で、謠曲作者が西行法師の御陵を拜した事を主題として、本曲を脚色するに當つても、奉悼の念に堪へなかつたことであらう。しかし、謠曲作者の通念によれば、瞋恚の炎に燃えた人を極樂に送ることが出來ない、といつて、荒涼たる松山の御所に上皇唯御一人おはして、誰一人慰め奉る者がなかつたと想像するには忍びない。そこで、上皇の御瞋恚を緣として、魔緣の天狗を出したものであらう。なほ作者は、普通の曲のやうに前ジテを後ジテ上皇の變身とせず、上皇を慰め奉つた天狗とし、後ジテ上皇については、單に御逆鱗の樣を描かないで、まづこゝをも都と思し召して、舞樂を奏し給ふ高雅な趣を出すなど、細心の注意を拂つてゐるのである。然しながらかくの如き御悼ましい御樣を舞臺の上に想像し奉るのは、我等の忍び難い所である。今日金剛流以外に傳はらなくなつたのも當然のことであらう。

後見、塚の作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ西行法師、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の裝束にて出で、名乘座にて大小前に向き、

ワキ次第「風の行方をしるべにて　風の行方をしるべにて松山にいざや急がん

地取に正面に向き、

ワキ「これは嵯峨の奥に住居する西行法師にて候。さても新院本院位を爭ひ。新院うち負け給ひ。讃岐の國へ流され。松山と申す所にて程なく崩御ならせ給ひたる由承り及びて候程に。御跡弔ひ申さん爲に。唯今讃岐の國へと急ぎ候

ワキ道行「思ひ立つ心も西に行く月の。心も西に行く月の幾夜な夜なの假枕その數いさや白雲の。かかる旅路を過し來て。讃岐の國に着きにけり　讃岐の國に着きにけり

「かかる旅路を過し來て」と右の方に向きて二三足出で、ま

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ西行法師登場。

西行「風の吹く方を西の方角と、旅の道案内にして、さあ西國の松山に急いで行かう」

と次第に旅の目的地を述べ、

西行「私は嵯峨の奥に住んでゐる西行法師です。さて崇德上皇には後白河天皇と御位をお爭ひ遊ばされ、その結果、崇德上皇はお負けになつて、讃岐國にお流されになり、松山といふ所で間もなくおかくれ遊ばしたと伺つたので、御回向申し上げたいと存じ、これから讃岐國へ急いで行くのです」

と見物人へ自己紹介をし、

西行「自分が思ひ立つた旅も、空の月も、みな自分の名と同じく西に行くのであるとうち興じながら、幾晩も幾晩も、數の知れない程旅の宿に假寢の夢を結んで、雲路遥かな旅を續けてゐるうちに、やがて讃岐國に着いた」

といつてゐるうちに、讃岐國に着いた態で、舞臺

【一】

○風の行方をしるべにて—風の吹く西の方角を目當てとして。
○松山—讃岐國綾歌郡崇德上皇の遷されておはした所
○嵯峨の奥—嵯峨は京都の西郊にある。西行が京の西山に住んだ事［西行櫻］參照
○西行法師—俗名佐藤義淸(又は憲淸)、鳥羽上皇に仕へた北面の武士であつたが、廿三の時出家して、圓位後に西行といつて諸國を遊歷した。秀れた歌人である。
○新院—崇德上皇。
○本院—新院に對する稱で鳥羽法皇を申し上げるべきであるが、こゝでは本主、天皇の意に解して後白河天皇を指し奉つたやうである。間語參照。
○位を爭ひ—皇紀一八一六年の保元の亂を指す。間語參照。
○程なく崩御—崇德上皇は保元元年讃岐國に遷り、長寬二年(一八二四)崩じ給うた。御壽四十六。
○西に行く月の—西行の名を含ませた。
○いさや白雲の—いさ知らずといふを白雲にいひかけた。
○かかる旅路を—白雲の懸

かゝるを、斯かる旅路にいひかけた。

【三】

○山風誘ふ心―山風が吹いて露を散らし、あはれを催させる風情。

○尉―丈の借字で、杖をつく老人。

たもとに歸りて讃岐に着きたる心、道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。讃岐の國に着きて候。人を相待ち新院の御廟所松山を尋ねばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ老翁、面朝倉尉・尉髪・着附小格子・水衣・腰帶・扇の裝束にて杖をつきて出で、常座に立ち、

シテ一聲「道芝の。露踏み分くる通ひ路の。山風誘ふ。心かな

ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「いかにこれなる尉殿。御身はこのあたりの人にてましますか

シテ「さん候これはこのあたりの者にて候。お僧はいづくよりいづ方へ御通り候ぞ

ワキ「これは都嵯峨の奥に住居する西行と申す者にて候が。新院この讃岐の國へ流され給ひ。程なく崩御ならせ給ひたる由承りて候程に。御跡を弔ひ申さんため。これまで參りて候。松山

[illegible]

西行「道を急いだので、もはや讃岐國に着きました。こゝで人の來るのを待つてゐて、崇德上皇の御廟所のある松山を尋ねませう」

[illegible]

【三】

[illegible]

老翁「道傍の芝草にかゝつてゐる露を踏み分けてやつてくると、山風が吹いて來て露を散らして、あはれを催されることだ」

[illegible]

西行「もうし御老人、あなたはこの邊の方ですか」

老翁「はい、私はこの邊の者です。お僧はどちらからお出でになつて、どちらの方へいらつしやるのです」

西行「私は京都の嵯峨の奥に住んでゐる西行といふ者ですが、崇德上皇がこの讃岐國にお流されになり、間もなくおかくれ遊ばしたといふ事を伺ひましたので、御回向申し上げたいと思つて、こゝまで參つたのです。松山の御廟所をお教へ下さ

○白峯―讃岐國綾歌郡松山村、崇德上皇の御陵のある所。
○道しるべ―道案內。
○行方も知らぬ旅人―何處の者だか分らない、初めて會つた旅人。
○馴れそめて―馴れ初めてを染めてにいひかけて、その緣で色々とつゞけた。
○すさましき―甚だ淋しい

【三】

○なんぼう―いかほど、隨分、非常に。

の御廟所を教へて給はり候へ

シテ「さては天下に隱れなき西行上人にてましますかや。まづあれに見えたる太山は白峯と申す高山なり。少しあなたに見え候こそ。新院の御廟所松山にて候へ。御道しるべ申さんと「お僧を誘ひ奉り

地上歌「行方も知らぬ旅人に。行方も知らぬ旅人に。はや馴れそめて色々の。情ある言の葉の。心の內ぞありがたき。まだ踏みも見ぬ山道の。岩根を傳ひ谷の戶の。岩の下道たどり來て。風の音さへすさましき松山に早く着きにけり松山に早く着きにけり

と松山に着きたる心にて作物に向ひ、(ワキも少し出て作物に向き)

【三】

シテ「これこそ新院の御廟所松山にて候へ。なんぼうあさましき御有樣にて候ぞ

い」

老翁「すると、あなたは天下に隱れもない有名な西行上人でいらつしやるのですか。まづあちらに見える大きな山が白峯といふ高山です。それから今少し遠くに見えるのが、崇德上皇の御廟所の松山です。御案內致しませう」

と、お僧をお誘ひ申して、これまで會つたこともない旅人――西行と、早くも親しい仲となり、色々風流な話を交はすやうになつたのは、まことに貴い風雅な心柄である。

かくして、これまで足を踏み入れたこともない山道の岩を傳ひ、谷蔭の岩に掩はれた道を辿り辿り行くうちに、風の音さへもの凄いほど淋しい松山に着いた。

舞臺は松山の御廟所となり、御廟所を擬した塚の作物が大小前に出してある。

【三】

老翁「これが崇德上皇の御廟所の松山です。實にあさましい御有樣です」

○玉樓金殿—極めて華麗な御殿。太平記巻三に「昔の玉樓金殿に引きかへて、憂き節しげき」。
○百官卿相—大臣・納言以下多くの高官。
○いつかれ—いつくは齋くで、崇め仕へること。
○よしや君むかしの玉の床とてもかからん後は何にかはせん—西行法師の詠。山家集・保元物語・撰集抄等に見ゆ。かからん後は死んだ後との意。
○思ひやりて—歌の心が察せられて。
○天ざかる—鄙の枕詞。
○老の波の—老人といふ意で老の波といひ、波の縁で、立ち舞ふとつゞけた。
○立ち舞ふ—起居振舞。
○みやびたる—優美な。

二人とも下に居て、

ワキ「さてはこれなるが新院の御廟にてましますかや。昔は玉樓金殿の御住居。百官卿相にいつかれ給ひし御身の。かかる田舎の苔の下。人も通はぬ御廟所のうち。涙も更に止まらず。あら御痛はしや候。かくあさましき御有様。涙ながらにかくばかり。『よしや君むかしの玉の床とても。かからん後は。何にかはせん

シテ「あら面白の御詠歌や。賤しき身にも思ひやりて。『西行を感じ奉れば

ワキ『げにや所も天ざかる

地上歌『鄙人なれどかくばかり。鄙人なれどかくばかり。心知らるる老の波の。立ち舞ふ姿まで。さもみやびたる氣色かな。春を得て咲く花を。見る人もなき谷の戸に。鳴く鶯の聲までも。所

西行「すると、これは崇徳上皇の御廟所なのですか。昔は華美を極めた御殿にお住ひ遊ばされ、多勢の高位高官の者に崇めかしづかれておはした御身分でありながら、このやうな片田舎の苔の下、人も通はない淋しい御廟所の内にお籠り遊ばすことかと思へば、涙も流れ出て止めることが出來ない。あゝお痛はしい御事だ。このやうなあさましい御有様を拜して、涙ながらこのやうな歌をお供へ申し上げます。——
『よしや君むかしの玉の床とても、かゝらん後は何にかはせん』
（上皇様、たとへ帝の位にお即き遊ばして、昔のきらびやかな御殿にお住まひなされた事があつても、お隠れになつた今となつては、何にもならないのでございますから）」

老翁「おゝ、これは面白いお歌です。私のやうな賤しい身にも、お歌の心が拜察されます」

と西行の歌に感じ入ると、

西行「いやどうも、この所は隨分な田舎で、あなたもお見かけしたところは、全くの田舎者だが、このやうに風雅な心をお持ちになる様子、いや一體の起居振舞が、實に雅びやかな御様子です。……今は丁度春で、美しく花が咲いてゐるのに、誰一人見るものもないこの谷間に、鶯の鳴

からあはれを催す春の夕かな

【四】

ワキ「いかに尉殿。君御存命の折々は。如何なる者か參り御心を慰め申して候ぞ

シテ「君御存命の折々は。都のことを思し召し出だし。御逆鱗の餘りなれば。魔緣みな近づき奉り。あの白峯の相摸坊に從ふ天狗ども、參るより外は餘の參內はなく候」かやうに申す老人も。常々參り木蔭を淸め。御心を慰め申ししなり。「さても西行唯今の詠歌の言葉。肝に銘じて面白さに。『老の袂をしをるなり

地「暇申してさらばとて（と立ち）。また立ち歸る老の波、翁さびしき木の下に。立ち寄ると見えしが影の如くに失せにけり

とシテ作物に中入。

【間】狂言木葉天狗、面ウソブキ・頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・腰帶の裝束にて杖をつきて出で、

狂言「かやうに候者は。讃岐の國白峯相摸坊に仕へ申す木葉天狗にて候。さても人皇七十五代崇德院

【四】
○君—崇德上皇。
○逆鱗—帝王の怒り給ふこと。韓非子に「夫龍之爲レ蟲也、柔可二狎而騎一也、然其喉下有二逆鱗徑尺一、若人有二嬰レ之者一、則必殺レ人、人主亦有二逆鱗一、說者能無レ嬰二人主之逆鱗一、則幾矣」
○魔緣—人の心を惑亂して魔道に陷らしめる緣となる者。天狗。
○相摸坊—白峯に住む天狗の首領、間語參照。
○天狗—想像上の怪物。形人に似て鼻が高く翼があり飛行自在で、常に深山に棲み、魔道を行ふと云ふ。宇津保物語俊蔭に「遙かなる山に誰かものの音調べて遊びゐたらん、天狗のするにこそあらめ」史記に「天狗狀如二大奔星一、有レ聲、其下止レ地類レ狗」
○參內—崇德院のおはす松山の御所に參る意。
○翁さびしき—翁さび（老人らしい）を淋しきにいひかけた。

【間】

いてゐる聲を聞くと、場所柄春の夕暮が一層あはれに感じられることだ」

【四】

西行「御老人、上皇の御存命の御時には、どういふ者が伺候して、大御心をお慰め申しましたか」

老翁「上皇御存命の御時は、都の事を御無念に思しめして、非常にお憤り遊ばしておはしたので、魔道に緣のある者が皆お近づき申して、あの白峯の相摸坊に隷屬してゐた天狗どもが伺候しましたが、その外には參內する者はありません。……から申すこの老人も、始終參內して、お庭の木蔭を掃き淸め、大御心をお慰め申し上げたのです。それにしても、西行上人の唯今のお歌には深く感じ入つて、餘りの面白さに淚が流れ出て、老の袂も濡れてしまふのです。それではお暇します」といつて出かけたが、また立ち歸つて、いかにも老人らしい姿で、淋しい木蔭に立ち寄つたかと思ふと、影のやうに消えてしまつた。

と申し奉るは。鳥羽第一の皇子なり。御弟近衛院崩御の後、新院第一の皇子長安親王を御位になし奉らんと思し召す處に。美福門院の御計らひにて。鳥羽第四の皇子本院と申すを御位になし給ふ。後白河の院これなり。この意趣によつて。新院本院御仲不和になり。夥しき爭ひありしが。新院うち負け給ふによつて。當國この所に流され給ふ。偏に後世の爲にとて。五部の大乘經を遊ばして。鐘の音も聞えざらん所に納むるも不便なり。王城近き八幡山に籠りたく思し召し。仁和寺へ御上せ候へば。主上この由を聞しめし。御手跡だに御許しなく遂に御返しあれば、瞋恚の焰きはもなく わが惡念懺悔の爲。この經を書きつけ。さらばこの仇に報いんとて。魔道に墮ち天魔にならんとて、柿の御衣に篠懸兜巾をたれ。大乘經の奥に血を以て御誓ひ狀を記し。千尋の底に沈め給ふ。かほど憤り淺からぬ事なれば。相摸坊も尤も痛はしく存じ。玉體に近づき奉り。會稽山の恥を雪がせ申すべきとの御事なり。新院も御年四十六にて遂に御果てなされ候。然るに西行法師修行の序にこの所に御出であつて。新院の御廟にて御歌を詠まれたると申す。その御歌は。よしや君むかしの玉の床とても。かゝらん後は何にかはせん。と詠み給へば。亡魂嬉しく思しめし、重ねて玉體を現し。終夜舞樂を奏して御對面あらうずるとの御事なれば。相摸坊にも諸天狗を作り。參内仕れとの御事なり。皆々その分心得候へ〳〵

といひて引く。

○長安親王—重仁親王を申す。
○美福門院—藤原得子、長實の女。鳥羽上皇の后となり、近衛天皇を生み奉る。
○本院—こゝでは後白河天皇を指し奉る。
○意趣—怨恨。

【五】

後ジテ崇徳院、面怪士・初冠・黑垂・着附白練・袷狩衣・緋大口・腰帶・扇の裝束にて、引廻をかけたる作物の中に床几にかゝり居て、

後ジテ「五蘊もとより皆是空。何によつて平生の身を愛せん。軀を守る幽魂夜月に飛ぶ。「いかに

【五】○五蘊もとより—五蘊は色受想行識の五で人の心身を形成するもの。謠曲評釋に（校註謠曲叢書にも）「五蘊本來皆是空、因ㇾ何平生愛ニ此躬一、守ㇾ軀幽魂飛ニ夜月一、失ㇾ屍窮魄嘯ニ秋風一」を引いてゐるが、その出所は分らない。この類句〔生田敦盛〕にもある。

【五】

後段

後ジテ崇徳上皇、御廟所に擬した塚の作物の中で

上皇「色受想行識から成立つてゐるこの心身は、もと〳〵空なものなのだ。だから、平生この身を愛するのは、何の理由もな

○いひもあへねば—「いひもあへぬに」といふべき所を、謡曲では常にかういひ慣はしてゐる。
○たをやか—雅やか。
○雲居—禁中。

西行。これまで遙々下る心ざしこそ。返す返すも嬉しけれ。又唯今の詠歌の言葉。肝に銘じて面白さに。いでいで姿を現さんと

地「いひもあへねば御廟頻りに鳴動して。玉體現れおはします（引廻を下す）。誠に妙なる玉體の。誠に妙なる玉體の。花の顔ばせたをやかに。こゝも雲居の都の空の。夜遊の舞樂は面白や

と作物より出で、

〔早舞〕

を舞ひ、次の謠に合せて仕科。

地「かくて舞樂も時過ぎて。かくて舞樂も時過ぎて。御遊の袂を返し給ひ。舞ひ遊び給へば又古の都の憂き事を思し召し出だし。逆鱗の御姿あたりを拂つて。恐ろしや

地「あれあれ見よや白峯の。あれあれ見よや白峯の。山風荒く吹き落ちて。神鳴り稲妻頻りに充

いことだ。このからだを守つてゐる魂も、夜の月と共にどこへか飛んでしまふのだ（と獨言をいひ）。おい西行、遠い所をわざわざこゝまで來てくれた好意を嬉しく思ふぞ。殊に唯今の歌は實に面白くて、感じ入つたから、さあ姿を現して見せよう」と仰せられるや否や、御廟所が頻りに鳴り動いて、玉體がお現れになつた。誠にありがたい優雅な玉體で、花のやうなお顔立ちを遊ばして、こゝも上皇のおはす所であるから都であると思しめして、夜中舞樂を遊ばす御有様は、實に結構なものである。

〔早舞〕

上皇舞樂を遊ばす態。

かうして、舞樂を遊ばすうちに時刻は過ぎて行つたが、なほも御袂を飜してお舞ひ遊ばすうちに、昔の都でのお辛かつた御事を思しめし出しになつて、御憤り遊ばす御姿は、あたりを拂ふばかり恐ろしい御様である。

すると、おゝあれを見よ、白峯の山風が荒々しく吹いて來て、雷が鳴り電が頻りに閃き、雨が降り出して、あちら

○雨遠近の―雨落ちを遠近にいひかけた。

【六】

○會稽を雪がせ―御恥辱御鬱憤を晴らし奉らうとの意。會稽は越王勾踐が呉王夫差に苦しめられた所、後勾踐は夫差を破つて復仇したから、雪辱復仇することを會稽の恥を雪ぐといひ慣はした。「船辨慶」參照。
○叡慮―天子の大御心。

ち滿ち雨遠近の雲間より。天狗の姿はあらはれたり

【六】（ノ輪座にて床几にかゝる。早笛にて、後ヅレ相摸坊、及び小天狗二人又は四人、面癋見・赤頭・大兜巾・着附厚板・袷狩衣・半切の裝束にて羽團扇を持ちて出で、橋懸に立ち並ぶ、）

後ヅレ「抑もこれは、白峯に住んで年を經る。相摸坊とはわが事なり、さても新院思はずも。この松山に崩御なる。常々參內申しつつ。御心を慰め申さんと、小天狗を引き連れて（と舞臺に入り）

地「翅を並べ數々に。翅を並べ數々に。この松山に隨ひ奉り。逆臣の輩を悉くとりひしぎ。蹴殺し會稽を雪がせ申すべし。叡慮を慰め。おはしませ

（舞働）

シテ『その時君も悅びおはしまし．

こちらの雲間から天狗の姿が見えた。

【六】

後ヅレ（相摸坊以下天狗多數登場）

相摸「自分は白峯に住んで、永い年月を經た相摸坊だ。さて崇德上皇は思ひがけなくも、この松山でおかくれ遊ばしたのだ（といつて上皇に向ひ）。始終參內して、大御心をお慰め申し上げたいと存じ、小天狗を引き連れて參りました。多勢のものが翅を並べて、この松山にお仕へ申し上げ、上皇に御謀叛申した奴原をひねりつぶし蹴殺して、御憤怒をお晴らし申しませう、どうぞ大御心をお慰め遊ばしますやうに。

（舞働）に逆臣を討つ勇ましい様を示す。

これを叡覽あつて、上皇も御悅び遊ばは

○白峯の―空も白きといひかけた。

地「その時君も悦びおはしまし御感の御言葉數數なれば（シテ立ちて）天狗もおのおの頭を地につけ拜し奉り。これまでなりとて小天狗を。引き連れ虚空にあがるとぞ見えしが。明け行く空も白峯の。明け行く空も白峯の梢に。又飛び翔つて。失せにけり

ツレまづ退場、シテ常座にて留拍子を踏む。

され、數々御褒美の御言葉を賜はつたので、天狗も皆頭を地につけて禮拜し、『ではお暇申し上げます』といつて、小天狗を引き連れて、空中に上りかけたが、夜も白々と明けて來た折柄、白峯の梢に翔け飛んで、消え失せてしまつた。

〔考　異〕

古謠本（觀世流元祿二年本〔松山〕）

【一】ワキ「これは（元都）嵯峨の……本院（元御）位を爭ひ（元給ひ）新院うち負け給ひ（元ナシ）讃岐の國へ流され（元ナシ）……ワキ「急ぎ候程に（元是ははや）……　【二】ワキ「これは……西行と申す者にて候（元なる）が……　地上歌「行方も知らぬ……昔の下道たどり來て（元ふみ分て）……　【三】ワキ「さては……かく（元誠に）あさましき御有樣……

通盛（みちもり）

觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】二番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　僧、ワキツレ　從僧、前シテ　漁翁（通盛の靈）、ツレ（前後）海士女（小宰相局）、狂言　所の者、後シテ　平通盛

【所】阿波國　鳴門

【時】夏（七月）

【異稱】（道盛）とも書いた。

【作者】世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作とし、二百十番謠目錄もこれに從つてゐる。但し申樂談儀に「道もり、言葉多きをきりのけ／＼してよくなす」といつて、世阿彌が原作を修正してゐるらしいので、能本作者註文に世阿彌の作としてゐるのも、必ずしも誤りとはいへない。能作書に軍體の例として本曲を擧げ、看聞日記に永享四年三月十五日仙洞御所で、春日拜殿方諸日記に寶德四年二月十三日薪申樂に演じたこと、言經卿記に文祿四年四月四日本曲を註釋したことを記してゐる。

【梗概】阿波の鳴門に一夏を送つてゐる僧が、平家の跡を弔ふ爲に、磯山に出て讀經してゐると、沖合に出てゐた一人の漁翁と女とが、御經を聽聞しようと、舟を岸に漕ぎ寄せて來たので、その篝火を借りて讀經を終り、この浦で戰死した人の事を尋ねると、二人は、小宰相局が夫通盛の戰死した事を聞いて、この海に入水したことを物語り、二人とも波間に入つてしまふ。僧は方便品を讀誦して、二人の回向をしてゐると、やがてかの二人が現れ出て、一の谷合戰の樣を語り、法力によつて成佛得脫した事を喜ぶ。

【出典】平通盛が討死したことは、平家物語卷九「落足の事」源平盛衰記卷三十七「忠度通盛等最後事」、これを聞いて小宰相局の入水したことは、平家物語卷九「小宰相」、盛衰記卷三十八「小宰相局附愼夫人事」に、兩書ともほゞ同樣の事を記して居り、本曲はそのいづれか、或はこれと同趣な他の異本に據つたものであらうが、詞章は特に原文を襲用したと見られるほどの所もないから、こゝにはその原文を引くことを省略して置く。

【概評】夙く世阿彌が申樂談儀に「祝言の外には、井筒、道盛など、すぐなる能也……殊に神の御前は、この申樂に道盛したき也」、又「道盛、忠度、よし常、三番修羅がかりにはよき能なり」といひ、今も俗に「實盛」「盛久」と併せて三盛(もり)などと稱して、修羅物の中での重い曲としてゐるやうに、本曲は修羅物の類型を離れた特異な曲柄である。その著しい點は、武士を主人公とした曲に、女性の戀慕を彩つたことで、脚色の苦心も主としてこの按配調和に向つて注がれてゐる。前段のシテ・ツレ通盛夫婦が漁翁夫婦を裝うて、舟を漕ぎ寄せてくるのは、小宰相が入水したからであつて、篝火を緣として僧と近づかしめるのも、面白い手法であるが、小宰相入水の物語をしてツレが入水する、その後を追うてシテも海底に入ることとして、前段を結んでゐるのは、夫婦戀慕の情を現す上に於ても、よい效果を奏してゐる。後段のクセに、通盛が小宰相との名殘を惜しむ樣を叙したのは、前段との關係を緊密にしたものであり、カケリ以後、通盛奮戰の樣を示したのは、修羅物の本領を發揮したもので、始終注意深い脚色に成功したものといはれよう。

【一】

【一】名乘笛にて、ワキ僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて經を懷中し、ワキヅレ從僧、ワキと同樣の裝束にて出で、ワキは舞臺に入り名乘座に立ち、(ワキヅレは橋懸一の松にて下に居り)

【一】前段

舞臺は阿波國鳴門に、ワキ僧、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

○阿波の鳴門―阿波國板野郡大毛島の孫崎と淡路島鳴門崎との間の海峽。即ちこの僧は孫崎で一夏を送つたのである。
○一夏―四月十六日から七月十五日まで夏時九十日間安居(籠居修行)の行を修すること。
○この浦は―この浦で死んだのは、實は小宰相だけである。
○痛はしく―お氣の毒に。
○磯山―磯邊の山。
○暫し岩根を待つ程に―暫し居るを岩根に、岩根の松を待つに、誰が世を夜に、知らぬを白波に、楫音ばかり鳴るを鳴門にいひかけた

【二】

○すは―そら。物に驚いて注意を促す聲。
○遠山寺の鐘の聲―夫木抄藤原基俊の歌「入相の遠山寺の鐘の聲あな心ぼそわが身幾世ぞ」を引いた。
○入相ごさめれ―入相にこそあるめれの約。入相は夕暮。

ワキ「これは阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さてもこの浦は。平家の一門果て給ひたる所なれば痛はしく存じ。毎夜この磯邊に出でて御經を讀み奉り候。唯今も出でて弔ひ申さばやと思ひ候

といひて、脇座に行き下に居り、(ワキヅレもその次に坐し)

ワキ、ワキヅレ上歌「磯山に。暫し岩根を待つ程に。暫し岩根を待つ程に。誰が夜舟とは白波に。楫音ばかり鳴門の。浦靜かなる、今宵かな浦靜かなる今宵かな

【三】

後見、篝火をつけたる舟の作物を脇正面に出す。

一聲の囃子にて、シテ漁翁、面朝倉尉・尉髮・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束、ツレ海士女(小宰相局)、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・色入唐織・扇の裝束にて、ツレを先に立てて出で、ツレは舟の眞中に乗り、シテは艫に立ちて棹を持ち、

ツレ、サシ「すは遠山寺の鐘の聲。この磯近く聞え候

シテ「入相ごさめれ急が給へ

僧「私は阿波國鳴門で一夏安居の修行をしてゐる僧です。さてこの浦は、平家一族の人々のお果てになつた所なので、お氣の毒なことだと思ひ、毎晩この磯邊に出て、御經を讀んで御回向してゐるのです。今日もこれから出かけて、御回向しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、やがて磯邊に來た態で

僧「かうして、磯邊の山の岩に腰かけて、暫く待つてゐると、誰が乘つてゐるのか分らないが、夜舟を漕いでゐる艪の音だけが聞えて來て、その外は、この鳴門の浦一體にいかにもの靜かなことだ」

といつて沖の景色を見てゐる。

【三】

シテ平通盛漁翁の姿をし、ツレは小宰相局海士女の姿をして漁船に乗り、沖から漕いで來る態で登場

女「そら、遠い山寺の鐘の音が、この磯邊まで耳近く聞えて來ますよ」

漁翁「おゝ、夕暮になつたのだ。さあお急ぎなさい」

○急が給へ―急が世給への略。
○程なく暮るる―その日の暮れるのを、やがて永い年月の早く過ぎ行く意にいひかけた。
○昨日過ぎ―古今集春道列樹の歌「昨日といひ今日と暮らして飛鳥川流れて早き月日なりけり」に據つた。
○老に頼まぬは―老の身には命がはかなくて、行末の月日が頼みにならないとの意。
○いつまで世をば―世をば渡るをわたづみに、海の海士を除りに、隙も無きを波にいひかけた。わたづみは海の古語。波小舟は波にゆられてゐる小舟。
○何を頼みに―波のなの音を重ねて何をといつた。
○命のために―何を將來の樂しみとして、その日〳〵の生活の爲に身を勞役しようとの意。
○月の出汐―月の出を出汐（滿汐）にいひかけた。
○夕波の―夕波の鳴るを鳴門にいひかけた。
○離れ得ぬ―淡路島が鳴門の沖から離れないと、生活の爲に浮世の辛い業から離

ツレ『程なく暮るる日の數かな
シテ『昨日過ぎ
ツレ『今日と暮れ
シテ『明日またかくこそあるべけれ
ツレ『されども老に頼まぬは
シテ『身の行末の日數なり
シテ ツレ 一聲『いつまで世をばわたづみの。あまりに隙も。波小舟
ツレ『何を頼みに。老の身の
シテ『命のために
シテ ツレ『つかふべき
地上歌『憂きながら。心の少し慰むは。心の少し慰むは。月の出汐の海士小舟。さも面白き浦の秋の景色かな（と右の方に向き）。所は夕波の。鳴門の沖に雲つづく（と目附柱の方を見廻し）。淡路の島や離れ

女「すぐ日が暮れてしまひますが、かうして永い年月もすぐ經つてしまふのですね」
漁翁「ほんとにさうだ、夢の間に昨日は過ぎてしまひ……」
女「今日も暮れて行き……」
漁翁「明日も亦かうして過ぎて行くのだらう」
女「それにしても、年寄つたものには……」
漁翁「これから先、長い年月があらうなどと、あてにすることは出來ないのだ」
漁翁「いつまで、かうした果敢ない渡世の爲に、危げた小舟に乘つて、少しの隙もなく忙しく暮らすことだらう。何をあてにして、何を樂しみにして、果敢ない命を繋がうと思つて、この年寄りの身を働かせてゐるのであらう。」――
何から何まで辛い事ばかりだが、でも、少し心の慰められるのは、月が出て滿汐になつたのを幸ひに、漁船を沖へ漕ぎ出す時の、浦の景色で、これはいかにも面白いものだ。この夕波の寄せては返す鳴門の沖の、遙かなかなたに淡路島の續いてゐる様、これは面白い景色だが、しか

れ得ないと、二意を兼ねた。

○暗濤月を埋んで―詩句らしいが出所が分らない。○苫―菅茅などで編んだ、船の上を覆ふ筵。○蘆間に通ふ―雨の脚を蘆間にいひかけた。○波枕に―音するものも無きを波枕にいひかけ、枕の縁で夢とつゞけた。○楫音―艪を漕ぐ音、○唐艪―唐風の艪。こゝでは文のあやに「楫音を靜め」と同意の事を重ねていつたのである。

【三】
○誰ぞやこの鳴門の沖に音するは―引歌らしいが出所が分らない。この句〔海士〕にもある。

得ぬ浮世の業ぞ悲しき浮世の業ぞ悲しき（と正面に直し）

シテサシ『暗濤月を埋んで淸光なし

ツレ『舟に焚く海士の篝火更け過ぎて

シテツレ『苫よりくぐる夜の雨の。蘆間に通ふ風ならでは。音するものも波枕に。夢か現かお經の聲の。嵐につれて聞ゆるぞや（と聞き）。楫音を靜め唐艪を抑へて（棹を見）。聽聞せばやと思ひ候

と謡ひてツレは下に居り、シテは面を伏す。

【三】

ワキ『誰ぞやこの鳴門の沖に音するは

シテ『泊り定めぬ海士の釣舟候よ

ワキ『さもあらば思ふ子細あり。この磯近く寄せ給へ

シテ『仰せに隨ひさし寄せ見れば（と棹をさす）

ワキ『二人の僧は巖の上

し、結局何を見ても、浮世のしがない渡世からは離れられないのが悲しいことだ」

漁翁「潮煙で、あたりが眞暗になつて、月の光も見えないわ」

女「舟で焚いてゐる蘆火の光もだんだん弱つて來ました」

漁翁「たゞ聞えてくるものといへば、苫をくゞつて舟の中へも漏れ入る夜の雨の音か、蘆間に吹き渡る風の音か、そんなもの外、何もない筈だのに、これはまた夢でも見てゐるのであらうか、讀經の聲が嵐の音に交つて聞えるぞ。艪の音を立てないやうにして、あの讀經を聽聞しませう」

【三】

僧はこなたへ漕いで來た舟を見て、

僧「この鳴門の沖合で、音を立ててゐるのは誰だ」

漁翁「どこに落ちつくといふ所もなく、さまようてゐる漁船ですよ」

僧「それならば、少し考へがあるから、この磯近くへ舟をお寄せなさい」

舟を磯邊に漕ぎ寄せた態で、

漁翁「仰せの通り、舟を漕ぎ寄せて見ますと……」

僧「二人の僧が岩の上にゐるのだ」

○かりそめに―蘆火の影を借りといひかけた。
○業は蘆火と―漁業は殺生戒を犯すもので悪いことと思つてゐたがといふのを蘆火にいひかけ、その蘆火が佛經讀誦の爲の善き燈火となると續けた。
○鳴門の海の―燈火になるといひかけた。
○弘誓深如海歷劫不思議―法華經普門品の偈文。弘誓は佛菩薩の弘く衆生を濟度し給ふ誓願。劫は無限の永い時間。弘誓の深きこと海の如く、劫を歷とも思議せじ―と訓む。
○五十展轉―法華經隨喜功德品に出てゐる語で、法華經を聽聞すれば、その利益が次から次へと傳へられて、五十人に至つても、その功力に變りがないとの意。
○おもてぞ暗き―蘆火の光が弱つて經の紙面が暗い。表に對して裏を浦風にいひかけた。
○龍女變成―法華經提婆達多品に娑竭羅龍王の八歳の女が男子に變成して南方無垢世界に往生したとあるをいふ。
○姥も賴もしや―龍女が成

シテ「漁の舟は岸の陰
ワキ「蘆火の影をかりそめに。お經を開き讀誦する（と懷中より經を出して開き）
シテ「ありがたや漁する。業は蘆火と思ひしに
ワキ『よき燈火に
シテ「鳴門の海の（と棹を捨てて下に居り合掌）
シテ ワキ「弘誓深如海歷劫不思議の機緣によりて。五十展轉の隨喜功德品
地下歌『げにありがたやこの經の。おもてぞ暗き浦風も（シテ扇を開き）。蘆火の影を吹きたてて（蘆火を扇ぎ）。聽聞するぞありがたき。上歌「龍女變成と聞く時は。姥も賴もしやおほぢはいふに及ばず。願ひも三つの車の蘆火は清くあかすべし猶々お經、遊ばせ猶々お經遊ばせ

漁翁「そしてこの漁舟は岸陰に居ります、
僧「そこで、その蘆火の光を借りて、お經を開いて讀誦しようと思ふのだ」
（經を出して讀誦する。）
漁翁「あゝありがたいことです。漁の爲に使ふ蘆火は、殺生の助けをするもので、ただ悪いものだと思つてゐたのですが……」
僧「かうして、讀經の爲の火影となれば、衆生を極樂に導くよい燈火になるのだ……法華經に、『弘く衆生を濟はうとの御誓願は、海の如く深いもので、未來永劫變ることがない』と仰せられたやうに、佛緣を得れば、讀經のありがたい功德が幾十人にも及ぶのだ」
漁翁「ほんとにありがたいことでございます。……おゝこのお經の紙面が暗かつたのに、浦風までが吹き立てて、蘆火の光を明るくして、御讀經に都合よくしてくれる、それを聽聞することの出來るのは、ほんとにありがたいことでございます。龍女までが男子に變成して、南方無垢世界に生まれたといふことですから、女人のこの婆さんも成佛することが出來ようかと賴もしく思はれます。まして、男のこの爺たとは勿論成佛が出來ませう。さあ蘆火の光を清く明くしませう、もつと御讀經下さいませ」
僧は經を讀み終つて、

佛したのであるから、女人の姥も成佛し得ようと頼もしく思はれる。
○おほぢ—祖父。老翁。男子なればなほ更成佛し得るとの意。
○願ひも三つの車の—願ひも滿つを三つの車に、車の足を蘆にいひかけた。三つの車は法華經譬喩品に、火宅の如きこの世の煩惱を離脱する方便に譬へられた羊車鹿車牛車をいふ。

【四】
○小宰相の局—刑部卿藤原憲賢の女、上西門院の女房であつたが、後通盛の妾となつた。平家が八島に落ちた時、船中で通盛の戰死を聞いて入水した。時に年十九。
○馬上をあらためて—陸路騎馬で行くことをやめて。
○磤馭盧島—伊弉諾伊弉冊二神が高天原から御降臨の最初に出來た島で、古來淡路島又はその南の沼島がそれであるといひ傳へてゐるので、武士のをのことといひかけて淡路潟を呼び起す料とした。

【四】
ワキ「あら嬉しや候（と經を拜して卷き）。火の光にて心靜かに御經を讀み奉りて候（經を懷中し）。まづまづこの浦は。平家の一門果て給ひたる所なれば。毎夜この磯邊に出でて御經を讀み奉り候。とりわき如何なる人この浦にて果て給ひて候ぞ委しく御物語り候へ
シテ「仰せの如く或は討たれ。又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ。（ツレに向ひ）や、諸共に御物語り候へ
ツレ「さる程に平家の一門。馬上をあらため。海士の小舟に乘り移り。月に棹さす時もあり
シテ「ここだにも都の遠き須磨の浦。シテ・ツレ「思はぬ敵に落されて。げに名を惜しむ武士の。磤馭盧島や淡路潟。阿波の鳴門に着きにけり
ツレ「さる程に小宰相の局乳母を近づけ。シテ・ツレ「いか

【四】
僧「あゝ嬉しいことだ。この火の光でゆつくり御經を讀むことが出來ました。私達は、この浦は平家一族の人達のお果てになつた所なので、毎晩この磯邊に出かけて、御經を讀誦してゐるのですが、この浦では、平家一門の中でも、とりわけどういふ人がお果てになつたのです。委しくお話し下さい」
漁翁「仰せの通り、この浦で或はお討たれになつたり、或は自ら海にお沈みになつたりしたのですが、とりわけ小宰相の局は……（女に）おゝ、そなたも一所にお話し申し上げるがよい」
女「平家一門の人々は、これまで陸路騎馬で進んで行つたのですが、今は小さな漁船に乘り移つて、月の夜船を棹さして行く時もあつたのです」
漁翁「須磨の浦にゐた時でさへ、都から随分離れた、遠い所だと思つてゐたものが、そこをも敵に討ち落されて、武士の名譽を思ひながら、淡路潟を通つて、この阿波の鳴門に着いたのです」
女「その時、小宰相の局が乳母を側に寄せ

○通盛—平教盛の子。清盛の甥、教經の兄。壽永三年一の谷で戰死した。
○沈まうずらめ—沈まんとすらめ。
○涙のかねて浮かむらん—沈むと浮かむとを對照せしめた。
○西はと問へば—西方極樂淨土の方角はどちらかと尋ねれば。
○この時の物思ひ—平家沒落についての悲しみ。
○君—小宰相を指す。
○同じ滿潮の—同じ道といひかけた。

に何とか思ふ。われ頼もしき人々は都に留まり。通盛は討たれぬ。誰を頼みてながらふべき。この海に沈まんとて。主從泣く泣く手を取り組み舷に臨み（と二人ともしをりながら立ち）

ツレ「さるにてもあの海にこそ沈まうずらめ（と右の方に向き）

地下歌「沈むべき身の心にや涙のかねて浮かむらん（ツレしをり）。上歌「西はと問へば月の入る。西はと問へば月の入る。其方も見えず大方の。春の夜や霞むらん涙もともに曇るらん（シテ面伏せツレしをり）。乳母泣く泣く取りつきて（シテツレを見やり）。この時の物思ひ君一人に限らず思しめしとまり給へと御衣の袖にとりつくを。振り切り海に入ると見て老人も同じ滿潮の。底の水屑となりにけり底の水屑となりにけり

シテ「御衣の袖に取りつきて」とツレの右袖にとりつく。ツ

て、これはどう思ふ、私の頼りにしてゐた人々は都に留められ、通盛は討たれてしまひになつた。かうなつた上は、これから誰を頼りにして生きて行けよう。一層のこと、この海に沈んで死んでしまはう」といつて、主從二人、泣きながら手を取り合ひ、舷に立つて、さうだ、あの海に沈むことになるのだと思ひますと、やがて沈むべき身の悲しさにか、涙が先に浮かんで來て、西方極樂淨土にあの月の入る方角だと教へられても、春の夜の霞に包まれてゐる爲か、それとも眼が涙に霞んでゐる爲か、その方角も見えないのです。その時、乳母が泣きながら小宰相の局に取りすがつて『今のこの悲しみは、あなたお一人ではございません、平家御一門皆同じなのですから、どうぞお思ひ留まりになりますやうに』といつて、お袖にとりすがつたのを、小宰相の局は振り切つて、海の中に入つてしまひました（ここで今の女も同じやうに海に入る）と、老人も一緒に滿汐の海に入つてしまつた。
（ツレ・シテここに海に入る態で中入。寶流ではツレの中入がないのは、便宜上後見座を以てこれに代へたのに過ぎない）

レ「振り切り海に入る」と入水の心にて舟より出で後見座にくつろぎ、シテ「老人も同じ」と舟より出で入水の心にて下に居り、直して静かに中入。（ツレはそのまゝ後見座にくつろぐ）

【間】　狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。鳴戸の浦に住居する者にて候。こゝに貴き僧の一夏を送り給ふが。毎日ありがたき御經を御讀誦なされ候間。常々參り御經聽聞仕り候。今日も參らばやと存ずる。（眞中に出で下に居て）今日は怠り申して候

ワキ「何とて怠られて候ぞ

狂言「忙ら早々參りたくは候へども。叶はぬ用の事にて怠り申して候

ワキ「げにげに尤もにて候。さて方々に尋ねたき事の候

狂言「御尋ねありたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この浦は平家の一門數多果て給ひたる由承り及びて候。中にも通盛小宰相の局の御事。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの所には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程にこの浦に御身を投げ給ひし小宰相の局と申すは。頭の憲方の御女上西門院の上童。宮中一の美人にて御座ありたると申す。又通盛の卿と御夫婦になり給ふ御事は。上西門院北野へ行啓の時やらん。又女院法性寺へ花見の時とも申し候。通盛は中宮の進にて供奉せられしに。小宰相の局を一目御覽じて。文玉章の數を送り給へども。取りあへ給ふ事もなく既に三年になりにけり。あ

【間】

○叶はぬ用—避けがたい用事。

○方々—そなた。

○小宰相の局と申すは—平家物語「小宰相」に「この女房と申すは、頭の刑部卿範方の女、禁中一の美人、名をば小宰相殿とぞ申しける。上西門院（鳥羽院第二の御子）の女房なり、この女房十六と申しし、安元の

春の頃、女院法勝寺へ花見の御幸のありしに、通盛の卿その頃は未だ中宮の亮にて供奉せられたりけるが、見そめし女房なり」云々と委しく記す。
○わが戀は細谷川の―及び女院の御返歌、平家物語等にも見ゆ。
○瀧口の時員―姓は見田。

る時小宰相里より御所へ御參り候道にて、通盛の使參り合ひ、よき折柄と存じ、小宰相の乘り給ひし車の内へ御文を投げ入れしに、小宰相御覽ずれば、通盛の御文にて御座候間、車に置き給ふ樣もなく、そのまゝ御袂に隱し給ひ、御所へ參り給ふが、所こそ多きに女院の御前にしかも文を落し給ふ。女院やがて文を御覽あるに、通盛の御文にて一首の歌の御座候。その歌は、わが戀は細谷川の丸木橋、ふみかへされて濡るゝ袖かなと、かやうに御座候間、忝くも女院の御返歌に、たゞ賴め細谷川の丸木橋、ふみ返しては落ちざらめやはと、かやうに御返歌なされ、通盛の卿と夫婦になり給ふ。それより御契り淺からずありたると申す。又御果てなされたる樣體は、平家は都を落ちて、一の谷に籠り給ふ。源氏は平家を亡ぼさんと大手搦手より押し寄せ、左右より打ち破り、公達數多討死あり。御一門は御舟に召し四國西國へ落ち給ふに、折節波風荒くして、御舟散り散りになり、小宰相の御舟はこの浦に吹きつけ申す。その時通盛の侍に瀧口の時員と申す者、小宰相の御舟に參り、通盛は湊川にて討死なされたると申しければ、小宰相氣も魂も消え給ふが、夜更け人靜まつて西に向ひ、十念ありてこの海へ身を投げ空しくなり給ひて候。御心中痛はしき御事にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が、何と思しめし御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老人と若き女性の來られ御經を聽聞なされ候程に、則ち言葉をかはして候へば、通盛小宰相の局の御事を身の上のやうに申され。二人ともに海に入り給ふと見て姿を見失つて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては通盛夫婦の御亡心現れ、御經御聽聞ありたると存じ候間。通盛夫婦の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。愈ありがたき御經を讀誦し、かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ・ワキヅレ上歌（待謠）「この八軸の誓ひにて。この八軸の誓ひにて。一人も漏らさじの。方便品を讀誦する。（正面に向き合掌して）如我昔所願

【六】

出端の囃子にて、後ジテ平通盛、面中將・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟白淺黃・着附縫箔・長絹・模樣大口・腰帶・扇・太刀の裝束にて出で常座にてワキに合掌、ツレも立ちて出で大小前に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ『如我昔所願

後ジテ『今者已滿足

ワキ『化一切衆生

シテ『皆令入佛道の

地「通盛夫婦。お經に引かれて。立ち歸る波の

ワキこの間に脇座の次に坐す。

シテ『あらありがたの。御法やな（とワキに合掌）

後段

【五】

僧「この法華經八卷の利益を以て、一人も殘らず成佛せしめようと仰せられた方便品の經文を讀誦しよう。――『わが昔の所願の如き……』

（方便品を讀誦する。）

【六】

（後ジテ平通盛、ツレ小宰相局登場）

僧「――『わが昔の所願の如き……』

（讀經すること、通盛もこれに合せて、

僧・通盛『……今は已に滿足せり、一切の衆生を化して、皆佛道に入らしむ……』

（讀誦し、

通盛「通盛夫婦が、このお經の功德に引かれて、娑婆に立ち歸つて來ました」

（僧の方に出て、

通盛「あゝありがたいお經でございます」

【五】

○八軸―法華經。法華經は八卷廿八品であるから。

○誓ひ―誓願。利益。

○方便品―法華經第二品の名。その經文に「若有ㇾ聞ㇾ法者、無ㇾ一不ㇾ成佛ㇾ」

○如我昔所願―以下「皆令入佛道」まで普門品偈文の一節。

【六】

◎如我昔所願―謠本にはないが、演能にはシテが登場してから、ワキが再び謠ひ返すのである。

○通盛夫婦の―佛道の道を通盛にいひかけた。

○立ち歸る波の―娑婆に立ち歸るを波の岸に立ち歸るに、波の荒きをあらありがたにいひかけた。

ワキ「不思議やなさもなまめける御姿の（ヒトツレに向ひ。）波に浮かみて見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

ツレ「名はかりはまだ消え果てぬあだ波の。阿波の鳴門に沈み果てし。小宰相の局の幽靈なり

と謠ひながら脇座に行き下に居る。ワキシテに向ひ、

ワキ「今一人は甲冑を帶し。兵具いみじく見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ「これは生田の森の合戰に於て。名を天下に揚げ。武將たつし譽れを。越前の三位通盛。昔を語らんその爲に。これまで現れ出でたるなり

シテ次の地謠に舞臺の眞中に行きて床几にかゝる。

【七】

地サシ「抑もこの一の谷と申すに前は海。上は嶮しき鵯越。誠に鳥ならでは翔り難く獸も。足を立つべき地にあらず

シテ「唯幾度も大手の陣を心もとなきぞとて

○なまめける―優雅な。

○阿波の鳴門に―波の泡を阿波にいひかけた。

○生田の森―今神戸市下山手、生田神社の境内（生田敦盛・箙參照）。

○武將たつし―武將たりしの促音便。

○越前の三位―通盛は越前守兼中宮亮、從三位であつた。譽れを得といひかけた。

【七】

○一の谷―攝津國武庫郡西須磨。平家物語卷九に「一の谷は北は山、南は海、口は狹くて奧廣し、岸高くして屛風を立てたるに異ならず」

○大手の陣―城の正面。平家物語に「西は一の谷に城廓を構へ、東は生田の森を大手の木戸口とぞ定めける」

僧「これは不思議な、大層優雅なお姿の方が、波に浮かんでお見えになるが、一體どういふ方なのです」

局「情ない名ばかりは、未だ傳へられてゐます、あの阿波の鳴門で海に沈んだ小宰相の局の幽靈です」

僧「今一人の、鎧かぶとを著て、いかめしい武具を帶して居られるのは、どういふ方です」

通盛「自分は生田の森の合戰に、功名を天下に揚げ、武將としての名譽を博した、越前守從三位通盛で、昔の事を語らうと思つて、こゝまで現れて來たのです」

といつて僧の前に出で、

【七】

通盛「さて、この一の谷といふ所は、前は海、上は嶮はしい鵯越で、ほんとに鳥でなくては翔けることが出來ず、獸でも足を立てることも出來ない要害堅固な所ですが、たゞ表口の生田の方の陣が幾度も氣がかりになるので、平家一門の中の重

○宗徒—主として頼みにする人達。

○宵の間も—盃を月に喩へるので、月をいひかけて宵とつゞけた。

○うたたねなりし—假寢して睦しく語り合つたこと。

○項羽高祖の攻めを受け—楚の項羽が漢高祖と戰つて敗れ、遂に最期に迫つた時、愛妾虞氏と帳中に酒を酌んで別れを惜しんだ故事を引いた。「項羽」參照。

○數行虞氏が涙—右の樣を詠んだ、和漢朗詠集橋廣相の詩句「燈暗數行虞氏涙、夜深四面楚歌聲」を引いた。

○能登の守—名は教經。武勇の人で、八島の戰に討死した。年廿六。「碇潜」參照。

地「宗徒の一門さし遣はさる。通盛もその隨一たりしが。忍んでわが陣に歸り（と立ち）。小宰相の局に向ひ

（と下に居てツレと向合ひて居クセ）

地クセ「既に軍。明日にきはまりぬ。痛はしや御身は通盛ならでこの中に。頼むべき人なし。われともかくもなるならば。都に歸り忘れずは。亡き跡弔ひてたび給へ。名殘惜しみのお盃。通盛酌をとり（と扇にてツレに酌をし）。さす盃の宵の間も。うたたねなりし睦言は。たとへば唐土の。項羽高祖の攻めを受け。數行虞氏が涙もこれにはいかでまさるべき。燭火暗うして。月の光にさし向ひ。語り慰む處に

シテ『舍弟の能登の守

地「はや甲冑をよろひつつ。通盛はいづくにぞ。

なものを遣はされることとなつたのです。自分もその第一であつたのだが、内々でわが陣に歸り、小宰相の局に——

「もはや戰も明日が最後となつた。可哀想にそなたは通盛の外、この中で誰一人頼りにするものがないのだ。私が死んでしまつたならば、都に歸り、私の事を忘れなかつたならば、よく回向して下さい」といつて、名殘を惜しんで酒を酌み交はし、自分が小宰相に酌をしたりして、暫くの間假寢して、睦しく語り合つた樣は、かの支那の項羽が高祖に攻められて、虞氏との別れを惜しみ、さめ〴〵と泣いたといふのも、その悲しみはこれ程ではなからうと思はれたのです。かうして燈火の暗い中で、月の光に向ひ合つて、語り合ひ慰め合つてゐましたところ、弟の能登守教經が、もはや甲冑の裝束をして、——

『通盛はどこにお出でです、何故ぐつぐ

など遅なはり給ふぞと。呼ばはりしその聲の、（と居立ちて橋懸を見込みつゝ）あら恥かしや能登の守。わが弟といひながら。他人より猶恥かしや（と面を伏せて、暇申してさらばとて（と立上り）。行くも行かれぬ一の谷の。所から須磨の山の。後髪ぞ引かるる

（と常座に行きて幕の方を見込み、正面に直して、

〔カケリ〕

【八】

シテ「さる程に合戰も半ばなりしかば。但馬の守經政もはや討たれぬと聞ゆ

ワキ『さて薩摩の守忠度の果は如何に

シテ「岡部の六彌太。忠澄と組んで討たれしかば。あつぱれ通盛も名ある侍もがな。討死せんと待つ處に。すはあれを見よよき敵に

（と角の方へ行き、次の謠に合せて仕科。

地「近江の國の住人に。近江の國の住人に。木村

○行くも行かれぬ—一の谷を唯一つの谷の意にとつて綴つた。

○後髪ぞ引かるる—後に心残りのして、引戻さるる感じのする喩へ。須磨の背面の山をうしろの山といふので、うしろ髪とつづけた。

【八】○但馬の守經政—經盛の子、敦盛の兄で、通盛の從兄弟。一の谷の戰に自刄した。「經政」參照。

○薩摩の守忠度—忠盛の子、清盛の末弟で、通盛の叔父。「忠度」「俊成忠度」參照。

○岡部の六彌太—名は忠澄、源義經の士。

○近江の國の—敵に逢ふといひかけた。

○木村の源吾重章—平家物語には近江國の住人佐々木の木村三郎成綱、盛衰記には木村源三成綱、吾妻鏡には源三俊綱とす。

つして居られるのです』と、大きな聲で呼ばれたので、[illegible]恥しいことに、能登守に呼ばれるのは、わが弟とはいひながら、他人よりも却つて恥かしいことだ、『それではお暇します』と小宰相に別れを告げて、一の谷に向ひましたが、とかく足が進みかねて、後髪を引かれる思ひがしたのです」

〔カケリ〕（戰爭の勇ましい樣を示し、

【八】通盛「かうして、合戰が正に酣になつた時、但馬守經政ももはや討死したとの知らせがありました」

僧「では、薩摩守忠度の御最期はどのやうであつたのです」

通盛「忠度は岡部六彌太忠澄と組討ちして討死せられたので、おゝ自分もよい相手が欲しいものだ、組討ちして討死しようと待つてゐると、そら、あちらを見よ、よい敵が來たぞ、近江國の住人木村源五重章が馬に鞭をうつて、驅けて來た。しかし、自分は少しもうろたへない、太刀を拔いて仕度をしてゐたのであるから、

○修羅道―六道の一、常に闘爭を事とする世界。戰死した者はこの世界に墮ちるといふ。
○讀誦の聲を―以下キリの一節〔葵上〕と同文。
○忍辱慈悲の姿―衆生濟度の爲に、侮辱惱害を忍受する慈悲深い姿。
○菩薩―菩提薩埵 Bodhisattva の略。如來の次位にあるもの。
○來迎―娑婆に來現して極樂へ迎へとる。
○得脱―生死の苦を脱し得ること。

の源五重章が鞭を上げて驅け來る。通盛少しも騒がず。拔き設けたる太刀なれば（太刀を拔き）。兜の眞向ちやうと打ち返す太刀にてさし違へ共に修羅道の苦を受くる（下に居て太刀をすて）。憐みを垂れ給ひ（ワキを見込みて）、よく弔ひてたび給へ（と平坐）

次の念に立ち心持を改めて舞ふ。

地キリ『讀誦の聲を聞く時は。讀誦の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。菩薩もここに來迎す。成佛得脱の。身となり行くぞありがたき身となり行くぞありがたき

と常座にて合掌、直して留拍子を踏む。

敵を兜の眞向からちやうと打ち下し、返す刀で敵と刺し違へて死に、二人とも修羅道に墮ちて、苦患を受けることとなつたのです。どうぞあはれと思つて、御回向下さい」

といひ、やがて讀經回向によつて成佛した心にて、

通盛「御經讀誦の聲を聞く時は、惡鬼も心を和らげ、菩薩はまた衆生濟度の爲には、すべての侮辱をもお忍びになる慈悲深いお姿で御來現になつて極樂へお迎へ下され、生死の苦を免れて、成佛することの出來るやうになつたのは、ほんとにありがたいことです」

と感謝して消え失せる態にて退場。

〔考異〕

諸流（左流）

【二】シテ「人likeごとあれ……ッと程なく暮るる日數かな（春喜ナシ）

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「これは……果て給ひたる所なれば（光にて候へは）……

三山　寶

解說

【能柄】四番目　複式夢幻能

【人物】**ワキ**　良忍上人、**狂言**　所の者、**前シテ**　里女（桂子の靈）、**後ツレ**　櫻子の靈、**後シテ**　桂子の靈

【所】大和國　耳成山

【時】春（三月）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記に寬正六年三月九日演能のことが見えてゐる。

【梗概】大原の良忍上人が融通念佛を弘めて、大和國に着き、三山の一である耳成山へ行くと、一人の里女が來て、三山の謂れ――香久山の男かしはでの公成が、耳成山の桂子と畝傍山の櫻子と、二道かけて通つてゐたが、櫻子の方に心を移してしまつたので、桂子はこれを恨んで、耳成の池に沈んでしまつたといふ物語を聞かせ「桂子を名帳に入れて下さい」と賴んで、池の水底に沈んでしまふ。良忍

た桂子の跡を弔つてゐると、櫻子の霊がもの狂はしい様で現れ、因果の花につき巣る嵐をのけて下さいと懺悔の様を示す。又二人、また桂子の霊が現はれて、うはなり打ちをしたが、やがて恨みを晴らして、共に成佛を祈つた。

【出典】萬葉集巻一、天智天皇の御製

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍競伎神代従如此爾有良之古昔母然爾有許曾虚蟬毛嬬乎相挌良思吉

を骨子とし、同集巻十六、有二由緒一歌に、

昔者有二娘子一、字曰二櫻兒一也、于レ時有二二壯士一、共誂二此娘一、而捐レ生格競、貪レ死相敵、於レ是娘子歔欷曰、従レ古来今、未レ聞未レ見、一女之身、往適二二門一矣、方今壯士之意、有レ難二和平一、不レ如二妾死、相害永息一、爾乃尋入二林中一、懸レ樹經死、其兩壯士、不レ敢二哀慟一、血泣漣レ襟、各陳二心緒一、作レ歌二首（歌は略す）

或曰、昔有二三男一、同娉二一女一也、娘子嘆息曰、一女之身、易レ滅如レ露、三雄之志、難レ平如レ石、遂乃彷二徨池上一、沈二沒水底一、於レ時其壯士等、不レ勝二哀頽之至一、各陳二所心一、作歌三首（娘子字曰縵兒也）

無耳之池羊蹄恨之吾妹之來乍潜者水波將涸

を織り交ぜ、これを後妻打ちの世話にして脚色したのである。

【概評】三山妻爭ひの説話を原形のまゝに採らないで、櫻兒、縵兒の傳説と織り交せ、それらの傳説が、二男又は三男が一女を爭ふものであるのを、一男が二女に通ふことに作りかへ、更に室町時代の世相に合はせて、後妻打ちのことを思ひついたのは、誠に面白い構想である。前ジテが「これを知りたる人は少かるべし」といつてゐるやうに、作者の創案した耳新しい説話であるから、前段の叙述がすべて生氣に満ちて居り、後段に、まづ後ヅレ櫻子が怨恨の祟りを受けて、物狂はしく僧の助けを乞ふのも、「通小町」の小町などとは別趣な優しい趣があり、その後を追つて、後ジテ桂子が後妻打ちをするのも、「葵上」のやうな凄惨な感じがなくてよい。むしろ亡霊の物狂のさまが、「松風」に似た優雅な感じさへ與へるのであるが、たゞ修辭が「松風」などより數等劣つてゐるのが惜しい。

【一】　前段

舞臺は初め京都で、ワキ良忍上人登場。

【一】次第の囃子にて、ワキ良忍上人、角帽子・着附熨斗目・紺水衣・白大口・腰帯・扇・數珠の装束にて名乗座に出で、囃子座の方に向き、

○法の心も三つの名の―佛法の三心を三の名の山即ち三山にいひかけた。三心は觀無量壽經に見えてゐる至誠心、深心、廻向發願心をいふ。三山のことは後に見ゆ。
○大和路―山をいひかけた
○大原―山城國愛宕郡。良忍の創建した魚山來迎院がある。
○良忍聖―聖は僧の意。良忍は尾張國富田の人、延暦寺に學び、來迎院を建て、融通念佛宗を開いた。天承二年寂、年六十一。
○融通念佛―良忍の開宗。念佛の融通を說き、一人の稱名を以て衆人の功とし、衆人の念佛を以て一人の功とし、一人成佛すれば衆人も成佛すといふ。
○深草山―山城國紀伊郡。
○木幡の關―深草山の東面で、往古この峠に關所があつた。
○宇治の中宿―宇治は山城國久世郡にあり、中宿は京都から奈良へ行く途中の宿の意。
○井手の里―山城國綴喜郡。以上、京から奈良へ行く順路である。
○足引の―山、大和の枕詞。

ワキ次第「法の心も三つの名の。法の心も三つの名の。大和路いざや尋ねん

地取に正面に向き、

ワキ「これは大原の良忍聖にて候。われ融通念佛を國土に弘め候。この度は大和路にかかり。念佛をも弘めばやと思ひ候

ワキ道行「住み馴れし大原の里を立ち出でて。大原の里を立ち出でて。猶行く末は深草山木幡の關をうち過ぎて。宇治の中宿井手の里。過ぐればこれぞ足引の。大和の國に着きにけり大和の國に着きにけり

「宇治の中宿井手の里」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸り、道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候間。程なう大和の國に着きて候。この所に三山と申して名所のある由承り及びて候。このあたりの人に尋ねばやと思ひ候

良忍「佛の敎への三心と同じやうに、三といふ名のついた三山のある大和の方へ、さあ出かけよう」

と次第に旅の目的地を述べ、

良忍「私は大原の僧良忍です。私は融通念佛宗を諸國に弘めてゐるのですが、今度は大和の方に行つて、名所も見物し、念佛宗をも弘めようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

良忍「これまで住み馴れた大原の里を出て、深草山や木幡の關を過ぎ、宇治で中宿りをし、井手の里をも通つて行くうちに、大和國に着いた」

と旅程を述べてゐるうちに大和へ着いた態で、舞臺は大和國耳成山の邊となる。

良忍「道を急いだので、割合早く大和國に着きました。この所に三山といつて名所があるといふことを聞いてゐるから、この邊の人に尋ねて見ませう」

といつて、狂言所の者に三山の事を聞く、耳成山

○三山—次に出る畝傍山、香久山、耳成山をいふ。

【二】

といひて橋懸に向ひ、

ワキ「所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「これは大原の良忍と申す聖にて候が。融通念佛を弘めこれまで参りて候。この所は三山と申して名所の由承り及びて候。教へて給はり候へ

狂言「さん候これより西に見えたるは畝傍山。こなたなるが耳成山。又南に見えたるは香久山と申し候。心靜かに御一見候へ

ワキ「懇に御教へ祝着申して候。さあらば立ち越え心靜かに一見申さうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は狂言座にくつろぎ、ワキは脇座に行きかゝる。

【二】

シテ里女、面増・鬘・鬘帯・着附摺箔・唐織着流・扇の装束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなうあれなる御僧（おんそう）。なにと御尋（おんたづ）ね

[illegible]

【三】

シテ桂子の霊、里女の姿を装うて登場。

女「もうしもし、そこへお出でになるお僧

○萬葉第一に出だされたる―解說に揭げた萬葉集第一卷の三山妻爭ひの歌を指す
○耳なし山―耳梨山、耳無山などと書き、今耳成山と書く。大和國磯城郡耳成村木原の東にあり、畝傍、香久山と鼎立す。
○みなし山―身無しとの意から出た名であると、後にいつてゐる。
○妄執―この世の事に執着する迷ひの心。
○閻浮―須彌四洲の一、南閻浮提の略。轉じてこの世。
○萬葉集―奈良朝の末に撰ばれた現存最古の歌集。「草子洗小町」參照。
○香久山は夫―萬葉集三山の解說について、香久山を女とする說、畝傍山を女とする說などあるが、いづれにしても二男が一女を爭ふ說話と解されてゐるのを、本曲では一男が二女を持つ意に解した。恐らく作者が殊更曲解したのであらう。
○香久山―高山、香山、香具山などと書き、今香久山と書く。耳成山と同郡、香久村にある。
○畝傍山―畝火山とも書く高市郡白樫村にある。

候とも。これを知りたる人は少かるべし。總じてこの山は。萬葉第一に出だされたる三山の一つなり。耳なし山ともみなし山とも。語るによりて妄執の。由ある昔の物語。『閻浮にかへる里人の。みみなし山の池水に。沈みし人の昔語。よくよく問はせ給へとよ

ワキ脇座に立ちて、

ワキ「げにげに萬葉集にいはく。大和の國に三山あり。香久山は夫畝傍耳成山は女なり。これによつて三つに爭ふと書けり。この謂れをも委しく御物語り候へ

シテこの間に舞臺に入り常座に立ち、正面を見て、

シテ「まづ南に見えたるは香久山。（幕の方に向き）西に見えたるは畝傍山。この耳成までは三つの山。『一男二女の山ともいへり

ワキ「さて香久山を夫とは。何しに定め置きける

さま（と良忍を呼掛け）どんなにお尋ねになつても、この事を知つてゐる人は少うございませう。この山は萬葉集の卷一に詠まれてゐます三山の一で、耳成山とも身無山とも申します。……このやうな由緒の深い昔話を申しますと、執着の迷ひ心が出て來て、この世に歸りたくなるのですが、昔この耳成山の池に身を投げて死んだ人の話を、よくお尋ねなさいませ」

良忍「いかにも、萬葉集に大和國三山の事が詠まれてゐます。香久山は夫で、畝傍山と耳成山とは女で、それでこの三つが爭つたと書かれてゐます。この話を委しく聞かせて下さい」

女「まづ南に見えるのが香久山、西に見えるのが畝傍山で、この耳成山と合はせて三山で、一男二女の山ともいはれて居ります」

良忍「して、香久山を夫といふのは、どう

○二道かけて―二人の女いづれへも。

○櫻子―萬葉集卷十六、櫻兒の傳説によつて、この名を作つた。

○桂子―同じく鬘兒の傳説によつて作つた。

○花や綠―花は櫻子、綠は桂子。

○一つ世に―同じ世に。二道、三山と數字を重ねた。

○久方の―天の枕詞。聞くだにも久しといひかけた。

○わが耳成や畝傍山―わが身や憂しといひかけた。

ぞ

シテ「それはあの香久山に住みける人。畝傍耳成二つの里に。二人の女に契りをこめて。二道かけて通ひしなり

ワキ『さて畝傍山の女の名をば

シテ「櫻子と聞えし色好み

ワキ『耳成山の女の名をば

シテ「桂子といはれし優女なり

ワキ『さて爭ひは

シテ『花や綠

ワキ『契りの色は

シテ『隔てもなく

地上歌『一つ世に二道かけて三山の。二道かけて三山の。名を聞くだにも久方の。天の香久山いつしかに。語るも餘所ならず。わが耳成や畝傍

して定められたものです」

女「それは、あの香久山に住んでゐた男が、畝傍山と耳成山と二つの里に住んでゐた二人の女と契りを結んで、兩方へ通つてゐたのでございます」

良忍「して、畝傍山の女の名は何といつたのです」

女「櫻子といつた美しい女でございました」

良忍「耳成山の女の名は……」

女「桂子といつた、これも優しい女でございました」

良忍「二人の女の美しさの優劣は……」

女「櫻子を花に喩へれば、桂子を綠に喩へたい、いづれ劣らぬ美しさでございました」

良忍「男との愛の深さは……」

女「兩方變りもなくて、同じ世に兩方の女に通つて、三山といはれてゐました――それは、もう隨分遠い昔話となつたのですが、あゝかうして香久山のお話をしてゐるうちに、いつしか餘所事のやうに思はれなくなつて來ました――ところが、わが耳成山の方が畝傍山と競爭に負け

○桂の身の—桂の實といひかけた。

【三】

○ならの葉や—世も古になるを楢にいひかけ、楢の縁で柏を呼び出した。
○かしはでの公成—謠曲作者の假作であらう。
○玉手箱—箱の縁語蓋にいひかけて「二道の序とした。
○ささがにの—ささがには蜘蛛。蜘蛛の絲にいひかけて「いと」の枕詞とした。
○月の夜ませ—夜ませは隔夜。「月の」は夜を出す料としたのに過ぎない。
○采女の衣—里の縁語畦にいひかけ、畝傍に通はせて采女といひ、衣の花色から花を呼び起した。采女は天子の陪膳に仕へる女官。
○花よ月よ—櫻子と桂子とをいふ。
○花心—移り易い浮氣な心

山。爭ひかねて池水に。捨てし桂の身のはてを
弔ひ給へ上人よ弔ひ給へ上人よ

ワキ地上歌の初めに下に居り、

【三】

ワキ「猶々三山の謂れ委しく御物語り候へ

シテ眞中に行きて下に居り、

地クリ『抑も大和の國三山の物語。世もいにしへ
にならの葉や。かしはでの公成といふ人あり
シテサシ」又その頃桂子櫻子とて。二人の優女あり
しに
地『かのかしはでの公成に。契りをこめて玉手箱。
二道かくるささがにの。いとあさからぬ思ひ夫
の。月の夜ませに行き通ふ住家は畝傍耳成山
シテ『里も二つの采女の衣
地『花よ月よと。爭ひしに
シテ『男うつろふ花心。かの櫻子になびき移りて。
耳成の里へは來ざりけり

て、その桂子は池に身を投げて死んでしまつたのでございます。どうぞ、お上人様、その跡を御回向下さいませ」

【三】

良忍「三山の話をもつと委しく聞かせて下さい」

里女は良忍の前に坐つて、

女「この大和國の三山の物語と申しますものは、もう古い昔の事なのですが、昔かしはでの公成といふ人がありました。またその頃、桂子・櫻子といふ美しい女がありまして、このかしはでの公成と契りを結びまして、公成は二人の女兩方へ通つて、兩方とも深い愛を注ぎ、畝傍山と耳成山と、二人の女の住家へ隔夜毎に通つて、櫻子を花に喩へれば、桂子を月に擬へ、兩方優劣なく對立してゐたのでございますが、男心といふものは浮氣な變り易いもので、公成の心はかの櫻子の方に移り靡いてしまつて、耳成の里へは來なくなつてしまつたのでございます。それで、桂子は待ちわびて『さては私の方には心が變つてしまつたのだ、すつかり櫻子の方に心が移つてしまつて、私の方は全く忘れてしまつて、もはや來ては

○變る世　世は夫婦仲の意世を夜にいひかけて、夢を呼び起した。
○忘れ忍ぶの―こなたを忘るを忘草忍草にいひかけた。
○かれがれに―草の枯れるを通ひの離れるにいひかけた。
○あり果つべし―添ひ遂げられよう。
○時に從ふ世の習ひ―諺。
○花なき桂子の―桂の木には美しい花が咲かないから
○秋にならんも―飽き果てられるのもといふ意を含めた。
○起きもせず寢もせで夜半をあかしては―古今集在原業平の歌（伊勢物語にも見ゆ）。下句「春のものとてながめ暮らしつ」
○入相もつくづくと―入相の鐘も撞くといひかけた。

地『その時桂子恨みわび。さてはわれには變る世の。夢もしばしの櫻子にうつり變りてこなたをば

シテ『忘れ忍ぶの軒の草

地『はやかれがれになりぬるぞや

（居クセ）

地クセ『桂子思ふやう。もとよりも頼まれぬ。二道なればそのままにあり果つべしと思ひきや。その上何事も。時に從ふ世の習ひ。殊更春の頃なれば。盛りなる櫻子にうつる人をば恨むまじわれは花なき桂子の。身を知れば春ながら。秋にならんもことわりや。さるほどに起きもせず。寢もせで夜半をあかしては。春のものとて長雨降る。夕暮に立ち出でて。入相もつくづくと。南は香久山や。西は畝傍の山に咲く。櫻子の里見

下さらないのだ』と恨みました。そして桂子が心のうちに『もと〱二人の女に通ふやうな人は頼みにならないものので、このまゝ添ひ遂げられようとは思はなかつたのだ。殊に、世の中のことは何でも、時運に從ふのが普通だ。丁度今は春の季節なのだから、花盛りの櫻子に心の移るのも致し方のないことだ。ええ、そのやうな人を恨むまい。私はどうせ美しい花の咲くことのない桂子で、かうした身の上を思へば、外のものにとつては美しい春でも、私には秋同様の悲しい境遇となつても、是非のないことだ』と、かう思つたのでございます。そして、捨てられた悲しさに、晝もはつきりと起きてゐることも出來なければ、夜もおちおち眠ることが出來ず、折柄春のことと て、長雨の降りつゞいてゐる夕暮に、家を出て、入相の鐘の鳴るのを聞くにつけても『あゝあの南の方が香久山だ、西の方が畝傍山だ。なるほどあの櫻子の住んでゐる里の方を見ると、一面に花が咲いてゐて、よそ目にも花やかな、あゝ羨ましいことだ。生きてゐるうちこそあれ、今日にも死んでしまつたならば、もう明日か

○よそ目も―よそから見た目にも。
○生きてよも明日まで人のつらからじ―下句「この夕暮をとへばとへかし」。新古今集式子内親王の御歌を原意とは變へて引いた。
○耳成山の池水の―解説に掲げた鬘兒を詠んだ萬葉歌に據つて、から作つた。
○名も月の桂の―月世界には桂の大木があるといふ傳説に據つた。「羽衣」參照。
○濡衣―こゝでは寃罪の意はなく、たゞ濡れた衣の意で、身の序とした。
○みなし山―身無し山。

【四】
○名帳―融通念佛宗に入つた證として、その名字を記入する名簿。これを入會といひ、入會すれば成佛すると信じられてゐた。
○十念―彌陀の名號を十度稱へること。高僧に十念を授けられれば、成佛すると信じられてゐる。
○さのみは問ひがたし―この上强ひてその名を尋ねることは出來ない。

れば。よそ目も花やかに。羨ましくぞ思ゆる

シテ『生きてよも明日まで人のつらからじ

地『この夕ぐれを限りぞと。思ひ定めて耳成山の池水の。淵に臨みて影うつる名も月の桂の緑の髪もさながらに。池の玉藻の濡衣。身を投げ空しくなりはてて。この世には早みなし山。その名をあはれみて跡弔はせ給へや

【四】

シテ「いかに申すべき事の候。妾をも名帳に入れて給はり候へ

ワキ「易き間の事。さて御名を承り候べし

シテ「名をば桂子と遊ばし候へ

ワキ「なに桂子と候や

シテ「よしよし名をば申すまじ。唯十念を授け給へ

ワキ「げにげにさのみは問ひがたしと。掌を合は

ら人も辛くは當るまい。さうだ、今日の夕暮を最後に、死んでしまひませう』と決心して、耳成山の池の傍に行き、水に映る、わが名に緣のある月を見ながらも、緑のやうな黑髮もそのまゝに、池の底に沈んでしまつて、もはやこの世にない、身無し山となつてしまつたのでございます。どうぞその名をあはれんで、御回向下さいませ」

（以上物語を終り、）

【四】

女「もうしお願ひでございます。私も名帳にお入れ下さいませ」

良忍「お易いことです、では、お名前を伺ひませう」

女「名を桂子とお書き下さいませ」

良忍「えゝ何ですと、桂子と仰しやるのですか」

女「いえもう、名前は申しますまい。たゞ十念をお授け下さいませ」

良忍「なるほど、名を明かすのがおいやなら、强ひてお尋ねしますまい」

と合掌して、

〔若我成佛十方世界〕観無量壽經の句。但し「若我成佛」は原文に「設我得佛」とあるのを善導が釋した語である。この句「教盛」等に見ゆ。
〔いはじや聞かじ〕自分も言はない、僧の詞も聞かないといつて、耳無とつゞけた。
〔池水の〕「生けゐ」の音を重ねた。

せて南無阿彌陀佛（とシテに合掌）
シテ「南無阿彌陀佛（とワキに向き合掌）
シテ ワキ「若我成佛十方世界。念佛衆生攝取不捨
地、これまでなりや名帳の（手を下し）名は桂子と
書き給へ。これより外にわが名をば（と立ち）幾度
問はせ給ふとも、いはじや聞かじ耳なしの、生
ける者にはあらずとて池水の底に入りにけり
池水の底に入りにけり

と常座にてひらき、静かに中入。

良忍「南無阿彌陀佛」
女「南無阿彌陀佛」（と良忍に合掌）
良忍 女「若しわれ成佛せば、十方世界の念佛する衆生を攝取して捨てず」（と讀經し）
女「それではお記帳しましよう、名帳には名前を桂子とお書き下さいませ。もうこれ以外には、私の名は幾度お尋ねになりましても申しますまい、お僧さまの仰せも承りますまい、耳無しのもので、この世の者ではございません」
といつて、池の水底に入つてしまつた。

【問】　狂言立ち名乘座に出でて、

狂言「最前の御僧の。三山を御尋ね候程に。教へ申し候。未だあれに御座候か參つて見申さばやと存ずる。（ワキに向ひ）御僧は未だこれに御座候か
ワキ「未だ逗留申して候。まづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候
狂言「畏つて候。（眞中に出で下に居てさて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ
ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この三山につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの所に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語り申さうずるにて候

○春過ぎて夏來にけらし白妙の衣ほすてふ天の香久山―持統天皇御製。但し萬葉集巻一には第二句「夏きたるらし」第四句「衣ほしたり」とある。間語の歌は新古今集によつたのである。

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程にこの大和の國に於て。三山と申すは隱れもなき御事にて候。これなるは香久山と申して隱れもなき名山にて候。卽ち萬葉集にも。春過ぎて夏來にけらし白妙の。衣ほすてふ天の香久山と。かやうに御座候。古この山に。公成と申す人住み給ひ。又畝傍山に櫻子と申す女の住み給ひ。耳成山に桂子と申す女の御座候。公成始めの程は桂子と御契り淺からず御座候が。何とか思し召しけん。畝傍山の櫻子の方へ御出であり。耳成山へは御音づれもなく候間。女性のはかなさは。捨てられし事を深く歎き。命あつても詮なしとて。身を投げ空しくなり給ふ。公成聞き給ひ。大に驚き。わが心故に桂子を失ひたる事是非なしとて。一首の歌に。耳なしの池も恨めし吾妹子が。きつゝなれにし水はかれなんと。かやうに詠み給ひ。それより櫻子の方へも御通ひなく。愛念を止め給ふと承り候。それよりこの三山を一男二女の山とも申し候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に女性一人來られ。三山の子細唯今御物語りの如く懇に語り。桂子の跡とうてたべと申され候程に。如何なる人ぞと尋ねて候へば。何とやらん身の上のやうに申され。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては身を投げ給ひし桂子の幽靈現れ出で。御詞を交はし給ふと存じ候間。桂子の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。かの跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

【五】

○恨みも——衣の縁裏をいひかけた。

○有明の——こゝに有りといひかけ、句を隔てて月を出す料とした。

【六】

○耳成の山風——桂子の恨みを受けてとの意を含めてゐる。

○因果の花につきたたる——因果は桂子に恨みを與へた惡因の報い。花を櫻子に、嵐を桂子に喩へ「つき」を月にいひかけた。

【七】

といひて狂言は引く。

【五】

ツキ上歌 待謡「耳成の池の玉藻の濡衣。池の玉藻の濡衣恨みもここに有明のその名も月の桂子の。亡き跡いざや弔はん亡き跡いざや弔はん

【六】

一聲の囃子にて、後ヅレ櫻子、面小面・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織脱掛の裝束にて櫻の枝を持ちて出で、橋懸一の松に立ち、

後ヅレ「なう上人。この耳成の山風に。吹き誘はれて來りたり。これこれ助けたび給へ。われはあの畝傍山に住む。櫻子といはれし女なるが。風の狂ずる心亂れに。「かやうに狂ひさむらふなり。さりとては上人よ（と舞臺に入り）。因果の花につきたたる。嵐をのけてたび給へ（と常座にてツキに向く）

【七】

後ジテ桂子、面増髪・鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織脱掛・扇の裝束にて桂の枝を持ちて、橋懸一の松に出で、

後ジテ「あらうらやましの櫻子や。又花の春にな

【五】

後段

良忠「耳成の池に沈んで恨みを留めた桂子、この有明の月と緣のある桂子の亡靈を、さあ回向しよう

といつて讀經回向する。

【六】

後ヅレ櫻子の靈、物狂はしい態で登場。

櫻子「もうしお上人様、この耳成山の恨みを含んだ山風に吹き誘はれて參りました。もうしお上人様、どうぞお助け下さいませ。私はあの畝傍山に住んで、櫻子といはれた女でございますが、風が吹き狂ふにつけて、私の心も亂れて、このやうに狂つてゐるのでございます。どうかお上人樣、恨みを受けたこの花の私につき祟る、あの桂子の嵐を追ひのけて下さいませ」

【七】

後ジテ桂子の靈、恨みを含んで登場。

桂子「あゝあの櫻子が羨ましい。また花の

○見よかし顏―これ見よがしな、得意な樣子。
○花のよそ目―花をよそ目に見るも。
○光散る―月光の輝き散るさまが花のやうであるとの意。
○月の桂も花ぞかし―後撰集紀貫之の歌に「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花やさくらん」
○盛りとて光を埋む―花盛りには月光をも埋め隱すばかりの勢ひである。
○などや桂を―櫻も青葉の頃になれば、桂と變りがないのに、何故わけ隔てをするのであらう。
○有明の―妄執は有りを有明に、有明の月を盡きぬにいひかけた。
○懺悔の姿―罪を懺悔する爲にもとの姿を現す。
○理過ぐる―櫻子の花やかさが度を過ぎてゐる。
○時ある春の花―咲くべき春の時節に會つた花。

るよなう。忘れて年を經しものを。見よかし顏に櫻子の。花のよそ目もねたましや（とツレへ向き）

シテ一聲「光散る。月の桂も花ぞかし

地「たれ櫻子に。うつるらん

〔カケリ〕

シテ「盛りとて。光を埋む花心

地「爭ひかねて桂子が

シテ「恨みぞまさる。櫻子の

地「花も散りなば青葉ぞかし

と舞臺に入り常座に立ち、ツレは大小前に行き、

シテ「などや桂を隔つらん

ツレ「恥かしやなほ妄執は有明の。つきぬ恨みを御前にて。懺悔の姿を現すなり

シテ「あれ御覽ぜよ櫻子の（とワキへ向き）。よそ目に餘る花心。理過ぐる氣色かな

ツレ「もとより時ある春の花。咲くは僻事なきも

咲く春の時節となつたのだな。永い年月忘れてゐたのだが、これ見よがしな、得意顏な、櫻子の美しい姿を見ては、よそ目にも嫉ましいことだ。……なあに、櫻ばかりが花ではないのだ。月の桂だとて、この光の照り散るさまは花なのだ、それだのに、誰が櫻子に心を移したのであらう」

〔カケリ〕

に嫉妬に狂ふ樣を演じ、

桂子「今は花の眞盛りとて、月の光をも埋むばかりの勢ひだ。この盛んな勢ひに對抗しかねて、この桂子の恨みは愈〻まさるばかりだ。いえ、櫻子――櫻といつたところで、花が散つてしまへば、青葉ばかりとなるのだ。それだのに、どうしてこの桂とわけ隔てをするのであらう」

櫻子「おゝ恥かしい、私はまだこの世に執着が殘つて、恨みが盡きないので、お上人樣の前で、罪を懺悔する爲に、このやうな姿をお目にかけるのです」

桂子「まあ、あれを御覽なさいませ、櫻子の、人目にも餘るやうな、あまりといへば度を越えた美しさ」

櫻子「今は丁度花咲く春の季節だから、咲

○花もの言はず—和漢朗詠集菅原文時の句「誰謂花不ㇾ語、輕漾激兮影動ㇾ唇」を引いた。
○春いくばくの身—春の季節、暫くの間花咲く身。
○花のうはなり—うはなりは後妻。後妻の櫻子といふ意。室町時代には「うはなり打ち」といつて、前妻が人を連れて後妻を打つことが行はれた。「葵上」參照。
○立枝—立木の枝

のを
シテ「花もの言はずと聞きつるに。など言の葉を聞かすらん
ツレ「春いくばくの身にしあれば。影唇を動かすなり
シテ『さて花は散りても
ツレ『またも咲かん
シテ『春は年々
ツレ『頃は
シテ『彌生に
ツレ次の地謡に笛座前に行きて坐し、シテ謡に合せて舞ふ。
地『また花の咲くぞや。また花の咲くぞや。見ればよそ目もねたましき。花のうはなり打たんとて。桂の立枝を折り持ちて。耳成の山風。松風春風も。吹きよせて吹きよせて。雪と散れ櫻子。雲

くべき花の咲くのに、何の不都合もないぢやありませんか」
桂子「花といふものは、物を言はないものだと聞いてゐたのに、どうしてそんな口をきくのです」
櫻子「花の咲く春の季節は、ほんの暫くのことだから、それで唇を動かすのです」
桂子「でも、花は散つても……」
櫻子「それは、また來年の春には咲きもしませう」
桂子「そして、その春は毎年來るのだもの」
櫻子「えい、その季節には……」
桂子「三月といへば、また花が咲くのだ。また花が咲くのだ。この美しい花を見れば、よそ目にも嫉ましいことだ。さあ後妻打ちをしてやらう」
と、桂の立木の枝を折つて持つて、耳成山の山風ばかりでなく、松風や一體の春風までも吹き寄せて、
桂子「さあ櫻子、雪のやうに散つてしまへ、雲のやうに飛んでしまへ。花は根に歸る

となれ櫻子。花は根に歸れ、われも人知れずねたさもねたしうはなりを。うち散らしうち散らす。中に打てども去らぬは家の。犬櫻花に伏して吠え叫び惱み亂るる花心、畝傍の病となりし。因果の焔の緋櫻子、さて懲りやさて懲りや、あらよそめをかしや。因果の報いはこれまでなり。花の春一時の。恨みを晴れてすみやかに、有明櫻光りそふ、月の桂子もろともに。西に生まるる一聲の。御法を受くるなり跡弔ひてたび給へ

「恨みを晴れて」とツレも立ちて大小前に出で、「跡弔ひて」とワキに合掌して留む。

のがあたりまへだ。私も人知れず嫉ましさに惱んでゐるのだ。このやうに後妻打ちをして打ち散らすのに、いくら打つても立ち去らないで、家の犬のやうに吠え叫んでゐるところを見ると、そなたは犬櫻花か。おゝ、そのやうに惱み亂れて、病氣のやうになつて、因果の焔の火に燃えてゐるところを見ると、そなたは緋櫻か。さあ懲りよ、さあ懲りよ。その苦しむさまがよそ目にもをかしいわ。これで因果の報いを見せてやつた。花咲く春のやうな、一時の恨みを晴らした上は、早く櫻子もこの桂子も、この有明月の傾く西方淨土に生まれるやうに、お上人樣の念佛をお受けしよう。どうぞ御回向下さいませ」

（こいつ一消え失せる態にて退場。）

〇花は根に歸れ—千載集崇徳院の御製「花は根に鳥は古巣に歸るなり春のとまりを知る人ぞなき」に據つた。
〇家の犬櫻—家の犬を犬櫻にいひかけた。犬櫻は櫻屬の喬木で花は白く小さい。
〇畝傍の病—畝傍の山を病にいひかけた。
〇緋櫻—赤い花の櫻。焔の火といひかけた。
〇有明櫻—櫻の一名か。他に用例が見當らない。
〇西に生まるる—西方極樂淨土に生まれる。
〇一聲の御法—一聲の念佛

〔考　異〕

古謠本（觀世流元祿八年本）

【一】ワキ「これは……念佛をも弘（元勸）めばやと……道行住み馴れし……木幡の關をうち過ぎて（元今朝越て）……　【二】シテ「なうなう……語るにより（元付）て……　【三】ワキ「猶々……御物語り候へ（元ナシ）……地「その時……櫻子にうつり變り（元心を染）て……

【四】ワキ「易き間の……承り候べし（元廻向申候へ）きて）シテ「名をば（元ナシ）桂子と……ワキ「なに桂子と（元申）候や　シテ「よしよし名をば申すまじ唯（元實忘れて候。先）……　【五】ワキ上歌「耳成の池の……いざや弔はん（元ナシ）　【六】後ヅレ「なう上人……畝傍山に住む

（元ナシ）櫻子といはれ（元聞えし）し女……心亂れに（元地して）……　【七】後ジテ　あら美まし……花の春（元春の花）に……忘れて年を經しものを（元ナシ）……　地　又花の咲く……　一聲の法を受くる（元たのむ）なり……

水無瀨　喜

解說

【能柄】四番目　劇的夢幻能

【人物】**ワキ**　僧（爲世）、**子方**　爲世の子（姉）、**同**　同（弟）、**シテ**　爲世の妻の靈

【所】攝津國　水無瀨

【時】鎌倉中期　秋（九月）

【異稱】貞享本には〔爲世〕とある。

【作者】作者演能等に關する古記錄は見當らない。喜多流の現行曲は原作を甚しく省略したものらしい。考異參照。

【梗概】攝津國水無瀨の爲世は出家して高野山に上つてゐたが、故鄕の事がなつかしくなつて、里に歸ると、亡き母に手向ける爲に水と花を持つて出て來た姉と弟との二人の子が、父とは知らないで、これをわが家に請じ入れ、母の爲に囘向を乞うた。爲世はわが子のいぢらしさに、幾度か親子の名乘りをしようと思つたが、煩惱を斷つて、打明けず、たゞ餘所事のやうにして讀經してゐると、妻の亡靈が現れ出て、

父の無情を恨み、親子を引き合せた。そして自分もわが子の回向によつて成佛した。

【出典】 藤原定家の曾孫、爲氏の孫に爲世といふ歌人があるが、果してこの人にかうした逸話があつたものか、詳かにし難い。

【概評】 父が出家した爲に起つた母子の悲話を主題としたもので、父に捨てられ、母を失つた孤兒の、母を慕ひ父を思ふ情に、可憐な涙を注がしめるのであるが、これを同樣の材料を取扱つた廢曲〔刈萱〕(作者不明)に比べると、〔刈萱〕は一度高野山に入るや、足一歩もその外に出ないのに、これは道心が弱くて、故鄕もなつかしう立ち歸つて居り、彼の母子は勞苦を意としないで、父の跡を尋ねてゐるのに、これはさうした積極的な愛慕の情に走つてゐない、全體として力の弱い曲柄となつてゐるのである。殊に原作に近いと思はれる貞享本の〔爲世〕には、父子相會して、綿々として盡きない情愛を詳しく描いてゐるのに反し、現行曲ではこれを惜しげもなく省略してしまつたので、冗漫の弊を離れて簡潔にはなつたが、情理の盡されない憾みが多いのである。

【一】 舞臺は初め高野山の體で、ワキ僧(爲世)登場。

僧「私は高野山から出て來た僧です。私はもとは攝津國水無瀨の里に住んで、爲世といはれた者ですが、ある事情があつて、髮を剃り、このやうな出家姿となつたのです。しかし段々故鄕の事もなつかしく思はれて來たので、これから急いで水無瀨の里へ行かうと思ひ立つたのです」

この見物人に自己紹介をし、やがて水無瀨に着いた態で、舞臺は攝津國水無瀨となり、

僧「おゝもはや故鄕の水無瀨の里に着きました。暫くこの所で休みませう」

といつて休息してゐる態。

【一】 名乘笛にて、ワキ僧(爲世)、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは高野山より出でたる僧にて候。われ古は津の國水無瀨の里に、爲世といはれし者にて候が。さる子細候ひて元結切り。かやうの姿と罷りなりて候。次第に故鄕もなつかしう候程に。唯今思ひ立ち水無瀨の里へと急ぎ候。これははや古里水無瀨の里に着きて候。この所に暫く休まばやと思ひ候

【一】

○高野山—紀伊國伊都郡。山上に弘仁七年弘法大師が奏請して創建した金剛峯寺がある。眞言密教の道場。

○水無瀨—攝津國三島郡、今の島本村大字廣瀨。

○爲世—藤原定家の曾孫、爲氏の子の爲相か。この爲相は新後撰集・續千載集を撰び、嘉曆四年剃髮して明釋と號し、延元三年八十九歲で薨じた。

○元結切り—男髮を剃り出家して。

【三】
○花散りし—以下「森の露」まで、消えての序。
○柞の森—山城國相樂郡祝園村にある。柞に母を含めて綴つたのである。
○消えても殘る命—母が死んでも、子の命の今まで生き殘つてゐるのが不思議だといふ意。
○後の世の爲世—後の世即ち來世に極樂往生する爲に出家すといふのを爲世にいひかけた。
○捨小舟の—母をも我等をも捨ててといふを捨小舟にいひかけ、舟の縁で水無瀬の川とつゞけた。捨小舟は、沖にうち捨てられた小舟。
○水無瀬の川—大澤山及び尺代山から出て、水無瀬で淀川に合する川。
○小夜千鳥—夜鳴く千鳥。「共音に鳴く」の序。
○共音に泣きて—母子姉弟一緒に泣く。
○花水を—母の亡靈に花や水を供へるのである。
○人は歸らで—父が家に歸らないで。
○見る夢の—父の事を夢に見るのである。
○別れ留まる—夢に逢ふ父

【三】
といひて脇座に行き下に居る。
一聲の囃子にて、子方姉・鬘・鬘帶・襟赤・着附箔・唐織着流の裝束、子方弟、襟赤・着附箔・稚兒袴・扇の裝束にて橋懸に出で向合ひ、
姉弟一聲『花散りし。嵐も寒き秋風に。もろき柞の森の露。消えても殘る。命かな
と謠ひて舞臺に入り、
姉『これは津の國水無瀬の里に。爲世の卿といはれし人の。二人の子にて候なり
姉弟『さてもわが父後の世の。爲世は遁世し給ひて。母もわれらも捨小舟の。水無瀬の川の小夜千鳥。共音に鳴きて過せしに。母さへ空しくなり給ひて。われら姉弟花水を手向の爲に立ち出づる
姉弟上歌『かほどまで便りなき身をわが父の。便りなき身をわが父の。捨て置き給ふ思ひ子の戀ひ悲しめるあはれさに。人は歸らで見る夢の。別

【三】
子方二人、爲世の子姉弟が登場。
姉弟「花が散つた後、寒い秋風がきつく吹いて來て、柞の森の露を果敢なく吹き消すやうに、お母様は果敢なく死んでおしまひになつたのだが、それでも私達は、よくもまあ後に殘つて、生き永らへてゐられることだ」
こゝ孤獨の心持を述べ、
姉「私達は攝津國水無瀬の里の、爲世卿といはれた人の、二人の子どもでございます」
こゝ見物人に自己紹介をし、
姉弟「私達のお父様爲世卿は、後世善所のことをお考へになつて、御出家遊ばし、お母様も私達も捨てられてしまつたので、水無瀬川の千鳥のやうに、母子諸共たゞ泣き暮らしてゐたのですが、そのお母様さへお亡くなりになつたので、私達姉弟はお母様の御亡靈に花や水をお供へしようと思つて、出かけて行くのです。私達はこんなにまで便りのない身上となつたのですが、お父様は私達を捨てたままでお歸りにならず、お父様の戀しさ、わが身上の悲しさに、お歸りにならないお父様のお姿をたゞ夢にばかり見るので

と別れずに引留めることが出來るものならばと。
○よしもがな—夢ばかりでなく、現實にも父に會ひたい。「が」な」は希望の助詞。
【三】
○古の某が子—自分の在俗時代の子。
○お聖—お僧。
○往來の利益—釋迦如來が衆生濟度の爲に、寂光土を出てこの娑婆に八千返應現すること。轉じて僧が往來の途中衆生を濟度して極樂に導くこと。
○無慙—罪を犯して慙ぢないこと。轉じて殘酷なこと。三轉して氣の毒に思ふこと。
○空しき跡のその日—命日

れ留まるものならば。現に逢はんよしもがな現に逢はんよしもがな

ワキ立ち、

【三】
ワキ「不思議やなこれなる幼き者を見れば。古の某が子にて候。さらぬやうにて過ぎ行かばやと思ひ候（と正面に少し出づ）

弟「いかに姉上。聖のお通り候御留め候へ

姉「げによく仰せ候御留め候へ

姉弟「いかにお聖聞しめせ。往來の利益の御爲ならば。われらが母の空しき跡。弔ひてたばせ給へなう

ワキ「無慙やな父とも知らで姉弟は。利益をなさんと往來の。僧を供養し給ふぞや。さらば留まり申すべし（と子方に向く）

姉弟「嬉しや今日は母上の。空しき跡のその日な

す。あゝ、この夢がそのまゝ消えないものならば、そして、夢ばかりでなく、ほんとにお父様にお逢ひすることが出來たならば。

（母を想ひ父を慕ひながら、隠世の体でゐる傍
（僧も隠世にこれを見て、

【三】
僧「おゝ不思議だ。こゝを通る小さな子を見ると、自分が在俗の頃儲けた子どもだ。しかし、素知らぬ振りをして、通り過ぎることにしよう」

（こゝへ出かける。弟はこれを見て、
弟「お姉樣、お僧がお通りになります。お留めなさいませ」

姉「ほんとによい事を仰しやつた。お留めしませう」

姉弟「申しお僧さまお聞き下さいませ。御道中の途々、衆生御濟度を遊ばしていらつしやるのでしたら、どうか私達の亡くなりました母の回向をして下さいませ、とうさ

僧「おゝ可哀想なことだ。この姉弟は自分を父だとも知らないでゐるのだ（と獨言をいひ）。功德をしようと思つて、旅の僧に御供養なさるのですね。では、お立ち寄りしませう」

姉弟「あゝ嬉しい、今日はお母樣の命日な

り。御經讀みてたび給へ

ワキ「それこそ易き御事なれと。落つる涙を抑へつつ。お經を讀まんと心ざせば

姉弟「われらが母のなき跡を。弔ひ給ふお聖を

ワキ「父とも知らで

姉弟「今は又

地「餘所のあはれにいひなして。餘所のあはれにいひなして。さらば留まりて。跡を弔ひ申さん

姉弟「嬉しの今の仰せやと姉弟ともに悦べば

地「見れば昔に變りたる。庭の桂木窓の梅。主忘れぬしるしぞと。匂ひをとめて吹く風の。もる月影もすさましや。見苦しけれど此方へと。お僧を請じ入れければ

子方二人地謡座前に行き下に居り、ワキも下に居り、

ワキ「千度百度親子ぞと

のです。どうぞお經をお讀み下さいませ」

僧「それはお易い御用です」

と、流れ落ちる涙を抑へながら、お經を讀まうとすると、

姉弟「私達の母の亡靈を御囘向下さいますありがたいお僧さま……」

僧「それが自分達の父だとも知らないでゐるのだ」(と獨言をいひ)

僧は他人の悔みをいふやうな、餘所餘所しい振りをして、

僧「それでは立ち寄つて御囘向しませう」

姉弟「あゝ嬉しい、ありがたうございます」

と姉弟は喜ぶ。

やがて、わが家に入つて見ると、昔とは變り果てたさまで、たゞ庭の桂木や窓際の梅などがあつて、もとの主を忘れないしるしばかりに、よい匂ひを漂はせてゐるが、吹く風も寒く、月影も軒端にさし入つて、いかにもものの淋しいあばら屋となつてゐるのである。

姉弟「見苦しい所でございますが、どうぞこちらへ」

と、僧を招き入れると、僧は幾度も幾度

○餘所のあはれに—實はわが身の上であるのに、他人の悔みをいふやうに装うて

○見れば昔に—爲相が久しぶりにわが家に歸つて、庭の樣を見たのである。

○主忘れぬしるしぞと—大鏡、菅原道眞の歌「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花主なしとて春を忘るな」を胸に置いて綴つた。

○もる月影も—風のもるを月のさし込む意にいひかけた。軒端の荒れ果てたさまを述べたのである。

○請じ入れ—招き入れ。

○輪廻の業―恩愛の惡業の爲に生死の迷界に車輪の如く展轉すること。
○撫子―愛する子。
○正覺―佛の悟り。成佛。
○成等正覺―等正覺を成就す。等正覺は平等の正理を覺知すること。成佛の意。

【四】

○念佛衆生―以下經文の體であるが、出所は見當らない。作者の勝手に作つたものであらう。
○無量壽如來―阿彌陀如來
○一代教主―無量壽如來は一代の教主たる釋迦牟尼の法號であるとの意であらう
○來迎引攝―佛菩薩がこの世に來り迎へて、衆生を極樂に引きとること。
○更闌け―夜が更け。更は夜を五つに分つた稱。
○帳門―帳は閨に垂れた幕。門はその入口。
○古人―昔契つた人。亡き妻。

地「名乘らばやとは思へども。輪廻の業と目をふさぎ。念佛申し撫子の。弔ふ法の結緣に。正覺ならせ給へや正覺ならせ給へや

ワキ「南無幽靈成等正覺

【四】

一聲の囃子にて、シテ爲世の妻の靈、面痩女・鬘（左右亂髮）・鬘帶・襟白・着附摺箔・縫箔腰卷・白練壺折・腰帶・扇の裝束にて杖をつきて出で、

シテ「念佛衆生無量壽如來

ワキ「一代教主釋迦牟尼法號

シテ「來迎引攝

地「あらありがたや

ワキ「更闌け夜靜かに帳門開かざるに。影の如くに見え給ふは。この世にはなき古人の。姿顯し給へるか

シテ「恥かしや猶も輪廻に歸り來て。見え參らするは憚りなれども。親と名乘らで情なく。餘所

も親子の名乘りをしたいと思つたが、いや〳〵愛着の煩惱に迷つてはならないと、目を塞いで煩惱をうち拂ひ、念佛して、

僧「どうかいとし子が回向します佛緣によつて、亡靈が成佛しますやうに」

と回向する。

【四】

シテ爲世の妻の亡靈登場、爲世の讀經の聲に合せて、

妻「衆生の唱へ奉る無量壽如來は……」

僧「一代の教主たる釋迦牟尼佛の法號で……」

妻「極樂淨土からこの世に現れて、衆生を極樂へ引きとり給ふ』

妻「あゝありがたいことでございます」

僧「夜が更けて、あたりは靜かで、部屋の戸口も開きはしないのに、影のやうに現れて來られたのは、亡くなつた妻が姿を現されたのですか」

妻「お恥かしうございます。未だに迷ひの心が殘つて、この世に歸つて來て、あなたにお目にかゝりますのは、無遠慮なことでございますが、あなたがわが子に親で

○さる事―尤もな事。
○捨つる浮世の身―浮世を捨てた、出家の身。
○包む―憚る、遠慮する。

がましげにおはします。恨み申しに參りたり
ワキ「尤もそれはさる事なれども。捨つる浮世の身を恥ぢて。親と名乘らぬばかりなり
シテ「なう包むも事によるものをと。『亡者は子供の手を取りて（と子方をワキの前に出し）
ワキ『草の枕の夜の宿
シテ『夢に相逢ふ親と子の
姉弟『袂にすがれば
ワキ「ともかくも
地『爭ひかねて捨人は。いとど心の迷ひ子に。親と名乘らんは。餘所の人目もいかならん
シテ『羨ましや父も子も
地『同じ浮世の身にあれば。逢瀨のたよりもあるぞかし。われは冥途に歸りなばいつ又夢にも逢ふべき

あるとお名乘りにならないで、無情にも餘所々々しくしていらつしやるので、それをお恨み申しに參つたのでございます」
僧「なるほどそれは尤もなことだけれど、浮世を捨てた出家の身が、愛着にほだされるのは恥かしいことなので、それで親だと名乘らないでゐるのです」
妻「いゝえ、御遠慮になるのも、事柄によります。親子の間を御遠慮になることがあるものですか」
と、妻の亡靈が子どもの手をとつて、このあばら屋の夜の夢に、親子を引きあはせると、姉弟は父の袂にすがりつくので、僧も今はどうにもいひ爭ひかねて、ひどく心を迷はし、
僧「かう心を迷はして、親子と名乘るのは出家の身として、世間態にも恥かしいことだ」
妻「あゝ羨ましいことです。父も子も同じこの世の人なのだから、またも逢ふ機會がありませうが、私はあの世に歸つてしまつたならば、又いつ逢ふことが出來ませう」

【五】〇絲子は三界の首かせ—「子は三界の首かせ」といふ語を引いた。絲子は幼兒、三界は欲界・色界・無色界で衆生の迷妄輪廻する世界。首枷は罪人の首にはめる刑具。
〇心の鬼—わが心から犯した罪業がわが身を責めること。それを地獄の鬼にいひ做した。
〇烏羽玉の—黑の枕詞。
〇因果の車の—善因善果、惡因惡果の廻るさまを車に喩へた。
〇叫べども叶はず—叫ばうとしても叫べない。
〇かやうの弔ひ—夫爲世の回向。
〇鸚鵡の袖を—親子に逢ふといひかけ、振り切るの序とした。鸚鵡の袖は鸚鵡の畫を織り出した衣。
〇絲竹の—切り難きの縁で絲を出し、句を隔てて音樂にかゝる。絲竹は絃樂器と管樂器。

子方もとの座に歸り坐し、シテ次の謠に合せて仕科。

【五】地「絲子は三界の。絲子は三界の。首かせに繫がれて。娑婆にも行かれず冥途にも。歸りかねて悲しやな。苦しみは受くれども。忘るる隙なきは。娑婆に殘る妄執愛着。戀慕の妨ぐる。心の鬼の身を責めて。烏羽玉の黑髮を。手に繰りからまき提げ引きずる。左右に引き分つて立つも立たれず居るも居られぬ因果の車の廻り來て。問へども何かは答ふべき。叫べども叶はず

シテ「されどもかやうの弔ひに

地「されどもかやうの弔ひに。今こそ親子に鸚鵡の袖を振り切りがたき絲竹の。紫雲たなびき音樂聞え。紫雲たなびき音樂聞えて成佛するこそありがたけれ成佛するぞありがたき

と常座にて合掌して留む。

【五】妻「子は三界の首枷——と前に申します通り、わが子の愛に引かされて、あの世に思ひきつて歸ることも出來なければ、この世へ行くことも出來ないので悲しうございます。どのやうな苦しみを受けても、忘れることの出來ないのは、この世に對する妄執で、子の愛着、夫の戀慕、かうした惡業の爲に、地獄の鬼がこの身を責めて、この黑髮をあの手に手繰りまきつけて、ひつさげたり、引きずつたり、左右に引きわけたりするので、立たうとしても、立つてゐることが出來ず、坐らうとしても坐つてゐることが出來ず、惡業の報いに苦しめられるのです。そして人に聲をかけても答へをしてくれるものはなく、いえ叫ばうとしても叫ぶことが出來ないのです。しかし、このやうな鄭重な回向を受けましたので、今は親子の緣を離れて、空には紫の雲がたなびき、管絃の音樂が聞えて、佛菩薩のお迎へを受け、成佛することが出來ました。ほんとにありがたうございます」

といって消え失せる。

〔考　異〕

古諸本　（觀世流貞享三年本〔爲世〕）

【一】ワキ「これは……水無瀬の里に爲世といはれし……子細候ひて（貞の者成しか。萬浮世の體せんなき事と思ひ。一筋に元結切りかやうの（貞此）姿と……次第に故郷も……水無瀬の里へと急ぎ候（貞故郷に妻や子ともをすて置て候。いかやうなる風情にて候そ。立越よそなから尋はやと思ひ候）これははや……休まばやと思ひ候（貞ナシ）　【二】姉「これは津の……爲世の卿（貞某）と……　姉弟「さても……空しくなり給ひて（貞けふは七日の追善也）われら……　【三】ワキ「不思議やな……行かばやと思ひ候（貞ナシ）　弟「いかに姉上（貞こ御）聖のお通り候（貞けふの追善になと）御留め候へ（貞はぬそ）……　姉弟「嬉しや……空しき跡のその日（貞も七日）なり……　姉弟「われらが……お聖を（貞ナシ）……　地「見れば……すさましや（貞く）見苦しけれど（貞は）此方へとお僧を（貞内に）請じ入れければ（貞けり〳〵。ワキ「扨かた〳〵はいかい成人の御子にて候そ」　アネ「さん候。是は此水無瀬の里に。爲世の某といはれし人の。二人の子にて候か。父は後世の爲にとて、憂世をあたに見なせの里に。妻や子供を捨置て。遁世し給へは。うらむるかひも涙の袖に。母さへむなしく成給て。かくあさましき有様也」　オトト「いつそや人の申しは、爲世は高野にまし〳〵て。さうなら下り給ふましきと。くはしくかたり給ひしなり　アネ「なら御ひしり高野にのほりたまはゝ。我等か母のむなしくなり。さもたよりなき有さまを。くはしくかたり給ふへしと。御ことつては申たけれ共。捨られ申せは親なから。うらめしくもあり戀しくも、地「思ひ子の、思は父にことつてはゞうらめしなからなつかしや。ロンギ地「母の形見の懸帶を。〳〵。そふも思ひのたねなれは。是を御布施に參らせん。オトト「けにもといひて花若も。見るに涙のます鏡、是をも布施に參らする。地「御用にたつましき物なれとて。今の御經の御布施に。御前に是をさしおけは。父は哀にたへかねて。身の置所なきまゝに。人や若白露の。消ても殘る親と子の。名乘もやらであまさへに。あとをとふこそ哀なれ。〳〵。ワキ「かやうに御なけき候はは。定て御草臥候へし。悄く御やすみ候へ。我らも少すゐめん申さうするにて候。アネ「心得て候。花若も悄くやすみ候へ。みつからも少まとろみ候へし。オトト「心得て候。ワキ「言語道斷のふせいにて候。卽父にて候と名乘て喜はせたくは候へ共。りんゑの業に沈み候へし。とにかくに夜の內に此屋を忍ひ出候へし」アネ「いかに花若、御聖の御歸候とゝめ候へ。オトト「いまた夜の深う御入候に。いつく〳〵御出候そ。こなたへ御入候へ。ワキ「いやいつく〳〵もゆかす候。はやから御入候へ。オトト「未御聖は御歸りも候はぬ物を、唯今父こを夢に見參らせて候。アネ「何と見たまひて候そ。オトト「さん候父この是迄御出にて。母の跡を弔ひ給ふと見まゐらする所を。おとろかさせ給ひて

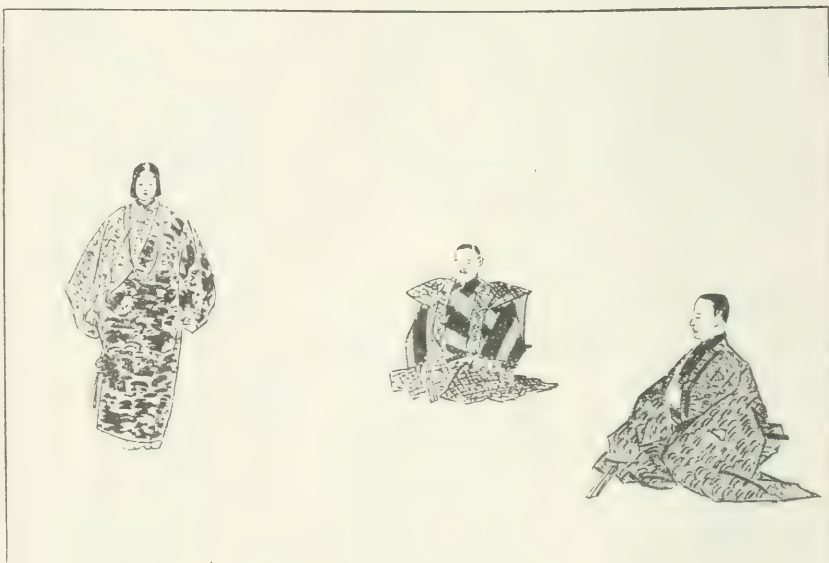
候程に夢はさめて候へとも。御面影は殘るぞや。あら父戀しやあら戀しや。アト「うらやましやうつゝに見えずは夢に成とも。なと父こは見え給はぬぞと。おとゝの夢をうらやめは。オトト「おとゝは有し面影を。戀しや床しやとて。共に涙をながしつゝ。地「おとゝい袖をかたしきて。ぬれとねられぬ夜もすから。夢を心にかくる身の。おろかなりかほと迄、言葉をかはしみゝゆるを。父共しらぬ無慙やな「千度百度親子ぞと……地「名乘らばやと……念佛申し（貞御經をよみ）ちのさはり「撫子の……ワキ「南無幽靈成等正覺（貞頓證菩提）【四】……

「恥かしや……親と名乘らで情なく（貞ナシ）……シテ「なら包むも事（貞折）による……地「同じ浮世の……夢にも逢ふべき（貞ナシ）

【五】地「綠子の……提け引きするゐ（貞牛頭馬頭）左右に……

水無月祓（みなづきはらひ）

觀

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】**ワキ**　下京の男、**狂言**　所の者、**シテ**　室君（狂女）

【所】山城國　賀茂

【時】六月晦日

【作者】能本作者註文には世阿彌の作、二百十番謠目錄には日吉安清の作とす。世阿彌の五音曲條々に「松風村雨、はん女、みそぎ川、是等は皆戀慕のもつはら也」とある「みそぎ川」は本曲を指したものであらうか。古くは二段劇能であつたが、今は一段劇能に省略してゐる。考異參照。

【梗概】都下京の男が、播磨國室の津に逗留中相馴れた女を迎へ取らうとしたところ、既にその女は室の津にゐなかつたので、今日夏越の祓に賀茂明神に參詣して、かの女との逢瀬を祈つた。すると、そこへ茅の輪を持つて夏越の祓を勸める狂女が來たので、これに物狂の舞を

演じてゐると、それがわが尋ねる女であつたので、二人は神の御惠みを喜んで、うち連れて歸つた。

【出典】 男女再會の世話物で、典據と見るべきものはない。

【鑑評】 別離した男女が賀茂の社內で再會することは、「賀茂物狂」に似てゐるが、彼の曲は男女の情愛が餘りに冷淡であるのに反し、これには男女とも思慕の情が可なり強く現れて居り、且茅の輪を採物にした曲もあつて、戯曲として彼よりは數等勝れてゐる。しかし、本曲と同じく遊女をシテとした「班女」が、その採物を閨怨を訴へる班女の扇として、美しい文章を以て強い戀慕の情を持たせてゐるのに比べると、これにはさうした生彩がない。まづ中等の作といふべきものであらう。原作には前述の如く二段劇能に脚色してゐるのであるが、その第一段にはあまり重要性が認められない。現行曲のやうに改作した方が簡潔でよいと思はれる。

【一】 ○下京―京都の三條通以南 ○室の津―播磨國揖保郡今の室津村に昔著名な水驛で、遊女が居つた。(「室君」參照。) ○夏越の祓―六月晦日諸社で行はれる災厄罪障を祓ひ清める神事で、茅の輪又は茅貫と稱する輪を作り、參詣の人がこれを潜り越え、茅麻の幣を以て總身を清める。もと朝廷で行はせられる六月十二月の大祓から出たもので、夏越とは夏を越す意であるとも邪神を祓ひなご(和)む意であるともいふ。 ○賀茂の明神―上下の二社あるが、こゝでは山城國愛宕郡下鴨村糺の森にある賀

【二】 名乘笛にて、ワキ下京の男、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは下京邊に住居する者にて候。われさる子細あつて播磨の國に下り。久しく室の津に逗留の間。相馴れし女の候に都に上りなば。必ず迎へ妻となすべきよし堅く契約申して候。さればこの程室の津へ迎へを遣はし候處に。かの女居候はぬ由申し候間。今は尋ぬべきやうもなく候。又今日は夏越の祓にて候程に。賀茂の明神に參詣申し。かの逢瀬をも願はばやと存じ候

【二】 舞臺は初め京都下京で、ワキ下京の男登場

男「私は下京邊に住んでゐるものです。私はある事情があつて播磨國に下り、永らく室の津に逗留してゐました間に、馴染になつた女がありまして、それに『都に歸つたならば、きつと迎へとつて妻にしよう』と、堅く約束して置いたのです。それで、この間室の津へ迎へにやつたところ、その女がゐないといふことで、今は尋ねるすべもないのです。ところで、今日は夏越の祓だから、賀茂の明神に參詣して、あの女に逢ふことが出來るやうに、お祈り申さうと思ふのです。

(見物人に自己紹介をし、やがて賀茂の方へ出か

茂御祖神社を指す。祭神は玉依姫と賀茂建角見命。
○逢瀬―逢ふ機會。
◎これはこのあたり―以下本曲の狂言詞、流本に記してある詞に從つた。
○水無月祓―六月の大祓即ち夏越の祓。
○糺―糺の森。上掲賀茂明神鎭座の地。
○不知案内―様子を知らない。不案内。
○御手洗―御手洗川、神社の前にある川。參詣人が手を洗ふ意から出た名。
○巫―神に仕へて神樂を舞ひ、又祈禱をする女。
○水無月祓の輪―茅の輪。茅で作つた輪で、これをくぐれば、疫氣を避けるといふ。
○是非もなく―わけもなく、

といひて脇座に行く。狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「これはこのあたりに住居仕る者にて候。今日は水無月祓にて候程に。糺へ參らばやと存じ候

ワキ「なうこれなる人は糺へ御參り候か。某も御供申し候べし

狂言「見申せば都の人にてありげに候が。不知案内なるやうに仰せ候よ

ワキ「仰せの如く都の者にて候へども。久しく田舎に候ひて罷り上り候故かやうに申し候

狂言「げにげにさやうの事も候べし。さらば御供申し候はん

ワキ「この頃都にはいかやうなる珍しき事か候

狂言「御存じの如く都は廣き事にて候程に。色々珍しき事も多く候。まづこの御手洗に參りて面白き事の候

ワキ「いかやうなる事の候ぞ

狂言「若き女物狂の候が。巫のやうなる有様にて。水無月祓の輪を持ち。人々に茅の輪の謂れを申してくゞらせ候が。是非

（出て行く。その途で、狂言里人が登場。

里人「私はこの邊に住んでゐる者ですが、今日は六月の大祓だから、糺の森の賀茂明神に參詣しようと思ふのです」

（と自己紹介す。下京の男はこの里人を見て、

男「もうし、あなたは糺へ御參詣になるのですか、私もお連れ下さい」

里人「お見受けしたところ、都の方のやうですが、土地に不案内のもののやうなことを仰しやいますね」

男「仰しやる通り、私は都の者ですが、永い間田舍にゐて、近頃歸つて來ましたので、それで、このやうに申すのです」

里人「なるほど、それならば御尤もです。では、お供致しませう（と一緒に歩きながら）

男「この頃都では珍しいものにはどんな事がありますか」

里人「御存じの通り、都は廣い所ですから、色々珍しい事が澤山ありますが、まづこの御手洗川に參つて面白いことがあります」

男「それはどういふ事なのです」

里人「若い女の氣違ひがゐまして、女神子のやうな様子をして、夏越の祓の輪を持ち、參詣の人々に茅の輪の謂れをいつて、くゞらせるのですが、それがとても面白

【二】
○行く水に數書くよりもはかなきは—古今集讀人知らずの歌。下句−思はぬ人を思ふなりけり−
○思ひ妻—こゝでは愛する夫。上掲の歌の末句をいひかけた。
○上り瀨—上流の瀨。京に上りといひかけた。
○中賀茂—上下兩賀茂の中間にある流木社。
○集ふ君—群り集まる參詣の人々。
○何とも白波の—何とも知らずを白波にいひかけ、白波を幣に見立てて、木綿四手の形容とした。
○木綿四手—木綿（楮）で作つた布又は紙の幣。
○御祓川—御祓をする川、夏越の祓には上述茅の輪の作法と、水邊に齋串を立て祝詞を誦し形代を川に流す作法とがある。御祓川は後者の作法から出た名。
○戀路をただす—戀の眞僞を正すを地名の糺にいひかけた。

もなく面白う舞ひ遊び候。これを見せ申し候べし

ワキ「さらばその物狂を見うずるにて候

狂言「何かと物語り申して參り候程に。はや糺へ參りて候。御覽候へ殊の外群集にて候。かの物狂を待ちて見せ申し候べし

【三】

ワキ下に居り、狂言その次に坐す。

一聲の囃子にて、シテ狂女、面若女・鬘・鬘帶・襟白赤・着附摺箔・唐織着流・白水衣・扇の裝束にて、篠の枝に茅の輪をつけたるをかたげて、橋懸一の松に出で、

シテサシ『行く水に數書くよりもはかなきは。思はぬ人を思ひ妻の。跡を慕ひて上り瀨の。淸き流れや中賀茂の。御手洗川に集ふ君。今日の夏越の祓して。この輪越えさせ給へとよ

シテ一聲『恥かしや。人は何とも白波の

と謠ひながら舞臺に入り、

地『木綿四手かくる。御祓川

「カケリ」

シテ『戀路をただす神ならば

く舞ふのです。これをお見せしませう」

男「それには、その物狂を見せませう」

里人「何かとお話しながら歩いてゐるうちに、もはや糺へ參りました。まゝ御覽なさい、大勢な人だかりです。あの物狂を待つて見せませう」

（上賀茂に着いた態で、舞臺は下賀茂の境内となる）

【三】

（橋懸は賀茂へ參詣する道筋の態で、お宰君、狂女の姿となり、茅の輪を持つて、ここに登場、）

女「古歌に——
『行く水に數書くよりもはかなきは、思はぬ人を思ふなりけり』
（自分を愛してくれない人を慕ふのは、流れる川水に文字を書くよりも、もつと頼りない果敢ないことだ）
と詠まれてゐるやうな、そのやうな頼りにならない夫の跡を慕つて、京に上つて來たことです（と獨言をいひ）、この流れの淸らかな中賀茂の御手洗川の邊に集まつていらつしやる方々、さあ今日の夏越の祓をして、この茅の輪をおくぐりなさいよ」
（と參詣の人々に聲をかけ）

女「あゝ恥かしいことだ。人は私の事など何にも知らないで、御祓川に祓の幣をかけてゐることだ。……
こゝの神樣、この神樣がほんとの戀をお守り下さる神樣であつたらば、きつと戀しい夫に逢はせて下さるに違ひないのだ」

「カケリ」（に狂亂の様を示し）、

地『などか逢瀨のなかるべき

シテサシ『げにや數ならぬ身にもたとへは在原の。跡は昔に業平の、この川波に戀せじと。かけし御祓も大幣の。引く手あまたの人心賴むかひなきかねことかな、とは思へどもわれは又。浮寢に明かす水鳥の

地下歌『賀茂の河原に御祓して逢瀨をいざや祈らん。上歌『夏と秋。行きかふ空の通ひ路は。行きかふ空の通ひ路は、かたへ涼しき風ぞ吹く。御手洗川は濁るとも、澄みてます賀茂の宮。誓ひ糺の神ならば。賴みをかけて憂き人に。廻り逢ふべき小車の賀茂の河原に着きにけり 賀茂の河原に着きにけり

「誓ひ糺の神ならば」と左へ廻り、地上歌の終りに大小前に立つ。

【三】

狂言（ワキに）「唯今申す女物狂はこれにて候。言葉をかけ輪の調

女「ほんとに、このやうな戀に惱むものは、私のやうなつまらない者ばかりではない、昔にもその例があるのだ。昔在原業平は、『この御手洗川で、神に誓つて、もう戀はしまいと誓つたのに』とお詠みになり、また或女はこの業平に向つて、『あなたの心を引き寄せる女が多勢あるのですから、折角お約束しましたこともあてにならない、つまらないことです』と詠んだのだ。ほんとに、その通り、男の心といふものはあてにならないものだと、私も思ふのだけれど、やはり辛い悲しい思ひに泣き明かしてゐることだ。さあ、この賀茂の河原で御祓をして、夫に逢ふことが出來ますやうにとお祈りしませう。今は丁度夏と秋との堺目で、空吹く風もどことはなしに涼しいことだ。たとへ御手洗川の水は濁つても、こゝに鎭まります賀茂の明神は御誓約の正しい、御利益のあらたかな神樣なのだから、お祈りすれば、あの薄情な夫にも逢はせて下さるだらう。……おゝ、かういつてゐるうちに賀茂の河原に着いた」

といつてゐるうちに、賀茂の境内に入つた態。

【三】

里人（男に）「今がた申した女の氣違ひといい

○在原の―例はありを業平の姓にいひかけた。

○業平―平城天皇の皇孫、阿保親王の第五子。伊勢物語の主人公。「杜若」參照。

○戀せじと―伊勢物語の歌「戀せじと御手洗川にせし御祓神はうけずもなりにけるかな」を指す。

○大幣の引く手―同書、女の歌「大幣の引く手あまたになりぬれば思へどえこそ賴まざりけり」を指す。

○かねこと―約束した詞。

○浮寢に明かす―憂き音に泣き明かすを浮寢の水鳥に、水鳥の鴨を賀茂にいひかけた。

○夏と秋行きかふ空の通ひ路は―古今集凡河内躬恒の歌。下句「かたへ涼しき風や吹くらん」

○憂き人―薄情な夫。

○小車の―廻りの緣で出し文飾とした。

【三】

○天照大神—日本書紀に「遂欲下立二皇孫天津彦火瓊瓊杵尊一以爲中葦原中國主上、然彼地多有二螢火光神及蠅聲邪神一」蘆原の中つ國は日本の國號。
○あらぶる神—荒々しい邪神。
○事代主の神—大國主神の御子。この神が邪神を平定し給うた時、青和幣白和幣を以て清め給うた事、倭姫命世紀に見ゆ。
○さばへなす荒ぶる神もおしなめて今日はなごしの祓なるらん—拾遺集藤原長能の歌。但し原歌の末句—祓なりけり」とある。「なす」は如くとの意。

れを申させて聞しめされ候へ
ワキ「承り候さらば言葉をかけて謂れを問かばやと思ひ候。（立ちてシテに）いかにこれなる狂女。見れば茅にて作りたる輪を持ちて。人々に越えよと承り候。夏越の祓のいはれこそ聞きたう候へ
シテ「わらはは狂人なれども。祓のいはれを申して聞かせ參らせ候べし
ワキ「さらば懇に語られ候へ
シテ「忝くも天照大神皇孫を。蘆原の中つ國の御主と定め給はんとありしに。あらぶる神は飛び滿ちて。螢火の如くなりしを。事代主の神なごめ拂ひ給ひしこそ。今日の夏越の始めなれ。されば古き歌に。『さばへなす荒ぶる神もおしなめて。今日はなごしの祓なるらん。「さてさばへ

ふのは、これです。言葉をかけて、茅の輪の謂れをいはせて御覽なさい」
男「承知しました。では、言葉をかけて、その謂れを聞いて見ませう。――もし、狂女、そなたを見ると、茅で作つた輪を持つて、參詣の人達にこれをくゞり越えよといつてゐるが、夏越の謂れが聞きたいものだね」
女「私は氣違ひで、よくも分りませんか、祓の謂れをお聞かせしませう」
男「では、委しく話してくれい」
女「畏れ多くも、天照大神が皇孫をこの日本の國の御主とお定め遊ばさうとなされた時、荒々しい邪神が國中に飛び滿ちて、螢火のやうな光をあちらこちら放つてゐましたのを、事代主神が平定して、祓ひ清め遊ばしたのが、今日の夏越の始めなのです。それで、古歌に――
『さばへなす荒ぶる神もおしなめて、今日はなごしの祓なるらん』
（今日は夏越の祓だから、五月の蠅のやうにうるさく荒れ祟る惡神も、すべて拂ひのけられることであらう）
と詠まれてゐます。この『さばへなす』と

なすとは夏の蠅の飛び騒ぐが如くに。障りをなす神をいへり。」かかる畏き祓とも。思ひ給はで世の人の

ワキ『祓をもせず輪をも越さず

シテ『越ゆればやがて輪廻を免る

ワキ『すはや五障の雲霧も

シテ『今みなつきぬ

ワキ『時を得て

ワキ次の地謠に下に居り、シテ謠に合せて仕科。

地『水無月の。水無月の。夏越の祓する人は、千年の命延ぶとこそ聞け。輪は越えたり御祓の（輪を越ゆる形をして）この輪をば越えたり（と輪を前に出して見）。眞如の月の輪の謂れを知らで人な笑ひそよ。もし惡しき友あらば祓ひ除けて交へじ身に祓ひのけて交へじ。輪越えさせ給へやこの輪越え

○輪廻—衆生が業因の爲に生死の迷界を車輪の如く廻りまわること。

○五障—こゝの五障は女人の五障ではなく、五善根の障りとなる欺、怠、瞋、恨、怨をいふか。これも法華經にある語。

○みなつきぬ—皆盡きぬ。を六月の雅名水無月にいひかけた。

○時を得て—よい時期に出會つて。

○水無月の夏越の祓する人は—公事根源に「今日は家家に輪を越ゆることあり、水無月の夏越の祓する人は千年の命延ぶといふなり（拾遺集讀人知らず）この歌を唱ふるとぞ申し傳へ侍る」

○眞如の月の輪—茅の輪を月の輪に喩へたのである。「眞如の」は月の形容。

は、夏の蠅の飛び騒ぐやうに、人に障り祟りをなす神をいふのです。夏越の祓が、このやうな恐ろしい惡神を拂ひのける、結構なことであるとも考へないで、世間の人は祓をもしなければ、茅の輪をくゞり越えもしないでゐるのです。これを越えさへすれば、生死の苦から免れられるのです。それ、かうしてくゞれば、五障の迷ひが忽ちに消えてしまふのです。今日は丁度この夏越の祓の日に當つてゐるのです。丁度よい時で——

『水無月の夏越の祓する人は、千年の命延ぶとこそ聞け』といはれてゐるのです。……それ、かうして輪を越えるのです。……これで輪をくゞつたのです。……眞如の月の輪ともいひたい、この茅の輪のありがたい謂れを知らないで、笑ふものではありませんよ。茅の輪で拂ひのけるのは、惡神ばかりではありません、もし友だちの中に惡い者があれば、それをも拂ひのけて、つ

○千早振る神の忌垣も越えつべし―下句、萬葉集卷十一には「今はわが名の惜しけくもなし」伊勢物語には「大宮人の見まくほしさに」とある。千早振るは神の枕詞、忌垣は清淨な垣で、神社の玉垣。
○異方―外の道。
○神山の二葉の葵―四月の賀茂祭に、その神山にある二葉葵を用ゐるから、この詞を出し、以下「木綿鬘の」まで、神代の序とした。
○雲こそかかれ―二葉葵が雲がかゝるほどの大木となるとの意を、木綿鬘が髮にかゝることにいひかけた。
○木綿鬘―木綿幣を二葉葵に添へて髮にかけること。その髮を神にいひかけた。
○波の白和幣―波の白を白和幣にいひかけた。木綿の幣を白和幣、麻の幣を青和幣といふ。
○捨て衣の―幣を流し捨てて、衣を脫ぎ捨てるやうに身を清淨にしてとの意。
○本性になりすまして―狂亂をとゞめ、本心にたち歸つて。

させ給へや、名を得てここぞ賀茂の宮、名を得てここぞ賀茂の宮に、參らせ給はば御祓川の波よりも。この輪をまづ越えて。身を清めおはしませ。千早振る。神の忌垣も越えつべし。もと來し方の。道を尋ねて。迷ふ事はなくとも異方な通ひ給ひそ。今日は夏越の輪を越えて參り給へや

シテ『神山の。二葉の葵年ふりて

地『雲こそかかれ木綿鬘の。神代今の代おしなめて。今日は夏越の祓ひなごめ靜めて。心ぞ清き御祓川の。波の白和幣。麻の葉の青和幣。いづれも流し捨て衣の（と持枝を捨て）。身を清め心すぐに、本性になりすましていざや神に參らんこの賀茂の神に參らん

と正面に出で下に居て合掌す。ワキこの間に、地謠より烏帽子を受取り扇にのせてシテに向き、

き合はないことです。――さあ、輪をお越えなさいませ。この有名な賀茂のお社へ御參詣なされたからには、御祓川で水の清めをするよりも、まづ第一にこの輪を越えて、身をお清めなさいませ。さうすれば、恐れ多いこの玉垣の內へも入ることが出來ます。これまでお出でになつた道筋を通つて、お迷ひにならないにしても、今日は外の道はお通りになつてはいけません。今日はこの夏越の茅の輪をくゞり越えてお出でなさいませ。

この神山の二葉葵を木綿鬘にするやうになつてから、もはや隨分の年月を經たことで、その始めの遠い神代から今の代に至るまで、ずつと、今日六月の晦日には、夏越の祓をして、祟る神を祓ひ靜め、わが心を清める爲には、御祓川に白和幣や青和幣を作つて、すべての汚れを流し捨ててしまふのです。私もかうしてからだを清め心を眞直にし、もとの本心にたち歸つて、さあこの賀茂の神樣に參詣しませう」

といつて神前に合掌する。

【四】
ワキ「いかに申し候。この烏帽子を召されて。面白う舞うて御見せあれと人々の御所望にて候

シテ立ちてワキより烏帽子を受取り大小前にて【物着】烏帽子を着、扇を持ちて立ち、

シテ「げにや臨時の祭には。かざしの花を賜はるとかや。わらはも烏帽子をうち着つつ。神の御前に狂はまし。「賀茂川の後瀬しづかに後も逢はん。妹にはわれよ今ならずともと聞く時は。
『祈る願ひも頼もしや

ワキ『げに濁りなきこの神の。御心なれや賀茂の川

シテ『今この水に影をうつす。舞の袖こそ色々の

ワキ『心を種の手向草

シテ一聲『さるにても。よそには何と。御祓川

〔中舞〕

シテワカ『御祓川。水も綠の。山かげの

【四】
下京の男は烏帽子を持ち出して、

男「おい、皆の人が『この烏帽子を着て、面白く舞つて見せてくれ』と御所望ですよ」

女は男から烏帽子を受取つて、

女「いかにも、賀茂の臨時祭には舞人にかざしの花を賜はるとのことですから、それでは、私もこの烏帽子を着て、神の御前で物狂を舞ひませう。古歌に——
『賀茂川の後瀬しづかに後も逢はん、妹にはわれよ今ならずとも』
（戀しい女に今すぐ逢へないにしても、賀茂川の後瀬のやうに、後でゆつくり逢はう）
と詠まれてゐるやうに、この神にお祈りすれば、きつと後に戀しい夫に逢はせて下さるでせう。ほんとに頼もしいことです」

男「いかにもその通り。この神の御心は濁りのない、あらたかなことだから……」

女「今この淸らかな賀茂川の水に舞袖をうつすと、色々と美しく見えます」

男「さうだ、その風雅なことが、神へのよい手向けとなるのだ」

女「でも、外の人はこの見苦しい物狂を、どのやうに御覧になることでせう」

〔中舞〕
を舞ひ、

【四】
○臨時の祭—十一月下の酉の日に行はれる賀茂臨時祭で、この日内裏から遣される舞人にかざしの花を賜ふ
○かざしの花—舞人の冠に挿す作花。
○狂はまし—物狂の舞を演じよう。
○賀茂川の後瀬しづかに後も逢はん妹にはわれよ今ならずとも—萬葉集巻十一の歌。但し原歌の第二句は「後瀬しづけく」と讀むのであらう。
○手向草—神に手向けるもの。種の緣語で草といひ、且たの音を重ねたのである。
○何と御祓川—何と見るといひかけた。
○水も綠の—水も綠、山も綠といふ意。
○山かげの—賀茂の枕詞。

地「賀茂の宮居の。御手洗川に。映る面影映る面影
シテ「あさましや。もとより狂氣の。わが身なれば
地「見しにもあらず（正面に出でつ）。おのづから。映る姿は恥かしや（と下を見て後へ下りつ）齒根も眉も（左へ廻りつ）亂れ髪の。賀茂の社へすごすごと。歩みよるべの。水のあや。くれはとりくれくれと。倒れ伏してぞ泣きゐたる
（とよろめきながら後へ下り、仕手柱先に安坐してしをる。）

【六】
地ケンギ「不思議やさては別れにし。その妻琴のひきかへて。衰ふる身ぞいたはしき
シテ「聲はその。人と思へどわれながら。現なき身の心ゆゑ。ただ夢としも思ひかね。胸うち騒ぐばかりなり（と面を伏せ）
地「げにや思へば影頼む。惠み普き室の戸に

○見しにもあらず―昔見た姿のやうでもない。
○齒根―齒ぐろめ。お齒黒。
○亂れ髪の―髪を神に通はせて賀茂を呼び起した。
○よるべの水―神前の水。歩み寄るといひかけた。
○くれはとり―水の綾を漢服にいひかけて呉服を出し「くれ」の音を重ねて「くれくれ」といつた。くれくれは目がくらむ意。漢服呉服のこと〔呉服〕參照。
【六】
○妻琴の―妻を妻琴に、琴を彈くを引きかへにいひかけた。妻琴は琴と同じ意。
○現なき身―狂氣した身。
○室の戸―室の湊。

女「賀茂川の水も上の山もみな緑だが、その川水に映る私の姿は。……あゝあさましいことだ。もと[illegible]このやうに氣が狂つてゐるので、昔の姿とはうつて變つて、この水に映る姿は、……あゝ恥かしいことだ。お齒黒も眉も髪も、みんな亂れてしまつて……」
と賀茂の社前にすご〳〵と歩み寄つて行き、神前の水に映るわが姿を見ては、目もくらんで、よろ〳〵と倒れ伏して泣いてゐた。
【六】
男はこの狂女がわが妻であることに氣づいて、
男「これは不思議だ。さては以前別れた妻が、前とはすつかり變り果てて、このやうに衰へてしまつたのか、あゝ可哀想なことだ。」
女「今の聲は、どうやらわが夫のやうに思はれるけれど、何をいふにも、自分自身が正氣のない心なので、夢やら現やら見分けがつきかね、たゞ胸をとゞろかせてゐるばかりです」
男「なる程考へて見れば、自分達のお祈りしてゐた宮の明神は惠みの豐かな神様で室の湊の明神も……」

シテ「立つ神垣も隔てなき

地「御名もかはらぬ

シテ「賀茂の宮居。

地「げにまことありがたや（と二人とも立ち）。誓ひは同じ名にし負ふ。室君の操を知るもただこれ。紀の御神の御惠みなりと同じく（下に居て正面に合掌）。二度伏し拜みて妹背うち連れ、歸りけり妹背うち連れ歸りけり

「二度伏し拜み」とシテ・ワキとも立ち、ワキはそのまゝ幕に入り、シテは常座にて留拍子を踏む。

女「この賀茂の神様と御同一體で……」

男「お名前も同じやうに……」

女「賀茂の明神と申し上げるのですもの。ほんとにありがたいことでございます」

男「かうして、賀茂と御一體の神をお祀りした室の津の、遊君の操の深さを知ることの出來たのも、全くこの紀の神様がお守り下さつたお惠みによるのだ」と、二度神前に伏し拜んで、夫婦うち連れて、わが家に歸つて行つた。

○御名もかはらぬ―室の明神も賀茂神社で、上賀茂と同一體の別雷神を祀る。〔室君〕參照。

○誓ひ―誓約。神佛の御利益。

○室君―室の遊女。

〔考異〕

古謠本（元祿二年本）

元祿本は、二段劇能の脚色で、卽ち【一】の（ワキ）「これは下京邊に住居する……かの逢瀨をも願はばやと存じ候」の一節が、元祿本には（ワキ）「か様に候者は都の者にて候が、筑紫へ舟をくだす事の候て、去年の春よりはりまの國室の津に逗留仕候、はや舟の事ことごとく調ひ候程に、此度都へ罷上り候。又此方に永々候間、其方へ參り相なれ參らせ候程に、近日罷上候由を申て、逢ひを參らせばやと存候。いかに御座候か。（女）誰にて御入候ぞ。（男）いや某が參りて候。（女）何事にて候ぞ。（男）此程内々申ごとく都へ罷上候程に、やがて〳〵御迎を參らせ候べし。其程はしばらく御待ちあらうずるにて候。（女）實にやかりそめの。逢瀨なれ共いもせ川。隔る中は浮雲の。うはの空なる月

影を。そなたと計都路の。跡に殘りて唯獨。明し暮さん月日の數。思ひやるこそ悲しけれ。男實々仰はさる事なれ共、氏神八幡もせうらんあれ。必むかひを參らすへし。御心安く覺しめせ。女僞のなき世なりせはいかはかり。人のことのはうれしからまし。いまは心をおくてかる。いなはのやまの名にたつや。まつとしきかはわれとても。いつはりあらしこれそこの。室の女住いまては。それと定て待暮の。たのみをかへてみやこ人。ひなの別になりにけり。／＼

とあり、狂言、これはこのあたりに住居仕る(元みやこ上京の)者にて候……　りき「ならこれなる人は　……とつゞく、第二節以下にも異同が少くないが、餘り煩しいからこれを略した。

身延（みのぶ）　觀

解説

【能柄】　三番目　劇的夢幻能

【人物】　**ワキ**　日蓮上人、**シテ**　女の亡靈

【所】　甲斐國　身延山

【時】　鎌倉中期　秋（九月）

【作者】　作者・演能等に關する古記錄は見當らない。

【梗概】　日蓮上人が甲斐國身延山で法華經を讀誦してゐると、いつも山の麓から一人の女が來て聽聞するので、その素性を尋ねると、自分はもはやこの世に亡き者であるが、法華經の功德によつて、成佛することが出來たと喜びをのべ、法謝の舞を演ずる。

【出典】　日蓮宗の爲に作られたもので、特に典據といふべきほどのものはなからう。

【概評】　このワキ僧は日蓮上人と明示してゐるのではないが、古くから一般にさう認められてゐるやうに、〔鵜飼〕〔現在七面〕のワキとともに、日蓮上人と見て誤りなからう。そして、〔現在七面〕と本曲とは同

ニく、[illegible]事を日蓮宗の總本山にとり、法華經提婆達多品の所說に據り、龍女又は女人の變成男子往南方無垢世界の[illegible]行を說いたものであるが、本曲のシテなる女人の亡靈としてゐるのに比べると「現在七面」のシテを龍女としてゐる方が、[illegible]にも[illegible]く、[illegible]としても力強い。本曲にも法華經の經文は隨分多量に採り入れてゐるが、たゞこれを深い意味もなく、文章に美しく織り込まうとした爲に、意の通じ難いものとなつてゐる所が少くない。餘り秀れた作とは思はれない。

【一】

ワキ日蓮上人、花帽子・着附白綾・白水衣・著貫・込大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて、經卷を懷中して出で、脇座にて床几にかゝり、

ワキサシ「凡そ方便現涅槃。星霜二千二百餘回。後五百歲中今少し。廣宣流布の時を待ちて。妙法しゆとう繁昌の日。めでたかるべき。時節かな

地下歌「寂寞無人聲讀誦この經典の窓の內。上歌「一念三千の花薰じ。一念三千の花薰じ。我爾時爲現淸淨。光明身の床の上に。一心三觀の月滿てり。衆生の愉樂も今ここに。身延山の風水も。讀誦の聲添へて自然の靈地なりけり

【三】

次第の囃子にて、シテ女の靈、面姥・鬘・花帽子・襟朽葉色・着附摺箔・無色唐織着流・數珠の裝束にて出で、常座に立ち、

【一】（舞臺は甲斐國身延山の佛殿。ワキ日蓮上人登場。）

日蓮「釋迦如來が衆生濟度の方便として涅槃にお入りになつてから、今日まで二千二百餘年の歲月を經て、第五の即ち最後の五百年間も、もはや殘り少くなり、今は正に佛法の廣く流布すべき好時節に當つてゐるのであつて、妙法華の宗義の繁昌する、まことにめでたい時節だ。そして、經文に仰せられた通り、あたりの極めて靜かな、人聲もしない所で、この妙法華經を讀誦してゐると、一念の內に三千の諸法を觀ずることが出來、わが修行の室に、佛の淸淨光明の御身を現し給うて、一心に空・假・中道の三諦を明かに觀破することが出來るのである。まことに、今のこの身延山こそ衆生の身も愉樂し得る所で、この山の風水までが讀經の聲に調子を合はせて、實にあらたかな所である」

【三】（[illegible]女の亡靈登場。）

【一】

○方便現涅槃―法華經壽量品に「爲度衆生故、方便現涅槃」―釋迦が衆生濟度の爲に、世間の無常を示す方便として入滅したこと。

○後五百歲中―法華經藥王品に「我滅度後、後五百歲中、廣宣流布、於閻浮提、無令斷絕」後五百歲は釋迦入滅後、五百年づつ五期に分つた最後の五百年をいふ。

○妙法しゆとう―妙法宗燈の意であらう。

○寂寞無人聲―法華經法師品に「若說法之人、獨在空閑處、寂寞無人聲、讀誦此經典、我爾時爲現、淸淨光明身」を引いた。

○一念三千―天台の教義、一念の心に三千の諸法を具する事を觀ずること。即ち森羅萬象は一念の中から生ずると悟ること。

○一心三觀―天台の觀法、空、假、中道の三諦を觀破

することを、これを月に喩へた。
○身延山―甲斐國南巨摩郡日蓮宗の總本山身延山久遠寺はその麓にある。
【二】
○聞くやいかにと―新古今集宮内卿の歌に「聞くやいかに上の空なる風だにも松に音するならひありとは」
○白露のおのが姿を―白露のまゝでも紅葉が置くと紅色になるとの意。道歌に「白露のおのが姿をそのまゝに紅葉に置けば紅の玉」
○いとけなき身の母に逢ひ―法華經の利益の多い喩へ。藥王品に「此經能大饒益一切衆生、充滿其願、如清涼池能滿一切諸渴乏者、如寒者得火、如裸者得衣、如商人得主、如子得母、如渡得船、如病得醫、如暗得燈」
○さを投ぐる間―極めて短い時間の喩へ。「さを」とは梭とも竿ともいふ。「さを」を棹にいひかけたのである。
【三】
○心觀―前に述べた一心三觀をいふ。
○草結びする女―草庵を作つて住んでゐる女。

シテ次第「松吹く風も法の聲。松吹く風も法の聲。聞くやいかにと音すらん
シテサシ「面白や四方の梢も秋更けて。野邊の千草もさまざまに。錦を彩る白露の。おのが姿をそのまゝに。もみぢに置けば。紅なり
シテ下歌「われもこの身をこのまゝ成佛の法ぞ頼もしき。上歌「いとけなき身の母に逢ひ。いとけなき身の母に逢ひ。餓ゑたる者の食を求め。はだかなる者の衣を得たる如くなり。如渡得船の海の面。ささでそのまゝ到るべき。さを投ぐる間も急げ人。御法に後るなよ御法に後れ給ふな
【三】
ワキ「われ心觀の窓に向ひ。御經讀誦の折ごとに。御身一時も怠ることなし。誠に志の人と見えたり。そもいづくより來れる人ぞ
シテ「これはこの山遙かの麓に。草結びする女な

女「松の枝に吹きわたる風までが讀經の聲のやうな音を立てて、この御教への聲を皆の人達はどう聞くのであらうと、佛道を勸めてゐるやうに思はれる。あたりの景色も亦ほんとに面白い眺めで、木々の梢も晩秋らしく色づき、野邊の千草も色々に美しく紅葉して、錦のやうに染まつてゐるので、あの眞白な白露も、この紅葉に宿ると、そのまゝ紅色となるのです。いや、白露がそのまゝ紅になるばかりではない、私達も、この身このまゝ成佛することの出來るのは、ほんとに頼もしいことです。私達がこの頼もしい佛教に逢ふことは、譬へば、小さな子どもが母に逢ひ、餓ゑた者が食物を得、裸のものが着物を得、渡し場で船を得たやうた、何よりも嬉しいことです。この御教へを受ければ、何の苦勞もしないで、そのまゝ極樂淨土に往くことが出來るのです。だから、一刻の猶豫もなく、この御教へを早くお受けにならなければいけません」
さいひながら、日蓮の傍へ來る。
【三】
日蓮は女人の姿を見て、
日蓮「自分が一心に三諦を觀破することに努め、この御經を讀誦すると、いつもあなたは一度も怠らずやつて來られて、實に修行の志の深い人だと感じられるが、一體あなたはどこから來られるのです」
女「私はこの山の遙か麓の所に、草庵を作

○上行菩薩―法華經從地涌出品に「是諸菩薩衆中、有二四導師一、一名二上行一、二名二無邊行一」日蓮を上行菩薩の生れ替りであると見たのである。
○逢ふことかたき―法華經功德品に「此經深妙、千萬劫難レ遇」平家物語に「人身は受け難く、佛教にはあひ難し」
○妙覺無爲―妙覺は道を修めて佛位に至る五十二位の最高位、佛果のこと。無爲は涅槃の譯で佛の位。
○妙なる御法の花の緣―妙法華を和らげて用ゐた。
○變成男子―迷ひも忽ちに變ずといひかけた。法華經提婆達多品に八歲の龍女が男子に變成し、南方無垢世界に生れたとあるをいふ。
○正覺―眞正の覺知。成佛の意。

るが。かく上人のこの所に。到り給ふは上行菩薩の。御再誕ぞと忝くて。かかる妙なる御法には。逢ふことかたき女人の身の。今待ち得たる法の場に。いかでか怠りさむらふべき

ワキ げにげにこれは理なり。されども遥かの麓より。時を違へぬ御參詣。なほしも思へば不審なり。御身はこの世に亡き人な。「委しく語り給ふべし

シテ 早くも心得給ひたり。これはこの世に亡き者なるが。さもありがたき上人の。御法に値遇の度重なりて。苦患を免れ今ははや。妙覺無爲に至るべき。妙法蓮華經の功德。不思議なるかな妙なるかな。いよいよ佛果を。授け給へ

地。妙なる御法の花の緣。深き迷ひも忽ちに。變成男子われなりと。正覺の跡を追ひ。龍女にい

つて住んでゐる女でございますが、上人がこのやうにこの所へお出で遊ばしたのは、上行菩薩のお生まれ替りであらうと、勿體ないことに存せられ、このやうなありがたい御教へには、女人の身として容易に逢ふことは出來ませんのに、今かうして御教へをお受けすることが出來るのでございますから、どうして怠けてゐることが出來ませう」
日蓮「なる程これは御尤もです。しかし、このやうな遠い麓から、時をも間違へずに御參詣になるのは、やつぱりどうも不審に思はれるのです。あなたは亡者なのでせう。委しくお話しなさい」
女「よく早くお氣づきになりました。實は私は亡者でございますが、上人のいかにもありがたい御說法を幾度もお伺ひしましたお蔭で、冥途の苦しみを免れ、佛の位に達することが出來るやうになつたのでございます。妙法蓮華經の御功德は、實に不思議なありがたいことでございます。どうかなほこの上とも成佛させて下さいませ。
ありがたい妙法華經の御教へを受けますれば、忽ちに深い迷ひの心も晴れまして、かの八歲の龍女に劣らず、男子に變成して、佛の位に到ることが出來るのでございます。

○先だたぬ悔の八千度悲しきは―古今集閑院の歌。下句「流るる水の歸りこぬなり」

【四】

○げにや―以下「嬉しの今の機緣や」まで、クセ一章、普通にはシテの詞として解するのであるが、本曲ではワキ日蓮の說法と解した方が穩當のやうである。

○恩愛愛執の淚―日蓮上人諸法實相鈔に「父母兄弟妻子眷屬に別れて流す所の淚は四大海の水よりも多しといへども、佛法の爲には一滴をもこぼさず」

○四大海―須彌山の四方にある大海。

○聞法隨喜―佛法を聞いて信心を起し喜ぶこと。

○衆罪如霜露―普賢觀經に「衆罪如二霜露一慧日能消除」

○慧日―佛の智慧を日光に喩へた語。

○卽身成佛―この身のまゝ成佛すること。

○調達―提婆達多。釋迦の從弟で、初めは不信心な、五逆罪を犯した人であるが終に天王如來たる記別を受けた。提婆達多品に見ゆ。

○五逆―殺レ父、殺レ母、殺二阿羅漢一、出二佛身血一、破二和

かで劣らん

地上歌『かほど妙なる御事を。知らで過ぎにし古の。身を知れば先だたぬ悔の八千度悲しきは。流るる悦びの汗涙。身の毛もよだちてさてもわれ。かかる御法にあふ事よと。上人の御前に。涕泣するぞあはれなる

【四】

シテ舞臺の眞中に行きて下に居り、

地クリ『げにや恩愛愛執の淚は四大海より深し。聞法隨喜のその爲には。一滴も落すことなし

シテサシ『ありがたや衆罪如霜露慧日の光に。消えて卽身成佛たり

地『かの調達が五逆の內に。沈みはてにし阿鼻の苦しみ。終に法儀の臺に變ず

シテ『況んや受持し讀誦せんをや

地『ただ一時も結緣せば。それこそ卽ち。佛心な

それだのに、妙法華經のこのやうにありがたいことを知らないで、徒らに月日を過しました昔の身を思ふと、いく度後悔してもとり返しのつかない悲しみに、身の毛もよだつばかり空恐ろしく感じられるのでございますが、でも、今私がこの御敎へを受けることが出來たと思へば、嬉しくてたまらないのでございます」と、上人の御前に淚を流して喜んだのは、實にあはれに感じられる。

【四】

日蓮は說法を始め、

日蓮「まことに、世間の凡夫は親子夫婦等の恩愛愛執の爲には、四大海よりも猶深い淚を流すが、佛法を聽聞することによるありがた淚は、一滴も落しはしないのである。

しかし、ありがたいことには、その多くの罪が、佛の御光によつて日に當る露霜の如くに忽ちに消えてしまつて、この身このまゝ成佛することが出來るのである。かの提婆達多の如き、五逆罪を犯した結果、阿鼻地獄に沈んで、甚しい苦しみを受けたのであるが、それでも、終には極樂の蓮華臺に往生することが出來たのである。まして、常に御經を手から離さず、これを讀誦するものは、勿論成佛疑ひないのである。たゞの一時でも佛緣を結べば、それが卽ち佛心なのである。

合館一の中の大罪。○阿鼻—阿鼻旨の略。八熱地獄の最下で、無間地獄と譯す。○法儀の臺—極樂の蓮華臺。○受持—經を常に手から離さずに持つこと。○歸命—南無の漢譯。命を佛に歸投して一心に信ずる意。○一部八卷四七品—法華經一部は八卷二十八篇から成る。○神力—靈妙な不可思議力。法華經に如來神力品といふのがある。○濁亂の—佛法の亂れた濁世の。○この經は保ちがたし—法華經見寶塔品に「此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然」○一乘の妙文—法華の經文。一乘は一切衆生を悉く成佛せしめる法。○深著虚妄法堅受不可捨—方便品に見ゆ。○華嚴の御法より—釋迦成道の初め華嚴經を說き、次に阿含經、方等經、般若經を說き、それから法華經に及んだ。この間四十餘年を費した。○未顯眞實の方便—華嚴乃

れ

（一同クセ）

地クセ『歸命妙法蓮華經。一部八卷四七品。文々ことごとく神力を示し演べ給ふ。濁亂の衆生なれば。この經は保ちがたし。暫くも保つ者は。我則歡喜して。諸佛もしかなりと一乘の。妙文なるものを。深著虚妄法。堅受不可捨ぞ悲しき

シテ『始め華嚴の御法より

地『般若に及ぶ四十餘年。未顯眞實の方便成佛のまこと顯れて妙法蓮華經ぞかし。正直捨方便無上の道に到るべし。げにありがたやこの經に。逢ふこと難き優曇華の。花待ち得たり嬉しの今の機縁や

【五】

シテ『面白や。妙なる法の花の袖（と立ち）

地『夕日や連れて。めぐるらん

南無妙法蓮華經——この一部八卷二十八品の經文には、悉く佛の神力が示されお說きになつてあるのである。しかし、我々は濁つた亂れた世の中に生れて居るから、なか〳〵この御經を保持することが出來ない。それで、若し暫くでもこの經を保持したならば、自分は大に喜ばしく思ふし、他の諸佛もさう思はれるのである』と仰せられて、この法華經は一切の衆生を成佛せしめ給ふありがたい御教へであるのに、深く虚妄の法に捉はれて、それに拘泥して捨て去ることの出來ないのは、實に悲しいことである。釋迦如來は、始め華嚴經をお說き遊ばされて、それから般若經をお說きになるまでに、四十餘年の歲月を費されたが、それらは未だ眞實を顯さない方便の御教へで、まことの成佛の道をお說きになつたのが、この妙法華經なのである。既に法華經の御教へを垂れ給うた上は、正直の道に從ひ方便を捨て、無上の道に到るやうにしなければならない。思へば實にありがたいことである。この御經の御教へを受けることは、優曇華の花の咲く時を待つやうな、實にむづかしいことであるのに、今はこれを受ける機會を得てゐるのである。實に嬉しいことである。

【五】女はありがたい說經を聽聞して、報謝の舞を舞ふところなり。

女『妙法華のありがたい御教へを受けて、花の袖を飜して、夕日のめぐるがやうに、

至般若經は未だ釋迦の眞實の教へを顯さない、方便の說法であるといふ意。
○正直捨方便―方便品に「今我喜無レ畏、於ニ諸菩薩中一、正直捨ニ方便一、但說ニ無上道一」
○逢ふこと難き優曇華の―妙莊嚴王品に「佛難レ得レ値、如ニ優曇波羅華一」優曇華は三千年に一度花を開くといふ佛教想像上の花で、極めて稀れなことの喩へとす。
○機緣―衆生の機根に佛の教を受くべき因緣のあること。

【五】
○夕日や連れて―舞に從つて夕日も廻るとの意。
○三つの絆―三つは貪、瞋、癡の三縛をいふか。評釋・辭解等は欲、色、無色の三界と解してゐる。
○得脫―解くといひかけた生死の苦を解脫すること。
○諸法實相―すべてのものが眞實の相を示してゐるとの意。
○草木國土皆成佛―一頌四句の偈文に「一佛成レ道、觀ニ見法界一、草木國土、悉皆成佛」

〔序舞〕

シテ『報謝の舞の袖の上に

地『紫雲たなびき光さし。千草にすだく蟲の音までも。妙法蓮華の。となへかな

次の謠に合せて舞ふ。

地上歌『げにありがたき法の道。げにありがたき法の道。末暗からぬ燈火の。永き闇路を照らしつつ。三つの絆も悉く。得脫成佛の御法なりげに。ありがたや賴もしや

シテ『御法の御聲も時過ぎて

地『御法の御聲も時過ぎて。既にこの日も入相の。鐘響き月出でて。げにも妙なる法の場。身延の山の風の音。水の聲もおのづから諸法實相と響きつつ。草木國土皆成佛の靈地なりけり成佛の靈地なりけり

と舞ひ上げて仕手柱先にて留拍子を踏む。

舞ひめぐるのは、ほんとに面白いことでございます」

〔序舞〕を報謝の心持で舞ひ、

女「かうして報謝の舞を舞つてゐると、その袖の上に、極樂の紫雲がたなびき、光がさし、千草に集まつて鳴く蟲の聲までが、妙法蓮華と唱へてゐるやうでございます。ほんとにこのありがたい佛の御教へによつて、冥途の闇に光を得て、闇路を照らし、すべての煩惱羈絆を免れて成佛することの出來ますのは、ありがたい賴もしいことでございます。

おゝ、御讀經の御聲を伺つてゐるうちに、時は次第に經つて、もはや日も暮れ方になり、入相の鐘が響いて、空には月がさし出で、このありがたい法場、身延山に吹き渡る山風の音や、流れる水音までが、すべて、眞實の相を示すやうに響いて來ます。ほんとに、この山は山河草木まですべてのものが成佛するあらたかな所でございます」

と身延山の靈場を讃歎して舞ひ納め、靜かに消え失せる態で退場す。

〔考異〕

古諸本 （元祿八年本）

【三】シテこれは……草結び（元住居）する女なるが……地妙なる御法の……變成男子われ（元ナシ）なりと……地上歌かほど妙なる御事と（元〳〵）……悅びの汗涙身の毛もよだちてさてもわれ（元涙の）かかる……【四】地ただ時も結縁せばそれこそ卽ち佛心（元是そ眞の佛）なれ【五】シテ報謝の舞の袖の上に。地（元〳〵）紫雲……地「御法の御聲も時過ぎて（元ナシ）……皆成佛の靈地なりけり成佛の靈地なりけり（元かな）

御裳濯(みもすそ)　春

解説

【能柄】脇能　複式夢幻能

【人物】ワキ　當今臣下、ワキツレ　同從者(二人)、前シテ　老翁(輿玉神)、前ツレ　男、狂言　所の者、後シテ　輿玉の神

【所】伊勢國　石の鏡

【時】五月

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。言經卿記文祿四年三月廿八日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗概】今上陛下に仕へ奉る臣下が伊勢大神宮に參詣し、二見浦の石鏡へ行つて、神田に川水を引き入れてゐる老翁に、その川の名御裳濯川の謂れを尋ねると、老翁は神鏡を戴いてこの國にお出でになつた倭姫命が御裳の裾のよごれをお濯ぎになつたところから出た名であると敎へ、なほその時田作の翁輿玉神が御道しるべして、伊勢大神宮が鎭座し給ふこととなつたのであると語り、自分がその輿玉神であると打

明けて消え失せる。それでまた、神宮がこの度は神の姿のまゝで影向せられ、舞楽をなし、君が代をお祝ひになる。

【出典】 倭姫命が伊勢大神宮を齋き奉り給うたことは、倭姫命世紀に、

二十五年丙辰春三月……倭姫命送二大神一奉レ戴天、小船乘給天、御船爾種々神財並志留留天、從二小河一志天幸行支、……于時、猿田彦神裔宇治土公祖大田命參相支、汝國名何問給、答白久、佐古久志呂宇遲之國止白支、御止代神田進支、倭姫命問給久、吉宮處在哉、答白久、佐古久志宇治之五十鈴之河上者、是大日本國之中仁殊勝靈地侍奈利、其中翁卅八萬歳之間爾毛、未視知留靈物在利、照輝如二日月一奈利、惟小縁之物不レ在志、定主出現御坐、爾時可レ進止念比天、彼處爾禮祭止申勢利、即彼處仁往到給天御覽爾介留、往昔大神誓願給比天、豐葦原瑞穗國之内爾、伊勢加佐波夜之國爾、在二美宮處一止見定給比天、從二天上一志天、投降坐比志、天逆太刀、逆鉾、金鈴等是也、甚喜於懷介、言上給比支、二十六年丁巳冬十月甲子、奉レ遷二于天照大神於度會五十鈴原河上一……高天原仁千木高知利、下都磐根爾大宮柱高敷立天、天照大神並荒魂和魂宮止鎭坐奉留、于時美船神朝熊水神等、御船爾乘奉天、五十鈴河上爾遷幸、于時河際爾志天、倭姫命御裳裾乃汁加禮侍介留於、洗給倍利、從レ其以降、號二御裳須曾河一也。

とある。神皇正統記巻二にも、

第十一代垂仁天皇……この時皇女大倭姫命豐鋤入姫に代りて、天照大神をいつき奉る。神の教により猶國々をめぐりて、二十六年丁巳冬十月甲子に伊勢の國度會郡五十鈴の川上に宮所を占め、高天の原に千木高知り、下津磐根に大宮柱太敷立ててしづまりましましぬ。この所は昔天孫天降り給ひし時、猿田彦の神參りあひて「我は伊勢の狹長田の五十鈴の川上に至るべし」と申しける所なり。大倭姫命宮所を尋ね給ひしに、大田命といふ人（又は興玉とも云ふ）參りあひて、此の處を教へ申しき。この命は昔の猿田彦の神の苗裔なりとぞ。

とあるが、本曲は寧ろ前書の方に據つたものと思はれる。

【概評】 とりたてて、これといふほどの秀れた節もないが、曲折の少い、いかにも脇能にふさはしいすぐな節色で、詞章も、この主題に添ふだけの莊重味を保つてゐる。動きの少い、どつしりした曲である。同じく伊勢大神宮について取扱つた「内外詣」に比べると、かの技巧の多い錯雜した曲柄に比べて、この方が數等上にあるものと思はれる。

次第の囃子にて、ワキ當今臣下、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ、ワキヅレ次第〽山も内外の神詣で。山も内外の神詣で。二見の浦を尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ〽抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さてもわれ伊勢大神宮に參詣申し。内外の宮めぐり。殊には内外清淨の信心私なく候。又これより浦傳ひに二見の浦石の鏡をも一見し。それより都へ上らばやと存じ候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ、ワキヅレ道行〽五十鈴川清き流れの深みどり。清き流れの深みどり。影も百枝の松風の。をさまる木の色までも神の惠みの御影ぞと。所からなる心地して。ながめ妙なる氣色かな。ながめ妙なる氣色かな

【一】

前段

舞臺は伊勢大神宮で、ワキ當今臣下、ワキヅレ從者を随へて登場、

臣下「伊勢の内宮外宮に參詣して、二見の浦に行かう」

と次第に旅の目的を述べ、

臣下「自分は今上陛下にお仕へしてゐる臣下です。さて、自分は伊勢大神宮に參詣して、内宮外宮を巡拜し、殊に心身を清淨にして、眞心をこめて拜禮したのです。そして、これから浦傳ひに二見の浦へ行き、石の鏡をも見て、それから都へ歸らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

臣下「五十鈴川の水は淸らかに流れて、これに深緑の影をうつす百枝の松も、枝を吹き渡る風がのどかで、葉の色までが殊に美しく、さすが場所柄だけあつて、神の御惠みが深いために、このやうに神々しいのだと思はれるやうな、實に結構な眺めだ」

【一】

○内外の神詣で―内外は伊勢の内宮と外宮。○二見の浦―伊勢國度會郡にある。内外二宮を見るといひかけた。

○當今―今上陛下。喜多流の廢曲には雄略天皇とある

○内外清淨―心身の清淨。〔葵上〕に「天清淨地清淨内外清淨六根清淨」

○石の鏡―御裳濯川の川上にあり、鏡石は高さ二丈横五尺許の巨岩で、西面が鏡の如くに削られてゐる。

○五十鈴川―御裳濯川の一名。宇治内宮の南を繞り、二つに分れて二見が浦に注ぐ。

○百枝の松風の―百枝の松は内宮の神木で、神路山にあつたといふ。風雅集藤原俊成の歌に「藤波も御裳濯川の末なれば下枝もかけよ松の百枝に」

○をさまる木々の―木々の枝に風の烈しく吹き荒らないのは、太平の相である。

ワキ「所からなる心地して」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて伊勢に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程にこれははや、石の鏡に參りて候。心靜かに神拜申さうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて一同脇座に行き下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁・面小尉・尉髪・襟淺黄・着附厚板・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて柄振を持ち、ツレ男、直面・襟赤・着附熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸に出で、向合ひて、

シテ　ツレ一聲「露ながら。水かけ草の種とりて。手玉もゆらぐ。袂かな

二人とも正面に向き、

シテ二句「おり立つ田子の數添ふや。シテ　ツレ（向合ひ）「御裳濯川の。水ならん

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ「ありがたや神の世繼は久方の。天の村早稻種とりて。シテ　ツレ（向合ひ）「今人の代に至るまで。四

ミ、[illegible]

[illegible]

臣下「道を急いだので、もはや石の鏡に參つた。心靜かに參拜しませう」

[illegible]

【三】

シテ[illegible]神、老翁の姿を裝ひ、ツレ男[illegible]作の態で登場。

老翁「露の宿つてゐる稻を持つと、その露が手にこぼれかゝつて、手に纏ふ飾り玉がゆれるやうだ」

男「田におりて田植をする人の、段々ふえて行くさまは、御裳濯川の水嵩の增して行くやうですね」

老翁「あゝありがたいことだ。天照大神の御神統が連綿とお續き遊ばされて、天上から傳へられた稻も、人代の今日に至る

【三】

○水かけ草―水中に生える草。但しこゝでは稻を指してゐる。

○手玉もゆらぐ―稻の露が手にかゝるのを、手に纏いた飾りの玉のゆれるのに見立てた。

○おり立つ田子―田におりて田植する人。

○御裳濯川の―御裳濯川は前掲五十鈴川に同じ。農夫の數の多いさまを御裳濯川の水嵩の多いのに喩へたのである。

○神の世繼―天照大神の御系統。皇統。

○久方の―天の枕詞。皇統が久しいといひかけた。

〇天の村早稻―天上より傳へられた稻。むらは群り生える意。〔淡路〕參照。
〇人の代―人代、神代に對していふ。
〇四の時―春夏秋冬。
〇神路山―宇治内宮の神苑を繞る丘地。その東北は朝熊山に至る。
〇種を蒔き種を收めし―〔淡路〕に「伊弉諾と書いては種蒔くと讀み、伊弉册と書いには種を收む―
〇草も木もわが大君の國なれば―太平記卷十六、紀朝雄の歌。下句「いづくか鬼のすみかなるべき」
〇八洲―日本の總名。
〇波靜かにて吹く風の枝を鳴らさぬ―太平の相。宴曲祝言の曲に―四海波靜かにして、九州風おさまり」王充の論衡に「太平之世、五日一風十日一雨、風不ㇾ鳴ㇾ條、雨不ㇾ破ㇾ塊」
〇天地の―雨塊を破らずの雨を天にいひかけた。

の時日は曇りなくて。千代萬代の末かけて。國土豐かに民あつき惠みの國も幾久し。殊更にこゝは曇らぬ神路山。内外の末も影清き御裳濯川の末うけて流す田面の早苗取る。田子の裳裾の。色までも。國土豐かに。樂しむなり

シテツレ 下歌「種を蒔き種を收めし神代より、上歌「草も木もわが大君の國なれば。わが大君の國なれば。いづくも同じ神と君。隔てなき世に住まふ身の誰か惠みの外ならん。げにや八洲の海までも。波靜かにて吹く風の。枝を鳴らさぬ天地の。神の威徳はありがたや神の威徳はありがたや

（神の威徳はありがたや」と謠ひながら、シテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、）

【三】

ワキ「いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

まで久しくうち續いて、春夏秋冬四季を通じて、日の光は常に曇りなく照り渡り、千年萬年いつまでも變りなく、國土は豐かで民は富み榮え、幾久しく大御惠に浴してゐることだ。その中でも、殊にこゝは御神徳のあらたかな神路山のこととて内宮外宮の御惠みも一層深く、御裳濯川の流れを引き入れて、田に早苗を植ゑると、その農夫の着物の裾までが色美しく見られて、いつも豐作を樂しんでゐるのだ。國土の初め、伊弉諾神が種を蒔き、伊弉册神が種をお收めになつた神代の昔からこの國土にあるものは、草も木もすべてわが大君のもので、どこにあるものでも、如何なるものでも、皆わが大君と神樣との御分け隔てのない御協力によつて作られたものであるから、苟もこの國土に住む者は、誰でもわが大君と神樣との御惠みを受けないものはないのだ。實に天下太平、四海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさぬといふ、おだやかさであるのも、神樣の御威徳によることとて、實にありがたいことだ」

（この御代の太平を祝ひ神徳をたゝへてゐる。）

【三】

（臣下はこの老翁を見て、）

臣下「おい、こゝな老人にお尋ねしたいのだが……」

老翁「私でございますか、何の御用でございます」

○まかせ入れ—引き入れ。
○あまつさへ—その上。
○渇仰—渇いた者が水を望むやうに、深く信仰すること。
○倭姫の命—豊鋤入姫に代つて、天照大神をいつき奉られた。委しくは解説にいふ。
○御神鏡—三種神器の一、八咫鏡。
○御裳の裾よごれたりしを—倭姫命世紀に「時に河際にして倭姫命御裳裔長くけがれ侍りけるを、洗ひ給へり。其より以降御裳須曽河と號す也」

ワキ「これなる小田を見れば。田水豊かなるに。なほ河水を水口にまかせ入れ。あまつさへ渇仰の氣色見えたり。そもこの小田について謂れの候やらん

シテ「さん候これは神の御田にて候。またこの川は御裳濯川とて神水なるほどに。田水は豊かなれども。わざと河水を田面にまかせ入れ。神徳長久の恵みを仰ぐ祭事にて候

ワキ「さてさて御裳濯川とは。いつの世より名づけ候やらん

シテ「抑もこの川を御裳濯川と名づけし事は。人皇十一代垂仁天皇の皇女。倭姫の命。忝くも御神鏡を戴き。國々をめぐり給ひしに。當國にてはあの二見の浦より。この川路について上り給ひしに。御裳の裾よごれたりしを。この川にて

臣下「こゝの田を見れば、田の水が十分あるのに、なほその上に水口へ川の水を引き入れてゐて、おまけに、大層信心してゐるやうに見えるが、一體この田には何か謂れがあるのかね」

老翁「はい、これは神様の御田でございます。それから又、この川は御裳濯川といつて、神様の水ですから、それで、田の水は十分あるのですが、わざとこの川の水を田に引き入れて、幾久しく御神徳の御恵みをお願ひ申し上げるやうに、お祭りをするのです」

臣下「なる程、ところで、この御裳濯川といふのは、いつの頃からかういふ名がついたのだね」

老翁「一體この川を御裳濯川と名づけられたのは、人王十一代垂仁天皇の皇女倭姫命が、勿體なくも御神鏡を奉じて、國々をお巡りになつた時、この伊勢國では、あの二見の浦からこの川筋に沿うてお上りになつたのですが、その時命の御裳の裾のよごれたのを、この川でお洗ひになりましたので、それで、この川を御裳濯

濯ぎ給ひしによつて、御裳濯川とは申すなり

ツレ「その時田作の翁のありしが。神の御鎭座になるべき所やあると御尋ねありしに

シテ「かの翁申すやう、さん候この川上に三十八萬歳の間、この山を守護したる者の候が、御道しるべ申さんとて。この川路について上り。下つ岩根を敷きて參らするといへり。その時の田作の翁は。今の興玉の神これなり

ツレ「その時尋ね入り給ひしより。山をば神路山と名づけ

シテ「川をば神路川といひて

ツレ『流れ久しくすめる代の

シテ・ツレ「天長地久嘉辰令月の、御影濁らぬ御裳濯川の、神德深き水田なれば、神にまかせて作るなり

○興玉の神　天孫をこの日本に導き奉つた猿田彦命の別名。大神宮の宮地を讓り奉つて、退き給うたから神殿はなく、たゞ鳥居一つを立てたといふ。今これを興玉の森といふ。倭姫命世紀に「興玉神、無二寶殿一、在下津底岩根也、猿田彦大神是也、一書曰、衢神孫太田命、是土祖氏遠祖神、在十鈴原地主神一」

○天長地久　老子に「天長地久、天地所三以能長且久一者、以三其不二自生一、故能長生一」

○嘉辰令月　和漢朗詠集謝偃の詩句に「嘉辰令月歡無レ極、萬歲千秋樂未レ央一」

川と申すのです」

男「その時、田を作つてゐた老人があつたのですが、命が『神樣の御鎭座遊ばすべき所がなからうか』とお尋ねになりますと……」

老翁「その老人が、『はい、この川上に三十八萬年の間この山を守護してゐる者がございますが、御案内申し上げませう』と申し上げて、この川路に沿うて上り、そこに堅固な宮殿をお建て申し上げたといふことでございます。その時の田を作つてゐた老人が今の興玉神のことなのでございます」

男「その時、命がお入りになつたので、その山を神路山と名づけ……」

老翁「川は神路川と申して……」

男「それ以來、幾久しく清らかに流れてゐるのでありまして……」

老翁「天地の如く永久に變りのない、ありがたい日月の神の御影を受けた、神德の深い御裳濯川のことでございますから、神樣の思召に叶ふやうに、この水田に川水を引き入れて作つてゐるのでございます」

○在所—場所。

○渡瀬—徒歩渡りする川瀬

○山のべの—萬葉集、和銅五年壬子夏四月遣二長田王于伊勢齋宮一時、山邊御井作歌―山邊乃御井乎見我氐利神風乃伊勢處女等相見鶴鴨一原歌には神風とあるのを、こゝでは「神が瀬」とよんで、證歌とした。

ワキ「謂れを聞けばありがたや。さてさて先に聞えつる。その御裳裾を濯ぎ給ひし。在所はとりわきいづくの程ぞ

シテ「されば先に申す如く。御裳濯川と名づけし事。とりわきこの瀬の邊なれば。神が瀬とここを申すなり

ワキ「あら面白や神が瀬とは。神風とこそ聞きなれしに

シテ「されば常には神風や。伊勢と申すも神の誓ひ

ツレ「またこの川には神が瀬とて。神の渡瀬のあればこそ神路川とは申すなれ

シテ『然れば歌人の言の葉にも

地上歌『山のべの御井を見かへり神が瀬の。御井を見かへり神が瀬の。伊勢の少女等。あひ見ゆ

臣下「なるほど謂れを聞けば、實にありがたいことです。ところで、先程のお話に伺つた、命が御裳の裾をお洗ひになつた所はどの邊なのです」

老翁「さあ、それは、先程申しましたやうに、御裳濯川と名づけられたのが、丁度この瀬のあたりなので、こゝを神が瀬とも申すのでございます」

臣下「おゝこれは面白い。神が瀬といふのか。自分達はこれまで神風と聞き馴れてゐたのだが」

老翁「いかにもその通り、普通には『神風や伊勢』と申しますが、これも神様の御利益をいひ現したもので……」

男「しかし又、この川には神が瀬といつて、神様の徒歩渡り遊ばした所がありますから、神路川といふのでございます」

老翁「それで、歌人の歌にも――

『山のべの御井を見かへり神が瀬の、伊勢の少女等あひ見ゆるかな』

（山邊の御井を見た時、よい都合に、美しい伊勢の少女に出逢つた）

などと詠まれて居りますのも、この倭姫

○千早振る—神の枕詞。

○天の小稲の天が下—天上の稲種を廣く地上に蒔き施したとの意。

【四】

○日月は四洲を照らす—倭姫命世紀に「日月廻二四洲一、雖レ照二六合一、須レ照二正直頭一」四洲は須彌山の四方にある世界。

るかなと詠みしもこの倭姫の古を。詠み奉る心なり。千早振る。神路の山の村雨は。種を蒔くなる神の代の。久しき潤ひに。天の小稲の天が下。廣き惠みに逢ふことも。ただ神德にあらずやありがたの神の誓ひやなありがたの神の誓ひやな

地上歌の初めにツレは笛座前に行きて下に居り、ワキも下に居る。シテ謠に合せて仕科をし、上歌濟みて舞臺の眞中に下に居る。

【四】

地クリ『かたじけなの御事やわれら迷ひの凡夫として。神德王地の惠みを受くる。仰ぎてもなほ餘りあり

シテサシ『それ人は天下の神物たり。かるが故に正直をもつて本とす

地『日月は四洲を照らすと雖も。わきてはただ正直の頭に宿り給ふ

の故事を詠み奉つたものでございます。かうして、神路山に村雨が降つて、かの始めて種をお蒔きになつた神代以來の、久しく變りのない潤ひを與へられ、天上の稲種を廣く天下に惠み施し給うたのも、全く御神德によるもので、神樣の御功德は實にありがたいことでございます」

【四】

老翁は更に話をつゞけて、

老翁「實に勿體ないありがたいことでございます。私共は迷ひの深い凡夫の身でありながら、大御惠の深い王地に生まれ、ありがたい御神德に浴するとは、何とも申しやうもないありがたいことでございます。すべて、人は神のお作りになつたもので、それで、人は正直を根本とするのでございます。何故なれば、神の根源たる日月は、世界中をお照らしになるのですが、特に正直の頭にお宿りになるものですから、

シテ『然れば二所宗廟の御惠みを知らんと思はば

地『正直を以て。本とすべし

（居クセ）

地クセ『然るに皇大神。地神の爲に皇孫を。蘆原の中つ國に。降し奉らんとて。三種の神寶を。みづから授け給ひしに。その三種にもとりわきて。八咫の鏡は殊になほ。御影を寫しつつ御身を放ち給はず。その鏡の如くに。萬境を寫しながらしかも。一物を貯へず。神牀を清めて正直を授け給へり。されば生きとし生けるもの。日月の恩德に。預からざるはなきものを。これもつて當宮の。御神德にてあらざるや

シテ『然れば神代の昔より

地『今人の代に至るまで。神德は明らかに。垂仁

だから、內宮外宮の御惠みを受けたいと思へば、正直を根本としなければならないのでございます」

（老翁）さて、天照皇大神が地神の御代をお開き遊ばす爲に、皇孫瓊々杵尊をこの日本の國土にお降し遊ばさうとして、三種の神器を親ら皇孫にお授けになりましたが、この三種の神器の中でも、殊に八咫の鏡には、皇大神の御姿をお寫しになつて、御身をお放ちにならず、その御鏡のやうに、すべての物をありのまゝに寫して、少しも私心を挾まないやうにとお敎へになつた上、御鏡の御場所をも清淨にして、正直の德を敎へお授けになつたのでございます。このやうな次第で、生きとし生けるものすべて、日月の恩德に浴しないものはないので、これ卽ちこの伊勢大神宮の御神德に外ならないのでございます。

かうして、神代の昔から人代の今日に至るまで、御神德明らかに渡らせられるのでございますが、垂仁天皇の御代に、こ

○二所宗廟—普通には伊勢と石清水とをいふが、こゝでは內宮外宮を指す。

○皇孫—天津彥火々瓊々杵尊。

○蘆原の中つ國—日本の國

○三種の神寶—八咫鏡、八坂瓊曲玉、叢雲劍。

○八咫の鏡は殊になほ—神皇正統記に「鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照らすに、是非善惡の姿顯れずといふことなしその姿に從ひて感應するを德とす。これ正直の本源なり」

○神牀を清めて—昔は天皇と同殿同牀であつたが、崇神天皇の御時、神威を憚つて、鏡劍を大和笠縫邑に移し給うた。

天皇の御宇かとよ。下つ岩根に宮居して。皇大神となり給ふ。これ正に本覺の。和光に交じる塵の世を。守らん爲の御誓ひ。佛も同じ御心の。自性眞如の月讀の神とも示現し給へり

【五】

地ロンギ『げにありがたき神道の。げにありがたき神道の。曇らぬ末を受けて知る人の心ぞありがたき

シテ ツレ『一河の流れ汲みて知る。今日しもここに都人。君と神とは隔てなき御物語り申すなり

地『そも老人は誰なれば。わきて委しく木綿四手の

シテ ツレ『かかる御代ぞと仰ぎ見る

地『天つ空音の

シテ ツレ『時鳥

地『一聲鳴くも折からに神の。告ぞと木綿四手の。

○下つ岩根に宮居して—地下深く宮柱を立て、堅固な神殿を作つて。

○本覺の和光に交じる—本地の極樂淨土を出て、德光を和らげ、俗惡のこの世に垂跡し、衆生を濟度すること。

○自性眞如—自性は物質の本體、眞如は不變不易の意。本體の不變を月に喩へ、これを月讀命にいひかけた。

○月讀の神—天照大神の御弟。

【五】

○一河の流れ汲みて知る—説法明眼論に「宿ニ一樹下、汲ニ一河流、一夜同宿……皆是先世結緣」この意の語、平家物語今樣等にも見ゆ。

○君と神とは—こゝに都人のきたりといふを君にいひかけた。

○隔てなき—神と君との隔てなきを都人と老翁との隔てなき物語にいひかけた。

○木綿四手—楮の皮で作つた布又は紙の幣、幣の懸かるを斯かる時代にいひかけた。

○天つ空音の—天つ空、空音といひつゞけた。空音は定かには聞きとれない幽かな聲。

の地に堅固な宮殿を建てて、皇大神宮とおなり遊ばされました。これは全く本地の極樂淨土から德光を和らげて、この俗世間に垂跡遊ばされ、衆生をお救ひ下さるありがたい思召で、同じ御心から、佛はまた不變の實體を示す月讀命としても御出現になつたのでございます」

【五】

臣下「實にありがたいことです。わが神道の末の世まで曇りのないことを知ることの出來るのは、實にありがたいことです」

老翁「諺に『同じ河の水を汲むのも前世からの宿緣だ』と申す通り、今日こゝで都の方にお逢ひしたのも、この世ならぬ御緣だと思つて、大君と神樣と、お分け隔てのないお話をしたわけでございます」

臣下「一體御老人はどういふ方なので、このやうに委しくお話し下さるのです」

老翁「いや、このやうな太平の御代をありがたく思つて……」

臣下「おゝ、空にかすかな聲が……」

老翁「あの時鳥の一聲も、今の場合、神樣のお告のやうに思はれます」

といふ姿は、普通の百姓の老人のやう

田長と見えつるが。われ興玉の神よとて、御裳濯川の渡瀬なる。神が瀬をうち渡りて。跡も波に入りにけり跡白波に入りにけり

（われ興玉の神よとて」とシテ立ち常座に行きてひらき、靜かに中入、ツレも續いて幕に入る。

に見えたが、【老翁】自分は實は興玉の神だ」といつて、御裳濯川の淺瀬、神が瀬を渡つて、跡かたもなく川波の中に消えてしまつた。

（シテ老翁、消え失せる態で退場、ツレも同じく退場。

○木綿四手の田長—時鳥の異名を四手の田長といふので、告ぞと言ふといひかけてこの語を出し、田長を田を作る老人の意に用ゐて下につゞけた。〇跡も波に—跡かたも無くを波に、跡かた知らずを白波にいひかけた。

【間】◎いかに誰かある—以下狂言に對するワキ詞、高安流による。

【間】

ワキ「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「所の者を召して來り候へ

ワキヅレ「畏つて候。（仕手柱際に出で橋懸に向ひ）所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・小刀・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねある。罷り出で承らばやと存ずる。（ワキヅレに「所の者と御尋ねは、いかやうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと人の物を御不審ありたき由仰せ候。近う來りて給はり候へ

狂言「畏つて候

二人とも舞臺の眞中に出で下に居て、

ワキヅレ「所の者を召して參りて候（といひて元の座に坐す）

狂言「所の者御前に候

ワキ「所の人にて候はば。この御裳濯川について御神祕あるべし。語つて聞かせられ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこのあたりに住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいか

○神の召されたる—倭姫命をさす。

○方々—そなた。

がにて候へば、凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候、さる程に御裳濯川の子細と申すは、人皇十一代垂仁天皇の皇女倭姫の命、辱くも御神鏡を戴き給ひ、いづくか神の御鎮座になるべき所やあると、國々に御廻りあり、この川路について御上り候へば、これなる御田をかへして老翁一人御座候間、いづくか神の御鎮座になるべき所やあると御尋ね候へば、田作の翁申すやう、さん候これより上に三十八萬歳が間、この山を守護し給ふ御方の、下つ岩根を古めて参らせられたると申す。その翁は今の興玉の神にて御座候、又猿田彦の明神とも申し候。さて又御裳濯川と申すは。二見の浦よりこの川路について上り給ふ時、神の召されたる御裳裾よごれたるを、この川にて濯がせられたるにより。御裳濯川とは申し候、即ちこれなる瀬を渡り給ふにより。神が瀬と申し候、御通りありたる山々は、神路山と申し候。又これなる御田は。大神宮の御神田にて候間。水は豊かに候へども、御裳濯川の神水をまかせ入れ、神徳長久の恵みをうくる、かやうの事を御歌に、山のべの御井を見がてり神が瀬の。伊勢のをとめ等あひ見つるかなと、かやうにも御座候。倭姫の古を詠み給ひたると承り候、まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が、何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に承り候ものかな、御身以前老人と若き男、これなる御田に神水をまかせ入れ候程に、不審をなして候へば、それにつき御裳濯川の子細、倭姫の御事。唯今方々の御物語りの如く承り。その後興玉の神はわれなりといひもあへず、神が瀬を渡り給ふと見て、姿を見失ひて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな、このあたりに左様の老人は御座なく候が、興玉の神かりに田作の翁の體に顯れ給ひ。神秘様々御物語りありたると存じ候間。暫く御逗留あつて、重ねて奇特を御覧あれかしと存じ候

ワキ「餘りありがたき事にて候間、今宵はこゝに旅寝して。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み申し候

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ・ワキヅレ上歌（待謠）『旅寢せし御裳濯川の波枕。御裳濯川の波枕。月も曇らで天照らす御影をうけて神路山。更け行く月の夜とともに。所からにてありがたや。所からにてありがたや

【七】

出端の囃子にて、後ジテ興玉の神、面邯鄲男・透冠・白鉢巻・黒垂・襟紺赤・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

後ジテ『君が代は盡きじとぞ思ふ神風や。御裳濯川の澄まん限りは。守るべし守るべし。百王守護の神明として。和光あまねき世々の數。なほ幾久しすめらぎの。興玉の神とはわが事なり

地『八玉垣の。内外の宮居。影滿ちて

シテ『月讀の宮居。照りまさる（と舞臺に入り）

【六】

○波枕―水邊の旅寢。

【七】

○君が代は盡きじとぞ思ふ神風や御裳濯川の澄まん限りは―後拾遺集民部卿經信の歌。

○百王―御歴代の天皇。

○神明―神。

○和光―和光同塵の略。

○八玉垣の―玉垣のは内の枕詞。「や」は接頭語か、或は囃子言葉が混入したものか

○月讀の宮居―内宮七別宮の一。月讀尊と荒御魂を祀る。

【六】　後段

臣下「御裳濯川の川岸に旅寢してゐると、さすが天照大神の御神德の然らしめるところ、この神路山のあたりに照る月は一際さやかで、夜の更け行くとともに、月の光が愈〻神々しく、場所柄いかにもありがたい感に打たれることだ」

（と感激して、恍惚たる境地に入る。）

【七】

後ジテ興玉神、影向の態で登場。

神『君が代は盡きじとぞ思ふ神風や、御裳濯川の澄まん限りは』

（この御裳濯川の澄み渡つてゐる以上は、わが大君の御代はいつまでも盡きることがなからうと思ふ）といふ意の和歌を詠じ、

神「わが大君をよくお守りしよう。自分は、御歴代の天皇を守護し奉る神として、德光を和らげてこの世に垂跡し、この後とても幾久しく御代々の天皇を守護し奉る興玉の神である」

といつて影向せられると、内宮外宮の

○鏡の宮—月影の鏡に似てゐる意にかけていふ。宮は度會郡朝熊にあり、鏡を祀る。倭姫の鑄奉つたものといふ。續拾遺集隆辨の歌に「神代より光をとめて朝熊の鏡の宮にすめる月影」
○朝熊—內宮の東北にある
○潮干の石—朝熊の名石。神都志に「鏡宮……山麓坤の水涯なる大石の上に坐しまして、潮にも沈み給はず、浪にも流れ給はざりきとぞ」
○濟度—衆生を救つて極樂の彼岸に渡すこと。
○ちはや振るなり—「ちはや」は襅と書き巫女の着る白布の衣。それを振つて舞ふ意。
○ゆだちの袖—ゆだちは衣の左袖の腋を明けた所。襅は袖を縫はないから、ゆだちの袖といひ、これを湯立（巫女が熱湯に竹葉を浸して身に滌ぎかける式）にいひかけた。
【八】
○神風や伊勢の濱荻折りしきて旅寢やすらむ荒き濱邊に—萬葉集卷四の歌。但し原歌の第三句折伏とある。
○淸き渚の—催馬樂の歌に「伊勢の海の〻〻、淸き渚のしほがひに、なのりそや

シテ一聲『いさぎよき。影や鏡の宮所
地『空澄む雲も朝熊や
シテ『潮干の石とあらはれしも
地『濟度方便の。影な忘れそ。影な忘れそ。ちはや振るなりゆだちの袖
〔神舞〕
【八】
シテツレ『神風や。伊勢の濱荻。折りしきて
地『旅寢やすらむ荒き濱邊に荒き濱邊に
シテ『淸き渚の玉の數々
　と謠に合せて仕科。
地『光ぞ天照らす
シテ『神の磐戸の昔をうつす
地『榊葉の神歌
シテ『ちはやの袖や御裳濯川の
地『波の白和幣

御神殿が光り輝き、殊に月讀の宮は一段と照りまさるのである。
神「鏡の宮の御鏡が、實に淸らかに輝いてゐることだ。この神が空も澄み渡る朝熊の地に、潮干の石として御出現なされ、衆生濟度の方便を示された、その神德を忘れてはならないぞ。……おゝ、巫女たちがちはやの袖を飜して舞を舞ふわ」
ご興に乘じて、
〔神舞〕（を舞ひ）
【八】
神『神風や伊勢の濱荻折りしきて、旅寢やすらむ荒き濱邊に』
（荒々しい波のうち寄せる伊勢で、濱荻を折つて蓐とし、寒い辛い旅寢をすることであらう）といふ意の古歌を謠ひ、
神「淸らかな水際には、美しい玉が澤山ころがつて居り、空にはまた玉のやうな淸らかな光が照り輝いてゐる。さうした所で、神代の天岩戸隱れの時の樣を眞似て、榊葉の神樂歌を謠ひ、ちはやの袖を飜して、面白い舞を舞つてゐると、御裳濯川の波が白和幣のやうに、靜かな水は靑和幣のやうに見られる」

シテ「水の青和幣

地「とりどりさまざまの神遊び。鏡の宮居。朝熊の潮時に。沖より見えて。白波の沖より見えて。白波の。又立ち歸り二見の濱松の。千代の影ある。神と君こそ久しけれ

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

と、かうして鏡の宮で色々神遊びをして居られるうちに、朝熊のあたりは、潮のさし時となつて、沖の方から白波がうち寄せて來ては、また沖の方へ歸つて行く、そして二見の濱松が千代の緑をたゝへてゐるやうに、神と君とが幾久しく御惠みを垂れ給ふのである。

摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ。

○神の磐戸の昔―天照大神の天岩戸隱れの時、天鈿女命が竹の葉を持つて舞つた故事を指す。

○榊葉―神樂歌の曲名。

○白和幣―和幣はにぎたへの約で、和妙で作つた幣。その穀の皮から作つたものを白和幣、麻で作つたものを青和幣といふ。

〔考　異〕

古謡本（貞享三年本）

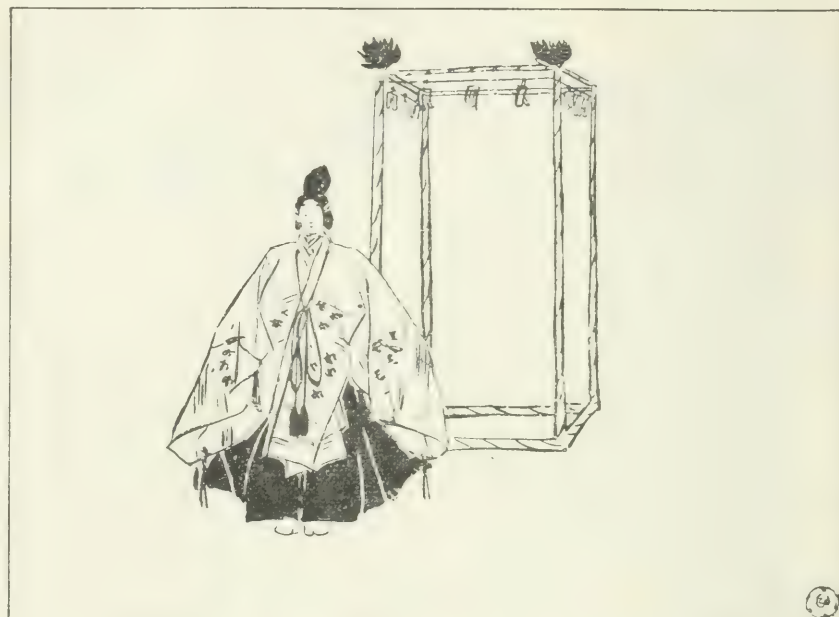
【一】ワキ「抑もこれは……さても（貞ナシ）われ（貞此間）伊勢大神宮に參詣申し（貞參）内外の……殊には（貞誠に）内外清淨……又これより浦傳ひ（貞此次）に二見の浦石の鏡をも……都へ上（貞を一見仕）らばやと……ツレ「急ぎ候程に……神拜申さうずるにて候（貞ナシ）

【三】ワキ「いかにこれなる（貞ナシ）老人に尋ぬべき……シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ（貞ナシ）。ワキ「これなる小田を……なほ川水を水口に（貞ナシ）まかせ入れあまつさへ……謂れの候やらん（貞みてくらをたて）。禮をなす事不審にこそ候（へ）シテ「さん候これは神の御田にて候またこの川は（貞ナシ）御裳濯川とて神水なる（貞にて候）程に……わざと（貞態此）川水を田面に（貞ナシ）まかせ……惠みを仰ぐ（貞うけんとの）祭事……ワキ「さて……いつの世より名づけ（貞の名河にて）候やらん。シテ「抑もこの川を御裳濯川と名づけし事は（貞御裳濯川と申は）人皇……國々をめぐり給ひし（貞御めぐり有し）に……シテ「かの翁申すやうさん候（貞ナシ）この川上に（貞あやしき者の候）三十八（貞ナシ）萬歳の間この山を守護したる者の候が（貞奉者有）御道しるべ……この（貞ナシ）川上について（貞ナシ）上り……その時の（貞ナシ）田作の……ツレ「その時（貞則）尋ね入り……シテ「天長地久……御影濁ら（貞に越）ぬ……ワキ「謂れを（貞能々）聞けば……さてさて先に聞えつる（貞ナシ）……在所（貞ところ）はとりわき……ツレ「またこの川は……神路川とは（貞も）申すなれ……

【四】シテサシ

「それ人は……正直をもつて本(貞さき)とす……地「正直を以て本(貞さき)とすべし。地クセ「然るに皇大神(貞おほん神)……地「今人の代に……神徳(貞勅)は明らかに……　【五】地「ニも老人は……わきて委しく木綿四手(貞しらゆふ)の……地「一聲鳴くも……跡も波に入りにけり跡白波に入りにけり(貞見えず成にけり。〳〵)　【六】ワキ上歌「旅寝せし御裳濯川の……所からにてありがたや(貞ナシ)
【七】後ジテ「君が代は……なほ幾久しすめらぎの(貞すへら世までもまもりのかみ)興玉の神とは……シテ「月讀の宮居照りまさる(貞なり)……

三輪(みわ)

観(寶春剛喜)

解説

【能柄】　四番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　玄賓僧都、**前シテ**　里女(三輪神霊)、**狂言**　所の者、**後シテ**　三輪明神

【所】　大和國　三輪

【時】　秋(九月)

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。親元日記に寛正六年三月九日演能、言經卿記に文祿四年三月二十六日註釋の事が見えてゐる。

【梗概】　大和國三輪に山居してゐた玄賓僧都の許へ、毎日樒閼伽の水を持つて來る女があつて、或日僧都に衣を一重戴きたいといつたので、これを與へて、その住家を尋ねると、二本の杉のほとりですといつて消え失せる。暫くすると、里人が三輪の神杉に僧都の衣がかゝつてゐたと知らせに來たので、僧都は不思議に思つて、神杉の許へ行くと、果して杉の下枝に衣がかゝつて、神詠が記されてゐる。やがて三輪明

神が現れて、三輪の神話を語り、天の岩戸の神樂の様を示す。そのうちに夜も白々と明けると、僧の夢がさめた。

【出典】　三輪の神婚說話は、夙く古事記崇神天皇の條に出てゐるのであるが、本曲は直接これに據らないで、俊頼無名抄に、

　三輪明神御歌

　　戀しくは訪ひ來ませ千早振、三輪の山本杉立てる森

　これ三輪明神住吉の明神へ奉らせ給へる歌とぞいひ傳へたる……

　　わが宿の松はしるしもなかりけり、杉むらならば尋ね來なまし

　杉をしるしにして三輪の山を尋ぬとよむ、皆故あるべし。昔大和國に男女相住みて年來になりにけれど、晝留りて互に見ることなかりければ、女のうらみて「年來のなかなれども未だその體見ることなし」と恨みければ、男「恨むる所まことに理なり、但しわが體を見ては定めておぢおそれむが如何に」と言ひければ、「このなからひの年を數ふれば幾そばくぞ、たとひその體見憎しといふとも、願はくは體見え給へ」と言ひければ「然なり、さらばわれその御櫛笥の中に居らむ、開き給へ」と言ひて歸りぬ。いつしか開けて見れば、小き蛇蟠りて見ゆ。驚きて蓋を蔽ひて退きぬ。その男復來りて「われを見て驚き給へり、まことに理なり、われも亦來ることは難なきにあらずや」と言ひ、契りて泣く／＼別れ去りぬ。女うとましながら戀しからむことをうれへ思ひて、苧の卷き集めたりけるを針につけて、狩衣の尻にさしつ。夜明けぬれば、その苧を知るべにて、尋ね行きて見れば、三輪の明神の祠に入れり。その苧の殘りの三わけに殘りたりければ、三輪の山本といふなりとぞ。

とあるに據つたのでなからうか。ワキに玄賓僧都を出したのは、江談抄第一、玄賓律師大僧都辭退事に、

　又云、去二洛陽一赴二他國一、道ニ來合女人、脫レ衣奉之侍シニ、歌云、

　　三輪川ノ渚ノ淸キ唐衣クルト思ナヱツトオモハジ

とある記事から思ひついたもので、原書では玄賓に衣を贈つたとあるのを、これには女神が請ふ樣に作つたのである。なほ、三輪明神は、古事記にも、大物主神を三諸山に意富美和之大神といつき祭つたとあつて、男神であるが、袖中抄に、前掲俊頼無名抄の記事を掲げて、今の「訪ひ來ませ」の歌を、三輪の明神住吉の明神に奉給へる御歌と申すめれば、女神と三輪をも申すべき歟。兩社の男女不審なればとかく申し難し。

とあつて、當時女神といふ說も行はれてゐたので、謠曲作者は便宜上この女神說に從つたのであらう。

【概評】 神事物ではあるが、その神が女體である故に、〔葛城〕〔龍田〕などと同じく、純脇能とせず、三・四番目物として取扱ひ、殊にクセが戀物語である爲、普通の鬘物のやうに、後ジテが「恥かしながらわが姿、上人にまみえ申すべし、罪を助けてたび給へ」といつてゐるが、「罪科は人間にあり、これは妙なる神」が「衆生濟度の方便」に、戀物語を示すのであるから、まさか他の鬘物のやうに障獄の苦しみを受けさすわけには行かない。〔葛城〕の神は役行者に呪縛の苦を受けたのであるから、山代の回向にも相當の意義が見出されるが、本曲のやうな場合には、ワキ僧の佛力を示す餘地がない。それで、このワキ玄賓は初めから、「願はくは末世の衆生の願ひを叶へ、御姿をまみえおはしませ」と「感涙に墨の袂を濡ら」してゐるのである。さうすると、後ジテが「罪を助けてたび給へ」といつてゐるのも、全く無用の語となつてしまふのであつて、また實際、この後ジテは僧の回向を受けたいで、晴々しく神代の神樂を示すのである。ワキ僧が玄賓のやうな高僧であるだけ、一層シテとワキとの關係が妙なものになつてゐるのである。むしろ〔龍田〕のやうに、初めから名所古跡を緣として、花やかに劇を展開して行つた方が、餘程自然であり得たと思ふのである。ワキとの關係を氣に惱んで、理窟をいふと、このやうなつまらないものになつてしまふが、しかし、さうした理窟を離れて、シテの演奏を見れば、戀物語を語る女性の優しさと、神代の樣を示す神體の氣品とを兼ね備へて、しとやかなゆかしい趣が味はれるのである。

【一】 後見、杉の木の作物（庵に引廻をかけ、上に杉葉を立て、注連を張廻す）を大小前に出す。名乘笛にて、ワキ玄賓僧都、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺の眞中に出で、

ワキ「これは和州三輪の山陰に住居する、玄賓と申す沙門にて候。さてもこの程いづくともなく女性一人、毎日樒閼伽の水を汲みて來り候。今

【一】 前段

舞臺は大和國三輪、玄賓僧都の庵。ワキ玄賓僧都登場

玄賓「私は大和國三輪山の麓に住んでゐる玄賓といふ僧です。さて、この頃どこからともなく、一人の女が樒を摘み閼伽の水を汲んで、私の所へ持つてくるのです。不思議な事だから、今日も來たならば、

【一】

○三輪の山―大和國磯城郡三輪町の東方にある。

○玄賓―河內國の人、姓は弓削氏、弘仁三年律師に任じ、同九年寂。古事談に「玄賓僧都者、南都第一之碩德、天下無雙之智者也、然而遁世之志深、不レ好二山科寺之交一、只三輪川邊、纔結二草庵一隱居」

○沙門―梵語沙門那 Sramana の略。僧。

○閼伽—梵語Argha 水と譯す。特に佛に供へる水をいふ。

【二】

○檜原—三輪山の北に接す新拾遺集津守國夏の歌に「かざし折る跡とも見えぬ梢かな檜原重なる三輪の茂山」

○世のなかなかに—世の中を却つての意の「なか〳〵に」にいひかけた。

○三輪の里—今の三輪町。憂き年月を見るといひかけた。

【三】
○山頭には夜—百聯抄解の詩句に「山頭夜戴孤輪月、洞口朝吐一片雲」

日も來りて候はば。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候

といひて脇座に行き下に居る。

【二】

次第の囃子にて、シテ里女、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黄・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて、左手に樒の小枝を持ちて出で、常座に立ちて大小前の方に向き、

シテ次第『三輪の山もと道もなし。三輪の山もと道もなし。檜原の奥を尋ねん

地取に正面に向き、

シテサシ『げにや老少不定とて。世のなかなかに身は殘り。幾春秋をか送りけん。あさましやなす事なくて徒らに。憂き年月を三輪の里に。住居する女にて候。(右の方に向き)「またこの山陰に玄賓僧都とて。貴き人の御入り候程に。いつも樒閼伽の水を汲みて參らせ候。今日もまた參らばやと思ひ候(と正面に直して二足詰む)

【三】

ワキ『山頭には夜孤輪の月を戴き。洞口には朝一

どういふ者か、名を尋ねて見ようと思ひます」

○見物人に自己紹介をし、庵の中で誦經してゐる態。

【二】

○シテ三輪明神、里女の態を装ひ、樒・水桶を持つて登場。

女「三輪山の麓には道もないから、道をかへて、檜原の奥へ行きませう。

ほんとに、人の命といふものは定めのないもので、老人が先に死んで、若い者が後に殘るとは限らないものだから、私のやうな者が却つていつまでも後に殘つて生き永らへ、隨分長い年月を送り迎へて來たことです。しかし、たゞ生きてゐるといふばかりで、誠にあさましい、何の爲す事もなく、徒らな情ない年月を過して、この三輪の里に住んでゐる女なのです。ところで、この山の麓に、玄賓僧都といつて、大變貴い高僧がおいでになるので、いつも樒を摘み閼伽の水を汲んで、さし上げてゐることです。今日もまたお伺ひしようと思ひます」

○自己紹介をして、やがて玄賓の許へ來た態。

【三】

玄賓「このあたりは、詩の句に『夜は山の

○山田守るそほづの身―續古今集に「備中國湯川といふ寺にて」と詞書した玄賓僧都の歌、「山田守るそほづの身こそあはれなれ秋果てぬれば訪ふ人もなし」を引いたゞそほづ（は案山子）、僧都にいひかけた。
○山影門に入つて―百聯抄解の詩句に「山影入レ門推不レ出、月光鋪レ地掃還生」
○鳥聲とこしなへに―詩句であらうが、出所は分らない。老生（は穩かでない、恐らく借字であらう。
○柴の編戸―柴で編んだ粗末な戶。建保二年歌合藤原有家の歌に「人とはゞ柴の編戸をおしあけていつか都の秋を答へむ」
○尋ね切樒―尋ね來るを切にいひかけた。切樒は樒の切り枝。
○罪―摘みといひかけた。
○軒の松風うちしぐれ―軒端の松に吹き渡る風の音が時雨に似てゐる。
○かきしく―散り敷く意。
○下樋―掛樋に對して、地中に通した樋をいふ。
○苔に聞えて―苔の下に聞えて。或は「聞えて」は「聞えで」の誤りで、苔の爲に水音も聞えないでの意か。

片の雲を吐く。山田守るそほづの身こそ悲しけれ。秋果てぬれば。訪ふ人もなし

（シテ、ワキに向ひ、）

シテ「いかにこの庵室のうちへ案內申し候はん

ワキ「案內申さんとはいつも來れる人か

シテ『山影門に入つて推せども出でず

ワキ『月光地に鋪いて掃へども又生ず

シテ ワキ 二『鳥聲とこしなへにして。老生と靜かなる山居

地下歌『柴の編戸を推し開き（とシテ戸を開く形をし）。かくしも尋ね切樒（と眞中に出て下に居り）。罪を助けてたび給へ（とワキに合掌）。上歌『秋寒き窓の內。秋寒き窓の內。軒の松風うちしぐれ。木の葉かきしく庭の面。門は葎や閉ぢつらん。下樋の水音も苔に（と水音を聞く形をし）。聞えて靜かなるこの山住ぞ

頂に淋しい月が照り、朝は岩穴からちぎれ雲が出て行く』といはれてゐる通りな所で――
『山田守るそほづの身こそ悲しけれ、秋果てぬれば訪ふ人もなし』（山田の番をしてゐる案山子の身上こそまことにあはれなものだ、秋の取入れが終れば、もう誰一人訪ねてくれる者がない、僧都の身上もその案山子のやうなものだ）
といふ境遇だ」（と獨言をいふ）

女「もうし、この庵室の方にお賴み申します」

玄賓「案內を賴むのは、いつも來る人ですか」

女「おゝこの月夜の景色、山の影は門の中に入つて、いくら推しても出ようともしません」

玄賓「月の光は地面一ぱいに照り映つて、いくら掃いても、またすぐ月影が出來るといふ有樣です」

女「鳥の聲が絕えず聞えて、老人の心靜かに住むのに似合はしい山家住ひでございます」

玄賓「全くその通りです」

やがて、女は柴で編んだ戶を開けて中に入り、

女「かうして、樒を切つてはお伺ひ致してゐるのでございます。どうか私の罪業をお救ひ下さいませ」（と玄賓に合掌す）

晩秋、このうすら寒い僧庵の內には、軒の松に吹き渡る風の音が時雨のやうに

【四】

○わが庵は三輪の山もと戀しくは—古今集讀人知らずの歌。下句「とぶらひ來ませ杉立てる門」

寂しき

【四】

シテ「いかに上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば。御衣を一重賜はり候へ

ワキ、地謡より茶水衣を受取り兩手に持ちて、

ワキ「易き間の事この衣を參らせ候べし

シテワキの前に出で下に居て水衣を兩手にて受取り、もとの座に歸りて、

シテ「あらありがたや候。さらば御暇申し候はん

と立ちて仕手柱際へ行きかゝる。

ワキ「暫く。さてさて御身はいづくに住む人ぞ

シテ常座に立留まりてワキに向き、

シテ「わらはが住家は三輪の里。山もと近き所なり。その上わが庵は。三輪の山もと戀しくはとは詠みたれども何しにわれをば訪ひ給ふべき。なほも不審に思しめさば。訪ひ來ませ

地「杉立てる門をしるしにて。尋ね給へといひ捨

聞え、庭には木葉が散りしいて居り、門は蒼草に閉ぢこめられ、地に引いた樋の水音が苔の中から聞え、いかにも靜かな寂しい有樣である。

【四】

里女は僧の前に坐って、

女「お上人樣、お願ひでございます。秋も更けて夜寒になりましたから、御衣を一枚頂戴致したうございます」

玄賓「それはお易いことだ、この衣をあげませう」

この衣を里女に與へる。里女はこれを受取って、

女「ありがたうございます。それでは、これでお暇致します」

と立って出かける。

玄賓「一寸お待ちなさい、一體あなたはどこに住んでゐる人なのです」

里女は立留って、

女「私の住家は三輪の里の、山の麓に近い所なのでございます。そして、歌にも『わが庵は三輪の山もと戀しくは、とぶらひ來ませ杉立てる門』と詠まれて居りますが、どうして、お訪ね戴けるやうな所ではございません。でも、もし御不審に思し召すならば、その杉の立つてゐる門を目じるしにして、お

ててかき消す如くに失せにけり

シテ「尋ね給へといひ捨てて」と右へ廻り作物の右側に來て正面に開き、作物に中入。

後見、シテの持ちたる水衣を作物の上に掛く、

【間】 狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて仕手柱先に出で、

狂言「かやうに候者は、和州三輪の里に住居する者にて候。この間は宿願の子細あつて、大明神へ七日の日參仕り候。今日滿參にて候間、急いで參らばやと存ずる。誠に我等如きの者の口にて、神道の事を申すは如何なれども。當社三輪の明神と申すは、伊弉諾伊弉冊の尊。天の岩倉の苔筵にて男女の語らひをなし給ひ。一女三男と申して四人の御子を儲け給ふ。一女天照大神は女體にてましま す。又三男は月神蛭子素盞嗚尊と申して御座候が。この所へ御心を留められ、御魂を留め給ふ。即ち三輪大明神の御事とやらん申し候。又大物主の御神とも申して、天照大神と御同一體とも承り候。さる間餘の御神は御社拜殿なども結構に御座候が。當社は御社もなく、杉を御神木とも御神體とも崇め申し候。又當國三室山に溝杭姫と申して御座候が、これへ御通ひなされ。當社の若宮に事代主の御神と申して御座候ひしを、信濃の國諏訪明神に祝ひたると申す。誠にかほどありがたき御神を信仰申さねば、愚かなる事にて候。（脇正面に向き）いや獨言を申す内に神前に參り着いて候。（作物に向き片膝をつき）やがて神拜申さう。あらありがたや、七日の日參する〱と成就致し、滿足申して候。やがて下向申さばやと存ずる。（立ちかけて水衣を見て）あら不思議や、御神木の、の枝に御衣のかゝつて候。これは正しくこの山陰に御座候玄賓僧都の御衣かと存じ候間。これより僧都へ參り、御衣の樣體尋ねばやと存ずる。（仕手柱先にてワキに向ひ下に居て）いかに僧都の御入り候か。この間は意り申して候

尋ね下さいませといひ捨てて、消えるがやうになくたつてしまつた。

【間】

○當社は御社もなく—奧儀抄に「此三輪明神は社もなくて、祭の日は茅の輪を三つ作りて、岩の上に置きそれを祭るなり」

○三室山—三諸山（みもろやま）の訛。

○溝杭姫—活玉依姫。

○する〱と—滯りなく。

【五】

ワキ「何とて怠られて候ぞ

狂言「尤も毎日參り申したく候へども。この程は大明神へ宿願の子細候ひて、日參仕り候ふが、今日滿參にて神前に於て結願仕りて候。さて唯今參る事餘の儀にあらず。御神木の一つの枝に御衣のかゝつて候ふが。僧都の御衣かと存じ候。何とてかけ置き給ふぞ不審に存じ候

ワキ「何と御神木の一つの枝に。愚僧が衣に似たるが掛りたると仰せ候か

狂言「なか〱の事

ワキ「それにつき思ひ合はする事の候。この程いづくともなく女性一人。毎日樒閼伽の水を持ちて來り候。則ち今日も來られし。愚僧に衣を所望申され候程に參らせて候。その後庵を尋ねて候へば、杉立てる門をしるべにて尋ね來れといひもあへず。かき消すやうに姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては疑ひもなき三輪大明神にて御座あらうずると存じ候。それを如何にと申すに。神にも五衰三熱の御苦しみの御座あると申し候間。左樣の御苦患逃れ難く思し召し、毎日樒閼伽の水を持ちて御出であり。末世の衆生濟度のため。御衣を御所望あつたると存じ候。かやうに申せども我等如きの申すことに。眞しからずと思し召さば。唯今にても神前へ御出であつて。御衣の樣體を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。立ち越え衣の樣體を見うずるにて候

狂言「さあらば我等も御跡より參らうずるにて候

ワキ「方々も跡より御出で候へ

狂言「心得申して候

【五】　といひて狂言は引く。

ワキ立ちて、

【五】　後段

玄賓はわが僧庵を出て、

○松はしるしもなかりけり—今昔物語巻二十四大江匡衡妻赤染讀和歌語の歌「わが宿の松はしるしもなかりけり杉むらならば尋ね來てまし」（玄々集にも見ゆ）を引いた。
○神垣はいづくなるらん—昔三輪明神には社殿がなかつたから、かういつた。問語參照。
○三つの輪は清く淨きぞ唐衣くると思ふな取ると思はじ—解說に揭げた江談抄の歌を少しかへて引いた。三つの輪は身口意の三業によるま衆生の惑ひを攝く三輪をいふ。唐衣は呉の音に通はせた「くる」（與へる意）の序。拾葉抄に「此歌を三輪淸淨の偈とも云ふなり。三輪空寂の布施とも又は三輪空寂の施とも云ふなり。三輪空寂とは施者・受者・施物此の三を三輪と云ふ。空寂とは施す人も受くる人も何とも心に思はず、無心なる處を空寂と云ふなり。此心をくると思ふな、えつと思はじとの神詠なり」
【六】
○千早ぶる—神の枕詞。

ワキ上歌（待謠）「この草庵を立ち出でて。この草庵を立ち出でて。行けば程なく三輪の里（と作物へ向き）。近きあたりか山陰の（二三足出で）。松はしるしもなかりけり（と正面に二三足出で）。杉むらばかり立つなる神垣はいづくなるらん神垣はいづくなるらん（と作物へ二三足出で）

ワキ「不思議やなこれなる杉の二本を見れば、ありつる女人に與へつる衣のかかりたるぞや。「寄りて見れば衣のつまに金色の文字すわれり（と二足詰め）。讀みて見れば歌なり。「三つの輪は清く淨きぞ唐衣。くると思ふな。取ると思はじ

【六】

といひて脇座に戻りて立つ。

後ジテ三輪明神、面増・鬘・鬘帶・風折烏帽子・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて、引廻をかけたる作物の内に床几にかかり居て、

後ジテ「千早ぶる。神も願ひのある故に。人の値遇

玄翁「この草庵を出て行くと、間もなく三輪の麓に來たのだが、三輪明神はこの近くなのであらうか。この山陰には目じるしの松はなく、たゞ杉林があるばかりだが、一體お社はどの邊なのか知らん。—

おゝ、これは不思議だ、この二本の杉を見ると、先程女に與へた衣がかゝつてゐるぞ。……傍へ寄つて見ると、金色の文字が書いてある。讀んで見ると、一首の和歌だ—

『三つの輪は清く淨きぞ唐衣、くると思ふな取ると思はじ』

——この衣は三[illegible]を說く三輪のうたで、清淨な從つて空寂なものである。[illegible]を人に與へた[illegible]思ふ[illegible]とはいはない、自分も[illegible]思はま[illegible]いといつて、神杉の前に[illegible]

【六】

後ジテ三輪明神、神杉の中に[illegible]、

明神「神にもやはり罪業を救はれたいとい

○衆生濟度―佛が衆生を苦惱の世界から救つて極樂の彼岸に渡すこと。これを兩部神道の說によつて、神の道にもいひ習はしたのである。
○女姿と三輪の―女姿と見ゆを三輪にいひかけた。
○襷―巫女の着る服。白布で身二幅袖一幅に作り、山藍で水草蝶鳥の模様を摺りつけ、袖を縫はずに紙捻で括る。
○掛帶―裳の腰につけた廣紐で肩にかけて結ぶ。
○祝子―神に齋きまつる職。巫。
○裳裾―裳は腰より下に着ける衣。裳裾といふも裳のこと。

に。逢ふぞ嬉しき

ワキ「不思議やなこれなる杉の木蔭より。妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願ひをかなへ。御姿をまみえおはしませと。念願深き感涙に。墨の衣を濡らすぞや

シテ「恥かしながらわが姿。上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ

ワキ「いや罪科は人間にあり。これは妙なる神道の

シテ「衆生濟度の方便なるを

ワキ「暫し迷ひの

シテ「人心や

地上歌「女姿と三輪の神。女姿と三輪の神。襷掛帶引きかへて。ただ祝子が着すなる。烏帽子狩衣。裳裾の上に掛け。御影あらたに見え給ふかたじ

ふ願ひがあるから、かうして人に逢ふのを嬉しく思ひますぞ」

玄賓「これは不思議な。この杉の木蔭から霊妙な神の御聲が聞えて、どうか神様、我々末世の衆生の願ひをもお聞き入れ下さいまして、お姿を拜ませて下さいませ。……かうして深くお願ひ申しあげると、感激の涙が溢れ出て、この僧衣を濡らすのでございます」

明神「では、お恥かしながら私の姿を上人にお見せしませう。どうぞ私の罪業をお救ひ下さいませ」

玄賓「いえ、罪業は人間にあるもので、あなたは靈妙な神様なのですから……」

明神「いや、神も衆生を救つて極樂へ渡す方便の爲には……」

玄賓「暫く迷ひの深い人間の心をもお持ちになるのでございますか」

（三輪明神姿を現す。）

玄賓「おゝ、三輪の明神が女姿をしてお現れになり、しかも、襷をもお召しにならず、掛帶をもおつけにならずに、たゞ普通の巫女が着るやうに、裳の上に狩衣を着、烏帽子を被つて、あらたかな御姿を

けなの御事や

シテ「ただ祝子が着すなると作物の後より出で常座に行き、ワキ下に居てシテに合掌。次のクリにシテ眞中に行きて立つ。後見作物の引廻を下す。

【七】

地クリ『それ神代の昔物語は末代の衆生のため。濟度方便のことわざ。品々以て世のためなり

シテサシ『中にもこの敷島は。人敬つて神力ます

地『五濁の塵に交はり。暫し心は足引の大和の國に年久しき夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿。變らぬ色を頼みけるに

シテ次の句に合せて舞ふ（舞クセ）

地クセ『されどもこの人。夜は來れども晝見えず。或夜の睦言に。御身いかなる故により。かく年月を送る身の。晝をば何と烏羽玉の夜ならで通ひ給はぬはいと不審多き事なり。唯同じくはとこしなへに。契りをこむべしとありしかば。か

【七】
○末代—佛法の衰へた末の世。
○敷島—和歌。「三つの輪は」の歌を指す。
○神力ます—神の威光を增す。
○五濁—世に流れる五の忌はしい事、劫、見、煩惱、衆生、命。五濁惡世、人界をいふ。
○塵に交はり—和光同塵。神佛が德光を和らげて人間界に降ること。
○足引の—山の枕詞。心は惡しといひかけた。
○八千代をこめし玉椿—年久しいものの喩、拾玉集に「君が代は春に春ある時ながら八千代こめたる玉椿かな」
○烏羽玉の—夜の枕詞。晝をば何とて憂く思ふといひかけた。

お示しになるとは、實に勿體ないありがたいことでございます」

【七】

三輪明神は立賓の前に出て、

明神「一體、神代の昔物語は、佛法の衰へた末世の衆生の爲に、その苦惱を救つて極樂へ渡す方便として示されたもので、その昔物語には色々數多くあるが、いづれも世の爲に示されたものに外ならないのです。その中でも、殊に和歌は尊いもので、人がこれを敬へば、愈〻神の威光が增して行くのです。さて、神は衆生を救ふ爲に、この濁つた人間界に降り、從つて一時は神の心も人間のやうになるのでありますが、その一例に、大和國に永年住み馴れてゐた夫婦の者がありました。そして、いついつまでも互に變らないやうにと契つてゐたのでした。ところが、その夫は夜は來るが晝來たことがないので、或夜睦じく語り合つた話の序に、『このやうに永い年月一所になつてゐるのに、あなたは何故晝をいやがつて、夜しかお出でにならないのです。ほ

の人答へいふやう。げにも姿は羽束師の。もりて餘所にや知られなん。今より後は通ふまじ。契りも今宵ばかりなりと。懇に語れば。さすが別れの悲しさに。歸る所を知らんとて。苧環に針をつけ。裳裾にこれをとぢつけて跡をひかへて慕ひ行く

シテ『まだ青柳の絲長く

地「結ぶや早玉の。おのが力にささがにの。絲くり返し行く程に。この山もとの神垣や。杉の下枝に止まりたり。こはそもあさましや。契りし人の姿かその絲の三わげ殘りしより。三輪のしるしの過ぎし世を語るにつけて恥かしや

と舞ひ上げて常座に立つ。

【八】

地ロンギ『げにありがたき御相好。聞くにつけても法の道なほしも頼む心かな

○羽束師の—姿は恥かしを山城國乙訓郡の名所羽束師の森に、森を漏りてにいひかけた。

○苧環—苧を卷いて輪にしたもの。

○青柳の—絲の序詞。絲に甚だの意の「いと」を含ませた。

○早玉の—熊野新宮の祭神早玉男神をいひかけた。

○ささがに—蜘蛛。

○絲くり返し行く—絲をたぐつて行く事を蜘蛛の巣をかける樣に比べていつた。

○三わげ—三卷き。

○しるしの過ぎし—しるしの杉を過ぎしにいひかけた

【八】

○御相好—御姿。

んとに不審に思はれてなりません。成るべくならば、[illegible]、[illegible]なくいつまでもこゝにゐて下さい』と申しますと、その夫が『いかにもこの姿が恥かしくて、誰來たならば、自然外の人にも知られよう。一層のこと今日以後は夜も通つて來まい、あなたとの緣も今夜限りだ』と、しみじみ申しましたので、女もさすがお別れを悲しんで、夫の歸る所を知りたいと思つて、苧環の絲の先に針をつけ、それを夫の裳裾にとぢつけて、絲を目あてにして、その跡を慕つて行つたのです。初めのうちは、絲が隨分長かつたのですが、次第にたぐつて行くうちに、絲の先がこの山の麓の神杉の下枝のところで止まつたのです。これはまあ何といふ驚いたことでありう。自分の契りを結んだ人はこれであつたのかと驚いたのです。さて、その時苧環の絲が『三わげ』殘つてゐたので、こゝを三輪といひ、三輪のしるしの杉といふやうになつたのです。かうした昔話を申すにつけて、昔の事が思ひ出されてお恥かしうございます」

【八】

地「あゝ實にありがたいお姿、かうしたお話を伺ふにつけて、愈〻神佛が信仰せられるのでございます」

シテ『とても神代の物語委しくいざや現しかの上人を慰めん

地『まづは岩戸のその始め。隠れし神を出ださんとて。八百萬の神遊び。これぞ神樂の。はじめなる

とシテくつろぎて扇をさし幣を持ちて出で、

【九】

シテ『ちはやぶる

〔神樂〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『天の岩戸を。引き立てて

地『神は跡なく入り給へば。常闇の世と。はやなりぬ

シテ『八百萬の神たち。岩戸の前にてこれを歎き。神樂を奏して舞ひ給へば

地『天照大神その時に岩戸を。少し開き給へば。

明神『では、一層のこと、神代の物語を委しく示して、上人をお慰めしませう。――まづ、天照大神が天の岩戸にお隠れ遊ばした時、大神を岩屋からお出し申さうとして、多くの神達が舞樂をなされた、これが神樂の起原です。

【九】

〔神樂〕にその様を示し、

明神『天照大神が天の岩戸を締めて、中へお入りになつてしまつたので、この世は忽ちにして晝も夜もない、常闇の世界となつてしまひました。――多くの神々は、これを歎いて、岩戸の前で神樂を奏してお舞ひになると、天照大神がその時岩戸を少し開けて御覧になつたので、こゝに又、常闇の雲が晴れて、月日が光り輝いて、人々の顔が白々と見

○岩戸のその始め―天照大神が天岩戸にお隠れ遊ばした事をいふ。

【九】
○ちはやぶる―褌の袖を振つて舞ふ意を神の枕詞千早振にいひかけ、句を隔てて「神は跡なく」へ續けた。

又常闇の雲晴れて。日月光り輝けば。人の面白白と見ゆる

シテ『面白やと神の御聲の

地『妙なる始めの。物語

地（キリ）『思へば伊勢と三輪の神。思へば伊勢と三輪の神。一體分身の御事今更何と磐座や。その關の戸の夜も明け。かくありがたき夢の告。さむるや名殘なるらんさむるや名殘なるらん

と常座にて留拍子を踏む。

えました、それで、神々は喜んで、おも白』と仰しやつた。――これがありがたい神代の始めの物語です」

玄賓「いかにも考へて見れば、伊勢天照大神とこの三輪明神とは、御一體のお分れになつたもので、今更事新しく申すまでもないことであつた。……おゝもはや、あの天の岩戸の開いた時のやうに夜が明けて來て、このやうなありがたい夢のお告もさめてしまふかと思へば、實に名殘惜しいことだ」

（玄賓僧都の感激してゐるうちに夜は明け、三輪明神は夢から消える態で退場）

○常闇―晝夜の差別なく闇いこと。
○面白やと―古語拾遺に「當此之時、上天初晴、衆俱相見、面皆明白、伸手歌舞、相與稱曰、阿波禮、阿那於茂志呂、阿那多能志、阿那佐夜憩、飫憩」
○伊勢と三輪の神一體分身―三輪明神を女體とした所から、女神の天照大神と同一體といつたのであらう。
○何と磐座や―何と言はんといひかけた。磐座は神のおはす所を稱へていふ語。
○關の戸の―天の岩戸を關の戸に喩へ、戸の開くと夜の明くとを兼ねて次句につづけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

【五】ワキ上歌「この草庵を立ち出でて……松はしるしもなかりけり（寶剛喜常盤の色ぞかし）

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「これは和州……さてもこの程いづくともなく女性一人毎日（光ナシ）……水を汲みて來り（光る者の）候……

【四】ワキ「易き間（光程）の事この衣を參らせ候べし。シテ「あらありがたや候さらば御暇申し候はん。ワキ「暫く（光ナシ）さてさて……

三井寺(みゐでら)

観（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四番目 二段劇能

【人物】**前シテ** 千滿の母、**狂言** 夢卜者、**子方** 千滿、**ワキ** 三井寺住僧、**ワキツレ** 同從僧（二人）、**狂言** 能力、**後シテ** 千滿の母（狂女）

【所】**第一段** 京都清水寺
第二段 近江國三井寺

【時】八月

【作者】能本作者註文、二百十番謡目録ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に「人の鐘の能せしに、南むきなるに鐘を右の方に置く。左鐘撞きしなり。幾度も左におきて、右に鐘をつくべし」とあるのは、本曲についていつたものか。金春禪竹の歌舞髓腦記に本曲の事を記してゐる。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月四日、粟田口猿樂記に永正二年四月十四日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月廿八日註釋のことが見えてゐる。

【梗概】駿河國淸見が關の者、千滿の母は人商人の手に渡つたわが子の行方を尋ねて、遙々京都まで來て、淸水寺に參つて、親子の再會を祈つてゐると、三井寺へ行けばわが子に逢へる、との夢のお告があつた。母は喜んで三井寺へ來たが、既にその時は心が亂れてゐた。時は八月十五夜、寺僧はこの寺へ頼つて來た千滿を伴つて月見をしてゐた。狂亂の母は月の興に乘じて鐘を撞き、寺僧に咎められたが、色々鐘の故事を述べて謠ひ舞つた。そして終に親子の再會を得て、共に鄕里に歸り、富貴の家となつた。

【出典】世話物で、典據といふべきほどのものはない。二條僞世の文と傳へられるものに千團子舊詞があり、三井寺に於ける母子の再會を描いてゐるが、本曲とは可なり緣遠いものである。

【概評】母物狂ものは、おしなべて秀れた作が多いが、これも亦佳作の一たるを失はない。殊に他の類曲に比べても、脚色が滑かである。第一段の淸水寺の祈願も面白い構想であり、第二段の物狂も〔櫻川〕のやうに第三者から殊更しかけられるやうな無理がなくてよい。第五節のワキ・シテ掛合には狂女らしくない、多少理窟ぽいといふ非難はあるが、次の「鐘の段」曲舞は文章も美しく情も濃やかで、物狂の演舞と相俟つて、十分の効果を擧げてゐるのである。キリの「げにありがたき孝行の威德ぞめでたかりける」は、母子再會物に與へる常套的結末であつて、謠曲作者道義的解釋の現れに外ならない。

【一】

シテ母、面深井・鬘・鬘帶・摺箔・着附箔・無色唐織着流の裝束にて數珠を持ち、何事もなく舞臺に出で、眞中にて下に居て合掌して、

シテサシ「南無や大慈大悲の觀世音さしも草。さしもかしこき誓ひの末。一稱一念猶頼みあり。ましてやこの程日を送り。夜を重ねたる頼みの末。などかそのかひなからんと。思ふ心ぞあはれな

【一】第一段

舞臺は京都淸水寺。――千滿の母が登場、佛前に參つてゐる態で、

母　南無大慈大悲の觀音樣、觀音樣はお慈悲の廣大無邊な方で、一度觀世音の御名を稱へただけでも、ありがたい御利益を賜はるのでございます。まして、私はこの間から毎日毎夜お祈り致して居るのでございますから、御利益のない筈はないと思ふのでございます。……このやうに

【一】

○南無―梵語Namas. 歸命又は敬禮と譯す。

○大慈大悲の―觀音の慈悲の廣大なのをいふ。觀音玄義に「初以二大悲一拔レ苦、後以二大慈一與レ樂」

○觀世音―阿彌陀如來の左の脇士、世人のその名を稱する音聲を觀じて皆解脫を得しめる慈悲の菩薩。

○さしも草―新古今集、淸水觀音の御歌と詞書した「なほ頼めしめぢが原のさ

しも草われ世の中にあらん限りは―により、次の―さしも―の序詞とした。
○誓ひ―大慈大悲の誓約。
○一稱一念―觀音の御名を一度稱へ一度念じる。
○枯れたる木にだにも―千手陀羅尼經に「念二彼觀音力一枯木華更開」古今著聞集六に「いづれの佛の願よりも、千手の誓ひぞ頼もしき、枯れたる草木も忽ちに、花咲き實のると說きたれば」
○若木のみどり子―若木の緑を緑子にいひかけた。緑子は幼兒。
○睡眠―眠を「めん」と讀むのは禪家の讀法で、眠藏「めんざう」などといふ。
○あらたなる―あらたかな

る（と手を下し）
シテ下歌「憐み給へ思ひ子の。行く末何となりぬらん。行く末何となりぬらん。上歌「枯れたる木にだにも。枯れたる木にだにも。花咲くべくはおのづから。未だ若木のみどり子に。二度などか、逢はざらん。二度などか逢はざらん。あらありがたや候。少し睡眠のうちに。あらたなる靈夢を蒙りて候はいかに。わらはをいつも訪ひ慰むる人の候。あはれ來れ候へかし語らばやと思ひ候

といひて立ち常座に行く。

狂言夢卜者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて、橋懸一の松に立ち、

狂言「かやうに候者は。清水寺門前に住居する者にて候。この程都より參籠の女性に御宿を參らせ候が。最早御下向の時分にて候間。御迎へに參らばやと存じ候。（舞臺際へ進み）はやこれへ御下向にて候。御宿の亭主御迎へに參りて候。まづこれへ御腰を召され候へ

お祈りする私の心は實にあはれなものでございます。どうか、お憐み下さいませ。私の可愛い子はどこへ行つてしまつたのでございませう。觀音樣の御力は實にあらたかなもので、枯れた木にさへ花をお咲かせになるのでございますから、ましてわが子は若木の緑のやうなものでございますから、觀音樣の御利益さへ受ければ、また逢へない筈はないと存じます」

ここにて祈願しつゝ居眠りをしゐるうちに、眠つて夢を見た態で、

母「あゝありがたいことでございます。少し眠つてゐる間に、あらたかな夢のお告を蒙きました。……いつも來て私を慰めてくれる人があるが、よい具合に來てくれるとよいが。そしたら、この夢のお告の事を話しませう」

そこへ、狂言夢卜者が來て、

〔一〕三井寺　園城寺の通稱。近江國大津の西北にあり、弘文天皇の皇子大友與多王の創建、貞觀年中智證大師の再興した寺。もと延暦寺の別院であつたが、互にその勢を爭つた。今天台宗寺門派の本山。

【一】

と床几を持ち出しこシテに腰をかけさせ、脇正面にてシテに向ひ下に居て、

狂言「さて御參籠のうちに御靈夢はなく候か。我等は門前にて夢を合はする者にて候。何にても御靈夢の候はば合はせて參らせうずるにて候

シテ「唯今少し睡眠のうちに。あらたなる御靈夢を蒙りて候。わが子に逢はんと思はば。三井寺へ參れとあらたに御靈夢を蒙りて候

狂言「これはめでたき御靈夢にて候。まづ尋ぬる人に近江の國。思ふ子を三井寺。かやうのめでたき御靈夢はあるまじく候。急ぎ三井寺へ御參り候へ

シテ「あら嬉しと御あはせ候ものかな。告に任せて三井寺とやらんへ參り候べし

と床几をはなれて靜かに中入。狂言も床几を取入れて幕に入る。

【二】

後見、鐘樓の作物を目附柱の側に出す。次第の囃子にて、子方千滿、襟赤・着附縫箔・稚兒袴・腰帶・扇の裝束、ワキ三井寺住僧、角帽子・着附小格子・絓水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキ同樣の裝束（着附は無地熨斗目、水衣は縷）にて、子方を先に立てて

ト者「お籠りの間にあらたかな夢のお告はありませんでしたか。私は門前で夢占ひをする者ですから、何でも夢のお告があれば、判斷してあげませう」

母「唯今少し眠つてゐる間に、あらたかな夢のお告を戴きました。それは、わが子に逢ひたいと思ふならば、三井寺へ參れと、かういふあらたかなお告を戴きました」

ト者「これはめでたいお告です、まづ近江といへば、尋ねる人に逢ふ意味、三井寺といへば思ふ子を見る意味で、これほどめでたいお告はまたとありますまい。早速三井寺へお參りなさい」

母「おゝよくお合はせ下さいました、ありがたうございます。夢のお告に從つて、三井寺とか申す所へ參りませう」

と三井寺へ行く態で退場。

【三】

第二段

舞臺は近江國三井寺。子方千滿、ワキ三井寺住僧、ワキヅレ同從僧に伴はれ、月見の態で登場。

○秋もなかばの暮―八月十五日の日の暮。

○園城寺―三井寺の本名。

○力なく―やむを得ず、致し方なく。

○講堂―經文を講讀論議する所で、七堂伽藍の一。

○類ひなき名を望月の―無類の月であるとの名聲を持つといふを望月にいひかけた。望月は十五夜の月。宗祇連歌の發句に―たぐひなき名を望月の今宵かな―

○かねてより―十五夜にならない前から。

○月の名頼む日影かな―望月といふ名の如くに月が明らかであるやうにと、夕日影を仰ぎつゝ、雲を厭ふとの意。

舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第「秋もなかばの暮待ちて、秋もなかばの暮待ちて。月に心や急ぐらん

地取に子方とワキは正面に向き、

ワキ これは江州園城寺の住僧にて候。(子方を見て)又これに渡り候幼き人は、愚僧を頼む由仰せ候間。力なく師弟の契約をなし申して候。(正面に直し)又今夜は八月十五夜明月にて候程に。幼き人を伴ひ申し、皆々講堂の庭に出でて月を眺めばやと存じ候

といひて向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 上歌「類ひなき。名を望月の今宵とて。名を望月の今宵とて。夕を急ぐ人心。知るも知らぬも諸共に。雲を厭ふやかねてより。月の名頼む、日影かな月の名頼む日影かな

ワキ「雲を厭ふやかねてより」と正面に向きて二三足出で、

僧「今日は中秋八月十五日で、日の暮れるのを待ちかねて、早く月見がしたいと、氣のせき立つことだ」

と弟子を顧みて月見の心持を述べ、

僧「私は近江國園城寺の住僧です。又こゝに居られる小さい人は自分を頼むといはれるので、已むを得ず師弟の約束をしたのです。さて今夜は八月十五夜の明月なので、小さい人を連れて、皆一緒に講堂の庭に出て、月見をしようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「今夜はその名も望月といつて、八月十五夜、外に類ひのない時なので、誰も彼も夕暮になるのを待ちかねて、知合の者も見ず知らずの者も、皆一緒にうち連れて、空に雲のかゝるのを氣づかひながら、この名月を待ちうけてゐることだ」

といひながら講堂の庭へ來た態。

○少人—稚兒。

○とゞめく—ざわめく。物騒がしい音がする。

○三位殿—僧の敬稱に用ゐたものらしいが、その語原は未だ詳かにしない。

またもとに歸り「月の名賴む日影かな」と言ひながら脇座に行き、子方より順次下に居る。狂言能力、能力頭巾・着附無地熨斗目・水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出て

能力「さても〳〵見事なる月かな。毎年名月とて御覽候へども。今宵のやうに冴えたる月のあるまじく候。この由申さう。（ワキの前に出で片膝つき）いかに申し候。毎年名月とて御覽候へども。今宵のやうに冴えたる月はあるまじく候

ワキ「げに〳〵汝の申す如く。今宵の月ほど面白き事はあるまじく候。又少人を伴ひてある間。何にても一曲かなで候へ

能力「畏つて候

【小舞】をして幕の方を見、

能力「や、そなたがとゞめくは何事ぢや。（仕手柱際へ行き）何ぢや。女物狂が來るといふか。これは面白からう。見たいものでござる。三位殿へ申し御庭へ呼び入れ狂はせ申さう。（ワキを招きて）三位殿〳〵

ワキ「何事にて候ぞ

能力「あなたがとゞめき候間。何事ぞと尋ねて候へば。女物狂が參ると申す。御庭に呼び入れ狂はせ申さうずるが。何と御座あらうずるぞ

ワキ「いや〳〵左樣の者は無用に仕り候へ

狂言「いや苦しう御座あるまい。三位殿〳〵

ワキ「いや無用にて候

能力「これはいかな事。三位殿のやうな意地の悪い人はござらぬ。さりながらあのやうにいはるゝによつて見る事はなるまい。（幕の方を見て）その女物狂はこなたへは無用にてある間。追ひ返し候へ。何ぢや面白う狂ふといふか。よい〳〵この上は三位殿が何といはれうとまゝよ。某が心得るほどに。その女物狂をそちへ追ひ返す體にして。道を廣々とあけてこなたへ通し候へ

　といひて笛座前に坐す。

【三】

　一聲の囃子にて、後ジテ母（狂女）、面深井・鬘・鬘帯・摺浅黄・着附摺箔・水衣・無色縫箔腰巻の裝束にて扇を懐中し笹をかたげて出で、橋懸一の松に立ち、

後ジテ『雪ならば幾度袖を拂はまし。花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過ぎて（笹を下して）眺めの末は湖の（右の方に向きて）鳰照る比叡の山高み（見上げて）上見ぬ鷲のお山とやらんを。今目の前に拜む事よ（正面に向きて）あらありがたの御事や（合掌して）「かやうに心あり顔なれども（手を下して）われは物

【三】

後ジテ千満の母、わが子を思ふ餘り狂亂しながら三井寺の方へ尋ね來る態で登場。

母「古歌に『落花が雪のやうに吹き散つて袖にかゝることだ。もしこれがほんとの雪であつたならば、幾度も幾度も袖を拂はなければなるまい』と詠まれた志賀の山越を通つて、遥かに琵琶湖を見渡すと、彼方に比叡山が高く聳えてゐる。これこそわが國の靈鷲山と崇められてゐる山で、それを今眼の前に拜むことの出來るのは、ほんとにありがたいことだ」

（合掌し、

【三】○雪ならば幾度袖を拂はまし―下句「花の吹雪の志賀の山越」といふ古歌であらう。〔志賀〕にも引かれてゐるが、出所は分らない。

○志賀の山越―袖中抄に「志賀の山越は北白川の瀧の傍より登りて、如意の峯を越えて志賀へ出づる路なり」

○鳰照る―琵琶湖又はその周邊の景物の枕詞。語原は「匂ひ照る」の約とも「鳰鳥の」の訛ともいふ。

○比叡の山―山城近江の兩國に跨る大山、山上に延暦寺がある。

○上見ぬ―鷲の形容。鷲は空高く翔け上つて、下ばかりを見るから、かくいふ。

○鷲のお山―中印度摩竭陀國王舍城の東北に聳える山で、釋尊説法の地。比叡山をこれに擬へた。

○心あり顔―信仰心あり、思慮がありさうである。

に狂ふよなう。いやわれながら理なり、あの鳥類や畜類だにも、親子のあはれは知るぞかし、『ましてや人の親として。いとほしかなしと育てつる

シテ一聲『子の行方をも白絲の（と亂れながら舞臺に入り）

地『亂れ心や狂ふらん

〔カケリ〕

シテ『都の秋を捨てて行かば

地『月見ぬ里に。住みや習へるとさこそ人の笑はめ（見廻し）。よし花も紅葉も。月も雪も古里に（正面に出で）。わが子のあるならば田舍も住みよかるべしいざ古里に歸らんいざ古里に歸らん（常座へ行き）。歸ればささ波や志賀辛崎の一つ松（正面を見込み）。みどり子の類ひならば。松風に言問はん（橋懸の松を見やり）。松風も。今は厭はじ櫻咲く（左へ出で）。

○かなし―かわいゝ。

○白絲の―行方をも知らずを白絲に、絲の亂れを亂れ心にいひかけた。

○都の秋を捨てて―古今集伊勢の歌「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」の春を秋に、花を月にかへて用ゐた。

○月も雪も古里に―雪も降るを古里にいひかけた。たとへ花や紅葉や月や雪がなくとも、古里に子があるならばといふ意。

○ささ波や―志賀の枕詞。

○辛崎の一つ松―滋賀郡滋賀村、近江八景の一。

○みどり子の類ひ―松の緑を緑子の仲間に見立てた。

○今は厭はじ―花の咲いてゐる頃ならば松風も厭はしいが。

○櫻咲く春ならば―春櫻の咲いてゐる時ならば、その名にふさはしい花園の地。

りかうして[illegible]、いかにも[illegible]な、信仰心のありさうな顔付に見えるけれど、實は自分は氣が狂つてゐるのだ。……いや、氣の狂ふのも、われながら[illegible]ことだと思ふ、何故なれば、鳥類や畜類でさへも、親子の情愛はあるのに、まして人間が、親としていとし可愛いと大切に育ててゐた子の行方が分らなくなつてしまつたのだもの。それで、心がこのやうに亂れ狂ふのだ」

〔カケリ〕

（狂氣の樣を演じ、）

母「春霞を見捨てて行く雁を『花なき里に住みや習へる』と笑ふやうに、私がかうして都の秋を見捨てて行けば、『月なき里に住みや習へる』と、さぞ人が笑ふことであらう。しかし、たとへ花や紅葉や月や雪や、さうした美しい眺めがないにしても、わが古里に子がゐてくれさへすれば、どんなに田舍であらうとも、その方が一層住みよいことであらう。さあ古里へ歸りませう。……かうして、歸り途につくと、向ふに志賀辛崎の一つ松が見えるが、あれがみどり子に緣のあるものならば、その松吹く風にわが子の行方を尋ねたいものだ。松風――それも櫻の咲

○花園―天智天皇大津の宮の御時作らせ給うた遊覽地であると傳へてゐるが、今は跡がない。
○杉間吹く―里をも早く過ぎを杉にいひかけた。
○秋の水の―水は三井の井に縁を持たせたのである。

【四】

○桂は實る三五の暮―李嶠の詩「桂生三五夕、蓂開二八時」を引いた。桂は月世界にある樹。
○三五夜中の―和漢朗詠集白樂天の詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」
○水の面に照る月なみを數ふれば―拾遺集源順の歌。
○下句―今宵ぞ秋の最中なりける―月なみは月の順序といふ意で、波にいひかけた水の縁語。
○月は山風ぞ時雨に鳰の海―流渡集二條良基の發句。月は山に照つてゐるのに、風の音は時雨に似るといふを鳰にいひかけた。
○粟津の森―滋賀郡膳所にある。波も淡く見ゆといひかけた。
○鏡山―蒲生郡、三上山の東にある。月は眞澄の鏡の如くに照り輝くといひかけた。

春ならば花園の。里をも早く杉間吹く（右へ廻り）。風すさましき秋の水の。三井寺に着きにけり三井寺に、早く着きにけり（と大小前に行き正面に向く）

【四】

ソキ「桂は實る三五の暮。名高き月にあこがれて。庭の木蔭に休らへば

シテ「げにげに今宵は三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心。水の面に照る月なみを數ふれば。秋も最中夜もなかば。所からさへ面白や

地上歌「月は山。風ぞ時雨に鳰の海。風ぞ時雨に鳰の海。波も粟津の森見えて（眞中に出て）。海越しのかすかに向ふ影なれど月は眞澄の鏡山（正面先にて眺め）。山田矢橋の渡舟の夜は通ふ人なくとも（右へ廻り）。月の誘はばおのづから。舟もこがれて出づらん舟人もこがれ出づらん
（と橋懸に行きてくつろぐ）

く頃ならば、花を散らす心配もあるが、今はどんなに吹かうと、別段構ひはしないのだ。……おゝ、あの春の頃ならばその名に適はしい花園の里も通り過ぎて、杉の木の間を秋風の烈しく吹く中を通つて、もはや三井寺に着いたことだ」
（といつてゐる間に三井寺に着いた態。）

【四】

（僧は空の月を眺めて、）
僧「八月十五夜、名月にあこがれて、庭の木蔭に休んでゐると……」
（といひかけると、千満の母も同じやうに月を眺めて、）
母「ほんとに、今夜は、詩に『八月十五夜の月が今しも山の端から現れ出て、二千里も距つた遠方にゐる友達の事が偲ばれる』とか、歌に『水の面に照る月を見て、日數を數へて見ると、今夜が丁度中秋なのだ、成程月の光が殊の外美しいわけだ』とか詠まれた夜で、殊にこゝは場所柄一段と面白い眺めだ。山には月が照つてゐるが、風の音は時雨の降つてゐるやうだ。琵琶湖の波間を距てた彼方に粟津の森が見える。海越しのずつと向ふではあるが、あの鏡山も月の光ではつきり見える。この月の面白さ。山田や矢橋の渡舟も、夜のこととて通ふ人はないにしても、この月の面白さに誘はれては、船頭も舟を漕ぎ出してくることであらう。舟も浮かれ出てくることであらう」

○山田矢橋―山田は栗太郡草津の西、矢橋は同じく勢田の北にあり、共に大津に通ふ渡船場であつた。

○舟もこがれて―「漕がれて」と「焦がれて」と兼ねていつた。

【五】

○清見寺―駿河國庵原郡興津町にある臨濟宗の古刹。弘長二年明元禪師の開基といふ。

○さざ波や三井の古寺鐘はあれど昔にかへる聲は聞えず―新撰集歌枕「定円の歌。

○秀郷とやらんの―三井寺の鐘は承平の頃俵藤太秀郷が蜈蚣を退治した功により龍宮から贈られたものであるとの傳説を指す。この事、太平記巻十五にも見ゆ。

○龍女が成佛―娑竭羅龍王の八歳の女が男子に變成して南方無垢世界に生まれた事を指す。この事、法華經提婆達多品に見ゆ。

○影はさながら霜夜にて―月影が宛も霜夜のやうであるから、鐘の音も霜夜のやうに冴え〲と響くであらうとの意。

【五】

狂言能力、舞臺の眞中に出で、

能力「さてもさても宵の大御酒に飲醉ひて後夜を忘れうと致した。急いで撞かう。誠にこの鐘は銘東大寺。形平等院。聲園城寺と申して。天下に三つの鐘にて候。されば撞かう

作物の鐘を撞く形をして、

能力「じやんもん、もん〲

幾度も鐘の音を眞似てゐる間にシテ一の松にて耳をすまして聞き、

シテ「面白の鐘の音やな。わが古里にては清見寺の鐘をこそ常は聞き馴れしに。これは又さざ波や、三井の古寺鐘はあれど、昔に歸る聲は聞えず。まことやこの鐘は秀郷とやらんの龍宮より取りて歸りし鐘なれば。龍女が成佛の縁にまかせて。わらはも鐘を撞くべきなり(と舞臺に入り)

地次第「影はさながら霜夜にて。月にや鐘は冴えぬらん

地取にシテ笹を捨てて扇を持ち、鐘樓の方へ行きかゝる、能力ワキに向ひ、

【五】

[illegible]き惚れてゐて、

母「おゝ鐘の音の面白いこと。わが古里には、清見寺の鐘をいつも聞き馴れてゐたが、こゝの鐘は又、歌にも『さざ波や三井の古寺鐘はあれど、昔に歸る聲は聞えず』なとと詠まれた、有名な鐘なのだ、……さう〲、この鐘は秀郷とかいふ人が龍宮から取つて歸つた鐘だから、かの八歳の龍女が成佛したといふ話に縁のある鐘だ。私も佛縁を祈つて、この鐘を撞きませう」(と鐘樓に近づき)

母「月の光で地面が眞白になつて、まるで霜夜のやうだ。これでは、鐘の音もさぞ冴え渡ることであらう」

と鐘を撞きかける。寺男、僧にこの事を告げる。

能力「いかに申し候。狂女が鐘を撞かうずる由申し候
ワキ「心得てある（といひて立ち）
ワキ「やあやあ暫く。狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ急いでのき候へ
シテ「夜庾公が樓に登りしも。月に詠ぜし鐘の音なり許さしめ
ワキ「それは心ある古人の言葉。狂人の身として鐘撞くべきこと。思ひもよらぬ事にてあるぞとよ
シテ「今宵の月に鐘撞くこと。狂人とてな厭ひ給ひそ或詩に曰く。團々として海嶠を離れ。冉々として雲衢を出づ。この後句なかりしかば。明月に向つて心を澄まいて。今宵一輪滿てり。淸光何れの所にかなからんと。この句をまうけてあまりの嬉しさに心亂れ。高樓に登つて鐘を

僧「あゝこれ〳〵、氣違ひでありながら何故鐘を撞くのだ。早くそこをのけ」
母「夜庾公が樓臺に登つたのも、月の詩興に乘じてのことで、今私が鐘を撞かうとするのも、同じ心持です。どうぞお許し下さい」
僧「いや、それは風雅な昔の詩人の言葉で、全く別問題だ。氣違ひが鐘を撞くなどとは、以ての外のことだ」
母「今夜の月の面白さに鐘を撞かうとするのを、氣違ひだからといつて、け嫌ひをなさるものではありません。昔或詩人が『丸々とした月が海邊近い山から出て、だん〳〵と空に昇つて來る』といふ詩句を作つたが、その後の句が出來なかつたので、明月に向つて心を澄ましてゐると、『今夜の月は實に丸々としてゐる。この淸らかな光の到らぬ隈はないだらう』といふ句が浮かんで來ました。その嬉しさ

○庾公―鐘樓を樓臺に擬して、和漢朗詠集謝觀の賦「曉入二梁王之苑一雪滿二群山一、夜登二庾公之樓一月明二千里一」を引いた。庾公名は亮、晉代の人で、月明の夜部下の者が密かに南樓に登つて權飮したのを咎めず、却つて共に談詠したと晉書にある。
○心ある古人の言葉―前掲朗詠集の句を指す。
○團々として海嶠を離れ―唐の賈島の詩「團々離二海嶠一、冉々出二雲衢一、此夜一輪滿、淸光何處無」を引いた。堯山堂外記には李先主の時或寺僧がこの詩を作つて、喜びの餘り夜半に鐘を撞いたといふ。但しそれには起承二句「徐々東海出、漸々上二天衢一」とある。
○この後句なかりしかば―江隣幾雜志に「南唐一詩僧賦二中秋月一詩云、此夜一輪滿、至二來秋一得二下句一云、淸光何處無、喜躍半夜起撞二寺鐘一、城人盡驚、李後主擒而訊レ之、且道二其事一得レ釋」

○かほどの聖人—以下クセ上の終り「三井寺の鐘ぞさやけき」までを鐘の段といふ。
○聖人—一道に練達した人といふ意。
○初夜—六時の一で、六時は晨朝（今の午前四時）、日中（正午）、日沒（入相、午後六時）、初夜（午後八時）、中夜（午後十二時）、後夜（午前二時）。
○諸行無常—涅槃經の四句偈文「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」を六時に割りあてて引いた。偈文は「すべての現象は皆無常なもので、生あるものは必ず滅びる。すべてのものは、或は生まれ或は滅びるが、結局皆滅びてしまふのである。だから、寂しい滅無がほんとの樂しみである」との意。
○菩提—梵語 Bodhi、佛の正覺の智慧。

撞く人々いかにと咎めしにこれは詩狂と答ふ。かほどの聖人なりしだに、月には亂るる心あり。『ましてや拙き狂女なれば
地「許し給へや人々よ（ワキへ合掌）。煩惱の（手を下し）。夢をさますや。法の聲も靜かにまづ初夜の鐘を撞く時は（角へ行き）

ワキこの間に下に居る。

シテ『諸行無常と響くなり（左へ廻り）
地『後夜の鐘を撞く時は
シテ『是生滅法と響くなり（大小前へ行き）
地『晨朝の響は
シテ『生滅滅已（小廻し）
地『入相は（正面に開き）
シテ『寂滅
地『爲樂と響きて菩提の道の鐘の聲（鐘樓へ行き）。月

の餘り、心が亂れ、時刻によつて鐘を撞きましたので、見てゐた人々が『どうしたのだ』と咎めますと、『これは詩狂だ』と答へました。あれほどの名人でも、月には心の亂れるものです。まして私のやうなつまらない狂女のことです。どうぞお許し下さい。——鐘の聲を聞いて煩惱の夢を覺まし、心靜かに佛の御教へを伺ひませう。まづ初夜の鐘を撞けば、「諸行無常」と響く。後夜の鐘を撞けば、「是生滅法」と響く。晨朝の鐘を撞けば、「生滅滅已」と響く。入相の鐘を撞けば、「寂滅爲樂」と響く。からして幾度となく響き渡る鐘の聲に、

○百八煩惱―百八種の心神を惱亂せしめるもの。楞伽經に六根の各に好惡平の三種の不同があつて十八煩惱を生じ、また苦樂捨の三受があつて十八煩惱を生じ、以上三十六煩惱を過現未の三世に配して百八煩惱となるといふ。
○五障―女人は轉輪王、梵天王、帝釋、魔王、佛になる事が出來ないといふ五の障り。法華經に見ゆ。
○眞如の月―眞實不變の實體を月に喩へた語。
【六】
○長樂の鐘の聲は―和漢朗詠集李嶠の詩句―長樂鐘聲花外盡、龍池柳色雨中深―を引いた。長樂は秦獻公の作つた宮殿、龍池は唐の興慶宮にあり玄宗の遊んだ所。
○ここにも―わが國でも。
○言葉の林の―言葉の林は和歌をいふ。林鐘（六月の異名）の鐘を豫てにいひかけた。
○高砂の尾上の鐘―名も高きといひかけて、千載集大江匡房の歌―高砂の尾上の鐘の音すなり曉かけて霜やおくらん―を引いた。高砂は播磨國の名所、同名の曲參照。

も數添ひて（鐘の紐を持ち）。百八煩惱の眠りの（鐘を撞き）。驚く夢の世の迷ひも（右へ行き）。はや撞きたりや後夜の鐘に（鐘を見上げ）。われも五障の雲晴れて
（右へ廻り紐を頭の上へ越させ）。眞如の月の影を眺め居りて明かさん（と紐を捨てて大小前に行き下に居る）

【六】
地クリ「それ長樂の鐘の聲は。花の外につきぬ
シテ『又龍池の柳の色は
地『雨の中に深し
シテサシ『その外ここにも代々の人。言葉の林のかねて聞く
地『名も高砂の尾上の鐘。曉かけて秋の霜。曇るか月もこもりくの初瀨も遠し難波寺
シテ『名所多き。鐘の音
地『盡きぬや法の聲ならん
（居クセ）

悟りの道を聞き、種々の煩惱の迷ひから覺め、夢のやうな果敢ない浮世の執着を離れることが出來るのです。……おゝもう後夜の鐘も濟んだ。さあ、私も五障の迷ひを晴らし、澄みきつた月を眺めて夜を明かしませう―

【六】
地「鐘といへば、詩の句に『長樂殿の鐘の聲が花の中に消えて行き、龍池の柳は雨の爲に愈〻綠濃くなつて來る』といはれてゐますが、わが國でも、代々の歌人が鐘のことを色々と歌に詠んでゐます。――
例へば有名な「高砂の尾上の鐘の音すなり、曉かけて霜やおくらん』とか、その外、初瀨寺とか難波寺とか、あちらこちら名所の鐘のことが詠まれてゐますが、それにつけても、限りなき佛の御敎へが伺へるのです。――

地クセ山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける。げに惜しめどもなど夢の春と暮れぬらん。その外曉の。妹背を惜しむきぬぎぬの。恨みを添ふる行方にも枕の鐘や響くらん。又待つ宵に。更け行く鐘の聲聞けば。飽かぬ別れの鳥は。ものかはと詠ぜしも。戀路の便りの音づれの聲と聞くものを。又は老らくの。寢覺ほどふる古を。今思ひ寢の夢だにも。涙心のさみしさに。この鐘のつくづくと。思ひを盡す曉をいつの時にか比べまし

シテ『月落ち鳥啼いて

と扇を廣げて立ち、次の謠に合せて仕科。

地『霜天に滿ちてすさまじく江村の漁火もほのかに半夜の鐘の響は。客の船にや。通ふらん蓬窓雨しただりて馴れし汐路の楫枕。浮寢ぞかは

○曇るか月も―霜曇りといふ詞があるので、秋の霜をうけて、かう續けた。
○こもりくの―初瀬の枕詞「曇り」と相似たる音を重ねたのである。
○初瀬―大和國磯城郡の長谷寺。詞花集源兼昌の歌に「夕霧に梢も見えず初瀬山入相の鐘の音ばかりして」
○難波寺―大阪の天王寺。[弱法師]參照。
○山寺の春の夕暮來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける―新古今集能因法師の歌。
○きぬぎぬ―男女が相逢つた翌朝の別れ。
○待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば飽かぬ別れの鳥はものかは―新古今集小侍從の歌。平家物語諸本に詳しく見えてゐる。
○老らく―老ゆらく。老いて行く。
○寢覺ほどふる―寢覺めた時の長い意と、過去の年月の長い意とを兼ねて用ゐた。
○思ひ寢の夢だにも―昔の事を思ひながら寢ても、夢も見ないとの意。夢も無しを涙にいひかけた。
○つくづくと―鐘を撞くといひかけた。
○いつの時にか比べまし―

古歌に、「山寺の春の夕暮來て見れば、入相の鐘に花ぞ散りける」と詠まれてゐますやうに、どうして春はこのやうに惜しんでも、夢のやうに早く暮れてしまふのでせう。その外、惜しむといへば、夫婦が朝の別れを惜しむ時にも、恨みを加へるやうに、鐘の音が枕許へ響き渡つてくるのです。それから又、

『待つ宵に更け行く鐘の聲聞けば、飽かぬ別れの鳥はものかは』

(今宵男が訪ねてくれることを待つてゐるのに、男はなかなか來ず、夜ばかり更けて行く、夜更けの鐘の聲を聞く時の辛さに比ぶれば、飽かぬ別れを促す鳥の鳴き聲を聞く辛さなどは、何でもないことだ)

と詠まれてゐるのも、鐘の聲を戀の便りの音づれと聞いて、かう詠んだものでありませう。しかし又、年が寄つて、とかく寢覺め勝て、花やかであつた昔の事を思ひながら寢ても、夢にも昔の事を見ないで、寂しい一夜を過して、曉の鐘の音を聞く時は、どうして／＼殘り惜しいどころか、ほんとに譬へやうもなく悲しく感じられるものです。――

詩の句に「月は西に傾き、鳥は啼いて塒に歸り、霜が一面に降りてゐる。かうしたもの寂しい水邊に漁火がほのかに光つてゐて、夜半の鐘の響が旅船に聞えてくる」と作られてゐるやうな光景は、苫を蔽うた船窓に雨雫の音を聞き馴れてゐるものにも、船路の旅寢をどんなに果敢なく思ふことでせう。ところが、この琵琶

歌には曉の一鳥はものかは」と詠まれてゐるが、老の身には曉ほど悲しい時はないとの意。
○月落ち烏啼いて—唐詩選張繼の楓橋夜泊の詩「月落烏啼霜滿レ天、江楓漁火對二愁眠一、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到二客船一」を引いた。
○蓬窓—苫を葺うた船窓。
○楫枕—船中で寢ること。
○浮寢ぞかはる—水上で寢るといつても、こゝは湖上であるから、他の海上などとはかはつて、波が穩かであるとの意。
○この海—琵琶湖。

【七】

○清見が關—駿河國庵原郡昔關があつた。
○千滿殿—謠曲作者の假作
○ごさめれ—「こそあるめれ」の約。
○粗忽なる—輕卒な、失禮な。

るこの海は、波風も靜かにて。秋の夜すがら、月澄む三井寺の、鐘ぞさやけき（と常座に立つ）

【七】

子方（ワキに）「いかに申すべき事の候
ワキ「何事にて候ぞ
子方「これなる物狂の國里を問うて給はり候へ
ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さりながら易き間の事尋ねて參らせうずるにて候。（立ちてシテに向ひ）いかにこれなる狂女。おことの國里はいづくの者にてあるぞ
シテ「これは駿河の國清見が關の者にて候
子方（シテに）「何なう清見が關の者と申し候か
シテ「あら不思議や。今の物仰せられつるは。正しくわが子の千滿殿ごさめれあら珍しや候
ワキ「暫く。これなる狂女は粗忽なる事を申す者かな。さればこそ物狂にて候

湖は波風も靜かで、月の澄み渡つた秋の夜中、三井寺の鐘がはつきりと冴え響くのです」
（こゝ、鐘づくしの曲舞を謠ひ舞ふ。）

【七】

千滿（師僧に）「もうしお師僧さま」
僧「何です」
千滿「この狂女の郷里を尋ねて下さい」
僧「これは妙な事をいはれる。しかし何でもない事だから、尋ねて上げませう。（千滿の母に）おい、こゝな狂女、そなたはどこの國のものだ」
母「私は駿河國淸見が關の者です」
千滿「何だと、淸見が關の者だといふのか」
母「あゝ不思議な、今物を仰しやつたのは、確かにわが子の千滿殿だ。おゝ珍しい」
僧「これ／＼、この狂女は飛んでもない事をいふものだ。だからこそ氣違ひだ」

○言語道斷―いひやうもなく呆れた時に發する語。
○はや色に出で―母子であることを隱して置く考であつたから、かういつた。

シテ「なうこれは物には狂はぬものを。物に狂ふも別れゆゑ。逢ふ時は何しに狂ひ候べき。これは正しきわが子にて候（と子方へ行きかゝる）

ワキヅレ（立ちて）されぱこそわが子と申すか筋なき事を申し候。急いでのき候へ

（と扇にてシテを退く、シテたぢ／＼と退きて安坐す）

子方「あら悲しやさのみな御打ち候ひそ

（ワキ・ワキヅレ下に居り、）

ワキ「言語道斷はや色に出で給ひて候。この上はまつすぐに御名のり候へ

子方「今は何をか包むべき。われは駿河の國。清見が關の者なりしが。人商人の手に渡り。今この寺にありながら。母上われを尋ね給ひて。かやうに狂ひ出で給ふとは。夢にもわれは知らぬなり

シテ「またわらはも物に狂ふこと。あの稚兒に別

母「いゝえ、私はたゞ無闇と氣の狂ふ者ではありません。氣の狂つたのは、わが子に別れたからで、そのわが子に逢つた以上は、どうして氣が狂ひませう。これは確かに私の子です」

從僧「やつぱり自分の子だなどといふのか。分らない事をいふ奴だ。早くこゝをのけ」

（と下﨟の母を打たうとする。）

下﨟「あゝ悲しい、そんなにお打ちなさるな」

從僧「これは驚いた、もはや顏色でそれと察せられた。この上は正直にお名乘りなさい」

下﨟「今は何を隱しませう、私は駿河國清見が關の者であつたのですが、人商人の手に渡り、今はかうしてこの寺に落ちつくこととなつたのですが、お母さまが私を尋ねて、このやうに狂ひ歩いていらつしやらうとは、夢にも知らなかつたのです」

母「私はまた、このやうに氣の狂つたの

れし故なれば。たまたま逢ひ見る嬉しさのまま。やがて母よと名のる事。わが子の面伏なれど。子ゆゑに迷ふ親の身は。恥も人目も思はれず（としをる）

【八】

地ロンギ「あら痛はしの御事や。よそめも時によるものを逢ふを悦び給ふべし

とワキ、子方を立たせてシテの前にやり、

シテ「嬉しながらも衰ふる。姿はさすが恥かしのもりて餘れる涙かな（しをる）

地「げに逢ひ難き親と子の。緣は盡きせぬ契りとて

シテ「日こそ多きに今宵しも

地「この三井寺に廻り來て

シテ『親子に逢ふは

地「何故ぞ。この鐘の聲立てて物狂のあるぞとて

○面伏—不面目。恥かしいこと。

【八】

○恥かしのもりて—恥かしを山城國乙訓郡の地名羽束師の森に、森を漏りてにいひかけた。

○逢ひ難き親と子の—容易に得難い親子の緣。

○鐘の聲立てて—鐘を高くつき鳴らして。

も、あの子に別れた爲なので、漸くに逢ふことが出來たのがほんとに嬉しくて、このやうな姿のまゝで自分が母だと名乘るのは、わが子の爲に不面目な事と知りながらも、子ゆゑに迷ふ親の情として、恥も外聞も考へてゐられないのです」

【八】

僧「おゝお氣の毒なことだ。外聞も時と場合によることです。このやうた母子對面の悦びを何遠慮することがいりませう」

母「わが子に逢つたのは嬉しいのですが、このやうに衰へた姿がさすがに恥かしくて、思はず涙が流れ落ちるのです」

僧「親子といふ得難い宿緣は容易に盡きるものではないので……」

母「日もあらうに、今日のやうな八月十五夜に……」

僧「この三井寺で廻り合はれたのは、實に不思議な宿緣です」

母「かうして親子の廻り合ふことの出來たのも、その因といへば、この鐘を撞いて、氣違ひだとお咎めになつたからで、

○常の契り―男女の契り。

お咎めありし故なれば（シテ立ちて）常の契りには。別れの鐘と厭ひしに（左へ廻り）。親子のための契りには（招きながら子方へ行き）。嬉しき、鐘の聲かな（と子方の肩に手をかけて鐘を見上げ、子方を見てしをる）

地（キリ）かくて伴ひ立ち歸り。かくて伴ひ立ち歸り（子方を誘ひて常座へ行き）。親子の契り盡きせずも。富貴の家となりにけり。げにありがたき孝行の。威德ぞめでたかりける威德ぞ、めでたかりける

「親子の契り盡きせずも」と子方はそのまゝ幕に入り、シテは「威德ぞめでたかりける」と常座にて正面に開き留拍子を踏む。

鐘が二人の縁を結んでくれたのです。普通の男女の契りには『別れの鐘』といつて、鐘を忌みますが、私共親子にとつては、鐘の爲に逢ふことが出來たので、鐘の聲を嬉しく思ふのです。

かうして、親子連れ立つて故郷に歸り、親子の縁が永く盡きず、富貴の家となつた。これも孝行の威德の然らしめる所で、實にありがたいことである。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

著しい異同はない。

古謠本（光悅本）

【一】シテサシ「南無や……思ふ（光たのむ）心ぞあはれなる……　【五】ワキ「やあやあ暫く狂人の身にて何とて鐘をば撞くぞ（光鐘つくへき事。思ひもよらぬ事）急いで……　【七】ワキ「暫く（光ナシ）これなる狂女は……

六浦（むつら）

觀（寶　春　剛）

解　説

【能柄】　三番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　都僧、　**ワキツレ**　從僧（二人）、**前シテ**　里女（楓の精）、**狂言**　所の者、**後シテ**　楓の精（女體）

【所】　相摸國（武藏）六浦

【時】　秋（九月）

【作者】　能本作者註文には金春禪竹の作とし、二百十番謠目錄には日吉安淸の作とす。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】　都の僧が東國行脚の途次、相摸國（實は武藏國）六浦の稱名寺に立ち寄つたところ、折しも秋のこととて、山々の木々が今を盛りと紅葉してゐるのに、この寺の庭の一本の楓だけが少しも紅葉してゐないので、不審に思つてゐると、一人の里女が出て來て、「昔鎌倉中納言爲相卿がこの寺に來た時、この木だけが山々に先だつて紅葉してゐるのを見て、一首の和歌を詠じた。すると、この木は喜んで、功成り名遂げた上は身を退くのが天の道であると信じて、それ以來常磐木のや

うになつたのである、實は私はその楓の精である、と告げて、秋草の中に消え失せる。その夜、僧がこゝに過してゐると、かの楓の精がまた現れ出て、草木國土悉皆成佛の佛徳をたゝへて舞を舞つたが、夜も明け方になると、影の如くに消えてしまふ。

【出典】　藤原爲相の家集藤谷集に見えた和歌、

いかにしてこの一本にしぐれけん、山に先だつ庭のもみぢ葉

を主材として脚色したものである。

【概評】　草木の精を主人公とした所謂精魂物の謠曲の中、本曲は「杜若」ほど華麗でもなく、「芭蕉」ほど閑寂でもない。また「西行櫻」や「遊行柳」乃至「墨染櫻」ほど劇的でもない。まことに淡白な曲柄であるが、たゞ一首の和歌を主材として、歌道に偏することもなく、佛敎に捉はれることもなく、よくその歌意を體して、こだわりのない戯曲にまとめ上げたことが、本曲の手柄であらう。

【一】

○東—東國。

○洛陽—京都を唐風に呼んだ名。洛陽はもと周の成王の都した地名である。

【一】

次第の囃子にて、ワキ都僧、角帽子・着附無地熨斗目・茶水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同樣の裝束（水衣は縷）にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ　次第「思ひやるさへ遙かなる。思ひやるさへ遙かなる東の旅に出でうよ

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは洛陽の邊より出でたる僧にて候。われ未だ東國を見ず候程に。この秋思ひ立ち陸奥の果までも修行せばやと思ひ候

といひてワキヅレと向合ひ、

【一】　前段

舞臺は初め京都で、ワキは都方の僧、ワキヅレは從僧を作つての登場。

僧「想像しただけでも、實に遠い思ひのする、あの東國の方へ旅に出かけよう」

と次第に旅の心持を述べ、

僧「私は京都の方から出て來た僧です。私はまだ東國を見たことがないので、この秋思ひ立つて、陸奥の涯までも行脚しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

○逢坂の關―山城と近江の國境逢坂山にあつた關所。京都から東へ出る要路。○關の杉むら過ぎがてに―杉に「過ぎ」と同音を重ねて文のあやとした。後拾遺集良暹法師の歌に「逢坂の關の杉むらひくほどはをぶちに見ゆる望月の駒」○湖―近江國の琵琶湖。○幾夜な夜な―山を越え行くといひかけた。○草枕―はかない旅寢。○星月夜―鎌倉の枕詞。○鎌倉山―相摸國鎌倉郡鎌倉町の山。○六浦―武藏國久良岐郡の南端にある。○千里の行も―古諺。老子に「九層之臺起於累土、千里之行始於足下」○相摸の國六浦―六浦は實は武藏國であるが、鎌倉の東北に相隣接してゐるので鎌倉と同國と思ひ誤つたのである。○この渡り―六浦の東部で六浦海とも金澤入江ともいふ。○清澄―安房郡天津町の北清澄山上にある眞言宗の金剛寶院。日蓮上人の剃髪得度した寺。○稱名寺―今の金澤村にあ

ワキ ワキヅレ 道行「逢坂の。關の杉むら過ぎがてに。關の杉むら過ぎがてに。行方も遠き湖の。舟路を渡り山を越え。幾夜な夜なの草枕。明け行く空も星月夜鎌倉山を越え過ぎて。六浦の里に着きにけり六浦の里に着きにけり

ワキ「幾夜な夜なの草枕」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて六浦に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「千里の行も一歩より起るとかや。遥々と思ひ候へども。日を重ねて急ぎ候程に。これははや相摸の國六浦の里に着きて候。この渡りをして安房の清澄へ參らうずるにて候。（右の方に向き）又あれに由ありげなる寺の候を人に問へば。六浦の稱名寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候（とツレへ向く）

ワキヅレ「然るべう候

ワキヅレは脇座の次に行きて坐し、ワキは眞中に出で、正面に向き、

僧「都を立つて、逢坂の關の杉林まで來ると、さすが都なつかしくて、後髮を引かれるやうな思ひをしながら、行先の遠い旅を目ざして、琵琶湖を渡り山を越え、幾夜も幾夜も旅の宿に假寢の夢を結び、夜が明ければまた旅を續けて行くうちに、鎌倉山を越えて、六浦の里に着いた」

と旅の經過を述べてゐるうちに、舞臺は六浦となる。

僧「諺に『千里の道も一歩より始まる』といふ通り、あのやうに遠い遠いと思つてゐた東國の旅も、毎日毎日道を急いで來たので、はや相摸國六浦の里に着いた。この渡場を渡つて、これから安房國の清澄に參りませう。ところで、あそこに何だか由緒のありさうな寺が見えたので、里人に尋ねると、六浦の稱名寺だと教へてくれたから、序に立ち寄つて見て行きませう」

といつて、稱名寺に來た態で、舞臺は六浦稱名寺となる。ワキ僧は今を盛りに紅葉してゐる木々を眺めて從僧に向ひ、

【二】

ワキ「なうなう御覧候へ。山々の紅葉今を盛りと見えて、さながら錦を晒せる如くにて候。都にもかやうの紅葉の候べきか。又これなる本堂の庭に楓の候が、木立餘の木に勝れ、唯夏木立の如くにて一葉も紅葉せず候。いかさま謂れのなき事は候まじ、人来りて候はば尋ねばやと思ひ候

【二】といひて脇座へ行きかゝる。

シテ里女、面若女・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の装束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなう御僧は何事を仰せ候ぞ

ワキ脇座に立ちてシテに向ひ、

ワキ「さん候これは都より始めてこの所一見の者にて候が。山々の紅葉今を盛りと見えて候に。これなる楓の一葉も紅葉せず候程に。不審をなし候

[illegible]この本堂の庭に楓があるが、その木立は[illegible]のやうに、一葉も紅葉してゐない。これには何か謂れがあるに違ひない。[illegible]人が来たならば、尋ねて見よう[illegible]

【三】

女「もうしもし、お僧さま、何をいつていらつしやるのです」

僧「はい、私は都から始めてこの所へ来て見物してゐる者ですが、山々の紅葉が今が丁度眞盛りのやうに思はれるのに、この楓が一葉も紅葉してゐないので、不思議に思つてゐるのです」

○爲相の卿―藤原定家の孫爲家の子、冷泉家の祖。母阿佛尼を慕つて鎌倉に下り藤の谷に住し、嘉曆三年六十六で薨じた。

○いかにしてこの一本にしぐれけん山にさきだつ庭のもみぢ葉―爲相の家集藤谷集に見ゆ。

○數ならぬ身―人數に入らない、和歌の心得などのない者。

○古りはつるこの一本の跡を見て袖のしぐれぞ山にさきだつ―出所未詳、謠曲作者の創作か、

シテ「げによく御覽じ咎めて候。古鎌倉の中納言爲相の卿と申しし人。紅葉を見んとてこの所に來り給ひし時、山々の紅葉未だなりしに、この木一本に限り紅葉色深くたぐひなかりしかば。爲相の卿とりあへず「いかにしてこの一本にしぐれけん」山にさきだつ庭のもみぢ葉と詠じ給ひしより。今に紅葉をとどめて候

ワキ「面白の御詠歌やな。われ數ならぬ身なれども。手向のためにかくばかり。『古りはつるこの一本の跡を見て。袖のしぐれぞ。山にさきだつ

シテ「あらありがたの御手向やな。いよいよこの木の面目にてこそ候へ（と常座に立つ）

ワキ「さてさてさきに爲相の卿の御詠歌より。今に紅葉をとどめたる。謂れは如何なることやらん

女「成程、よく、お氣がつきました。昔鎌倉の中納言爲相卿と申した方が、紅葉を見ようと思つて、この所へお出でになりましたところ、山々の木はまだ紅葉してゐませんのに、この木一本だけが色濃く紅葉して、譬へやうもなく美しかつたので、爲相卿が早速――

『いかにしてこの一本にしぐれけん、山にさきだつ庭のもみぢ葉』

（時雨は山の方へ先に來るものだのに、どうしてこの木にだけ早く時雨が降りかゝつたのであらう。山々の木はまだ紅葉しないのに、この庭の楓だけが先立つて美しく紅葉してゐる）

とお詠みになつたので、それ以來この木は紅葉しなくなつたのです」

僧「これは面白いお歌だ。私もつまらない者だが、一つ手向の歌を詠みませう。――『古りはつるこの一本の跡を見て、袖の時雨ぞ山にさきだつ』

（遠い昔の由緒のあるこの楓の木を見て、思はず感涙に袖を濡らし、山にはまだ時雨の降らない前に、この袖には時雨が降るやうだ）

女「あゝありがたいお手向でございます。この木にとつて愈〻面目を施すことでございます」

僧「ところで、前に仰しやつた爲相卿の御詠歌によつて、この楓が未だに紅葉しなくなつたといふのは、どうしたわけなのです」

シテ「げに御不審は御理。さきの詠歌に預かりし時。この木心に思ふやう。かゝる東の山里の。人も通はぬ古寺の庭に。われさき立ちて紅葉せずは。いかで妙なる御詠歌にも預かるべき。「功成り名遂げて身退くは。これ天の道なりといふ古き言葉を深く信じ。今に紅葉をとどめつゝ。唯常磐木の如くなり

ワキ「これは不思議の御事かな。この木の心をかほどまで。知ろしめしたる御身はさて。如何なる人にてましますぞ

シテ「今は何をか包むべき。われはこの木の精なるが。お僧貴くましますゆゑに。唯今現れ來りたり。『今宵はここに旅居して。夜もすがら御法を說き給はば。重ねて姿を見え申さんと

地下歌「夕の空も冷しく。この古寺の庭の面（へと正面

○功成り名遂げて—老子に「富貴而驕、自遺其咎、功成名遂、身退天之道」とあるを引いた。

○夕の空も—見え申さんと言ふといひかけた。

女「成程御不審にお思ひになるのは御尤もです。あの御詠歌を戴いた時に、この木が心の中で思ひますことには、自分はこのやうな東國の山里の、人も通らない古寺の庭にあるのだから、外の木に先立つて紅葉しなければ、どうしてこのやうな結構なお歌を戴くことが出來ませう。しかし、今は望外の名譽を得たのだから「功名を得た上は身を退くのが正しい道である」といふことを深く信じて、それで、今に至るまで紅葉しないで、たゞ常磐木のやうにしてゐるのでございます」

僧「これは實に不思議なことです。この木の心をそのやうによく御存知なのは、一體あなたはどういふ方なのです」

女「今は何をお隱ししませう。私はこの木の精でございますが、お僧さまが貴い方でいらせられますので、唯今こゝに現れて來たのでございます。今晩はこゝにお泊りになつて、夜とほし御讀經下さいますれば、また姿をお見せしませう」

といつて、夕暮の空はもの寂しく、この寺の庭にも垣根にも霧や露のうちし

○霧の籬―籬は竹柴などを粗く編んで作つた垣。霧の籬と歌に詠みならはしてゐるので、「霧の」と冠し、霧を承けて露深きとつゞけた。

【間】

を眺め)。霧の籬の露深き。千草の花をかき分けて行方も知らずなりにけり行方も知らずなりにけり

めつてゐる中を、庭の千草をかき分けて、どこへ行つたのか、行方知れずになつてしまつた。

と右へ廻り、常座にて開き、静かに中入。ワキ下に居る。

【間】 狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。六浦の里に住居する者にて候。今日は志す日に當りて候間。稱名寺へ參らばやと存ずる。(ワキを見て)いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御參詣なされ候ぞ

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「さやうに候はば。まづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。(舞臺の眞中に出で下に居て)さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。山々の紅葉今を盛りと見えて候に。これなる楓に限り一葉も紅葉せず。唯夏木立の如くに候。謂れのなき事は候まじ。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ鎌倉の御事は。天下に隠れなき御事にて候。又この邊を六浦金澤と申して。名所にて御座候。又この寺を稱名寺と申し候。これなる楓の青葉なる子細は。鎌倉の中納言爲相の卿と申したる

○肝を煎り—世話をして。奔走して。

【三】○所から心に叶ふ—寺の名も稱名(念佛)といふのが嬉しいとの意。

御方。この寺へ來り給ふに。その折節は秋も半ばにて。山々の楓一葉も紅葉仕らず候に。これなる楓は色美しく照りそひ。今を盛りと紅葉仕り候間。爲相の卿不審に思し召し。一首の歌に いかにしてこの一本にしぐれけん。山に先だつ庭のもみぢ葉と。かやうに遊ばされければ。その次の年よりこの木紅葉仕らず。青葉にて暮らし候間。人每に不審仕り候に。ある人の申すは。さすが爲相の卿の御詠歌にも預かること。この木の面目と存じ。この後紅葉仕つては詮なしとて。青葉にて暮らすと見えたり。功成り名遂げて身退くは。天の道と申せば。この心を以て紅葉仕らぬは。尤もの事にて候。總じて當寺の謂れ。楓の子細かくの如くにて候。又この寺に玉の簾と申す寶物の候。我等肝を煎り拜ませ申さうずるにて候。さて唯今は何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく女性一人來られし。楓の謂れ懇に語り。眞は楓の精なりといひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候ふ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さてはこの木の精現れ出でたると存じ候。それを如何にと申すに。法華經にも藥草喩品とやらん申して。草木までも成佛の感文御座あると申し候間。御法をなして御通りあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【三】

ワキ ワキヅレ 上歌(待謠)「所から。心に叶ふ稱名の。心に叶ふ

【三】 後段

僧「寺の名も稱名寺といつて、稱名念佛す

○寢られんものか—寢られようものか。「ん」は未來の助動詞。

【四】

○夢ばし—夢をば。「し」は强めの助詞。ワキ僧の夢に現れた心である。

○値遇—相逢ふこと。

○草木國土—中陰經にあるといふ一頌四句の偈「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」を引いた。

○妙文—ありがたい經文。

【五】

◎時を得て—榊本に「時をへて」とあるは誤り。元祿本にも「時を得て」とある。

○花葉—花と葉と。

○心なしと—草木も非情のものとはいへない。

稱名の。御法の聲も松風もはや更け過ぐる秋の夜の。月澄み渡る庭の面寢られんものか、面白や寢られんものか面白や

【四】

一聲の囃子にて、後ジテ楓の精、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・長絹・色大口・腰帶・扇の裝束にて常座に出で、

後ジテ「あらありがたの御弔ひやな。妙なる値遇の緣に引かれて。二度ここに來りたり。夢ばし覺まし給ふなよ

ワキ「不思議やな月澄み渡る庭の面に。ありつる女人と思しくて。影の如くに見え給ふぞや。草木國土悉皆成佛の。この妙文を疑ひ給はで。なほなほ昔を語り給へ

【五】

シテクリ「それ四季をりをりの草木。おのれおのれの時を得て

と謠ひながら大小前に出で、

地「花葉樣々のその姿を。心なしとは誰かいふ

るのにふさはしいこの所で、聲をあげて讀經してゐると、秋の夜は早や更けて行つて、松風の音は絶えず、月の光は庭の面に澄み渡つて、實に面白い眺めで、とても寢られるものでない」

といつてゐるうちに、いつしか睡眠する態。

【四】

後ジテ楓の精、ワキ僧の夢に現れる態で登場。

精「あゝありがたい御回向でございます。嬉しいことに、またお目にかゝれる御緣があつて、こゝへ參りました。どうか夢をお覺ましにならないで、私の姿を御覽下さいませ」

僧は夢うつゝに楓の精を見て、

僧「これは不思議だ。月の澄み渡つたこの庭に、前に會つた女性らしい方が影のやうにお見えになるわ。——『草も木も一切のものが悉く成佛す』——このありがたい經文をお疑ひにならないで、さき程の昔話をもつと聞かせて下さい」

【五】

精「一體、四季その折々の草木は、それぞれその時折に從つて、或は花咲き、或は紅葉するなど、樣々の姿を現すのでございますから、非情な、心のないものだとは申せないのでございます。

○青陽—春をいふ。
○かつ咲きそめて—春となる一方から咲き初めて。
○ただ雲とのみ三吉野の—雲とのみ見るを三吉野にいひかけた。古今集序に「春のあした吉野山の櫻は、人丸の心には雲かとのみなん覺えける」
○千本の花—吉野山には櫻が多いので、口、中、奥の一目千本の稱がある。
○移れば變る—續拾遺集大江雅言の歌に「わかざりし外山の櫻日數へてうつればかはる峯の白雲」
○昨日は薄き—續後撰集藤原定家の歌「小倉山しぐるる頃の朝な朝な昨日は薄き四方のもみぢ葉」を引いた。
○露時雨もる山—古今集紀貫之の歌「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」を引いた。時雨も洩るを近江の地名守山にいひかけたのである。
○あからさまなる—假初の。このやうな田舍へ來べき筈もない貴人が假初に來てといふ意。

シテサシ『まづ青陽の春の始め
地『色香妙なる梅が枝の。かつ咲きそめて諸人の
心や春になりぬらん
シテ『又は櫻の花盛り
地『ただ雲とのみ三吉野の。千本の花に。如くはなし
シテ次の謠に合せて舞ふ。（舞クセ）
地クセ『月日經て。移れば變る眺めかな。櫻は散りし庭の面に。咲き續く卯の花の。垣根や雪にまがふらん。時移り夏暮れ秋も半ばになりぬれば。露空定めなき村時雨。昨日は薄きもみぢ葉も。露時雨もる山は。下葉殘らぬ色とかや
シテ『さるにても。東の奥の山里に
地『あからさまなる都人の。あはれも深き言の葉の露の情に引かれつつ。姿をまみえ數々に。言

まづ春の始めには、梅の枝に色香の勝れた花がぼつ〳〵咲き出して、人々の心が春らしくなつて來ます。次に櫻の花盛りには、眺め渡す限り、たゞ白雲のやうに見えますが、その中でも、花の名所といへば、吉野山の千本の櫻に上越す所はございません。——

かうして、月日の移るに從つて、草木の眺めも次第に變つて行きます。そして櫻の花が庭に散つてしまつた後には、續いて卯の花が垣根に咲いて、雪の降つたやうでございます。時が過ぎて、夏も暮れ、秋の中頃になりますと、晴れたかと思ふと又しても時雨が降りつゞいて、昨日まではまだ色も薄かつたと思ふ紅葉か、はや今日は露や時雨に染まつて、梢の下葉まで殘らず眞紅に紅葉するのでございます。

それにしましても、このやうな東國の涯の山里に、計らずも都の方がお出で遊ばして、お情深いお歌を戴き、そのお情に

○深き御法—緣の深きを敎旨の深きにいひかけた。
○佛果—成佛の結果。

【六】

○色なき袖—見ばえのしない舞の袖。靑楓の精であるから、殊更色なきといつた。

○秋の夜の千夜を—伊勢物語の歌「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉殘りて鳥や鳴きなむ」を引いた。
○八聲の鳥—明方に度々鳴く雞。朝早く鳴く一番鳥二番鳥などは過ぎて、七聲八聲となつたのである。
○鐘—曉の鐘。

○所は六浦—明け六つの時をきかせたのである。
○吹きしをり—木葉を吹きしぼまし。
○唐紅—濃い紅色。

葉を交はす値遇の緣。深き御法を授けつつ。佛果を得しめ給へや

と舞ひ上げて常座に立ち、

【六】

シテ『更け行く月の。夜遊をなし

地『色なき袖をや。返さまし

〔序舞〕

引續き次の謡に合せて舞ふ。

シテワカ『秋の夜の。千夜を一夜に。重ねても

地『言葉殘りて。鳥や鳴かまし

シテ『八聲の鳥も。數々に

地『八聲の鳥も。數々に。鐘も聞ゆる

シテ『明方の空の

地『所は六浦の浦風山風、吹きしをり吹きしをり散るもみぢ葉の。月に照り添ひて唐紅の。庭の面。明けなば恥かし。暇申して。歸る山路に行くかと思へば木の間の月の。行くかと思へば木の

引かれて、今又お僧樣にお目にかゝり、色々お話申しあげられるのも、よくよく深い御緣だと存じます。どうぞありがたい御經をお授け下さいまして、私を成佛させて下さいませ」

【六】

精「次第に更けて行きますこの月夜に、色もない袖を翻して、お粗末な舞をお目にかけませう」

〔序舞〕

を舞ひ、

精「——

「秋の夜の千夜を一夜に重ねても、言葉殘りて鳥や鳴かまし』

（秋の夜は長いものであるが、その長い夜を千倍した程の夜長にしても、戀しい人と相逢うた夜は、なほ短く感ぜられて、まだ話も盡きないうちに、夜明の雞が鳴くことであらう）と謡ひ舞ひ、

精「さう申せば、はや曉告げる雞が幾度も鳴き、夜明の鐘も鳴り響いて、空はほのぼのと明け初め、この六浦の浦風山風が吹くにつれて、散り行く紅葉は月の光に照り映え、散つた紅葉で庭が眞紅になりました。かうして日があかく明けては、お恥かしうございますから、お暇して歸ります」

といつて、山路に行くかと思ふうちに、木の間の月影が薄くなるやうに、楓の

間の月のかげろふ姿と。なりにけり

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

精の姿も段々薄らいで行つて、見えなくなつてしまつた。

○かげろふ姿　月影の薄くなるを、姿の薄く消える意にいひかけた。

〔考　異〕

諸　流　（観寳春剛）

著しい異同はない。

古謡本　（元禄八年本）

【一】ワキ「千里の行も……遙々と思ひ候へ（元しい道なれ）ども……ワキ「ならなら……錦を晒せる如くにて候（元なり）……本堂の庭に楓の（元木の）候が……　【二】ワキ「さん候（元ナシ）これは都より始めて……これなる楓の（元木）一葉も……不審をなし（元申）候。シテ「げによし御覧じ咎めて候（元たり是は）古鎌倉の……この木（元ナシ）一本（元木）に限り……ワキ「さてさてさきに爲相の卿（元ナシ）の御詠歌により……シテ「げに（元その）御不審は御理さきの詠歌（元爲相卿の御歌）に預かり……　【四】後ジテ「あらありがたの御弔ひ（元法）やな……　【五】シテクリ「それ四季をりをりの……地「ただ雲とのみ三吉野の（元や）

室君 觀（春）

解　說

【能柄】　四番目　劇的夢幻能

【人物】　**ワキ**　室の神職、**狂言**　同從者（春は室の長）、**ツレ**　室君（三人）、**シテ**　韋提希夫人

【所】　播磨國　室

【時】　二月

【作者】　作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗槪】　播磨國室の明神では、天下泰平の時には、遊女を舟に乘せて囃子物をさせる御神事がある。今も天下泰平なので、神職がこれを行ふやうに命じると、遊女が多勢舟に乘つて出で、船歌を謠つて囃し、神樂を舞ふ。すると、室明神の本地韋提希夫人も出現して歌舞を奏する。

【出典】　典據らしいものも見當らない。

【槪評】　神體（といふよりも、なほそれより一層貴い筈の本地）をシテとしたものであるが、演奏上四番目物として取扱つてゐるやうに、普通の脇能とは全く趣を異にしてゐる、賑はしい世俗的な遊女の歌舞

な主材としたもので、その趣は〔江口〕の後段に似てゐるが、〔江口〕のクセが莊重であるのに比べて、これは極めて輕快で、その末段も、〔江口〕の遊君の普賢菩薩と化するのには雄健な筆力に充ちてゐるが、本曲の韋提希夫人の出現は寧ろ清澄たる感じを與へてゐる。脚色の樣式も、本曲は複式夢幻能の定型を離れた、一段劇能とも見るべき、しかも普通の劇能のやうな沈痛な劇的葛藤を伴はない、そして劇の展開に何等破綻を見せない、まことに輕快な曲柄である。古記錄に少しも曲名などの見えない所を見ると、古作ではないやうであるが、凡手の筆とは侮られない。

【一】

名乘笛にて、ワキ室明神神職、風折烏帽子・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、狂言從者（着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束）に太刀を持たせて出で、名乘座に立ち、

ワキ「これは播州室の明神に仕へ申す神職の者にて候。さても天下泰平の折節なれば。室君達を舟に乘せ囃子物をして神前に參る御神事の候。今この時もめでたき御代なれば。急ぎ御神事を執り行はばやと存じ候

といひて舞臺の眞中に出で狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言名乘座にてワキに辭儀して、

狂言「御前に候

【一】

舞臺は播磨國室明神の社前で、社は海に面してゐる。ワキ室明神の神職、狂言從者を隨へて登場。

神職「私は播磨國室の明神にお仕へしてゐる神職の者です。さてこの社では、天下の泰平な時には、室の遊女達を舟に乘せ、囃子物をして神前に參る御神事があるのですが、唯今も天下泰平なめでたい大御代ですから、急いでこの御神事を行はうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をして、從者に向き、

神職「おい誰か」

從者「はい」

○室の明神｜播磨國揖保郡室津の賀茂神社。その小五月祭には遊女數十人が白拍子姿で幣を捧げ船歌を謡つて舞ひ奏でたといふ。○室君｜室津の遊女。室津は往古重要な水驛であつたので遊女が多くゐた。室君の事撰集抄、盛衰記等諸書に見えてゐる。○囃子物｜歌舞の拍子をとる樂器の合奏。○御前に候｜檜本には記す。

(一)畏つて候—この句も檜本にある。

【二】

○室の海—以下「綱手なりける」まで遊女の謡ふ船歌。
○月の御舟—空行く月を舟に喩へた語。それを逆に月夜に漕ぎ行く舟の意にとりなした。
○霞む空は—舟を月に、海を空に見立てたのである。
○磯山—磯邊の山。
○花ぞ綱手なりける—舟を曳いて行くものは、常は舟に繋いだ綱であるが、今は梅の花が人の心を引きつけて、その方へ誘ひ出して行くといふ意。

【三】

ワキ「急ぎ室君達に神前へ御參りあれと申し候へ

狂言「畏つて候

ワキ脇座に行きて下に居り、狂言は橋懸に向き、

狂言「いかに室君達。とうとう御參り候へ

といひて地謡座前に下に居る。

【二】

下端の囃子にて、ツレ室君三人、面連面・鬘・鬘帯・着附摺箔。水衣・色入腰巻・腰帯・扇の装束にて棹を持ちて出で、橋懸に立ち並び、

ツレ（三人）『室の海

地「室の海。波ものどけき春の夜の。月の御舟に棹さして霞む空は面白やな霞む空は面白や

ツレ（三人）『梅が香の

地「梅が香の磯山遠く匂ふ夜は。出舟も心ひく花ぞ綱手なりけるこの花ぞ綱手なりける

【三】

狂言（ワキに辭儀して）「いかに申し上げ候。室君達の御參りなされて候

神職「室の遊女達に、すぐ神前へお參りするやうにといつてくれ」

從者「畏りました」

といつて、遊女達にその由を傳へる。

【二】

ツレ室の遊女多勢、舟に乗つてゐる態で登場。

遊女「——

『室の海、波ものどかな春の夜に、舟に棹さす面白さ、御空の舟の三日月が、霞の中を行くやうだ。

『梅の香が、磯の山から匂ひくる、夜に濱邊を漕ぎ出せば、花が人をば誘ひ寄せ、舟をそなたへ引いて行く』

と謡ひながら社前に来る。

【三】

神職は遊女達の来たのを見て、

○近頃—近頃にない。非常に。○棹の歌—舟に棹さしながら謠ふ歌。舟歌。○浮世の一節—この世の憂き樣を少し。○夕波千鳥—一節を言ふを夕にいひかけた。夕波の上を飛びかふ千鳥。一節は棹の緣語。○恨みぞまさる—遊女には恨めしいことばかり多いのであるが、海士少女はそれを知らないで、遊女の舟遊びを羨ましがるとの意。○朝妻舟—近江國坂田郡朝妻、琵琶湖の入江の遊船。こゝも遊女の多くゐた所。山家集に「おぼつかな伊吹おろしの風さきに朝妻舟のあひやしぬらん」○近江の湖—琵琶湖。逢ふ身といひかけた。○海山も隔たるや—近江と播磨とは遠く距つてゐると、いふのを、戀しい人に逢ひたくても容易に逢へないとの意にいひかけた。○あぢきなや—つまらないことだ。○浮舟—頼りのない身を喩へていふ。○水馴棹—水に浸つてゐる棹。謠ひ馴れたといふ意を

ワキ「近頃めでたき御事にて候。又悉く棹を御さし候程に。棹の歌を御謠ひ候へ

ツレ（三人）『棹の歌。謠ふ浮世の一節を

地『謠ふ浮世の一節を。夕波千鳥聲添へて。友呼びかはす海士少女。恨みぞまさる室君の。行く舟や慕ふらん。朝妻舟とやらんはそれは近江の湖なれや。われも尋ね尋ねて。戀しき人に近江の。海山も隔たるや。あぢきなや浮舟の棹の歌を謠はん水馴棹の歌謠はん

と謠ひて、ツレ一同棹をすてて舞臺に入り、重ヅレは眞中に立ち、ツレ二人は笛座前に坐す。

【四】重ヅレ次の謠に合せて舞ふ。（舞クセ。以下ツレ謠は重ヅレ一人）

クセ『裁ち縫はぬ。衣着し人もなきものを。なに山姫の。布晒すらん佐保の山風のどかにて。日影も匂ふ天地の。開けしもさしおろす。棹のした

神職「實にめでたいことです。あなた方は皆棹をさして居られるのだから、一つ舟歌を謠つて下さい」

遊女「——

『浮世の樣な舟歌に、ほんの一節謠ひませう。

『夕波千鳥の鳴く沖に、友呼びかはす少女らが、憂き河竹の室君の、つらい身上知りもせず、たゞ面白さうに笑つて、こなたへ舟を漕ぎ寄せる。

『同じ渡世の遊女でも、朝妻舟の遊女らは、あふみの海の事なれば、戀しい人にあひもしよう、こゝは播磨の遠い國、海山遠く隔たつて、戀しい人に逢へもせぬ。ほんにつらいあぢきない。

『いづれ浮世はつらいもの、さあ／＼舟歌謠ひませう』

【四】遊女はなほも謠ひつゞけて、

遊女「——

『霞のやうな裁ち縫はぬ、着物は誰も着はせぬに、誰に着せうとて山姫は、霞の布を晒すのか。——と詠まれた佐保山の、風ものどかに春の日も、のどかに匂ふこの國の、開けたもとは海原に、

含めた。
【四】
○裁ち縫はぬ衣着し人もなきものをなに山姫の布晒すらん—古今集伊勢の歌。
○佐保の山—大和國添上郡にあり、この山の神を佐保姫といふから山姫をうけて出し、棹の縁とした。
○棹のしただり—天地開闢の時伊弉諾尊が天瓊矛をさし下して海原をさぐり給ふと、矛のしただりが凝り固まつて島となつたといふ神話の矛を棹によそへたのである。
○春過ぎ夏闌けて—四季の變化の順當である祝言。
○しるしの棹—昔北國で雪の深淺を量る爲に立てた竿。夫木抄に「初雪のしるしの竿は立てしかどそこともも見えず越の白山」
○豐年月の—「雪は豐年のしるし」といふから、雪を量る竿はやがて豐年をはかり推測する竿であるとの意
【五】
○そと—一寸。
○こことても—室の明神も都の賀茂と同體であるとの意。
○室山—室津市街の背後にある丘。
○風をさまれば—風が靜か

だりなるとかや
ツレ『然れば春過ぎ夏闌けて
地『秋既に暮れ行くや。時雨の雲の重なりて嶺白妙に降り積る。越路の雪の深さをも。知るやしるしの棹立てて。豐年月の行く末を。はかるも棹の歌謠ひて、いざや遊ばん
とクセを舞ひ上げて常座に立つ。
【五】
ワキ「いかに申し候。かかるめでたき折節に、そと御神樂を參らせられ候へ
ツレ「さらば御神樂を參らせうずるにて候
といひて後見より幣を受取り、
ツレ『こことても。室山陰の神垣の
地『賀茂の宮居は。ありがたや（と幣を戴き）
〔神樂〕
ツレ『月影の
地『月影の。更け行くままに風をさまれば。不思

下し給うた玉矛の、棹のしづくの鹽水の、凝り固つたものだとか。かうして國の出來てより、春から夏へと四の時、次第正しくめぐり行き、秋も暮れゝば時雨降り、嶺に白雪降り積り、わけても越路は雪深く、棹をば立てて豐年のしるしを雪で測るとか。
『のどかな御代を壽いで、さあ〳〵舟歌謠ひませう』
【五】
神職「まことにめでたい御時節だから、一寸御神樂をあげて下さい」
遊女「それでは御神樂をあげませう。——
と謠つて、
『この室山の明神も、都の賀茂と同體で、かはらぬ利益ありがたや』
〔神樂〕
を舞ふ。
月の夜が次第に更けて行くに從つて、風も愈〻靜かになると、不思議なことに、妙なる香があたり一面に薰り滿ち、

議や異香薫じつつ（ーと橋懸を見つ）。和光の垂跡韋提希夫人の。姿を現しおはします

【六】（ー和光の垂跡韋提希夫人の」に、シテ韋提希夫人、面増・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帯・扇の装束にて出で舞臺に入り、（ツレはシテの橋懸一の松へ進む頃地謡座前に行きて坐す）

〔中舞〕

を舞ひ、引續き次の謡に合せて舞ふ。

地「玉の釵羅綾の袂。玉の釵羅綾の袂。風にたなびく瑞雲に乘じ。所は室の海なれや。山は上りて。上求菩提の機を勸め。海は下りて下化衆生の。相を現し、五濁の水は。實相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好誠に。肝に銘じ。感涙袖を潤せば。はや明け行くや。春の夜の。はや明け方の。雲に乘りて。虚空にあがらせ。給ひけり

「はや明け方の」と橋懸へ行き、幕際にて正面に直して開き、左袖を返して留拍子を踏む。

室の明神として垂跡せられた佛の本地韋提希夫人が御出現になる、

【六】

ー、韋提希夫人登場。

〔中舞〕

を舞ふ。

神は玉のかんざしを挿し、うす物の絹を着て、風にたなびくめでたい雲に乘つて、この所室の海に現れ、或は山に上つて、衆生に向上心を起して菩提を求めるやうに勸め給ひ、或は海に下つて、下界の衆生を敎化する相を示し給ふと、この人間の罪惡に穢れた濁惡の水も、煩惱を離れて悟りの世界に入る清澄な大海となり、天からは花が降り、妙たる香が薫り滿ち、まことにありがたい御姿で、拜する者は皆感激に堪へず、感涙に袖を濡らしたのであるが、やがて春の夜がほのぼのと明けて行くと、神は明方の雲に乘つて、空にお上りになつた。

シテ韋提希夫人上天の心持で退場。

○和光の垂跡ー佛が本來の德光を和らげてこの土に降ること。こゝでは佛の韋提希夫人が室明神として現れること。

○韋提希夫人ー印度摩訶陀國頻婆娑羅王の后、阿闍世王の母で、釋迦の說法を受けた。室明神の本地とする出所は分らない。

【六】

○羅綾ーうすものの絹。

○上求菩提の機ー山の高いのは、上に向つて菩提を求める機會を知らしめ、海の低いのは、下に向つて衆生を敎化する樣を示すとの意この類句〔野宮〕にも見ゆ。

○五濁の水ー五濁は世に行はれる五つの忌はしい事、劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁で、これを水に喩へた。

○實相無漏ー眞如實相は一切の妄染から離れるので、無漏といふ。その廣大無邊なことを大海に喩へた。

○相好ー姿。

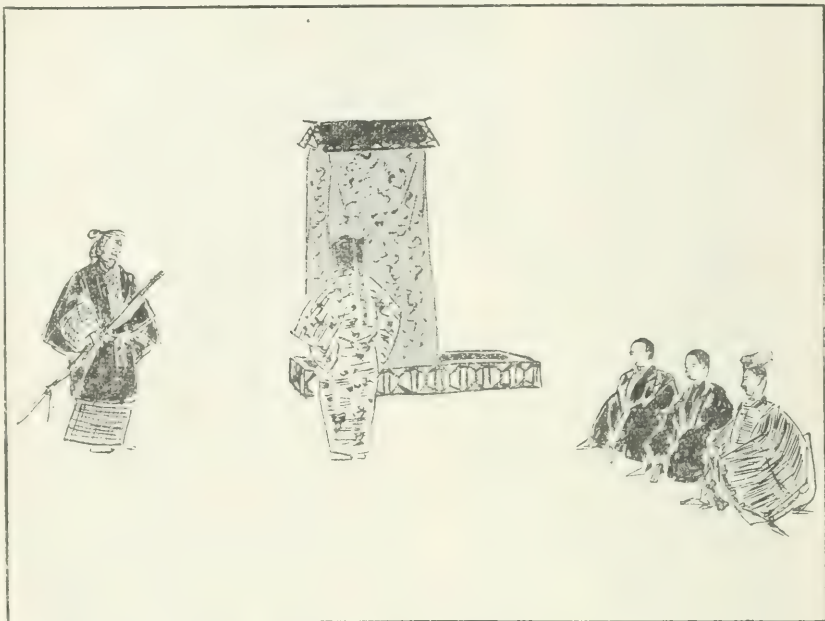
○虛空ー空。

〔考異〕

諸流（觀　春）

【一】ワキ「これは播州室の明神に仕へ申す…… 急ぎ御神事（春の社人にて候。まことに天下泰平國土安全にして。何事もおぼしめすままの御代にて候。かかるめでたき砌には。室君の祭を執り行ひ候間。先例にまかせ、祭）を執り行はばや…… ワキ「いかに誰か…… ワキ「急ぎ室君達に……申し候へ（春ナシ）　【二】地「室の海…… 月の御舟に（春も）棹さして……

古謠本（元祿八年本）

現行本に同じ。

和布刈（めかり）　觀（寶　剛　喜）

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　早鞆の神職、**ワキツレ**　同從者（二人）、**前シテ**　漁翁（龍神）、**前ツレ**　海士女（天女）、**狂言**　海草の精、**後ツレ**（天女）　龍女、**後シテ**　龍神

【所】　長門國（豐前國）　早鞆明神

【時】　十二月晦日

【作者】　能本作者註文に作者不明とある外、古記錄は見當らない。

【梗概】　長門國（實は豐前國であらう）の早鞆明神では、毎年十二月晦日寅の刻に、神主が海中に入つて水底の和布を刈り、神前に供へる御神事がある。今日はその當日なので、神職の者がその用意をしてゐると、漁翁と海士女とが神德をたゝへながら、神前に參り「地神第四代彦火々出見尊の御時は、海神の御女豐玉姬と契り給うて、海陸の隔てがなかつたが、姬御產の時、尊が御約束に背いて、姬の御氣色を隙見し給うた爲に、姬は龍宮に歸られ、それ以來海陸の交通が絕えてしま

つた。しかし和布刈の御神事には、龍神が平坦な海路を作り給ふのであると語り、かの海士女は實は天女であり、漁翁は龍神であると打明けて立ち去る。やがて龍女が現れ出て舞を舞ふと、また龍神が沖から現れ出て、波を退けて、海底を平穩にする。そこで神主が海に入つて和布を刈ると、波はまた元の如くになり、龍神は龍宮に飛んで入る。

【出典】和布刈の神事は、醍醐天皇の皇子重明親王の李部王記に、和銅三年豐前國隼人の神主がこれを始め奉つたとあつて、古くから行はれたもので、その御神事の樣は、後世の著であるが、菊岡米山の諸國里人談卷一に、

豐前國門司關隼鞆明神の宮前は海なり。これに石の階あり。常に二十階ほどは水中に見えて、その先はしらず。毎年十二月晦日の子過丑の剋の間に、社人寶殿の寶劍を胸にあてて、石階をくだりて海中に入る。その時、潮左右へ颯とひらけり。海底の和布を一鎌かりて歸るなり。もし誤て二鎌かれば潮に溺るゝの難あり。此時は社頭民家の燈火、海上掛り船の火、こと〴〵くこれを消なり。その剋限の前半時ばかり、浪大きに立て海あらし、海底に入らんずるとおもふころしばらく浪しづまりて、又前のごとく半時か程は海あるゝなり。元朝作の和布を神前に備ふ。又帝都へも奉なり。

とある。本曲は即ちこの御神事を脚色したもので、クセの豐玉姫の事は、古事記・日本書紀等に見えた神話に據つた。今神皇正統記卷一の文を掲げると、

海中にて豐玉姫姙み給ひしが、「産期に至らば、海邊に產屋を作りて待ち給へ」と申しき。果してその妹玉依姫をひきゐて海邊に行きあひぬ。……さても産の時見給ふなと契り申ししを、覗きて見ましければ、龍になりぬ。恥ぢ怨みて、「我に恥みせ給はずば、海陸をして相通はし隔つる事なからましに」とて、御子を捨て置きて、海中へ歸りぬ。

【概評】和布刈の御神事の樣を如實に描いた佳作である。前段にシテ漁翁がこの明神の神主に和布刈の由來を語るのは窮策であるが、後段に神主をして和布刈の樣を演せしめるために、ワキを他所の者とすることが出來なかつたのであらう。神事物ではあるが、普通の脇能、複式夢幻能の定型を離れて、劇能に近い形式をとれば、かうした破綻を見せずに、もつと興味の深い曲柄に作り得たであらうのにと、作者の捉はれた手法が遺憾に思はれる。

〔一〕
○早鞆の神祭—早鞆は豊前國門司と長門國赤間との間の海峡。神祭は早鞆明神の和布刈の神事。
○長門の國—早鞆明神は實は豊前國にあるが、もと長門赤間關にあつたといふ。
○早鞆の明神—豊前國門司市早鞆瀬戸に面した所にある隼人神社。和布刈神社ともいひ、彦火々出見尊・豊玉姫・玉依姫・鸕鷀草葺不合尊・阿度目磯良の五座を祀る。
○和布刈の御神事—毎年十二月晦日に行はれる。解説參照。
○寅の時—今の午前四時。
○平々—波の靜かな形容。
○和布—食用となる海藻の總名。
○奇瑞—常にはないめでたいこと。

〔一〕
後見、一疊臺に小宮の作物をのせ、引廻をかけて大小前に出す。
次第の囃子にて、ワキ早鞆の神職、翁烏帽子・着附厚板・縷狩衣・白大口・腰帯・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第「今日早鞆の神祭。今日早鞆の神祭。盡きせぬ、御代ぞめでたき

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは長門の國早鞆の明神に仕へ申す神職の者なり。さても當社に於て御祭樣々御座候中にも。十二月晦日の御神事をば。和布刈の御神事と申し候。今夜寅の時に至つて。龍神潮を守護し。波四方に退いて平々たり。その時神主海中に入つて。水底の和布を刈り神前に供へ申し候。殊に當年は不思議の奇瑞御座候間。いよいよ信心を致し。御神事を執り行はばやと存じ候

〔一〕 前段

舞臺は長門國(實は豊前國)早鞆明神の社前で、ワキ早鞆の神職、ワキヅレ從者を随へて登場。

神職「今日早鞆明神の和布刈の御神事を行ふのであるが、このやうな天下泰平の千代八千代に盡きせず榮えます大御代は誠にめでたいことである」

ここ次第を謡つて御代の泰平を祝ひ、

神職「自分は長門國早鞆の明神にお仕へしてゐる神職の者です。さて當社に於ては色々の御祭禮が行はれるのであるが、殊に十二月晦日の御神事を和布刈の御神事と申すのです。そしてその當日である今夜、夜も明け方の四時頃になると、龍神が潮を守護して、荒波を四方に追ひ退けられるので、海上は平穏となります。その時神主が海の中に入つて、海底の和布を刈り取つて、神前にお供へするのです。特に本年は不思議な實にめでたい事があつたので、愈々信心を深くして、この御神事を執り行はうと思ふのです」

ここ見物人に自己紹介をして、御神事の大略を述べ、

ワキサシ「ありがたや今日早鞆の神の祭。年の極めの御祭といつぱ。又新玉の年の始めを。祝ふ心は君がため

と謠ひながらワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ上歌『春の野に出でて摘む若菜。春の野に出でて摘む若菜。生ひ行く末の程もなく。年は暮るれど緑なる和布刈の今日の神祭。心を致し様様に。君の恵みを、祈るなり君の恵みを祈るなり

ワキ「心を致し様々に」と正面に向きて先へ出でまたもとに歸り、上歌濟みてワキは正面に向き、

ワキ「潮の時刻も近づき候間。いよいよ信心を致し御神事を執り行はうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座に行きて順次竝びて下に居る。

【三】眞一聲の囃子にて、シテ漁翁、面笑尉・尉髮・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶水衣・腰帶・扇の裝束にて釣竿を持ち、ツレ海士女、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流の裝束にて、ツレ

○年の極め—一年の最終日。
○新玉の—年の枕詞。
○君がため—古今集光孝天皇の御製「君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつゝ」を引いた。原歌の「君」は普通の第二人稱であるのを、こゝでは大君の意にとりなした。
○生ひ行く末の—一年の早く過ぎて行くをいふ。
○心を致し—眞心を盡し。

【三】

神主「今日早鞆の御神事の執り行はれるのは、實にありがたいことだ。年の終りのお祭といへば、またやがて來る年の始めをお祝ひすることとなるのであつて、新年にわが大君の御代を祝ひ奉る爲に、春の野に出て若菜を摘んでよりこの方、その若菜の次第に生長するやうに月日も次第に過ぎ去つて行つて、また間もなく年の暮となつたのであるが、年は暮れても緑の色の變らない和布を刈つて、今日の御神事を執り行ひ、眞心を盡して、わが大君の大御惠をお祈り申し上げるのだ」

と天下の泰平を喜びながら御神事の準備をする。

【三】シテ龍神漁翁の姿を裝うて、ツレ海士女の姿を裝うた天女(豐玉姫)と共に登場。

○久方の―天の枕詞。こゝでは御代は久しといひかけて、天の意に用ゐた。
○今日に廻るも早鞆の―年月の早きを早鞆にいひかけ鞆の音を重ねてともに暮れ行くと續けた。
○秋津洲―日本國の古名。
○世界わたづみ―世界は陸地、わたづみは海。人間界と龍宮界。
○蘊藻の禮奠―蘊藻は水草禮奠は捧げ供へること。
○感應―人の信心が神佛に通じること。
○海松藻浮藻―海松藻は海草の一種、浮藻は波に浮んでゐる藻。
○花も咲く―花の如くに碎け散る波を和布の花に擬へ和布にも花の咲くのは神の奇瑞であるといふ。
○手向草―神に供へるもの
○塵に交はる―和光同塵の略。佛が本來の德光を和らげ、衆生を濟ふ爲にこの俗世間に降ること。これを神のことに用ゐた。
○誓ひ―神佛が衆生を利益し給ふ誓約。
○結緣―神佛と因緣を結ぶこと。
○海士のしわざ―漁業。
○花の手向―志が何よりの

を先に立てて出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテ ツレ 一聲「天地の。開けし御代は久方の。神と君との。御影かな

二人とも正面に向きて、

ツレ 二句「今日に廻るも早鞆の。シテ ツレ（向合ひ）「ともに暮れ行く。年なれや

と謡ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテ サシ「ありがたやそれ秋津洲のうちに於て。神所の御祭様々なれども。シテ ツレ（向合ひ）「この早鞆の神祭。世界わたづみ隔てなくて。蘊藻の禮奠感應の。海松藻浮藻の花も咲く波をかざしの手向草。塵に交はる。神心。誓ひに漏るる。方もなし

シテ ツレ 下歌「歩みを運ぶこの神にいざ結緣をなさうよ。上歌「所は早鞆の。所は早鞆の。ゆききの舟も楫を絶え。數々の捧げ物海士のしわざに至るまで。かひあるべしや志。それこそ花の手向なれ

漁翁 海女「天地の開闢よりこの方、今日に至るまで實に久しい間、いつも神様と大君との御惠みを蒙つてゐるのだ」

海女「かうして安らかに、一年の年月は早くも過ぎ去つて、また今日は年の暮となりました」

漁翁「あゝありがたいことだ。わが日本の國には諸所方々の神々、それ〴〵色々のお祭が行はれるのではあるが、とりわけこの早鞆の御神事には、海陸、人間界と龍宮界との分け隔てがなく、人間が水草を神に供へてお祭をすれば、神も亦御感應あらせられて、海松藻や浮藻に花の咲いたやうな波の花をお供へ遊ばすのだ。かうして、神様は衆生利益の爲にこの俗世間に交はり給ふのであつて、われ〳〵その御利益に漏れる者はないのだ」

漁翁 海女「さあ明神へ御參りして、この神様の御利益を戴かう。この所は名も早鞆といつて、波風の荒い所で、往來の船も難破するので、神様に色々澤山のお供へ物をして、安穩を祈るのであるが、漁業の繁榮もお祈りすれば、御利益があることで

手向であるとの意。前の「花も咲く」を承けて「花の」といふ。

【三】

○漁翁の罪―佛戒十惡の一である殺生。
○輕き身―賤しい身といふ意を重さの輕い意にとりなした。
○浮かめん―極樂往生を得よう。
○なかなか―然りといふ意の時代言葉。
○うろくづ―魚類。
○焦がる―火の如く焦がれ苦しむ。
○和光の影―和光同塵の略

それこそ花の手向なれ

―それこそ花の手向なれ―と謡ひながらシテ・ツレ入替り、シテは眞中、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちて正面に向き、

【三】

ワキ「不思議やな夕影過ぐる神の御前に。手向を捧ぐる人影は。そもや如何なる人やらん

ツレ「これは賤しき海士少女の。數にはあらぬうき身なるが。手向を捧ぐるばかりなり

シテ「われは又年經て住めるこの浦の。漁翁の罪を恐るるゆゑ。賤しき者は輕き身を。浮かめんためにて候なり

ワキ「なかなかなれやうろくづまでも。誓ひに洩れぬこの浦の

シテ「海士の漁火焦がるとも。シテ ツレ（向合ひて）和光の影は曇りなく

地下歌「明らかなれや天地の。開けし神代の如くにて。すなほなるべき人心。いやましの瑞験現はし

あらう。そして深く信心することが何よりのお供へ物となるのだ」

といひながら神前へ進む

【三】

神職「これは不思議だ、夕暮も過ぎた今、神前にお供へ物をしてゐる者があるが、一體どういふ人たちだらう」

海女「私は賤しい漁師の女で、人並にも數へられないあはれな者ですが、たゞ神樣にお供へをしてゐるのです」

漁翁「私はまたこの浦に永年住んでゐる漁師の老人ですが、殺生の罪が恐ろしいので、賤しいこの身が、どうか易々と極樂往生の出來るやうにと、お祈りしてゐるのです」

神職「さうだ、この浦のものは魚類に至るまで、神樣の御利益に漏れないのだから……」

漁翁「漁師として殺生を行ひ、身を焦がすやうな苦しみを受ける筈ですが、神樣の御利益は曇りのない明らかなものです。そして人の心は天地開闢の神代の時と同じやうに素直で、愈〻多くめでたいしるしの現れるのは、ほんとにありがたいこ

○海原や博多の海も―堀川後百首源兼昌の歌に「海原や博多の沖にかゝりたるもろこし舟にときつくるなり」博多は筑前福岡市の一部。

○潮引島―汐の引くを引島にいひかけた。引島は早鞆瀬戸の西南にあり、彦島ともいふ。

○友千鳥―鞆の音を重ねた

○春秋の雲居の―新勅撰集藤原公經の歌「春秋の雲居の雁もとゞまらずたが玉章のもじの關守」を引いた。

【四】

○火々出見の尊―天照大神を地神第一代とし、尊はその第四代に當らせ給ふ。

○豐玉姫―海神の御女。彦火々出見尊釣針を索めて海の都に到り、姫と契り給ふ。この事〔玉井〕に作らる。

○その御產の時―この事古事記・日本書紀等に見ゆ。解說參照。

○御氣色―御樣子。

○いぶかしく―疑はしく、不安に思ふこと。

○かいまみえ―隙間から覗き見ること。

れにけるぞありがたき。上歌「海原や。博多の海も程近く。博多の海も程近く。潮引島も見え渡る。早鞆の友千鳥。沖の鷗も群れ立つや。春秋の。雲居の雁も留め得ぬ。誰が玉章の。もじの關守と詠みし心も。理や詠みし心も理や

地上歌の始めに、ワキは下に居り、ツレも笛座前に行きて下に居り、シテは「潮引島も」と左の方に向き、「沖の鷗も」と正面に開き、「もじの關守」と角より左へ廻り、大小前へ行き眞中に出でて下に居る。

【四】

地クリ「それ地神第四の御代火々出見の尊。豐玉姫と契りをなし。海陸の隔てなかりしに

シテサシ「その御產の時豐玉姫。尊に向ひ宣はく

地「產期に於てわが姿を。敢へて見給ふ事なかれと。御約諾の。詔互に堅く。誓ひ給ふ

(居クセ)

地クセ「然れども時至り。さすがに御氣色いぶかしく思しけるかとよかいまみえさせ給ひしを。

とです。こゝは海邊で、博多の海にも近く、引島もよく見え、友千鳥や沖の鷗が早鞆の瀨戸に群れ立つてゐまして、和歌に――

『春秋の雲居の雁も留め得ぬ、誰が玉章のもじの關守』

(雁信などといつて、雁は玉章を持つてくるもののやうにいはれてゐるが、その春歸り秋來る雁が文字の跡かたを留めて置かないのは、一體誰の玉章なのであらう)

と詠まれた心持も、尤もだと肯かれます」

【四】

漁翁は神職の傍に坐つて更に話を續けて、

漁翁「太古、地神第四代の彥火々出見尊は海の豐玉姫と御結婚遊ばして、海と陸との分け隔てがなかつたのですが、その御產の時、豐玉姫が尊に『出產の時、決して私の姿を御覽下さいますな』と仰しやつて、お二人でこのお約束を堅くお守りになるやうにお誓ひになつたのです。―

ところが、愈〻御出產の時になると、尊は姬の御樣子を御不安に思して、隙間から覗き見を遊ばしたので、姬は恥かしい

○淺まし—人間の姿でない蛇體を恥ぢ給うたのである
○かこち—愚痴をいふこと
○玉の御子—鸕鷀茅葺不合尊。隠す波、波の玉、玉の御子といひ續けた。
○人畜類—豐玉姫は海神の御女であるから、蛇體の畜類といつた。
○さかり—離れ隔つこと。
○非想—非想非非想處天の略。無色界の第四天、三界中の最上位にあり、有頂天ともいふ。
○渇仰—信心の深いこと。渇者が水を慕ふやうに仰ぎ慕ふ意。
○海藏の御寶—海中に藏められた寶。
○心の如く—龍女が釋尊に奉つた如意寶珠を含めていふ。
【五】

いと淺ましと恨みかこち。長く海路の通ひをたち隠す波の玉の御子を。捨てつつ豐玉姫は龍宮に入り給ふ。その後潮さしひきの。朝暮の時はありながら。人畜類の生を背き。境をさかりにき

シテ「然れば神代の昔より

地「この早鞆の神祭。神慮普き誓ひなれや。上は非想の雲の上。下は下界の龍神まで。渇仰の心中。まことに深き蒼海を。陸地になしてこの國の。長門の通ひ隔てもなき。海藏の御寶も。心の如くなるべし

【五】

地ロンギ「げにや心の如くにて。げにや心の如くにて。この結緣も樣々の。人の願ひのなかるべき

ツレ「今は何をか包むべき。わが住む方は久方の

地「天つ少女の雲の袖

浅ましいことと、恨みかこつて、それ以來長く海と陸との通ひ路を絶つて、波間に隠れ、玉の如き御子は渚に捨てて置いて、豐玉姫は龍宮にお歸りになつてしまつたのです。そしてその後は、朝夕に潮の滿干はありますが、人間界と龍宮界とは全く別なものとなつて、交通が絶えてしまつたのです。

それだのに、この早鞆の御神事には、神代の昔から今に變らず、神様のありがたい御利益によつて、上は有頂天から、下は海底の龍宮界までで、天上地下揃つて深い信心を表し、かの深い蒼海をも陸地のやうに作りますので、この長門國と海との通ひ路も自由になつて、海の中に藏つた御寶も心のまゝに得ることが出來るのです」

【五】

神職「全くその通り、すべて心のまゝになるのだから、人々の樣々の願ひ事も、この神にお願ひ申せば、成就しない筈はないのだ」

海女「今は何を隠さう、自分の住む所は天上界で、天女の舞に頭に挿すかざしの花をこの神へお供へするのです」

○かざしの花―天女の髪に挿す花。袖をかざすといひかけた。

○老の波に―老人の顔の皺を老の波といふので、翁を承けて、波の上に「老の」を冠した。

シテ『かざしの花の手向草

地『色こそ變れ

シテ『わたづみの

地『花は波路の底よりも。龍宮の捧げ物。天地ともに渇仰の。天つ少女は雲に乘れば。翁は老の波に隱れ入り給ひけりや。隱れ入らせ給ひけり

・ツレ「龍宮の捧げ物」と立ちて幕に入り、シテ「翁は老の波に」と立ちて常座に出でて開き、來序の囃子にて靜かに中入。

漁翁「自分のは、それとは種類は違つてゐるが、やはり花の一種である波の花を海底から持ち出して、龍宮からのお供へ物とするのだ」

と、天女・龍神ともに深い信仰を表して、天女が雲に乘つて天上界に歸られると、漁翁の姿をした龍神は波の中に隱れておしまひになつた。

【間】

【間】 末社來序の囃子にて、狂言海草の精、面鼻引・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴。脚半・腰帶。扇の裝束にて出で名乘座に立ち、

狂言「かやうに候者は。長門の國早鞆の沖に住む海草の精にて候。さても當社に於て御神事數多御座ある中にも。十二月大晦日の御神事を和布刈の御神事と申して。とりわけ奇瑞ある御事にて候。その故は。今夜寅の刻に龍神立つ波間を分け。渺茫たる眞砂になり申す。その時神主松明をともし海中に入つて。水底の和布を刈り。神前へ供へ申さるゝ事にて候。誠に神代より今に至るまでわたつみの宮と隔てなく。今に絶えせずめでたき御神拜にて候。さればこの御代めでたければ。いよいよ今夜の御神事めでたく思し召し。龍宮の姫宮鹽筒男の翁現れ給ひ。數々の寶物を捧げ渇仰の體を神主見つけ給ひ。加何なる者ぞと尋ね給へば。龍女は賤しき海士少女と答へ給へば。翁は浦人の樣に御申しあり。假初ながら地神第四代彦火々出見の尊よりの事を御物語りあり。今の捧げ物は龍宮

よりとあつて、天地と共に渇仰の天の少女といひ捨てて、雲居に紛れ給へば。龍は海中に入り給ふ。
かやうに奇特なる神前へ出る事、偏にこの浦に住む故にて候。かゝるめでたき折柄なれば、一さし奏でて罷り帰らう

といひて大小前へ出で、

狂言「めでたかりける時とかや。「三段舞」やら〳〵めでたやめでたや、かゝるめでたき折柄なれば、我等がやうなる海草までも。この神前に浮かみ出で。神秘を拝み奉り神秘を拝み奉りて、又海中にぞ入りにける

と舞ひて幕に入る。

【六】

出端の囃子にて、後ヅレ（天女）龍女、面連面・鬘・鬘帯。天冠・黒垂・襟赤。着附摺箔・紫長絹。白大口・腰帯。扇の装束にて出て常座に立ち、

地『汀に神幸なり給へば。汀に神幸なり給へば。虚空に音楽。松風に和して。江月照らし。異香薫ずる龍女は波をもかざしの袖を。返すも立ち舞ふ袂かな

〔天女舞〕

後ヅレ『さる程にさる程に

地『和布刈の時到り虎嘯くや。風早鞆の。龍吟ず

【六】○虎嘯くや—時の寅にかけて虎の語を出し、碧巌集「龍吟霧起、虎嘯風生」などといふので、龍を出す前提とした。○風早鞆の—風早きといひかけた。

【六】

後段

後ヅレ（天女）、龍女豊麗な舞の場。

明神が水際までお出ましになると、空中に奏する音楽は松風と調子を合はせ、月の光は水上を照らし、妙なる香が薫り満ちて、龍女は波をもかざしの花として、舞袖を翻して美しく舞ふのである。

〔天女舞〕

にその美しい舞を示す。

かうしてゐるうちに、和布刈の御神事の行はれるべき寅の刻限になると、虎の嘯くやうな早風が吹き来り、早鞆の

れば雲起り雨となり。潮も光り。鳴動して。沖より龍神。現れたり

と常座にて幕の方に向ひ扇にて招き、直して笛座前に行きて下に居る。

早笛にて、後ジテ龍神、面黒髭・赤頭（龍戴）・金緞鉢巻・襟紺・着附厚板・法被・赤地半切・腰帯の裝束にて打杖を持ちて出で、橋懸一の松に立ち、

【七】

地「龍神即ち。現れて。龍神即ち現れて（と舞臺に入り）

後ジテ「和布刈の所の。水底を穿ち

地「拂ふや潮瀬に。こゆるぎの磯菜摘む（と角へ行き）

シテ「めざし濡らすな。沖に居れ波（と左へ廻り）

地「沖に居れ波と夕汐を退け屛風を立てたる如くに別れて（と眞中にて開き）海底の砂は。平々たり（と右へ廻りて常座へ行き）

〔舞働〕

を舞ひて、常座に下に居る。この間にワキくつろぎて狩衣の肩をとり、左手に松明、右手に鎌を持ち、

ワキ「神主松明。振り立てて（と立ち）

瀬戸には龍のうなるやうな波音が立つて、雲が起り、雨が降り、潮も光り、あたり一面に鳴り響いて、沖の方から龍神が現れ出た。

【七】

後ジテ龍神登場、

かくて龍神が現れ出て、和布を刈るべき所の海底を穿ち拂ひのけて、

龍神「磯邊で海草を摘み拾うてゐる女兒の裾を濡らすな、波は沖の方に居れ」

といつて、潮を追ひのけ、屛風を立てたやうに、波を左右に別け隔てて、海底を平坦な砂路のやうにした。

〔舞働〕

に龍神が波を追ひのける様を示す。

そこで、神主が松明を振り立てて、御

【七】

○こゆるぎの―古今集大歌所御歌「こよろぎの磯たちならし磯菜摘むめざし濡らすな沖に居れ波」を引いた。「こゆるぎ」は「こよろぎ」に同じく相摸國の大磯。「磯菜」は海草。「めざし」は髪を切禿にした女兒。髪が短くて目を刺す程であるとの意から出た名。

○夕汐を―言ふといひかけた。

○屛風を立てたる―波が兩方に分れて、中に道を作ること。

地「神主松明振り立てて（と臺へ上り）。御鎌を持つて（正面先へ出で）。岩間を傳ひ。傳ひ下つて（と正面を見廻し）。半町ばかりの海底の和布を刈り（鎌にて刈る形をし）。歸り給へば程なく跡に（ワキ脇座に歸りシテ立ち）。潮さし滿ちて。もとの如く。荒海となつて（拍子を踏み）。波白妙の。わたづみわだの原（右へ廻り）。天を浸し（上を見）。雲の波煙の（下に居り）。波風海上に收まれば（と立ち）。波風海上に。收まれば蛇體は。龍宮に飛んでぞ。入りにける

と橋懸幕際へ乗り込み、飛び返りて左袖をかづき、直に立ちて留拍子を踏む。

鎌を持つて、岩間傳ひに海に傳ひ下つて、半町ばかり下の海底の和布を刈つて、無事に社へ歸られると、その後はまた間もなく潮がさし滿ちて、もと通りの荒海となり、波の白々と立つ海原には天をも浸すやうで、波が雲か煙のやうに見える。そのうちに、また海上の波風が靜まると、龍神は龍宮に飛んで入つた。

後シテ龍神、海底に入る態で退場。

○わだの原―海原。「わた」は海。

○蛇體―龍神。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ次第「今日早鞆の……盡きせぬ御代ぞめでたき（寶ナシ）

古謠本（光悦本）

【一】ワキ次第「今日早鞆の……盡きせぬ御代ぞめでたき（光ナシ）ワキ「抑も（光ナシ）これは……神職の者なり（光にて候）……今夜寅の時に至（光あた）つて……殊に當年は不思議（光奇特）の奇瑞……

【二】シテサシ「ありがたや……この早鞆の神（光の）祭……「げにや心の……人の願ひのなかるべき（元し）

【五】地ロンギ

望月(もちづき)

觀(寶 春 剛 喜)

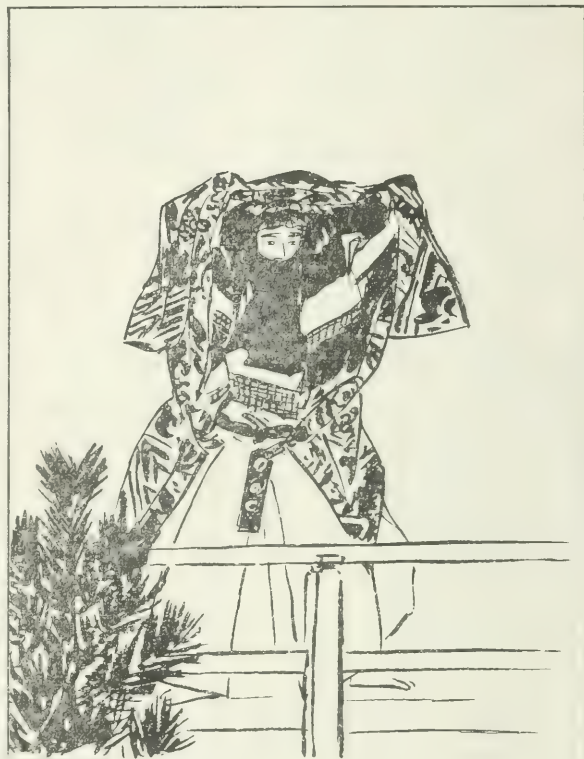
解　説

【能柄】四・五番目　二段劇能

【人物】前シテ　小澤刑部友房、ツレ　安田友治の妻、子方　花若、ワキ　望月秋長、狂言　同從者、後シテ　小澤刑部友房

【所】近江國　守山

【時】(正月)

【作者】作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】信濃國の安田莊司友治は同國の望月秋長に殺害せられて、家臣は皆離散してしまつた。その一人である小澤刑部友房は今は近江國守山で甲屋といふ宿屋の亭主となつてゐた。安田が死んでから十三年、その妻と一子花若は敵の迫害を恐れて、さすらへの旅を續けた末、この甲屋に辿り着いた。小澤は意外の邂逅を喜んで、色々力添へをした。折も折、その宿敵の望月もこの宿に泊り合せたので、小澤の計らひで、安田の妻は盲御前に身をやつして曾我兄弟の謠を謠ひ、花若は八撥を打ち、小澤自身は獅子を舞つて、望月の酒興を助け、その醉に乘じて、仇を討ち本望を遂げた。

【出典】典據らしいものは見當らない。恐らく仇討といふことを主題にして、作者の創作したものであらう。

【概評】本曲と相似たものに〔放下僧〕がある。兩者とも父の仇討が主題であるが、舞臺上の興味はその手段に用ゐる放下や獅子舞にある。兩者とも戯曲として最も發達した脚色で、一歩を外せば、能樂の埒外に出てしまふものである、危くお芝居にならうとするのを救つてゐるのが、この放下や獅子舞である。演奏上の興味はかうした所にあるが、主題を沒却するに至らない所に、兩曲の特色がある。特に能樂の埒外に出ようとして、危く踏み止まり、危く興味本位に墮ちようとして、主題から離れきらないのが、兩曲の生命である。兩曲を比較すれば、脚色の複雜さに於て、しかもその圓滑である點に於て、演奏興味の深さに於て、その方法の自然である點に於て、本曲の方が〔放下僧〕より勝れてゐるといひ得よう。

第一段

【一】

シテ小澤友房、直面・襟花色・着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて、何事もなく舞臺に出で常座に立ち、

シテ「かやうに候者は。近江の國守山の宿甲屋の亭主にて候。さても某本國は信濃の國の者にて候が、さる子細候ひてこの甲屋の亭主となり。往來の旅人を留め申して身命をつぎ候。今日も旅人の御通り候はば。御宿を申さばやと存じ候

といひて地謡座前に行き下に居る。

【二】

次第の囃子にて、ツレ安田友治の妻、面深井・鬘・鬘帶・襟朽葉色・着附摺箔・無色唐織の裝束にて杖をつき、子方花若、襟赤・着附縫箔・白大口・腰帶・扇の裝束にて、子方を先に立てて出で、子方は舞臺の眞中、ツレは常座にて向合ひ、

【一】

舞臺は近江國守山で、シテ小澤刑部友房登場。

小澤「こゝへ出ました私は、近江國守山の宿の甲屋といふ宿屋の亭主です。さて私はもとは信濃國の者なのですが、ある事情があつて、この甲屋の亭主となり、往來の旅人を泊めて、くらしを立ててゐるのです。今日も旅人がお通りになつたならば、お宿をしたいものだと思ひます」

と見物人に自己紹介をして、旅人を待つてゐる態

【二】

舞臺は變つて信濃國となり、ツレ安田莊司の妻、子方花若を伴つて登場。

【一】

○守山—近江國野洲郡の宿驛。

○甲屋—宿屋の屋號。

○さる子細—主家の斷絶した事。後に委しい事情が出てくる。

○身命をつぎ候—命をつないでゐる。生活してゐる。

【二】

ツレ子方 次第「波の浮鳥住む程も。波の浮鳥住む程も。下安からぬ心かな

（地取に二人とも正面に向き、

ツレサシ「これは信濃の國の住人。安田の莊司友治の妻や子にて候。さても夫の友治は。同國の住人望月の秋長に。あへなく討たれ給ひし後は。頼む木蔭も撫子の。花若ひとり隱し置かんと。敵の所縁の恐ろしさに。思ひ子を伴ひ立ち出づる（と子方と向合ひ、

ツレ子方 下歌「いづくとも定めぬ旅を信濃路や。上歌「月を友寢の夢ばかり。月を友寢の夢ばかり。名殘を忍ぶ古里の。淺間の煙立ち迷ふ草の枕の夜寒なる。旅寢の床の憂き涙守山の宿に、着きにけり守山の宿に着きにけり

ツレ「旅寢の床の」と右の方に向きて二三足出でまたもとに

妻子「波間に浮かんでゐる水鳥は、絶えず落ちつきのない不安な思ひをしてゐるが、私達の身上は丁度あの水鳥のやうなものだ」

（と次第に自分達の心持を述べ、

妻「私達は信濃國の住人の安田莊司友治の妻や子でございます。さてわが夫友治は、同國の住人望月秋長にもろくもお討たれになりまして、それ以來は、これまで多勢ゐた家來どもも散り〳〵に離れてしまひ、頼りにするものとては誰一人もありません。たゞ可愛いわが子花若だけは隱して置きたいと思ふのですが、それさへ、敵の縁故の者がどこで狙つてゐるか分らないので、恐ろしさの餘り、可愛い子を連れて旅に出ようと思ふのでございます」

（と見物人に自己紹介をし、

妻子「どこといふ目當もない旅を思ひ立つて、夫の死後はたゞこの月のみを慰めにしてゐた信濃國を立ち出るにつけて、やはり故郷の事が名殘惜しく思はれ、淺間の煙を見ても、足の進みが鈍り勝ちであるが、所々の宿に夜寒の辛い思ひをし、悲しい涙を流しながらも、旅を續けてゐるうちに、守山の宿に着きました」

（と旅の有樣を述べてゐるうちに旅は進んだ態で、

○波の浮鳥—頼るものもなく漂浪してゐる母子の身を喩へていふ。
○下安からぬ—水鳥の足の休む隙のないやうに、表面は安らかなやうでも、内面心配が絶えない。
○安田の莊司友治—假作の人名。
○望月の秋長—假作の人名觀世以外の四流では安田の從兄弟とす。
○あへなく—はかなく。もろくも。
○從類—家來眷屬。
○撫子—愛撫する子の喩へ頼む木蔭も無しといひかけ撫子の花、花若と續けた。
○花若—安田友治の子。假作の人名。
○敵の所縁—敵望月に關係のある者。
○思ひ子—愛する子。
○信濃路や—旅をするといひかけた。
○月を友寢の—夫の死んだ後は月のみを友として獨寢する。
○淺間の煙—信濃國淺間山から噴火する煙。古里の淺ましといひかけ、立ち迷ふの序とした。
○草の枕—辛い旅寢。
○守山の—憂き涙の漏るといひかけた。

【三】

○北の御方―北の方の敬稱奥方。身分の高い人の妻をいふ。

○痛はしの―氣の毒な。

○やがて―早速。

歸りて守山に着きたる心、上歌濟みて正面に向き、

ツレ「急ぎ候程に。近江の國守山の宿に着きて候。この所にて宿を借らばやと思ひ候

といひて二三足前に出で、子方はツレの後へ行き、二人とも地謡座の方に向きて、

【三】

ツレ「いかにこの家の内へ案内申し候

シテ立ちてツレに向ひ、

シテ「誰にて渡り候ぞ

ツレ「これは信濃の國より都へ上る者にて候。一夜の宿を御貸し候へ

シテ「易き間の事にて候。此方へ御入り候へ

といひて入替り、ツレ・子方は地謡座前に行きて下に居り、

シテは入替る時ツレを篤と見て、橋懸一の松へ出で、

シテ「不思議やなこれに留め申して候御方を。如何なる人ぞと存じて候へば。某が古の主君の北の御方。幼き人は御子息花若殿にて御座候はいかに。あら痛はしの御有様や候。やがて某と名

舞臺はもう守山となる。

妻「道を急いだので、もはや近江國の守山の里に着きました。こゝで宿をとりませう」

【三】

甲屋の前に立つた態で、

妻「もうし、お願ひします」

小澤「どなたでございます」

妻「私は信濃國から都へ上る者ですが、一晩お宿をお願ひ致します」

小澤「お易い御用でございますとも。どうぞこちらへお入り下さい」

と安田の妻子を一室に案内し（舞臺が即ちその一室）、自分は部屋の外（橋懸）に立つて、

小澤「實に不思議なことだ。今お泊めした方をどういふ人かと思つたら、私が以前お仕へしてゐた主君の奥方様で、お小さい方は若様の花若君であつたのには驚いた。實においたはしい御様子だ。早速自分の名を名乘つて、お力をおつけしませう」

と獨言をいつて、安田妻子の前に出て、

○行方もなき者—素性の確かでない者、賤しい者。

○小澤の刑部友房—假作の人名。

○主君の面影の—花若の面ざしが故主安田友治に似てゐるのである。

乘つて力をつけ申さばやと存じ候

といひて舞臺に入りツレの前に出で辭儀して、

シテ「いかにお旅人に申すべき事の候。信濃の國よりと仰せ候につきて。古御目にかかりたるやうに存じ候

ツレ「いやこれは行方もなき者にて候程に。思ひもよらぬ事にて候

シテ「何を御包み候ぞ。まづ某名乘つて聞かせ申すべし。これこそ古御内に召し仕はれ候ひし、小澤の刑部友房にて候へ

ツレ「さては古の、小澤の刑部友房か。あら懷しやとばかりにて。涙に咽ぶばかりなり（と面を伏す）

子方「父に逢ひたる心地して（と立ち）。花若小澤に取りつけば（とシテの肩に手をかく）

シテ「別れし主君の面影の。殘るも今は恨めしや

小澤「申し、旅のお方に申し上げます。先程信濃國から來たと仰せになりましたので、氣がついたのでございますが、私は以前お目にかゝつたことがあるやうに存じますが」

妻「いえ、私は何も身分もない者なのですから、御存じであらう筈もございません」

小澤「何をお隱し遊ばすのでございます。では、まづ私の名前から申し上げませう。私が以前お邸にお仕へしてゐました小澤刑部友房でございます」

妻「すると、そなたが昔の小澤刑部友房なのか、おゝ懷しい……」

といつただけで、あとは言葉も出ず、たゞ涙に咽ぶばかりであつた。

花若「父上に逢つたやうな心地がする」

と花若が小澤に取りつくと、

小澤「お別れ申した御主君と御面ざしの似

（と子方を見）

子方「こはそも夢か現かと。主從手に手を取りかはし（とシテも子方の肩に手をかく）

地上歌「今までは。行方も知らぬ旅人の。行方も知らぬ旅人の。三世の契りの主從と。頼む情もこれなれやげに機縁ある、我等かなげに機縁ある我等かな

シテ地上歌の初めに子方を立たせて元の座に坐せしめ「げに機縁ある」とツレに辭儀、ツレも面を伏す。

シテ「あれなる一間に御入りあつて御休みあらうずるにて候

といひて、ツレと子方は囃子座の後に、シテは後見座にくつろぐ。

【四】

次第の囃子にて、ワキ望月秋長、着附厚板・掛素袍・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて男笠を被り、狂言太刀持（着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇・小刀の裝束）に太刀を持たせて出で、橋懸一の松にて羽目板の方に向き、

ワキ次第「歸る嬉しき古里を。歸る嬉しき古里を。

○三世の契り—過去、現世、未來へかけての約束。鎌倉時代から一般に「親子の縁は一世、夫婦の縁は二世、主從の縁は三世」といひ慣はした。

○機縁—衆生の機に佛の教化を受ける因緣のあることゝ離れ難い縁といふ意に用ゐた。

【四】

◎歸る嬉しき古里を—檜本に「歸る嬉しき古里に」とあるのは誤字であらう。元

ていらつしやるのも、今は却つてお恨めしうございます」

花若「これはまあ、一體夢であらうか、ほんとであらうか」

と主從手に手を取りかはし、

小澤「今までは何の縁故もない旅の方と思つてゐましたものが、頼み頼まれる、三世の契りを結んだ主從であらうとは。ほんとに私達は前世からの深い御縁でございます」

と暫しは互に感懐の涙にくれた後、

小澤「あちらの一間にお入りになつて、お休みなさいませ」

妻子は囃子座の後に、小澤は後見座にくつろいで第一段が終る。（シテの中入は第七節の後であるが、解釋としてはここで段を分けるのが穩當であらう）

【四】

第二段

橋懸は京都で、ワキ望月秋長、狂言從者を隨へて登場。

望月「旅は辛いものといはれてゐるが、こ

祿本、刊行會本にはをとある。

○生害—命を失ふこと。

○緩怠—落度。とが。

○安堵—本領安堵の略。本の領地を安心して所有すること。

○御教書—将軍からの命令書。

◎御前に候—以下狂言詞、諸本の文に從ふ。

誰憂き旅と思ふらん

地取に笠を脱ぎて正面の方に向き、

ワキ「これは信濃の國の住人、望月の何某にて候。さても同國の住人。安田の莊司友治と申す者を。某が手にかけ生害させて候科により。この十三年が間在京仕り候處に。されども緩怠なき由聞し召し開かれ。安堵の御教書を賜はり悦びの色をなし。唯今本國信濃に下向仕り候

といひて、やがて守山に着きたる心にて、

ワキ「急ぎ候間。近江の國守山の宿に着きて候。今夜はこの宿に泊らばやと存じ候。（狂言に）いかに誰かある

狂言「御前に候

ワキ「今夜はこの宿に泊るべし。宿を取り候へ。又存ずる子細のある間。某が名をば申すまじく候

狂言「畏つて候

のやうに故郷へ歸る樂しい旅ならば、誰も辛いと思ふものはなからう」

と次第に旅の心持を述べ、

望月「私は信濃國の住人望月何某です。さて、同國の住人安田莊司友治といふ者を私が手にかけて殺した罪によつて、この十三年の間京都に居ましたが、自分に罪科はないといふ判決が下り、領地に安堵するやうにとの辭令書を戴いて、誠にありがたい事に思ひ、これから信濃國に歸るのです」

と見物人に自己紹介をし、やがて守山に着いた體で、

望月「道を急いだので、はや近江國守山の宿に着きました。今夜はこの所に泊りませう」

といつて從者に向ひ、

望月「おい、誰かゐないか」

從者「はい、お前に居ります」

望月「今夜はこの所で泊らう。宿をとつてくれい」

從者「畏りました」

望月「それから又、少し事情があるから、自分の名をいつてはいけないぞ」

從者「畏りました」

◎やれ〳〵めでたい―以下「甲屋に取らう」まで流布本にはない。元祿本には「都より大名の此宿に御着にて候御宿をかり申さふするにて候」とある。

○大名―多くの土地を領有してゐる將軍の家來。

「望月の秋長殿ではないぞ」―元祿本には「望月殿となり申そと仰られ候」とある。

○苦しからず―迷惑でない旅客の名が明からでなくても構はない。

◎心得申し候―以下「此方へ御通り候へ」まで元祿本にはない。

といひてワキと入替り、ワキは三の松邊に立ち、狂言は一の松にて、

狂言「やれ〳〵めでたい事ぢや。急いで御宿をとり申さう。初宿おぢや程に隨分よい所がとりたいが。どれを取らうぞ。甲屋か律義な宿屋と聞いたほどに。甲屋に取らう。（舞臺に向ひ）いかにこの家の主の渡り候か

シテこの間に立ち常座に出で狂言に向ひ、

シテ「誰にて御座候ぞ

狂言「これは信濃の國へ御下向の御方にて候。御宿を申され候へ

シテ「心得申し候。さて御名字をば何と申す人にて御座候ぞ

狂言「これは信濃の國に隱れもなき大名。望月の秋長殿、ではないぞ（と口を掩ふ）

シテ（驚きを隱し）「苦しからず候。此方へ御入り候へ

狂言「心得申し候。（ワキに）いかに申し上げ候。此方へ御通り候へ

ワキ・狂言舞臺に入り、ワキは脇座、狂言は地謡座前に坐す。

従者は甲屋の前に立つて、

従者「おい、この家の主人はお出でか」

小澤「どなたでございます」

従者「こちらは信濃國へお下りになる方なのだ。お宿をしてくれい」

小澤「承知しました。して、御名字は何と仰しやる方でございます」

従者「こちらは信濃國の有名な大名で、望月の秋長殿（といつて氣がつき）……ではないぞ」

小澤（驚きを隱して）「いえどなたでも宜しうございます。どうぞこちらへお入り下さい」

従者「承知した。（主人に）申し上げます、こちらへお通りなさいませ」

二人舞臺に入り、甲屋の一室に入った態。

【五】
○言語道斷—いひやうもなく驚いた時に發する語。止觀に「言語道斷、心行處滅、故名二不可思議境一」
○頼み申して候—主人として頼りにした。
○御本望—敵討の目的。
○きつと—急度。ふいと。

この間シテは後見座にくつろぎて、橋懸三の松に出で、

【五】
シテ「言語道斷の事。われ頼み申して候人の北の御方。同じく御子息花若殿この家に留め申して候處に。花若殿御親の敵。望月が泊りて候事は候。やがてこの由申し上げばやと存じ候

といひて舞臺に行きかゝる。この間にツレ・子方一の松に出づ。シテこれを見て、

ワキ「や。いかに申し候。不思議なる事の候。今夜この所に望月が着きて候

子方「なに望月と申すか（と二足詰む）

シテ「暫く。あたり近く候。まづ靜まつて聞しめされ候へ。唯今申す如く。望月がこの家に泊りて候。これは天の與ふる所と存じ候。いかにもして今夜の中に。御本望達せさせ參らせうずるにて候。御心安く思しめされ候へ。（少し考へて）きつと思案仕りたる事の候。今頃この宿にはやり候

橋懸は望月のゐる室の外の態で、小澤こゝに出て

【五】
小澤「これは驚いた。自分のお仕へしてゐた御主君の奥方様、若様の花若君をこの家にお泊めしたところへ、花若君の親御の敵望月が泊つたのだ。早速この事を申し上げませう」

橋懸が安田妻子のゐる室で、二人はこゝへ出る。小澤その前に出て、

小澤「申し、申し上げます。實に不思議な事がございます。今夜この所に望月が着きました」

花若「なに、望月といふのか」

小澤「お靜かに、すぐそばでございます。まづ氣を落ちつけてお聞きなさいませ。唯今申しましたやうに、望月がこの家に泊つたのです。これは天の與へだと思ひます。何とかして今夜の中に御本望のお遂げになれるやうにして進ぜませう。御安心なさいませ。……お、旨く考へついたことがございます。この頃この所で流行してゐるのは、盲御前です。なに構ふことはございません。奥方様は夜に紛れ

ものは盲御前にて候。何の苦しう候べき。夜に紛れ杖にすがり。花若殿に御手を引かれさせ給ひ。盲の振舞にて座敷へ御出で候へ。某かの者に酒を勸め候べし。又何にても候へ御謠ひあれと申し候はば。そと御謠ひ候へ。花若殿は八撥を御打ちあらうずるにて候。某は獅子舞をまなび。その紛れに近づきて本望を遂げさせ申さうずるにて候

ツレ　ともかくもよきやうに計らひて給はり候へ

シテ「何事も某に御任せ候へ

【六】　三人とも後見座にくつろぎ【物着】。ツレ淺黄水衣を着け、子方は羯鼓を手に持ちて一の松に出で、

ツレサシ『嬉しやな望みし事の叶ふよと。盲の姿に出で立てば

子方『習はぬ業も父のため

○盲御前―音曲を以て旅客を慰める盲女の宿場藝人。
○八撥―羯鼓の一種、羯鼓を前帶につけて八拍子に打つもの。
○そと―一寸。
○獅子舞―獅子頭を被つて舞ふ一種の舞。
○まなび―眞似をする。

【六】

て杖にすがり、花若様にお手をお引かれになつて、盲のやうな振りをして、座敷へお出でなさいませ。私があの男に酒を勸めませう。それから『何でもよいから一つお謠ひなさい』と申しましたら、一寸お謠ひなさいませ。そして、花若様は八撥をお打ちになるのでございますよ、私はまた獅子舞の眞似をして、その隙に敵に近づいて、本望を遂げませう」

妻「何かと、よいやうに取計つて下さい」

小澤「何も彼も私にお任せなされませ」

【六】　安田の妻は盲御前の姿をして、花若に手を引かれて出で、

妻「あゝ嬉しいことだ、永年の望みが叶ふのだ」

と、盲の姿をして出てくると、

花若「このやうな、爲慣れないことも、父上の御爲で……」

○蟬丸―醍醐天皇の皇子で琵琶の名人であつたが、盲目の爲に逢坂山に棄てられ給うたといひ傳へてゐる人。この人のこと〔蟬丸〕に作らる。
○道の邊に迷ひしも―蟬丸が盲目で道のほとりに迷つた苦しさに比べて、自分達の今の身上もそれに劣らない苦しさであるとの意。
○習ひ歌―「習ひ歌」といふ熟語があるのではなく、「身の習ひ、歌聞し召せ」をいひ續けたのであらう。

【七】

ツレ「竹の細杖つき連れて
地上歌「かの蟬丸の古。かの蟬丸の古。たどりたどるも遠近の。道の邊に迷ひしも。今の身の上も。思ひはいかで劣るべき。かかる憂き身の業ながら盲目の身の習ひ歌。聞しめせや旅人よ聞しめせや旅人

「かかる憂き身の業ながら」と子方ツレの手を引きて舞臺に入り脇正面に立ち、シテその後につきて仕手柱際に立ち、狂言に向ひ、

【七】

シテ「いかに申すべき事の候、
狂言「何事にて候ぞ
シテ「この家の亭主にて候が。めでたき御下向にて候間。御祝ひのために酒を持たせて參りて候。然るべきやうに御申し候へ
狂言「心得申し候。（ワキに）いかに申し上げ候。この家の亭主御下向めでたき由申し候ひて。御樽を持たせ參りて候
ワキ「此方へと申せ

妻「細い竹杖をついて、母子連れ立つてゐるこの樣は……昔かの蟬丸が危い足どりで、あちこちの道を迷ひ歩いたのも、今の自分の身上も、悲しさ苦しさには、いづれ勝り劣りがないことだ」

といつて、望月の部屋の前に立ち、

妻「このやうな情ない身上ながら、盲の身の習はしで、歌を謡ひます。旅の方、どうぞお聞き下さいませ」

【七】

亭主小澤、望月の從者に向つて、

小澤「申し、一寸申し上げます」
從者「何の用だ」
小澤「私はこの家の亭主でございますが、めでたいお下りでございますから、お祝ひの爲に酒を持たせて參りました。どうかよろしくお取次ぎ下さい」
從者「承知した。（主人に）申し上げます。この家の亭主が、お下りをお祝ひ申して、お樽を持たせて參りました」
望月「こちらへといへ」

○畏つて候―元祿本には「いかに申候」とある。

○日本一―最もよろしいこと。室町時代に用ゐ慣れた語。

○けしからず―惡くない。甚だよく。

○一萬箱王―曾我十郎祐成弟五郎時致の童名。兄弟のこと「調伏曾我」「元服曾我」「小袖曾我」「夜討曾我」「禪師曾我」に作らる。

狂言「畏つて候。(シテに)此方へ御參り候へ

シテ・ツレ・子方下に居る。

狂言(ツレを見て)「又これなる人達は如何なる人にて候ぞ

シテ「さん候これはこの宿に候盲御前にて候。かやうのお旅人の御着きの時は。罷り出でて謠などを申し候。御前にてそと御謠はせ候へ

狂言「日本一の事にて候。やがて申し上げうずるにて候。(ワキに)いかに申し上げ候

ワキ「何事ぞ

狂言「あれに候は。この宿にある盲御前にて候が。けしからず面白く謠ふ由を申し候謠はせられ候へ

ワキ「汝所望し候へ

狂言「畏つて候。(ツレに)なうこれなる人達。御所望にて候ぞ。面白からんずる所を一節御謠ひ候へ

ツレ「一萬箱王が親の敵を討つたる所を謠ひ候べし

狂言「いや〳〵思ひもよらぬ事にて候

從者「畏りました。(亭主に)こちらへお出でなさい。(安田夫婦を見て)そして又この人達はどういふ人なのだ」

小澤「はい、これはこの里に居ります盲御前でございます。このやうにお旅人がお着きになつた時には、出て參りまして、謠などを申します。御前で一寸謠はせて下さいませ」

從者「それは何よりの事だ。すぐ申し上げよう。(主人に)申し上げます」

望月「何おや」

從者「あれに居りますのは、この里に居る盲御前でございますが、馬鹿に面白く謠を謠ふといふことでございます。お謠はせなさいませ」

望月「では、お前所望せい」

從者「畏りました。(安田妻に)おい、その人達、御主人の御所望だ。面白さうなのを一節謠つておくれ」

妻「一萬箱王が親の敵を討つた所を謠ひませう」

從者「いや〳〵、それは以ての外だ」

◎畏つて候―この一句、謠本にはない。

【八】

○迦陵頻伽―極樂に棲むといふ想像上の鳥、美音鳥又は妙聲鳥ともいふ。智度論に「如二迦陵頻伽鳥一、在二殼中一未レ出發レ聲、微妙勝二於餘鳥一」

○鷙―鷲鷹など猛禽の汎稱。虎を害すといふ故事は見當らない。

○河津の三郎―伊東祐親の子祐泰。

○五つや三つ―一萬五歲、箱王三歲。

○從弟―工藤左衞門尉祐經。

ワキ「何事を申すぞ

狂言「これなる人達に謠を所望仕り候へば。一萬箱王が親の敵討つたる所を謠はうずる由申され候程に。御前にてはいかがと存じいやと申して候

ワキ「何の苦しう候べき急いで謠はせ候へ

狂言「畏つて候。(ツレに)さらば今の仰せられたる所を御謠ひ候へ

【八】 子方羯鼓をツレの左手に持たす。ツレこれを持ちて、

ツレクリ「それ迦陵頻伽は卵の内にして聲諸鳥に勝れ

地「鷙といふ鳥は小さけれども。虎を害する力あり

ツレサシ「ここに河津の三郎が子に。一萬箱王とて。兄弟の人のありけるが

地「五つや三つの頃かとよ。父を從弟に討たせつつ。既に年ふり日を重ね。七つ五つになりしか

望月「何をいふのだ」

從者「この人達に謠を所望しますと、一萬箱王が親の敵を討つた所を謠はうと申しますので、御前では如何かと存じ、いけないと申しました」

望月「なに構はない、すぐ謠はせ」

從者「畏りました。(安田妻に)それでは、今の仰しやつた所をお謠ひなさい」

【八】 安田妻、次のやうに謠を謠ふ。

妻――「かの迦陵頻伽は巢の中から他の鳥とは勝れた聲を出し、鷙といふ鳥は小さいけれど、虎を害する力を持つてゐる。――

ここに河津三郎の子に、一萬・箱王といふ兄弟の人があつたが、五つや三つの頃に、父を從弟に討たれた。その後年月が經つて、兄弟が七つ五つにもなると、幼い心にも父の敵を討ちたいと思ふ志が、顏色にも現れるやうになつたのは、實に氣の毒なさまであつた。――

○おとどい—おとうとの轉音。兄弟。○持佛堂—朝夕禮拜する佛像や父祖の位牌を安置した所。

○いはけなや—あどけない子供らしいことだ。

○不動—不動明王。五大尊の中央尊で、大日如來が一切の惡魔を降伏する爲に變化して忿怒身を現したもの。色眞黑で大火焰の中に石上に坐し、右手に利劍、左手に索を持つ。火焰は一切の煩惱を燒く大悲德を、劍は三毒を害する智慧を、索は難伏者を繫縛する三昧を表す。

【九】

ば、幼かりし心にも父の敵を討たばやと、思ひの色に出づるこそ。げにあはれには覺ゆれ

（居グセ）

地クセ「ある時おとどいは、持佛堂に參りて、兄の一萬香をたき、花を佛に供ずれば、弟の箱王は。本尊をつくづくとまもりて、いかに兄御前聞しめせ。本尊の名をばわが敵、工藤と申し奉り、劍を提げ繩を持ち。我等を睨みて。立たせ給ふが憎ければ。走りかかりて御首をうち落さんと申せば。兄の一萬これを聞きて

ツレ『いはげなや。いかなる事ぞ佛をば

地『不動と申し敵をば、工藤といふを知らざるか、さては佛にてましますかと、拔いたる。刀を鞘にさし。宥させ給へ南無佛。敵を討たせ給へや

【九】

子方　いざ討たう（と居立ちて刀に手をかく）

さて或時、兄弟は持佛堂に參つて、兄の一萬が香を焼いて花を佛に供へますと、弟の箱王は本尊をつくづくと見守つてゐて、「お兄様、この本尊の名は、わが敵の名と同じやうに工藤と申して、劍を提げ繩を持つて、私達を睨んで立つてお出でになるのが憎らしいから、走りかゝつて、あのお首を落しませう」といふと、兄の一萬が聞いて「何といふ頑是なさだ。何をいふのだ、佛様は不動と申し、敵は工藤といふのを知らないのか」「すると、やはりこれは佛様なのですか」と、箱王は拔いた刀を鞘にさし、「どうかお宥し下さいませ、佛様、そして敵を討たせて下さいませ」……』

花若は思はずこの話に引入れられて

【九】

花若　さあ討たう。

狂言「おう討たうとは（とワキを庇ふ）

シテ「暫く候。何事を御騒ぎ候ぞ

狂言「御用心の時分にて候に。これなる幼き者がいざ討たうと申し候程に候よ

シテ「子細をば御存じ候はぬ程に尤もにて候。この者の謡を申したる後には。又幼き者八撥を打ち候。その八撥を打たうずると申す事にて候

狂言「日本一の事やがて申して打たせうずるにて候。（ワキに）いかに申し上げ候。これなる幼き者が八撥を打つべき由を申し候

ワキ「急いで打たせ候へ。又亭主は何にても能はなきか

子方（ワキに）「獅子舞を御所望候へ

ワキ「あら面白の事を申すものかな。（シテに）いかに亭主。これなる幼き者の申すは。亭主は獅子舞が上手なる由を申し候。そと一さし舞ひ候へ

従者「なに、討たうとは」（身構へをする。）

小澤「お待ち下さい、何をお騒ぎになるのです」

従者「御用心してお出でになる時だのに、この幼い者が、『さあ討たう』といつたからだ」

小澤「成程、様子を御存じないのだから、お驚きも御尤もです。この女が謡を申した後には、又幼い者が八撥を打ちます。それで、その八撥を打たうと申したのでございます」

従者「それは何よりだ、すぐ打たせることにしよう。（主人に）申し上げます、この幼い者が八撥を打つと申します」

望月「すぐ打たせよ。それから亭主にも何か藝能はないか」

花若（望月に）「獅子舞を御所望なさい」

望月「これは面白いことを申す奴だ。（亭主に）おい亭主、この幼い者がいふのには、亭主は獅子舞が上手だといふことだが、一寸一つ舞つてくれ」

○一さし　一曲。

シテ「これは幼き者の筋なき事を申し候。思ひもよらぬ事にて候

ワキ「ひらに舞うて見せ候へ

シテ「この上は御意にて候程に。そと御前にて舞はうずるにて候。このままにてはいかがにて候間。獅子頭を被きて參らうずるにて候。その間にこの幼き者に八撥を打たせ候べし。（ツレ子方に）皆々かう渡り候へ

といひてシテ中入。子方はツレの鞨鼓を受取りてツレの手を引き、ツレは杖を持ちて出で、子方は後見座にくつろぎ、ツレは橋懸にて眼を開きたる心にて杖を捨てて幕に入る。子方鞨鼓を前につけ刀を懐中し撥を手に持ちて出で、

【一〇】

地『獅子團亂旋は時を知る。雨叢雲や。騒ぐらん

（と常座にて開き）

〔鞨鼓〕

を舞ひて撥にて幕をさし、撥を投げ捨てて目附柱際にて下に居る。

亂序の囃子にて、後ジテ小澤友房、赤獅子頭・白鉢卷・着附段

小澤「これは幼い者が下らない事を申したものでございます、思ひも寄らぬ事でございます」

望月「是非舞つて見せてくれ」

小澤「この上は折角の仰せでございますから、一寸御前で舞ひませう。でも、この姿のまゝでは如何でございますから、獅子頭を被つて參りませう。その間にこの幼い者に八撥を打たせませう。さあ皆々こちらへお出でなさい」

といつて、小澤は仕度を整へる爲に退場。

【一〇】

人々『獅子團亂旋は時を知る、雨叢雲や騒ぐらん』

と謠つて、花若

〔鞨鼓〕

を舞ふ。この間に後ジテ小澤、獅子頭を被つて登場。

【一〇】

○獅子團亂旋—獅子は高麗樂沙陀調の舞樂、團亂旋は唐樂壹越調の舞樂。獅子虎と續けていひかけた。

○騒ぐらん—古謠本に「奏すらん」とある方が穩當である。

熨斗目・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて段厚板を被ぎて出で、

〔獅子舞〕

この間にワキ扇を傾けて眠る。シテ下に居て、

地「餘りに祕曲の面白さに、餘りに祕曲の面白さに。なほなほ廻る盃の、醉を勸めばいとどなほ眠りも來る。ばかりなり

後ジテ『さる程にさる程に

地「折こそよしとて脫ぎ置く獅子頭（と厚板獅子頭を脫ぎすてに）。又は八撥を打てや打てと。目を引き袖を振り（と子方を立たせ）。立ち舞ふ氣色に戲れ寄りて。敵を手ごめにしたりけり

「又は八撥を打てや」にワキ笠を代りに置きて切戶より入る。

子方「敵を手ごめに」と笠をワキの心にて飛び越え、シテと相對して笠を抑へ、

地「この年月の恨みの末。今こそ晴るれ。望月よとて思ふ敵を討つたりけり

と子方刀を拔きて笠を刺し、シテも振上げて切り、

〔獅子舞〕を舞ふ。

あまりに舞の祕曲が面白いので、盃は廻り廻り、望月は醉を勸められて、すつかり眠くなつたやうである。

小澤「かうして、丁度よい折だ」と、獅子頭を脫ぎ捨て、『八撥をお打ちなさい（敵をお討ちなさい）』と目くばせをし、袖を振つて、立ち舞ふ樣子で戲れの舞のやうに敵の傍へ寄り、敵を手籠めにした。

花若「この永い年月の恨み、今こそ晴らすのだ、望月よ、思ひ知れ」といつて、望みの敵を討ち取つた。

○獅子頭—獅子の頭に擬した獅子舞の被り物。
○打てや—八撥を打てに敵を討てとの意を兼ねた。
○目を引き—目くばせをし
○戲れ寄りて—獅子の戲れのやうに裝うて敵の傍に寄り。
○手ごめ—暴力を以て取抑へること。
○今こそ晴るれ—敵の姓望月を滿月の意の望月にかけて用ゐた。

地（キリ）かくて本望遂げぬれば。かくて本望遂げぬれば。かの本領に立ち歸り。子孫に傳へ今の世に。その名隱れぬ御事は。弓矢のいはれなりけり弓矢のいはれなりけり

とシテ刀を鞘に收め、子方を立たせて仕手柱先へ連れ行き、シテはその後にて心晴れたる態にてユウケン扇し、子方の橋懸に行くを見送りて留む。

かくして、本望を達したので、かの本國の領地に歸り、子孫に相傳へた。これが今日に至るまで廣く知れ渡つてゐる、武士として名譽の高い由緒物語であつた。

（一）弓矢のいはれ―武道の名譽を揚げた由緒。

〔考異〕

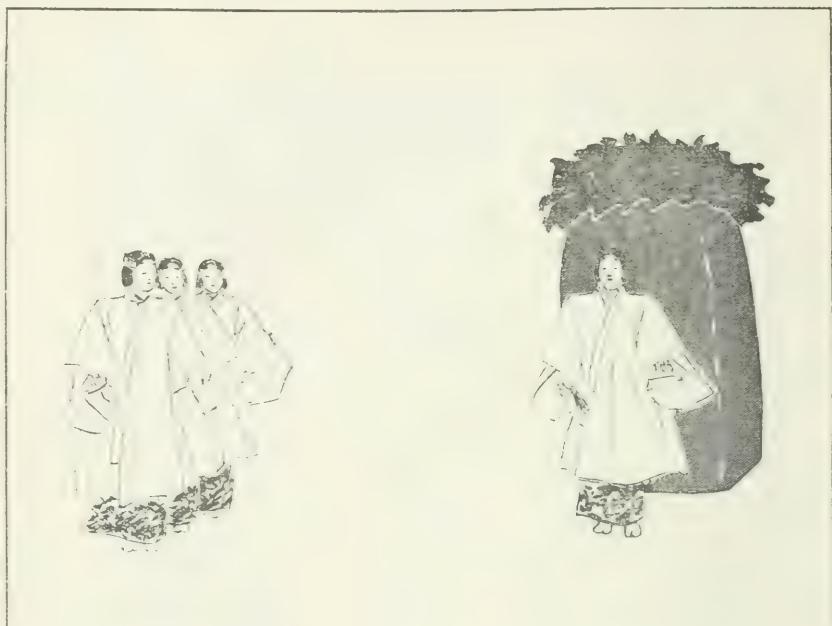
諸流（五流）

【一】シテ「かやうに候者は……旅人の御通り候はば御宿た（寶」これは信濃國の住人安田の莊司友春の御内にありし。小澤の刑部友房にて候。さても頼み奉り候友春は。從兄弟の望月と口論し。やみやみと討たれ給ひて候。その折節は都に候ひしが。この由を聞き本國へ罷り下り候處に。路次にて某を狙ふ由告げ知らせ候間。この守山の宿に留まり。甲屋のあるじとなり。往來の人を留め申し候。今日も旅人を留め。下懸モ略寶ニ同ジ）申さばやと……　【四】ツレ「これは信濃の國の住人。望月の何某にて候さても……信濃に下向仕り候 寶秋長にて候。さても某が從兄弟にて候安田莊司の友春を。さる子細候ひてあへなく討つて候。この由聞しめされ。聊爾の振舞とや思しめしけん。本領悉く召し放されて候を。よき緣を以て申し上げて候へば。本領悉く返し賜はり。歡びの眉を開き。唯今本國へ罷り下り候。下懸モ略寶ニ同ジ）　【五】子方「習はぬ業も父の爲。ツレ「竹の細枝つき連れて（寶下懸ナシ）　【九】シテ「この上は……皆々から渡り候へ（寶下懸子方「吉野龍田の花紅葉。地「更科越路の。月雪。（翔鼓）」　【一〇】（翔鼓）（寶下懸ナシ）

古謠本（元祿八年本）

【一】シテ「かやうに候者は……今日も旅人の御通り候はば御宿を申さ（元大名の御通りのよし承候間。皆々罷出て留申せとかたく申付）ば

やと存じ候　【二】ツレサシ「これは……莊司友治(元といはれ人)の妻や……討たれ給ひし後は(元おはします)多かりし從類も……思ひ
子を伴(元誘)ひ……ツレ「急ぎ候程に近江の國(元ナシ)守山の……　【三】ツレ「いかにこの家の内へ案内申し候(元申候。旅人にて候一
夜の宿を御借候へ)シテ「誰にて渡り候ぞ(元安き間の事にて候。扨是は何國より御上り候ぞ)ツレ「(元さん候)これは信濃の國より都へ
(元ナシ)……シテ「易き間の……御入り候へ(元ナシ)……シテ「何を御包み候ぞ……刑部友房にて候へ(元あれに御座候は花若殿にては御
座候はぬか、故莊司殿に別れ申此宿に落とゝまり、今かく御目にかゝり候事、御面目もなう社候へ)ツレ「さては古の……涙に咽ぶばか
りなり(元今は何をかつゝむへき。是は安田の莊司友治の、妻や子供の果なり)……シテ「あれなる一間に……あらうずるにて候(元ナシ)
【四】ワキ「これは……さても(元ナシ)同國の住人……シテ「誰にて御座候ぞ(元ナシ)シテ「心得申して候(元安き間の事此方へいれ御申候
へ)さて(元旅人の)御名字をば……シテ「苦しからず候此方へ御入り候へ(元心得申候)　【五】シテ「言語道斷の事(元の出來て候)……
ワキ「やいかに申し候……着きて候(元いかに花若殿密かに申へき事の候、今夜此屋に御泊候處に、又望月か此屋に着て候はいかに)子方
「なに望月と申すか(元候や)シテ「暫く(元候)あたり近く候……この家に泊りて候(元ナシ)これは天の……いかにもし(元仕候ひ)て今夜
の中に……御心安く思しめされ候へ(元迚の事に御二所なからへ彼者を御目にかけ申度候そとよ)きつと……盲の振舞にて(元ナシ)座敷
へ御出で……某(元は樽を抱きて罷出)かの者に酒を……花若殿は八撥を……遂けさせ申さう(元酒に給醉候はん所を、やすやすと討て
參らせふ)ずるにて……　【七】シテ「この家の亭主……御祝ひ(元禮)のために……ワキ「此方へと申せ(元オッシ)いかに申候 シテ「何事に
て候ぞ)　【八】地「五つや三つの……既に年ふり日を重ね(元日行時へて)……ツレ「いはけなや(元いまゝゝし)いかなる……地「不動
と申し……刀を(元は)鞘にさし……　【九】ワキ「急いで打たせ候へ(元こなたへ來れと申候へ。ワキ「いかに近う來り候へ。急て八はちを
打候へ。ワキ)又亭主は……ワキ「ひらに舞うて見せ(元御舞)候へ。シテ「この上は……八撥を打たせ候べし皆々かう渡り候へ(元られ候へ)
子「一セイ「よし野たつ田の花もみち、さらしなこし路の月雪。カッコ)　【一〇】地「獅子團亂旋……雨叢雲や騷ぐらん(元そうすらん)
羯鼓(元ナシ)……地「折こそ(元ふし)よしと……目を引き袖を振り(元れ)……手ごめにしたりけり(元……ワキ「抑是は何者ぞ、子「御身の討
し安田の莊司か其子に花若我ぞかし。ワキ「扨亭主と見へしは誰なれは。か程に我をたばかりけるぞ。シテ「小澤の刑部友房よ。ワキ「あら
物々しとひつたゆけは。シテ「ひつすゆる。ワキ「ふれともきれとも。ツテ「はなさはこそ)地「この年月の

求塚 寶（喜）

解說

【能柄】四番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　西國僧、ワキツレ　從僧（二人）、前シテ　里女（菟名日處女の靈）、前ツレ　里女（二三人）、狂言　所の者、後シテ　菟名日處女の靈

【所】攝津國　生田

【時】後堀河院御宇　春（二月）

【異稱】〔若菜〕又は〔處女塚〕ともいつた。

【作者】能本作者註文に世阿彌の作、二百十番謠目錄に觀阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に本曲の謠について、

「旅人の道妨げに摘むものは、生田の小野の若菜なり。よしなや何を問ひ給ふ」、「よしなや何を問ひ給ふ」と續くるが惡きなり。「よしなや」といひ切りて、「何を」といふべし。「よしなや」をば寄すべし。

といひ、金春禪竹の歌舞髓腦記に本曲を廣精風として擧げ、

この姿こまかなる體也、ふと立ちぬれば俗になる所を知るべし。た

だ幽玄のこまやか也。

といふ。

【梗概】 西國方の僧が都に上る途次、攝津國生田の里に立ち寄ると、里女が二三人若菜摘みに來たので、求塚のありかを尋ねたところ、知らないと答へて、雪間の若菜を摘み、やがて外の里女は歸つてしまつたが、たゞ一人だけあとに殘つて、求塚に案内し、塚の謂れ、昔菟名日處女が小竹田男と血沼の大丈夫と二人の男に戀せられて、どちらに靡くことも出來ない、二人は勝負を決する爲に鴛鴦を矢先にかけたが、遂に勝負がつかなかつたので、處女は世をはかなんで、生田川に入水した、求塚はその女の塚であると語り、自分もその塚に隱れてしまふ。僧が一夜こゝに過して讀經してゐると、處女の靈が現れて、鴛鴦に苦しめられ、二人の男に左右から責められる様、さては八大地獄の有様などを示して消え失せる。

【出典】 萬葉集卷九

過二葦屋處女墓一時作歌一首竝短歌

古之、益荒丁子、各競、妻問爲祁牟、葦屋乃、菟名日處女乃、奥城矣、吾立見者、永世乃、語爾爲乍、後人、偲爾世武等、玉桙乃、道邊近、磐構、作冢矣、天雲乃、退部乃限、此道、去人每、行因、射立嘆日、惑人者、啼爾毛哭乍、語嗣、偲繼來、處女等之、奥城所、吾竝、見者悲喪、古思者

反　　歌

古乃、小竹田丁子乃、妻問石、菟會處女乃、奥城叙此
語繼、可良仁文幾許、戀布矣、直目爾見兼、古丁子

とあるを敷衍した大和物語

昔津の國に住む女ありけり。それをよばふ男二人なむありける。一人はその國に住む男、姓は菟原になむありける。今一人は和泉の國になむありける。姓はちぬとなむいひける。かくてその男ども、年よはひ、顔かたち、人の程たゞ同じばかりなむありける。志のまさらむにこそはあはめと思ふに、志のほど唯同じやうなり。暮るれば諸共に來逢ひぬ。物おこすれば唯同じやうにおこす。いづれまさりといふべくもあらず。女思ひ煩ひぬ。この人の志のおろかならば、いづれにもあふまじけれど、これもかれも月日を經て、家のかどに

立ちてよろづに志を見えければ、しわびぬ。これよりもかれよりも同じやうにおこする物ども取りも入れねど、色々に持ちて立てり。親ありて、「かく見苦しく年月を經て、人の歎きをいたづらに負ふもいとほし。ひとりひとりにあひなば、今一人が思ひは絶えなむ」といふに、女「こゝにもさ思ふに、人の志の同じやうなるになむ思ひ煩ひぬる。さらばいかゞすべき」といふに、そのかみ生田川のつらに、ひらばりをうちてゐにけり。かゝればそのよばひ人を呼びにやりて、親のいふやう「誰も御志の同じやうなれば、このをさなきものなむ思ひ煩ひにて侍る。今日いかにまれ、この事を定めてむ。あるは遠き所よりいます人あり、あるはこゝながらそのいたつき限なし。これもかれもいとほしきわざなり」といふ時に、いとかしこく喜びあへり。「申さむと思う給ふるやうは、この川に浮きて侍る水鳥を射給へ。それを射あて給へらむ人に奉らむ」といふ時に、「いとよき事なり」といひて射る程に、一人は頭の方を射つ。今一人は尾の方を射つ。そのかみいづれといふべくもあらぬに、女思ひわづらひて、

住みわびぬわが身なげてむ津の國の生田の川は名のみなりけり

と詠みて、このひらばりは川に臨みてしたりければ、つぶりと落ち入りぬ。親あわて騒ぎのゝしる程に、このよばふ男二人やがて同じ所に落ちいりぬ。一人は足をとらへ、今一人は手を捕へて死にけり。

に據つたのである。

【鑑評】題材は誠に謠曲に恰好なものである。萬葉集、大和物語、謠曲と、傳說文藝の展開して行く徑路が一目にして知られ、謠曲作者の創作力の平凡でないことが明らかになるのである。たゞ前段はあまり冗漫に過ぎた嫌ひがある。第四節は美しい若菜摘みの樣を描き出したものとして、なほ見るべき點があるが、第三節は全くの駄辯である。後段の地獄の責め苦を描く條は、あまりに苛酷である。謠曲作者は常に戀愛を否定して、戀慕に死んだ者は地獄に墮ちるとしてゐるが、これほど深刻に描いたものは他にはない。これに近いのは「善知鳥」であるが、彼は殺生戒を犯してゐるのであるから、なほこれよりは首肯し易い。本曲の主人公の如き可憐な女性を、かほどまで苦しめなくともよささうなものだと思はれる。題材は誠によいものであるが、その取扱ひ方に多少の不滿を感ぜしめる。

【一】前段

無蓋を初め西國で、ワキ西國僧、ワキヅレ従僧を

【一】

後見、山の作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ西國僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・

腰帯・扇・数珠の装束、ワキヅレ従僧二人、ワキ同様の装束にて、舞臺に入り向合ひ、

隨へて登場。

ワキ・ワキヅレ 次第「都の長路の旅衣。都の長路の旅衣都に いざや急がん

僧「遠い田舎から遥かな長い旅を續けて、さあ都へ急いで行かう」

と次第に旅立の心持を示し、

○都の長路—田舎の長途。遠い田舎からの旅。○都にいざや—衣の身といひかけた。

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは西國方より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。唯今都に上り候

僧「私は西國の方から出て來た僧です。私はまだ都へ行つたことがないので、今度都へ上るのです」

と見物人に自己紹介をし、

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「旅衣八重の汐路の浦傳ひ。八重の汐路の浦傳ひ。船にても行く旅の道海山かけて遥々と。明かし暮らして行く程に。名にのみ聞きし津の國の。生田の里に着きにけり生田の里に着きにけり

僧「旅を思ひ立つて、廣々とした海を、或は浦傳ひに又は船に乘つて出かけ、海路ばかりではなく又山路の旅をもして、長い道中を明かし暮らしてゐるうちに、これまで噂にばかり聞いてゐた攝津の國の生田の里に着いた」

と旅行を表してゐるうちに旅は進んだ態で、舞臺は生田の里となり、僧はあたりを眺めて休んでゐる。

○八重の汐路—遥かな長い海路。八重は衣の縁語。

○海山かけて—海路・陸路、兩方の旅を續けて。

○生田の里—攝津國武庫郡今の神戸市三宮町の邊。

ワキ「明かし暮らして」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて生田に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「これは聞き及びたる所にて候。あの小野を見れば。若菜摘む人のあまた來り候。かの人々を待ちて。所の名所をも尋

◎これは聞き及びたる—このワキ着ゼリフ、元祿二年本に據る。

ねばやと思ひ候

ワキヅレ「尤もにて候

といひて脇座に行き下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ里女、面増・鬘・鬘帯・着附摺箔・白水衣・縫箔腰巻・腰帯・扇の装束、ツレ里女二三人、シテ同様の装束（面は小面扇は持たず）にて、ツレを先に立てて出で橋懸に立ち並び、

シテツレ一聲「若菜摘む。生田の小野の朝風に。猶冴えかへる。袂かな

ツレ「木の芽も春の淡雪に。シテツレ「森の下草。なほ寒し

と謡ひて舞臺に入り、

シテサシ「深山には松の雪だに消えなくに。シテツレ「都は野べの若菜摘む。頃にも今はなりぬらん。思ひやるこそゆかしけれ

シテ「ここは又もとより所も天ざかる。シテツレ「鄙人なればおのづから。憂きも命も生田の海の。身の

【二】

シテ菟名日處女の靈里女の態を装うて、ツレ里女と共に登場。

女「若菜摘みの名所の、この生田の小野は、まだ朝風が随分寒いことですね」

連女「えゝ木の芽の出る春になつたのですが、まだ淡雪が降り殘つて、森のあたりなどまだ寒くて、草の芽も出ません」

女「深山ではまだ松にかゝつた雪さへ消えないのですが、都ではもう野邊に出て若菜を摘む頃になつたことでせう。どんなに樂しいことだらうと、羨ましうございますね。——

こちらでは、都の人達とは違つて、遠い田舍者のこととて、辛いことばかり多いのですが、それでも命のある限りは、たゞ

【三】

○若菜摘む―昔正月初子の日若菜を摘んで内膳司から奉る儀式があり、後一般に正月七日に行はれるやうになつた。

○生田の小野―今の神戸市三宮町の東方。若菜の名所で、夫木抄雑季の歌にも「問はねども誰が爲とてか津の國の生田の小野に若菜摘むらん」

○冴えかへる―寒さの强いこと。

○木の芽も春の―古今集紀貫之の歌に「霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける」

○深山には松の雪だに消えなくに―古今集讀人知らずの歌。下句「都は野邊の若菜摘みけり」

○天ざかる―鄙の枕詞。

○憂きも命も―憂きながらも命の生きてゐるとの意。

○生田の海の―命も生くといひかけ「海の」「身の」と同音を重ねた。

限りにて憂き業の春としもなき小野に出でて。

シテ ツレ「下歌」若菜摘むいく里人の跡ならん雪間あまたに野はなりぬ。「上歌」道なしとても踏み分けて。道なしとても踏み分けて。野澤の若菜今日摘まん。雪間を待つならば若菜もしや老いもせん。嵐吹く森の木蔭小野の雪も猶さえて。春としも七草の生田の若菜摘まうよ生田の若菜摘まうよ

【三】

ワキ「いかにこれなる人に尋ね申すべき事の候。生田とはこのあたりを申し候か

ツレ「生田と知ろしめしたる上は。御尋ねまでも候まじ

シテ「所々の有様にも。などかは御覧じ知らざらん。まづは生田の名にし負ふ。これに數ある林をば。生田の森とは知ろしめさずや

辛いとばかりいつても居られません、まだ春らしくもない小野へ出かけませう。でも、もう隨分多勢の里人が若菜摘みに來たものと見えて、野原には雪の消えた所が澤山出來ました。いえ、たとへ雪の消えた道がなくても、今日は是非雪の中を踏み分けても、野澤の若菜を摘みませう。雪の消えるのを待つてゐたならば、その間に若菜が老いてしまふかも知れませんから。森の木蔭には強い風が吹いて、小野には雪がまた一面にかゝつてゐて、一向春らしくもありませんが、この生田の七草の若菜を摘みませう」

といひながら、僧の休んでゐる邊へ來る。

【三】

僧「申し、そこな人にお尋ねします。生田といふのは、この邊をいふのですか」

連女「生田といふ名を御存じの上は、そのやうなことお尋ねになるまでもないぢやありませんか」

女「この邊あちらこちらの樣子を御覧になつても、すぐお分りになる筈ぢやありませんか。まづ生田の名所で、この澤山木のある林が、生田の森だとお分りになりさうなものです」

○若菜摘むいく里人の跡ならん—風雅集藤原爲定の歌「下句」雪間あまたに野はなりにけり」雪間は雪の消えた所。

○道なしとても—古今集讀人知らずの歌に「わが宿は雪降りしきて道もなし踏み分けて訪ふ人しなければ」

○七草—公事根源に「若菜は七種の物なり、薺・はこべら・芹・菁・御形・すゞしろ・佛の座なり。正月七日に七種の菜羮を食すれば、その人萬病なし」春としも無しといひかけた。

【三】

○生田の森—今の神戸市生田神社の境内。

ツレ「また今渡り給へるは。名に流れたる生田川

シテ「水の緑も春淺き。雪間の若菜摘む野邊に

ツレ「少き草の原ならば。小野とはなどや知ろしめされぬぞ

シテ「三吉野志賀の山櫻。龍田初瀬の紅葉をば。歌人の家には知るなれば。所に住める者なればとて。生田の森とも林とも。知らぬ事をな宣ひそよ

ワキ「げに目前の所々。森を始めて海川の。霞みわたれる小野のけしき。「げにも生田の名にし負へる。さて求塚とはいづくぞや

シテ「求塚とは名には聞けども。眞はいづくの程やらん。妾も更に知らぬなり

ツレ「なうなう旅人よしなき事をな宣ひそ。妾も若菜を摘む暇

連女「それから又、今お渡りになつたのが、有名な生田川で……」

女「水の緑色も薄く、春景色も淺い、雪の消えた所を踏み分けて若菜を摘んでゐるこの野邊は……」

連女「若草の少い野原といふことから考へても生田の小野とお分りにならないのですか」

女「吉野や志賀の山櫻、龍田や初瀬の紅葉などといふものは、歌人の方が却つてよく御承知のことで、たとへその地に住んでゐる者でも、風雅な心のない私共は、生田の森だか林だか何も知らないのです。私共にこんな事をお尋ねになるものぢやありませんよ」

僧「なる程、見渡した所々、森を始めとして海といひ川といひ、霞み渡つた小野の景色といひ、いかにも生田の森・生田川などといつて有名な所だけあつて、趣の秀れたものです。ところで、求塚といふのは何處です」

女「求塚といふのは、名前は聞いてゐますが、ほんとはどの邊にあるのか、私も全く知らないのです」

連女「もうし旅の方、そんなつまらない事をお尋ねなさいますな。私共は若菜を摘むのに忙しいのですし……」

○生田川―攝津國摩耶山より發し、布引瀧となつて神戸の東部を流れ、生田浦に注ぐ。

○三吉野―大和國吉野郡。〔嵐山〕〔吉野天人〕參照。

○志賀―近江國滋賀郡。〔志賀〕〔俊成忠度〕參照。

○龍田―大和國生駒郡。〔龍田〕參照。

○初瀬―同國磯城郡〔玉葛〕參照。

○歌人の家には―平家物語卷九老馬が事に「吉野初瀬の花をば見ねども歌人が知り」

○求塚―求女塚又處女塚とも書く。三箇所にあり、一は住吉村字御田（御影町の東）、一は東明（今御影町）一は味泥（今都賀野村）にあり、相距る各十餘町、御田塚を處女、味泥塚を小竹田男の墓とす。今味泥塚は削られて民家となつた。

○若菜を摘む暇―下に「惜し」との意を省いてゐる。

○旅人の道妨げに摘むものは｜堀河百首源師頼の歌。下句「生田の小野の若菜なりけり」
○春日野の飛火の野守出でて見よ｜古今集讀人知らずの歌。下句「今幾日ありて若菜摘みてん」
○君がため春の野に出でて若菜摘む｜古今集光孝天皇御製。下句「わが衣手に雪は降りつゝ」
○ひこり｜氷凝で、氷のかたまり。
○深芹｜根の深い芹。芹は七草の一。
【四】

シテ「御身も急ぎの旅なるに。何しに休らひ給ふらん
シテツレ『されば古き歌にも
地（下歌）「旅人の道妨げに摘むものは。生田の小野の若菜なりよしなや。何を問ひ給ふ。（上歌）「春日野の飛火の野守出でて見よ。若菜摘まんも程あらじ。その如く旅人も。急がせ給ふ都を今幾日ありて御覽ぜん。君がため春の野に出でて若菜摘む。衣手寒し消え殘る。雪ながら摘まうよ淡雪ながら摘まうよ。澤邊なるひこりは薄く殘れども。水の深芹かき分けて青緑色ながらいざや。摘まうよ色ながらいざや摘まうよ
【四】
地ロンギ『まだ初春の若菜にはさのみに種は如何ならん

女「あなたもお急ぎの旅でせうのに、どうしてこんなつまらない所に休んでいらつしやるのです。昔の人の歌にも――
『旅人の道妨げに摘むものは、生田の小野の若菜なりけり』
（生田の小野で、多勢の者が若菜摘みをしてゐるのは、旅する者にとつて、通り道の邪魔になる）
といつて、旅人に邪魔がられてゐるのです。ほんとにつまらないことです。どうしてお尋ねになるのです。――
『春日野の飛火の野守出でて見よ、今幾日ありて若菜摘みてん』
（春日野の飛火野の番人よ、もう幾日すれば若菜摘みが出來るか、野に出て見てくれ）
と詠まれたやうに、多勢の人が若菜摘みに來るのも、間もないことでせう。旅の方も、もう幾日かすれば、間もなく道中をお急ぎになつた都を御覽になることでせう。私共は――
『君が爲春の野に出でて若菜摘む、わが衣手に雪は降りつゝ』
といふ御歌のやうに、まだ消え殘つてゐる雪をかき分けて、淡雪のかゝつてゐるまゝ若菜を摘みませう。澤邊にはまだ氷が薄く殘つてゐますけれど、水の中をかき分けて、青緑色をした深芹を摘みませう、さあ早く摘みませう」
（里女達は若菜摘みをする態。）
【四】
連女「まだ初春になつたばかりで、さほどよい若菜はありますまい」

○春立ちてあしたの原の雪見れば—拾遺集平祐擧の歌下句「まだ舊年の心地こそすれ」

○今年生—今年發芽したもの。

○春の野に—萬葉集山部赤人の歌「春の野に菫摘みにと來しわれぞ野をなつかしみ一夜寢にける」

○若紫の菜—紫草の若いものをいふ。

○ゆかりの名—紫をゆかりの色といふので、若紫を承けて用ゐ、中絶えた妹背の橋に緣故があるといつた。

○妹背の橋—上野國佐野の船橋。委しくは〔船橋〕に見ゆ。

○佐野の莖立—萬葉集卷十四「かみつけぬ佐野の莖立折りはやしあれは待たんゑ今年來ずとも」に據つた。莖立はすゞなの薹をいふと

○長安のなづな—薺は七草の一。長安は支那の都で、「から」を呼び出す料とした

○からなづな—薺の一種、辛味のあるもの。

○しろみ草—芹の異名白根草の訛。元祿本には「白ね草」とある。

○有明の—しろみ草も有りといひかけた。

シテ『春立ちてあしたの原の雪見れば。まだふる年の心地して。今年生は少し古葉の若菜摘まうよ

地「古葉なれどもさすがまた。年若草の種なれや。心せよ春の野邊

シテ「春の野に春の野に。菫摘みにと來し人の。若紫の菜や摘みし

地「げにやゆかりの名をとめて。妹背の橋も中絶えし

シテ『佐野の莖立若たちて

地『緑の色も名にぞ染む

シテ『長安のなづな

地「からなづな。しろみ草も有明の。雪に紛れて摘みかぬるまで春寒き。小野の朝風また森のしづえ松垂れて。いづれを春とは白波の。河風ま

女「えゝ春になつたばかりで、野に雪の降り積つてゐるのを見ると、まだ年も改まらないやうな心持がして、また實際今年新しく芽生えたのは少いやうです。でも古葉のまゝの若菜を摘みませう」

連女「古葉といつても、さすが新年の若菜らしい感じがします。よく春の野に氣をつけて摘みませう」

女「春の野といへば、『春の野に菫摘みにと來しわれぞ』と詠んだ人は、紫草の若菜を摘んだことでせう」

連女「さう〳〵、紫草のゆかりの色といへば、夫婦仲の裂かれた人にゆかりのある、あの有名な……」

女「佐野の莖立も若々として、緑色も殊更美しいやうです。……おゝ、なづな、からなづな、それからしろみ草(芹)もあります。でも、雪の中に隱れて、摘むことも出來ないばかりで、小野には春寒い朝風が吹き渡り、森の松には雪が垂れ、どこが春だか分らない有樣、その上河風までがひどく寒くて、風の吹き込む袂までが寒うございます。では、若菜を摘み殘して歸りませう」

○森のしづえ—評釋に「しづえ」は下枝ではなく「しづれ」(木より雪の落ちる意)の誤だらうといふ。
○白波の—知らずといひかけた。

【五】

○菟名日處女—萬葉集卷九に詠まれてゐる女性。委しくは解說にいふ。
○小竹田男、血沼の大丈夫—菟名日處女を戀慕した二人の男。解說參照。

でも冴えかへり。吹かるる袂も猶寒し。摘み殘して歸らん若菜摘み殘して歸らん

ツレはこの間に切戸より入る。

【五】

ワキ「いかに申すべき事の候。若菜摘む女性は皆皆歸り給ふに。何とて御身一人殘り給ふぞ
シテ「さきに御尋ね候求塚を教へ申し候はん
ワキ「それこそ望みにて候御教へ候へ
シテ「此方へ御入り候へ(と作物へ二三足出で)。これこそ求塚にて候へ
ワキ「さて求塚とは。何と申したる謂れにて候ぞ委しく御物語り候へ
シテ「さらば語つて聞かせ申し候べし。(舞臺の眞中に下に居て)昔この所に菟名日處女のありしに。又その頃小竹田男。血沼の大丈夫と申しし者。かの菟名日に心をかけ。同じ日の同じ時に。わりな

三、他の女は歸つて行くと、

【五】

僧「もうし、若菜を摘んでゐた外の女子衆は皆歸られたのに、なぜあなた一人あとに殘つて居られるのです」
女「さき程お尋ねになりました求塚をお教へしませう」
僧「それこそこちらの望む所です。どうぞお教へ下さい」
女「では、こちらへお出で下さい」
こ求塚の所へ案内して、
女「これが求塚でございます」
僧「ところで、求塚といふのは、どういふわけなのです。委しく話して下さい」
女「それではお話申しませう。昔この所に菟名日處女といふ女がゐましたところ、小竹田男といふ者と血沼の大丈夫といふ者とが、この菟名日處女に懸想して、同じ日の同じ刻限に切ない思ひを述べた手紙を處女に贈つたのです。處女は、一人の意に從つたならば、他の一人が深く恨

○わりなき―切ない。
○左右なう―容易に。
○無慙やな―無慙は罪を犯して心に恥ぢないこと、轉じて氣の毒に思ふこと。
○深緑―契りは深しといひかけ、緑の水と續けた。
○鴛鴦の―命は惜しといひかけた。
○番去りにし―雌雄の片方が射られたのをいふ。
○住みわびつわが身捨ててん津の國の生田の川は名のみなりけり―大和物語、菟名日處女の歌。
○何時まで生田川―いつまで生きんといひかけた。
○夕汐の―汐のさすを刺しにいひかけて、刺し違への序とした。

き思ひの玉章を贈る。かの女思ふやう。一人に靡かば一人の恨み深かるべしと。左右なう靡く事もなかりしが。あの生田川の水鳥をさへ。二人の矢先諸共に。一つの翅に中りしかば。その時妾思ふやう。無慙やなさしも契りは深緑。水鳥までもわれ故に。さこそ命は鴛鴦の。番去りにしあはれさよ。住みわびつわが身捨ててん津の國の。生田の川は名のみなりけりと

地これを最期の言葉にてこの川波に沈みしを。取り上げてこの塚の土中に籠め納めしに。二人の男はこの塚に求め來りつつ。何時まで生田川流るる水に夕汐の。さし違へて空しくなれば。それさへわが科に。なる身を助け給へとて塚の中に入りにけり塚の中にぞ入りにける

と立ち作物へ中入。

むであらうと、容易に、どちらの意にも従はなかつたのですが、二人が勝負を決する爲に、あの生田川の水鳥を射たところ、その矢さへ二つとも同じ翅に中つたので、その時私が思ひますのに『あゝ可哀想なことだ、あのやうに深い契りを結んでゐた水鳥の鴛鴦までが、さぞ命が惜しかつただらうのに、私の爲に命をとられて、夫婦死別してしまつたのだ。あゝ可哀想なことだ』と、そして――

『住みわびつわが身捨ててん津の國の、生田の川は名のみなりけり』

(この世がほんとに嫌になつた、生田川に身を投げて死なう。思へば、名は生田、く、生き甲斐のない所であつた)

と、これを最期の言葉として、この川に身を投げてしまつたのです。その死骸を取り上げて、この塚の中に埋めたところ、またかの二人の男がこの塚に求めて來て、いつまで生きてゐても甲斐のないことだと、生田川に夕汐のさし上げる頃、刺し違へて死んでしまつたのです。それで、二人の男の死んだことさへ私の罪となつてしまひました。どうぞこの深い罪の救はれるやう、お助け下さい」

といつて、塚の中に入つてしまつた。

【間】

○莵會乙女—莵名日處女に同じ。原本の文字に從つた。茅淳の壯荒男、篠田も原本に從つた。

【間】 狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の装束にて名乘座に出て、

狂言「かやうに候者は。生田の里に住居する者にて候。今日は生田の邊へ參り心を慰めばやと存ずる。(ワキを見て)いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。こゝには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは西國方より出でたる僧にて候。御身はこのあたりの人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。(舞臺の眞中に出で下に居て)さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この求塚につき様々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すも如何にて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に求塚の子細と申すは。古この所に莵會乙女と申す女の御座候ひしが。又和泉の國信田と申す所に。茅淳の壯荒男と申す者御座候が。莵會乙女を戀ひ慕ひ申す。又この所にも篠田と申す者御座ありたるが。これも乙女を戀ひ慕ひたるが。不思議なる事の候。ある時乙女の方へ同じ日の同じ時に。兩人の文通り候が。乙女は文を見るに。文體も同じ事にて候間。いづれへ返事致すべきやうもなく。二親へこの由申しければ。親共申すやうは。兩人ともに生田川へ伴ひ。水鳥を射させ弓の勝れたる方を聟にとるべしと申しければ。兩人とも大に喜び。弓矢携へ生田川へ參り。矢壺を

【六】○牡鹿の角の―新古今集讀人知らずの歌「夏野行く牡鹿の角の束の間も忘れず思ふ妹が心は」に據り、束と同音の塚の序とした。

御さしあれと申す。さらば一羽の鳥を兩人にて遊ばせと申すに。兩人にて兩の羽がひを射申し候間。乙女の親も呆れ果て居り申し候が。乙女はまづ兩人の者を返し。かやうの事も前世の約束なり。この上は命あつても詮なしとて一首の歌に。住みわびぬわが身捨てけん津の國の。生田の川は名のみなりけりと詠じ。生田川へ身を投げ空しくなり申し候間。そのまゝ塚に築きこみ申すに。兩人の男この由を聞き。塚の前に來り。刺し違へ空しくなり申し候間。これも左右の塚に築き込み。求めて死したる塚なればとて。求塚とは申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に女性數多來られ候程に。則ち言葉をかはして候へば。所の名所などを教へ。この所へ同道候ひて。求塚の事を懇に語り。何とやらん身の上のやうに申され。塚のほとりにて姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては乙女の幽靈現れ出で。御言葉をかはしたると存じ候間。かの跡懇に御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御用の事も候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ ワキツレ（上歌待謠）一夜臥す牡鹿の角の塚の草。牡鹿

【六】 後段

僧「一夜こゝに過して、さき程この塚の草

の角の塚の草蔭より見えし亡魂を。弔ふ法の聲
立てて。ワキ（作物に合掌して）「南無幽靈成等正覺。出
離生死頓證菩提（と謠ひて直す）

【七】

後ジテ莵名日處女、面痩女・鬘・鬘帶・着附摺箔・白練壺折・色大口・腰帶・扇の裝束にて引廻をかけたる作物の中に居て、出端の囃子にて、

後ジテ『おう曠野人稀なり。わが古墳ならで又何
者ぞ。骸を爭ふ猛獸は。去つてまた殘る。塚を守
る悲魄は松風に飛び。電光朝露猶以て眼にあり。
古墳多くは少年の人。生田の名にも似ぬ命
地『去つて久しき故鄕の人の
シテ『御法の聲はありがたや
地『あら閻浮戀しや
地（上歌）『されば人一日一夜を經るにだに。一日一
夜を經るにだに。八億四千の思ひあり。況んや
我等は。去りにし跡も久方の。天の帝の御代よ

蔭から現れた亡靈の爲に、讀經回向をしよう。——どうか幽靈よ、悟りを開いて、生死の迷界を解脫し、速かに佛果を得るやうに。——

（と讀經する。）

【七】

（後ジテ莵名日處女の靈、塚の中から聲を立てて、）

處女「あゝこの廣々とした野原には來る人とては殆どなく、自分の古墳の外には何もないのだ。たゞ死骸を爭ひあつて喰ふ猛獸が往き來するばかりだ。この塚に留まつた寂しい魂魄は松風の音に悲しみを傳へ、諸行無常の樣が眼の前に見られるのだ。古の詩人がいつたやうに、古墳の主は老死した人ではなく、大抵は皆若死した人なのだ。こゝは所の名は生田でも、人の命はそれに相應しないのだ」

（と獨言をいつて僧に向ひ、）

處女「この世を去つて久しくなつた今日、この世の方の讀經の聲を伺へるのは、ほんとにありがたうございます。……あゝこの世が戀しい。

人は僅か一日一夜を過す間にも、八億四千の煩惱を起すのです。殊に私などは、この世を去つたのは遠い昔、奈良の帝の御時に死んだのですが、今の後堀河天皇の大御代に、も一度この世に歸ることが

○成等正覺—等正覺（佛果）を成就せよ。
○出離生死—生死輪廻の迷界を解脫して。

【七】

○わが古墳ならで—廣々とした野にはわが古墳の外何物もない。
○骸を爭ふ猛獸—死骸の肉を食はうと爭ひ集まる猛獸
○電光朝露—はかない喩へ
○古墳多くは—白樂天の詩句「古墳多是少年人」を引いた。
○生田の名にも—「生く」といふ名にも相應しない。
○故鄕—冥途よりこの世を指していふ。
○閻浮—閻浮提の略。須彌四洲の一、轉じてこの世をいふ。
○八億四千の—衆生の煩惱に八億四千種あるといふ。
○久方の—天の枕詞。跡も久しといひかけた。
○天の帝—天皇と同意であるが、特に奈良朝の天子を指し奉るらしい。〔采女〕にもこの語がある。こゝでは聖武天皇か。

り。今は後の堀河の御宇に逢はばわれも。二度世に歸れかし。いつまで草の蔭。苔の下には埋もれんさらば埋もれも果てずして。苦しみは身を燒く火宅のすみか御覽ぜよ火宅のすみか御覽ぜよ。（と引廻を下す）

【八】

ワキ「あら痛はしの御有樣やな。一念ひるがへせば。無量の罪をも遁るべし。種々諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅。はやはや浮かみ給へ

シテ「ありがたやこの苦しみの隙なきに。御法の聲の耳に觸れて。大焦熱の煙の中に。晴間も少し見ゆるぞや。ありがたや（と作物を出で）恐ろしやおことは誰そ。なに小竹田男の亡心とや。又此方なるは血沼の大丈夫。左右の手をとつて。來れ來れと責むれども。三界火宅のすみかをば。

出來ればと思ふのです。かうしていつまで苔の下に埋もれてゐることでせう。一層のこと、埋もれてしまふならば、すつかり無くなつてしまへばよいものを、さうは出來ないで、苦しみだけが殘つて、火宅で身を燒く思ひをしてゐるのです。どうぞこの有樣を御覽下さい」

（と姿を現す。）

【八】

僧「あゝお氣の毒な有樣だ。執着の一念を改めれば、數限りのない罪も遁れることが出來ませう。——『色々の惡い世界、地獄・餓鬼・畜生道に墮ちることも、生・老・病・死の苦しみも、すべて皆消えてしまふ』——どうか早く成佛なさい」

處女「ありがたうございます。この絶え間なく苦しんでゐる者も、御讀經の御聲を伺つて、大焦熱地獄の猛火の中でも、少し苦しみが晴れて參りました。ありがたうございます、（こゝにふたゝび地獄の責に苦しめられて）あゝ恐ろしい。そなたは誰だ。なに小竹田男の亡靈だと。またこちらにゐるのが血沼の大丈夫だと。二人が兩手をとつて『來い來い』と責めるが、この生死の迷界三界の苦惱のすみかから、何を力にして遁れ出ることが出來よう。……

○後の堀河—後堀河天皇。一八八一—一八九二年御在位。
○いつまで草—壁生草をいひかけた。
○火宅—苦惱の多いこの世の喩へ。法華經譬喩品に「三界無レ安猶如二火宅一衆苦充滿甚可二怖畏一」

【八】

○種々諸惡趣—以下「悉令滅」まで法華經普門品の偈。惡趣はこの世で惡業をなした者の赴く世界で、地獄・餓鬼・畜生道が即ちそれである。
○大焦熱—八熱地獄の一つ。
○おこと—そなた。
○三界—欲界・色界・無色界衆生の生死輪廻するすべての世界。

○鐵鳥―地獄の鳥。往生要集無間地獄の條に「爾時便有二鐵觜大鳥一、上二彼頭上一、或上二其髆一、探二啄眼精一而啖二食之一」

【九】

○標―地獄の鬼が罪人を打つ鞭。

何と力に出づべきぞ。又恐ろしや悲魄飛び去り目の前に。來るを見れば鴛鴦の。鐵鳥となつて黑鐵の。嘴足劒の如くなるが。頭をつつき髓を喰ふ。こはそも妾がなせる科かや。恨めしや。なう御僧この苦しみをば。何とか助け給ふべき

【九】

ワキ「げに苦しみの時來ると。いひもあへねば塚の上に。火焰一群飛び覆ひて

シテ『光は悲魄の鬼となつて

ワキ『標を振り上げ追つ立つれば

シテ『行かんとすれば前は海

ワキ『後は火焰

シテ『左も

ワキ『右も

シテ『水火の責めに詰められて

ワキ『せん方なくて

おゝ又恐ろしい、魂魄が飛んで去つて、眼の前に來るものを見れば、あの鴛鴦が鐵鳥となつて、黒鐵の嘴、劒のやうな足をして、私の頭をつゝき、骨髓を喰ふのだ。一體このやうな責め苦を受けるのは、私の犯した罪の報いであらうか。あゝ恨めしい。もうしお僧さま、この苦しみを何とかして救つて下さい」

【九】

僧「いかにも、苦患の時が來たといふやいはずに、塚の上に火焰が一群飛び覆うて……」

處女「その光は魂魄を責める地獄の鬼となり……」

僧「鞭を振り上げて追ひ立てるので……」

處女「逃げて行かうとしても、前は海で……」

僧「後には火焰が燃え上り……」

處女「左へ行くことも、右へ逃げることも出來ず、水と火との責め苦に追ひ詰められて、どうすることも出來ず、火宅の柱にすがりつき、取りつくと、柱は忽ちに火焰となつて、火の柱を抱くこととなるのです。あゝ熱い熱い。たまらない、から

シテ『火宅の柱に
地『すがりつき取りつけば。柱は則ち火焔となつて。火の柱を抱くぞとよあらあつや。堪へがたや五體は燒火の。黑煙となりたるぞや
シテ『而うじて起き上れば
地『而うじて起き上れば。獄卒は標をあてて。追つ立つればただよひ出でて。八大地獄の數々苦しみを盡し御前にて。懺悔の有樣見せ申さんまづ等活黑繩衆合。叫喚大叫喚。炎熱酷熱無間の底に。足上頭下と落つる間は三年三月の苦しみ果てて。少し苦患の隙かと思へば。鬼も去り。火焔も消えて。暗闇となりぬれば。今は火宅に歸らんと。ありつるすみかはいづくぞと。くらさはくらしあなたを尋ね。こなたを求塚いづくやらんと求め求めたどり行けば。求め得たりや求

だ全體が熾火となり、黑煙となつてしまつたのです。――

漸くのこと、起き上ると、また地獄の鬼が鞭を振り上げて私を追ひ立てるので、よろめきながら、そこを出て、次々と八大地獄の色々の苦しみを受け盡すのです。その苦しみを懺悔の爲にお僧さまのお前でお見せしませう。

まづ第一に等活地獄、次に黑繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・炎熱地獄・酷熱地獄、最後には無間地獄に眞逆樣に落ちて、この間三年三ケ月の苦しみを受け、これが終つて、少し苦患を受ける隙間が出來たと思ふと、鬼も去り、火焔も消えて、あたり一面暗闇となつてしまひます。では、もとの火宅へ歸らう。……もとのすみかは何處であらう」

と、あたり一面眞暗である中を、あちらを尋ねこちらを尋ね「求塚はどこであらう」とたとり／＼探し尋ねて、求

○獄卒―地獄の鬼。

○八大地獄―次に掲げる等活地獄(鐵棒で殺しには復活かしめて苦しみを繰返さす)・黑繩地獄(熱鐵の繩で縛る)・衆合地獄(鐵山劍樹で苦しめる)・叫喚地獄(熱湯猛火で苦しめる)・大叫喚地獄・炎熱(焦熱)地獄・酷熱(大焦熱)地獄・無間地獄(最も慘酷な苦惱を與へる)をいふ。

○足上頭下―足が上に、頭が下に即ち逆樣になること

○こなたを求塚―こなたを探し求むといひかけた。

塚の草の陰野の露消えて草の陰野の露消え消えと亡者の形は失せにけり亡者の影は失せにけり

と常座にて留拍子を踏む。

塚を探しあて、陰野の草の露のやうに次第に消えて行つて、亡靈の姿は見えなくなつた。

（陰野—山陰などの日の當らない野原。）

〔考異〕

諸流（寶　喜）

【一】ワキ次第「鄙の旅衣……都にいざや（喜の春に）急がん……ワキ道行「旅衣……船にても行く旅の道（喜ナシ）海山かけて……　【五】シテ「さらば語つて……あの生田川の水鳥をさへ（喜鴛鴦を射留め給はん方へなびくべしと申せば）……住みわびつ（喜思ひわび）わが身捨てけん……　【七】後ジテ（喜古の小竹田。男の跡になきし。菟名日處女の、おき塚はこれ）おう曠野人稀なり……　【八】ワキ「あら痛はしや……以漸悉令滅はやはや浮かみ給へ（喜ナシ）。シテ「ありがたやこの苦しみの黒鐵の嘴足劍の如くなるが頭をつつき髓を喰ふ（喜を鳴らして肉むらをさく）……　【九】地「すがりつき取りつけば……火の柱を抱くぞとよ（喜ナシ）あらあつや堪へがたや五體は燒火の黒煙となりたるぞや（喜ナシ）……

古謠本（觀世流元祿二年本）

【一】ワキ「これは西國方……僧（元沙門）にて候……　【三】ワキ「いかに……このあたりを申し候か（元シテ「さん候是こそ生田にて候へ）……シテ「求塚とは名に……妾も（元我等は）更に……ツレ「ならなう……な宣ひ（元問給）そ……シテ「御身も……何しに（元をかし）休らひ……　【四】地「からなづなしろみ（元ね）草……　【五】ワキ「いかに申すべき事の候（元ふしぎやな）若菜摘む女性（元み給ひたる人々）は皆々（元ナシ）歸り給ふ（元ひたる）に何とて（元ナシ）御身一人（元この野に）殘り給ふ（元事何の故にて候）ぞ。シテ「ときに御尋ね……教へ申し候はん（元求塚の事をたつね給ひて候よなう　ワキ「さん候いつくの程にて候そ　シテ「誠に見度思召候はゝこなたへ御入候へ教參せん）ワキ「それこそ……御教へ候へ（元さらは御供申さうするにて候）シテ「此方へ御入り候へ（元ナシ）……ワキ「さて（元ナシ）求塚とは何と申

したる（元の）謂れにて候ぞ委しく御物語り候へ（元ナシ）シテ　さらば語つて聞かせ申し候べし（元ナシ）昔この所に菟名日處女のありしに
（元と申し者の塚也）又その頃（元ナシ）小竹田男血沼の大丈夫と申しし者（元ナシ）……玉章を贈る（元通はす）かの女思ふやう一人に（元あ
なたへ）靡かば一人（元こなた）の恨み深かるべしと（元成へければ）左右なう靡く事もなかりしに（元様々のあらそひをせしかとも）其か
ちまけなかりしに）あの生田川の水鳥（元鴛鴦）をさへ二人の矢先諸共に（元ナシ）……住ひわび（元思ひ分）つわが身……地　これを最期の
言葉にて（元〳〵）【七】後ジテ　おう（元ナシ）曠野……骸を爭ふ猛獸（元妄執）は……【八】シテ　ありがたや……嘴足劍の如くなる
が（元わらはか髪に乗移り）頭をつつき……なう（元〳〵）御僧……【九】地　面らじて……ただよひ出で（元はて）こ八大地獄の數々（元
に）……亡者の形は……失せにけり（元すかたは失にけり〳〵）

紅葉狩 觀（寶春剛喜）

解說

【能柄】 五番目 複式劇能

【人物】 **前シテ** 貴女（鬼女）、**前ツレ** 侍女三人（又は五人）、**狂言** 侍女、**ワキ** 平維茂、**ワキツレ** 從者多勢、**狂言** 男山八幡末社神、**後シテ** 鬼女

【所】 信濃國 戸隱山

【時】 平安朝 九月下旬

【作者】 二百十番謠目錄に觀世小次郎の作とす。言繼卿記天文十四年三月二十一日の條に本曲演能のこと、言經卿記に文祿四年四月一日註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 平維茂が鹿狩を催して山深く入つたところ、何人とも知れぬ上﨟女房が幕をうち廻して紅葉狩の酒宴を張つてゐたので、維茂は不審に思ひながらも、興を妨げないやうにと心遣ひをして、馬から下りて沓を脱ぎ、道をかへて通り過ぎようとすると、女房はこれを留めて、酒宴に引き入れた。維茂が思はず盃を重ねると、女は舞を舞つ

て、興を助ける。維茂は終に醉ひ伏してしまつた。女はこれを見屆けて山中に隱れてしまふ。すると、維茂の夢に八幡大菩薩の神勅があつたので、驚いて目を覺ますや否や、鬼女は恐ろしい姿を現して、維茂を襲つたが、維茂は少しも騒がず、これに立ち向つて、易々と討ち平らげた。

【出典】謠曲によつて著名になつた傳説で、先進文藝にその典據は見當らない。

【概評】わが國の著名な文藝傳説は、たとへその原形が謠曲以前にあるものでも、これが一般に流布するやうになつたのは、大抵謠曲の力であるが、本曲の如きはその原形をも謠曲以前に求め難い、全く謠曲によつて著名になつたものである。さて本曲の脚色を見るに、まづ艶麗な女性が現れ、折柄來合はせた武冑の勇士を、嬌羞を帶びてその酒宴に誘ひ入れる。濃艶な場面が展開する、優雅な舞が奏される。勇士は恍惚として醉境に入る。と思ふと、女の態度は一變して凄壯の氣を帶びる。既にして女は恐ろしい鬼神と化してゐる。忽ちにして物凄い活劇が演せられるといふ、場面の變化に富んだ、その進展の圓滑な、まことに興味の深い曲である。なほ維茂がこの山(間狂言にはこれを戸隱山と指定してゐるが、謠本には何山ともいつてゐない)に來た理由を、間狂言では鬼神退治の勅命によるものとしてゐて、後世の文藝は大抵これに從つてゐるが、謠本にはたゞ鹿狩に來たものとしてゐる。勇士が計らず不覺をとるのであるから、謠本のやうな構想の方が自然でよいと思ふ。

【一】　前段

舞臺は信濃國戸隱山で、山の作物が出てゐる。シテ鬼女、貴女の風を裝うて、ツレ多くの侍女と共に登場。

【一】後見、一疊臺を大小前に出し、その上に山の作物を置く。

次第の囃子にて、シテ貴女、面增・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・赤地唐織着流・扇の裝束、ツレ侍女三人(又は五人)、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・赤地唐織着流・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひ、(狂言侍女、美男鬘・着附縫箔・女帶・扇の裝束にてツレの後につきて出で狂言座に坐す)

シテ ツレ 次第『時雨を急ぐ紅葉狩。時雨を急ぐ紅葉狩。深き山路を尋ねん

女『どうか早く時雨が降つて、どこもかも紅葉してくれるとよいのだが、とりあへず深山を踏み分けて紅葉見に出かけよう。

【一】○時雨を急ぐ―木々の紅葉するやうに早く時雨が降るやうにとの意と、急いで紅葉狩をしようとの意を兼ねた。

地取にシテは正面に向き、

シテサシ『これはこのあたりに住む女にて候

といひてツレと向合ひ、

シテツレ『げにやながらへて浮世に住むとも今ははや。誰白雲の八重葎。茂れる宿のさみしきに。人こそ見えね秋の來て。庭の白菊。うつろふ色も。うき身の類ひとあはれなり

シテ（正面に向き）『餘りさみしき夕まぐれ。しぐるる空を眺めつつ。四方の梢もなつかしさに

シテツレ（向合ひ）下歌『伴ひ出づる道のべの草葉の色も日に添ひて『上歌『下紅葉。夜の間の露や染めつらん。夜の間の露や染めつらん。あしたの原は昨日より。色深き紅を分け行く方の山深み。げにや谷川に。風のかけたる篩は。流れもやらぬもみぢ葉を。渡らば錦中絶えんと。まづ木のもとに立

ミ次第に登場の目的を述べ、

女「私はこのあたりに住んでゐる女です」

ミ見物人に自己紹介をし、

女「ほんとに、かうして生きながらへてこの世に住んでゐるとはいふものの、今はもはや誰一人私の事などかまつてくれるものもなく、雜草の生ひ茂つたあばら屋に淋しく暮らしてゐるばかりで、いつの間にやら秋になつて、庭の白菊も色があせてしまつたが、丁度あれが私の辛い身上に似てゐて、もの悲しく感じられることです。あまりにもの淋しい夕暮、時雨の降る空を眺めてゐると、次第に紅葉して行く山々の木々がなつかしく感じられるので、女達を連れて、紅葉見に出かけるのです。すると、道々の草葉も昨日よりは今日と次第に色づいて、木々の下枝は夜の間に露が染めたものでせうか、昨日とはすつかり違つて、紅葉の色が大變濃くなつてゐます。さうした中を踏み分けて、山奧へと進んで行くと、ほんとに歌に詠まれたやうに、谷川には風の吹き散らした紅葉が流れきらずに、一所に溜つて、篩をかけたやうで、水の流れに浮かんで

○ながらへて—生きながらへて。

○誰白雲の—誰か知らんといひかけ、雲の八重、八重葎と續けた。

○八重葎茂れる宿のさみしきに—拾遺集慧慶法師の歌下句「人こそ見えね秋は來にけり」

○庭の白菊—續後拾遺集爲子の歌に「月ならでうつろふ色も見えぬかな霜よりさきの庭の白菊」

○下紅葉—下枝の紅葉。

○あしたの原—蘆田の原は大和國北葛城郡片岡、今の王子村。夜の間、昨日に對し、朝といひかける料に出したのである。

○谷川に—古今集春道列樹の歌「山川に風のかけたる篩は流れもあへぬ紅葉なりけり」を引いた。篩は竹などで作り水をせきとめる物。

○渡らば錦─古今集讀人知らずの歌「龍田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絕えなん」を引いた。

○九獻─酒。

【三】

○長月─九月。

○夕時雨濡れて─新古今集藤原家隆の歌「下紅葉かつ散る山の夕時雨濡れてやひとり鹿の鳴くらん」を引いた。

○明けぬとて野邊より山に入る鹿の─新古今集久我通光の歌。下句「跡吹き送る荻の下風」

ち寄りて、四方の梢を眺めて暫く休み給へや

（まづ木のもとに立ち寄りて」と謠ひながら一同脇座の方へ行き、シテ脇座、ツレその次に竝びて下に居る。狂言女もその下に行きて坐し、また立ちて仕手柱先に出で、

狂言「さても／＼見事なる紅葉かな。この所へ幕うち廻し屏風を立て。九獻を一つ聞し召し候へや

といひて元の座に坐す、

【三】

一聲の囃子にて、ワキ平維茂、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて弓矢を持ち、ワキヅレ從者多勢、着附熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて（一人は太刀、他は竹杖を持ち）橋懸に立ち竝び、

ワキサシ「面白や頃は長月二十日餘り。四方の梢も色々に。錦を色どる夕時雨。濡れてや鹿のひとり鳴く聲をしるべの狩場の末。げに面白き景色かな（と二足詰め）

ワキヅレ一聲「明けぬとて。野邊より山に入る鹿の（とワキ幕の方を見）。跡吹き送る風の音に。駒の足竝、勇むなり（と正面の方に向く）

ゐる紅葉の美しさ、もしこゝを渡つたならば、錦を中途で斷つてしまふやうなことになりませう。だから、こゝを渡るのはやめて、とにかく木蔭に寄つて、暫く休んで、あちこちの梢を眺めませう」

といつて、木蔭に幕を張つて紅葉見の宴を初めた態。

【三】

ワキ平維茂、ワキヅレ從者多勢を引連れ、鹿狩の態で登場。

維茂「實に面白いことだ。今は九月の二十日過ぎで、夕時雨のお蔭で、どちらの梢も色美しく紅葉して、宛も錦のやうだ。そして鹿がその夕時雨に濡れて、淋しく鳴いて行く。その聲を目當にして、次から次へと狩を續けるのだ。實に面白い景色だ」

從者「夜が明けたといふので、野邊から山へ鹿が歸つて行くと、その跡を風が吹き送つて、鹿の鳴き聲をこちらへ傳へてくるので、馬の足まで勇み立つてゐます」

地上歌「ますらをが。やたけ心の梓弓。やたけ心の梓弓。いる野の薄露分けて（ワキ舞臺を見やりつゝ）行方も遠き山陰の。鹿垣の道のさかしきに。落ちくる鹿の聲すなり。風の行方も、心せよ風の行方も心せよ（とシテの方を見）

【三】
ワキ「いかに誰かある
ワキヅレ「御前に候
ワキ「あの山陰に當つて人影の見え候は。如何なる者ぞ名を尋ねて來り候へ
ワキヅレ「畏つて候
太刀持のワキヅレ舞臺際に出で、
ワキヅレ「いかにこの內へ案內申し候
狂言女、名乘座に出で、
狂言「案內とは誰にて渡り候ぞ
ワキヅレ「これに御座候は。いかやうなる御方にて御座候ぞ
狂言「まづ御尋ねある御方の御名は何と申し候ぞ

維茂「我々武士が勇み立つて、野邊の薄の露を分け、道のりの實に遠い山路の、鹿垣を作つた嶮しい道を踏み分けて行くと、山を下りてくる鹿の聲が聞えてくる。おゝ風も吹き方に氣をつけて、よく鹿の鳴聲が聞えるやうにしてくれ」
といつて、山を驅け廻つてゐるうちに、女の休んでゐる傍へ來た態。

【三】
維茂「おい誰か」
從者「はいお前に居ります」
維茂「あの山陰の方に人影の見えるのは、どういふ人なのか、名を尋ねて來い」
從者「畏りました」

◎ますらをが―この地上歌、素謠ではワキ・ワキヅレ、演能ではワキヅレのみが謠ふこともある。
○やたけ心―彌猛心を矢竹にいひかけ、梓弓の序とした。
○いる野―弓を射るを入野にいひかけた。入野は山城國乙訓郡大原村の上羽附近
○鹿垣―しかぎ（鹿木）の訛獵師が鹿を待つ間身を隱す爲に立木に横木をわたし柴等とりつけた物。
○さかしき―けはしい。
○落ちくる―山上から降りてくる。
○風の行方も―風の吹き方も鹿の聲を聞くのに妨げとならぬやう氣をつけてくれ

【三】

ワキヅレ「これは早や維茂にて御入り候よ

狂言「よし維茂にても誰にてもあれ。さる御方の紅葉狩とばかり御申し候へ

といひて元の座に帰り、後切戸より入る、ツキヅレツキの前に歸り、

ツキヅレ「名を尋ねて候へば。やごとなき上﨟の。幕うちまはし屛風を立て。酒宴半ばと見えて候程に。懇に尋ねて候へば。名をば申さず。たださる御方とばかり申し候

ツキ「あら不思議や。このあたりにてさやうの人は思ひも寄らず候。よし誰にてもあれ上﨟の。道のほとりの紅葉狩。殊更酒宴の半ばならば。『かたがた乘りうち叶ふまじと

地上歌「馬よりおりて沓を脫ぎ（ツキ弓矢をツキヅレに渡し）。馬よりおりて沓を脫ぎ。道を隔てて山陰の。岩の懸路を過ぎ給ふ。心遣ひぞ、たぐひなき心

従者は女の所へ尋ねに行つて元の座に帰り、

従者「名を尋ねに參りましたところ、身分の高い女の方が、幕をうちまはして屛風を立て、丁度今酒盛の最中のやうでございましたから、丁寧に尋ねましたが、名は申さないで、たゞ或お方だとだけ申しました。

維茂「これは變だ。この邊にそのやうな人がゐようとは思ひも寄らないことだ。しかし、まあ誰でもよい、身分の高い婦人が、道のほとりで紅葉狩をしてゐて、殊に今酒盛の最中とあらば、かたがた乘馬のまゝ通り過ぎることも出來まい」

と、馬から下りて沓を脫ぎ、女のゐる所とは道をかへて、遠くの方から、山陰の岩間の嶮岨な細道を通り過ぎられた。まことに類のない行屆いた心遣ひである。

○やごとなき―貴い。

○上﨟―上﨟女房。身分の高い女性。

○さる御方―或お方。

○乘りうち―馬に乘つたまま通り過ぎること。

○懸路―岩間の嶮岨な細道

遣ひぞたぐひなき

とワキは舞臺に入りて仕手柱先に立ち、ワキヅレは皆切戸より樂屋に入る。

【四】

シテ「げにや數ならぬ身ほどの山の奥に來て。人は知らじとうち解けて。ひとり眺むるもみぢ葉の。色見えけるか如何にせん

ワキ「われは誰とも白眞弓。ただやごとなき御事に。恐れて忍ぶばかりなり

シテ「忍ぶもぢずり誰ぞとも。知らせ給はぬ道のべの。便りに立ち寄り給へかし

ワキ「思ひ寄らずの御事や。何しにわれをば留め給ふべきと。さらぬやうにて過ぎ行けば（と二三足出づ）

シテ「あら情なの御事や（と立上り）一村雨の雨宿り

ワキ『一樹の蔭に

シテ『立ち寄りて

【四】

維茂が通り過ぎようとすると、

女「私は人數にも入らないつまらない者で、このやうな奥山に來て、誰も人は知るまいとうち解けて、ひとり紅葉を眺めてゐましたのに、人に見られたのでせうか、まあどうしませう」

維茂「自分はどなたかは知らないが、たゞ身分の高いお方だと聞いて、御遠慮して隱れてゐるだけのことです」

女「お隱れになつて、どなただと御身分もお知らせになりませんが、お通りがけのお序ですから、どうぞお立ち寄り下さいませ」

維茂「それは存じも寄らぬ事です。どうして私をお引き留めになるのです」と、素知らぬ振をして行き過ぎると、

女「まあお情ない、村雨の降つた時、同じ木蔭に雨宿りをするのも、また同じ川の水を飲むのも、前世からの因縁事だと申しまして、かうしてお目にかゝるのも、深い御因縁でございますのに、どうぞこ

【四】

○數ならぬ―人數に入らない、身分の卑しい。

○身ほど―身分、分限。

○色見えけるか―紅葉の色づくを人に知られる意に寄せていふ。

○白眞弓―誰とも知らずといひかけ、弓の縁語矢をやごとなきにいひかけた。

○忍ぶもぢずり　忍ぶを承けて、古今集源融の歌「陸奥のしのぶもぢずり誰故に亂れむと思ふわれならなくに」を引き「誰ぞ」を出す料とした。

○一村雨の雨宿り―說法明眼論「或處二一村一、宿二一樹下一、汲二一河流一……皆是先世結緣」から出た古諺。

○岩木にあらざれば—木石の如き非情のものでないから。文選鮑照の詩に「人非二木石一豈無レ感」
○菊の酒—彭祖の故事から出た、めでたい長壽の酒。〔菊慈童〕參照。
【五】
○虎溪—支那廬山の麓にあり、慧遠禪師がこゝに居て外へ出なかつたのに、一日陶淵明・陸修靜と酒を飮んで計らず禁足を破つて大笑した。この事〔三笑〕に作る。
○林間に酒を煖め—和漢朗詠集白樂天の詩句「林間煖レ酒燒二紅葉一、石上題レ詩拂二綠苔一」
○片敷く袖—片袖を下に敷いて假寢する事。
○紅葉衣—紅葉の散りかゝつた衣。
○この世の人とも—絶世の美人であるとの意。面色の紅くなるのは、やがて鬼女の本性が現れ出したのであるが、維茂には愈々美しく見えた。
○竹の葉—酒の異名。露は竹の緣語。

地「一河の流れを酌む酒を。いかでか見捨て給ふべきと（シテワキへ進み）。恥かしながらも袂にすがり留むれば（とワキの袖に手をかけ）。さすが岩木にあらざれば。心弱くも立ち歸る（シテ後へドリ）。所は山路の菊の酒何かは苦しかるべき

とシテワキ人替り、ワキは脇座、シテは舞臺の眞中にて下に居る。

【五】

地クリ「げにや虎溪を出でし古も。志をば捨てがたき。人の情の盃の。深き契りのためしとかや

シテサシ「林間に酒を煖めて紅葉を燒くとかや

地「げに面白や所から。巖の上の苔筵。片敷く袖も紅葉衣のくれなゐ深き顏ばせの

ワキ『この世の人とも。思はれず

地「胸うち騷ぐばかりなり（とワキ扇を開きユウケン扇し）

（舞クセ）

地クセ「さなきだに人心。亂るるふしは竹の葉の。

の木蔭にお立ち寄りになつて、一獻お召し下さいませ、お見捨て遊ばしてはいけません」と、女は恥かしながらも維茂の袂に縋つて引き留めると、さすが維茂も非情の木石ではないから、心弱くも女の方へ立ち歸る。

女「こゝは所も山路で、お酒はめでたい菊の酒でございます。どうぞお心置きなくお召し上り下さいませ」

維茂は終に女の席に入つて酒宴が始まる。

【五】

維茂「昔慧遠禪師が禁足を破つて、思はず虎溪の外へ出たのも、友人の親切を無にすることが出來かねた結果で、これなどは人情のこもつた盃を受けて、深い契りを堅めた先例といふものでせう」

女「かうした林の中で、紅葉を燒いて酒を煖めるなどは、ほんとに風流なことでございます」

維茂「いかにも場所柄も面白い所で、巖の上の苔の筵に、紅葉の散りかゝつた着物の片袖を下に敷いて、くつろいでいらつしやる、紅葉に照り映えた美しいお顏、全くこの世の人とも思はれません。思はず胸がどき／＼するばかりです。かうした美しいお方が居られなくても、

露ばかりだに受けじとは。思ひしかども盃に。向へばかはる心かな（シテ立ちワキに酌をして）されば佛も戒めの（トシテこれより舞ふ）。道は様々多けれど。殊に飲酒を破りなば。邪婬妄語も諸共に。亂れ心の花かづら。かかる姿はまた世にも。たぐひ嵐の山櫻。よその見る目も如何ならん

ワキはこの間に安坐して酒に亂れたる態。シテはなほも舞ひ續けて、

シテ『よしや思へばこれとても

地『前世の契り淺からぬ。深き情の色見えて。かかる折しも道のべの。草葉の露のかごとをもかけてぞ頼む行末を。契るもはかなうちつけに。人の心も白雲の立ち煩へる氣色かな

とクセを舞ひ上げ、

【六】

地『かくて時刻も移り行く。雲に嵐の聲すなり（と上を見つゝ）散るか眞拆の葛城の（と正面に直し）。神の契

○佛も戒めの―佛の戒律に五戒十戒がある。殺生・偸盜・邪婬・妄語・飲酒が五戒。
○花かづら―亂れ心、心の花、花かづら、かづらかゝる、かゝる姿と順次いひ續けた。
○たぐひ嵐の―類はあらじといひかけた。
○草葉の露の―草葉は露を呼び出す料。「露の」は少しの、
○かごと―かこつけごと。女のうらみ言。
○うちつけに―ぶしつけに初めて逢つて直に馴れ〳〵しくするをいふ。
○人の心―維茂の心、評釋には女の心と解す。
○白雲の―心も知らずといひかけ、立ち煩ふを呼び出した。

【六】

○移り行く雲に嵐の聲すなり―新古今集藤原雅經の歌下句「散るかまさきの葛城の山」
○葛城の神―顔が醜いので晝出ることを恥ぢた神であるから、その緣で夜を呼び出した。

兎角酒といふものは、人の心を亂すものて、私も酒など少しも飲むまいと思つてゐたのですが、いやはや盃に向ふと、心が變つてしまふものです。それで、佛の戒めにも、五戒・十戒などといつて、色色澤山あるのだが、殊に飲酒戒を破ると、同時に邪婬戒・妄語戒をも破ることとなつてしまふのです。それだのに、このやうに心の亂れた、見苦しい醉態、全く世に類もないことで、人の見てゐる手前も恥かしい次第です」

女「いえ〳〵、思へばこれも前世からの深い御因緣でございませう、さう思つて、深い情をおもてに表し、かうした偶然の機會に道ばたでお會ひして、少しばかり恨み言など申して、行末かけての契りを結びましたものの、誠にぶしつけた、はかない心頼みで、人のお心はどうであるやら當てにならず、かれこれ氣迷ひしてゐる始末でございます」

（[illegible]うち解け[illegible]を廻[illegible]行く。演奏[illegible]仕種で示す）

【六】

かくて、時刻も過ぎて行くと、雲の中に嵐の聲が聞える。それは眞拆の散る音でもあらうか。やがて夜にもなつ

○月の盃　盃を月に喩へた語。
○さす袖も—月のさすと、盃をさすと、舞のさす手とを兼ねた。
○雪を廻らす—舞容の美しい形容。
○堪へず紅葉—和漢朗詠集白樂天の詩句「不ㇾ堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天」
○月待つ程の—金葉集源師房の歌に「有明の月待つ程のうたゝ寝は山の端のみぞ夢に見えける」
○夢ばし—夢をば。「し」は强めの助詞。
【間】
○武内—武内宿禰、甲良明神。

りの夜かけて（正面へ出て開き）。月の盃さす袖も。雪を廻らす袂かな。堪へず紅葉

〔中舞〕

舞の間にシテワキの前に行き、ワキを篤と見込む。ワキ扇を左手に枕として眠り居る。シテワキの眠りを覺まさぬ心遣ひをして、

シテワカ「堪へず紅葉青苔の地

地「堪へず紅葉青苔の地。又これ涼風暮れ行く空に（と右へ出で）。雨うち灑ぐ夜嵐の（招き扇をし）。物凄しき。山陰に月待つ程の轉寝に（作物へ見入り）。片敷く袖も露深し。夢ばし覺まし、給ふなよ夢ばし覺まし給ふなよ

とワキにあしらひて右へ廻り、臺の上に上り作物の内へ中入。ツレは幕に入る。

【間】　末社來序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附熨斗目・水衣・狂言袴・脚半の裝束にて太刀を右手に持ちて出で、名乘座に立ちて、

狂言「かやうに候者は。男山八幡宮に仕へ申す武内と申す末社の神にて候。唯今これへ出づる事餘の儀にあらず。さても平の維茂信濃の國戸隱山に赴く。その子細は。戸隱山に鬼神住んで國土を惱ま

て、空に月が出れば、袖は雪と廻り、女は美しい舞を舞ふのである、

さも女は酒宴を助ける爲に、

〔中舞〕

を舞ひ、

女——『青く苔むした所に紅葉が散りしいて、感慨に堪へられないのに、なほその上冷い風が夕暮の空に吹き渡って、一層人を感傷的にする』

といふ朗詠を謡ふ。その間に維茂は酔ひ倒れて寝てしまふ。

女「夜嵐が物凄じく吹いてくるこの山陰で、月の出る頃まで暫くの轉寝をしていらつしやるが、お袖の露もしつとりと濡れてゐる。では、夢を覺まさないで、よくおやすみなさいませ」

といつて、物凄い勢ひで山中に隠れてしまふ。

○岩尾—岩のねもと。

○神通—神通力。

○とう／＼—疾く疾くの音便。

【七】

し候間。維茂に勅使立つて、退治せよとの御事なり。維茂も朝敵などの御爲にこそ候へ、鬼神の事は迷惑には候へども、勅命なれば是非に及ばず、畏つて候と御請けを申され、戸隱山へ分け入り給ふが。もとより大剛の人なれば、鬼神の事は心にもかけず、道すがら山々の紅葉を眺め、鹿などを狩り悠々として御出で候を。鬼神ども聞き。何卒誑かし命を取らんとて。美しき女と化け、戸隱山の岩尾の勝れたる、面白き所に酒宴をなして待ち申すに。維茂は夢にも知らず、いかやうなる御方と使を立てられければ、たゞさる御方とばかり申す間、いづれ乘りうち叶ふまじと、馬より下りて密かに通られしかば、内より女房出で、維茂の袖を控へ、九献を一つ聞し召せとて引き留め申す。見れば美しき女なれば。心もよわ／＼となられし、そのまゝ酒を飲む程に、追つとり込みて強ひければ、正體なく醉ひ伏し給ふ、鬼神は悦びやがて命をとらんとするを、忝くも八幡宮御存じあつて。急ぎ我等に立ち越え、この事を告げ知らせよとの神勅に任せ、唯今戸隱山へ赴く。（右の方に向き）いや神通を得たれば戸隱山に着いた、維茂はいづ方に居らるゝか、（ワキを見て）これに居らるゝ。誠に器量骨柄勝れたる人にて候、急いで神勅の由申し渡さう、（ワキの前に出で）いかに維茂聞き給へ、最前の女は人間にてはなし、この山に住む鬼神なるが、御身を誑かし命をとらんとするを、忝くも八幡宮御存じあつて、我等に立ち越え、この由告げ知らせよとの神勅に任せ、武内の神これまで出でて候。卽ちこの御佩刀を下され候間、易々と鬼神を平らげ急ぎ上洛あるべし。あら正體もなき體かな。とう／＼目を覺まされ候へ／＼

と拍子を踏みて目を覺まさせ、太刀をワキの前に置きて幕に入る。

【七】

ワキ目を覺ましたる心にて面を上げ、前の太刀を見て扇をとり直し作物を見て、

【七】

後段

維茂　夢に神のお告を受け、目を覺まし、

ワキ「あら淺ましやわれながら。無明の酒の醉ひ心。まどろむ隙もなきうちに。あらたなりける夢の告と

地「驚く枕に雷火亂れ。天地も響き風遠近の。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなしや恐ろしや

ワキこの間に烏帽子・長絹を脱ぎてモギドウとなり、太刀を持ちて居立つ。

【八】

後ジテ鬼女、面顰・赤頭・赤地鉢卷・襟縹色・着附段厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて打杖を持ち、次の地上歌に作物の後より出で一疊臺の上右側に立つ。

地上歌「不思議や今までありつる女。不思議や今までありつる女、とりどり化生の姿を現し或は巖に火焰を放ち。又は虚空に焰を降らし。咸陽宮の。煙の中に。七尺の屛風の上になほ。餘りてそのたけ。一丈の鬼神の。角はかぼく。眼は日月面を向くべきやうぞなき

と打杖を振り上げてワキを睨み、臺より下りて、

維茂「あゝわれながら淺ましいことであつた。煩惱の本となる酒に醉つて、うとうとと寢たと思ふ隙もないうちに、あらたかな夢のお告を受けて、目が覺めた……と思ふや否や、雷火が亂れ飛び、天地が響き渡る、このやうな遠近の見當もつかない山中で、心細いことだ、恐ろしいことだ。

こういひながら、鬼女に對抗する用意をする。

【八】

（間もなく後ジテ鬼女が山中から現れ出る。（變型の演奏には、後ヅレ鬼女が多勢登場することもある）

不思議なことに、今まで美しく見えてゐた女が、いづれも妖怪變化の姿となつて、或は巖の上で火焰を放ち、或は空中から焰を降らして、かの三月以上も天を焦がしたといふ咸陽宮の火焰のやうな凄じい様を示す。そしてかの七尺の屛風よりもなほ高い、身のたけ一丈餘もある鬼神は、角はかぼくのやうで、眼は日月の如くに輝き、とてもこれに手向ふことは出來さうにも思はれない。

○無明の酒―無明は煩惱の根原。

○あらたなりける―あらたかな。

○驚く―夢の覺める。

○遠近のたづきも知らぬ山中に―古今集讀人知らずの歌。下句「覺束なくも呼子鳥かな」風が遠近に吹くといひかけた。

【八】

○感陽宮の煙―秦始皇の建てた宮殿。その燒けた時火焰が三月餘天を焦がしたといふので、鬼の降らす火焰の物凄い喩へとした。

○七尺の屛風―感陽宮で荊軻が始皇を殺さうとした時に始皇の躍り越えた屛風。〔感陽宮〕參照。鬼女の偉大な形容とした。

○かぼく―枯木、柯木、又は佳木かとの說があるが當らない。或は火木か。光悅本には火木の字を充つ。

〔舞働〕に恐ろしき様を示して、また臺に上る。

【九】

ワキ『維茂少しも騷がずして

地『維茂少しも騷ぎ給はず。南無や八幡大菩薩と（太刀を戴き）。心に念じ。劍を拔いて（太刀を拔き）。待ちかけ給へば、微塵になさんと（シテ拍子を踏み）。飛んでかかるを（臺より飛下り）。飛び違ひむずと組み鬼神の眞中刺し通す處を頭を摑んで上らんとするを（とシテワキ組合ひ）。斬り拂ひ給へば劍に恐れて巖へ上るを（シテ臺に上り）。引きおろし刺し通し忽ち鬼神を從へ給ふ。威勢の程こそ恐ろしけれ

（引きおろし刺し通し―とワキシテを臺より引きおろし太刀を胸にあつ。シテ斃れ死したる態にて切戸より入る。ワキ「威勢の程こそ」―と太刀をかつぎて常座にて留む、

〔舞働〕に、鬼女恐ろしい勢ひを示す。

【九】

維茂「自分は少しも驚きはしない」と、維茂は少しも騷がず落ちつき拂つて、『どうか八幡大菩薩、守護し給へ』と心の中に祈願して、劍を拔いて、鬼神の攻めかゝるのをお待ちになると、鬼神は維茂を木葉微塵にしようと飛んでかゝるのを、維茂は飛び違つて、鬼神とむずと組み合つて、鬼神の眞中を刺し通される。それを鬼神は維茂の頭を摑んで空に上がらうとしたが、維茂はこれを斬り拂はれたので、鬼神は劍に恐れて巖へ上ると、維茂はこれを引き下して刺し通して、忽ちに鬼神を退治せられた。その威勢はまことに恐ろしいばかりであつた。

【九】

○維茂―平國香の曾孫、兼忠の子。世に餘五將軍と呼ばれた。一條天皇頃の人。

○八幡大菩薩―武士の守護神。〔弓八幡〕參照。

〔考異〕

諸流（五流）

【五】地クリ「げにや虎溪を出でし……深き契りのためしとかや（剛ナシ）

古謠本（光悦本）

【三】ワキ「あの山陰に當つて人影の見え（光て）候は……ワキヅレ「名を（光ナシ）尋ねて候へば……　【五】地「前世の契り淺からぬ（光す）

……【九】ワキ「維茂少しも騒がずして（光き給はす）……

盛久

觀（寶　春　剛　喜）

解　說

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】シテ　平盛久、**ワキ**　土屋三郎、**ワキツレ**　輿舁（二人）、**ワキツレ**　太刀取、**狂言**　土屋の從者

【所】相摸國　鎌倉

【時】鎌倉初期　春（三月）

【作者】能本作者註文には世阿彌の作、二百十番謡目錄には元雅の作とす。世子六十以後申樂談儀後人加筆の項に永正十一年十月二十八日演能、言經卿記文祿四年三月三十日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】主馬判官盛久は源氏に生捕られ、土屋三郎に護送せられることとなつたので、その許しを得て、日頃信仰してゐる清水觀世音に參詣し、やがて鎌倉に着いたが、處刑の日が近づくや、愈〻懈らず觀音經を讀誦して、土屋と共に經文の功德をたゝへた。そして少しまどろむ内に、不思議な靈夢を蒙つた。明方、由比濱の刑場に斬られることとなつたが、太刀取は盛久の手に持つた經卷の光で眼が眩み、太刀をと

り落して、太刀は段々に折れた。賴朝はこれを聞いて御前に召し出した。盛久が昨夜の靈夢の次第を申し述べると、賴朝も同じ夢を見たので、奇特に感じて一命を助け、盃を與へて舞を所望した。盛久は命に從つて舞を舞つた上は、長居を憚つて退出した。

【出典】平家物語長門本卷二十に、

主馬入道盛國が末子に主馬八郎左衞門盛久、京都に隱れ居けるが、年來の宿願にて等身の千手觀音を造立し奉りて、淸水寺の本尊の右わきに居ゑ奉りけり。盛久、降るにも照るにもはだしにて淸水寺へ千日每日參詣すべき志深くして、步みを運び年月を經るに、人是を知らず。平家の侍、打もらされる越中次郎盛次、惡七兵衞景淸、主馬八郎左衞門盛久、是等は宗徒の者共なり。……北條京中を尋ねもとめけれども更に尋ね得ず。或時下女來りて「誠にや主馬八郎左衞門を御尋ねさふらふなるか、かの人は淸水寺へ夜每に詣で給ふなり」とぞ申しける。北條悅びて……召捕て兵衞佐殿へ奉る。盛久また知らぬ東路に千行の泪を拭ひ、曉月に袂をうるほして……あしたの露に命をかけ、日數も漸く重なれば、鎌倉にも下着しぬ。梶原平三景時兵衞佐殿の仰をうけて盛久を召す。心中の所願を尋ね申すに、子細を述べず「盛久平家重代相傳の家人、重恩厚德の者なり、早く斬刑に從ふべし」とて、土屋三郎宗遠に仰せて、首を刎らるべしとて、文治二年六月廿八日に盛久を由井が濱に引すへて、盛久西に向つて念佛十遍計申しけるが、いかゞ思ひけん、南に向つて又念佛二三十遍計申しけるを、宗遠太刀をぬき頸をうつ。その太刀中より打をれぬ。又打太刀も目ぬきより折れにけり。不思議の思ひをなすに、富士の裾より光二すぢ盛久が身に差あたりとぞ見えける。宗遠使者を立て、此由を兵衞佐殿に申す。また兵衞佐殿の室家の夢に、墨染着たる老僧一人出來て「盛久斬首の罪にあてられ候が、まげて宥め候べき」由申す。室家夢の中に、「誰人にておはするぞ」、僧申しけるは「我淸水邊に候小僧なり」と申すとおぼして夢覺めて、兵衞佐殿にかゝる不思議の夢をこそ見たれと宣ひければ、「さる事候、平家の侍に主馬入道盛國が子に主馬八郎盛久と申す者、京都に隱れて候へるを尋ね取りて、唯今宗遠に仰せて、由井が濱にて首を刎ねよとて遣して候、此事淸水寺の觀音の盛久の身にかはらせ給ひたりけるにや、首を刎ね候なるに、一番の太刀は中より二に折れ、また次の太刀は目ぬきより折れて、盛久が頸は斬れず候由申し候」とて、盛久を召返されたり。

とあるに據つた。— この事、平家物語流布本、源平盛衰記等には見えない。

【概評】不自然な點の少いそして功驗のあらたかな、觀音利生記として最も秀れた說話の一であらう。盛久が終始觀世音を信仰して、ひたすら後生善所を願ふ態度も、よく素直に描かれてゐる。劇能の通例として、場面が幾度か移つてゐるが、その轉換も甚だ滑かに行は

れてゐる。第一節の盛久東下りの條は甚だ長文であるが、〔千手〕のクセに描かれた重衡の東下りなどに比べて、遥かに秀れてゐる。殊に一曲の起首にワキ名乗もなく「いかに土屋殿に申すべき事の候」といふシテワキの掛合から始まつてゐるのは、全く類例のない面白い脚色である。尤も寶生金剛喜多の三流にはこの前にワキ名乗があり、光悦本では全くこの清水參詣の條及び東下りの條を缺いてゐるのであるが、これが後世の改修(元祿以前に行はれたらしい、貞享本等は現行曲と同様である)にしても、注目に値するものであると思ふ。

【一】

シテ平盛久、直面・襟淺黄・着附無色厚板・水衣・白大口・掛絡・腰帶・數珠の裝束にて經を懐中し、ワキヅレ輿舁二人(着附厚板・白大口・腰帶・扇の裝束)に輿をさしかけさせ、ワキ土屋三郎、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・直垂上下・込大口・扇・小刀の裝束、ワキヅレ太刀取、梨打烏帽子・白鉢巻・着附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて太刀を持ち、シテの後に隨ひ、橋懸へ出でながら、

シテ「いかに土屋殿に申すべき事の候

ワキシテの後より進みながら、

ワキ「何事にて候ぞ

シテ「唯今關東に下りなば。これが限りなるべし。清水の方へ輿を立てて給はり候へ

ワキ「それこそ易き御事。いかに面々。東山の方へ輿を立てられ候へ

【一】

舞臺は京都、シテ平盛久、ワキヅレ輿舁の輿に乘り、ワキ土屋三郎、ワキヅレ太刀取に護衛せられ鎌倉に送られる途中の態で登場。

盛久「申し土屋殿」

土屋「何です」

盛久「今關東へ下つたならば、もはやこれ限り京都へは歸られないでせう。どうか清水の方へ輿をやつて下さい」

土屋「お易い御用です。(輿舁に)おい皆の者、東山の方へ輿をやつてくれい」

【一】

○土屋殿—三郎宗遠、土肥實平の弟で、賴朝の家臣。長門本に據れば、盛久斬罪の時の太刀取であつた。

○清水—京都東山の清水觀音。〔田村〕參照。

○輿を立てて—輿を置きすゑること。

○面々—皆々、各々方。土屋の從者にいふのである。

○觀世音—世人のその名を稱する音聲を聞いて皆解脫を得しめる慈悲深い菩薩。
○さしも草—新古今集清水觀音の詠「なほ賴めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは」を指す。
○一稱一念—觀世音の御名を一度稱へ一度祈念するだけでも利益がある。
○値遇の御結緣—佛菩薩に遇ひ佛緣を結ぶこと。度々參詣する意。
○いつか又清水寺の—いつか又來てといひかけ、源氏物語須磨卷源氏の歌「いつか又春の都の花を見ん時失へる山賤にして」に據つて文を綴つた。
○音に立てぬ—聲を立てゝ泣かない。
○音羽山—清水寺のある山音の字を重ねた。
○瀧つ心—胸に充ち溢れた思ひ。清水寺南崖の音羽瀧に寄せて綴つた。
○見渡せば柳櫻をこき交ぜて—古今集素性法師の歌。下句「都ぞ春の錦なりける」
○なまじひに—なまじか。生まれない方が寧ろ仕合であつたのに。
○弓馬の家—武士の家。

この間に舞臺に入り、シテは正面先、ワキ・太刀取はその後に下に居て、シテ合掌して、

シテサシ「南無や大慈大悲の觀世音さしも草。さしも畏き誓ひの末。一稱一念なほ賴みあり(手を直
し。ましてや多年値遇の御結緣空しからんや。あら御名殘惜しや(と面を伏せ)

シテ一聲「いつか又。清水寺の花盛り

と一同立ち上り、シテ輿をさしかけさせ、

地「歸る春なき。名殘かな
シテ「音に立てぬも音羽山(と右の方に向き)
地「瀧つ心を。人知らじ(と正面に直し)
シテサシ「見渡せば柳櫻をこき交ぜて。錦と見ゆる故鄕の空
地「又いつかはと思出の。限りなるべき東路に。思ひ立つこそ名殘なれ
シテ「われなまじひに弓馬の家に生まれ。世上に

やがて清水に背き、佛前に參つて、禮して、

盛久「南無大慈大悲の觀世音菩薩、あなたは『なほ賴めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらん限りは』と仰せられて、一度御名を稱へ、一度祈念しただけでも、御利益があるのでございます。まして私は永年續けて參詣したのでございますから、御利益のない筈はございません。今お別れすることとなつて、お名殘惜しう存じます」

さいつて、再び輿に乘り、鎌倉へ向ふこととなり

盛久「この美しい淸水寺の花盛り、これを限りに、いつ又歸つて見ることも出來ないのだと思へば、春の名殘が惜しまれることだ。この胸のうちには、音羽山の瀧のやうに、切ない思ひが充ち溢れてゐるのだが、聲に出して泣きはしないのだから、人は誰も自分の心の中を知りはしないだらう。見渡すと、どこもかしこも柳と櫻が入り交つて、まるで錦のやうな美しさだ。あこの故鄕都の空も、これが最後の思出となつて、いつ歸ることも出來ない關東への旅に出かけることかと思へば、名殘惜しいことだ」

輿は次第に東の方へ進んで行く。

盛久「自分はなまじか武士の家に生まれ

○跡白河―跡知らずといひかけた、白河は洛東白川村を流れて賀茂川に入る川、
○歸るべき―波の縁語。
○松坂―山城國宇治郡山科村、粟田口から日の岡に登る坂路。誰をか待つといひかけた。
○四の宮河原―同じく山科村にある。
○四つの辻―粟田口十禪師辻。
○これやこの行くも歸るも別れては知るも知らぬも逢坂の關―後撰集蟬丸の歌、
○逢坂の關―山城近江の國境逢坂山にあつた關所。
○勢田の長橋―近江國琵琶湖尻に架けた橋、
○鏡山―近江國蒲生郡。古今集讀人知らずの歌―鏡山いざ立ちよりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると」を引いた。
○老蘇の森―同郡。老いといひかけた。
○美濃尾張―身の終りといひかけた、
○熱田の浦―尾張國愛知郡今名古屋市に入る。
○鳴海潟―同國愛知郡。野邊になるといひかけた。
○八橋―三河國碧海郡知立町、(杜若)參照、

隠れなき身とて

地「思はざる外の旅行の道。關の東に赴けば。跡白河を。行く波の。いつ歸るべき。旅ならん

地下歌「ここは誰をか松坂や四の宮河原四つの辻。

上歌「これやこの。行くも歸るも別れては。行くも歸るも別れては。知るも知らぬも。逢坂の關守も。今のわれをばよも留めじ。勢田の長橋うち渡り。立ち寄る影は鏡山。さのみ年經ぬ身なれども。衰へは老蘇の森を過ぐるや美濃尾張。熱田の浦の夕汐の道をば波に隠されて。廻れば野邊に鳴海潟又八橋や高師山又八橋や高師山

（勢田の長橋うち渡り」と一同橋懸へ行き、幕際まで行きて廻り、一の松まで來て立ち留まり、

地ロンギ「汐見坂橋本の。濱名の橋をうち渡り

シテ「旅衣。かくきて見んと思ひきや。命なりけり

小夜の中山はこれかとよ

て、世間に知れ渡つた身となつた爲に、今は思ひがけない旅立ちをすることとなり、かうして關東の方へ出て行けば、末はどうなることだか、後にして行く白河の波はまた立ち歸るのだが、自分はいつ再び都に歸ることが出來よう。

こゝ松坂といへば、誰かを待つてゐるのか知らないが、自分は誰一人待つてくれる人もなく、四の宮河原、四つの辻も通り過ぎて『これやこの行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の關』と歌に詠まれた逢坂の關へ來たが、今の自分は關守も引き留めてくれはしまい。やがて勢田の長橋を渡つて、鏡山に來ては、鏡に映るわが姿、實際の年はさほど老いてはゐないのであるが、惱みに老いやつれたこの姿。名も老蘇の森を過ぎ、これが『身の終り』かと思ひながら、美濃國を經て尾張國に入り、熱田の浦まで來たが、夕汐で道がなくなつてゐるので、今は野邊になつてゐる鳴海潟の方へ廻り、八橋や高師山をも通り過ぎた」

（次第に旅を進んで行き、）

盛久「かうして汐見坂を經て、橋本・濱名湖の橋を渡り、……おゝこのやうな所まで旅をして來ようとは思ひも寄らなかつた。これが『年たけて又越ゆべしと思ひきや、命なりけり小夜の中山』と詠まれ

〇高師山―遠江國濱名郡、二川と白須賀との間にある丘陵。
〇汐見坂―白須賀東南の坂路。
〇橋本―濱名郡新居町。こゝに濱名湖の橋が架つてゐる。
〇かくて―衣の緣語着てにいひかけた。
〇思ひきや―新古今集西行の歌「年たけて又越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」を引いた。中山は遠江國日坂と金山との間にある坂路。
〇大井川―遠江駿河の國境を流れる大川。
〇宇津の山―駿河國、丸子と岡部との間、波も打つといひかけた。
〇清見潟―同國庵原郡、今の清水港邊、昔こゝに關があり、關に來てといひかけた。
〇三保の入海―清見潟の南〔羽衣〕參照。
〇田子の浦―庵原郡蒲原町吹上の邊。但し今は富士郡元吉原村の海濱をいふ。
〇うち出でて見れば―萬葉集山部赤人の歌「田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りけ

地「變る淵瀬の大井川。過ぎ行く波も宇津の山

シテ「越えても關に清見潟

地「三保の入海田子の浦うち出でて見れば眞白なる。雪の富士の嶺箱根山。なほ明け行くや星月夜はや鎌倉に、着きにけりはや鎌倉に着きにけり

「なほ明け行くや」と一同舞臺に進み、シテは地謡座前にて床几にかゝり、ワキ・太刀取は眞中までシテに從ひ來て、後見座にくつろぐ。

【三】

シテ「サシ夢中に道あつて塵埃を隔つ。げにやそことも知らざりし。山を越え水を渡つて。この關東に着きぬ。百年の榮花は塵中の夢。一寸の光陰は沙裏の金。げにや故郷は雲居のよそ。千代もと契りし友人も。變る世なれやわれひとり。鎌倉山の雲霞。げにかかる身の習ひかや。かくてながらへ諸人に面をさらさんより。「あつぱ

た所なのだ。それから淵と瀬とのよく變る大井川を渡り、波打際を辿つて宇津山を越え、清見潟、三保の入海を過ぎて、田子の浦に來ては、『田子の浦にうち出でて見れば眞白にぞ、富士の高嶺に雪は降りける』と詠まれた通りの雪の富士を眺め、やがて箱根山をも越えて、なほ旅を續けてゐるうちに、もはや鎌倉に着いた。

・旅程[illegible]と鎌倉に着いた。

【三】

盛久と鎌倉の[illegible]

盛久 夢のやうなこの世にも、佛道といふ道があつて、これに入れば、一切の俗塵から離れることが出來るのだ。思へば、どことも分らないやうな山を越え水を渡つて、この關東に着いたことだ。まことにこの浮世の榮花は、百年の久しい間續いたところで、それは一片の夢に過ぎないのだ。それよりも佛を念ずる時こそ、それがたとへほんの少しの時間でも、砂の中から黃金を見出したやうな喜びがあるのだ。故郷は文字通り雲居のよそに隔たつて、いつまでも變るまいと誓ひあつた友人とも、會ふことの出來ない、變り果てた世の中となり、自分ひとりこの遠い鎌倉に來てゐるのだ。あゝかういふ辛い目に遭ふのが、人の身上なのであらう

れ疾う斬られればやと思ひ候

（ワキこの間に名乘座に出でてシテ謠を聞き居り、）

ワキ「あら痛はしや盛久の獨言を仰せ候。（シテに向ひ）いかに申し候。土屋が參りて候

シテ「土屋殿と候や此方へ御入り候へ

（と床几を離れて下に居る。ワキも前に出て下に居る。）

ワキ「御下向の由を披露申して候へば。急ぎ誅し申せとの御事にて候

シテ「唯今も獨言に申しし如く。かくてながらへ諸人に面をさらさんよりも。あつぱれ疾う斬らればやとの念願。さてははや叶ひて候よ。さて最期は唯今にて候か

ワキ「いや御最期はこの曉か。然らずは明夜かと仰せ出だされて候

シテ「さては暫くの時刻にて候よ。さてもこの程土屋殿の御芳志。申すもなかなか愚かなり。又

か。かうして生き永らへて、多くの人々に恥かしい姿を見られるよりは、一層のこと、早く斬られたいものだ」

（と獨言をいつてゐると、土屋はこれを聞いて、）

土屋「あゝお氣の毒なことだ。盛久が獨言をいつて居られる。（といつて盛久に）申し、土屋が參りました」

盛久「土屋殿ですか、こちらへお入り下さい」

（二人は對坐して、）

土屋「お下りになつた事を、頼朝公に申し上げましたところ、早く殺せとの仰せです」

盛久「今も獨言に申しました通り、このやうな恥かしい姿で生き永らへ、多くの人人に恥を曝すよりは、一層のこと早く斬られたいと祈つてゐたのです。それではもはやこの念願が叶ひました。そして最期は今すぐなのですか」

土屋「いや御最期はこの明方か、でなければ明夜かと仰せ出されました」

盛久「それでは、あと暫くの時間ですな。何はともあれ、この間中の土屋殿の御親切、御禮の申しやうもありません。なほ亡く

る―を引いた。
○箱根山―伊豆相摸の國境にある。
○明け行く―箱の縁語開けにいひかけた。
○星月夜―鎌倉の枕詞。
○鎌倉―相摸國鎌倉郡、頼朝が幕府を開いた地。

【三】
○夢中に道あつて―詩句か出所未詳。この道は佛道を指したものか。
○百年の榮花は―詩句であらう、出所未詳。白樂天の詩に「百年富貴夢中事、一旦榮華風前塵」
○かかる身―「かかる」は雲霞の縁語。
○盛久―主馬入道盛國の末子。委しくは解説にいふ。
○披露―貴人に申し上げること。頼朝にいつたのである。
○御芳志―御親切。

亡からん跡一遍の念佛をも御回向に預からば。二世までの御芳志たるべし。われこの年月清水の觀世音を信じ（ト正面に向き）。毎日かの御經を懈る事なし。さりながら今日は未だ讀誦申さず候程に。御暇を賜はり候へ。かの御經を讀誦申したく候

ワキ「それこそありがたう候へ。土屋もこれにて聽聞申さうずるにて候

（シテ經を懷中より取出し戴きてこれを開き、

【三】

シテ　ありがたや大慈大悲は薩埵の悲願。定業亦能轉は菩薩の直道とかや。願はくは無緣の慈悲を垂れ。われを引導し給へ。今生の利益もし缺けば。後生善所をも誰か賴まん。二世の願望もし空しくば。大聖の誓約豈虛妄にあらずや。或遭王難苦臨刑欲壽終。念彼觀音力刀尋段々壞

（と經を戴く）

なつた後に、一遍の念佛でもお稱へ下されば、來世までもありがたく存じます。私は永い年月清水の觀世音を信仰して、毎日闕かさず觀音經を讀誦してゐたのです。しかし今日はまだ讀誦しないので、この御經を讀誦したいと思ひます。暫くお暇を下さい

土屋「それはありがたいことです。私もここで聽聞致しませう

【三】

盛久は觀音經を開いて、

盛久「あゝありがたいことです。廣大無邊の大慈悲を垂れ給ふのが、觀世音菩薩の御誓願で、定業によつて惡果を受くべきものも、よくこれを轉じかへて善果をお與へ下さるのが、觀世音菩薩の御利益です。どうか無緣の者をも一切平等に慈悲を垂れて、極樂へお導き下さいませ。佛は、この世に於て衆生に利益を與へることが出來なければ、誰も來世の極樂往生を信ずる者がなからう。現世安穩後生善所の願望を達せしめなければ、佛の誓約は全くうそ僞りになつてしまふではないか』と仰せられました。――『或は王難の苦に遭ひて、刑に臨みて壽終らんと欲せんに、彼の觀音の力を念ぜば、刀尋いで段々に壞れなん』――」

（と觀音經を讀誦する。

【二】

○薩埵—菩提薩埵 Bodhi-sattvaの略。觀世音を指す。

○悲願—衆生を救はうとの大慈悲から立てた誓願。

○定業亦能轉—因果應報の定則によつて惡果を受くべきものも、觀音の妙力によつて之を轉ずることが出來る。妙樂大師文句記十に「若其機感厚、定業亦能轉」

○直道—迂廻せずに直に涅槃に入る道。

○無緣の慈悲—佛緣のない衆生にも施す一切平等の慈悲。

○引導—佛所に引入れること。法華經法師品に「引導衆生、集之令聽法」

○今生の利益—同藥草喩品に「聞此法已現世安穩後生善處」

○二世の願望—如意輪經に「若我誓願大悲中、一人不成二世願望、我墮虛妄罪過中」

○大聖—觀世音菩薩を指す

○或遭王難—以下「段々壞」まで法華經觀世音菩薩普門品(觀音經)の偈。

ワキ「ありがたやこの御經を聽聞申せば。御命も頼もしうこそ候へ
シテ「げによく御聽聞候ものかな。この文といつぱ。たとひ人王難の災に逢ふといふとも。その劍段々に折れ
ワキ「又衆怨悉退散といふ文は。射る矢もその身に立つまじければ
シテ「げに頼もしやさりながら。全く命のためにこの文を誦するにあらず
（とワキの方に向き經卷を見せ、ワキもシテの傍へ來て經を見、）
シテ「種々諸惡趣地獄鬼畜生。生老病死苦以漸悉令滅
地「下歌」この文の如くば。諸々の惡趣をも。三惡道は遁るべしやありがたしと夕露の。命は惜しまずただ後生こそは悲しけれ（シテ經を卷きて。）上歌「昔

土屋「あゝありがたいことです。この御經を讀誦しますと、お命もお助かりになることと、頼もしく思はれます」
盛久「よく御聽聞なさいました。この經文によれば、たとひ人が王命に背いた爲に苦難に遭つても、その劍が切れ切れに折れ……」
土屋「また『衆の怨悉く退散せん』といふ經文を伺へば、敵の射る矢も身に當らないのですから……」
盛久「まことに頼もしいことです。しかし私がこの御經を讀誦するのは、全く命が惜しい爲ではありません。御經に——
『種々の諸の惡趣、地獄(餓)鬼畜生、生老病死の苦、以て漸く悉く滅せしむ』
この經文によれば、諸々の惡い世界、地獄・餓鬼・畜生の三惡道に墮ちることから逃れ得られよう、ありがたいことだと思ふのです。はかない命は惜しくありませんが、後生が恐ろしいのです。

○いつぱ—いへばの促音便。
○王難—王命に背いた爲に受ける難苦。
○段々—きれぎれ。
○衆怨悉退散—同じく普門品の偈に「怖畏軍陣中、念彼觀音力、衆怨悉退散」
○種々諸惡趣—以下「悉令滅」まで普門品の偈。
○惡趣—惡業によつて趣く世界。
○三惡道—三惡趣。地獄・餓鬼・畜生道。
○夕露の—ありがたしと言ふといひかけ、露の命と續けた。

○昔在靈山—南岳大師の作と傳ふ偈文「昔在二靈山一名二法華一、今在二西方一名二阿彌陀一、娑婆示現觀世音、三世利益同一體」を引いた。この句〔誓願寺〕にも見ゆ。

○終の道—死んだ後行く世界。

【四】

○あらたなる—あらたかな

○八聲の鳥—明方の鷄の鳴聲。一番鷄二番鷄など鳴いて後、幾度も鳴くのをいふ。

○金泥の御經—紺紙に金文字で書いた御經。

○念ひの珠の—念珠（數珠）を和らげて魂の緒（命）にいひかけ、同意の命に續けた。

在靈山の。御名は法華一佛。今西方の主又。娑婆示現し給ひて我等が爲の觀世音。三世の利益同じくは。かく刑戮に近き身の。誓ひにいかで洩るべきや。盛久が終の道よも闇からじ賴もしや

（ワキ地上歌に後見座にくつろぐ。シテ睡眠の心にて面を伏せ、）

【四】シテ「あら不思議や（と面を上げ）。少し睡眠の內に。あらたなる靈夢を蒙りて候はいかに。あらありがたや候。

（ワキこの間に名乘座に出で、）

ワキ「既に八聲の鳥鳴いて。御最期の時節唯今なり（とシテへ向き）。はやはや御出で候へとよ

シテ「待ち設けたる事なれば。左には金泥の御經（と經を見）。右には念ひの珠の緒の（と數珠を見）。「命も今を限りなれば。これぞこの世を門出の庭に。足よわよわと立ち出づる

佛は、昔靈鷲山で說法せられた時には法華と名づけ、今西方淨土の敎主としては阿彌陀如來と申し、またこの世に現れては、我等衆生を救ふ爲に觀世音と申すが、過去現在未來の三世を通じて、御利益には變りがないと仰せられてあるのですから、このやうなやがて斬罪に處せられる者も、佛の御利益に洩れはしないのです。私の死後冥途の道も闇くはないことと、賴もしく思はれます」

（觀音經を讀誦して後、土屋は去り、盛久は少し假睡した態で、）

【四】盛久「これは不思議だ、暫く眠つた間に、あらたかな夢のお告を受けた、これは不思議なことだ」

（土屋再び盛久の許に來て、）

土屋「もはや明方の鷄が鳴いて、御最期の時となりました。早くお出でなさい」

盛久は豫期してゐた事であるから、左手には金泥の御經を、右手には數珠を持つて、わが命も今を限りに終る、これがこの世の門出と思つて、さすがに足どりも進まぬながらに刑場へ出掛けるのである。

○別れの鳥の聲—常に男女の朝の別れを恨む戀の詞に用ゐるが、今はこの世の離別を知らせる聲であると。

○牢より籠の輿に—牢屋から引出して籠輿に乘せ。

○由比の汀—鎌倉の海濱、稻瀨川滑川の間をいふ。

【五】○座敷—坐席。首を斬る場所。

○座に直り—首の座に着席し。

と靜かに立ちて輿をさゝせ、ワキ・太刀取その後に從ひ、

ワキ『武士前後を圍みつつ、これぞ別れの鳥の聲

シテ『鐘も聞うる東雲に

ワキ『牢より籠の輿に乘せ

シテ『由比の汀に

ワキ『急ぎけり

地次第『夢路を出づる曙や。夢路を出づる曙や後の世の、門出なるらん

地次第に舞臺を大廻りして、地取にシテは眞中、ワキは脇座に立ち、輿丁は切戸より入る。

【五】

ワキ『さて由比の汀に着きしかば、座敷を定め敷皮敷かせ。早々直らせ給ふべし

シテ『盛久やがて座に直り（ヒドに居り）て清水の方はそなたぞと、西に向ひて觀音の、御名を稱へて待ちければ（と經を開く）

ワキヅレ太刀取、太刀を拔きて、

警固の武士はその前後を取圍んで、——今鳴く鷄の聲、それは男女の朝の別れを急がせる鳥の聲ではない、まことこの世の別れを促す聲で、折から明方の空に鐘の聲の聞える中を——牢屋から籠輿に乘せて、由比が濱へと急いで行つたのである。

盛久「夜の夢から覺めた明方が、やがてあの世へ赴く旅立の時だ」

やがて、舞臺は由比が濱となる。

【五】

さて、由比が濱に着いたので、土屋は刑場を定め、敷皮を敷かせて、

土屋「さあ早く首の座にお坐りなさい」

盛久はやがて首の座に着き、「清水觀世音はあちらの方である」と、西に向つて、觀世音菩薩の御名を稱へて、斬罪の時を待つ。

○太刀取―首を切る役人。○稱念―稱名念佛、

ワキヅレ「太刀取後にまはりつつ（トシテの後へ行きて）稱念の聲の下よりも（太刀を上げ）太刀振り上ぐればこはいかに（ト太刀を投げ捨て）。御經の光眼に塞がり（兩手を眼に當て）。取り落したる太刀を見れば。二つに折れて段々となる（ト太刀を見）。「こはそも如何なる事やらん

とワキに辭儀し、直して切戸より入る。

シテ「盛久も思ひの外なれば。ただ茫然とあきれ居たり

ワキ「いやいや何をか疑ふべき。この程讀誦の御經の文

シテ「臨刑欲壽終

ワキ「念彼觀音力

シテ「刀尋

ワキ「段々壞の

太刀取は盛久の後にまはつて、盛久が稱名念佛してゐるところを、太刀を振り上げたが、

（直ぐ太刀を前に投げ捨て、）

太刀取「これは一體どうした事でせう、御經の光が眼を射て、思はず取り落した太刀を見ますと、二つに折れてきれ〴〵になつてゐます。これは一體どうした事でございませう」

（土屋に報告する。）

盛久も意外なことなので、たゞぼんやりとして、呆れてゐた。

土屋「いや〳〵、何も疑ふことはない、先程讀誦せられた御經の通りで……」

盛久「刑に臨みて壽終らんと欲せんに……」

土屋「彼の觀音の力を念ぜば……」

盛久「刀尋いで……」

土屋「段々に壞れなん」――とある通りです」

地『經文あらたに曇りなき劒段々に折れにけり（シテ太刀を見つ）。末世にてはなかりけり。あらありがたの御經や（經を戴きて懐中しつ）。やがてこの由聞し召し。急ぎ御前に參れとの御使度々に重なれば（正面へ辭儀しつ）。召に隨ひ盛久は。鎌倉殿に參りけり鎌倉殿に參りけり

と後見座にくつろぎて【物着】、ワキ下に居る、

盛久「おゝ御經の文は全くあらたかなもので、劒が段々に折れてゐる。今も末世澆季ではなかつたのだ。あゝありがたい御經だ」（と御經を拜す）

やがて頼朝公はこの事をお聞きになつて「すぐ御前へ參るやうに」と、度々お使が來たので、盛久はお召に隨つて、鎌倉將軍頼朝公の御前に參つた。

○末世—佛法の行はれない衰へた世。

○この由聞し召し—頼朝が

○鎌倉殿—鎌倉の將軍頼朝

【間】

【間】　狂言土屋の從者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「さてもさても奇特なる事かな。唯今盛久の樣體、目を驚かしたる御事にて候。假初に御覽ぜらるる御方は、太刀取の不覺のやうに思し召し候へども、盛久は大切の囚人故に、人を擇み、唯今の御方に太刀取を仰せつけらるる間。なかなか左樣の事にてはなく候。盛久は日頃觀世音の御信仰あり、毎日觀音經を御讀誦なされ候間、觀世音の御計らひかと存じ候。まづこの由を申さう（ワキの前に出で片膝つきて）いかに申し候。唯今盛久の有樣。なんぼう奇特なる事にて候。これは正しく佛神の御計らひと存じ候が。何と思し召し候ぞ

○不覺—油斷して失敗すること。

○なんぼう　いかほど。非常に。

ワキ「げにげに盛久の御事。なんぼう奇特なる事にて候。盛久はこの年月清水の觀世音を信じ給ひ、とりわけこの程御經懈らず讀誦し給ふにより。かやうの子細と存じ候。又盛久に烏帽子直垂を召されて候はば。御前へ御參りあれと申し候へ

狂言「畏つて候。（名乘座に立ちて）さてもさてもめでたき事かな。急いでこの由盛久へ申さばやと存ずる、

【六】

○君この曉—長門本に據れば、頼朝の妻政子が靈夢を見たのである。

○不取正覺—わが誓願が成就しなければ正覺(佛果)を取らずとの意。彌陀四十八願每項の終にこの語があり千手經にも「若諸衆生誦二持大悲神呪一、墮二三惡道一者、我誓不レ成二正覺一」

○過去久遠の—遙かに遠い昔から衆生を惠み給ふ觀音の慈悲をいふ。

(シテの方に向き)いかに盛久へ申し候。烏帽子直垂を召され候はば。とう／＼御前へ御參り候へや

といひて引く。

シテ經と數珠を後見に渡し掛絡を脱ぎ、侍烏帽子・掛直垂を着け小刀をさして常座に出づ。

【六】

ワキ いかに盛久御前にて候(シテ下に居て正面に辭儀)。君この曉不思議なる御靈夢の御告あり。盛久も若し夢や見けるとの御事にて候

シテ 何をか隱し申すべき。今夜不思議の靈夢を蒙りて候

ワキ さらばその靈夢のやうを。御前にて眞直に申し上げられ候へ

シテ 畏つて候

シテクリ それ不取正覺の御誓ひ。今以て始めならず(と謠ひながら眞中に行きて下に居り)

地『過去久遠の大悲の光いづく不到の所ならん

シテサシ『然るにわれこの光陰を頼み

【六】

舞臺は頼朝の館。盛久裝束を改めて出る。

土屋「盛久、將軍の御前ですぞ」

盛久畏る。

土屋「わが君には今曉不思議なあらたかな夢のお告があつたが、もしや盛久も夢を見ないかとの仰せです」

盛久「何を隱しませう。今夜不思議なあらたかな夢のお告を蒙りました」

土屋「それでは、そのあらたかな夢のお告を、君の御前で、すつかり申し上げなさい」

盛久「畏りました。——」

一體、佛が『衆生の願望を達せさすことが出來なければ、自分は正覺を得まい』と仰せられた御誓約は、今に始まつた事ではなく、遙かに遠い大昔から、大慈大悲の御光の到らぬ隈はないのであります。——

地「日夜朝暮に懈らず。かの御經を修讀せしに。とりわきこの時節刑戮に近き身を思つて。片時懈る事もなく

シテ『初夜より後夜の。一點まで

地『蕭然として坐したりしに

（居クセ）

地クセ「六窓未だ明けざるに。耿然たる一天虛明なる内に思はずも。八旬にたけ給ひぬと見えさせ給ふ老僧の。香染の袈裟を懸け水晶の數珠を爪ぐり。鳩の杖にすがりつつ。妙聞ただしき御聲にて。われは洛陽東山の。清水のあたりより汝が爲に來りたり。もとより大慈大悲の。誓願などか空しからん。ただ。一音なりとても。われを念ずる時節の王難の災は遁るべし

シテ『況んや汝年月

さて、私は一寸の時をも惜しんで、日夜朝暮の區別なく、絶えず觀音經を讀誦しまして、殊にこの頃はやがて斬罪に處せられるべき身上であることを思つて、少しも懈らず、日の暮から夜の明け方まで、靜かに寂しく坐つてゐました。――すると、まだ夜の明けないうちに、天の一方が明るくなつて、意外にも八十を超えたと思はれる老僧が、香染の袈裟を懸け、水晶の數珠を爪ぐり、鳩の杖をついて、お現れになつて、妙なる御聲で、『自分は京都東山の清水の方から、お前を救ふ爲に來たのである。もとより大慈大悲の御利益にうそ僞りのあらう筈はない、たゞ一聲でも自分を祈る時には、王命に背いた爲の苦難をも遁れるのである。まして、お前は永い年月、心から深く信仰して、その信心は人に勝れてゐたのである。だから安心するがよい、自分がお前の命に代つてやらう』と仰しやつて、夢が覺めました。私は貴いありがたいことに思ひ、この上もなく歡ばしく思つたのです」

○初夜より後夜の一點―晝夜を六時に分け、午後八時頃を初夜、午前四時頃を後夜とす。一點はその一時を五つに分けた第一點。
○蕭然―靜かに寂しい貌。
○六窓―眼耳鼻舌身意の六根を喩へた語で、これを明け六つ（午前六時）にいひかけた。
○耿然―あきらかな貌。
○八旬―八十。
○香染―丁字の濃い煎じ汁で染めた、薄紅に黄を帶びた色。
○鳩の杖―頭部に鳩の形を刻んだ、老人の用ゐる杖。
○妙聞―妙音の誤りか。
○洛陽―京都。支那の都の名に擬へたのである。

○發心―佛法に歸依する心

【七】

○種は千代ぞと―花を受けたる袂かな―まで齊諦。千代ぞと聞くを菊にいひかけた。菊の酒は彭祖の故事から出ためでたい酒。

地「多年の誠を抽んでて、發心人に越えたり。心安く思ふべしわれ汝が。命に代るべしと宣ひて夢は卽ち覺めにけり。盛久貴く、思ひて歡喜の心限りなし

【七】

地ロンギ「賴朝これを聞し召し。この曉の御夢想も。同じ告ぞとあらたなる御信感は限りなし

シテ「その時盛久は。夢の覺めたる心地して。感淚をとめかね御前を罷り立ちければ（と立ちしをりながら常座へ行く）

地「いかに盛久暫しとて。御簾を上げて召さるれば（シテ元の座に歸る）

シテ『せん方もなき盛久が（正面へ辭儀）

地「命は千秋萬歲の春を祝ふぞと。御盃を下さるれば（ワキ立ちてシテに酌す）

シテ「種は千代ぞと菊の酒（と酌を受け）

【七】

賴朝公にこれをお聞きになつて、この曉の御夢想もこれと同じであると、そのあらたかなことに深く感動せられたその時、盛久は夢の覺めた心地がして、感淚に咽びながら、御前を退出すると、賴朝公は「これ盛久、暫く待て」と、御簾を上げてお召しになつた。

盛久は致し方なく立ち歸ると「命が千年萬年もあるやうに祝ふぞ」と仰しやつて、お盃を賜はつたので、

盛久「千代にめでたい菊の酒、受ける袂も

○譜代の侍―先祖代々仕へて來た武士。
○亂舞―當時流行してゐた俗舞。
○小松殿―平重盛。
○北山―京都北郊の山。
○遊路―遊山。
○一さし―一曲。
○去り難き―斷りがたい。
○治まり靡く―以下「唐土が原もこの所」まで、今樣。
○人の國―外國、支那。
○唐土が原―相摸國片瀨川の東の原。夫木抄忠房の歌に「名にし負はば虎や臥すらん東野にありといふなる唐土が原」

地「花を受けたる。袂かな

ワキ「いかに盛久。盛久は平家譜代の侍武略の達者。殊には亂舞堪能の由聞し召し及ばれたり。一年小松殿。北山にて茸狩の遊路の御酒宴に於て。主馬の盛久一曲一奏の事。關東までも隱れなし。殊更これは悦びの折なれば。ただ一さしとの御所望なり急いで仕り候へ

シテ「ありがたしありがたし。得がたきは時。去り難きは貴命なり。盛久かかる時節に逢ふ事。世以て例あるべからず。治まり靡く時なれや。一天四海の内のみか。人の國まで日の本の。唐土が原もこの所（と立ち）

〔男舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

地「キリ」酒宴半ばの春の興。酒宴半ばの春の興。

花々し』

と小謡を謡つて盃をさゝげる。

土屋「盛久、盛久は平家累代の侍で、武略に秀れてゐる上に、殊に舞が大層上手だと、わが君の御耳に入つてゐるのだ。先年小松重盛殿が北山で茸狩の遊びをせられた時の御酒盛に、主馬盛久が一曲を奏した事は、關東まで評判になつてゐるのだ。特に今は悦ばしい時なのだから、是非一さし舞ふやうにと御所望遊ばすのだ。すぐ舞はれるやうに」

盛久「ありがたうございます。諺にも『再び得難いのは時間であり、辭退し難いのは長上の命令である』と申します。私のやうにこのやうな仕合に逢ふことは、世間に例のないことでせう。(では、一さし舞ひませう)――

『天下泰平うち治まつて、日本ばかりか、唐土といふ、名のつく原も、わが國の內』

といふ意の今樣を謡ひ、

〔男舞〕

と舞ひ、

盛久「――

「春たけなはの酒の宴、のどかな日影限

曇らぬ日影のどかにて。君を祝ふ千秋の鶴が岡の。松の葉の散り。失せずして眞拆のかづら

シテ「長居は恐れあり（ト辭儀）

地「長居は恐れありと罷り申し仕り（ト立ち）。退出しける盛久が、心の中ぞゆゆしき心の中ぞゆゆしき

と常座にて留拍子を踏む。

もなく、君の壽命を祝いて、その名も千代の鶴ヶ岡、岡に生える松の葉も、長く繁つて散りはせぬ」[illegible]盛久、餘り長居をしては恐れ入りますから—とお暇をなして、退出した盛久の心遣ひはさすが大したものである。

○鶴岡—鎌倉市の下、八幡宮の所在地と千秋の鶴、岡の松といひかけた。○松の葉の—古今集序「松の葉の散り失せずしてまさきの葛長く傳はり」を引き長居にいひかけた。○罷り申し—暇乞ひ。○ゆゆしき—雄々しき。えらいものだといふ意。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】（寶）これは鎌倉殿の御内に土屋の何某にて候。さても主馬の判官盛久は、丹後の國成合寺に忍んで御座候を、よき案内者を以て生捕申し、唯今關東へ御供仕り候。同喜ハ略寶ニ同ジ。……いかに…… 【四】……待ち設けたる事なれば左には金泥の御經…… 【六】……これ不取正覺の……いづく不到の所ならん（寶ナシ）命も今を限りなれば（下懸ナシ）これぞこの……

古諸本（光悦本）

【一】光ナシ。【二】（光）是は鎌倉殿の御内につちやのなにがしにて候。扨も平家の侍主馬の判官もりひさは、丹後國成相寺に忍びゐて御座候を案内者をもつてさがし出し。某が手にいけとり申て候。此度關東へくだし申候所に。盛久は大事の囚人にて候程に、急ぎ誅し申せとの御事にて候間。痛はしながら此由を盛久に申はやと存候）……「夢中に道あつて……かくてながらへ諸人に（光ナシ）面をさらさんより（光もくちおしく候へは）あつぱれ……あら痛はしや……仰せ候（光ナシ）いかに（光盛久へ）申し候……土屋殿と候や（光ナシ）此方へ……（光さん候）御下向の由を披露申（光いたし）して候へば（光盛久は大事の囚人にて御座候間）急ぎ誅し申せとの

御事にて候（光御いたはしなから御最後の。御用意あらふするにて候）シテ「（光委細承候）唯今も獨言に申しし如くかくてながらへ（光ナシ）諸人に面をさらさんよりも（光もくちおしく候へは）あつぱれ……さてははや（光ナシ）叶ひて候よ（光ナシ）…… シテ「いや御最期は（光ナシ）この曉か…… シテ「さては暫くの時刻にて候よ（光ナシ）さてもこの程（光ナシ）…… 愚かなり（光命なからへ候はむには。なとかこの御恩を報せさらん）又亡からん跡（光むなしくなるならは）一遍の……御芳志たるべし（光父）…… 毎日かの御經を（光彼御經を毎日毎夜）……さりながら今日は……御暇を賜はり候へ（光殊更今は最後にて候へは）かの御經を…… ワキ「それこそ…… 土牢（光中々の事御心しつかに御讀誦候へ。某）もこれにて聽聞申さうずるにて候（光候へし）

【三】シテ「げによく御聽聞候ものかな（光ナシ）…… シテ「げに頼もしや……この文（光經）を誦する…… 地上歌「昔在靈山の（光ノヽ）

【四】シテ「あら不思議や（光有難や候）少し……あらたなる（光に）靈夢を蒙りて候はいかに（光荒有難の御事や） ワキ「既に八聲の……はやはや御出で候へとよ（光いそいて出させ給ふへし）…… ワキ「武士前後を……これぞ（光も）別れの……

【五】ワキ「いやいや……御經の文（光 シテ「或遭王難苦）…… 地「經文あらたに……鎌倉殿に參りけり（光ワキ「いかに誰か有。盛久の御事餘に奇特なる御事にて候程に。急烏帽子直垂にて。御前へ御參りあれとの御事にて有ぞ。其由を申候へ）

【六】ワキ「いかに盛久（光御參候へ）御前にて候（元シテ「畏て候。ワキ「いかに申候仰くださるゝ事の候）昔（光ナシ）この曉……御（光ナシ）告あり盛久も若し（光もし盛久も）…… シテ「何をか隱し申すべき（光さん候）今夜不思議の（光御）靈夢…… ワキ「（光あらきとくや候）さらばその靈夢（光やかて御夢想の）…… 眞直に申し上けられ（光御物語）候へ…… シテクセ「それ不取正覺…… 地「過去久遠の……不到の所ならん（光ナシ）…… 地「日夜朝暮……御經を修（光誦）讀せしに…… 地クセ「六窓未だ……王難の災は遁る（す）べし

楊貴妃

観（寶春剛喜）

解説

【能柄】 三番目　一段劇能

【人物】 **ワキ** 方士、**狂言** 所の者、**シテ** 楊貴妃

【所】 常世國　蓬萊宮

【時】 唐玄宗（八月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謡目錄ともに金春禪竹の作（作者註文には「作者有説」と註す）とす。親長卿記に長享二年二月二十三日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月二十六日註釋のことを記す。

【梗概】 唐の玄宗皇帝は寵姫楊貴妃を馬嵬が原で殺されたので、深く歎いて、方士に貴妃の魂魄のありかを尋ねさせた。方士は天上地下を尋ね歩いた後、常世の國蓬萊宮に渡つて、太眞殿に貴妃のゐることを聞き知つた。早速勅使として來た旨を申し入れると、貴妃は美しい姿に寂しさを帶び、玉の簾を上げて、方士に會つた。方士が貴妃に逢つた證に形見の品を戴きたいといふと、貴妃は頭に挿してゐた玉の釵を與へたが、方士は、これは世に類のある品だから、帝と

貴妃と人知れず契られたお言葉があるならば、それを承りたいといふ。貴妃は七夕の夜比翼連理の契りを交はしたとうち明ける。やがて方士が歸らうとすると、その夜の舞、霓裳羽衣の曲を舞つて見せた。かくて方士はかの釵を携へて都に歸り、貴妃は涙ながら宮の中に留まつた。

【出典】白樂天の長恨歌に據つたもので、到る所にその文を引用してゐるから、その全文を掲げると、

漢皇重レ色思二傾國一、御宇多年求不レ得、楊家有レ女初長成、養在二深閨一人未レ識、天生麗質難二自棄一、一朝選在二君王側一、回レ眸一笑百媚生、六宮粉黛無二顏色一、春寒賜レ浴華清池、溫泉水滑洗二凝脂一、侍兒扶起嬌無レ力、始是新承二恩澤一時、雲鬢花顏金步搖、芙蓉帳暖度二春宵一、春宵苦レ短日高起、從レ此君王不二早朝一、承レ歡侍レ宴無二閑暇一、春從二春遊一夜專レ夜、後宮佳麗三千人、三千寵愛在二一身一、金屋粧成嬌侍レ夜、玉樓宴罷醉和レ春、姊妹弟兄皆列レ土、可レ憐光彩生二門戶一、遂令二天下父母心、不レ重レ生レ男重レ生レ女、驪宮高處入二青雲一、仙樂風飄處處聞、緩歌慢舞凝二絲竹一、盡日君王看不レ足、漁陽鼙鼓動レ地來、驚破霓裳羽衣曲、九重城闕煙塵生、千乘萬騎西南行、翠華搖搖行復止、西出二都門一百餘里、六軍不レ發無二奈何一、宛轉蛾眉馬前死、花鈿委レ地無二人收一、翠翹金雀玉搔頭、君王掩レ面救不レ得、回看血淚相和流、黃埃散漫風蕭索、雲棧縈紆登二劍閣一、峨嵋山下少二人行一、旌旗無レ光日色薄、蜀江水碧蜀山青、聖主朝朝暮暮情、行宮見レ月傷レ心色、夜雨聞レ鈴腸斷聲、天旋地轉廻二龍馭一、到レ此躊躇不レ能レ去、馬嵬坡下泥土中、不レ見二玉顏一空死處、君臣相顧盡霑レ衣、東望二都門一信レ馬歸、歸來池苑皆依レ舊、太液芙蓉未央柳、芙蓉如レ面柳如レ眉、對レ此如何不二淚垂一、春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時、西宮南苑多二秋草一、宮葉滿レ階紅不レ掃、梨園弟子白髮新、椒房阿監青娥老、夕殿螢飛思悄然、孤燈挑盡未レ成レ眠、遲遲鐘鼓初長夜、耿耿星河欲レ曙天、鴛鴦瓦冷霜華重、翡翠衾寒誰與共、悠悠生死別經レ年、魂魄不二曾來入一レ夢、臨邛道士鴻都客、能以二精誠一致二魂魄一、爲レ感二君王展轉思一、遂教二方士殷勤覓一、排レ空馭レ氣奔如レ電、升レ天入レ地求レ之遍、上窮二碧落一下黃泉、兩處茫茫皆不レ見、忽聞海上有二仙山一、山在二虛無縹緲間一、樓閣玲瓏五雲起。其中綽約多二仙子一、中有二一人一字二太眞一、雪膚花貌參差是、金闕西廂叩二玉扃一、轉教二小玉報一雙成一、聞道漢家天子使、九華帳裏夢魂驚、攬レ衣推レ枕起徘徊、珠箔銀屛邐迤開、雲鬢半偏新睡覺、花冠不レ整下レ堂來、風吹二仙袂一飄颻擧、猶似二霓裳羽衣舞一、玉容寂寞淚闌干、梨花一枝春帶レ雨、含レ情凝レ睇謝二君王一、一別音容兩渺茫、昭陽殿裏恩愛絕、蓬萊宮中日月長、回レ頭下望二人寰一處、不レ見二長安一見二塵霧一、唯將二舊物一表二深情一、鈿合金釵寄將去、釵留二一股一合一扇、釵擘二黃金一合分レ鈿、但教二心似一金鈿堅一、天上人間會相見、臨レ別殷勤重寄レ詞。詞中有レ誓兩心知、七月七日長生殿、夜半無レ人私語時、在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願爲二連

理枝↓天長地久有↓時盡、此恨綿綿無↓絶期↓。

【概評】和漢の傳説が謠曲によつて一般に流布することとなつたのは、その原形が先進文藝にあると否とに拘らず、謠曲がこれを脚色することに巧みであつたからである。勿論謠曲が廣く行はれたのは、多數の觀客を對象とした戯曲であつたからであるが、戯曲として一般に歡迎せられたのは、その脚色行文が秀れてゐるからである。ところで、ある題材を一篇の戯曲に脚色する場合、作者の創作力に任せて、自由な構想を廻らせば、戯曲として完全な形をとり易いが、先進文藝を尊重し過ぎると、その原形に捉はれて、戯曲としての形式を害ふことが少くない。現に平家物語を題材として劇能に脚色した曲には、この弊に陷つたものが二三あるのである。本曲の如き著名な文藝、極めて秀れた名文を題材とした場合には、殊にかうした弊に陷る恐れが多いのである。然るに、本曲の實際を見ると、原文を自由自在に驅使して平易な整頓した戯曲に作り上げてゐるのである。まづこゝに作者の非凡な手腕を認めなければならないと思ふ。それからまた楊貴妃の取扱ひ方にしても、濃艶にして氣品を保ち、華麗にして哀愁を帶び、よく魄靈楊貴妃の風格を傳へてゐると思ふ。

【一】

○わがまだ知らぬ―源氏物語夕顏卷の歌「古もかくやは人のまどひけむわがまだ知らぬ東雲の道」を借り、東雲の道を仙界の道の意にとり做した。

○玄宗皇帝―唐第六代の天子。楊貴妃を寵して國政を忘れ、安祿山に國を奪はれた。

○方士―仙術を行ふ者、道士。長恨歌の註に「道士姓楊名通幽」

○色を重んじ―女色を好み

【一】

後見、宮の作物に引廻をかけて大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ方士、沓附厚板・側次・白大口・腰帶・扇の裝束にて出で、名乘座に立ち大小前の方に向き、

ワキ次第「わがまだ知らぬ東雲の。わがまだ知らぬ東雲の。道をいづくと尋ねん

地取に正面に向き、

ワキ「これは唐土玄宗皇帝に仕へ申す方士にて候。さてもわが君政正しくまします中に。色を重んじ艶を專らとし給ふにより。容色無雙の美

【一】

舞臺は初め支那で、ワキ方士登場。

方士「自分のまだ見たことのない仙界へ、どこだか道を尋ねて行かう」

三次第に旅の目的を述べ、

方士「私は支那の玄宗皇帝にお仕へしてゐる方士です。さてわが君には、御立派な政治を行はせられるのであるが、また一面美しい女がお好きなので、天下無雙の美人をわがものと遊ばしたのです。その

人を得給ふ。楊家の女たるによつてその名を楊貴妃と號す。然れどもさる子細あつて。馬嵬が原にて失ひ申して候。餘りに帝歎かせ給ひ。急ぎ魂魄の在所を尋ねて參れとの宣旨に任せ。上碧落下黄泉まで尋ね申せども。更に魂魄の在家を知らず候。ここに未だ蓬萊宮に至らず候程に。この度蓬萊宮にと急ぎ候

ワキ道行「尋ね行く。幻もがなつてにても。魂のありかはそことしも。波路を分けて行く舟のほのかに見えし島山の。草の假寢の枕ゆふ。常世の國に着きにけり常世の國に着きにけり

草の假寢の枕ゆふ」と右の方に向きて二三足出でまたもとへ歸り常世の國に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。蓬萊宮に着きて候。この所にて委しく尋ねばやと存じ候

○楊家の女—楊玄琰の女。○楊貴妃—楊は姓、字は太眞、貴妃は官名。安祿山の叛に馬嵬が原で殺された。年三十八。○馬嵬が原—唐の都長安の西、陝西省興平縣にあり、玄宗が安祿山の叛に遭つて遁れ、貴妃が軍士に殺された所。○魂魄—淮南子の註に「魄人陰神、魂人陽神」○上碧落下黄泉—碧落は天上、黄泉は地下。○蓬萊宮—仙郷と想像せられた所。山海經に「蓬萊山在二海中一、上有二仙人之宮室一、皆以二金玉一爲レ之、鳥獸盡白望レ之如レ雲、在二渤海中一」○尋ね行く幻もがなつてにても—源氏物語桐壺卷の歌下句は「魂のありかをそこと知るべく」。「幻」は方士、「つて」は他人の便り。原歌は長恨歌に據つて詠んだものであるのを逆に引いた。○波路を—そこととしも無くといひかけた。○ほのかに—舟の帆といひかけた。○草の假寢の枕ゆふ—草を結んで枕とする意。枕の緣語床を常世にいひかけた。○常世の國—永久變らない國。仙界。

女は楊といふ家の娘なので、その名を楊貴妃と申します。ところが、ある事情があつて、これを馬嵬が原で殺してしまつたのです。その爲、わが君は非常にお歎きになつて、早くその魂魄のありかを探して來いと仰せつけられたので、上は天上界から下は地下まで、殘らず尋ね歩いたのですが、魂魄のありかが全く分りません。たゞまだ蓬萊宮へは探しに行かないので、今度蓬萊宮へ急いで出かけるのです」

と見物人に自己紹介をして、事件の概略を述べ、

方士「歌に『尋ねて行つてくれる方士があるとよいのだが、せめて人の便りにでも、戀しい人の魂がどこにあるか知りたいものだ』と詠まれた通りに、實際に魂魄のありかを尋ねる爲に、どこと限りも知れない海を渡つて、辛い船路の旅を重ねてゐるうちに、向ふの方にかすかに島山が見えて、やがて常世國に着いた」

といつてゐる間に、目的地に着いた態で、舞臺よ常世國蓬萊島となる。

方士「旅を急いだので、もはや蓬萊島に着いた。この所で委しく樣子を尋ねませう」

といつて、狂言所の者から楊貴妃のありかを尋ね

○盤々—まわり廻る貌。
○邊際—はてし。限り。
○巍々—高く大きい貌。

橋懸の方に向き、

ワキ「所の人の渡り候か

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「この所に於て楊貴妃と申す御方は御座なく候か

狂言「さん候この邊に左様の御方は御座なく候が。こゝに玉妃と申す御方の御座候が。明暮漢朝戀しや來し方ゆかしやと御申し候が。この御方にてなく候か

ワキ「さあらば玉妃とやらんを教へて給はり候へ

狂言「さん候あれに見えたる森の内に。太眞殿と打つたる額の候。その内を御尋ね候へ

ワキ「懇に御教へ祝着申して候。さあらば立ち越え心靜かに尋ねうずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。ワキ舞臺の眞中に出で、

ワキ「ありし教へに随つて蓬萊宮に來て見れば。宮殿盤々として更に邊際もなく。莊嚴巍々とし

方士「今の教へに随つて蓬萊宮に來て見ると、宮殿はまわり廻つて、まるではてしもない程廣く、御殿は堂々と飾り立てら

てさながら七寶をちりばめたり。漢宮萬里の粧ひ。長生驪山の有樣も。これには更になぞらふべからず。あら美しの所やな。（作物に向きて）又教への如く宮中を見れば。太眞殿と額の打たれたる宮あり。まづこの所に徘徊し。事の由をも窺はばやと存じ候

【三】　といひて脇座へ行き下に居る。

シテ楊貴妃、面若女・天冠・鬘・鬘帯・襟白・箔附摺箔・唐織壺折・緋大口・腰帯・扇の裝束にて作物の中に床几にかゝり居り、作物の引廻かけたるまゝにて、

シテ〽昔は驪山の春の園に。ともに眺めし花の色。移れば變る習ひとて。今は蓬萊の秋の洞に。ひとり眺むる月影も。濡るる顔なる袂かな。あら戀しの古やな

ワキ立ちて作物に向ひ、

ワキ〽唐の天子の勅の使。方士これまで參りたり。玉妃は内にましますか

○七寶—無量壽經によれば金・銀・瑠璃・珊瑚・琥珀・硨磲・瑪瑙。
○漢宮萬里の粧ひ—支那宮殿の極めて廣大なこと。
○長生驪山—長生殿、驪山宮。驪山宮は唐太宗が長山の西驪山に建てた離宮で、初め温泉宮といひ、玄宗の時華清宮と改めた。長生殿はその宮殿の一。
○太眞殿—太眞は楊貴妃の字名。陳鴻の長恨歌傳に「東極二大海一跨二蓬壺一見二最高仙山一多二樓闕一西廂下有二洞戸一東向闔二其門一署曰二玉妃太眞院一」

【三】
○濡るる顔なる—古今集伊勢の歌に「逢ひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへ濡るゝ顔なる」
○玉妃—玉の如く美しい妃楊貴妃を指す。

れて、宛もすべてが七寶でちりばめたやうだ。支那の宮殿の壯麗の粧、かの長生殿や驪山宮も、これと並べては、比へものにならない。實に美しい所だ。（宮殿に近づいて）又かうして先程教へてくれた通りに宮殿へ入つて見ると、太眞殿といふ額のかゝつた宮殿がある。とにかく、この所にうろついて、樣子を探りませう」

（脇座に行つて樣子を見てゐる。）

【三】

舞臺の作物太眞殿の中にシテ楊貴妃がゐて、

貴妃「昔はかの驪山宮で、玄宗皇帝と御一緒に美しい春の花を眺め暮らしてゐたものが、今は『移り變るのが世上の習ひ』といふ諺の通り、この蓬萊宮でひとり淋しく秋の月を眺めてゐると、思はず涙に袂が濡れて、月影までが一緒に泣いてくれるやうだ。あゝ昔が戀しい」

（獨言をいつてゐる。方士はこれを聞いて太眞殿の前へ進み出て、）

方士「唐の天子の勅使として、方士の私がこゝまで參りました。貴妃はこの御殿の内にお出でになりませうか」

○九華の帳―花模様を刺繡した垂布を幾枚も重ねて垂れた戸張。寢室に用ゐる。

○雲の鬢づら―雲のやうに髮の房々とした美しい鬢。

○梨花一枝―美人の愁はしげな姿を喩へた語。

○太液の芙蓉―太液は漢武帝の造つた大池。芙蓉は蓮の花。

○未央―漢高帝の建てた宮殿。

○六宮―奥御殿の總稱。周禮に「天子后立六宮」鄭注に「皇后正寢一、燕寢五、是爲六宮也、夫人以下分居焉」

【三】

○後宮―后妃の住み給ふ所。こゝでは楊貴妃をさす。

シテ「なに唐帝の使とは。何しにここに來れるぞと。九華の帳をおし除けて。玉の簾をかかげつつ（引廻を下す）

ワキ『立ち出で給ふ御姿（とシテに辭儀）

シテ『雲の鬢づら

ワキ「花の顔ばせ

二人「寂寞たる御眼の内に。涙を浮かめさせ給へば

地上歌「梨花一枝。雨を帯びたる粧ひの。雨を帯びたる粧ひの。太液の。芙蓉の紅未央の柳の綠もこれにはいかで優るべき。げにや六宮の粉黛の顔色のなきも。理や顔色のなきも理や

【三】

ワキ「いかに申し上げ候。さても後宮世にましまし時だにも。朝政は怠り給ひぬ。況んやかくならせ給ひて後。ただひたすらの御歎きに。今

貴妃「何といふ、唐帝の勅使といふのか、どうしてこゝへ來たのか」と、幾枚も重ねた、花模様の刺繡なした戸張をおしのけ、玉で飾つた簾を上へ引きあげて、お出ましになつたそのお姿。

鬢は雲のやうに美しい。

顔は花のやうに美しい。

そして淋しさうなお眼に、涙を浮かべていらつしやる御様子。

たとへば、梨の花が雨に濡れたやうな風情で、そのお顔の美しさに比べては、かの太液池の蓮の花の紅も、未央宮の柳の綠の美しさに比べては、そのお眉も、これにはとても及ばないのである。唐の御所の奥御殿に數多居られる后妃夫人、その美しく化粧したお姿も、これと肩を並べられないのは尤もなことである。

【三】

方士「申し上げます。あなた様が人の世においでになつた時でさへ、わが君には御政治をおなまけになつたのでございます。まして、あなた様のおかくれになつた後は、明けても暮れても、たゞお歎き

○訪ふにつらさのまさり草―續古今集藤原定雅の歌「吹く風もとふにつらさのまさるかな慰めかぬる秋の山里」を借りた。まさり草は菊の異名。
○かれがれ―離れ〳〵。絶え〳〵。草の枯れといひかけた。
○舊里―故鄕、この世。
○魂を消す―悲しみの甚しいこと。
【四】

は御命も危く見えさせ給ひて候。然れば宣旨に任せこれまで尋ね參り。御姿を見奉る事。ただこれ君の御志。淺からざりし故と思へば。いよいよ御痛はしうこそ候へ（と辭儀）

シテ「げにげに汝が申す如く。今はかひなき身の露の。あるにもあらぬ魂のありかを。これまで尋ね給ふ事。御情には似たれども。『訪ふにつらさのまさり草。かれがれならばなかなかの。便りの風は恨めしや。又今更の戀慕の涙。舊里を思ふ魂を消す（としをる）

【四】

ワキ『さてしもあるべき事ならねば。急ぎ歸りて奏聞せん。』さりながら御形見の物をたび給へ

シテ後見より天冠の立物を受取りて左手に持ち、

シテ「これこそありし形見よとて（立物を見）。玉の釵取り出でて。『方士に與へたびければ（と立物をさし

になるばかりで、今はお命も危いやうに拜せられるのでございます。それで、わが君の仰せを蒙つて、こゝまでお尋ねして參り、お姿を拜しますにつけても、これも全くわが君の御寵愛の深い爲だと思ひますと、愈々お痛はしう存ぜられるのでございます」

貴妃「なる程、そなたのいふ通り、今は人の世から亡くなつた、はかない露のやうな、見る影もないこの魂魄のありかを、こゝまでお尋ね戴くのは、いかにもお情深いやうではあるが、お訪ね戴くにつけて、つらさ悲しさが增すばかりで、ほんの絶え〴〵にお訪ね戴くほとならば、却つてさうしたお便りを恨めしく思ふのです。今更戀慕の涙に堪へられず、この世の事を思ふと、實に悲しくて、氣も失ひさうです」

【四】

このやうな懷舊に時が過ぎ去つた心で、

方士「かうばかりもして居られませんから、急いで國に歸つて奏上致しませう。それについて、お形見の品を戴きたうございます」

貴妃「これが昔の形見です」

といつて、玉の釵を取り出して、方士

出す）

ワキ進みて立物を受取り、二三足下り下に居て、

ワキ「いやとよこれは世の中に。たぐひあるべき物なれば。いかでか信じ給ふべき。御身と君と人知れず。契り給ひし言の葉あらば。それをしるしに申すべし（と辭儀）

シテ「げにげにこれも理なり。思ひぞ出づるわれもまた。その初秋の七日の夜。二星に誓ひし言の葉にも

地「天に在らば願はくは。比翼の鳥とならん。地に在らば願はくは連理の枝とならんと誓ひしことを。密かに傳へよや。私語なれども今洩れ初むる涙かな（としをる）

地上歌「されども世の中の。されども世の中の。流轉生死の習ひとて。その身は馬嵬に留まり魂は。仙宮に至りつつ（作物を出て）。比翼も友を戀ひ獨り

に與へられると、

方士「いえ〳〵、これは世間に類のあるやうなお品でございますから、これではわが君の御信用遊ばす筈がございません。あなた樣とわが君と、人知れずお話し合ひになりましたお言葉がございましたら、それを證據に致しませう」

貴妃「なる程、これも尤もなことです。思ひ出せば、七月七日の夜、牽牛・織女の二星が相逢ふにつけて、『天へ上つたならば、どうかいつも翼をならべて離れない鳥とならう。又もし地にゐて木となつたならば、どうかいつも枝を竝べて離れないでゐよう』とお約束したのです。これを密かにわが君へお傳へなさい。これは人に知らさない睦言だけれど、今初めていふのです。あゝ思へば、昔が戀しい。あの時、このやうに堅いお約束をしたものの、浮世は生死の極まりのない無常なもので、私は死骸は馬嵬が原に留まつて、魂はこの仙宮へ來てしまつたのです。そして比翼の鳥の一である私は、友を戀ひ慕つて淋しく獨寢をしてゐるのです。連

○しるし—證據。

○初秋の七日—七月七日の夜、牽牛・織女の二星が一年に一夜相逢ふのをいふ。

○比翼の鳥—爾雅に「南方有二比翼鳥一焉、不レ比不レ飛、其名謂二之鶼鶼一」とあるが、特種の鳥を指していつたのではない。

○洩れ初むる—私語の洩れるを涙の洩れるにいひかけた。

○流轉生死—迷苦の世界に生まれ變り死に變ること。

○かたしき—片袖を下に敷いて獨寢すること。

【五】

○伴ひ申し—貴妃を伴つて。舟の艫にいひかけた。

○三重の帶—戀に痩せ細つて、常ならば一重に結ぶ帶が三重にも結べること。萬葉集卷十三に「二つなき戀をしすれば常の帶三重にゆふべくわが身はなりぬ」

○廻り逢はん—帶の緣語、

○そのかざしにて—釵を舞のかざしにいひかけた。

○さす袖の—釵を挿すを舞のさす手にいひかけた。

○そよや—長恨歌に驚破とある字の古訓。

○霓裳羽衣の曲—書言故事龍神錄に「八月望日、唐明皇與二申天師一遊二月宮一、寒氣逼レ人霜露霑レ衣、過二一大門一在二玉光中一見二一大府一、榜曰二廣寒淸虛之府一、少前見二素娥十餘人一、皓衣乘二白鸞一、笑二舞於廣庭大桂樹下一、樂音淸麗、上皇歸製二霓裳羽衣曲一」

翅をかたしき。連理も枝朽ちて。忽ち色を變ずとも。同じ心の行方ならば。終の逢瀬を賴むぞと語り給へや

【五】

ワキロンギ「さらばといひて出舟の。伴ひ申し歸ること。思はば嬉しさのなほ如何ならんその心

シテ「われは又。なになかなかに三重の帶。廻り逢はんも知らぬ身に。よしさらば暫し待て。ありし夜遊をなすべし（と常座へ行き）

地『げにや驪山の宮の內。月の夜遊の羽衣の曲

シテ『そのかざしにて舞ひしとて

ワキ立物をシテに渡して少し下りて下に居り、

地『又取りかざし

シテ『さす袖の

地次第『そよや霓裳羽衣の曲。そよや霓裳羽衣の曲そぞろに、濡るる袂かな

理の枝もその一つが朽ちて、忽ちに色が變つてしまつたのです。けれども、もし昔と變らない御心であつたならば、終にはお目にかゝる時の來るのを、心賴みにお待ちしてゐますと、から申し上げて下さい」

【五】

方士「それではお暇申し上げますが、もしあなた樣を御一緒にお連れして歸ることが出來るのであつたならば、どんなに嬉しいことでございませう」

貴妃「私はわが君戀しさ懷しさに、からだも痩せ細つたのだが、今別れたならば、またいつ逢ふことか分らないのです。だから、暫くお待ちなさい、昔の夜遊の樣をして見せませう。

さう〳〵、驪山宮で、月の夜の遊宴に、その釵を頭のかざしにて、羽衣の曲を舞つたのであつた」

と、先程方士に與へた玉の釵をまた取り返して頭に挿し、

貴妃「おゝあの霓裳羽衣の曲、思ひ出せば、思はず知らず涙に袂が濡れることだ」

地取にシテは後見座にくつろぎて【物着】ワキは脇座に歸りて下に居る。

シテ天冠に立物をつけて常座に出で、

【六】

シテ『何事も。夢幻の戯れや

地『あはれ胡蝶の。舞ならん

〔イロヘ〕

を舞ひて大小前へ行き、

シテクリ『それ過去遠々の昔を思へば。いつを衆生の始めと知らず

地『未來永々の流轉。更に生死の終りもなし

シテサシ『然るに二十五有のうち。いづれか生者必滅の理に漏れん

地『まづ天上の五衰より。須彌の四洲の樣々に。北洲の千年終に朽ちぬ

シテ『況んや老少。不定の境

地『歎きの中の。歎きとかや

これより曲に合せて舞ふ。（舞クセ）

【六】

楊貴妃は鈿釵を頭にさして舞仕度を整へ、

貴妃「思へば、すべての事が夢まぼろしの戯れ事で、これもあの果敢ない胡蝶の舞のやうなものだ」

〔イロヘ〕

昔を偲ぶ心持を示し、

貴妃「一體遠い過去の事を考へれば、過去世の前にはまたその過去世があつて、衆生の始まりが何時からかと定めることも出來ず、また未來世を考へれば、來世の次にまたその來世があつて、衆生はその間生まれ變り死に變りして、はてしといふものがないのです。

しかし、衆生の生死流轉する二十五種の世界、いづれにしても生まれた者は必ず死ぬといふ法則に漏れはしないのです。まづ天上界にしても五衰の相があり、須彌四洲の中で最も秀れてゐる北倶盧洲にしても、千年の後には命が絶えるのです。ましてこの娑婆、南瞻部洲では、死の順序も老少不定で、最も歎かはしい所なのです。

〇胡蝶の舞—高麗樂の曲名胡蝶を、莊周が夢に胡蝶となつたといふ故事（莊子齊物論篇）に結びつけ、果敢ない意にとりなした。

◎衆生—刊行會本には「出生」の字を充つ。

〇二十五有—衆生の流轉する生死界を二十五種に分つたもの、即ち四洲（四有）・四惡趣（四有）・六欲天（一有）・梵天（一有）・無想天（一有）・五淨居天（一有）・四禪天（四有）・四空處天（四有）をいふ。有は因によつて必ず果を得るとの意。

〇天上の五衰—天人命終の時生ずる五つの衰相、衣服垢穢・頭上華萎・腋下汗流・身體臭穢・不樂本座をいふ。

〇須彌の四洲—須彌山の四方にある、南瞻部洲・東勝神洲・西牛貨洲・北倶盧洲。

〇北洲の千年—倶盧洲は四洲の中最も勝れ、こゝに住むものは千年の壽を保つといふ。

地クセ「われもそのかみは。上界の諸仙たるが。往昔の因ありて。假に人界に生まれ來て。楊家の。深窓に養はれ。未だ知る人なかりしに。君聞し召されつつ。急ぎ召し出だし后宮に定め置き給ひ。偕老同穴の語らひも緣盡きぬれば徒らに。又この島に唯一人。歸り來りてすむ水の。あはれはかなき身の露の。たまさかに逢ひ見たり。静かに語れ憂き昔

シテ『さるにても。思ひ出づれば恨みある

地』その文月の七日の夜。君とかはせし睦言の比翼連理の言の葉もかれがれになる私語の。笹の一夜の契りだに。名殘は思ふ習ひなるに。ましてや年月馴れて程經る世の中に。さらぬ別れのなかりせば。千代も人には添ひてましよしそれとても遁れ得ぬ。會者定離ぞと聞く時は。逢ふ

○上界—天上界。
○偕老同穴—詩經、邶風に「執二子之手一、與レ子偕老」王風に「穀則異レ室、死則同レ穴」
○すむ水の—住むを澄むに水の泡をあはれにいひかけた。
○たまさかに—稀に。露の玉といひかけた。
○静かに語れ—玄宗皇帝に。
○文月—七月。
○笹の一夜の—「さゝ」の音を重ね、笹の一節を一夜にいひかけた。
○世の中に—古今集在原業平の歌「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く(伊勢には祈る)人の子のため」を引いた。
○人には—人は玄宗。
○會者定離—平家物語維盛入水の事に「生者必滅會者定離は浮世の習ひ」。涅槃經に「夫盛必有レ衰、合會有二離別一」

私も以前は天上界の仙人であつたのですが、その昔因縁があつたので、假にこの人間界に生まれて、楊といふ家で大切に育てられ、まだ誰にも知られなかつたのを、わが君が聞し召して、早速お召し出しになり、后の位にお定め遊ばし、『ともに長生をして、死なば同じ穴に』とお約束戴いたのですが、その御縁も盡きてしまつたので、またこの蓬萊が島に唯一人歸つて來て住むこととなつた、あはれな果敢ない身上なのです。それが今たまたまそなたと逢ふこととなつたのです。よくわが君に申し上げて下さい。
それにしても、思ひ出せば、恨めしいことだ。あの七月七日の夜、わが君とお約束した睦言『天にあつては比翼の鳥となり、地にあつては連理の枝とならう』とのお約束も、無になつてしまつたのだ。たとへ一夜の契りを結んだだけでも、別れの名殘は惜しまれるものであるのに、まして私達の仲は、長い年月馴れ親しんでゐたものを。もしこの世の中に死別といふ別れがなかつたならば、千年も萬年もわが君と添ひ遂げようものを。それも出來ない、『會ふ者は必ず離れる』といふ

【七】

○袖うち振れる―源氏物語紅葉賀卷の歌「物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや」を引いた。

○移り舞―所をかへて舞ふ舞の手。人に眞似て舞ふ舞。月日も移りといひかけた。

○蓬が島つ鳥―蓬が島、島つ鳥といひ續けた。蓬が島は蓬萊島、島つ鳥は鵜。見んこともよもあらじを蓬に鵜を浮世にいひかけた。

こそ別れなりけれ

　とクセを舞ひ上げ、

【七】

地『羽衣の曲

〔序舞〕

シテワカ『羽衣の曲。稀にぞ返す。少女子が

地『袖うち振れる。心しるしや。心しるしや

シテ『戀しき昔の。物語

地『戀しき昔の物語。盡さば月日も移り舞の。しるしの釵また賜はりて。暇申してさらばとて。勅使は都に歸りければ

　シテ「戀しき昔の」と常座にて立物を後見に取らせて左手に持ち、ワキ「しるしの釵」とシテへ行きて立物を戴き、靜かに橋懸へ行く。シテ眞中にてワキを見送り、

シテ『さるにてもさるにても

地『君にはこの世逢ひ見ん事も蓬が島つ鳥。浮世なれども戀しや昔。はかなや別れの。常世の臺

のであるから、逢ふことがやがて別れといふことになるのです」

　といひながら曲舞を舞ひ、

【七】

〔序舞〕

霓裳羽衣の曲に擬へて舞ひ、

貴妃「たまたま霓裳羽衣の曲を奏するにつけても、その舞振りに、私の心持がはつきり表れることだ。

かうした、戀しい昔話を語り盡さうと思へば、長い月日のかゝることであらう。いつまで綴つても、語り盡きない」

　そこで、楊貴妃が方士にまた釵を與へられると、

方士「それではお暇申し上げます」

　と、勅使が都へ歸つて行くと、

貴妃「それにしても、わが君にはこの世で二度お目にかゝる事は、よもや出來まい。あゝ浮世であるが、昔が戀しい。あゝ果敢ない別れであつた」

　と、常世の國の宮殿に伏し沈み歎きな

に。伏し沈みてぞ留まりける

「君にはこの世」とシテ眞中、ワキ三の松にて向合ひて下に居り、シテしをり、「浮世なれども」と二人とも立ち、ワキは幕へ入り、シテは「常世の臺に」と作物に入り下に居てしをり、立ちて作物を出でしをり留。

から留まつた、

〔考異〕

諸流（五流）

【二】シテ「（下懸あらものすごの。宮中やな。〳〵）昔は驪山の……

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「これは唐土玄宗皇帝に仕へ申す（光奉る）……この度（光は）蓬萊宮に（光へ）と……　ワキ「ありし教へに……太眞殿（光院）と……
窺はばやと存じ（光思ひ）候　【二】ワキ「唐の天子の勅の使方士（光ナシ）これまで（光尋ね）……　【三】ワキ「いかに……ひたすらの御
歎きに（光の色）……ただこれ君の御志（光めくみ）……

養老（やうらう）

観（寶春剛喜）

解説

【能柄】 脇能　夢幻的劇能

【人物】 **ワキ** 雄略天皇勅使、**ワキツレ** 從者（二人）、**シテ** 孝子の父（樵翁）、**ツレ** 孝子樵夫、**狂言** 本巣郡の者、**後シテ** 養老山神

【所】 美濃國　養老瀧

【時】 雄略天皇御宇（四月）

【作者】 世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作とし、能本作者註文、二百十番謠目錄にも世阿彌の作とす。能作書にこの曲名が見え、糺河原勸進猿樂記に寬正五年四月十日、親元日記に寬正六年二月廿八日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月廿九日註釋のことが出てゐる。

【梗概】 雄略天皇の御宇、美濃國本巣郡に靈泉が湧き出たので、勅使がその地に下り、樵夫父子に會つて、これを養老と名づけた謂れを尋ねると、ありがたい宣旨に感激して、「この子は毎日山に入り薪を採つて、自分達父母を養つてゐたところ、或日何となくこの水を飲むと、

心が涼しくたり疲れも癒えたので、家に持ち歸つて父母に飮ませると、心も勇み老の養ひとなつたので、かう行つけたのですとお答へして、この藥の水の在所を敎へ、帝に捧げ奉る。勅使は喜んで都に歸らうとすると、天が光り輝いて、山神が現れ出で、太平の御代を祝つて、舞を舞ふ。

【出典】　續日本紀卷七、元正天皇の詔に、

朕以二今年九月一到二美濃國不破行宮一、留連數日、因覽二當耆郡多度山美泉一、自盥二手面一皮膚如レ滑、亦洗二痛處一無レ不二除愈一、在二朕之躬一其驗、又就而飮二浴之一者、或白髮反レ黑或頽髮更生、或闇目如レ明、自餘痼疾咸皆平愈、昔聞、後漢光武時醴泉出、飮レ之者痼疾平愈、符瑞書曰、醴泉者美泉、可二以養一レ老、蓋水之精也、寔惟、美泉即合二大瑞一、朕雖二庸虛一何違二天貺一、可下大二赦天下一改二靈龜三年一爲中養老元年上。

とある史實を潤色した、十訓抄第六の、

昔元正天皇の御時、美濃國に貧しく賤しき男ありけるが、老いたる父を持ちたり。この男山の草木を取りて、その直を得て父を養ひけり。この父朝夕あながちに酒を愛しほしがる。これによりて、男たりひさごといふ物を腰につけて、酒を沽る家に行きて、常にこれを乞ひて父を養ふ。或時山に入りて薪をとらんとするに、苔ふかき石にすべりて、うつぶしにまろびたりけるに、酒の香のしければ、思はずにあやしくて、そのあたりを見るに、石の中より水の流れ出づる事あり、その色酒に似たり。汲みてなむるに、めでたき酒なり。嬉しく覺えて、その後日々にこれを汲みて、あくまで父を養ふ。時に帝この事を聞しめして、靈龜三年九月にその所へ行幸ありて御覽じけり。これ即ち至孝の故に、天神地祇あはれみて、その德をあらはすと感ぜさせ給ひて、後に美濃守になされにけり。その酒の出づる所をば養老の瀧とぞ申す。且はこれによりて同じ十一月に年號を養老と改められける。

とある說話(古今著聞集卷六にも同樣の記事がある)に據つて脚色したものである。

【概評】　孝子物語は謠曲作者の最も好むところで、このやうた著名な說話を見逃さう筈もない、夙く應永の新作に數へられてゐるのは當然のことであらう。殊に前段の前ジテ、前ヅレを普通の神事物のやうに化人としないで、當時の實在人物孝子父子として劇能の形をとつたのは、謠曲作者のこの道念を强調したものといひ得よう。なほ前段の末、ロンギの後の一節、殊にその地上歌は珍しい脚色で、むしろ後段の始めに來る待謠に近いものである。

【一】○楢の葉の―風も靜かになるといひかけ、「鳴ら」と音を重ねた。
○鳴らさぬ枝―太平の象。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條、雨不レ破レ塊」
○雄略天皇―第二十一代の天皇。但し養老の年號は第四十四代元正天皇の御宇で雄略帝と關係はない。養老寺緣起には雄略帝の御宇としてゐるが、これは謠曲以後の作であらう。
○本巣の郡―これも誤り、瀧はもとの多藝（當者、當藝）郡、今の養老郡多度山中にある。
（濃州―觀世以外（梅若流も）では「ぢようしう」と謠ふ。
○四方に道ある―太平で交通の自由である意。
○秋津島根―日本の異稱。
○天ざかる―鄙の枕詞。關の戸の開くといひかけた
○美濃の中道―不破關と野上宿との間をいふと。曾丹集に「吾妻山美濃の中道絶えしよりわが身に秋のくると知りにき」
○養老の瀧―今の養老村大字白石の山中。

【一】次第の囃子にて、ワキ雄略天皇勅使、大臣烏帽子・赤上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、大臣烏帽子・萠黄上頭掛・着附厚板・赤袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ ワキヅレ次第「風も靜かに楢の葉の。鳴らさぬ枝ぞのどけき

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは雄略天皇に仕へ奉る臣下なり。さても濃州本巣の郡に。不思議なる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て參れとの宣旨に任せ。唯今濃州本巣の郡へと急ぎ候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ道行「治まるや。國富み民も豐かにて。國富み民も豐かにて。四方に道ある關の戸の。秋津島根や天ざかる。鄙の境に名を聞きし。美濃の中道程なく養老の瀧に着きにけり養老の瀧に着きにけり

【一】前段

（舞臺に初め物で、ワキ雄略天皇勅使、ワキヅレ從者を随へて登場）

勅使「吹く風も靜かで、木の枝を搖り動かさないといふ、誠にのどかな泰平な御代だ」

（次第に御代の泰平を祝し、）

勅使「自分は雄略天皇にお仕へしてゐる臣下です。さて美濃國本巣郡に、不思議な泉が出て來たといふ事を奏上したものがあつて、すぐ見て參れと仰せ下されたので、これから美濃國本巣郡へ急いで行くのです」

（見物人に自己紹介をして、旅の目的を述べ、）

勅使「天下泰平にうち治まつて、國は富み民も榮えて、四方に通ずる道もよく開け、交通が自由であるので、遠い長旅も易々と出來て、遙かな田舍の涯と名だけ聞いてゐた美濃の中道も、無事に通り過ぎて、間もなく養老の瀧に着いた」

（といつてゐるうちに目的地に着いた態で、舞臺は美濃國養老の瀧になる）

【一】
〇美濃のお山—常には不破郡の南宮山をいふが、こゝでは年を經し身を美濃にいひかけ、老の意をきかせて、養老瀧のある多度山のことに用ゐたのである。
〇行く事易き—太平の世が樂しくて、老人にも登り易い感じがするとの意。
〇故人眠り早く—古い友は早く死んでしまつたとの意
〇六十の花—新撰朗詠集大江佐國の詩句に「六十餘回看未レ飽、他生定作二愛レ花人一」
〇茅店の月—三體詩溫庭筠の詩句「鷄聲茅店月、人迹板橋霜」を引いた。茅店は茅葺きの家。

「郡の境に名を聞きし」とワキ正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りて養老に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に養老の瀧に着きて候。人來り候はば所の謂れを尋ねうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座の方へ行き順次並びて下に居る。

【二】
眞一聲の囃子にて、シテ父樵翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・茶絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて杖をつき、ツレ孝子樵夫、直面・襟赤・着附無地熨斗目・淺黄縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて柴を負ひ、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテツレ一聲「年を經し。美濃のお山の松蔭に。なほ澄む水の。緑かな

二人とも正面に向き、

ツレ二句「通ひ馴れたる老の坂。シテツレ（向合ひ）三「行く事易き。心かな

と謡ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ちて、

シテサシ「故人眠り早く覺めて。夢は六十の花に過ぎ。シテツレ（向合ひ）「心は茅店の月に嘯き。身は板橋の

【三】
シテ樵翁、ツレ樵夫の父子連れ立つて登場。

父子「この美濃の養老の水は、もと〳〵清らかである上、お山の老松の緑が影をうつして、一層青々してゐることだ」

樵翁「こゝは通ひ馴れた山路なので、年寄の身にも心樂しく、易々と登れることだ。思へば、古い友達はとうの昔死んでしまつて、自分ひとり六十過ぎるまで、夢のやうに暮らして來て、あばら屋で月を眺

○白頭の雪―頭の白髮。
○深谷の下の―荊州記に「南陽酈縣北八里有二菊水一、其源旁悉芳、菊水極甘馨、又中有二三十家一不二復穿一レ井、即飲二此水一、上壽百二十三十、中壽百餘、七十者猶以爲レ夭」とある故事をいふ。〔菊慈童〕參照。
○長生の家に―和漢朗詠集慶滋保胤の詩句「長生殿裏春秋富、不老門外日月遲」に據つた。
○千代のためし―拾遺集忠岑の歌に「子の日する野邊に小松のなかりせば千代のためしに何を引かまし」
○松蔭の岩井の―拾遺集惠慶法師の歌に「松蔭の岩井の水を掬び上げて夏なき年と思ひけるかな」待つを松にいひかけた。
【三】
○おこと―そなた。

霜に漂ひ。白頭の雪は積れども。老を養ふ。瀧川の。水や心を。淸むらん

シテツレ下歌「奥山の深谷の下のためしかや。流れを汲むと、よも絶えじ流れを汲むとよも絶えじ。上歌

「長生の家にこそ。長生の家にこそ。老いせぬ門はあるなるに。これも年經る山住の。千代のためしを、松蔭の岩井の水は藥にて。老を延べたる心こそ。なほ行く末も、久しけれなほ行く末も久しけれ

（なほ行く末も」と謠ひながら入替り、シテは眞中、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる老人に尋ぬべき事の候

シテ「こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ「おことは聞き及びたる親子の者か

シテ「さん候これこそ親子の者にて候へ

ワキ「これは帝よりの勅使にてあるぞとよ（シテ・ツ

めたり、板橋の霜を踏んだりして、はかなく年月を過して、頭の白髮は愈々ふえて來たのだが、養老の瀧川の水が、この老いぼれた心を洗ひ淸めてくれるのだ。奥山の深谷の下を流れる水で、これを飲めば、大變な長命をするといふ支那の菊水のやうに、この養老の水も、いくら汲んでも絶えはしないだらう。かの支那の長生殿には年を寄らない不老門があるといふことだが、こゝの水も年寄つた山人が飲んで、千年の壽命を得るといふ結構なもので、この松蔭の岩間から出る水は、不死の藥で、これを飲めば、年を寄らず、なほこの先もいつまでも久しく生きながらへることが出來るのだ」

（二人老瀧を讃へながら勅使の方へ近づく。）

【三】

勅使「おい、こゝな老人にものを尋ねたいが……」

樵翁「私をお呼びですか、何の御用です」

勅使「そなたは評判に聞いた親子の者か」

樵翁「はい、私どもがその親子の者です」

勅使「自分は帝から遣はされた勅使だぞ」

（親子の者平伏して、

レ下に居る）
シテ「ありがたや雲居遥かに見そなはす。わが大君の詔を。賤しき身として今承ることのありがたさよ（と合掌）。これこそ親子の民にて候へ
ワキ「さてもこの本巣の郡に。不思議なる泉出でくる由を奏聞す。急ぎ見て参れとの宣旨に任せ。これまで勅使を下さるるなり。まづまづ養老と名づけそめし。謂れを委しく申すべし
（シテ・ツレ立上り）
シテ「さん候これに候はこの尉が子にて候が（とツレを見）。朝夕は山に入り薪を採り。我等を育み候處に。或時山路の疲れにや。この水を何となく掬びて飲めば。世の常ならず心も涼しく疲れも助かり
ツレ「さながら仙家の薬の水も。かくやと思ひ知られつつ。やがて家路に汲み運び。父母にこれ

樵翁「ありがたいことでございます。遠い都の奥深い所で、天下を知ろしめさるわが大君の仰せ事を、このやうな賤しい身分の者が今お伺ひ申しあげるとは、ほんとにありがたいことでございます。私共が親子の民でございます」
勅使「さて、この本巣郡に不思議な泉が湧き出たといふ事を奏上したものがあつて、すぐ見て参れと仰せ下されて、こゝまで勅使をお差向けになつたのだ。まづ第一に、養老といふ名をつけられた謂れを委しく申せ」
樵翁「はい、こゝに居りますのは、この爺の子でございますが、毎日毎日山に入つて薪を採り、私共を養つて居りましたところ、或時、山路に疲れた爲でございませうか、何の心もなくこの水をすくつて飲みますと、世間の普通の水とは違つて、心も涼しくなり、疲れも直りまして……」
樵夫「丁度仙人の不老不死の薬かこのやうなものであらうかと思はれましたので、早速汲んでわが家へ持つて歸り、父母に

○尉―老人。尉は丈で、杖をつく人との意。
○掬びて―手ですくつて。
○仙家の薬の水―彭祖の菊水の故事をいふ。後に出る。

○忘れ水―野中にあつて人に知られない水。老を忘れといひかけ、水の淺きにかけて朝を呼び起す料とした。
○朝寢の床―朝方の寢床。
○眞清水の―心は増すといひかけ、絶えずの序とした。
○瀧壺―瀧水の落ちたまる所。
○さざれ石の―和漢朗詠集讀人知らずの歌―君が代は（古今集には「わが君は」）千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで―を引いた。さざれ石は小石。

を與ふれば

シテ「飲む心よりいつしかに。やがて老をも忘れ水の

ツレ『朝寢の床も起き憂からず

シテ ツレ「夜の寢覺もさみしからで。勇む心は眞清水の。絶えずも老を養ふ故に。養老の瀧とは申すなり

ワキ「げにげに聞けばありがたや。さてさて今の藥の水。この瀧川の内にても。とりわき在所のあるやらん

シテ「御覧候へこの瀧壺の。少し此方の岩間より。出でくる水の泉なり（と右の方を見）

ワキ「さてはこれかと立ち寄り見れば。げに潔き山の井の

シテ『底澄み渡るさざれ石の。巖となりて苔のむ

これを與へますと……」

樵翁「これを飲みますと、いつの間にやら、そのまゝ年寄りを忘れてしまひまして、朝、寢床を離れるのもつらくなく、夜、眼が覺めても淋しくなく、元氣な心が増して來まして、いつも老を養ひますので、それで養老の瀧と申すのでございます」

勅使「たる程、聞けば、ありがたいことだ。して、今の藥の水は、この瀧川の内でも、どこにあるのだ」

樵翁「御覧なさいませ、この瀧壺の少しこちらの、岩の間から湧いて出る泉の水でございます」

勅使「さては、これがそれか」

……と、そばへ立ち寄つて、

勅使「なる程、見れば清らかな山の水で……」

樵翁「底まで澄み渡つて居ります。これを

す

ワキ『千代に八千代のためしまでも

シテ『眼のあたりなる藥の水

ワキ『誠に老を

シテ『養ふなり

地上歌』老をだに養はば。まして盛りの人の身に。藥とならばいつまでも。御壽命も盡きまじき。泉ぞめでたかりける。げにや玉水の。水上澄める御代ぞとて流れの末の我等まで。豐かにすめる、嬉しさよ豐かにすめる嬉しさよ

地上歌の始めに、ワキは下に居り、ツレも地謡座前に行き負柴を下して下に居る。シテは「げにや玉水の」と左へ廻りて常座に立つ。上歌濟みてシテ眞中へ行き下に居り、

【四】

地クリ『げにや尋ねても蓬が島の遠き世に。今のためしも生藥。水又水はよも盡きじ

シテサシ『それ行く川の流れは絶えずして。しかも

飲めば、喩へば小石が次第に大きくなつて巖となり、それに苔が生えるまでも、長い年月……」

勅使「その喩へのやうに、千年も萬年も……」

樵翁「生きながらへる藥の水が、現在眼の前にあるのでございまして、ほんとによく老を養ふのでございます。

老人をさへ養ふのでございますれば、まして御壯年のお方様に藥とならぬ筈はなく、これをお飲み遊ばせば、御壽命はいつまでもお盡きになることはございますまい。まことにめでたい泉でございます。これと申すも、上、大君の御仁政が明らかなので、流れの末に當る私共まで豐かに暮らすことが出來るのでございまして、ほんとに嬉しいことでございます」

【四】

樵翁は更に話しつゞけて、

樵翁「ずつと遠い昔、蓬萊島へ不死の藥を尋ねに行つたといふ話がございますが、今現にこゝにその不死の藥がございまして、この藥の水はいつまでも盡きることがございますまい。

一體、川水の流れは絶え間ないが、その

○盛りの人―壯年の人。暗に天皇を指し奉る。

○玉水―玉は美稱。

○水上澄める―朝政の明らかなことをいふ。荀子に「君子養レ源、源清則流清」

【四】

○蓬が島の遠き世―秦始皇が徐福をして東海の仙鄕に不死の藥を求めしめた故事を指す。蓬が島は仙鄕蓬萊島。〔楊貴妃〕參照。

○生藥―不死の藥。夫木抄に「君がため蓬が島もよりぬべし生藥採る住吉の浦」

○行く川の―以下「久しく」まで鴨長明方丈記冒頭文。但し「流れに浮かむ」は原文「よどみに浮かぶ」「久しく」の下「とゞまることなし」とある。

もとの水にはあらず

地「流れに浮かむ泡沫は。かつ消えかつ結んで。久しく澄める色とかや

シテ「殊にげにこれはためしも夏山の

地「下行く水の藥となる。奇瑞を誰か。習ひ見し

地下歌「いざや水を掬ばんいざいざ水を掬ばん。

上歌「甕の竹葉は。甕の竹葉は。影や綠を重ぬらん。その外籬の荻花は林葉の秋を、汲むなりや。晉の七賢が樂しみ。劉伯倫が翫び。ただこの水に殘れり。汲めや汲めや御藥を。君の爲に捧げん。曲水に浮かむ鸚鵡は石にさはりて遲くとも。手にまづ取りて、夜もすがら馴れて月を、汲まうよや馴れて月を汲まうよ

【五】

（と立ちて後見座にくつろぎ水を汲む心。常座に出でて、）

地ロンギ「山路の奥の水にてはいづれの人か養ひ

水はもとの水ではなく、水面に浮かんでゐる泡は、片方で消えるかと思へば、また片方に新しいものが出來て、いつまでも同じ狀態ではないのでありますが、しかし、水はいつもいつも變りなく澄み渡つてゐるのでございます。

殊にこの水は外に全く例のないもので、山の水が藥となるといふやうな、めでたいしるしは、外に誰も見たことがないのでございます。

さあ、水をすくひませう『春は酒瓶の酒に濃い綠の影を宿す』とか『秋は垣根の荻の花が木の紅葉と同じやうに紅くなつて、酒に紅い影を宿してゐるのを汲む』とかいはれてゐます。晉の竹林七賢が樂しんだのも、殊に劉伯倫が好んだのも、この酒の水でございます。さあ誰も彼もこの水を汲め。そしてこの藥の水をわが大君に奉らう。曲水宴の、水に浮かむ鸚鵡盃には、途中石に邪魔せられて、來るのが遲れようとも、これにはその心配がない。手つとり早く汲み取つて、夜通し、月影の宿る水を汲まう」

（と水を汲み取る態。）

【五】

勅使「山奥の水で老を養つた人には、どう

○夏山の―例も無しといひかけた。
○奇瑞―不思議なめでたいしるし。
○甕の竹葉は―和漢朗詠集白樂天の詩句に「甕頭竹葉經レ春熟、階底薔薇入レ夏開」甕は酒瓶、竹葉は酒の異名。
○籬の荻花は―出所未詳。
○晉の七賢―晉の時代に、嵇康・阮籍・阮咸・向秀・劉伶・王戎・山濤の七人、常に竹林の下に集まり、酒を飲み清談に耽つたので、竹林の七賢といふ。
○劉伯倫―七賢の一人劉伶伯倫は字。最も酒を好み酒德頌を作つた。
○曲水―三月三日禁中に行はれた、水に盃を浮べ詩を作り酒を飲む遊宴。
○鸚鵡―盃の名。青貝・鰒貝・阿古屋貝等で作る。
○石にさはりて―和漢朗詠集菅原雅規曲水宴の詩句「巖レ石遲來心竊待、牽レ流遣過手先遮」を引いた。
【五】

○彭祖―列仙傳に「彭祖服二菊長壽一、其年七百餘歳、顏色壯而如二十七八歳一也」この人の事「菊慈童」「枕慈童」に作らる。
○仙德―仙術の功德、
○薬と菊の―薬と聞くといひかけた。
○露の間に―古今集素性法師の歌「濡れてほす山路の菊の露の間にいつか千年をわれは經にけむ」に據つた。
○養ひ得ては―和漢朗詠集紀長谷雄の詩句「養得自爲二花父母一、洗來寧辨二薬君臣一」を引いた、
○翁も―露の置くといひかけた。
○馴れ衣―不斷着、水に馴るといひかけた、
○袖ひぢて―袖が水に濡れて。
○影さへ見ゆる―古今集序の歌「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺き心をわが思はなくに」を借りた、
○若水―年始に汲み初める水。こゝでは姿も若くなるといひかけた、

し

シテ「彭祖が菊の水。したゞる露の養ひに。仙德を受けしより。七百歳を、經ることも薬の水と聞くものを

地「げにや薬と菊の水。その養ひの露の間に（と左へ廻り）

シテ「千年を經るや天地の

地「開けし種の草木まで

シテ「花咲き實なる理（正面へ出で）

地「その折々といひながら

シテ「たゞこれ雨露の惠みにて

地「養ひ得ては。花の父母たる雨露の。翁も養はれて。この水に馴れ衣の（下に居り）。袖ひぢて掬ぶ手の（面を下げて立ち）。影さへ見ゆる山の井の（下を見）。げにも薬と思ふより（右へ廻り）。老の姿も若水と

いふ人があつたか知らん」

樵翁「昔彭祖が菊の水、葉にたまつた露を飲んだところ、仙術の功德によつて七百歳の壽命を保ちました。これも薬の水だと聞いて居ります」

勅使「いかにも菊の水は尊くて、これを飲めば暫くの間に……」

樵翁「千年の年月を過します。たゞ人間ばかりでなく、すべて天地の間にあるもの、草木の類に至るまで、その花の咲き實の結ぶのは、それぞれ季節に従ふものとは申したから、結局すべて雨露の惠みによるもので、雨露の水は、花を養ふ父母となるのでございます。この翁も、その水に養はれてゐるのでございまして、この養老の水を飲みなれて、不斷着の袖を濡らしながら、手に水をすくふと、その影が水に映るほど澄みきつた清らかなもので、いかにも薬だと思つただけで、年寄の姿も若返つて見えるのは、ほんとに嬉しいことでございます」

見るこそ嬉しかりけれ（と常座下に居る）

【六】

ワキ「げにありがたき藥の水、急ぎ歸りてわが君に。奏聞せんこそ嬉しけれ

シテ「翁もかかる御恵み。廣き御影を尊めば

ワキ「勅使も重ねて感涙して。かかる奇特に逢ふ事よと

地上歌「いひもあへねば不思議やな（シテ立ち）。いひもあへねば不思議やな。天より光かかやきて（と右の上を見）。瀧の響も聲澄みて（二三足出で）て音樂聞え花降りぬ（右へ廻り）。これただ事と、思はれずこれただ事と思はれず

と常座にて開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて幕に入る。

【六】勅使「寶にありがたい藥の水のことを、早速都に歸つて、わが大君に奏上出來るのは、嬉しいことだ」

樵翁「私もこのやうなありがたい大御恵に浴しまして……」

と、帝の廣い大御影を尊むと、勅使もなほ感激の涙をこぼして、

勅使「このやうな靈妙な事に逢はうとは……」

と、いふや否や、不思議にも天から光が輝いて、瀧の響も澄み渡り、音樂が聞え花が降つて來た。これはたゞ事とは思はれない。

樵人父子は退場する。

【六】

○いひもあへねば—「いひもあへぬに」といふ意に用ゐる謡曲の慣用語法。

○音樂聞え花降り—佛菩薩の來現に伴ふ奇瑞である。

【間】

【間】 末社來序の囃子にて、狂言本巣郡の者、引立烏帽子・着附段熨斗目・掛素袍・括袴・脚半・腰帯・扇の裝束にて髭を掛けて名乘座へ出で、

狂言「かやうに候者は。美濃の國本巣の郡に住居する者にて候。さてもこの郡の内に養老の瀧と申して。藥の水の出來仕り候。その子細は。この所に親子の民の御座候が。かの者孝行にて明暮山に分

け入り薪を採り。それを代となし老いたる親を育みしに。或時山路の疲れにや。暫しまどろみ目覺めて。瀧壺に至り水を掬びて飲み候に。その味常の水に變り心も涼しく。何とやらん若くなるやうに覺え候間。もとよりかの者は孝行の事なれば。その水汲んでわが家に歸り。老いたる親に飲ませしに。老父申すやう。この水は常の水に變り何とやらん若くなるやうに覺ゆると申せば。子は悦びその瀧に伴ひ。思ひの儘に飲ませしに。老父は眞盛りの若者となり申して候。誠に親を養ひ立てたる瀧なれば。養老の瀧と名づけて候。我等も水を飲まうと存じ。これまで出でて候。まづ急いで參らう。誠にかやうの奇特ある事も。かの者の親孝行にて候間。天道の御計らひと存じ候。我等如きの者までも。かやうなる時節に生まれ逢ふは。近頃ありがたき事にて候。何かと申すうちに。即ち養老の瀧にて候

　と舞臺を小廻りして養老瀧に着きたる心にて目附柱の上を見、

狂言「さても／＼清潔なる事かな。されば飲まう

　と目附柱の下に行き、片膝つきて扇を開き三杯飲み、

狂言「さても／＼何とやらん若くなるやうに覺え候。一さし奏でて罷り歸らう（と大小前へ行き）

狂言「一盃／＼又一盃。〔三段舞〕一盃／＼又一盃。藥の水を恣に飲みければ。鬢のあたり髭のまわりがそゝめきて。若き男となりたりけり（と髭を取り）。かほどめでたき事あるまじや。これまでなりや歸るぞとて。／＼。もとの在所へ歸りけり

　と拍子を踏みて幕に入る。

【七】

後段

後ジテ養老山神登場。

【七】

出端の囃子にて、後ジテ養老山神、面邯鄲男・透冠・黒垂・金緞鉢卷・襟淺黃・着附段厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り常座に立ち、

○代となし—酒米を買ふ代金とし、

後ジテ『ありがたや治まる御代の習ひとて。山河草木穏かに。五日の風や十日の。天が下照る日の光。曇りはあらじ玉水の。藥の泉はよも盡きじ。あらありがたの奇瑞やな

地「これとても誓ひは同じ法の水。盡きせぬ御代を守るなる

シテ『われはこの山山神の宮居（と右の上を高く見上げ）

地「又は楊柳觀音菩薩（と左へ廻り）

シテ『神といひ

地「佛といひ

シテ『ただこれ水波の隔てにて

地「衆生濟度の方便の聲

シテ『峯の嵐や。谷の水音滔々と（下を見）

地「拍子を揃へて音樂の響。瀧つ心を澄ましつつ。諸天來去の。影向かな

山神「あゝありがたいことだ。御仁政の明らかな大御代のこととて、山も河も草木も、すべてのものが穏かで、五日に一度の風、十日に一度の雨、雨風も宜しきを得て、天下を照らし給ふ大御稜威に曇りはなく、從つてこの藥の泉も、いつまでも盡きはしまい。あゝありがたいめでたい瑞相だ」

これといふのも、神佛が大御代の盡きぬ御榮えを守る誓約によるのであつて、自分はこの山の山神の宮に住むもの、又一つには楊柳觀音ともいふのである。——

かうして、或は神といひ或は佛といつて、名は變つても、それは水と波との關係のやうな、形だけの差異であつて、實質には變りはないのだ。廣く、峯の嵐や谷の水音に至るまで、すべて神佛が衆生を救ひ利益するための手段に外ならないのだ。かくて、谷の水音がとう〳〵と拍子を揃へて、音樂の響を奏する。與に湧き立つ心を靜めて待つてゐると、天上の諸神が來現せられるわ」

○五日の風や—最初に引いた王充論衡の句。

○天が下—雨といひかけた。

○曇りはあらじ—光と玉と上下にかゝる。

○楊柳觀音—觀世音三十三體の一。柳の風に靡く如くに衆生の願望に從ふとの意から出た名。右手に柳枝を持つ。

○水波の隔て—形は異なるが、實は同じであるとの喩へ。

○方便の聲—峯の嵐や谷の水音も衆生濟度の手段をなすとの意。

○瀧つ心—勇み湧き立つ心を瀧にいひかけた。

○諸天來去—諸の天人の往來する。

○影向—佛菩薩が姿を現すこと。

〔神舞〕

を舞ひ、引續き次の謡に合せて舞ふ、

シテワカ「松蔭に。千代をうつせる。緑かな

地「さもいさぎよき山の井の水。山の井の水山の井の

シテ「水滔々として。波悠々たり。治まる御代の。君は船

地「君は船。臣は水。水よく船を浮かめ浮かめて。臣よく君を。仰ぐ御代とて幾久しさも盡きせじや盡きせじ。君に引かるる玉水の。上澄む時は。下も濁らぬ瀧つの水の。浮き立つ波の。返す返すも。よき御代なれや。よき御代なれや。萬歳の道に歸りなん。萬歳の道に歸りなん

と常座にて留拍子を踏みて舞ひ納む。

〔神舞〕

興に乘ずる心で舞ふ、

山神「いかにも清らかな山の泉に、千年の緑をたゝへた松が影をうつしてゐる。水はとう／＼と湧き出で、波はゆつたりとして穩かである。喩へに『君は船、臣は水のやうである』といふが、泰平の御代には、その水に喩へられた臣が、船をよく浮かべるやうに、よく大君を仰ぎ奉り、大御代の御榮えは、幾久しく盡きないのだ。そして、水上の澄む時は、下流も自然濁らないやうに、上、大君の御仁政に浴して、下萬民も平穩で、まことにめでたい御代だ。では、八千代の御榮えを祝つて、神の國に歸らう

と御代を祝つて退場。

○君は船―荀子王制篇に「君者舟也、庶人者水也、水則載レ舟、水則覆レ舟」

○君に引かるる―君の仁政にひきつけられる。

○返す返すも―波の縁語。

○萬歳の道―君の御榮えを祝つて萬歳といひ、神の道に兼ねて用ゐたのであらう

〔考異〕

諸流（五流）

【七】(ツレ)「御山のはゝそのみどり片敷きて……こゝに假寝の枕より……音樂聞え花降りて……異香薫ずる不思議さよ〳〵)後ジテ「ありがたや……

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「抑もこれは……さても濃州(光美濃國)本巣の郡……奏聞す(光我君の宣旨には)急ぎ……宣旨(光勅定)に任せ……ワキ道行「治まるや……程(光も)なく……【三】ワキ「いかにこれなる(光ナシ)老人に尋ぬべき事の候(光ナシ)……ワキ「さても……泉出でく(光きた)る由を…… シテ「御覽候へ……岩間より出でく(光た)る水の……

八島（やしま）

觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】 二番目 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 都僧、**ワキツレ** 從僧（二人）、**前シテ** 漁翁（義經の靈）、**ツレ** 漁夫、**狂言** 所の者、**後シテ** 源義經

【所】 讃岐國 八島

【時】 春（三月）

【作者】 能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀にこの曲名見え、糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月四日、親元日記に寛正六年二月廿八日、その他歷〻演能の記事が見え、言經卿記に文祿四年三月二十九日註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 都方の僧が西國行脚の途次、讃岐國八島の浦に立ち寄り、ある鹽屋に一夜の宿を求めて、主の漁翁に、昔この所に於ける源平合戰の有様を尋ねると、漁翁は、三保谷四郎と惡七兵衛景清とが錣引きしたこと、佐藤繼信が討死したことなどを語る。僧はその餘りに委しい物語に驚いて、漁翁の名を尋ねると、義經の靈であることをほのめかして消え去る。やがてその夜、僧の夢に、義經が甲冑を帶して現れ出で、この所の合戰に思はず弓を取り落し、その敵船近く流れて行つたのを、末代までの名誉のために、命を犯して取り戻したことを

語り、今、修羅道に能登守教經と奮戰する樣を示す、と思ふうちに、夜はほのぼのと明けそめて、義經の姿も見えなくなつてしまつた。

【出典】本曲は平家物語に據つたもので、原文に從つてゐる所が多いと思はれるから、その主な部分を抄出すると、卷十一に、明くる十八日（元暦二年二月）の寅の刻に、讃岐國引田といふ所に落ちついて、人馬の息をぞ休めける。それより白鳥、丹生の屋うち過ぎうち過ぎ、八島の城へぞ寄せ給ふ。……判官その日の裝束には、赤地の錦の直垂の紫裾濃の鎧着て、鍬形打つたる兜の緒をしめ、黄金作りの太刀を佩き、二十四さいたる斑生の矢負ひ、滋籐の弓の眞中取り、沖の方を睨まへ、大音聲を揚げて、「一院の御使檢非違使五位の尉源の義經」と名乘る。……（大阪越の事）

能登殿、船軍は樣あるものぞとて……王城一の強弓精兵なりければ、能登殿の矢先に廻るもの、一人の射落されずといふ事なし。中にも源氏の大將軍九郎義經を、たゞ一矢に射落さむとねらはれけれども、源氏の方にも心得て……大將軍の矢面に馳せ塞りければ、能登殿も力及び給はず、能登殿」そこ退き候へ、矢面の雜人原」とて、さしつめ引きつめ散々に射給へば、矢庭に鎧武者十騎ばかり射落さる。中にも眞先に進んだる奥州の佐藤三郎嗣信は、弓手の肩より馬手の脇へ、つと射拔かれて、暫しもたまらず、馬より逆樣にどうと落つ。能登殿の童に菊王丸といふ大力の剛の者、……嗣信が首を取らんと飛んでかゝるを、忠信側にありけるが、兄が首を取らせじとよつぴいて、ひやうと放つ。菊王丸が草摺のはづれをあなたへつと射貫かれて、犬居に倒れぬ。……（嗣信最後の事）

平家……弓持つて一人、楯ついて一人、長刀持つて一人、武者三人渚に上り、源氏こゝを寄せよやとぞ招きける。……また楯の陰より、大長刀うち振つてかゝりければ、美尾の屋の十郎小太刀大長刀に叶はじとや思ひけむ、かい伏いて逃げければ、やがて續いて追つかけたり。長刀にて薙がむずるかと見る處に、さはなくして、長刀をば弓手の脇にかい挾み、馬手をさしのべて、美尾の屋の十郎が兜の錏を摑まうとす。摑まれじと逃ぐる。三度つかみはづいて、四度の度むずと摑む。暫しぞたまつて見えし、鉢附の板よりふつと引き切つてぞ逃げたりける。……その後兜の錏をば長刀の先に貫き、高くさし上げ大音聲をあげて、「遠からん者は音にも聞け、近くば目にも見給へ、これこそ京童の呼ぶなる上總の惡七兵衛景清よ」と名乘りすてて、味方の楯の陰へぞ退きにける。……源氏勝に乘つて、馬の太腹つかる程に、うち入りうち入り攻め戰ふ。船の中より熊手、薙鎌を持つて、判官の兜の錣にからりからりとうち懸けうち懸け、二三度しけれども、味方の兵ども太刀長刀の先にて、うち拂ひうち拂ひ攻め戰ふ。されどもいかゞはし給ひたりけむ、判官弓を取り落されぬ。うつ伏し鞭を以てかき寄せ取らむ取らむとし給へば、味方の兵ども「たゞ捨てさせ給へ、捨てさせ給へ」

と申しけれども、遂に取つて笑うてぞ歸られける。おとなどもは皆爪はじきをして、「たとひ千疋萬疋に代へさせ給ふべき御たらしなりと申すとも、いかでか御命には代へさせ給ふべき」と申しければ、判官「弓の惜しさにも取らばこそ、義經が弓といはば、二人しても張り、もしは三人しても張り、叔父爲朝などが弓のやうならば、わざとも落いて取らすべし。尫弱たる弓を敵の取り持つて、これこそ源氏の大將軍九郎義經が弓よなど、嘲弄せられむが口惜しさに、命に代へて取つたるぞかし」とのたまへば、皆またこれをぞ感じける。(弓流の事)

【概評】 勝修羅物三番(〔田村〕〔箙〕及び本曲)の一として、めでたい曲であるばかりでなく、脚色修辭ともに秀れた佳作である。まづ主材たる軍物語は、前後特別趣のものにして、前段には部下の勇武忠誠を描いて、哀愁の情を催さしめ、後段には大將自身の奮鬪を描いて、壯烈の感を起さしめて居り、修辭に於ては、第二節の、舞臺景趣の描寫も巧みであるが、殊に第五節の、ロンギに於けるシテ庭性の告白に「よしつねの浮世の夢ばし覺まし給ふな」といつて朧化し、第九節のキリに「船軍の掛引、浮き沈むとせし程に、春の夜の波より明けて」と、いつとなく結局に導いて行つたたとは、夢幻能として、最も上乘な行文であると思ふ。

前段

【一】

次第の囃子にて、ワキ都僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帯・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキと同様の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第「月も南の海原や。月も南の海原や。八島の、浦を尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは都方より出でたる僧にて候。われ未だ四國を見ず候程に、この度思ひ立ち西國行脚

【一】

(舞臺は初め京都で、ワキ都僧、ワキヅレ從僧を隨へ登場。)

(一次第に旅の目的地を述べ、)

僧「月も南の空にめぐつて行くが、自分も同じ南の方、南海道の八島の浦へ出かけよう」

僧「私は都の方から出て來た僧です。私はまだ四國へ行つたことがないので、今度思ひ立つて西國行脚をしようと思ふので

【一】

○月も南の海原や―月も南の空にめぐり、僧も南海道へ行くとの意。南の海原で南海道(四國)をきかせた。

○八島―讃岐國木田郡、高松市の東。今屋島と書く。古謠本には皆「八島」と書いてゐるので、本書もこれに從つた。

○四國―阿波・讃岐・伊豫・土佐。

と志し候

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ「道行」春霞。浮き立つ波の沖つ舟。浮き立つ波の沖つ舟。入日の雲も影添ひて。そなたの空と行く程に。遙々なりし舟路經て。八島の浦に着きにけり八島の浦に着きにけり

ワキ「遙々なりし舟路經て」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて八島に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや讃岐の國八島の浦に着きて候。日の暮れて候へば。これなる鹽屋に立ち寄り。一夜を明かさばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座の方へ行き順次竝びて下に居る。

【三】一聲の囃子にて、シテ漁翁、面朝倉尉・尉髪・襟淺黄・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰蓑・腰帶・扇の裝束、ツレ漁夫、直面・襟赤・着附無地熨斗目・淺黄縷水衣・腰蓑・腰帶・扇の裝束にて二人とも釣竿を持ち、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

す」

と見物人に自己紹介をし、

（僧）「春霞がたちこめて、波も浮き立つてゐる沖に舟を浮かべて、入日の雲を眺める日數の重なつて行くうちに、非常に長かつた船旅も無事に過ぎて、八島の浦に着いた」

といつてゐる間に旅は進んだ態で、舞臺は讃岐國八島となる。

（僧）「旅を急いだので、もはや讃岐國八島の浦に着いた。日が暮れたから、こゝの鹽屋に立ち寄つて、一夜を明かしませう」

といつて、海士の歸りを待つてゐる態。

【三】シテ義經の靈、漁翁の姿を裝うて、ツレ年若い漁夫と共に、釣竿を持つて沖から歸る態で登場。

○浮き立つ—春霞と波とにかゝる。

○沖つ舟—沖の舟。

○入日の—沖の舟が港に入るといひかけた。

○鹽屋—鹽を焼く家。海士の家。

【二】

シテサシ「面白や月海上に浮かんでは波濤野火に似たり

二人とも正面に向き、

ツレ「漁翁夜西岸に傍うて宿す。シテ（向合ひ）「曉湘水を汲んで楚竹を焼くも。今に知られて蘆火の影。ほの見えそむる。ものすごさよ（と正面に向き）

シテ『月の出汐の沖つ波

ツレ『霞の小舟。こがれ來て

シテ「海士の。呼び聲。シテツレ二「里近し

と謡ひて二人とも舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ「一葉萬里の舟の道。ただ一帆の風に任す

ツレ「夕の空の雲の波。シテツレ（向合ひ）二「月の行くへに立ち消えて。霞に浮かむ松原の。影は緑にうつろひて。海岸そこ とも知らぬ火の。筑紫の海にや。續くらん

漁翁 實に面白い景色だ。月が海上に浮かんで、波に映つてゐる様は、まるで野火のやうだ。

古人の詩に『漁翁が夜は西の岸邊に泊り、夜が明けると、湘水の水を汲んで、楚地の竹でこれを沸かす』といふのがあるが、その趣が今自分の體驗から、よく思ひ知られることだ。おゝ、濱邊で蘆を焼いてゐる火影がかすかに見え出して來た。實に寂しい感じだ。

月が出て滿汐になつたので、沖の方に霞に包まれてゐた小舟も、次第に岸の方へ漕ぎ寄せて來る。濱で海士が網引きの人達を呼んでゐる聲が聞えて來て、自分達ももう里近くへ來たのだ。

自分達は廣々とした大海を、小さな舟に乘つて、たゞ一枚の帆に孕む風に任せて、渡りあるいてゐることだ。

夕暮の空に波のやうに湧き立つてゐた雲も、月の行く方に消えてしまつて、のどかな夜となる。霞の中に浮かんでゐる松原は、海面に緑の松影をうつしてゐる。かうして霞に包まれた海岸が、どこまでとなく續いて、恐らく九州の海までも續いてゐることだらう。

○月海上に浮かんでは—詩句らしいが出所未詳。
○波濤野火に—波に映る月光が野火のやうに見える。
○漁翁夜西岸に—古文前集柳宗元の詩句「漁翁夜傍二西岸一宿、曉汲二清湘一燒二楚竹一」を引いた。
○今に知られて—今實地に思ひ知られて。
○蘆火—薪の代用とした蘆の火。
○月の出汐—月の出とともにさして來る潮。
○霞の小舟—沖に霞んで見える小舟。
○こがれ來て—「漕がれ」に湊の方を思ひ焦がれる意を兼ねた。
○海士の呼び聲—網を引く爲に海士が人々を呼び集める聲。
○一葉萬里の—一葉の小舟で萬里の大海を渡るをいふ。
○雲の波—波の如くに見える雲。
○月の行くへに—雲が月の行く方角に消えて。
○霞に浮かむ—霞の中に浮かんで見える。
○緑にうつろひて—松影が海上にうつるのをいふ。
○知らぬ火の—筑紫の枕詞そことも知られぬといひかけた。
○筑紫の海—九州の海。

○家居―家。
○釣のいとまも―釣の絲を暇に、暇無きを波にいひかけた。
○ほのぼのと―小舟の帆といひかけた。
○見えて殘る―霞の中に小舟だけ消え殘る意。
○心を誘ふらん―のどかな春景色が心を浮き立たせるだらう。

【三】

シテ・ツレ下歌「ここは八島の浦傳ひ海士の家居も數々に。上歌「釣のいとまも波の上。釣のいとまも波の上。霞み渡りて沖行くや。海士の小舟の、ほのぼのと見えて殘る夕暮。浦風までものどかなる。春や心を、誘ふらん春や心を誘ふらん

シテ「まづまづ鹽屋に歸り休まうずるにて候

といひて釣竿を捨て、ツレと入替りて眞中へ行き下に居る。ツレも釣竿を後見に渡して、シテの右側に行き下に居る。

【三】　ワキ立ちて、

ワキ「鹽屋の主の歸りて候。立ち越え宿を借らばやと思ひ候。（シテに向ひ）いかにこれなる鹽屋の内へ案内申し候

ツレ（立ち）「誰にて渡り候ぞ

ワキ「諸國一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ

ツレ「暫く御待ち候へ。主にその由申し候べし。（シ

その中でも、こゝは八島の浦傳ひて、漁師の家も澤山あり、釣りに暇もないばかり忙しくて、霞み渡つた海面は夕暮に包まれて消えてしまつても、沖の方に出てゐる海士小舟は、ちらほらと消え殘つてゐて、吹く浦風ものどかなことだ。こののどかな春景色に、心が浮き立ち慰められるのだ」

と、暮れて行く八島の浦景色を賞美しながら舞臺に上つた態で、

漁翁「まづ鹽屋に歸つて休みませう」

と濱邊の鹽屋に歸つた態。

【三】

僧は漁翁が家に歸つたのを見て、

僧「鹽屋の主人が歸つた。あそこへ行つて、宿を借りませう」

といつて、鹽屋の前に立つた態で、

僧「もうし、この鹽屋の方にお頼みします」

漁夫「どなたです」

僧「私は諸國を遊歴してゐる僧です。一夜の宿をお貸し下さい」

漁夫「暫くお待ち下さい、主人にさう申し

〇平に—是非とも。

（シテの前へ行き下に居て）いかに申し候。諸國一見のお僧の。一夜のお宿と仰せ候

シテ「易き程の御事なれども。餘りに見苦しく候程に。お宿は叶ふまじき由申し候へ

ツレ立ちワキの方へ行き、

ツレ「お宿の事を申して候へば。餘りに見苦しく候程に。叶ふまじき由仰せ候

ワキ「いやいや見苦しきは苦しからず候。殊にこれは都方の者にて。この浦始めて一見の事にて候が。日の暮れて候へば。平に一夜と重ねて御申し候へ

ツレ「心得申し候。（シテの前へ出て）唯今の由申して候へば。旅人は都の人にて御入り候が。日の暮れて候へば。平に一夜と重ねて仰せ候

シテ「なに旅人は都の人と申すか

ませう。（漁翁に）もうし、諸國を遊歴してゐるお僧が、一晩宿をしてくれと仰しやいます」

漁翁「お易い御用だが、あまり見苦しい所だから、お宿することが出來ませんといへ」

漁夫（僧に）「お宿の事を主人に申しましたが、あまりに見苦しいから、お泊め出來ませんといはれます」

僧「いや〱見苦しいのは構ひません。ことに私は都の方の者で、この浦へ始めて來たのですが、日が暮れたのですから、是非一晩お泊め下さいと、も一度いつて下さい」

漁夫「承知しました。（漁翁に）今のことをお僧に申しますと、あの旅人は都の人なのですが、日が暮れたから、是非一晩泊めて下さいと仰しやいます」

漁翁「なんといふ、旅人は都の人だといふのか」

ツレ「さん候

シテ「げに痛はしき御事かな。さらばお宿を貸し申さん

ツレ『もとより住家も蘆の屋の

シテ「ただ草枕と思し召せ

ツレ『しかも今宵は照りもせず

シテ『曇りも果てぬ春の夜の

シテ ツレ『朧月夜にしくものもなき海士の苫（とシテ立ち）

地「八島に立てる高松の。苔の筵は痛はしや

（とシテ扇にて拂ふ形をし、ワキを招き入れたる心にて、シテ・ワキともに下に居り、ツレは地謡座前に行きて坐す。）

地上歌「さて慰みは浦の名の。さて慰みは浦の名の。群れ居る田鶴を御覽ぜよ。などか雲居に歸らざらん。旅人の古里も。都と聞けばなつかしや。我等ももとはとてやがて涙に咽びけりやがて涙に咽びけり（とシテしをる）

漁夫「さうです」

漁翁「それはほんとにお氣の毒なことだ。それではお宿をしませう」

（と、二人は僧に向つて、）

漁夫「もと〳〵この住家といへば、蘆葺の粗末なもので……」

漁翁「たゞ野宿したつもりで、お泊まり下さい」

漁夫「今晩は照りもせず……」

漁翁「曇りきりもしない、朧月の春の夜で、外はこの上もないよい景色ですが、この鹽屋には何一つ敷くものもない、あの八島に立つてゐる高松の苔のやうな、粗末な筵におのせする次第で、まことにお氣の毒なことです」

（と、やがて家の中に請じ入れた態で、舞臺は家の中の一室となる。）

漁翁「ところで、この浦での慰みごとと申せば、牟禮浦の名のやうに、群れ飛んでゐる鶴でも御覽下さい。あの鶴は勿論雲居の都に歸りませう。旅の方の御郷里も都と伺へば、なつかしう思はれます。私どもも以前は……」

といひかけて、そのまゝ涙に咽んだ。

○痛はしや—氣の毒な。

○蘆の屋—蘆の葉で屋根を葺いた粗末な家。住家も惡しといひかけた。

○草枕—草を束ねて枕とし又は草の上に寢ること、野宿。

○照りもせず曇りも果てぬ春の夜の—新古今集大江千里の歌。下句「朧月夜にしくものぞなき」でその「しく」(比べる)を「敷く」にいひかけた。

○高松—八島の向浦、古高松。今の高松市はその西である。松の木に見立てて「立てる」といつた。

○苔の筵—松に生えた苔を筵の代りとする。前の「敷くものもなき」に應じた。

○慰みは浦の名の—この浦で慰みとなることは。

○群れ居る—八島の南、高松の東にある地名牟禮を群れにいひかけた。

○などか雲居に—新古今集藤原清正の歌「天つ風ふけひの浦に居る田鶴のなどか雲居に歸らざるべき」を引いた。

【四】

○似合はぬ―僧に不似合なこと。
○合戰の巷―合戰の中心地。
○夜もすがら―終夜、夜通し。
○元暦元年三月―實は元暦二年二月十九日である。作者の思ひ誤り。
○錦の直垂―この直垂は鎧直垂の略で、鎧の下に着る。
○紫裾濃―鎧の緘の絲に、上部は白、下ほど濃い紫絲を用ゐたもの。
○着背長―普通よりは草摺の長い鎧、大將が着る。
○鞍笠―鞍の上面、前輪と後輪との間の腰をすゑる所鞍壺。
○一院―後白河上皇。
○檢非違使―非違を檢察し罪人を追捕する職。
○五位の尉―義經は從五位下で左衞門尉であつた。
○源の義經―左馬頭義朝の九男、童名牛若又遮那王。兄頼朝を扶けて義仲を討ち平家を亡ぼしたが、梶原景時の讒言によつて頼朝に疑はれ、奥州に逃れ、文治五年四月衣川で自殺した。年三十一。
○言葉戰ひ―人から、様子、
○言葉戰ひ―互に口で敵を罵り合ふこと。

【四】

ワキ「いかに申し候。何とやらん似合はぬ所望にて候へども、古この所は源平の合戰の巷と承りて候。夜もすがら語つて御聞かせ候へ

シテ「易き間の事語つて聞かせ申し候べし

床几にかゝりて、

シテ「語「いでその頃は元暦元年三月十八日の事なりしに。平家は海の面一町ばかりに船を浮かめ源氏はこの汀にうち出で給ふ大將軍の御出立には。赤地の錦の直垂に。紫裾濃の御着背長。鐙ふんばり鞍笠につつ立ち上り。一院の御使源氏の大將檢非違使五位の尉。源の義經と。名乗り給ひし御骨がら。あつぱれ大將やと見えし。今のやうに。思ひ出でられて候

ツレ「その時平家の方よりも。言葉戰ひ事終り。兵船一艘漕ぎ寄せて。波打際に下り立つて。陸の

【四】

僧「申し、何だか僧に不似合なお願ひですが、昔この所は源平合戰の激戰地だと聞いてゐるのです。どうぞこの夜中、話して聞かせて下さい」

漁翁「お易いことです、お話致しませう」

漁翁はくつろいで、

漁翁「さて、その時は元暦元年三月十八日のことであつたのですが、平家は海の上一町ばかりに船を浮かべ、源氏はこの岸にお出になりました。その時の大將軍のお裝束は、赤地の錦の鎧直垂の上に、紫裾濃の御着背長をお召しになり、鐙をふんばり鞍壺に立ち上つて、『自分こそ後白河上皇の御使で、源氏の大將、檢非違使五位の尉源義經であるぞ』とお名乘りになつた御様子、實に御立派な大將に見えました。それがつい今のことのやうに思ひ出されます」

漁夫「その時、平家の方からも、もう口の罵り合ひは濟んで、兵船一艘こちらへ漕ぎ寄せて、波打際に下りて立ち、陸に

○三保の谷の四郎　武藏國の住人。錏引をしたのは〔景清〕にも四郎とあるが、平家物語には兒の十郎とす。

○惡七兵衛景清―平家の侍武勇に勝れてゐた。この人のこと〔大佛供養〕〔景清〕に作らる。

○錏―兜の鉢の後から左右にかけて垂れ首筋を被ふ物

○鉢附の板―兜の鉢に縫ひ附けた、錏の一番上部の板。

敵を待ちかけしに

シテ「源氏の方にも續く兵五十騎ばかり。中にも三保の谷の四郎と名乘つて。眞先かけて見えし處に

ツレ「平家の方にも惡七兵衛景清と名乘り。三保の谷を目がけ戰ひしに

シテ「かの三保の谷はその時に。太刀うち折つて力なく。少し汀に引き退きしに

ツレ『景清追つかけ三保の谷が

シテ「着たる兜の錏を摑んで

ツレ『後へ引けば三保の谷も

シテ『身を遁れんと前へ引く

ツレ『互にえいやと

シテ『引く力に

地『鉢附の板より。引きちぎつて（と扇を前へ引き）。左

ゐる敵源氏の攻め來るのを待つてゐますと……」

漁翁「源氏の方でも、五十騎ばかりの武士がうち續いて攻め寄せ、その中でも、三保谷四郎と名乘つて、眞先に立つて驅けて行きますと……」

漁夫「平家の方でも、惡七兵衛景清と名乘つて、三保谷を目がけて、戰ひましたが……」

漁翁「その時、三保谷は太刀をうち折つたので、是非なく少し岸へ引き退きましたのを……」

漁夫「景清は追つかけて……」

漁翁「三保谷の着てゐた兜の錏をつかんで……」

漁夫「後へ引きましたので……」

漁翁「三保谷も遁げようとして、前へ行きます。互にえいやと引くと、その力で、三保谷の鉢附の板が引きちぎれて、二人はどつと左右に引き退きました。――

右へくわつとぞ退きにけるこれを御覧じて判官（左右を見廻し）。お馬を汀にうち寄せ給へば（と床几を離れ）。佐藤繼信能登殿の矢先にかかつて馬より下に、どうと落つれば（と目附柱の方を見拍子を踏みて落馬の態を示し）。船には菊王も討たれければ（と正面を見つゝ）ともにあはれと思しけるか船は沖へ陸は陣に（と船を見送りて右へ廻り）。相引きに引く汐のあとは鬨の聲絶えて、磯の波松風ばかりの音寂しくぞなりにける（と脇正面を見渡して下に居る）

【五】

地ロンギ 不思議なりとよ海士人の。あまり委しき物語。その名を名乗り給へや

シテ わが名を何と夕波の、引くや夜汐も朝倉や、木の丸殿にあらばこそ名乗りをしても行かまし

地 げにや言葉を聞くからに。その名ゆかしき老

判官義經はこれを御覧になつて、お馬を波打際近くへお寄せになると、佐藤繼信は（大將の御身を案じて御前に立ち塞がり）能登守教經殿の矢に射られて、馬からどうと落ちました。一方平家の船でも菊王が討たれたので、敵も味方も共に哀れに感じたものか互に引き上げて、平家の船は沖の方へ、源氏の軍は陸の方へ、雙方とも引き退いて、汐も引いて行けば、鬨の聲も聞えず、たゞ磯打つ波音、松風の聲ばかりがもの寂しく聞えるのでありました」

【五】

僧「これは不思議だ。漁師としては餘りに委しい話振り。どうかお名前をいつて下さい」

漁翁「私の名を何と申しませう。あの朝倉の木丸殿の御前ならば、御歌にも仰せられた通り名を申し上げても行きませうが……」

僧「いやそのお言葉を聞くにつけて、御老

○判官—義經。檢非違使判官であつた、

○佐藤繼信—陸奥の佐藤莊司元治の子、三郎兵衞といふ。弟忠信と共に義經に仕へて誠忠を盡した勇士。〔忠信〕〔攝待〕參照。

○能登殿—平教經。門脇中納言教盛の次男、武勇の人であつたが、壇の浦で入水した。年二十六。〔碇潜〕參照、

○菊王—教經の童。忠信に殺された。

○相引き—敵味方とも同樣に引退くことに引くを承けて「引く汐」を呼び出した。

【五】

○あまり委しき—「海士」の音を重ねた、

○夕波の—何と言ふといひかけた、

○引くや夜汐も—夜汐も淺きを朝にいひかけた、

○朝倉や木の丸殿に—新古今集天智天皇御製「朝倉や木の丸殿にわれ居れば名のりをしつゝ行くは誰が子ぞ」を引き、こゝは木の丸殿でないから名乗らないといふ。木の丸殿は天皇が筑前國朝倉山に丸木でお造りになつた行宮。

人の

シテ『昔を語る小忌衣

地『頃しも今は

シテ『春の夜の

地『潮の落つる曉ならば修羅の時になるべしそ
の時は。わが名や名乘らんたとひ名乘らずとも
名乘るとも。よしつねの浮世の夢ばし覺まし給
ふなよ夢ばし覺まし給ふなよ

人のお名前が伺ひたいと思ひます」

漁翁「老人の昔話をしてゐるうちに、今はもはや春の短夜も過ぎました。やがて潮の引く朝方になれば、修羅道に歸つて苦しむ時となります。その時私の名を名乘りませう。いや名乘つてもよし、名乘らなくてもよし、常の世の、この浮世の夢を覺まさないで、お待ち下さい」

といつて、漁翁も漁夫も消え失せる態で退場。

シテ「わが名や名乘らん」と立ち、「夢ばし覺まし」と常座にてワキへ開き、靜かに中入。ツレも續いて幕に入る。

【間】

狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。八島の浦に住居する者にて候。久しく鹽を燒かせ申さず候間。今日は鹽屋を見廻り。鹽を燒かせばやと存ずる。(脇座の方を見て)あら不思議や。鹽屋の戸が明いてある。見れば人の出入したる跡もなし。(ワキを見て)いやこれなるお僧は何とてこの鹽屋には御座候ぞ

ワキ「これは主に借りて候

狂言「いや〳〵さやうにてはあるまじく候。この所の大法にて。人の鹽屋をわがまゝにせず。わが鹽屋をも人のまゝに致す事ならず候。これは某が鹽屋なれば。餘の者は貸すまじく候が。お僧は妄語を仰せ候か

○小忌衣―祭服。こゝでは老と小忌、衣と頃と、音を重ねる爲に出しただけである。
○潮の落つる―汐の引く。
○修羅の時―修羅道に歸つて闘諍に苦しむべき時。
○よしつねの―名乘るとも善し、常の浮世のといふのを義經にいひかけ、ほのかに名を漏らしたのである。
○夢ばし―夢をば。しは強めの助詞。

【間】

○大法―嚴しい規則。
○妄語―五戒の一。でたらめ、うそいつはり。

○なか／＼—然りといふ意の時代言葉。

○近頃にて候—近頃にない甚だ喜ばしいことだ。

○こゝを先途—勝敗の決する大切な場合。今がせとぎはである。

ワキ「いや／＼妄語は申さず候。御身はこの屋の主にて候か
狂言「なか／＼鹽屋の主にて候
ワキ「それにつき尋ねたき事の候。まづ近う御入り候へ
狂言「心得申して候。（眞中に出で下に居て）さて何事を御尋ねなされ候ぞ
ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この浦は源平兩家の合戰の巷と承り及びて候。軍物語あつて聞かせ候へ
狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「まづ八島の合戰の年號は。元暦元年三月中旬の事なりしに。平家は海の面一町ばかりに船を浮かめ。源氏はこの渚に御陣をすゑられ。源氏の白旗平家の赤旗。春風にたなびき見事にてありたると申す。十八日酉の刻とも思しき時分。平家方より武者一騎。陸に上り名乗るやうは。われは惡七兵衞景清なり。判官殿に見參せんとて。長刀を水車の如く振つてかゝる。源氏の方にも續く兵。數多ある中にも三保の谷の四郎と名乗り。太刀刀をするりと拔き。鍔を割り。鎬を削り。こゝを先途と戰ひしが。大事の事の候。三保の谷の太刀が鎺元一二寸置いてほつきと折れ候間。三保の谷申され候は。御覽の如く太刀うち折れて刀なし。本陣へ歸り。替りの太刀を取つて勝負をつけ申さんとて。汀を引き退きしを。景清追つ驅け三保の谷が着けたる兜の錏をつかんで引き留められ候が。三保の谷のさはさせじとて。前へ引かるゝ。互にえいやと引く力に。鉢附の板より引きちぎつて。景清は仰向けに一町ばかりころばれし程に。ぼんのくぼに石踏が出來たると申す。又三保の谷はうつ伏に一町ばかりころばれしが。折節三月の事なれば。鼻の先の落花仕りたると申す。然れども互に拔ん

○亡心—亡靈。

【六】

○松が根枕敧てて—松の根を枕とし、その枕を傾け耳を立てて。
○思ひをのぶる—思ひを述べるを筵を敷き延べるにいひかけた。
○重ねて—筵の緣語。

合ひ本陣へ御引きありたると承り及びて候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候ふ。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老人と若き男の。主の體にて来られ候程に。則ち宿を借りて泊りて候。合戰の様體尋ねて候へば。唯今御物語りの如く懇に語り。よしつねの世の夢心。覺まさで待てといひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては義經の御亡心現れ給ひたると存じ候間。御逗留あつて義經の誠の様體を御覧あれかしと存じ候

ワキ「暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御逗留にて候はば。見苦しく候へどもあたりに宿を持ちて候間。御宿を申さうずるにて候

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ「不思議や今の老人の。その名を尋ねし答へにも。よしつねの世の夢心。覺まさで待てと聞えつる

ワキツレ 上歌（待謡）二 聲も更け行く浦風の。聲も更け行く浦風の。松が根枕敧てて。思ひをのぶる苔筵。重ねて夢を待ちゐたり重ねて夢を待ちゐたり

【六】　後段

僧「これは不思議だ、今の老人に名を尋ねると、その答へにも、いゝ、よしつねの世の夢心地を覺まさないで待つてゐよといつた。その聲も浦風も夜も更けて行く折から、松の根を枕とし、苔を筵として、よく氣をつけて樂しんで、また夢に現れるのを待つてゐよう」。

（假寢して、夢を待つてゐる。）

【七】

○落花枝に歸らず—傳燈錄に「落花難レ上レ枝、破鏡不二重照一」二度死ねば二度この世に歸り難い喩へ。
○妄執の瞋恚—この世に殘る執着から怒りの念が起り
○鬼神—こゝでは心の鬼の意であらう。
○修羅—六道の一。日夜鬪諍を事とする世界。
○淺からざりし—波の緣語
○業因—惡果を受くべき惡業。
○生死の海—生死流轉する迷界。その苦しみの深いことを海に喩へた。
○沈淪—沈むこと。
○おろかや—迂潤なことだ
○眞如の月—變易なき諸法の實體實性を月に喩へた語。悟れば生死の苦がないとの意。
○春の夜なれど—春は朧夜が多いからかういつた。

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ源義經、面平太・黑垂・梨打烏帽子・白鉢卷・襟淺黃・着附段厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテ『落花枝に歸らず。破鏡二度照らさず。然れどもなほ妄執の瞋恚とて。鬼神魂魄の境界に歸り。われとこの身を苦しめて。修羅の巷に寄り來る波の。淺からざりし。業因かな

ワキ〽不思議やなはや曉にもなるやらんと。思ふ寢覺の枕より。甲冑を帶し見え給ふは。もし判官にてましますか

シテ〽われ義經が幽靈なるが。瞋恚に引かるる妄執にて。なほ西海の波に漂ひ。〽生死の海に沈淪せり

ワキ〽おろかやな心からこそ生死の。海とも見ゆれ眞如の月の

シテ〽春の夜なれど曇りなき心も澄める今宵の

【七】

後ジテ源義經、僧の夢に現れる態で登場、

義經「一度散つた花は二度枝に歸らず、一度破れた鏡はもはや物を映さないのだ。一度死んだものは二度この世に歸ることは出來ないのだ。それだのに、やはりこの世に執着が殘つて、怒りの念が起り、心の鬼が魂魄の世界にもつき纏つて來て、われとわが身を苦しめて、修羅の鬪諍に身を引き入れるのだ。あゝこれも前世の深い罪業の報いだ」

僧ハ夢うつゝに義經の姿を見て、

僧「これは不思議だ、もはや朝方にもなつただらうと、ふと眼を覺ますと、枕許に甲冑を着た方がお見えになるが、もしやあなたは判官でいらつしやるのでせうか」

義經「自分は義經の幽靈だが、怒りの念に引きづられ、この世に執着が殘つて、昔西海に漂つた時と同じやうに、今も海の如き生死流轉の苦しい迷界に沈んでゐるのだ」

僧「これは迂潤な話です。わが心の迷ひから生死の苦界とも見えるのであつて、月の如く悟り澄ませば、そんなものはない筈です」

義經「なる程、春の夜は朧がちなものであ

○八島にいるや―武士の矢を八島に、矢を射るを入る月に、月を槻弓にいひかけた。
○槻弓の―弓の本末にかけて、元の身と續けた。
○弓箭の道―武士の道。ここに來といひかけた。
○歸る八島の―魂の還るを歸る矢にいひかけた。
○恨めしや―八島の浦といひかけた。

【八】
○閻浮の故郷―この世。閻浮は須彌四洲の一、閻浮提の略。
○年波の―年數の。波の寄るを夜にいひかけた。

空（と上を見）
ワキ「昔を今に思ひ出づる
シテ「船と陸との合戰の道
ワキ「所からとて
シテ「忘れ得ぬ
地上歌「武士の。八島にいるや槻弓の。八島にいるや槻弓の。もとの身ながら又ここに。弓箭の道は迷はぬに。迷ひけるぞや。生死の。海山を離れやらで。歸る八島の恨めしや。とにかくに執心の。殘りの海の深き夜に。夢物語、申すなり夢物語申すなり

【八】
地クリ「忘れぬものを閻浮の故郷に。去つて久しき年波の。夜の夢路に通ひ來て。修羅道の有樣現すなり

この間にシテ眞中へ行きて床几にかゝり、

るのに、今晩は心も澄み渡るばかり雲もなく晴れてゐることだ」
僧「さうした今、昔の事を思ひ出すとは……」
義經「いや、思へば昔、船と陸とで合戰したことは……」
僧「なる程、こゝは場所が場所ですから……」
義經「忘れられないで、武士としてこの八島で戰つた、その時のまゝの姿で、またこゝに現れて來たのだ。武士の道には迷はないが、この世には迷ひの心が殘つて、生死の苦界を離れることが出來ず、また八島へ歸つて來たのは、われながら恨めしいことだ。しかし、とにかくこの世に執心が殘つて出て來たのだから、この深夜に、夢物語をするのだ」
と、これより夢物語を始める。

【八】
義經「忘れることの出來ないこの娑婆。もはやこゝを去つてから永い年數を經たのだが、今お僧の夜の夢に現れて來て、修羅道の有樣を見せるのだ。」―

○月も今宵に冴えかへり―月も今宵のやうに冴えきつて。「かへり」は上の動詞を强める接尾語。それを歸りにいひかけた。
○船を組み―平家の軍勢。
○駒を並べ―源氏の軍勢。
○足なみに―一足進む毎にとの意。
○鑣―口銜、轡に同じ。

シテサシ〽思ひぞ出づる昔の春。月も今宵に冴えかへり

地〽もとの渚はここなれや。源平互に矢先を揃へ。船を組み駒を並べて。うち入れうち入れ足なみに鑣を浸して攻め戰ふ

シテ〽その時何とかしたりけん。判官弓を取り落し。波にゆられて流れしに

地〽その折しもは引く汐にて。遙かに遠く流れ行くを

シテ〽敵に弓を取られじと。駒を波間に泳がせて。敵船近くなりし程に

地〽敵はこれを見しよりも。船を寄せ熊手に懸けて。既に危く見え給ひしに

シテ〽されども熊手を切り拂ひ。終に弓を取り返し。もとの渚にうち上れば

思ひ出せば、昔あの時の春の月も、丁度今晩のやうに冴えきつてゐた。―

昔の波打際は丁度こゝなのだ。源氏も平家も互に矢先を揃へ、平家は海に船を並べ、源氏は陸に馬を並べて、どちらもぐん〳〵と進んで行つて、源氏の方は一歩一歩と轡を水に浸して進み戰つたのだ。

その時、どうした事か、自分は弓をとり落して、弓は波にゆられて流れて行く。

丁度その時は引汐で、弓がずつと遠くへ流れて行くのを、自分は敵に弓を取られてはならないと、馬を波間に泳がせて、敵船の近くまで行つたので、敵はこれを見るや否や、船をこちらへ近寄せ、熊手にひつ懸けようとして、もはや命も危く思はれたが、しかし自分は熊手を切り拂つて、とう〳〵弓を取り返して、もとの岸邊に上つた。―

○兼房　増尾十郎權頭。義經の臣。〔安宅〕參照。
○渡邊にて景時が—元曆二年二月攝津國渡邊から四國へ船出する時、梶原平三景時が逆艣をつけようと勸めたのを、義經が斥けたので、「猪武者とてよきにはせず」といつた事。
○千金をのべたる—千枚の黄金をのべて作つた貴重な弓。
○源平に弓矢を取つて—源平の戰ひに加はつて。
○私なし—私心、野心はない。
○佳名は未だ—わが美名を天下に揚げるには、まだ半分にも達しない。
○小兵—からだの小さい武士。
○力なし—致し方がない。
○さらずは—運が盡きて命をとられない限りは。
○弓取—武士。波に引かるる弓取らんといひかけた。
○名は末代—古諺に「人は一代名は末代」。本朝文粹十高階積善の詩序に「夫形者百年之旅館也、名者萬代之嘉賓也」
○智者は惑はず—論語子罕篇に「子曰智者不レ惑、仁者不レ憂、勇者不レ懼」

地」その時兼房申すやう。口惜しの御振舞やな。渡邊にて景時が申ししも。これにてこそ候へ。たとひ千金を延べたる御弓なりとも。御命には代へ給ふべきかと。涙を流し申しければ。判官これを聞し召し。いやとよ弓を惜しむにあらず

(居クセ)

地クセ「義經源平に。弓矢を取つて私なし。然れども。佳名は未だ半ばならず。さればこの弓を。敵に取られ義經は。小兵なりといはれんは。無念の次第なるべし。よしそれ故に討たれんは。力なし義經が。運の極めと思ふべし。さらずは敵に渡さじとて波に引かるる弓取の。名は末代にあらずやと。語り給へば兼房さてその外の、人までも皆感涙を流しけり

シテ「智者は惑はず(と立ち)

すると、兼房がいふには『實に殘念なお振舞です。先達、渡邊で梶原景時があなたを猪武者だと申しましたのも、このことです。たとへ千金をのべて作つた御弓にしたところで、大切なお命とお取替へになることがありますか』と、涙を流して諫めたので、自分はこれを聞いて『いや違ふ、自分は弓を惜しんだのではない。——

自分は源平の合戰に弓矢を取つて戰ふのも、別に外に野心があるわけではない。しかし、天下に美名を揚げるには、まだその半分にも達しないのだ。そのやうな場合に、この弓を敵に取られて、義經は小男だといはれるのは、殘念なことだ。たとへ、この爲に討たれたところで、それは是非がない、自分の運の盡きとあきらめようが、死なない以上は、運の盡きない限りは、敵に渡してはならないと、波に引かれて行く弓を取つたわけだ。これは末代までの名を重んずる仕業ではないか』といつて聞かせたので、兼房を始めその外の人々も皆感涙を流したのだ。諺に『智者は惑はず、勇者は恐れず』といふ通り、勇武の者が敵に弓を取られまい

○彌猛心―愈々勇み立つ心
○惜しむは―弓を惜しむは
○後記―歷史。
○弓箭―武名を傳へる記錄
【九】
○矢叫び　矢を放つ時の掛聲。
○ものものし―仰山らしい
○手並―腕前、
○壇の浦―長門國豐浦郡、下之關海峽の北岸、平家の滅亡した所。

地「勇者は恐れずの、彌猛心の梓弓敵には取り傳へじと、惜しむは名のため惜しまぬは、一命なれば。身を捨ててこそ後記にも、佳名を留むべき弓箭の跡なるべけれ

【九】
シテ「また修羅道の鬨の聲（と脇正面の方に向き鬨の聲を聞く心）
地「矢叫びの音。震動せり（拍子を踏み）
〔カケリ〕
に戰の凄じき樣を示し、次の謠に合せて仕科。
シテ「今日の修羅の敵は誰そ。なに能登の守教經とや。あらもののしや手並は知りぬ。『思ひぞ出づる壇の浦の
地「その船軍今は早。その船軍今は早。閻浮に歸る生死の。海山一同に。震動して。船よりは、鬨の聲

と惜しむのは名譽の爲で、その爲には一命をも惜しまないのであつて、身を捨ててこそ歷史にも美名を殘し、武名を文に書き記されるのだ」
と語るうちに、今の修羅道の苦に襲はれる態で、

【九】
義經「また修羅道に鬨の聲が起つて、矢叫びの音が震動する―
〔カケリ〕
に修羅鬪諍の樣を示し、
義經「修羅道の今日の敵は誰だ。なに、能登守教經だと。何を大層らしい、腕前は分つてゐるのだ。おゝあの壇の浦の船軍の樣が思ひ出される。いや今またこの娑婆に立ち歸つて、生死を賭した戰ひをすれば、海も山もみな震動して、平家方の船からは鬨の聲があがる。―

シテ『陸には波の楯

地『月にしらむは

シテ『劍の光（と太刀を拔き）

地『潮に映るは

シテ『兜の。星の影

地『水や空空行くも又雲の波の。撃ち合ひ刺し違ふる（太刀にて敵を斬る形）船軍の掛引。浮き沈むとせし程に。春の夜の波より明けて（扇にて形を示し）。敵と見えしは群れゐる鷗。鬨の聲と。聞えしは。浦風なりけり高松の浦風なりけり。高松の朝嵐とぞなりにける

（と常座にて留拍子を踏む。）

源氏方の陸には楯が波のやうに竝んでゐる。

月の光で劍が白々と光つて見える。――

潮に兜の星影が映つてゐる。――

水か空か、空か水か、空行く雲も波のやうに見える中に、撃ち合ひ刺し違ふのだから、かうして船軍の掛引に、浮きぬ沈みぬしてゐると思ふうちに、春の夜が波間から明けて來て、今まで敵と見えてゐたのは、水上に群れ集まつてゐる鷗、鬨の聲のやうに聞えてゐたのは、高松の浦風であつた。

夜が明けて僧の夢が覺めれば、亡靈の姿も消えてしまふ。

○波の楯　波のやうに立て竝べた楯。

○兜の星―兜の上に打つた銀の鋲。

○水や空―新後拾遺集讀人知らずの歌に―水や空空や水とも見えわかず通ひてすめる秋の夜の月」

○空行くも又―空行く雲も波のやうに見え、

○撃ち合ひ―波の打ちといひかけた。

○群れゐる　地名牟禮にいひかけた。

○高松の　地名にいひかけた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】ワキ次第「月も南の海原や……八島の浦を尋ねん（春喜ナシ）

古謡本（光悦本）

【一】ワキ「これは都方より出でたる（光諸國一見の）僧にて候……ワキ「急ぎ候程にこれははや（光ナシ）讃岐の國（光愛をは）八島の浦に着
きて（光とやらん申）候　【三】ワキ「鹽屋の主の歸りて（光たる聲のし）候……ツレ「お宿の事を……見苦しく候程に（光御宿は）叶ふまじ
き由（光と）仰せ候」ワキ「いやいや（光なふしほやの）見苦しきは……殊に（光ナシ）これは都方（光ナシ）の者にて（光候か）……一見の事（光
者にて候が（光ナシ）日の暮れて（光前後を忘して）候へば……ツレ「心得申し（光承）候……都の人にて御入（光渡）り候が（光初て此浦一見
と仰候）日の暮れ……シテ「なに旅人は都の人と申す（光にて御いり候か）この所はしめたる御事なれはひらに一夜と仰候か　ツレ「さん光
さやうに仰候……　【四】ワキ「いかに申し（光尉殿に申へき事の）候……古（光ナシ）この所は……承り候（光へは）夜もすがら語つて御
聞かせ（光その時のありさま委御物かたり）候へ」シテ「易き間の事（光けにノヽ是は似あはぬ御所望にて候へともさりながら　おもてなし
によもすがら）語つて聞かせ申し候べし（光ちからよつて御きゝ候へ）……　【五】地ロンギ「不思議なりとよ海士人の（光ノヽ）……

【八】シテ「その時何とかしたりけん判官（光義經）……

山姥（やまうば）

觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】五番目　複式劇能

【人物】ツレ　遊女山姥、ワキ　從者、ワキツレ　同從者（二三人）、狂言　境川の者、前シテ　里女（山姥）、後シテ　山姥

【所】越後國　上路山

【時】（無季）

【異稱】「山婆」「山祖母」「山姨」とも書いた。

【作者】能本作者註文に世阿彌の作とす。二百十番謡目錄には金春禪竹の作としてゐるが、世子六十以後申樂談儀に「山姥、百萬、是等は皆名誉の曲舞とも也」とあるから、古く曲舞として行はれてゐたもので、能作書に「百萬、山姥なとと申したるは、曲舞まひの懸風なれば、大方やすかるべし」といひ、殊に申樂談儀に「實盛、山姥をば當御前にてせられし也」とあるから、世阿彌の當時能として演せられてゐたもの、從つて世阿彌の作と見るのが正しいであらう。糺河原勸進猿樂記に寛正五年四月七日、蔭涼軒日錄に寛正六年九月廿八日、その他屢々演能の記事が見えて居り、言經卿記文祿四年三月二十八日の條に本曲註釋のことが出てゐる。

【梗概】山姥の曲舞を作つて、名もひやくま山姥と呼ばれた遊女が、善光寺へ參らうと思つて、都を立ち遙々の旅を續けて、越中越後の國

境の境川に着き、それから險岨な上路山を登つて行くと、俄かに日が昏くなつたので、當惑してゐる處へ、一人の女が出て來て、「お宿をしませう」といつて、わが庵へ連れ歸り、「私が眞の山姥です。私の事を作つた曲舞を謡つて、輪廻の苦しみを免れさせて下さい」といふ。遊女が驚き恐れて謡はうとすると、「暫くお待ち下さい、月の出る頃になれば、私も眞の姿を現して舞を舞ひませう」といつて消え失せる。やがて夜になると、果して山姥が鬼女の姿を現して出て來て、山姥の曲舞を舞ひ、山廻りの樣を示し、名殘を惜しんで暇を告げ、山又山をかけ廻つて、行方知れずになつてしまふ。

【出典】　前に述べたやうに、山姥の曲舞を本として、一篇の謡曲に脚色したもので、その原據の曲舞も、山姥は山に住む女で、所定めず山山を廻り歩くものであるといふ所から、佛教臭味の濃い曲を創作したものであつて、取り立てて擧ぐべきほどの典故はない。

【概評】　まづ本曲の中心である曲舞について考へるに、形は、次第から謡ひ初めて次第で謡ひ止める、曲舞の原則に適つたものであるが、その文章は原形のまゝではなく、可なり修理されてゐるのであらう。煩惱即菩提の絶對觀と、柳は緑花は紅の差別觀、山姥の山廻りに衆生輪廻の苦を寓するのは、恐らく原文の意を傳へたものであらうが、山姥が一念化生の姿となつて衆生を助けるといふのは、或は謡曲作者の補修かも知れない。都への言傳を乞ふのは、勿論新しい加筆であらう。いづれにしても、曲舞に現れた山姥の性格は、佛教を悟つた、衆生を愛撫する、鬼女といふよりは寧ろ仙女ともいひたいものである。從つて謡曲全體を通じても、凄慘な趣が少く、最後の、四季の風光を賞して山廻りする條などは、寧ろ優雅な趣をさへ與へてゐるのである。かうした山姥の性格は原據に支配せられたものとして、謡曲脚色上の手柄はツレに遊女山姥を出した所にあるのであつて、この可憐な、そして鬼女山姥と必然的な關係を持つてゐる女性を、險岨な上路山に導いて行つて、こゝで鬼女山姥に對面させた所に、一曲全體を通じて、脇能や三番目物などでは見られない、五番目物らしい怪奇さを示してゐるのである。

【一】

【一】

次第の囃子にて、ツレ遊女山姥、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束、ワキ從者、着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束、ワキヅレ同從者二三人、ワキ同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ツレ遊女山姥、ワキ・ワキヅレの從者を伴つて登場。

○善き光ぞと—善光寺の名を隠して用ゐた。
○ひやくま山姥—遊女の名。山姥の名の由來はワキが述べてゐるが、「ひやくま」も同じ曲舞の「百萬」から與へられた名であらう。諸本には「百魔」の字を充ててゐるのが多い。
○山姥—謠にいつてゐるやうに、山に住む鬼女と想像したもの。
○曲舞—室町初期に流行した一種の俗舞。總說第二章—曲舞—の項參照。
○善光寺—長野市にあり、皇極天皇の時に創建。本尊は百濟國傳來の阿彌陀如來。本田善光の建立と傳ふ。
○さゝ波や—志賀の枕詞。
○志賀の浦舟—近江國琵琶湖の渡舟。
○有乳の山—近江國高島郡劔熊村から越前國敦賀郡愛發村に入る國境の山。
○玉江の橋—越前國足羽郡麻生津にあつた。露散る玉といひかけ、橋の縁で次句に續けた。
○汐越—越前國坂井郡北潟村濱坂の岬。名木の松があつた。
○安宅の松—安宅は加賀國

ワキ・ワキヅレ〽次第 善き光ぞと影頼む。善き光ぞと影頼む佛の、御寺尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ〽これは都方に住居仕る者にて候。又これに渡り候御事は。ひやくま山姥とて隠れなき遊女にて御座候。かやうに御名を申す謂れは。山姥の山廻りするといふ事を。曲舞に作つて御謠ひあるにより。京童の申し慣はして候。又この頃は善光寺へ御參りありたき由承り候程に。某御供申し。唯今信濃の國善光寺へと急ぎ候

ワキ・ワキヅレ〽サシ 都を出でてさゝ波や。志賀の浦舟こがれ行く。末は有乳の山越えて。袖に露散る玉江の橋。かけて末ある越路の旅。思ひやるこそ遙かなれ

ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〽上歌 梢波立つ汐越の。梢波立つ汐越の。安宅

従者「御利益のあらたかな善光寺へお參りしよう」

（次第を謠つて、旅の目的を述べ、

従者「私は都の方に住んでゐる者です。又こゝに居られる方は、ひやくま山姥といつて、有名な遊女です。この方のお名をこのやうにいふわけは、山姥が山廻りをするといふ事を曲舞に作つてお謠ひになるので、それで世間でひやくま山姥と申してゐるのです。この方がこの頃善光寺へ御參詣になりたいと仰しやるので、私がお供して、これから信濃國善光寺へ急いで出掛けるのです」

（見物人に自己紹介をし、

従者「都を出立して、志賀の浦から舟に乘つて湖を渡り、それから有乳山を越えて、袖に露の散りかゝる玉江の橋を渡つて、まだまだ行先の遠い北越へ旅を續けて行くことかと思へば、隨分遠々しい感じのすることだ。——

松の梢にまで波のかゝつてくる汐越や、

能美郡、今の安宅町の東に根上り松といふ名木があつた。
○消えぬ憂き身の—煙の消えないのを、憂き身の生きながらへるに喩へた。
○罪を斬る—罪を着るに通はせた。
○彌陀の劍—唐の善導の般舟讃に「利劍即彌陀號、一聲稱念罪皆除」とあり、彌陀の名號は利劍の如く一切の罪障を斷絶すとの意。
○礪波山—越中國礪波郡にある、劍の利きといひかけた。
○雲路うながす—「うながす」は項に掛ける意で、雲の山に覆ひかゝるをいふ。
○三越路—越前・越中・越後の三國をいふ。
○境川—越中國下新川郡境村と越後國西頸城郡上路村との間を流れる川。

の松の夕煙。消えぬ憂き身の、罪を斬る彌陀の劍の礪波山。雲路うながす三越路の。國の末なる里問へば。いとど都は遠ざかる。境川にも着きにけり境川にも着きにけり

「雲路うながす三越路の」とワキは正面に向きて、二三足出で、またもとに歸りて境川に着きたる心。上歌濟みて正面に向き、

ワキ「御急ぎ候程に。これははや越後越中の境川に御着きにて候。暫くこれに御座候ひて。猶々道の樣體をも御尋ねあらうずるにて候

ワキヅレ「然るべう候

ワキ(ツレに)「まづかう御座候へ

といひて、ツレ・ワキヅレ脇座の方へ行く。ワキ仕手柱先に立ち橋懸の方に向き、

ワキ「境川在所の人の渡り候か

狂言境川の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「境川在所の者と御尋ねは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「これは都方の者にて候。これより善光寺への路次の樣體

安宅の松のあたりを通つて、夕煙の立ちこめてゐるのを見るにつけ、この容易に消すことの出來ないわれら凡夫の罪業を、どうか阿彌陀如來の御力によつて消滅させて戴きたいと祈りながら、礪波山を越え、雲の空を掩つてゐる北越の涯まで來て、この里はどこかと尋ねれば、境川だといふことで、都から随分遠く離れた、この境川に着いたのだ」

といつてゐる間に旅は進んだ態で、舞臺は境川となる。從者は遊女に向ひ、

從者「旅をお急ぎになつたので、もう越後と越中との國境の境川にお着きになつたのです。暫くこゝにお休みになつて、これからの道筋などをお尋ねになるのがよいと思ひます」

從者が狂言所の者に善光寺への道筋を尋ねると、所の者は「上路越が一番近いが、女には越え難い」と教へる。從者がその山を遊女に告げると、

教へて給はり候へ

狂言「さん候これより善光寺への道は。上道下道上路越と申して御座候が。中にも上路越は如來の踏み分け給ふ道にて候。この道を御通り候へば如來の御内證に叶ふ道にて候。さりながら險難さかしき道にて。女性女﨟などは叶はぬ道にて候間。その分御心得候へ

ワキ「懇に御教へ祝着申して候。御覽候如く女性の御供申して候間。この由申し候べし。暫くそれに御待ちあつて給はり候へ。(ツレの前に出で)いかに申し候。善光寺への道尋ね申して候へば。上道下道上路越とあり。中にも上路越を通り候へば。如來の踏み分け給ふ道と承り候。さりながら乘物は叶はぬ由申し候

ツレ「げにや常に承る。西方の淨土は十萬億土とかや。これは又彌陀來迎の直路なれば。上路の山とやらんに參り候べし。「とても修行の旅なれば。乘物をばこれに留め置き。徒跣にて參り候べし。道しるべしてたび候へ

ワキ「さらばその由申し候べし。(狂言に)最前の人の渡り候か

遊女「いつも聞いてゐる極樂淨土は、十萬億の佛土を距つた遠い西方にあるといふことだが、こゝは衆生をお迎へ下さる阿彌陀如來のお側(善光寺)へすぐ參られる道なのだから、たとへ苦しくても構はない、上路山とやらへ登りませう。どうせ修行の旅のことだから苦しいのは厭ひませぬ。乘物はこゝに留めて置いて、徒歩で參りませう。どうぞ案内して下さい」

○十萬億土—阿彌陀經に「從レ是西方、過二十萬億佛土一、有二世界一、名曰二極樂一」佛土は一佛の支配する世界。阿彌陀如來を教主とする極樂淨土は娑婆から十萬億の佛世界を距てた西方にあるといふ。
○彌陀來迎の直路—衆生の爲に來迎する阿彌陀如來を本尊とした善光寺參詣の道を稱へていつた。
○上路の山—越後國西頸城郡にあり、親不知子不知の最も險岨な所。

狂言「これに候

ワキ「御申しの通りを女性に申して候へば。乗物をばこれに留め置き。徒跣にて參らうずるとの御事にて候。とてもの事に案内者あつて給はり候へ

狂言「尤も案内者申したく候へども。叶はぬ用の事候間なるまじく候

ワキ「仰せはさる事にて候へども。平に案内者あつて給はり候へ

狂言「重ねて承り候程に。御道しるべ申さうずるにて候。まづかう〳〵御座候へ

ワキ「心得申し候。（ツレに）さらば御立ちあらうずるにて候

といひて舞臺の眞中に立ち、狂言も舞臺に入り名乘座に立ちて、

狂言「何と先に申したるが如く險難なる道にては候はぬか

ワキ「げに〳〵承り及びたるよりは險難にて候

狂言（脇正面の上を見て）「あら不思議や。俄かに日の暮るゝやうになり申して候。これと存じ候はば境川にてお宿を取り申さうずるものを。殘り多き事にて候

ワキ「あら不思議や。暮れまじき日にて候が俄かに暮れて候よ。さて何と仕り候べき。このあたりに

○平に―是非とも。

◎あら不思議や―以下「何と仕り候べき」まで謠本に從つたが、本書の底本とした脇寶生には「げに〳〵俄かに日の暮るゝやうに候」とある。

上路山の途中まで來ると、俄かに日が暮れる。

從者「これは不思議だ。まだ日の暮れる筈はないのに、急に日が暮れた。これはどうしたものであらう」

【三】

○前後を忘じて—どう處置すればよいか、途方にくれる意。

○やがて—早速。

○山姥の歌—後に出る曲舞

○鄙の思出—都の樣を見られない田舍住ひの者にとつて、いつまでも長い間の思出の種。

泊りはなく候か

狂言「いや〳〵泊りはなき所にて候

ワキ「あら笑止や。誠に前後を忘じて候

【三】

シテ里女、面深井・鬘・鬘帶・襟淺黃・着附摺箔・無色唐織着流の裝束にて幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなう旅人お宿參らせうなう

狂言「日本一の事。お宿參らせうと申し候。御借り候へ(といひて狂言座につく)

シテ「これは上路の山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば。妾が庵にて一夜を明かさせ給ひ候へ

ワキ「あら嬉しや候。俄かに日の暮れ前後を忘じて候。やがて參らうずるにて候

ワキ脇座の次へ、シテは舞臺の眞中へ出で、一同下に居る。

シテ「今宵のお宿參らすること。とりわき思ふ子細あり。「山姥の歌の一節謠ひて聞かさせ給へ。年月の望みなり鄙の思出と思ふべし。「そのた

【三】

ここへシテ山姥が里女の姿をして登場。

女「もうしもし、旅の方、お宿を致しませう。……こゝは上路の山といつて、人里から遠く離れた所なのです。日が暮れたのですから、私の家で一晩お過しなさいませ」

從者「あゝ實に嬉しいことです。急に日が暮れて、どうしてよいやら困つてゐたのです。早速御邪魔しませう」

やがて里女の家に來た態で、舞臺はその一室となる。

女「今夜お宿を致しましたのは、實は特別な理由があるのです。どうぞ山姥の歌を一節謠つてお聞かせ下さい。永らくの間聞きたいと願つてゐたのです。このやうな田舍での、いつまでも忘れられない樂

めにこそ日を暮らし。御宿をも參らせて候へ。いかさまにも謠はせ給ひ候へ

ワキ「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さて誰と見申されて。山姥の歌の一節とは御所望候ぞ

シテ「いや何をか包み給ふらん。あれにまします御事は。ひやくま山姥とて隱れなき遊女にてはましまさずや。まづこの歌の次第とやらんに。『よし足引の山姥が。山めぐりすると作られたり。あら面白や候』。これは曲舞によりての異名。さて眞の山姥をば。如何なる者とか知ろし召されて候ぞ

ワキ「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ

シテ「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人な

○いかさまにも―是非とも

○包み給ふ―包み隱し給ふ

○次第―曲舞の首及び尾に謠ふ文句の名稱。

○よし足引の―善し惡しを山の枕詞足引のにいひかけた。

○山姥が山めぐり―善惡の差別觀に捉はれて六道に生死輪廻する意を寓したのである。

しい思出となりませう、噂に聞きたいばかりに、日を暮れさせて、お宿をしたのです。どうぞ是非ともお謠ひ下さい」

從者「これは意外なことを伺ふものです。一體こちらを誰だと思つて、このやうに山姥の歌を一節謠つてくれと仰しやるのです」

女「いえ、どうしてそのやうにお隱しになるのです。あそこにお出でになる方は、ひやくま山姥といつて、有名な遊女でいらつしやるぢやありませんか。まづこの曲舞の次第とやらに『山姥が山廻りをするのは苦しい、人も善し惡しの差別觀に捉はれて、六道を輪廻するのが苦しい』と、作られてゐます。ほんとに面白いことです。遊女の方にはこの曲舞から山姥といふ異名がついたのですが、一體ほんとの山姥といふものは、どういふものか御存じですか」

從者「山姥といふのは、山に住む鬼女だと、曲舞にも謠はれてゐます」

女「鬼女といへば、女の鬼のことですね。

○色には出ださせ―人の前で現す、花やかな酒宴の席で謠ふとの意。
○言の葉草の―言の葉は曲舞の歌。草の縁で露ほど(少しばかりも)と續けた。
○道を極め名を立て―藝道の奥儀を極め、世に名聲を擧げて。
○世上萬德の妙花を開く―世阿彌の花傳書奥儀に「世上萬德の妙花を開く因緣なり」。世間で妙花の如き高い德望を得る意。
○聲佛事―聲を出してする佛事。讀經、音樂。
○輪廻―車輪の如く六道に流轉生死すること。解脫の反對。
○歸性の善所―本覺眞如の實性に還歸して赴く極樂の善所。
○夕山の―恨みを言ふといひかけた。
○聲を上路の―聲を上げ、上路の山、山姥といひかけた。
(靈鬼)鬼の靈魂。
【三】
○妄執―虛妄の迷界に執着すること。

りとも。山に住む女ならば。妾が身の上にてはさむらはずや。年頃色には出ださせ給ふ。言の葉草の露ほども。御心にはかけ給はぬ。恨み申しに來りたり。道を極め名を立てゝ。世上萬德の妙花を開く事。この一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ。舞歌音樂の妙音の。聲佛事をもなし給はば、などか妾も輪廻を遁れ。歸性の善所に至らざらんと。恨みを夕山の。鳥獸も鳴き添へて。聲を上路の山姥が。靈鬼これまで來りたり

【三】

ツレ「不思議の事を聞くものかな。さては眞の山姥の。これまで來り給へるか

シテ「われ國々の山廻り。今日もこゝに來ることは。わが名の德を聞かんためなり。謠ひ給ひてさりとては。わが妄執を晴らし給へ

まあ鬼であらうと人であらうと、とにかく山に住む女が山姥ならば、私がその山姥ぢやありませんか。永い年月、美しい歌にはお謠ひになりながら、その本人の私のことを、少しもお心におかけ下さらないのを、お恨み申しに參つたのです。藝道の奥儀を極めて名譽を博し、世間で大した評判をお取りになつたのも、この曲舞のお蔭ぢやありませんか。それならば、私の回向をもして、美しい舞歌音樂を奏して、音樂供養をして下されば、妾も苦しい迷ひの世界を離れ、本性に立ち歸つた極樂世界へ行くことが出來ようものをと、お恨み申すために、この夕暮、山の鳥獸も聲をあげて鳴く時に、この上路の山の山姥の靈魂がこゝへやつて來たのです」

【三】

遊女「これは、まあ何といふ不思議なことでせう。すると、ほんとの山姥がこゝへいらつしやつたのですか」

女「私はあちらこちらの國々の山を經廻り、丁度今日こゝへ來ましたのは、私の評判を聞きたいと思つたからです。どうぞ、お謠ひになつて、私の迷ひの心を晴らして下さい」

○憚りながら—遠慮ながら
○時の調子—季節に適はしい調子、その場合に相應した調子。
○取るや拍子を—調子を取るを拍子を取るにいひかけた。
○しばさせ給へ—暫し待たせ給へ。
○すはや—事の急に驚く聲
○かげろふ—かけるの延言。
○さなきだに—月が曇らなくても暮れ易いとの意。
○雲に心をかけ—深山邊に雲のかゝるを、曲舞に心をかける意にいひかけた。
○夜すがら—夜もすがら。終夜。
○あらはし衣—喪服の一名。こゝでは姿を現しといひかけ、衣の縁で袖を出す料としただけである。
○袖つぎて—袖續ぎて、袖を交はしてといふ意か。
○移り舞—人に眞似て舞ふ舞、遊女に眞似て舞ふ意。

ツレ「この上はとかく辭しなば恐ろしや。もし身のためや惡しかりなんと。憚りながら時の調子を。取るや拍子を進むれば

シテ「しばさせ給へとてもさらば。暮るるを待ちて月の夜聲に。謠ひ給はばわれも亦。眞の姿を現すべし。「すはやかげろふ夕月の（と橋懸の上を見）

シテ上歌「さなきだに。暮るるを急ぐ深山邊の（と立ち）

地「暮るるを急ぐ深山邊の。雲に心をかけ添へて。この山姥が一節を夜すがら謠ひ給はば。その時わが姿をも（正面へ少し出でて）あらはし衣の袖つぎて（と袖をあしらひ）。移り舞を舞ふべしと。いふかと見れば、そのまゝかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

（いふかと見れば—と常座へ行きて小廻りし、正面に開きて靜かに中入。

遊女「この上は、なほ兎や角と斷つたならば、それこそ恐ろしい、私の身にとつて惡い事が起るかも知れない」と、遠慮しながらもこの場合に適はしい調子をとつて、拍子をうち進めると

女「暫くお待ち下さい。折角のことですから、日の暮れるのを待つて、月の夜にお謠ひ下されば、私もほんとの姿を現しませう。おゝ、もう夕月がかげつて來た、さうでなくてさへ暮れ易い深山に雲がかかつて來ました。この夜中、私のことを氣にかけて、山姥の曲舞を一節お謠ひ下されば、その時私も姿を現して、衣の袖をかはして、あなたの眞似をして舞を舞ひませう」

と、いふかと思ふと、そのまゝかき消すやうに消え失せてしまつた。

【間】

○方々—そなた。

【間】　狂言、名乘座に出で、

狂言「さても／＼不思議なる事かな。又夜が明けて候。まづあれへ參りこの由を申さう。（舞臺の眞中へ行き下に居て）いかに申し候。最前暮れまじきに日の暮れて候か。又夜が明けて候

ワキ「げに／＼又夜が明けて候。さて方々に尋ねたき事の候。方々は山中近く渡り候程に御存じ候べし。山姥には何がなり候ぞ。語つて御聞かせ候へ

狂言「思ひも寄らぬ御尋ねにて候。我等も山中に住み候へども。さやうの事委しくは存ぜず候が。さる人の申すは。山姥には山中の堂宮に掛けてある鰐口がなると申し候

ワキ「その謂れは候

狂言「その謂れこそ候へ。まづ鰐口と申すものは。口の大きなるものにて。目には團栗がなり鼻には胡桃がなる。耳には茸がなりそれに手足が出來て。恐ろしき山姥になると申し候

ワキ「いや／＼さやうにてはあるまじく候

狂言「誠に鰐口の分にてはなるまじく候。また何やらござつた。野老がなると申し候

ワキ「その謂れは候

狂言「まづ野老と申すものは。髭の多きものにて。長雨などが致し。山の崩れ目より野老が出た。この髭がしやれて白髭となり。これに目鼻がつき頭となり。さてからだには大山の松脂が大風に谷へ吹き落され。これに塵芥が取りつき。手足が出來山姥となり申し候

ワキ「いや／＼それにてもあるまじく候

狂言「これもなるまいあれもなるまいと仰せ候が。それ／＼山中の總構の門の柱がなると申す

ワキ「その謂れは候

狂言「その謂れと申すは。まづ山中に一旦門を建てる事は建てたれども。その後修理も致さねば。扉

も腐り果て柱ばかり残り。それに目鼻手足も出來て山姥となると申す。さるによつて山姥の事を山に住む木戸と申し候

ワキ「いや〱山に住み鬼女にて候はば。木戸にてはあるまじく候

狂言「鬼女木戸。さては我等の承りたるは片言にて候か。都の御方に御目にかゝり定說を承り滿足申して候。さて又あれに御座候御方の名は。何と申し候ぞ

ワキ「あれは都にて隱れもなきひやくま山姥にて候よ

狂言「さやうに候へばこそ最前の女の言葉の末に。山姥の歌の一節御謠ひあらば。眞の姿を現すべしと申し候間。急いで御謠ひあつて山姥の眞の姿を我等にも御見せ候へ

ワキ「さあらばやがて謠はせ申し。山姥の眞の姿を見うずるにて候。方々もそれにて見られ候へ

狂言「さあらばやがて御謠はせ候へや

といひて狂言は引く。

【四】

ツレ「あまりのことの不思議さに。さらに眞とおもほえぬ。鬼女が言葉を違へじと

ワキ ワキヅレ 上歌（待謠）「松風ともに吹く笛の。松風ともに吹く笛の。聲澄み渡る谷川に。手まづ遮る曲水の。月に聲澄む深山かな月に聲澄む深山かな

【五】 一聲の囃子にて、後ジテ山姥、面山姥・山姥鬘・鬘帶・摺淺黃・着附無地熨斗目・厚板壺折・半切・腰帶・扇の裝束にて鹿背杖をつきて橋懸一の松に出で、

【四】 後段

鬼女「あまり不思議なことで、全くほんととは思はれないけれど、鬼女との約束を違へてはいけないと思つて……」

從者「松風の吹く中で、笛を吹き鳴らすと、その聲が澄み渡つて、深山の谷川に映る月影は、かの曲水の宴の盃、流れに浮かべて、自分の前に來れば、すぐ手に取るあの盃のやうだ」

【五】 後ジテ山姥登場。

【四】○松風ともに―松風と共に　○手まづ遮る―和漢朗詠集菅原雅規の曲水宴の詩句「礙レ石遲來心竊待、牽レ流遞過手先遮」を借り、谷川に映る月影を、曲水の宴（三月三日禁中で行はせられる）の盃に見立てた。

【五】

後ジテ「あら物凄の深谷やな。あら物凄の深谷やな。寒林に骨を打つ。靈鬼泣く泣く前生の業を恨む。深野に花を供ずる天人。返す返すも幾生の善を悦ぶ。いや。善惡不二。何をか恨み。何をか悦ばんや。萬箇目前の境界。懸河渺々として。巖峨々たり。山また山（と上を見上げ）。いづれの工か。青巖の形を。削りなせる（と左右を見渡し）。水また水。誰が家にか碧潭の色を。染め出だせる（と舞臺に入る）

ツレ「恐ろしや月も木深き山陰より。その樣化したる顏ばせは。その山姥にてましますか

シテ「とてもはや穗に出でそめし言の葉の。氣色にも知ろしめさるべし。われにな恐れ給ひそとよ

ツレ「この上は恐ろしながらむば玉の。闇まぎれ

山姥「まあ何といふ物凄い深谷の氣色だらう。地獄に墮ちた靈魂は、寒林に埋めたわが白骨を鞭打つて、前世で惡業を犯した爲に、このやうな苦しみを受けることとなつたのを恨み、又天人となつたものは、わが骨を埋めた所に花を供へて、いつも前生で善い行ひをした結果だといつて悦ぶといふことだ。しかし絕對平等觀からいへば、善惡の差別もなく、從つて恨むことも悅ぶこともないのだ。しかし又、差別觀を以てわが眼に映る千變萬化の森羅萬象を見れば、大きな瀧が廣々として落ち、大きな巖が高く聳えて、山また山と續いてゐる樣は、如何なる名工がこのやうな面白い青巖の形に削り作つたのかと疑はれ、水また水と續いて、青々とした色をしてゐるのを見ると、誰がこんなに巧みに染めたのであらうかと驚かれる」

遊女「まあ恐ろしい、月影さへ遮られるやうな木の生ひ繁つた山陰から、異樣な姿をした人が見えるが、あなたが山姥でいらつしやるのですか」

山姥「先程既に口に出していつたのだから、この樣子を見てもお分りになるでせう。私をこわがることはありません」

遊女「この上は是非ないこと、恐ろしいけ

○寒林に骨を打つ—寒林は梵語尸多婆那 Sitavana の譯語で、摩竭陀國の死人を葬る地。阿育王譬喩品等に死人の靈魂が林野に歸り、現世で佛戒を破つて惡道に墮ちた者はその死屍を鞭ち佛戒を保つて天人となつた者はその白骨に禮拜したとあるをいふ。平治物語にも「温野に骨を禮せし天人は平生の善を喜び、寒林に骸をうちし靈鬼は前世の惡を悲しむ」

○深野—寒林に同じ。平治物語に靈鬼の寒林に對し、天人には温野といつたのを引き、それを「しん」と謠ひ誤つたのであらうか。

○幾生の善—光悦本以下皆幾生（生々、幾度もの生）と書くが、前に「歸性の善所」とあると同字でなからうか

○善惡不二—悟れば善惡不二正邪一如で、差別がない。

○萬箇目前の—差別觀から見た種々相の森羅萬象。

○懸河渺々—瀧の廣々として落ちるさま。

○巖峨々—岩石の高く聳えてゐるさま。

○山また山—和漢朗詠集大江澄明の句「山復山何工削ニ成青巖之形一、水復水誰家染ニ

出碧潭之色」を引いた。
○穂に出でそめし―外に現れ初めた。
○むば玉の―夜、闇の枕詞。
○おどろの雪―亂れた白髪を雪のかゝつたいばらに喩へた。
○さ丹塗―さは接頭語。丹は朱。
○軒の瓦の鬼―鬼瓦。
○鬼一口の―伊勢物語六段芥川の條に、雷雨の夜、密かに連れ出した女を奪ひ返された事を記して「鬼はや女をば一口に食ひてけり」とあるをいふ。
○白玉か何ぞと―その夜を思ひ知らるといひかけて、前項の女を奪はれた時、男の悲しんで詠んだ歌「白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消なましものを」を引いた。
○わが身の上に―自分も伊勢物語の女のやうに鬼に食はれさうに思はれるとの意。
○浮世語―鬼に食はれたと世間でいひ囃されること。
【六】
○春の夜の―蘇東坡の詩「春宵一刻値千金、花有清香月有陰」を引いた。

より現れ出づる。姿言葉は人なれども、
シテ「髪にはおどろの雪を戴き
ツレ『眼の光は星の如し
シテ『さて面の色は
ツレ『さ丹塗の
シシ『軒の瓦の鬼の形を
ツレ『今宵始めて見ることを
シテ『何にたとへん
ツレ『古の
地上歌「鬼一口の雨の夜に。鬼一口の雨の夜に。神鳴り騒ぎ恐ろしき。その夜を。思ひ白玉か何ぞと問ひし人までも。わが身の上になりぬべき。浮世語も、恥かしや浮世語も恥かしや
【六】
シテ「春の夜の一時を千金に代へじとは。花に清香月に陰。これは願ひのたまさかに。行き逢ふ

れどお目にかゝりませう。でも、闇がりから現れて來られた、その姿や言葉は人間のやうだけれど……」
山姥「亂れた白髪は、雪のかゝつたいばらのやうで……」
遊女「眼の光は星のやうです」
山姥「それから顔の色は……」
遊女「朱塗の……」
山姥「屋根の鬼瓦のやうで……」
遊女「このやうな者を、今晩初めて見る恐ろしさ。これを何にたとへませう。昔、雷の鳴り騒いだ恐ろしい雨の夜、女を鬼に一口に食ひとられてしまつて、その恐ろしい夜を思ひ出して『白玉か何ぞと人の問ひし時、露と答へて消なましものを』と詠んだ話、丁度そのやうで、今私自身がそのやうな目に遭つて、世間の噂に傳へられるかと思へば、ほんとに恥かしい」
【六】
山姥「春の夜は、花にはよい香があり、月には清い光があつて、僅かな一時にも千金にも代へられない値打があるといはれ

○その程も―一寸の時も。
○あたら―惜しい。
○一聲の山鳥―山鳥は時鳥
和漢朗詠集許渾の詩句に
「一聲山鳥曙雲外、萬點水螢
秋草中」
○羽をたたく―たたく」か
ら鼓を呼び起した。
○鼓は瀧波　瀧の音が鼓の
代りとなる。
○雪を廻らす　舞容の美し
い喩へ。
○木の花の　古今集序の歌
「難波津に咲くやこの花」に
よつて「なには」を呼び出す
料とした。
○なにはのことか―後拾遺
集遊女宮木の歌「津の國の
なにはの事か法ならぬ遊び
戯れ舞ふとこそ聞け」を引
いたもの。なには」は難波を何
にいひかけたのである。
○よし足引の　以下この節
の終りまでが曲舞で、中樂
談儀に「曲舞は次第にて舞
ひそめ、次第にてとむる也」
とある法則に適つてゐる。
○山といつぱ―和漢朗詠集
李斯の句に「泰山不レ讓二土
壤一故能成二其高一、河海不
レ厭二細流一故能成二其深一」古
今集序に「高き山も麓の塵
ひぢよりなりて天雲たなびく
くまでおひのぼれる如く」

人の一曲の。その程もあたら夜に。はやはや謠ひ給ふべし

ツレ「げにこの上はともかくも。いふに及ばぬ山中に

シテ「一聲の山鳥羽をたたく（と兩手を打合せ）

ツレ『鼓は瀧波

シテ「袖は白妙（左袖を見）

ツレ『雪を廻らす木の花の

シテ『なにはのことか

ツレ『法ならぬ

地次第「よし足引の山姥が。よし足引の山姥が山廻り、するぞ苦しき

地返しにシテ鹿背杖を後見に渡して扇を持ち、

シテクリ「それ山といつぱ。塵土より起つて。天雲かかる千丈の峯

てゐます。そのやうな樂しい春の夜、長年の望みが叶つて、たまたまお出逢ひすることが出來たので、一寸の間も惜しまれます。どうぞ早く歌を謠つて下さい」

遊女「いかにも、この上は兎や角と申すことは出來ません……」

山姥「おゝ山の中に時鳥が一聲鳴いて……」

遊女「瀧は鼓を打つやうな音を立ててゐます」

山姥「さあ白妙の袖を飜して……」

遊女「美しい舞を舞ひませう」

山姥「歌舞でも、どんなことでも……」

遊女「佛法の敎へとならないものはないのですから……」

これより曲舞の始まる。遊女が謠ひ、山姥が舞ふ心であらう。實際の演出にはシテ、ツレが舞ふ。

山姥『山姥が山廻りをするのは苦しい、人も善し惡しの差別觀に捉はれて、六道を輪廻するのが苦しい。――

一體山といふものは、塵のやうなものが積つて、終に雲にかゝるやうな高い峯となつたのであり、海はまた、苔の露の雫のやうなものが集まつて、終に大波の立

と謠ひながら眞中へ出で床几にかゝり、

地「海は苔の露より滴りて。波濤を疊む。萬水たり

シテサシ「一洞空しき谷の聲。梢に響く山彦の

地「無聲音を聞くたよりとなり。聲に響かぬ谷もがなと。望みしもげにかくやらん

シテ「殊にわが住む山家の景色。山高うして海近く。谷深うして水遠し

地「前には海水瀼々として。月眞如の光をかかげ。後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る

シテ「刑鞭蒲朽ちて螢空しく去る

地「諫鼓苔深うして。鳥驚かずとも。いひつべし

地クセ「遠近の。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも呼子鳥の。聲凄きをりをりに。伐木丁々として。山更に幽かなり。法性峯聳えては（右の上

○一洞空しき—洞のやうにうつろになつてゐる谷。
○無聲音—山彦の聲も無くといひかけた。無聲音は莊子天地篇に「視乎冥々、聽乎無聲、冥々之中獨見レ曉焉、無聲之中獨聞レ和焉」
○前には海水—盛衰記十、丹波少將上洛事に「入道指寄て見れば、前海水湛々月浮二眞如之光一、後巖松森々風冷二常樂之聲一、聖衆來迎之義有レ便、九品往生之望可レ足」と、又刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚とも書れたり」とあるを引いた。
○瀼々—海の開け合ふ貌。
○常樂の夢を破る—原文のやうに「常樂の響を奏す」でなければ、意が通らない。
○刑鞭蒲朽ちて—和漢朗詠集大江音人の詩句。無爲にして治まる太平を祝つたのである。
○遠近のたづきも知らぬ山中に—古今集讀人知らずの歌、下句「おぼつかなくも呼子鳥かな」
○伐木丁々—詩經に「伐木丁々、鳥鳴嚶々出レ自二幽谷一」。丁々は木を伐る音。
○法性—悟りの本體。山の名として用ゐた。

つ大水となつたのである。

かうして終に、洞のやうなうつろな谷に響く聲、梢に響き返すこだまの聲、そのやうな聲さへ聞えぬ、靜寂な境地となるのであつて、昔の人が、聲一つ聞えないやうな谷がほしいといつたのは、丁度かういふ境地を望んだのであらう。

今自分の住んでゐるこの山家の樣は、山は高く海には近く、谷間は深くて遠い谷底に水が流れてゐて、古人のいつた「前には海水が廣々と湛へてゐて、月が澄みきつた光を照らし、後には山が高く聳えて、松風が極樂の音樂を奏してゐる」とか、「罪人を打つ鞭は柔い蒲にかへられたが、なほその鞭を打つやうな輕い罪人さへなくて、蒲の鞭は腐つて、螢となつて飛び去り、君を諫める時にうつ鼓はあつても、政が正しくてこれを打つ時はなく、徒らに苔に埋つて、鳥も鼓の音に驚かされることがない」とかいふ趣を持つてゐるのである。

どこがどこだか見當もつかないやうな深い山中で、呼子鳥の鳴くかすかな聲の聞える物凄い時などには、丁々と木を伐る音がして、山中が一層幽邃に感じられる。法性の峯は高く聳えて、上に向つて佛智

を見上げ)。上求菩提を現し無明谷深き粧ひは。下化衆生を表して金輪際に及べり(と扇逆手にして下をさし)。抑も山姥は。生所も知らず宿もなし。ただ雲水を便りにて到らぬ山の奥もなし

(抑も山姥は」に床几を離れ、これに謡に合せて舞ふ)

シテ『然れば人間にあらずとて

地「隔つる雲の身を變へ假に自性を變化して。一念化生の鬼女となつて。目前に來れども。邪正一如と見る時は。色卽是空そのままに。佛法あれば。世法あり煩惱あれば菩提あり。佛あれば衆生あり衆生あれば山姥もあり。柳は綠。花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事。ある時は山賤の。樵路に通ふ花の蔭。休む重荷に肩を貸し月諸共に山を出で。里まで送る折もあり。又ある時は織姬の。五百機立つる窓に入つて。枝の。鶯絲繰

を求める心を現し、無明の谷は深くて、下衆生を敎化する相を示し、底深く金輪際にまで及んでゐるのである。さて山姥といふものは、生まれた所も分らなければ、定まつて住む所もない。ただ雲の浮かび水の流れるやうに、所定めず步き廻つて、どこの山奥へも行かない所がない。

ところで、山姥は人間でないといふので、これと交はらないが、假に方便の心から、雲の如く自在な身を變へ、化生の鬼女となり、人の眼の前に現れるのである。尤も、この世には善惡正邪の別もない絶對平等なものだといふ見地に立てば、一切の現象がすべて空であり無であるが、又一面、差別觀から見れば、佛法があればこれに對する世間法があり、衆生の心身を惱亂させる煩惱があれば、一方には正覺を得べき菩提心があり、悟りを開いた佛があれば、また一方に迷妄に苦しむ衆生があり、人間があればまた鬼形の山姥もあり、柳は綠の色をしてゐるに對して花は紅の色をなし、千變萬化を極めてゐるのである。さて山姥が人間界に立ち交はるのは、たとへば或時には、樵夫が山路に疲れて花の木蔭に休んでゐる時に、自分の肩を貸

○上求菩提―上に向つて菩提(正覺の智慧)を求める。
○無明―煩惱の根原。谷の名とした。
○下化衆生―下に向つて一切衆生を敎化する。
○金輪際―大地より百六十萬由旬下にあるといふ最低の所。
○隔つる雲の身―人間と隔つを雲の山河を隔つにいひかけ、雲の如く自在な身と續けた。
○自性―眞如法性。本體。
○一念化生―一時方便の考へから化生の者となること。
○邪正一如―善惡不二に同じ。
○色卽是空―般若心經に「色不ㇾ異ㇾ空、空不ㇾ異ㇾ色、色卽是空、空卽是色、受想行識亦復如ㇾ是」。色は一切の現象。
○世法―世間法。俗世間の慣習など。
○煩惱あれば―仁王經に「菩薩未二成佛一時、以二菩提一爲二煩惱一、菩薩成佛時、以二煩惱一爲二菩提一」。
○柳は綠―蘇東坡の詩「柳綠花紅眞面目」から出た語。
○人間に遊ぶ―山姥が人間に立ち交はること。
○五百機―數多くの機。或は絲數の多い機張りの廣い機ともいふ。萬葉集卷十に「棚機の五百機立てて織る

布の秋とり衣誰か取り見む」
○賤絲繰り・鶯が絲を繰るやうに柳の細枝を飛びまわるをいふ。そのやうに自分も絲繰るとの意。
○紡績の宿—絲をとつてゐる家。
○賤の目に—業をする賤の女に、女を目にいひかけた。
○目に見えぬ—古今集序に「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ」
○世を空蟬の—世を憂く思ふを空蟬に、蟬の脫殼を唐衣に、衣張るを拂はぬにいひかけた。
○月に埋もれ—月影の白い爲に霜の見えないのをいふ。
○うちすさむ—頻りに衣を擣つ。
○千聲萬聲—和漢朗詠集白樂天の砧の詩に「八月九月正長夜、千聲萬聲無二了時一」
○しで擣つ—繁く擣つ。後拾遺集伊勢大輔の歌に「小夜更けて衣しでうつ聲聞けば急がぬ人も寢られざりけり」
【七】
○一樹の蔭—說法明眼論

り紡績の宿に身を置き人を助くる業をのみ。賤の目に見えぬ鬼とや、人のいふらん
シテ「世を空蟬の唐衣
地「拂はぬ袖に置く霜は夜寒の月に埋もれ、うちすさむ人の絶間にも。千聲萬聲の。砧に聲の、しで擣つはただ山姥が業なれや。都に歸りて世語にせさせ給へと。思ふはなほも妄執か。ただうち捨てよ何事もよし足引の山姥が山廻りするぞ苦しき
とクセを舞ひ上げ、
【七】
シテ『足引の
地『山廻り（と鹿背杖を持ち）
〔立廻〕
に山廻りの苦しき樣を示し、
シテ『一樹の蔭一河の流れ。皆これ他生の縁ぞか

して重荷を擔いでやり、月に照らされながら山を出て里まで送つてやることがあり、又或時には、織女が忙しく機を織つてゐるところへ入つて行つて、柳の絲をくぐる鶯のやうに絲を繰つてやつたり、又或時は、絲をつむぐ家に入つて、その人を助けてやつたりするのであるが、賤の女にはそれが見えないで、世間の人はただ鬼といふのだ。
世の中の殊につらく思はれる秋、袖に置く霜も、夜寒の月の白い色に埋れて見えなくなる頃、頻りに砧を擣つてゐた音も絕えた時、砧を擣つ聲の音繁く聞えるのは、それは全く山姥のする爲業なのである——どうぞ都に歸つて世間話に傳へて下さいと、思ふのも、やはり執着の心であらう。ただ何事もうち捨てて執着を離れなければいけない。山姥が山廻りをするのは苦しい。人も善し悪しの差別觀に捉はれて、六道を輪廻するのが苦しい』
といふ意の曲舞を舞つて、
【七】
山姥「山姥が山廻りする……」
〔立廻〕
を舞つて、山廻りの苦しい樣を見せ、
山姥「同じ木蔭に雨宿りをし、同じ河の水

し（とツレの前へ行き）。ましてやわが名を夕月の。浮世を廻る一節も。狂言綺語の道すぐに。讃佛乘の因ぞかし（と下に居り）。あら。御名殘惜しや（面を伏せ）。暇申して。歸る山の（と立ち杖をすて扇を開き）

地『春は梢に咲くかと待ちし（角へかけて廻り）

シテ『花を尋ねて。山廻り

地『秋はさやけき影を尋ねて（正面に出で）

シテ『月見る方にと山廻り（月を眺むる心）

地『冬は冴え行く時雨の雲の（扇をかざして角へ行き）

地『雪を誘ひて。山廻り（雪を眺むる心）

地『廻り廻りて（小廻りし）。輪廻を離れぬ。妄執の雲の。塵積つて（正面へ出で）。山姥となれる（兩手を廣げ）。鬼女が有樣。見るや見るやと。峯に翔り（と乘り込み）。谷に響きて今までここに（下を見）。あるよと見えしが山また山に（と見上げ）。山廻り。山また山に。

を飲むのも、皆前生からの因緣事なのです。まして私の名をいつて、世渡りの歌を謠ふのも、そのやうな戯れの言葉、飾り立てた言葉も、そのまゝ佛の敎へを讃美することとなるのです。あゝお名殘惜しいことです。では、お暇して歸りませう。――

私は、春は梢に花が今咲くか今咲くかと待ちかねて、花を尋ねて山を廻り、

秋は澄み渡つた月影を尋ねて、月の見える方へと山々を廻り、

冬は次第に空寒くなつて來て、時雨についで雪の降る時、雪を尋ねて山々を廻り、かうして、年中山々を廻り廻つて、なほ輪廻の苦界から離れることが出來ず、迷妄執着が積み重なつて、かうした山姥となつたのです。この鬼女の有樣を御覽なさい」

といつて、峯に翔り谷を渡つて、つい今までこゝにゐたと思ふうちに、山から山へと山々を廻り廻つて、どこへ行

「宿二一樹下一、汲二一河流一：：皆是先世結緣」から出た語で、今樣にも謠はれた。〔千手〕參照。

○狂言綺語—和漢朗詠集白樂天の句に「願以二今生世俗文字之業、狂言綺語之誤一、飜爲二當來世々讃佛乘之因、轉法輪之緣一」

○歸る山の—歸るを越前國南條郡の歸山にいひかけた

○時雨の雲の—雲の山をめぐる意にいひかけた。

○塵積つて—輪廻の妄執が積り積つて鬼女となつたといふを「塵積つて山となる」といふ諺にいひかけて、山姥と續けた。

山廻りして。行方も知らず。なりにけり

と常座にて小廻りして留拍子を踏む。

つたか、行方も知れなくなつてしまつた。

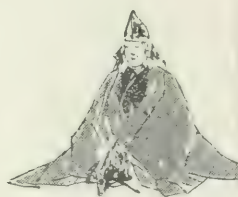
〔考異〕

諸流（五流）

【六】シテ「刑鞭蒲朽ちて……地「諫鼓……鳥驚かずともいひつべし（下懸ナシ）地クセ「遠近の……

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「これは都方……又この頃は（光ナシ）善光寺へ參りたき由承り（光仰）候……ワキ「御急ぎ候程にこれははや（光ナシ）越後と……ワキ「あら不思議や……さて何と仕り候べき（光ナシ）　【二】ワキ「あら嬉しや……前後を忘じて候（光に）……　【六】シテ「春の夜の……はやはや謠ひ給ふべし（光おはしませ）……地「隔つる雲の……鬼とや人のいふ（光見る）らん

雪(ゆき)

剛

解説

【能柄】三番目　單式夢幻能

【人物】ワキ　旅僧、シテ　雪の精(女體)

【所】攝津國　野田渡

【時】冬(十二月)

【作者】作者未詳。演能等に關する古記錄も見當らない。

【梗概】奥州に來てゐた行脚僧が、天王寺參詣を思ひ立つて、また旅に出で、攝津國野田へ來ると、俄かに空が曇つて雪が降つて來たので、暫く雪の晴れ間を待つてゐるところへ、一人の女性が出て來た。不審に思つて言葉をかけると、それは雪の精であつて、僧に讀經を乞ひ、廻雪の舞を舞つて、消えて行く。

【出典】別段擧ぐべきものもない。

【概評】森羅萬象、如何なるものでもこれを捉へては一篇の戲曲にまとめてしまふのが、謠曲の一の特色である。かうしたことに馴れてゐる謠曲作者が雪を題材としたことに、何の不思議もない。雪そのものの

性質からいつても、これに關する文學的材料からいつても、他の草木精魂物に比べて困難であらうとは思はれない、ところが、本曲の實際を見ると、その主想・脚色・修辭、との點から見ても、餘り秀れてゐない。簡淡であるといふことの外に、これといふ見どころがない。場所を攝津の野田とした理由も別段據りどころがない。現行曲の中でも凡作、むしろ愚作に近いものであらう。

【二】

後見、上に雪綿をつけたる山の作物を大小前に出す。次第の囃子にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、大小前の方に向き、

ワキ次第「末の松山はるばると。末の松山はるばると。行方やいづくなるらん

地取に正面に向き、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は奥州に候ひしが。又思ひ立ち津の國天王寺へ參らばやと思ひ候

ワキ〈道行〉「墨染の衣ほすてふ日も出でて。衣ほすてふ日も出でて。そなたの雲も天ざかる鄙に馴れ行く旅の空。野に臥し山を分け過ぎて。これぞ名に負ふ津の國や。野田の渡りに着きにけり

【二】

○末の松山—陸前國宮城郡今八幡の砂丘。但し陸奥國との説もある。金葉集永成法師の歌に「君が代は末の松山はるばると越す白波の數も知られず」

○天王寺—大阪市荒陵の東の丘陵にある四天王寺。聖德太子創建の古刹。

○天ざかる—鄙の枕詞。

○野田—攝津國西成郡、福島の西、中津川に臨む地。

【二】

舞臺は初め[illegible]、[illegible]旅僧登場、

僧「遠い遠い末の松山のあたりまで來て、これからの行先がどちらの方角だか分らないやうな有様だ」

と、次第を謡つて旅の心持を述べ、

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。そしてこの間うちは奥州の方へ來てゐたのですが、又思ひ立つて、これから攝津國の天王寺に參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「墨染の僧衣をも乾してくれる朝日も出たので、こゝを旅立つて、向ふの方、これまでし馴れた田舎の長旅を續けて、或は野宿したり或は山を踏み分けたりして行くうちに、有名な攝津國の野田の渡場に着いた」

○笑止や―困つたことだ。
○東西を辨へず―前後を辨へずと同じ意で、どうすればよいか、處置に困ること。

【二】

○曉梁王の園に―和漢朗詠集謝観の句「曉入梁王之苑、雪滿群山、夜登庾公之樓、月明千里」を引いた。梁王の園は梁孝王の兎園、庾公が樓は晉の庾亮（字は元規）の南樓。
○眞如の月―不變の實體、悟りの心を月に喩へた語。
○妄執の雪―迷妄執着の念を雪に喩へた。
○慧日―佛の智慧を日光に喩へた語。

野田の渡りに着きにけり

「野に臥し山を分け過ぎて」と右の方に向きて二三足出でまたもとに歸りて野田に着きたる心。正面に向きて、

ワキ「急ぎ候程にこれははや。津の國野田の里とかや申し候。（上を見て）あら笑止や。晴れたる空俄かに曇り雪降り。東西を辨へず候。暫くこの所にて雪を晴らさばやと思ひ候

といひて脇座へ行く。

【二】

シテ雪の精、面増・鬘・鬘帶・着附摺箔・白地長絹・水色大口・腰帶・扇の裝束にて出で、

シテ「あら面白の。雪の中やな。あら面白の雪の中やな。曉梁王の園に入れば。雪群山に滿てり。夜庾公が樓に登れば。月千里に明らかなり。われも眞如の月出でて。妄執の雪消えなん法の。慧日の光を賴むなり

ワキ「不思議やなこれなる雪の中よりも。女性一人現れ給ふは。如何なる人にてましますぞ

といつてゐる間に旅に進んだ態で、舞臺は攝津國野田の渡となる。

僧「旅を急いだので、もはやこゝは攝津國の野田の里とかいふ所だ。……おや、これは困つた。今まで晴れてゐた空が急に曇つて、雪が降つて來て、どうしてよいやら分らない。暫くこの所に休んで、雪の晴れるのを待ちませう」

といつて一休みしてゐる態。

【二】

シテ雪の精登場。

雪「まあ何といふ面白い雪景色でせう。昔の人はこのやうな雪景色を、『朝方、梁孝王の兎園に入つて見ると、どの山もどの山も皆雪に掩はれてゐる。夜、庾元規の南樓に登つて見ると、月の光が千里の遠い所までも明らかに照らしてゐる』とお詠みになつた。私も月のやうな曇りのない悟りの心を持つて、迷ひの雪が消えるやうに、日光のやうな佛樣のお智慧におすがりしてゐるのです」

と獨言をいひながら僧の傍へ來る。旅僧これを見て、

僧「これは不思議だ、この雪の中から、女の人が一人お出になつたが、一體あなたはどういふ方なのです」

○白雪の―いかで知らんといひかけた。
○雪の精―雪の精靈。草木に精魂があると見たと同じやうに、雪にも精魂があるもののやうに考へたのである。
○これ法の功力を―唯これ法の功力なり、されば法の功力を疑ひ給はずしてといふ意。功力は功德の力。
○一乘妙典―一切衆生を悉く成佛せしめるありがたい經文。法華經。
○あらかねの―土の枕詞。疑ふ心はあらずといひかけた。
○古事―降るにいひかけた雪の緣語。
○結べかし―結べは草の緣語。
○いさや白雪の―いさ知らずを白雪にいひかけ、積るの序とした。
○有明寒み―いやましに有りといひかけた。
○峯の雪汀の氷踏み分けて―源氏物語浮舟の卷匂宮の歌。下句「君にぞ迷ふ道は迷はず」を引いて、心の迷はぬ意に用ゐた。

シテ「誰とはいかで白雪の。唯おのづから現れたり
ワキ「われとは知らぬ白雪とは。さてはおことは雪の精か
シテ「いやさればこそわが姿。「知らぬ迷ひを晴らし給へ
ワキ「さては不思議や雪の女に。言葉を交はすもただこれ法の。功力を疑ひ給はずして。とくとく成道なり給へ
シテ「あらありがたの御事や。妙なる一乘妙典を。疑ふ心はあらかねの
地「土に落ち身は消えて。古事のみを思ひ草佛の緣を結べかし。われとはいさや白雪の。積る思ひはいやましに有明寒み夜半の月
シテ「峯の雪汀の氷踏み分けて

雪「誰だといふことも分らないのですが、たゞ自然と現れて來たのでございます」
僧「自分には氣もつかないで出て來たとは……すると、あなたは雪の精なのですか」
雪「いえ、その私自身の姿さへ分らないで迷つて來ました、この迷ひを晴らして下さいませ」
僧「さては、不思議なことにも、雪の精と言葉を交はしてゐるのだ。これといふのも、全く佛法の功德の力によるのだ。どうぞあなたも佛法の功德を疑はないで、早く成佛して下さい」
雪「まあ、ありがたい事でございます。貴い、一切有情を成佛させて下さいます妙法蓮華經を疑ふやうな心はございませんそれでも、土に落ちて身の消えた後も、やはり昔の事ばかり思ひ出されるので、どうか佛緣を結びたいと思ふのでございます。私自身にはそれと氣がつかないのですが、迷ひの念は愈〻ふえるばかりで、夜明け方の寒い時、夜中月の照る時などに、うつかり迷ひ出るのでございます。でも――
「峯の雪汀の氷踏み分けて、君にぞ迷ふ

地「君にぞ迷ふ道は迷はじな津の國の。野田の川波高瀬漕ぐ袖のしがらみひぢまさり。岩にせかるる沖つ舟。やる方もなきわが心。浮かめ給へや御僧と。月にひるがへす花衣げに廻雪の袖ならん

【三】

シテ「朝ぼらけ

〔序舞〕

引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテ「朝ぼらけ。野田の川霧。絶え絶えに

地「あらはれ渡る

シテ「姿もさすが白々と

地「姿もさすが白々と。峯の横雲

シテ「立ちのぼる東雲も

地「明けなば恥かし暇申して歸る山路の梢にかかるや雪の花。梢にかかるや雪の花は又消え消

道は迷はず」

（あなたの爲には心が迷ひ亂れて、峯の雪をも汀の氷をも踏み分けて來ましたが、あなたを思ふ一心に、このやうな苦しい道にも迷はないで來ました）

といふお歌のやうに、これからは心を迷はしますまい。あの野田の波の高い川を漕いで行く高瀬舟で袖が濡れるやうに、私の袖は涙に濡れまさるばかり、私の心は慰める術もないのでございます。どうぞお僧様、私を成佛させて下さいませ」

といつて、月夜に美しい袖を飜して舞を舞ふ、これこそ文字通り廻雪の美しい舞である。

【三】

〔序舞〕

を舞ひ、

雪もはや朝方になつて、野田の川霧がきれぎれに絶え間が出來て、向ふが見えて來て、私の姿もしらじらと、はつきり見えるやうになつて來ました。峯に横雲がかかつて、夜が明けてしまつては、お恥かしうございます。ではお暇して歸ります」

と、歸つて行く方、山の梢に雪の花がかかつたと思ふと、また消え消えになつて、見えなくなつてしまつた。

○高瀬漕ぐ―川波の高きを高瀬舟にいひかけた。

○袖のしがらみ―しがらみは村木を打ち竝べこれに竹木を横へて水流を塞くもの。涙の袖に濡れるのを簡に喩へたのである。

○ひぢまさり　濡れまさり

○やる方―慰める術。船を漕ぎやるにいひかけた。

○廻雪の袖―文選曹子建洛神賦に「以流風廻雪」「比美人之飄搖」などとあり、廻雪は美しい舞の形容に用ゐられるが、この場合には文字通りの廻雪であるとの意。

【三】

○朝ぼらけ―千載集藤原定頼の歌「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえにあらはれ渡る瀬々の網代木」を轉用した。

○峯の横雲―山腹にかかつてゐる雲。白々と見ゆといひかけた。

○東雲―夜明け方。

えとぞなりにける

と舞ひて常座にて留拍子を踏む。

遊行柳　觀（寶　春　剛　喜）

解説

【能柄】三番目　複式夢幻能

【人物】**ワキ**　遊行上人、**ワキツレ**　從僧（二人）、**前シテ**　老翁（柳の精）、**狂言**　所の者、**後シテ**　朽木柳の精（老體）

【所】岩代國　白河邊

【時】秋（九月）

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに觀世小次郎の作とす。言經卿記文祿四年三月二十八日の條に註釋のことが出てゐる。

【梗概】遊行上人が諸國を巡歷して、上總國から陸奥に向ひ、白河の關を越えると、一人の老翁が現れて來て、先代遊行上人の通られた古道を教へ、古塚の上にある朽木の柳を見せる。上人はいかにもその古びた樣を見て、その木の謂れを尋ねると、昔西行上人がこの所に休んで「道のべに淸水流るゝ柳蔭」と詠まれた名木であると答へ、老翁は上人の十念を授かるとそのまゝ、柳のほとりで消え失せてし

まつた。その夜、上人がこゝで念佛を唱へて夢心地になると、朽木柳の精が烏帽子狩衣の白髪の老人として現れ、上人の十念に授かつたお蔭で、非情の草木ながら成佛することが出來ると喜び、柳に縁のある和漢の故事を語り、報謝の舞を見せる、と思ふうちに、夜も明け方になつて、その姿は消え失せ、たゞもとの朽木だけが殘つてゐた。

【出典】　これは、新古今集、夏、西行法師の歌、

　道のべに清水流るゝ柳かげ、しばしとてこそ立ちとまりつれ

に本づいたものであるが、新古今には「題知らず」とあつて、場所も明らかでない。これを遊行上人と結びつけたものに、藤澤智寶聲書があつて、それに、

文明三辛卯年、遊行十九世尊皓上人、葦野（下野國那須郡）修行ありけるに、枯木の柳の精、老翁と化し、上人の前に來り、札を受けて十念を授かりし時の歌に、

　草も木も漏れぬ御法の聲聞けば、朽ちはてぬべき後も頼もし

上人かへし

　思ひきやわが法の會に來る人は、柳の髪のあと垂れんとは

と吟じて柳の蔭に隱れぬとなん。

とある。文明の頃は作者小次郎の在世當時であるから、恐らくかうした逸話によつて脚色したものであらう。

【概評】　西行法師の秀歌と結びつけた朽木柳の精、優雅にして閑寂、謠曲の主題として誠に恰好なもので、ワキ僧を遊行上人としたことも、典據の有無に拘らず、よい着眼であつたと思ふ。本曲と同じやうに老木の精をシテとしたものに「西行櫻」があるが、櫻はそれ自體が華麗なものである上に、そのワキを詠歌の主である西行法師として劇能に脚色した爲に、本曲のやうな落ちついた、さび／＼とした感じを與へない。「芭蕉」はそのものの性質が閑寂である上に、その精を女體とし且複式能に脚色してゐるから、閑寂といふ感じは十分に味はれるが、芭蕉には柳のやうな優雅さを缺いてゐるばかりでなく、その構想も單調であるから、本曲のやうなのび／＼とした餘裕を與へない。**本曲はかうした精魂物の中での秀れた一つであると思ふ。**

【二】

後見、塚の作物（上に木葉を挿し、引廻を掛く）を大小前に置く。

次第の囃子にて、ワキ遊行上人、角帽子・着附小格子・絓水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第「歸るさ知らぬ旅衣。歸るさ知らぬ旅衣、法に心や急ぐらん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは諸國遊行の聖にて候。われ一遍上人の教へを受け。遊行の利益を六十餘州に弘め。六十萬人決定往生の御札を普く衆生に與へ候。この程は上總の國に候ひしが。これより奥へと志し候

といひてワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「秋津洲の。國々廻る法の道。國々廻る法の道。迷はぬ月も光添ふ。心の奥を白河の。關路と聞けば秋風も。立つ夕霧のいづくにか今宵は

【二】

前段

舞臺は初め上總國で、ワキ遊行上人、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

遊行「いつ歸るといふ豫定もない自由な旅ではあるが、佛法を弘めたいと思ふと、心が急がれることだ」

と次第を謠つて旅の心持を述べ、

遊行「私は諸國を廻つてゐる遊行僧です。私は一遍上人の敎旨を受け傳へて、遊行宗の利益を日本六十餘箇國すべてに弘め、一切の衆生が皆必ず極樂往生するといふ六十萬人頌の御札を廣く衆生に與へてゐるのです。そしてこの間うちは、上總國にゐましたが、これから奥羽の方へ出掛けようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

遊行「日本の國々を廻つて、佛法を弘めてゐると、曇りのない月の光までが照り添つて、心の奥も澄み渡るやうに思はれる。かうした心持で旅を續け、今着いた所が白河の關だと聞くと、場所柄こゝには早

【二】

○歸るさ知らぬ—いつ歸るといふ豫定もない旅であるがといふ意。

○遊行の聖—相摸國藤澤、清淨光寺（俗稱遊行寺）の住職。一遍上人の敎旨を傳へ、代々諸國を巡歷して化導した。聖は僧の意。

○一遍上人—時宗の開祖。伊豫の人、俗名別府通秀、出家して隨緣後に智眞といひ、熊野權現に祈願して六十萬人頌を感得し、名を一遍と改め、諸國に敎化して、正應二年五十一歲で寂した（「誓願寺」參照。

○六十餘州—日本國中。六十餘は日本の國數。

○六十萬人—一遍上人が熊野權現から感得した頌—六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一遍證、人中上々妙好華」の四句の頭字を取つた（「誓願寺」參照。

○決定往生の御札—必ず極樂往生するといふ證據の札。

○奥—奥羽地方。

○秋津洲—日本國の異稱。

○迷はぬ月も—道に迷はぬを心の迷はぬにいひかけた。

○白河の關路—關は岩代國西白河郡古關村旗宿にあつた。心の奥を知るといひかけた。

○秋風も立つ―後拾遺集能因法師の歌「都をば霞とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」によつて綴つた。
○いづくにか今宵は宿をかり衣―新古今集藤原定家の歌。下句「日も夕暮の嶺の嵐に」―宿を借るを狩衣にいひかけ、衣の縁語紐にかけて「日も」と續けた。

【二】

○御供の人に申す――上人に直接に詞をかけることを憚り、從僧を通じていつたので、上人を尊んだのである。

宿をかり衣。日も夕暮に、なりにけり日も夕暮になりにけり

ワキ「立つ夕霧のいづくにか」と正面に向きて先へ出でまたもとに歸り、道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。音に聞きし白河の關をも過ぎぬ。又これにあまた道の見えて候。廣き方へ行かばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行きかゝる。

【二】

シテ老翁、面阿古父尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・茶絓水衣。腰帶・扇・數珠の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなう遊行上人の御供の人に申すべき事の候

ワキヅレは地謡座前に下に居り、ワキは脇座に立ちてシテに向ひ、

ワキ「遊行の聖とは札の御所望にて候か。老足なりとも今少し急ぎ給へ

シテ「ありがたや御札をも賜はり候べし。まづ先

く秋風が吹き夕霧が立ちこめてゐる。さあ今晩はどこで宿を借りようか、もう夕暮になつてしまつた」

といつてゐる間に旅は進んで、無事に岩代國白河の關にくる、

遊行「道を急いだので、有名な白河の關も通り過ぎたが、こゝには幾つもの道がある、さうだ、廣い方の道を行きませう」

といつて行きかける。

【二】

シテ朽木柳の精、老翁の姿を裝うて登場。

老翁「もうしもし、遊行上人のお供の方に申し上げます」

遊行上人、老翁の方にふり返つて、

遊行「遊行僧をお呼びになるのは、お札が御所望なのですか。御老人の足だとはいひながら、も少し急いでお出でなさい」

老翁「ありがたうございます。お札も戴き

○前の遊行―先代の遊行上人。遊行寺の住職は代々遊行上人といつた。

○朽木の柳―解說參照。

○結緣―佛に緣を結ぶこと

○老いたる馬―韓非子に「管仲隰朋從二於桓公一而伐二孤竹一、春往冬反、迷惑失レ道、管仲曰老馬之智可レ用也、乃放二老馬一而隨レ之遂得レ道」とある故事をいふ。

年遊行の御下向の時も。古道とて昔の街道を御通り候ひしなり。されば昔の道を教へ申さんとて。遙々これまで參りたり

ワキ「不思議やさては前の遊行も。この道ならぬ古道を。『通りし事のありしよなう

シテ「昔はこの道なくして。あれに見えたる一叢の（と正面を見）。森のこなたの川岸を。お通りありし街道なり、その上朽木の柳とて名木あり。かかる貴き上人の。御法の聲は草木までも。成佛の緣ある結緣たり

地「こなたへ入らせ給へとて。老いたる馬にはあらねども。道しるべ申すなり。急がせ給へ旅人

（と舞臺に入り）

地上歌「げにさぞな所から。げにさぞな所から。人跡絶えて荒れ果つる。葎蓬生刈萱も。亂れあひ

ませうが、それよりも、先年遊行上人がお下りになつた時も、古い道がよいといつて、昔の街道をお通りになつたのです。それで、お上人様にも昔の道をお教へしたいと思つて、遠い所をわざ〳〵こゝまで參つたのでございます」

遊行「これは不思議だ。すると、先代の遊行上人も、この道でない古い道を通つたことがあるのですね」

老翁「昔はこの道はなくて、あそこに見えます一かたまりの森のこちらの川岸の街道をお通りになつたのでございます。その上、あちらには朽木の柳といつて名木がございます。あなた樣のやうな貴いお上人樣にお念佛して戴けば、草木までも成佛する佛緣を結ぶことが出來るのでございます。どうぞこちらへお出で下さい。老馬が道案内をした昔話ぢやございませんが、この老人が御案内申しませう。さあ、どうぞお急ぎ下さい」

（こういつて古街道を歩きながら、）

遊行「なる程、こゝは場所が通る人もなく、すつかり荒れ果ててしまつて、葎や蓬や刈萱などが生ひ茂り、雜草の枯れ朽

○「淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜」新古今集源通光の歌下句「忘れぬ夢を吹く嵐かな」
○露分け衣―霜の緣で露を出し、衣の緣語着を來にいひかけた。
○枝さびて―枝が枯れふるびて。
○蔭踏む道―新古今集藤原高遠の歌に「うち靡き春は來にけり青柳の蔭踏む道に人の休らふ」
○末もなく―はてしもなく遠く續いて。
【三】
○川そひ柳―川邊に沿うた所にある柳。
○星霜―年月。
○鳥羽の院―鳥羽天皇。御在位一七六七―一七八三年一七九〇年以降御院政、一八一六年崩御。
○北面―院御所警護の武士

たる淺茅生や袖に朽ちにし秋の霜、露分け衣きて見れば昔を殘す古塚に（と作物へ向き）。朽木の柳枝さびて。蔭踏む道は末もなく風のみ渡る（と右の方を見やり）、氣色かな風のみ渡る氣色かな（とソキへ向き）

【三】

シテ「これこそ昔の街道にて候へ。（作物へ向き）又これなる古塚の上なるこそ朽木の柳にて候よくよく御覽候へ

ワキ（作物へ向き）さてはこの塚の上なるが名木の柳にて候ひけるぞや。げに川岸も水絶えて。川そひ柳朽ち殘る。老木はそれとも見えわかず。蔦葛のみ這ひかかり。青苔梢を埋む有樣。誠に星霜年ふりたり。さていつの世よりの名木やらん。委しく語り給ふべし（とシテへ向く）

シテ「昔の人の申し置きしは、鳥羽の院の北面。佐

ちた所に、秋の霜が一面におりてゐる、さうした露霜の中を分けて、こゝまで來て見ると、壞れ殘つた古塚の上に、朽木の柳が枯れ枯れに立つてゐる。そしてこの柳が木蔭を作つてゐる道の向ふは、はてしもなく續いて、秋風が吹き渡つてゐる。いかにも寂しい感じだ」

遊行上人は老翁に案内せられて、朽木柳の前に來た態。

【三】

老翁「これが昔の街道でございます。そして、この古塚の上にあるのが朽木の柳でございます。よく御覽なさいませ」

遊行（柳を見て）「さてはこの塚の上にあるのが、名木の柳だつたのだな。なる程、川岸の水も涸れてしまひ、岸邊の柳だけが朽ち殘つてゐるのだ。いや朽ち殘つてゐるといつても、どれが老木だか分らないほと蔦葛がすつかり這ひかゝつて、青苔が梢を埋めてゐる樣子、確かに長い年月を經たものに違ひない。（老翁に）すると、この柳はいつ頃からの名木なのですか、委しく話して下さい」

老翁「昔の人からいひ傳へて來ましたとこ

○佐藤兵衞憲清—西行法師在俗の時の名。左衞門尉康清の子で、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となつたが、出家して圓位後に西行と號し、諸國を遊歷して多くの秀歌を遺した。〔江口〕〔西行櫻〕〔松山天狗〕參照。
○水無月—六月の雅名。
○六時不斷の—六時は初夜・中夜・後夜・晨朝・日中・日沒この六時に絕えず讀經念佛するをいふ。
○新古今—後鳥羽上皇の院宣により、通具・有家・定家・家隆・雅經の撰進した勅撰歌集。古今集に次いで重んぜられてゐる。
○道のべに清水流るる柳蔭—新古今集西行法師の歌。下句「暫しとてこそ立ちとまりつれ」
○涼みとる—涼を入れる、涼む。
○殘る老木　歌の後世に殘ると、老木の朽ち殘ると、
○御十念—念佛十返すること高僧に十念を授かれば、極樂往生すといふ。

藤兵衞憲清出家し。西行と聞えし歌人。この國に下り給ひしが。頃は水無月半ばなるに。この川岸の木のもとに。暫し立ち寄り給ひつつ。一首を詠じ給ひしなり

ワキ「謂れを聞けば面白や。さてさて西行上人の。詠歌は何れの言の葉やらん

シテ「六時不斷の御勤めの。隙なきうちにもこの集をば。『御覽じけるか新古今に

ワキ次の地上歌に下に居る。

地上歌「道のべに。清水流るる柳蔭。清水流るる柳蔭（作物の前へ行きつつ）暫しとてこそ立ちとまり（と眞中に立ちつつ）涼みとる言の葉の（下に居りつつ）末の世々までも。殘る老木はなつかしや。かくて老人上人の（シテワキ向合ひ合掌しつつ）御十念を賜はり御前を立つと見えつるが（シテ立ちつつ）朽木の柳の古塚に寄るか

ろに據ると、鳥羽院の北面の武士で、佐藤兵衞憲清、後出家して西行といつた歌人が、この國へお下りになつたのですが、丁度その頃は六月の中旬で、暫くこの川岸の木蔭に立ち寄つてお休みになつて、一首の和歌をお詠みになつたのでございます」

遊行「謂れを聞くと、實に面白い話です。して、西行上人の詠まれた歌といふのは、どういふ歌なのです」

老翁「お上人樣は每日一日中お勤めにお忙しうございませうが、そのお隙にこの歌集を御覽になつたことがございますか、新古今集を。それに——

『道のべに清水流るる柳蔭、暫しとてこそ立ちとまりつれ』

（道のべに、清水の流れてゐるこの柳蔭に、ほんの暫くのつもりで休んだのが、餘り氣持がよいので、思はず時を過してしまつた）

と、かうお涼みになつた時のお歌で、その爲に後世まで語り傳へられるやうになつたこの老木は、なつかしう思はれます」

やがて、この老人は遊行上人からお十念を授かつて、上人のお前を立つたと思ふと、朽木の柳のある古塚に立ち寄

と見えて失せにけり寄るかと見えて失せにけり

るやうに見えて、そのまゝ姿が消え失せてしまつた。

と右へ廻りに作物の右側へ行き正面に開き、作物の内へ中入。

【間】

○俵の藤太秀郷―朱雀天皇頃の人。下野押領使となる。「三井寺」參照。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて名乘座に出て、

狂言「かやうに候者は。この邊に住居する者にて候。今日は古塚の柳の邊へ參り。心を慰め申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづかたへ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは諸國遊行の聖にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「さやうに候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。朽木の柳の謂れ。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に古塚の柳の子細と申すは。人皇七十四代鳥羽の院の北面の侍に。俵の藤太秀郷より八代目。左衞門尉康清の御子。佐藤兵衞憲淸。中頃出家召され西行法師と名づけ給ひ。諸國を修行せられ。陸奥へ御下りの時。この所を御通りありしに。頃は水無月半ばの事なりしに。川添に朽木の柳のありたるを御覽じて。涼しき所やあると思し召し。この所へ御出でありしに。案の如く風涼し

【四】

く吹き來り候間。柳に向ひ一首の歌に。道のべに清水流るゝ柳陰。暫しとてこそ立ちどまりつれと。かやうに詠み給ひたると申す。誠に田舎にありながら。かゝる歌人の言の葉に預かるほどの木なればとて。古塚の柳と申して名木のやうに申し傳へ候。この歌は新古今にも入りたると承り候。さて又昔はこの道御座なく候。あれに見えたる一村の。少しこなたの川岸より。これなる道へ通り候。既に遊行上人奥へ御下りの時も。あの古道を御通りありたると申す。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候か。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前あれなる街道を通り候處に。いづくともなく老人一人來られ。古道とてこの道を教へ。朽木の柳の謂れ。唯今御物語の如く懇に語り。塚のほとりにて姿を見失うて候よ

狂言「言語道斷これは奇特なる事を承り候ものかな。それは疑ふ所もなき朽木の柳の精にて御座あらうずると存じ候。さやうに候はば暫くこの所に御座ありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候間。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ「不思議やさては朽木の柳の。われに言葉をかはしけるよと

【四】 後段

遊行「これは不思議なことだ、すると、朽木の柳が自分に言葉をかはしたのであつ

ワキツレ上歌(待謡)念ひの珠の數々に。念ひの珠の數數に。御法をなして稱名の聲うち添ふる初夜の鐘。月も曇らぬ夜もすがら。露をかたしく、袂かな露をかたしく袂かな

【五】

後ジテ柳の精、面皺尉・白垂・風折烏帽子・白鉢巻・襟淺黄・着附小格子・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて作物の内に床几にかけ居り、引廻をかけたるまゝにて、出端の囃子にて、

後ジテ「沅水羅紋海燕囘る。柳條恨みを牽いて荊臺に到る。徒らに。朽木の柳時を得て

地「今ぞ御法に合竹の

シテ「直に導く。彌陀の教へ

地「衆生稱念。必得往生の、功力に引かれて草木までも。佛果に至る。老木の柳の。髪も亂るる白髪の老人。忽然と現れ出でたる烏帽子も。柳さびたる有樣なり

後見、引廻を下す。ワキシテに向ひ、

た。……と思つて、數珠を手に持ち、色色の讀經をし、念佛してゐると、もう初夜の鐘が聞えて來て、空には澄みきつた月が出てゐる。では、今夜は夜通しこの露の多い所で假寢をしよう」

といつて、念佛して假睡する。

【五】 後ジテ柳の精、遊行上人の夢に、古塚の中から聲をかける態で、

柳精「柳のことは、詩にも『沅水の水が薄絹のあやのやうな小波を立てる春の頃になると、燕は海から歸つて來るが、あなたは離別の記念とした柳の枝に長い恨みを殘して、遠い荊臺の方へ行つてしまはれる』などと詠まれてゐるが、この老柳は今日まで徒らに朽ちて來たところ、今度仕合な運が廻つて來て、今佛法の御囘向を受けて、直樣阿彌陀如來の御敎へに導かれ、『衆生が阿彌陀如來に祈り、その名號を稱へれば、必ず極樂往生することが出來る』といふ經文の通り、ありがたい功德の力によつて、草木のやうなものまでが成佛することが出來る」

と、老木の柳の枝のやうな亂れた白髪の老人が、突然現れて來た。その樣子は、烏帽子までが柳じみたものである。

柳の精、僧の夢に姿を現す。

○念ひの珠—念珠、數珠、珠の數を數々にいひかけた。
○初夜 今の午後八時頃。

【五】
◎後ジテ刊行會本には「沅水」以下をサシ謡、「徒らに」以下を一聲とす。
○沅水羅紋—三體詩、李群玉の送客詩に「沅水羅紋海燕囘、柳條牽レ恨到二荊臺一」柳の縁で引いた。沅水は支那辰州沅陵の西にある川、荊臺は江陵府にあり楚王の遊樂せられた所。
○合竹—數管を同時に合せて吹く笙の吹き方の名稱。御法に逢ひといひかけ、直にの序とした。
○衆生稱念必得往生—無量壽經の句。
○草木までも佛果に—中陰經の偈文と傳へるものに「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」
○柳の髪も—和漢朗詠集都良香の詩句「氣霽風梳二新柳髪一」に據つた。
○柳さび—烏帽子の皺の寄せ方の名稱。こゝでは、ただ柳らしいといふ程の意。

○あらはし衣—喪服の一名であるが、こゝでは姿を現しといひかけ、衣の縁語紐にかけて「日も」を出す料としただけである。

○臺—極樂の蓮華臺。

○一念十念—念佛の多少に拘らず、必ず往生するとの意。無量壽經に「乃至一念乃至十念」

○此界一人—五會法事讃に「此界一人念二佛名一、西方便有二一蓮生一、但使三一生常不二退一、此華還到二此間一迎」末句は和譯して引いた。

ワキ『不思議やなさも古塚の草深き、朽木の柳の木のもとより、その樣化したる老人の、烏帽子狩衣を着しつつ、現れ給ふは不審なり

シテ『何をか不審し給ふらん。はやわが姿はあらはし衣の。日も夕暮の道しるべせし、その老人にて候なり

ワキ『さては昔の道しるべせし、人は朽木の柳の精

シテ『御法の教へなかりせば、非情無心の草木の。臺に到る事あらじ

ワキ『なかなかなれや一念十念

シテ『ただ一聲のうちに生まるる

ワキ『彌陀の教へを

シテ『身に受けて

地上歌『此界一人念佛名（シテ作物を出でて）西方便有一

遊行「これは不思議だ。いかにも古びた古塚の草深い中にある朽木の柳の木のもとから、變な樣子をした老人が、烏帽子・狩衣を着て現れて來られたが、合點の行かないことだ」

柳精「どうしてそのやうに不審にお思ひになるのです。もはや先程姿を現してお會ひしてゐるので、私はこの夕暮に道を御案内した老人なのです」

遊行「すると、昔の街道を案内してくれた人は、朽木の柳の精だつたのですね」

柳精「佛の御敎へを受けることが出來なければ、非情無心の草木などは、極樂へ行くことは出來ないでせうのに……」

遊行「それはさうです。一度でも十度でも、兎に角念佛さへすれば……」

柳精「たゞ一度念佛しただけで、極樂へ生まれることが出來るといふ、ありがたい阿彌陀如來の御敎へを伺つて『この世界で一人が一度阿彌陀の名號を稱へれば、西方淨土にその度毎に一つの蓮が生えるのである。それで、一生いつも怠らず念佛すれば、臨終の時、その淨土の蓮の花

○上品上生―極樂に九等の階級がある、その最上級。

【六】

○釋迦既に滅し―佛說に、過去七佛の最後の佛印度摩揭陀國の釋迦牟尼佛（前佛）が死んだ後五十六億七千萬年して、今都率天の內院にある彌勒菩薩（後佛）が娑婆世界に出て、人天を化益するといふ。今はその中間である。

○彌陀の悲願―阿彌陀如來の慈悲深い誓願。

○南無―梵語 Namas 歸命と譯す。

○灑濁―拾葉抄に「彌陀の智水を我等に灑ぎ給へと云ふ心なり」

○歸命―身命を佛に歸し任せる意。

○頂禮―頭頂を長者の足につけてする最敬禮。

○超世の悲願―世に勝れた慈悲の誓願。

○他力の船―他力は衆生の自力でなく、彌陀の本願によつて成佛すること、これを船に喩へた。

○法の道―船に乘りといひかけた。

○彼岸―生死の迷界を離れた所、涅槃。極樂。

○黄帝の貨狄―黄帝は支那

蓮生。但使一生常不退。この花。還つてここに迎ひ。上品上生に。到らん事ぞ嬉しき

（と作物右側の前に下に居てツキに合掌。）

【六】

シテ 釋迦既に滅し。彌勒未だ生ぜず。彌陀の悲願を頼まずは。いかで佛果に到るべき（と立ち）

地クリ 南無や灑濁歸命頂禮本願僞りましまさず。超世の悲願に身を任せて。他力の船に法の道（と作物の前へ行き）

シテサシ 則ち彼岸に到らんこと。一葉の船の力ならずや

地 かの黄帝の貨狄が心。聞くや秋吹く風の音に。散り來る柳の一葉の上に。蜘蛛の乘りてささがにの。絲引き渡る姿より。工み出だせる船の道これも柳の徳ならずや

シテ『その外玄宗華清宮にも

がこの娑婆へ迎へに來てくれる』と仰せられた通りに、極樂の上品上生へ行くことの出來るのは、ほんとに嬉しいことです」

【六】

柳精「釋迦如來は既に寂滅なされ、彌勒菩薩はまだお現れにならない、無佛時代の今の世に於ては、阿彌陀如來の慈悲深い御誓願にお頼りするより外に、成佛する道はありません。どうかありがたい貴い阿彌陀如來の御本願の通りに、其世に勝れたお慈悲深い御誓願にお任せ致して、如來の御力のまに〳〵極樂淨土に生まれることが出來ますやうに。

さう申せば、その極樂の彼岸に參るのは、一葉の船の力によるもので、その船については柳が深い關係を持つてゐるのです。と申すのは、かの黄帝の臣下の貨狄は、水に落ちた蜘蛛が秋風の吹くにつれて水の上に散り浮かんだ柳の一葉に乘つて、次第に岸邊に着いたのを見て、船を造ることを考へ出したのでありまして、これも柳の徳と申すべきものでございませう。その外、唐玄宗の華清宮を形容した詩にも、『御殿の前の柳、役所の前の

地『宮前の楊柳寺前の花とて。眺め絶えせぬ。名木たり

これより謠に合せて舞ふ（舞クセ）

地クセ　そのかみ洛陽や。清水寺の古。五色に見えし瀧波を。尋ね上りし水上に。金色の光さす。朽木の柳忽ちに。楊柳觀音と現れ今に絶えせぬ跡とめて。利生あらたなる。歩みを運ぶ靈地なり。されば都の花盛り。大宮人の御遊にも。蹴鞠の庭の面。四本の木蔭枝垂れて。暮に數ある、沓の音

シテ『柳櫻をこきまぜて

地『錦をかざる諸人の。花やかなるや小簾の隙洩りくる風の匂ひより。手飼の虎の引綱も。長き思ひに楢の葉の。その柏木の及びなき。戀路もよしなしや。これは老いたる柳色の。狩衣も風

花』などと詠まれて、柳は眺めの勝れた名木なのです。

昔、京都清水寺の創建せられた由來を見ても、ある僧が五色の色に見えた瀧の水上を尋ね上つて行くと、そこに金色の光がさして、朽木の柳が忽ちに楊柳觀音となつてお現れになり、それ以來今に至るまでそこに御垂跡遊ばされ、あらたかな御利益を仰いで、人々の絶えず參詣する靈地となつたのです。それで、都の花盛りの頃、雲の上人が蹴鞠の御遊をなさる時も、その庭のかゝりの四本の木の一つには、枝の長く垂れた柳をお植ゑになるのでありましたし、夕暮などにその木蔭に鞠をお蹴りになる沓音がしげ〳〵と聞えます。

蹴鞠と申せば、柳や櫻を入れ交ぜた錦のやうな、立派な粧ひをした方々が蹴鞠を遊ばした折、花やかな御簾から、薫りの高い追風が匂つて來て、手飼の猫が外へ逃げ出した、その猫につけてあつた綱の爲に御簾が引上がて、柏木右衛門督が御簾の内の御方を見初められ、長く忘れることの出來ない、叶はぬ戀に惱まれることとなつたのでした。……いや、それは

太古三皇の一。貨狄はその臣。貨狄が船を造り創めた事、「自然居士」のクセにある。同曲參照。

○ささがに―蜘蛛の異名。

○玄宗―唐第六代の天子。「古帝」「楊貴妃」參照。

○華清宮―唐都の近く驪山にあり、玄宗が楊貴妃と遊樂した離宮。

○宮前の楊柳―三體詩、王建の華清宮の詩に「酒幔高樓一百家、宮前楊柳寺前花、內園分レ得溫湯水ヲ、二月中旬已進レ瓜ヲ」寺は尙書御史の居る所。

○清水寺―京都東山にある「田村」參照。

○楊柳觀音―三十三觀音の一。衆生の願望を聞くことと柳枝の風に靡くやうであるとの意から出た名。右手に柳枝を持つ。

○利生―衆生を利益すること。

○あらたなる―あらたかな

○四本の木蔭―鞠のかゝりの四方に植ゑた木。艮に櫻、巽に柳、坤に楓、乾に松を植ゑる。

○暮に數ある―夕暮に鞠を蹴る沓音が數多く聞えるとの意。

○柳櫻を―古今集素性法師

折も。風に漂ふ足もとの。弱きもよしや老木の
柳氣力なうしてよわよわと。立ち舞ふも夢人を。
現と見るぞはかなき

「氣力なうしてよわよわと」とたら／＼と下り、作物の右の柱に摑まり、「現と見るぞ」とワキへ向き、クセを舞ひ上げ、

【七】

シテ『教へ嬉しき法の道

地『迷はぬ月に。つれて行かん

〔序舞〕

後見より杖を受取りてよわ／＼と舞ひ、

シテ『青柳に。鶯傳ふ。羽風の舞

地『柳花苑とぞ。思ほえにける

シテ『柳の曲も歌舞の菩薩の（眞中へ行き）。舞の袂を
返す返すも。上人の御法を受け（下に居立ち）。悦ぶ
報謝の舞も。これまでなりと。名殘の涙の（としをり）

地『玉にも貫ける。春の柳の

他人事、私は狩衣も風折烏帽子も老い古びた柳色で、足もともそよと吹く風に漂ふやうな弱々とした、何の氣力もない老木の柳ながら、よわ／＼と立ち舞つて夢に現れ出て、それを現のやうに思ふのは、ほんとにはかないことでございます」

【七】

柳精「ありがたい佛の御教へを受けて、心を迷はさず、曇りのない月に連れられて、西方淨土へ參りませう」

と、迷ひの晴れた、晴れやかな心持で、

〔序舞〕

と、老體のここちで、弱々としながら舞ひ、

柳精「青柳の枝から枝へ飛び傳ふ鶯の羽風のやうなこの舞は、柳花苑のやうに思はれます。——

かうして舞ひます柳の曲、悟りの道に入つた歌舞の菩薩の舞、お上人樣の御教へを受けてくれ／″＼も御禮申し上げる舞、それもこれも、これでお仕舞でございます。お名殘惜しさに出る涙は、春の柳の絲枝に露の聯ねた玉のやうでございますが、もうお暇申しませう。……と申すうちに、曉を告げる雞も鳴き出しました、

の歌「見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」に據つた。

○小簾の隙　以下源氏物語若菜上卷に、六條院で蹴鞠のあつた時、猫が簾の内から逃げ出して、その猫についてゐた綱の爲に簾が引上つた隙に、柏木右衞門督が女三宮を見初めたとあるをいふ。

○手飼の虎—飼猫。

○長き思ひ—綱の長きをいひかけた。

○楢の葉の—思ひになるといひかけ、楢の緣で柏木を呼び起した。

○及びなき戀路—女三宮は源氏の妻であつたから。

○柳色の狩衣—青色の狩衣。老人に用ゐた。

○風折—風折烏帽子。風の字を承けて、風に漂ふと續けた。

○氣力なうして—和漢朗詠集白樂天の詩句に「柳無氣力條先動、池有浪文氷盡開」

○夢人—上人の夢に現れた人。柳の精。

【七】

○月につれて—曇りのない月に從つて、その行く方角西方淨土へ行かう。

シテ『暇申さんと。木綿附の鳥も鳴き
地、別れの曲には（と立ち）
シテ『柳條を綰ぬ
地『手折るは青柳の（角へ行き）
シテ『姿もたをやかに（左へ廻り）
地『結ぶは老木の
シテ『枝もすくなく
地『今年ばかりの（正面へ出で）。風や厭はんと、漂ふ足もとも、よろよろよわよわと（たらたらと下り）。倒れふし柳かり寝の床の（と安坐し）。草の枕の一夜の契りも他生の緣ある上人の御法（とワキへ向き居立ち）西吹く秋の風うち拂ひ（立ちて扇扱ひ）。露も木の葉も散り散りに（角へ行き）。露も木の葉も。散り散りになり果てて。殘る朽木と。なりにけり
（と右へ廻り常座にて開き留拍子を踏む）

お別れの曲には、柳の枝を輪にしてお贈りするところですが、それには姿もしなやかな青柳の枝を手折つて作るのでありまして、これは老木で、枝も少いあはれなものでございます。では、せめて今年だけでも命があるやうに、風を厭ひませう」

といつて、風にも漂ふやうな、よわよわした足どりで、よろよろと倒れ伏し、「假寢の夢に現れて、上人の御敎へを受けることの出來たのも、前世からの宿緣である」と喜んで、西の方へ吹く秋風をうち拂ひながら行くと、露も木葉も散り散りに消え果てて、（僧の夢は覺め柳の精の姿は消えて）現に殘るのは、もとの朽木の柳であつた。

○柳花苑―唐樂の曲名。「岷江人楚に―此樂上古には舞あり、今は斷絕」と。
○歌舞の菩薩―極樂で歌舞を奏して、佛を讃歎し往生人を賞揚する菩薩。
○返す返すも―袖を飜すといひかけた。
○報謝―御禮。
○玉にも貫ける―古今集僧正遍昭の歌「淺綠絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」に據つた。
○暇申さん―柳の絲といひかけた。
○木綿附の鳥―鷄の異名。言ふといひかけた。
○柳條を綰ぬ―三體詩張喬の詩に「離別河邊綰二柳條一、千山萬水玉人遙」支那に柳の枝を折り輪にして離別の人に贈る風習があつた。
○たをやか―しなやか。
○倒れふし柳―倒れ伏すを伏柳（横に伏している柳）にいひかけた。
○一夜の契りも―說法明眼論に「波二一河流一、一夜同宿―皆是先世結緣―」
○西吹く秋の風―西方淨土の意を含めた。

〔考　異〕

諸　流　（五　流）

五流の間、殆ど差異がない。

古謠本　（光悅本）

現行本に同じ。

夕顔（ゆふがほ）

觀（剛喜）

解説

【能柄】　三番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　豊後の僧、**ワキツレ**　同從僧（二人）、**前シテ**　里女（夕顔上の靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　夕顔上

【所】　京都　五條

【時】　秋（九月）

【作者】　能本作者註文に世阿彌の作とす、親元日記に寛正六年二月二十八日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月三十日註釋のことを記す。

【梗概】　豊後國の僧が男山八幡參詣の爲に都に上り、近郊の名所を見物して、夕暮、五條のあたりへ來ると、ある家の軒端から女の歌を吟ずる聲が聞えて、やがてその女が現れて來た。僧がこの女に所の名を尋ねると、源氏物語にはたゞ何某の院と書いてあるが、實は融の大臣の舊跡河原院で、夕顔の亡くなつた所であると答へ、なほ僧の尋ねるまゝに、夕顔上が源氏と契りを結んで、こゝに連れて來られた夜、物の怪の爲にとり殺された事を語り、行方知れずに消えてしまふ。その夜、僧が月下に法華經を讀誦してゐると、夢に夕顔上が現れて舞を舞ひ、僧の回向によつて迷ひの晴れたことを喜び、夜も明け方になると、雲に紛れて消えてしまふ。

【出典】源氏物語夕顔の卷に據つたもので、文章も屢〻原文を引いてゐるから、その要點を抄出すると、

六條わたりの御忍び歩きの頃、内裏よりまかで給ふ中宿りに、大貳の乳母のいたく煩ひて尼になりにけるをとぶらはんとて、五條わたりの家尋ねておはしけり、……むつかしげなる大路のさまを見渡し給へるに、きりかけだつものにいと青やかなる葛の心地よげにはひかゝれるに、白き花ぞおのれひとり笑みの眉開けたる。……げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの、このもかのも怪しううちよろぼひて、むね／＼しからぬ軒のつま毎にはひ纏はれたるを、「口惜しの花の契りや一房折りて參れ」と宣へば、この押し開けたる門に入りて折る。……白き扇のいたう焦したるを「これに置きて參らせよ、枝もなさけなげなんめる花を」とて取らせたれば……

惟光に紙燭召して、ありつる扇御覽ずれば……

　心あてにそれかとぞ見る白露の、光そへたる夕顔の花

そこはかとなく書き紛はしたるも、あてはかに故つきたれば、いと思ひの外にをかしう覺え給ふ。……

　よりてこそそれかとも見めたそかれに、ほの／＼見つる花の夕顔

ありつる御隨身して遣はす。

かくて、夕顔との契りが結ばれた。ある日のこと、今日も源氏は夕顔の宿に泊まつた。

明方も近うなりにけり。鷄の聲など聞えて、御嶽精進にやあらん、たゞ翁びたる聲にぬかづくぞ聞ゆる。……南無當來の導師とぞ拜むなる。「かれ聞き給へ、この世とのみは思はざりけり」とあはれがり給ひて、

　優婆塞が行ふ道をしるべにて、來ん世も深き契り違ふな

……そのわたり近きなにがしの院におはしまし着きて……

　古もかくやは人のまどひけん、わがまだ知らぬ東雲の道

ならひ給へりや」と宣ふ。女はぢらひて、

　山の端の心も知らで行く月は、うはの空にて影や絶えなん

……日たくる程に起き給ひて、格子手づから上げ給ふ。いと痛く荒れて、人目もなく遙々と見渡されて、木立いと疎ましく物ふりたり。氣近き草木などは殊に見所なく、皆秋の野らにて、池の水草に埋もれたれば、いとけうとげなり。……

夕露にひもとく花は玉鉾の、たよりに見えしえにこそありけれ
「露の光やいかに」と宣へば、後目に見おこせて、
光ありと見し夕顔のうは露は、たそかれ時のそらめなりけり

とほのかにいふ、をかしと思しなす。……宵過ぐる程に、少し寢入り給へるに、御枕上にいとをかしげなる女ゐて……御傍の人（夕顔）をかき起さんとすと見給ふ。……まづこの人はいかになりぬるぞとおもほす心騷ぎに、身の上も知られ給はず。添ひ伏して、やゝと驚かし給へど、たゞ冷えに冷え入りて、息はとく絶えはてにけり。……夜中も過ぎにけんかし、風やゝ荒々しう吹きたるは、まして松の響木深く聞えて、けしきある鳥のから聲に鳴きたるも梟はこれにやと覺ゆ。……火はほのかにまたゝきて、母屋の際に立てたる屏風の上、こゝかしこの隈々しく見ゆるに、足音ひし／＼と踏み鳴らしつゝ、後より寄り來る心地す。

【概評】世阿彌が能作書に「或は六條御息所の葵の上につき祟り、夕顔の上の物の氣にとられ、浮舟のつきものなどとて、見風のたよりある幽花種、あひ難き風得なり」といつてゐるやうに、源氏物語は謠曲にとつて、最も貴い題材である。同じ源氏物語ものの中でも〔葵上〕はあまりに凄慘であり、〔浮舟〕はやゝ通俗に傾いて、源氏物語ものらしい典雅優麗の趣を缺く嫌ひがあるが、言葉幽艷をもととした物語の中でも殊に勝れてあはれな夕顔の悲話を題材とした本曲の如きは、底知れぬ寂しさと、そこはかとなく漂ふ薫りと、さすがに源氏の女性らしい雅びやかさとを持つた、三番目物・鬘物として、最もなつかしい味ひを持つてゐるのである。これを同じ題材を取扱つた〔半蔀〕に比べると、本曲は大體原文のまゝ直叙してゐるに對し、〔半蔀〕は黄昏時の夕顔のおぼろな感じを出すことに意を注いでゐる。一曲全體をたゞ一つの感じで掩ひ包んでしまふといふ點では、〔半蔀〕ほど思ひ切つた曲は外にない。それは一つの面白い行き方であつて、非難することの出來ないものであるが、題材そのものが既におぼろな感じに包まれてゐるものに於ては、戯曲としては寧ろやゝ鮮明に描き出した方が所期の效果を擧げ易い。さういふ意味に於てこの曲の描寫法は少しも誤つてゐないと思ふ。兩曲ともとり／＼に面白いが、強ひて甲乙をつければ、戯曲としてよく纒つた、そして全體を通じて、との部分に於ても夕顔らしい情趣を漂はしてゐる本曲の方が、手際のよい出來榮えであるといひ得ようかと思ふ。

【一】

名乘笛にて、ワキ豊後僧、角帽子・着附無地熨斗目・緋水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、ワキ同樣の裝束（水衣は縷）にて舞臺に入り、ワキは正面に向き、（ツレはワキに向き下に居り）

ワキ「これは豊後の國より出でたる僧にて候。さても松浦箱崎の誓ひも勝れたるとは申せども。なほも名高き男山に參らんと思ひ。この程都に上りて候。今日も又立ち出で佛閣に參らばやと思ひ候

ワキサシ「尋ね見る都に近き名所は。まづ名も高く聞えける。雲の林の夕日影。うつろふ方は秋草の。花紫の野を分けて

と謠ひながらワキヅレ（立ち）と向合ひ、

ワキ ワキヅレ上歌「賀茂の御社伏し拜み。賀茂の御社伏し拜み。紏の森もうち過ぎて。歸る宿りは、在原の月やあらぬとかこちける。五條あたりのあばらやの。主も知らぬ所まで。尋ね訪ひてぞ、暮らし

【一】

○豊後の國―夕顔の子玉鬘が筑紫にゐた縁で出した。
○松浦箱崎―肥前國松浦郡松浦の鏡の宮と筑前國粕屋郡箱崎の筥崎八幡宮。源氏物語玉鬘の卷に「近き程に八幡（男山）の宮と申すは、かしこにても參り祈り申し給ひし松浦筥崎同じ社なり」。
○誓ひ―神佛の衆生を利益し給ふ誓願。
○男山―山城國綴喜郡の男山八幡宮。（弓八幡）參照。
○雲の林―山城國愛宕郡紫野にあつた雲林院。（雲林院）參照。
○紫の野―愛宕郡大宮村の紫野。大德寺のある邊。花の紫色をいひかけた。
○賀茂の御社―愛宕郡上賀茂の上賀茂の社、祭神賀茂別雷命。（賀茂）參照。
○紏の森―同郡下鴨、下賀茂の社（祭神玉依姫・賀茂建角見命）鎮座の地。
○在原の―在原業平。（雲林院）參照。宿りはありといひかけた。
○月やあらぬ―伊勢物語の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」
○五條―右の歌は業平が五

【一】 前段

舞臺は京都で、ワキ豊後の僧、ワキヅレ、從僧を隨へて登場。

僧「私は豊後國から出て來た僧です。さてわが九州の方でも、松浦や箱崎の八幡宮は御利益の勝れてあらたかな神樣ではあるが、なほそれよりももつと名高い男山八幡宮に參詣したいと思つて、この間都に上つたのです。そして今日もまた出掛けて、お寺に參らうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「見物して歩く都近郊の名所では、まづ第一に評判の高い雲林院に參つて、夕暮、秋草の花に日影の照りはえてゐる紫野を踏み分け、上賀茂のお社に參り、それから紏の森の下賀茂にも參拜して、宿へ歸る道すがら、在原業平が『月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして』といつて歎いた五條あたりの、主も分らないあばら屋まで尋ね歩いて、一日中見物して暮らしたことだ」

といひながら五條へ來た態で、舞臺は五條となる

條の大后の宮の西の對に居られた藤原高子（二條后）を偲んで詠んだものであり、五條はまた夕顔上の假住居した所。
○主も知らぬ―源氏が主をも知らぬ夕顔の宿で花を求め、それが夕顔上と契る緣となつたのをいふ。（屋づま―家の端。軒端。）

【三】
○山の端の心も知らで行く月は上の空にて影や絶えなん―夕顔の巻、夕顔の歌。
○巫山の雲―楚の襄王が陽臺で夢に巫山の神女にあつたといふ故事（定家―朝の雲夕の雨―の語釋參照）。
○湘江の雨―帝舜が蒼梧といふ所で崩じたのを、二人の后娥皇女英が慕ひ歎いて楚國の畔にさまよひ、終に湘水の岸で死んだ。その時の泣く涙が廟前の竹にかゝつて、皆斑に染つたといふ故事。はかない契りの例に擧げた。

ける尋ね訪ひてぞ暮らしける

ワキ「五條あたりのあばらやの」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸り、上歌濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや五條あたりにてありげに候（目附柱の方に向き）不思議やなあの屋づまより。女の歌を吟ずる聲の聞え候。暫く相待ち尋ねばやと思ひ候（とツレへ向き）

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座の方へ行き、順次着座して下に居る。

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ里女、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・色入唐織着流・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

シテ「山の端の。心も知らで。行く月は。上の空にて。影や絶えなん。巫山の雲は忽ちに。陽臺のもとに消え易く。湘江の雨はしばしばも。楚畔の竹を染むるとかや

「陽臺のもとに」と謠ひながら舞臺に進み常座に立ち、

シテサシ「ここは又もとより所も名を得たる。古き

――道を急いだので、もうこゝは五條邊らしい。……おやこれは不思議だ。あの軒端から、女の歌を吟ずる聲が聞える。暫く待つてゐて、尋ねて見ませう」

（脇座へ行つて、女を待つてゐる態。）

【三】

（シテ夕顔上の靈、里女の姿で登場。）

女「山の端の心も知らで行く月は、上の空にて影や絶えなん」

（山の心も知らないで、その方へ誘はれて行く月は空の途中で消えてしまふ[illegible]男の心も知らないで[illegible]行く私も、中途で男に見離され[illegible]）と歌を吟じ、

女「巫山の神女は陽臺で楚襄王の夢に現れたが、忽ちにして消えてしまひ、帝舜の后娥皇女英は帝の崩御を歎いて湘江の岸邊で歎き死に、その悲しみの涙で楚國の畔の竹を斑に染めたとか。ほんとに男女の契りといふものは、實にはかないものです。

この所は又、昔から有名な所で、古い軒

○忍ぶ方々多き―昔を追想させる事の多い。金葉集周防内侍の歌に「住みわびてわれさへ軒の忍ぶ草忍ぶ方しげき宿かな」

○紫式部―藤原爲時の女、上東門院の女房、源氏物語の作者（源氏供養參照）

○何某の院―夕顔の卷に「そのわたり近き何がしの院におはし着きて」

○涙の雨―涙の甚しい喩へ（後の世―後世、極樂往生）

○つれなくも通ふ―不本意ながら、魂魄がこの世へ迷ひ通ふとの意。

○浮雲―心の迷妄を喩へた。眞如の月―不變の實體、悟りの心を月に喩へた語。

○むなしき空―望んでも望み甲斐のない意。

軒端の忍ぶ草。忍ぶ方々多き宿を。紫式部が筆の跡に。たゞ何某の院とばかり。書き置きし世は隔たれど。見しも聞きしも執心の。色をも香をも捨てざりし

シテ下歌 涙の雨は後の世の障りとなれば今もなほ。

上歌 つれなくも。通ふ心の浮雲を。通ふ心の浮雲を。拂ふ嵐の風のまに。眞如の月も晴れよとぞむなしき空に、仰ぐなるむなしき空に仰ぐなる

【三】 ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ いかにこれなる女性に尋ね申すべき事の候

シテ こなたの事にて候か何事にて候ぞ

ワキ さてここをばいづくと申し候ぞ

シテ これこそ何某の院にて候へ

端の忍草を見るにつけても、色々昔を追想させる事の多い家なのですが、紫式部は源氏物語にたゞ何某の院とばかり書かれたのでした。そして、その物語の時代ももう遠い昔となつたのですが、その當時見たこと聞いたことがいつまでも忘れられず、その上當時色香を捨てて思ひ切ることが出來ないで歎いたことが、後世の障りとなつて、成佛することが出來ないため、今だに不本意ながらもこの娑婆に迷ひ通つてゐることとです。あゝこの迷ひの雲を吹く嵐のまゝに拂ひのけて、悟りの月を眺めたいものだと、とても叶はぬ望みながらも、それればかり祈つてゐることとです」と獨言をいふ。僧女の姿を見、

【三】

僧「もうし、こゝな女の方にお尋ねします」

女「私でございますか、何の御用でございます」

僧「こゝは何といふ所です」

女「これが何某の院です」

○むつかしげ―面倒らしい。うるさい。
○融の大臣―河海抄に「何がしの院、河原院歟、彼院左大臣融公舊宅也、又號二六條院一、融は嵯峨帝の皇子で、河原院に鹽竈をうつして風流に遊んだ人。〔融〕參照、
○その世を隔てて―融と時代を隔てて。
○光君―源氏物語の主人公桐壺帝の御子で源氏の姓を賜はつたと作る。
○夕顏の露の世　夕顏上に花の夕顏をかね、夕顏上がはかなくこの世を去つたことをいふ。
○上なき思ひ―この上もない歎き。
○鬼の形　何某の院で夕顏の枕許に女の形が現れて、忽ちに夕顏の息絶えた事をいふ。夕顏の卷に南殿の鬼の某の大臣を脅したる例思ひ出でて」とある。
○河原の院　融の邸。六條にあつた、鬼瓦の意で前の「鬼の形」を承けてゐる。
○玉葛のゆかり―玉葛は夕顏の女、母に別れて後、乳母の子豐後介に作はれて筑紫に下つてゐたから「ゆかり」縁故」といふ。
○世語―世間に語り傳へた話、
【四】
○言葉幽艷にして―源祕抄

ワキ「不思議やな何某の山何某の寺は、名の上のただ假初の言の葉やらん、又それをその名に定めしやらん承りたくこそ候へ

シテ「さればこそ始めより。むつかしげなる旅人と見えたれ。紫式部が筆の跡に。ただ何某の院と書きて。その名をさだかに顯さず。然れどもここは古りにし融の大臣。住み給ひにし所なるを。その世を隔てて光君。又夕顏の露の世に。上なき思ひを見給ひし。名も恐ろしき鬼の形。それもさながら苔むせる。河原の院と御覽ぜよ

ワキ「嬉しやさては昔より。名に負ふ所を見ることよ。我等も豐後の國の者。その玉葛のゆかりとも。なして今又夕顏の。露消え給ひし世語を。語り給へや御跡を。及びなき身も弔はん

【四】

シテクリ「そもそも光源氏の物語。言葉幽艷をもと

僧「これは變だ。何某の山、何某の寺などといふのは、その名の代りに假にいふ言葉ですが、これもそれと同じ意味なのですか、それとも何某といふ定まつた名なのですか、お伺ひしたいものです」

女「やつぱりそんなことをお尋ねになる、どうも初めからうるさそうな旅の方だと思つてゐたのです。紫式部の源氏物語には、たゞ何某の院と書いて、その名をはつきりと出してゐないのですが、こゝは古い昔融の大臣のお住みになつた所で、その後ずつと時代が經つてから、光君がこゝで鬼のために夕顏上のはかない命をとられ、この上もない悲しい物思ひにお逢ひになつた所です。名を聞いただけでも恐ろしい、鬼の形をした瓦、それもすつかり苔に埋まつてゐる、これがその河原の院だと御覽なさいませ」

僧「あゝ嬉しい。すると、昔から有名だつた所を見ることが出來たのだ。私達も豐後國のものですから、夕顏上の子玉葛と縁故のあるものと思つて、今お話の、夕顏上が果敢なく亡くなられた話を聞かして下さい。及ばずながら御回向をしませう」

【四】

女は僧の所に坐り、

女「一體、光源氏の物語は、その文章は美

として。理淺きに似たりといへども

（と謠ひながら大小前へ行き下に居る。ワキも下に居る。）

地「心菩提心を勸めて義殊に深し。誰かは假にも語り傳へん

シテサシ「中にもこの夕顔の卷は。殊に勝れてあはれなる

地「情の道も淺からず。契り給ひし六條の。御息所に通ひ給ふ。よすがに寄りし中宿に

シテ「ただ休らひの玉鉾の

地「便りに。立てし御車なり。

（居クセ）

地クセ「物のあやめも見ぬあたりの。小家がちなる軒のつまに。咲きかかりたる花の名も。えならず見えし夕顔の。折過さじとあだ人の。心の色は白露の。情置きける言の葉の。末をあはれと尋ね見し。閨の扇の色ことに互に秋の契りと

しい雅やかなもので、その内容も、一寸見たところは浮薄なやうですけれど、實は人に菩提心を勸める、意味の大層深いものでございます。誰だつて、これを假初に讀み過すことは出來ません。——

物語の中にも、殊に夕顔の卷は勝れて情味の深いもので、情の道もしんみりと書かれてゐるのでございます。それは、源氏の君が六條御息所へお通ひになるお序にお立ち寄りになりました中休みの所で、ほんの一寸お休みになる間、道ばたにお車をお留めになりました。——

このあたりは、物のよしあしも分らないやうな賤しい小家の多い所でありましたが、その軒端に何ともいひやうのない美しい夕顔の花の咲きかゝつてゐるのを御覽になつて、それを折り取らせになると、浮氣な女はその機會を外さず、深い思慮もなく、情のこもつた歌を詠みかけました。それを源氏の君は面白くお思ひになつて、尋ね行つてお逢ひになり、それ以來、班婕妤の閨の扇の話とは反對に、お互に中の絶えることもなく情深く契りか

○序に—我が國の至寶紫式部が作源氏物語は、心詞幽玄にして義理甚だ深し—

○菩提心—正覺の智慧を求める心。「岷江入楚に—煩惱即菩提、生死即涅槃の旨を明かにす。煩惱即菩提の文この物語の大意なり—

○夕顔の卷—源氏物語の第四卷。

○淺からず—情の道と、契りと、上下にかゝる。

○六條の御息所—前東宮の妃。後源氏と契りを結ばれた。〔葵上〕〔野宮〕參照。

○よすが—便り、ついで。

○中宿—中休みの宿。源氏の侍者惟光の母大貳の乳母の家。

○玉鉾の便り—玉鉾のは道の枕詞であるのを直に道の意に用ゐた。夕顔の卷源氏の歌に—夕露にひもとく花は玉鉾のたよりに見えしえにこそありけれ—

○物のあやめも—「あやめ」は物のよしあしの差別。夕顔の卷に—物のあやめも見給へわくべき人も侍らぬわたりなれど」

○小家がち—同じ卷に—げにいと小家がちにむつかしげなるわたりの、このもかのもあやしうちよろぼひて」

○えならず―いひやうもなく美しく。
○折過さじ―機會を失ふまい。花を折るといひかけた。
○あだ人―浮氣な移り氣な人。夕顔上。
○白露の―心の色は知らずといひかけ、新古今集藤原頼實の歌「白露の情置きける言の葉やほの〴〵見えし夕顔の花」を引いた。
○尋ね見し―源氏、
○閨の扇―漢成帝の寵姫班婕妤が寵を失つた事を歎き秋の扇に身を喩へた故事をいふ。（班女參照）夕顔の契りは扇に書いた歌が起りであるから、この故事に寄せて綴つた。
○秋の契り　契りの絶えること。
○東雲の道―夕顔を何某の院へ誘ひ出した時の源氏の歌「古もかくやは人の迷ひけんわがまだ知らぬ東雲の道」
○蜉蝣―朝生まれて暮に死ぬ蟲、
○命懸けたる　夕顔の巻に「命をかけて何の契りにかかる目を見るらん」
○宵の間過ぐる―同じ巻に「夜中も過ぎにけんかし、風やゝあら〳〵しう吹きた

は。なさざりし東雲の。道の迷ひの言の葉も。この世はかくばかり。はかなかりける蜉蝣の。命懸けたる程もなく。秋の日易く暮れ果てて。宵の間過ぐる、古里の松の響も恐ろしく

シテ「風に瞬く燈火の

地「消ゆると思ふ心地して。あたりを見れば烏羽玉の。闇の現の人もなくいかにせんとか思ひ川。うたかた人は息消えて。歸らぬ（と立ち）。水の泡とのみ（下を見て）散り果てし夕顔の（常座へ行き）、花は二度咲かめやと。夢に來りて申すとて（ワキへつめ）。ありつる女もかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

と右へ廻りて常座にて開き靜かに中入。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。五條あたりに住居する者にて候。今日も東山の邊へ參り。心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御出でなされ候へば。この

はして『古もかくやは人の迷ひけん、わがまだ知らぬ東雲の道』とお詠みになる程の、深い間柄とおなりになりました。それだのに、この世の中といふものは、朝生まれて暮に死ぬ蜉蝣のやうな、まことに果敢ないもので、あのやうに命をかけてお契りになつたのに、幾程もなく、秋の日の短く暮れてしまつて宵になつたかと思ふと、松風の響も恐ろしく聞えて、燈火が風に瞬いて消えたかと思ふと、あたりは暗闇になつて正氣な人もない。これはどうしようと思ふうちに、この泡沫のやうな果敢ない女は息が絶えて再びこの世に歸らぬ人となつてしまつたのでございます。夕顔の花とても一度散つてしまへば、二度と咲きはしないのです。…夢ながら來て、このやうなお話を致したのでございます」と、夕顔の上が消えたやうに、この女も消え失せてしまつた。

所には休らひて御座候て

ワキ「これは豐後の國より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「さやうに候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。光源氏の古。夕顔の上の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづ夕顔の上と申したる御方は。五條あたりに忍びて住み給ふ。その頃光源氏六條の御息所へ御通ひありしに。ある小家に夕顔の花咲き亂れ候間。惟光を召され。あの花折りて參らせよとありしかば。則ち惟光小家に行き所望申すに。内より白き扇のつまいたう焦かしたるに花を折りて參らする。源氏御覽ずるに。一首の歌の御座候その御歌は。心あてにそれかとぞ見る白露の。光添へたる夕顔の花と。かやうに御座候間。源氏の御返歌に。寄りてこそそれかとも見めたそかれに。ほのぼの見ゆる花の夕顔と。かやうに遊ばし。その花ゆゑに夕顔の上と御契り淺からず御座ありたると申す。頃は八月十五夜源氏かの小家に御入り候に。何とやらん物騷がしく御座候間。何某の院へ伴ひ參らせしに。不思議なる事にて候。夕顔の上は物の氣に取られ空しくなり給ひて候。これと申すも御息所の御心中恐ろしき御方なれば。御息所の御仕業と申し候。まづ我等の承り及びたるはかく

るは、まして松の響木深く聞えて」

○風に瞬く燈火の—同じ卷に「火はほのかにまたゝきて、母屋のきはに立てたる屏風の ものに襲はるゝ心地して驚き給へれば火も消えにけり」

○烏羽玉の闇の—古今集讀人知らずの歌「うば玉の闇の現はさだかなる夢にいくらもまさらざりけり」を借り、あたりは暗闇で正氣の人もないとの意に用ゐた。

○思ひ川—いかにせんとか思ふといひかけて、後撰集伊勢の歌「思川絶えず流るる水の泡のうたかた人に逢はで消えめや」を借りた。思川は筑前國筑紫郡。うたかた人は泡沫の如きはかない人。

○ありつる女も—今物語をしてゐる女。

【間】

○御息所—六條御息所。

の如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に女性一人來られ。夕顔の上の御事唯今御物語の如く懇に語り。何とやらん由ありげにて。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては夕顔の上の御亡心現れ給ひ。御言葉をかはし給ふと存じ候間。ありがたき御經をも御讀誦ありて。夕顔の上の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候間。暫く逗留申しありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ上歌（待謠）「いざさらば夜もすがら。いざさらば夜もすがら。月見がてらに明かしつつ、法華讀誦の聲絶えず。弔ふ法ぞ誠なる弔ふ法ぞ誠なる

【六】

一聲の囃子にて、後ジテ夕顔上、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテサシ「さなきだに女は五障の罪深きに。聞く

後段

【五】

僧「さあそれでは、月見がてら夜明かしをして、誠の心を以て、絶えず法華經を讀誦しよう」

【六】

僧が讀經しながら假睡しているところ、その夢に現れる態で、後ジテ夕顔上登場。

夕顔「何がなくても女は五障のある罪業の

○御亡心—御亡靈。

【五】○夜もすがら—夜通し。終夜。

【六】○五障—法華經提婆達多品に、女人は梵天王・帝釋・魔王・轉輪王・佛身に成れないといふ。

も氣疎き物の氣の。人失ひし有樣を。現す今の夢人の。跡よく弔ひ給へとよ

ワキ「不思議やさては宵の間の。山の端出でし月影の。ほの見えそめし夕顏の。末葉の露の消え易き。もとの雫の世語を。かけて現し給へるか

シテ「見給へここもおのづから。氣疎き秋の野らとなりて

ワキ「池は水草に埋もれて。古りたる松の蔭暗く

シテ「又鳴き騷ぐ鳥のから聲身にしみ渡る折からを

ワキ「さも物凄く思ひ給ひし

シテ「心の水は濁り江に。引かれてかかる身となれども。優婆塞が。行ふ道をしるべにて

地「來ん世も深き。契り絶えすな契り絶えすな

〔序舞〕

深いものであるに、聞いただけでもぞつとする、物の氣にとり殺された有樣を、今夢の中でお見せしようと現れて來ました私の回向をよくして下さいませ」

僧「これは不思議だ、すると、この宵、山の端から月影のほのかに見え出した頃、お話しになつた、夕顏がはかなく消えた話、人は遲かれ早かれ死んでしまふ無常な話、それを今眼の前にお見せにならうとするのですか」

夕顏「御覽なさいませ、今こゝも物凄い秋の野らとなつて……」

僧「おゝ、池は水草で一面埋まつてしまひ古い老松の木蔭は暗くて……」

夕顏「また鳴き騷ぐ鳥の聲は枯らびた物凄い音で、身に沁み渡る思ひのしました折……」

僧「さぞ物凄くお思ひになつたことでせう」

夕顏「本心を戀の亂れに奪はれて、このやうな身になつたのでございますが、源氏の君は『優婆塞の勤行せられたのをよい道案内として、來世にも深い契りの絶えないやうに』と仰しやいました。どうぞこの世に迷はないやうに成佛させて下さいませ」

〔序舞〕
當時の事を想ひ出して舞を舞ひ、僧の回向によつて成佛した心持で、

○氣疎き―物凄い、ぞつとする。

○物の氣―人にとりついて惱ます生靈死靈の類。

○人失ひし―人を殺した。

○夢人―夢に現れて來た人

○末葉の露の―新古今集僧正遍昭の歌「末の露本の雫や世の中のおくれさきだつためしなるらむ」を引いた。

○氣疎き秋の野ら―夕顏の卷に何某の院の樣を叙して―け近き草木などはことに見所なく、皆秋の野らにて、池も水草に埋もれたれば、いと氣疎げなり。

○又鳴き騷ぐ鳥の―同じ卷に松の響木深く聞えて、けしきある鳥のから聲に鳴きたるも、梟はこれにやと聞ゆ」から聲は枯らびた物凄い聲。

○心の水―本心の清いことを喩へた語。

○優婆塞が行ふ道をしるべにて―源氏が夕顏の宿で隣の行者が御嶽精進する聲を聞いて詠んだ歌、下句―來ん世も深き契り違ふな―これを僧に來世往生を願ふ意に兼ねて用ゐた。

【七】○夕顔の笑の眉―嬉しやと言ふといひかけ、夕顔の巻―白き花ぞおのれひとり笑の眉開けたる―を引き、喜びの意を述べた。○法華の花房も―法華經の功德を喩へた。○變成男子―五障のある女人だが成佛したことをいふ。提婆達多品に八歳の龍女が男子に變成し南方無垢世界に生まれたとあるに據つた。○解脱―煩惱迷妄から離れること。○何を包まん―古今集讀人知らずの歌―嬉しさを何に包まん唐衣袂ゆたかに裁てといはましを―を借りた。○音羽山―京都東山清水寺のある山。このあたりに夕顔を葬つた。○東雲―前の「東雲の道」の歌に據つた。○明けぐれ―夜明け方のまだ薄暗いのをいふ。

〔考異〕

諸流（觀剛喜）

【七】シテ『お僧の今の。弔ひを受けて

地「お僧の今の。弔ひを受けて（とワキへ合掌）數々嬉しやと（開き）

シテ「夕顔の笑の眉（と正面に直し）

地『開くる法華の（二三足出で）

シテ『花房も（二足つめ）

地「變成男子の願ひのまゝに（右へ廻り）。解脱の衣の袖ながら今宵は（ワキへ進み）何を包まんといふかと思へば（眞中に出で）。音羽山。峯の松風通ひ來て（上を見）。明け渡る横雲の、迷ひもなしや。東雲の道より（角へ行き）法に出づるぞと。明けぐれの空かけて。雲の紛れに。失せにけり

と右へ廻り常座にて小廻りして開き留拍子を踏む。

【七】夕顔「お僧樣の唯今の御回向を受けて、くれぐれも嬉しうございます。ほんとに喜ばしうございます。法華經の御功德によつて、望み通りに男子に變成し、迷妄を離れることが出來ました。今はもはや悟りを開いた身ながら、この嬉しさをどうしていひ現しませう」

といふかと思ふと、音羽山の峯から松風が吹いて來て、夜明の山に横雲がたなびいて、

夕顔「もう私はあの雲のやうな迷ひもございません、この朝方からは佛の道に入るのです」

といつて、明方の薄暗い空にかゝつてゐる雲に紛れて、消え失せてしまつた。

殆ど異同がない。

古謠本　（光悅本）

【一】ワキこれは（光九州）豊後の……勝れたる（光り）とは申せ……ワキ急ぎ候程にこれははや五條あたりにてありけに候（光ナシ）……

女の歌を吟ずる聲の聞え（光して來り）候暫く相待ち（光くはしき事をも）尋ねばや……

弓八幡　觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】　脇能　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　後宇多院臣下（陪從）、**ワキツレ**　從者（二人）、**前シテ**　老翁（高良の神靈）、**前ツレ**　男、**狂言**　山下の者、**後シテ**　高良の神

【所】　山城國　男山

【時】　後宇多院御宇　二月初卯

【作者】　世子六十以後申樂談儀に「すぐなる體は弓八幡なり、曲もなく眞直なる能なり、當御代の初のために書きたる能なれば祕事もなし」とある。この當御代が足利義教であるとすれば、永享元年頃の作である。從つて永享以前の能作書に見えてゐる「やはた」は本曲とは別な、「放生川」の異稱であらう。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】　後宇多院に仕へ奉る臣下が、男山八幡宮二月初卯の神事に、陪從として參詣すると、一人の老翁が錦の袋に弓を入れたのを持つて來たので、どこから參詣した者かと尋ねると、翁は、自分は當社に年

久しく仕へてゐる者で、桑の弓をわが君に捧げたいと思つて、御參詣をお待ちしてゐたのですと答へ、弓矢を以て世を治めるのは當社の御神力であるといつて、神功皇后の三韓征伐、八幡宮の由來などを語り、實は自分は八幡の末社高良の神であるといつて消え失せる。やがてお山に音樂が聞え異香が薰つて、高良の神が影向せられ、舞を舞つて、御代を祝ひ神德をたゝへ給ふ。

【出典】當時行はれてゐた御神事を題材としたもので、典故といふべきほどのものはない。

【概評】本曲は前述の通り申樂談儀に「弓八幡は當御代の初めの爲に書けり」とあつて、その當御代とは吉田東伍博士が十六部集の序引にいはれた如く、普廣院將軍義教を指したものであるとすれば、本曲は世阿彌の足利幕府に對する態度を觀察するのに、最も都合のよい曲である。然らば世阿彌は幕府に對してどういふ態度をとつたか。當時は皇室は式微して振はず、將軍の專橫を極めた時代である。しかも彼はその將軍保護の下にこの藝術を發展させて來たのである。彼はどれほどまで將軍に阿諛し、大勢に追從したか。八幡宮は武神であつて弓は武器である。「弓八幡」といふ題名は、武を尙び武士を祝ふに適當したものである。世阿彌が義教の將軍を祝つて作つたらしい感じのするのは、たゞこれだけである。この外には一言も將軍を祝つたらしい言葉はないのである。全篇たゞ君の萬歲を祝ひ奉つてゐるのである。しかもこの君を萬一將軍と誤認させる危險を避けて、ワキを「當今に仕へ奉る臣下」とはせず、殊更に「後宇多の院に仕へ奉る臣下」として、將軍をこれに擬へる餘地を與へてゐないのである。もしこゝに將軍に擬へ得るものを求めれば、ワキそのもの後宇多の院の臣下であるが、これさへ、他の脇能のやうに單なる勅使としないで、殊更身分の高くない陪從としてゐるのである。將軍を完膚なきまでに抑へつけたものといひ得よう。更にその內容に立ち入つて見ると、この祝言は、弓矢を以て戰勝を祝ふのではなく、弓を袋に入れて武を戢めるのである。彼は軍國主義者でなく、平和論者なのである。武家中心時代に於て平和を唱へ、將軍專橫時代に於てとりわけて皇室を尊崇し奉る。これが一能役者の見識であり熱情であつたのである。

世阿彌はまたこの曲の脚色について「すぐなる體は弓八幡なり、曲もなく眞直なる能なり」といつてゐるが、この事については、總說第三章(六二頁)で述べたから、こゝには繰返さない。

たゞ繰返していひたいのは、世阿彌の心事であり、見識であり、熱情である。偉大なる藝術家は時流を遠く離れた、遙かに高い所に立つてゐるものであることを、靜かに考へたいと思ふのである。

〔二〕

次第の囃子にて、ワキ陪從、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキ同様の裝束にて出で、舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ〔次第〕御代も榮ゆく男山。御代も榮ゆく男山。名高き神に參らん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「抑もこれは後宇多の院に仕へ奉る臣下なり。さても頃は二月初卯八幡の御神事なり。郢曲のみぎんなれば。陪從の參詣仕れとの宣旨を蒙り。唯今八幡山に參詣仕り候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ〔道行〕四つの海。波靜かなる時なれや。波靜かなる時なれや。八洲の雲もをさまりて。げに九重の道すがら。往來の旅もゆたかにて。廻る日影も南なる。八幡山にも着きにけり八幡山にも着きにけり

ワキ「廻る日影も南なる」と正面に向きて先へ出で、またも

〔一〕

前段

舞臺に向ふ定位で、ワキ後宇多院臣下陪從として、ワキヅレ・從者を隨へて登場。

陪從「わが大御代も愈々榮えまし、神の御威徳も愈々榮えて行く、有名な神様、男山八幡へ參詣しよう」

と次第を謠つて當日の目的を述べ、

陪從「自分は後宇多天皇にお仕へしてゐる臣下です。さて今日は二月初卯の日で、男山八幡の御神事が行はれ、郢曲の催される時であるから、陪從として參詣せよと仰せつけられたので、これから男山八幡宮に參詣するのです」

と臣下人に自己紹介し、

陪從「日本國中、海は波も靜かで、空には雲もない、まことに天下泰平な御時節で、殊に都の道中には往來の旅人も賑かに樂しんでゐる、その間に立ち交つて、日の廻つて行く南の方、八幡山に着いた」

といつてゐる間に、八幡山に着いた時、從者は男山八幡宮にゐる。

〔一〕

○御代も榮ゆく―古今集讀人知らずの歌「今こそあれわれも昔は男山榮ゆく時もありこしものを」を借り、御代も榮ゆく、榮ゆく男山といつた。

○男山―山城國綴喜郡、八幡宮鎭座の地。

○後宇多の院　龜山天皇の御後を承けて、文永十一年(一九三四)御卽位、弘安十年(一九四七)伏見天皇に御讓位。

○八幡　男山八幡宮、又石清水八幡ともいふ。貞觀元年行敎和尙が宇佐八幡に參籠して神告を受け、奏請して建立したもの。應神天皇・神功皇后・玉依姫を祀る。

○郢曲　催馬樂・朗詠・今様等謠ひ物の總稱。

○みぎん　みぎりの音便。時節。

○陪從―賀茂・男山等の祭に行ふ東遊の管絃方及び歌人をいふ。

○八幡山―男山に同じ。

○四つの海―天下の泰平である意。宴曲の祝言に「四海波靜かにして、九州風をさまり、雨つちくれを犯さず」

○八洲―日本の古名。

○九重の道―都の道。四つ

八洲、九重と數字を重ねて來た。
○廻る日影も南なる―男山は京都の南に當るから、かういつた。

【二】

○日も二月の―日も來るといひかけた。
○君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて―和漢朗詠集讀人知らずの歌。末句「苔のむすまで」の「ま」から松に轉じた。
○常磐山―山城國葛野郡雙岡の西。

とに歸りて八幡山に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。八幡山に着きて候。心靜かに神拜を申さうずるにて候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて脇座の方へ行き、順次竝びて下に居る。

【二】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小牛尉・襟淺黄・尉髮・着附小格子・茶絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて弓を袋に入れて肩にかつぎ、ツレ男、直面・襟赤・着附無地熨斗目・淺黄縷水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテツレ一聲「神祭る。日も二月の今日とてや。のどけき春の。けしきかな

二人とも正面に向き、

ツレ二句「花の都の空なれや。シテツレ（向合ひ）三「雲もをさまり。風もなし

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ「君が代は千代に八千代にさざれ石の。巖となりて苔のむす。シテツレ（向合ひ）三「松の葉色も常磐山、

陪從「道を急いだので、もう八幡山に着いた。ゆつくりと參拜しませう」
といつて、神前に參る態。

【二】

シテ高良の神、老翁の姿を裝うて、ツレ年若い男とともに登場。

老翁「神樣のお祭をする日も、二月の今日だからか、いかにも春氣色ののどかなことだ」
男「空も花の都だからか、雲もなく風も吹きません」
老翁「わが大御代は千年も萬年も、小さな石が大きな巖になつて、それに苔が生えるまでも、いつまでも〱御榮え遊ばす

○民敦く―民の人情が敦厚である。
○關の戸ざしもさゞりき―太平の御代で、交通が自由である。
○誓ひ―衆生を利益し給ふ神佛の誓約。
○月かげろふの―月影、かげろふといひかけた。「かげろふの」は石の枕詞。
○石清水絶えぬ流れの―續拾遺集龜山天皇の御製「石清水絶えぬ流れは身に受けつわが世の末を神にまかせん」を引いた。
○生けるを放つ　毎年八月十五日山の麓の小川に魚を放つ神事、放生會。「放生川」參照。
○歩みを運ぶ―參詣する。
○鳩の嶺―男山の異名。鳩は八幡大菩薩の使者で、この山に多く放ち飼ひにしてあることから出た名。
○久方の月の桂の男山―御代は久しといひかけて、續古今集卜部兼直の歌を引いた。この下句「さやけき影は所からかも」月の異名を桂男といふので、上二句を男山に冠したのである。
◎君萬歳―中樂談儀には「百わう萬歳」とある。
【三】

緑の空ものどかにて。君安全に民敦く關の戸ざしもさゞりき。もとよりも君を守りの神國に。わきて誓ひも澄める夜の。月かげろふの石清水。絶えぬ流れの末までも。生けるを放つ。大悲の光。げにありがたき。時世かな

シテツレ下歌「神と君との道すぐに歩みを、運ぶこの山の。上歌「松高き。枝も連なる鳩の嶺。枝も連なる鳩の嶺。曇らぬ御代は久方の。月の桂の、男山げにもさやけき影に來て。君萬歳と祈るなる。神に歩みを、運ぶなり神に歩みを運ぶなり

「神に歩みを」と謠ひながら、シテ・ツレ入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「今日は當社の御神事とて。參詣の人々多き中に。これなる翁錦の袋に入れて持ちたるは弓と見えたり。そもいづくより參詣の人ぞ

シテ「これは當社に年久しく仕へ申し。君安全と

のだ。それで、松葉の色までがいつも青青として、同じ緑色をした大空ものどかで、わが大君は御安穩で、民の人情は敦く、天下泰平で交通も自由、關所の戸も締めない有樣だ。もと〳〵わが國は神々が大君を御守護遊ばす國柄だが、殊にこの石清水八幡は、澄みきつた夜の月のやうな、御利益のあらたかな神樣で、末世澆季の今日でも、生類を憐んで、魚を川へお放しになる、實にお慈悲深い御神德だ。ほんとにありがたい大御代だ。

かうして、神樣と大君との御惠みを仰いで、我々が參詣するこの八幡山は、上には松が高く枝も繁つて聳え、曇りのない大御代の幾久しい御榮えを壽ぎ、實に神々しい趣を具へてゐることだ。我々は大君の萬歳をお祈りして、かうした尊い神樣へ參詣するのだ」

（神德を讃へ、御代を祝ひながら正面に出て行く。隨從はこれを見て、）

【三】

隨從「今日はこのお社のお祭だから、參詣の人が多勢あるが、その中で、この老人が錦の袋に入れて持つてゐるのは、弓のやうだ」（と獨言をいひつゝ老翁に向ひ）「一體そなたはどこから參詣した人だ」

老翁「私はこのお社に永年お仕へして、大

○題目—名目、名稱。
○奏せよ—こゝでは傳獻せよとの意。
○託宣—神の告。
○千早ぶる—神の枕詞。
○桑の弓蓬の矢—禮記内則篇に「生二男子一、設二弧於門左一、以二桑弧蓬矢六一、射二天地四方一」爲業家集に「桑の弓蓬のやしま治まれる世にさへ沈むわが身かなしも」
○しるし—瑞相。

祈り申す者なり。又これに持ちたるは桑の弓なり。身の及びなければ未だ奏聞申さず。唯今御參詣を待ち得申し。御供へ捧げ物にて候

ワキ「ありがたしありがたし。まづまづめでたき題目なり。さてその弓を奏せよとは。私に思ひ寄りけるか。もし又當社の御託宣か。わきて謂れを申すべし

シテ「これは御言葉ともおぼえぬものかな。今日御參詣を待ち得申し。桑の弓を捧げ申すこと。即ちこれこそ神慮なれ

ツレ「その上聞けば千早ぶる

シテツレ「神の御代には桑の弓。蓬の矢にて世を治めしも。直なる御代のためしなれ。よくよく奏し給へとよ

ワキ「げにげにこれは泰平の。御代のしるしは顯

[illegible]を祈つてゐる者なのです。それから、こゝに持つてゐるのは、桑の弓で[illegible]、また獻上致すことも出來ず、唯今御參詣になるのをお待ちして、大君へ捧げたいと思つてゐる者なのです」

陪從「それはありがたい。まづ何より桑の弓とはめでたい名前[illegible]ところで、その弓を傳獻してくれといふのは、自分一個で考へついたことなのか、それとも、この御社の神のお告だつたか、[illegible]謂れを話して聞かせい」

老翁「これはまあ何といふ御理解のないお言葉でせう。今日御參詣になるのをお待ちして、桑の弓を獻上致すのは、いふまでもない神の思召です」

男「その上、話に聞けば……

老翁「昔神代には、桑の弓・蓬の矢を以て世の中をお治め遊ばしたもので、御政道の正しい大御代のめでたい例證なのです。どうぞこの謂れをよく奏聞して下さい」

陪從「いかにも、これは天下泰平の大御代

○弓箭をつつみ—詩經周頌に「明昭有周、式序レ在レ位、載戢二干戈一載櫜二弓矢一」

○名にも扶桑の—名にもふさはしといひかけた。扶桑は日本の異名。王充の論衡に「日旦出二扶桑一暮入二細柳一、扶桑東方之地、細柳西方之地」

○取るや蓬の—弓取る、取るや世、蓬の矢、八幡山と順次いひかけて行つたのである。

○誓ひの海—利益の深く廣いことを海に喩へた。

○君は船—荀子王制篇に「君者舟也、庶人者水也」水を瑞穗にいひかけた。瑞穗はわが國の異名。

○あらたな—あらたかな

れたり。まづその弓を取り出だし。神前にて拜み申さばや

シテ「いやいや弓を取り出だしては。何の御用のあるべきぞ

ツレ「昔唐土周の代を。治めし國のためしには

シテ「弓箭をつつみ干戈を戢めし例を以て

ツレ『弓を袋に入れ

シテ『劒を箱に納むるこそ

ツレ『泰平の御代のしるしなれ

シテツレ『それは周の代これは本朝。名にも扶桑の國を引けば

地上歌『桑の弓。取るや蓬の八幡山。取るや蓬の八幡山。誓ひの海も豐かにて。君は船。臣は瑞穗の國々も殘りなく靡く草木の。惠みも色もあらたなる御神託ぞめでたき、神託ぞめでたかりける

のめでたい例證となるものだ。まづその弓を袋から取り出して、神前で拜みませう」

老翁「いえいえ、弓を袋から取り出しては、何の御用にも立ちません」

男「昔、支那で周の代に國を治めました時も……」

老翁「戰爭がないので、弓矢を袋に包み、矛をかたづけましたやうなわけで、そのやうに……」

男「弓を袋に入れ……」

老翁「劒を箱に納めるのが……」

男「泰平の御代の瑞相です」

老翁「例に擧げたのは周の代のことですが、こゝはわが國、名も桑に緣のある扶桑國で、桑の弓や蓬の矢を持つて世をお治めになつた八幡宮の御利益は海の如く廣い豐かなもので、これを持てば、君は船、臣は水の如く、上下一致して、日本國中殘りなく草木の風に靡くが如くに悅服し、その草木までがお惠みに浴するといふ、あらたかな神のお告を賜はつたのは、ほんとにめでたい次第です」

【四】

○いつぱ―いへばの促音便。

○神功皇后―八幡祭神の一。仲哀天皇の皇后で朝鮮を征伐遊ばした。

○三韓―新羅・百濟・高麗。今の朝鮮。

○應神天皇―御母神功皇后。八六一年御降誕、九七〇年崩御、寶算百十。御名譽田別。八幡宮の御本體。

○雲上の月卿―公卿。禁中を天上に喩へていつた語。

○欽明天皇の御宇―神皇正統記卷二に「欽明天皇の御代に始めて神と顯れて、筑紫の國菱形の池といふ所に顯れ給ふ。我は人皇十六代譽田の八幡丸なりと宣ひき。譽田はもとの御名、八幡は垂跡の號なり。後に豐前の國宇佐の宮に鎭り給ひ―

○蓮臺寺―豐前國宇佐郡、小倉山の東二町許り火尾山にあつた後冷泉天皇の勅願寺。

シテ「取るや蓬の八幡山」と弓を下して兩手に持ち、ワキに渡す。ワキ下に居り、シテ立ちて常座へ行く。ツレは笛座前に行きて下に居る。

【四】

ワキ「桑の弓蓬の矢にて世を治めし謂れなほなほ申し候へ

シテ眞中に出でて下に居り、

地クリ「抑も弓箭を以て世を治め始めといつぱ。人皇の御代始まりても。即ち當社の御神力なり

シテサシ「然るに神功皇后。三韓を鎭め給ひしより

地「同じく應神天皇の御聖運。御在位も久し國富み民も。豐かに治まる天が下。今に絶えせぬ。調とかや

（居クセ）

地クセ「上雲上の月卿より。下萬民に至るまで樂しみの聲盡きもせず。然りとは申せども。君を守りの御惠み猶も深き故により。欽明天皇の御宇かとよ。豐前の國。宇佐の郡。蓮臺寺の麓に。

【四】

陪從「桑の弓・蓬の矢で天下を治めた謂れを、もつと委しく話してくれ」

臣下「一體、弓矢によつて天下を治めた始めといへば、人代以後のことで、このお社の神の御力になることなのです。即ち、神功皇后が三韓を御平定遊ばし、續いて應神天皇の御盛んな御時代となり、その御在位の御年數も久しく、國は富み民も榮え、天下泰平にうち治まつて、それ以來今日に到るまで、朝貢の絶える時はないのであります。――

かうして、上は禁中にお仕へしてゐる公卿より、下は一般人民に至るまで、樂しみの聲は盡きないのです。しかし、この神が大君を御守護遊ばす御惠みは大層お深いので、欽明天皇の御代に、豐前國宇佐郡蓮臺寺の麓に八幡宮としてお現れになり、更に又、幾重にもたなびいた雲

○八重旗雲＝幾重にもたなびく雲。八幡の名に因んでいつた。
○しるべ＝案内。
○洛陽＝京都。
○靈社と現じ＝神皇正統記に「清和の御時大安寺の僧行教宇佐に詣でたりしに靈告ありて、今の男山石清水に遷ります」
○四王寺＝筑前國筑紫郡、太宰府の西北、今の四王寺村。
○七箇日の御神拜＝八幡愚童訓にはこの事を記してゐるが、謠曲以後のもので、古記錄には見當らない。或は仲哀天皇崩御の香椎の宮で皇后が七日七夜神に謝して神勅を受け給うた事を指すか。
○久方の＝天の枕詞。今は久しといひかけた。
○天の岩戸の＝天照大神が天の岩戸に隱れ給うた時、天鈿女命が奏された神樂。
○榊葉＝神樂歌の曲名、靑の緣語。
○靑和幣白和幣＝幣帛。靑は麻、白は穀の皮で作る。岩戸の前で眞榊の下枝にこれをかけたと記紀に見ゆ。
○とりどり＝樣々。幣を取りといひかけた。

八幡宮と現れ、八重旗雲をしるべにて。洛陽の。南の山高み。曇らぬ御代を守らんとて。石清水いさぎよき。靈社と現じ給へり。されば神功皇后も。異國退治の御爲に。九州四王寺の峯に於て七箇日の御神拜。例も今は久方の。天の岩戸の神遊び。群れゐて謠ふや榊葉の。靑和幣白和幣とりどりなりし神靈を

シテ『移すや神代の跡すぐに

地「今も道あるまつりごと。普しや神籬の。をかたまの木の枝に。黄金の鈴を結びつけて千早ぶる神遊び。七日七夜の御神拜誠に天も納受し。地神も感應の海山。治まる御代に立ちかへり。國土を守り給ふなる。八幡三所の神託ぞめでたかりける

【五】

地ロンギ「げにや誓ひも影高き。げにや誓ひも影高

を道案内として、京都の南の山の高い所で、曇りのない大御代をお守護遊ばさうと、名も清らかな石清水の靈社としてお現れになつたのです。嘗て、神功皇后も外國征伐の御爲に、九州の四王寺の峯で、七日間神を御拜禮になつた例もあることとて、今は遠い昔、天の岩戸の前で、神々がお集まりになつて、榊葉に靑和幣や白和幣をつけて、神樂歌をお謠ひになつた、その神代の例に倣つて、色々のお祭をして、神靈をこゝにお遷し申し上げ、それ以來、今日、御惠みの屆かぬ隈もない、正しい御政道が行はれてゐる今日まで、引續いて、御神域の榊の枝に黄金の鈴を結びつけ、これを振つて、昔の神樂に倣つて、七日七夜のお祭を行はれるので、これを御覽になつては、天の神樣も御嘉納遊ばされ、地の神樣も十分に御應報下さることと思はれます。かくして、世は泰平となり、八幡三柱の神樣が國土を御守護下さるのは、誠にめでたいことです」

【五】

陪從「實に御利益の大きな、この二月のお

き。この二月の神祭、かかる神慮ぞありがたき

シテ「ありがたき。千代の御聲を松風の、更け行く月の夜神樂を、奏して君を祈らん

地「祈る願ひも瑞籬の、久しき代より仕へてき

シテ「われは眞は代々を經て

地「今この年になるまでも

シテ『生けるを放つ

地「高良の神とはわれなるが。この御代を守らんと。唯今ここに來りたり（とシテ立ち）。八幡大菩薩の御神託ぞ疑ふなとてかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

「八幡大菩薩の御神託」と常座へ行きてワキへ開き、直して正面に開き中入。ツレも續いて幕に入る。

【間】

ワキ「いかに誰かある

ワキヅレ（ワキの前へ出で辭儀して）「御前に候

ワキ「山下の者を呼びて來り候へ

ワキヅレ「畏つて候。（名乘座へ出で）山下の人の渡り候か

祭の行はれるについて、このやうな神の思召があるとは、實にありがたいことだ」老翁「ありがたい千代の御榮えを仰ぐやうに、この夜更け月下に神樂を奏して、大君のお爲にお祈りしませう。かうお祈りすれば、願ひは必ず成就するに違ひないので、自分は實は遠い昔からお仕へして來て、時代の過ぎた、今この年になるまでも生き永らへてゐる高良の神であるが、今の大御代を守らうと思つて、今ここへ來たのである。これは八幡大菩薩のお告げであるぞ、疑つてはならないぞ」といつて、かき消すやうに消え失せた。

○移すや—神靈を遷すと神遊びをうつし眞似ると。
○神籬—神座の周圍に植ゑる常磐木。
○をかたまの木　廣心樹。古來榊の一名として用ゐられた。
○千早ぶる—鈴を振るといひかけた。
○八幡三所—前に揭げた八幡宮鎭座の三神。

【五】

○松風の—御聲を待つといひかけた。
○瑞籬の久しき—願ひも滿つといひかけて、伊勢物語の歌「むつましと君は知らずや瑞籬の久しき世よりいはひそめてき」を引いた。「瑞籬の」は久しきの枕詞。
○生けるを放つ—この年まで生くを放生川に、川を高良にいひかけた。
○高良の神—男山八幡の末社、武內宿禰を祀る。
○八幡大菩薩—神皇正統記に「八幡と申す御名は御託宣に、得ㇾ道來不動法性、樂ニ八正道ニ垂ニ權跡ㇸ、皆得ㇾ解ニ脫苦衆生ㇸ、故號ニ八幡大菩薩ㇾ」とある。

【間】

狂言山下の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「山下の者と御尋ねある。罷り出でて承らばやと存ずる。（ワキヅレに向ひ）山下の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキヅレ「ちと物を尋ねたき由仰せ候。近う來つて給はり候へ

狂言「畏つて候（舞臺に入り眞中にて下に居る）

ワキヅレ（ワキの前にて）「山下の者を召して參りて候（といひてもとの座に着く）

狂言「山下の者御前に候

ワキ「これは後宇多の院に仕へ奉る臣下なるが。御神事につき參詣申して候。當社の御謂れ初卯の御神事の子細。語つて聞かされ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候が。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「やがて語られ候へ

狂言「まづこの八幡山に於て。一年の内に御神事の數七十餘度に及びたる御神拜を執り行ひ申し候中にも。今月今日の御神事を初卯の御神事と申して。とりわけ子細めでたき御神拜にて御座候。その子細は。神功皇后三韓を從へ給はんとて。九州長門の沖に壇をかざり。をかたまの木の枝に黄金の五十の鈴を結びつけ。七日七夜御神拜ありたると申す。七日の御神拜のうちに。明星天子月天子兩子天降り。皇后を守護し給ふ。これ即ち諏訪住吉の御神と申し候。さては異國退治の事疑ひなしとて。宇佐の宮にて御船を四十八艘造らせ給ひ。三百七十餘の神達異國へ向ひ給ふ。又異國の夷も五十九萬餘十萬八千艘の船を催し。わが朝へ向ひ候へども。皇后桑の弓蓬の矢を持つて易々と平らげ

○赤き旗を四流　舊事本紀に「神功天皇二年十二月戊戌朔癸卯、至レ自二新羅一、辛亥譽田尊誕二生於筑石一、是時于レ天有レ物翳二纖於虛空一下、百寮皆仰見、皇后出見レ之、須臾而降下、白幡四流赤幡四流、即時皇子誕生、故字云二八幡尊一、臂有二鞆之形一、故名云二譽田尊一、皇子生後幡乃返レ天、其幡是高麗錦也」とある傳説の轉化したもの。

◎愈々信心を致し」高安流には「餘り奇特なる事にて候間。都に歸りありがたき神拜を奏聞申さうずるにて候」とある。

給ひ。その後箱崎の浦にて皇子御誕生あり。今にめでたき御代にて候。又大菩薩と顯れ給ふ御事は豐前の國宇佐の郡蓮臺寺の麓に。八幡宮と顯れ王城近く御鎭座あり。君安全に守らんとて。赤き旗を四流白き旗を四流。この八つの御旗を都の方へ投げ給ひ。この旗の落ちとまりたる所を御鎭座になさるべきとの御事なれば。この旗雲となり天に上り。忝くも王城の南木山男山の峯に落ち留まりて候。さてはこの山に御鎭座たるべしとて。この所へ御影向の時が卯の年の卯の月卯の日の卯の刻に。この山へ移らせ給ふにより。初卯の御神事と申して。子細めでたき御神拜にて候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に語られ候ものかな。方々以前に老人と若き男の。錦の袋に弓を入れ持ちて來られ候程に。いかなる事ぞと尋ねて候へば。則ち君に捧げ申されよ。桑の弓を以て天下を治めし謂れ懇に語り。高良の神はわれなりといひもあへず。かき消すやうに姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。當社に於て高良の神と申すは。第一の末社にて候。唯今の御參詣を嬉しく思し召され。桑の弓を袋に入れ。捧げ御申しありたると存じ候間。急ぎ御上洛ありて。その由奏聞あれかしと存じ候

ワキ「愈々信心を致し重ねて奇特を見。その後都へ上らうずるにて候

狂言「御用の事も候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「畏つて候

　といひて狂言は引く。

【六】

ワキ ワキヅレ 上歌（待謡）「都に歸り神勅を。都に歸り神勅を

【六】　後段

陪従 都に歸つて、神のお告をすべて奏上

○異香―めづらしいよい香

【七】

○人の國よりわが國　義經記に「八幡大菩薩の御誓ひにも、人の國よりわが國、他人よりもわが人をこそ守らんとこそ承り候へ」東大寺八幡驗記・神祇正宗にも天平勝寶七年の託宣として同樣の事を記す。

○眞如實相の槻弓―眞如は諸法の實體實性。これを月に喩へ、月を槻にいひかけた。

○八百萬代―弓の矢といひかけた。

○二月の初卯の神樂面白や謠へや謠へ日影さすまで　藻鹽草に「これは八幡大菩薩の御歌なり」として載す。

【八】

悉く奏し上ぐべしと。いへばお山も音樂の。聞えて異香薫ずなり。げにあらたなる、奇特かなげにあらたなる奇特かな

【七】

出端の囃子にて、後ジテ高良神、面邯鄲男・黑垂・透冠・色鉢卷・襟白・着附段厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

後ジテ『もとよりも人の國よりわが國。他の人よりもわが人と。誓ひの末も明らけき。眞如實相の槻弓の。八百萬代に至るまで。動かず絶えず君守る。高良の神とはわが事なり

地『二月の。初卯の神樂面白や（と舞臺に入り）

シテ『謠へや謠へ。日影さすまで

地『袖の白木綿返す返すも。千代の聲々。謠ふとかや

〔神舞〕

【八】

地ロンギ『げにや末世といひながら。げにや末世と

しよう。……といふうちに、お山に音樂が聞えて、妙なる香が薫つてくる。實にあらたかな奇瑞だ」

【七】

後ジテ高良の神登場。

神「もと／＼、外國よりはわが國、外國の人よりはわが國の人を守る』と誓約したことは、いつまでも明らかに變りのないことで、八百萬代の後に至るまで、動きなく絶え間なく、大君をお守りする高良の神といふのは、自分のことである。

二月初卯の神樂は實に面白い、さあ謠へ謠へ、夜が明けて日のさすまでも。――白木綿の袖を飜して、繰り返し／＼千代八千代をお祝ひする歌を謠ふのだ。

〔神舞〕

神が興に乘じて舞ひ給ふ態。

【八】

陪從「末世澆季であるのに、神の御威光は

いひながら。神の威光はいやましに。かくあらたかなる御影向。拜むぞ貴かりける

シテ次の謠に合せて舞ふ

シテ『君を守りの御惠み。もとより定めある上に。殊にこの君の神德天下一統と守るなり

地『げにげに神代今の代の。しるしの箱の明らかに

シテ『この山上に宮居せし

地『神の昔は

シテ『久方の

地『月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳩吹く松の風までも。皆神體と現れ。げに頼もしき神心示現大菩薩八幡の神託ぞ豐かなりける神託ぞ豐かなりける

と舞ひ納めて常座にて留拍子を踏む。

愈々增して來て、このやうなあらたかな神の御影向を拜するのは、實に貴いことだ」

シテ「神が大君をお守りになる御惠みは、勿論いつとても變りがないのであるが、殊に今の大君の御聖德を崇めて、天下一統の安穩をお守りするのである」

地謠「まことに神の代も今の代も、御神靈が明らかにおはして……」

神「この山上に鎭座したのは、遠い昔であるが、それ以來久しく、神德は明らかで、こゝは場所がら、畜類も鳩の鳴く聲も松風も、すべてが皆神體として現れる、誠に頼もしいことで、神として現れられた八幡大菩薩の御威德は豐かなものである」

ご本社の神德をたゝへて退場。

○しるしの箱―神靈の箱。箱の開くにいひかけて、明らかの序とした。

○鳩吹く―鳩の鳴く。それを風の吹くにいひかけた。

○示現大菩薩―神として現れた大菩薩。示現は佛菩薩が機緣に應じて種々の形で現れること。

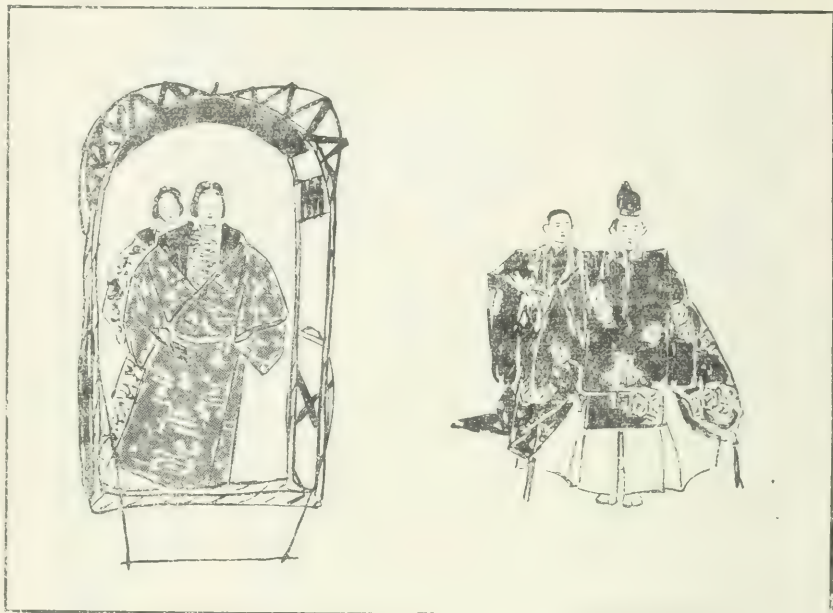
〔考 異〕

諸 流 （五 流）

著しい異同はない。

古諸本 （貞享二年本）

【一】ワキ「抑もこれは……唯今八幡山（貞ナシ）に参詣…… ワキ「急ぎ候程に……神拜を申さうずるにて（貞はやと存）候 【三】シテ「これは御言葉……即ちこれこそ（貞是社則）神慮なれ……

熊野（ゆや）　觀（寶春圖畫）

解說

【能柄】三番目　一段劇能

【人物】ワキ　平宗盛、ワキツレ　同從者、ツレ　朝顔、シテ　熊野

【所】前半　京都平宗盛館、後半　同清水觀音

【時】平家時代　春（三月）

【異稱】「遊屋」又は「湯谷」とも書いた。喜多流では今でも「湯谷」と題してゐる。

【作者】能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。金春禪竹の歌舞髓腦記、拾玉得花にこの曲を擧げてゐる。粟田口勸進猿樂記に永正二年四月十三日演能のこと、言經卿記に文祿四年三月二十七日註釋のことが出てゐる。

【梗概】平宗盛は遠江國池田の宿の長熊野を都に留めて寵愛してゐた。池田の宿では老母が病氣なので、度々都へ迎へを上せたが、熊野に暇が出ないので、この度は朝顔が老母の手紙を持つて上京した。熊野は

宗盛に母のあはれな手紙を見せて、暇をこうたが、宗盛はなほも聴き入れないで、強ひて花見に連れ出した。熊野は宗盛と同車して清水へ行く道すがらも、移り行く所々を眺めては母を思ひ、寺に着いては直に佛前に參って、母の病氣平癒を祈った。軈て花見の酒宴は開かれ、熊野は宴に召し呼ばれたので、進まぬながら立って舞を舞った。折から一村雨が降って來て、花が散るのを見て、熊野は「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と詠んで、宗盛に示した。宗盛もさすがこの歌に感動して暇を與へた。熊野はこれも偏に觀音の御利生と喜んで、そのまゝ東をさして歸って行く。

【出典】　平家物語卷十「海道下り」に、

池田の宿にも着き給ひぬ。かの宿の長者熊野が女侍従がもとに、その夜は三位中將宿せられけり。侍従三位の中將殿を見奉って「日頃はつてにだに思し召し寄り給はぬ人の、今日はかゝる所へ入らせ給ふ事の不思議さよ」とて、一首の歌を奉る……さゝあって、中將梶原を召して「さてもたゞ今の歌の主は如何なる者ぞ、やさしうも仕ったるものかな」と宣へば、景時畏って申しけるは「君は未だ知ろしめされ候はずや。あれこそ八島の大臣殿（宗盛）の、未だ當國の守にて渡らせ給ひし時、召され參って御最愛候ひしに、老母をこれに留め置き、常は暇を申ししかども、賜らざりければ、頃は三月の始めにてもや候ひけむ、

いかにせむ都の春も惜しけれど、馴れしあづまの花や散るらむ

といふ名歌仕り、暇を賜って罷り下り候ひし、海道一の名人にて候」とぞ申しける、

とあるに據つた。

【概評】　諺にも「熊野松風、米の飯」といって、人口に膾炙した曲で、夙く金春禪竹も歌舞髄腦記に寵深花風として擧げ、又「心底切なるところ強力體か」といひ、拾玉得花にも「幽玄、上果」として擧げてゐるのである。まことに現行曲二百數十番中の秀れた作で、前掲平家物語の一挿話を本として、これだけの大作を見せたのは作者の手柄である。

まづ人物の性格を見ると、ワキ宗盛については、人に對する思ひやりがなくて我意を通す、しかし情のこもった歌を見ては痛く感動する、我儘なそして風流な平家公達の風格がよく現れて居り、シテ熊野については、大命に反抗することの出來ない、弱い優しい性情がよく描かれてゐる。文に現れた老母の情懷も讀者の涙を誘ふに十分なものがある。その脚色は、シテ中入はないが、場面は宗盛の館と清水境内と二段に分れてゐて、この二場面をサシ謡・上歌及びロンギから成る道行を以て結びつけて

ゐるのである。このやうな長い道行は「兼平」や「盛久」やその他にもいくらか例はあるが、これほど美しい情のこもつた文は他にない。クセはさほどでもないが、中舞から「ならぬ」ならぬ俄かに村雨のして」と一轉するあたり、イロへの所謂「短冊の段」など實に面白い工夫である。「松風」は美文であるが、脚色はやゝ冗漫に流れてゐる。これは文章が美しくて、局面の推移が滑かである。秀れた作であると思ふ。

【一】

名乘笛にて、ワキ平宗盛、風折烏帽子・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ太刀持、着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて太刀を持ち、舞臺に入り、ワキは眞中に立ち、(ワキヅレは仕手柱先にて下に居り)

ワキ「これは平の宗盛なり。さても遠江の國池田の宿の長をば熊野と申し候。久しく都に留め置きて候が。老母のいたはりとて度々暇を乞ひ候へども。この春ばかりの花見の友と思ひ留め置きて候

といひてトモに向ひ、

ワキ「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「熊野來りてあらば此方へ申し候へ

ワキヅレ「畏つて候

【一】

舞臺は初め京都平宗盛の館で、ワキ平宗盛、ワキヅレ太刀持を隨へて登場、館の一室にゐる態で、

宗盛「自分は平宗盛です。さて遠江國池田の宿の長者を熊野といふが、これを都に連れ歸つて、永い間自分の手許に留めて置いたのです。ところが、この間からその老母が病氣であるといふので、度々暇をくれといふのだが、せめてこの春の花見の相手にしたいと思つて、許さないで留めて置くのです」

ここで物人に事件の發端を紹介し、そこで太刀持の從者に向つて、

宗盛「おい誰かゐないか」

從者「はい、お前に居ります」

宗盛「熊野が來たならば、こちらへいつてくれい」

從者「畏りました」

【一】

○平の宗盛—淸盛の二男、累進して内大臣從一位となつたが、元暦二年二月西海で子淸宗と共に源氏に生捕られ、後近江國篠原で斬られた。

○池田の宿—遠江國磐田郡池田村。もとは天龍川西岸の宿驛であつた。

○長—長者の略。多くの遊女を抱へて旅客に接せしめる宿屋の女主人。

○熊野—平家物語には、宗盛の妾となつたのは、宿の長熊野の娘侍從とある。

○いたはり—病氣。

【二】

ワキは脇座へ行きて床几にかゝり、トモは地謡座前に下に居る。

【三】

次第の囃子にて、ツレ朝顔、面連面・鬘・鬘帯・襟赤・着附摺箔・唐織着流の装束にて文を懐中して出で常座に立ち、大小前の方に向き、

ツレ次第「夢の間惜しき春なれや。夢の間惜しき春なれや。咲く頃花を尋ねん

地取に正面に向き、

ツレサシ「これは遠江の國池田の宿。長者の御内に仕へ申す。朝顔と申す女にて候。さても熊野久しく都に御入り候が。この程老母の御いたはりとて。度々人を御上せ候へども。更に御下りもなく候程に。この度は朝顔が御迎ひに上り候

ツレ道行「この程の。旅の衣の日も添ひて。旅の衣の日も添ひて。幾夕暮の宿ならん。夢も數添ふ假枕。明かし暮らして程もなく。都に早く着きにけり都に早く着きにけり

【三】

○夢の間惜しき―花の散り易い春は、花見の爲に寸時も惜しまれるとの意に、餘命の少い老母の爲に熊野を迎へようと心の急がれる意を兼ねた。

朝顔―假作の人名。

◎この程の―この道行〔砧〕のと同文。

○日も添ひて―日數を經て「日も」は紐にいひかけた衣の縁語。

〔夢も數添ふ、宿で結ぶ夢、夢を結ぶ宿の數が次第に加つて。

【二】

舞臺の一部は變つて、遠江國池田の態で、ツレ朝顔登場。

同前「春の花は散り易いもので、夢の間でも油斷してゐると、すぐ散つてしまふ。さうした無常な事を思ふと氣が氣でない、一刻も急いで都へ上りませう」

（次第を謡つて、旅を急ぐ心持を述べ、）

朝顔「私は遠江國池田の宿の長者の内に仕へてゐる朝顔と申す女です。さて熊野さまは永い間都にお出でになつて、先達來母御が御病氣だからと申して、度々使の人を都に上せたのですが、一向お歸りにもならないので、この度は私がお迎へに上るのです」

（見物人に自己紹介をし、）

朝顔「この間から國を出て、旅の日數も次第に加はり、夕暮毎に旅の宿で假寢の夢を結んで、幾日か明かし暮らしてゐるうちに、いつの間にやら都に着きました」

（といつてゐる間に都に着いた態で、舞臺は京都となり、）

○御内―お家。

○それぞれ―取次の者を呼ぶのである。

【三】

○草木は雨露の―本朝文粹源順の賦に「草樹皆告二雨露之恩一」

○養ひ得ては―和漢朗詠集紀長谷雄の詩句「養得自爲二花父母一、洗來寧辨二藥君臣一」を引いた。

○心もとなや―氣がかりなことだ。

「明かし暮らして程もなく」と右の方に向き二三足出でまたもとに歸りて都に着きたる心、道行濟みて正面に向き、

ツレ 急ぎ候程に。これははや都に着きて候。これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに候。まづまづ案内を申さばやと思ひ候

橋懸一の松へ出で幕に向ひ、

ツレ いかに案内申し候。池田の宿より朝顔が參りて候それぞれ御申し候へ

といひて後見座にくつろぐ。

【三】

アシラヒ囃子にて、シテ熊野、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて橋懸三の松へ出で正面に向き、

シテサシ 草木は雨露の惠み。養ひ得ては花の父母たり。況んや人間に於てをや。あら御心もとなや何とか御入り候らん

ツレこの間に一の松へ出で、

ツレ 池田の宿より朝顔が參りて候

シテ なに朝顔と申すかあら珍しや。さて御痛は

朝顔 旅を急ぎましたので、意外にお早く都に着きました。このお邸が熊野さまのお出でになる所らしい、まづ案内を頼みませう」

幕の方　熊野の家の門口の態で、幕へ向へ、

朝顔「もうしお頼み致します。池田の宿から朝顔が參りました、どうぞお取次下さいませ」

【三】

橋懸が熊野の住む家の態で、シテ熊野一ノ松に出て、

熊野「草木は雨や露の惠みによつて生長し、花はまたこれに育てられて咲き出るのであるから、從つて雨露は花にとつて父母同樣な大切なものなのです。まして人間はどの位兩親の御恩を受けてゐるか分らないのです。その大切な母上はどのやうな御容態でせう。あゝ氣がかりなことです」

この獨言をいつて、母の病氣が案ぜられるので、ここへ朝顔が取次を頼むのに對して、内から答がないので、二度聲をかけて、

朝顔「池田の宿から朝顔が參りました」

熊野始めてその聲に氣がついて、

熊野「ただ今、朝顔が來たといふのか、おゝ

○見うずる—見んとするの音便。
○笑止や—困つたことだ。

【四】

りは何と御入りあるぞ
ツレ「以ての外に御入り候。これに御文の候御覽候へ
といひながら懐より文を出しシテに渡す。シテ文を受取り、
シテ「あら嬉しやまづまづ御文を見うずるにて候。（文を披きて見つ）あら笑止や。この御文のやうも頼み少う見えて候
ツレ「さやうに御入り候
シテ「この上は朝顔をも連れて參り。又この文をも御目にかけて。御暇を申さうずるにてあるぞ此方へ來り候へ

【四】

といひて文を卷きて左手に持ち、ツレと入替りて舞臺に入り、常座に立ちトモに向ひ、（ツレはシテの後に立つ）
シテ「誰か渡り候
ワキヅレ立ち舞臺の眞中に出で、
ワキヅレ「誰にて渡り候ぞ。や。熊野の御參りにて

珍しい。して、母上の御病氣はどのやうな御容態ぢや」
朝顔「ひどくお惡うございます。こゝにお手紙がございます。御覽なさいませ」
と手紙を熊野に渡す。
熊野「あゝ嬉しい、ではまづお手紙を拜見しませう」
と手紙を披いて一寸見て、
熊野「あゝ困つたことだ。このお手紙の御文面でも、心配な御容態に思はれるが……
……」
朝顔「さやうでございます」
熊野「この上は朝顔をも連れて參り、またこの手紙をもお目にかけて、お暇を願ひませう。さあこちらへお出で」

【四】

舞臺より最初の通り宗盛の館へ、熊野は朝顔を連れて舞臺に入り、
熊野「どなたかお出でございませうか」
從者「どなたです。やあ、熊野さまがお出

○朝顔に文を上せ　朝顔に託して文を送る。
○便なう　不都合な、憚られること。
○そと　一寸。
○見參　お目にかける。
◎甘泉殿の―以下「書き留む」までを「文の段」といふ。
○甘泉殿の春の夜の―平家物語巻十維盛入水の事に「かの驪山宮の秋の夕の契りも終には心を碎く端となり、甘泉殿の生前の恩も終りなきにしもあらず」、松子梅生生涯の恨みあり、甘泉殿は漢武帝が李夫人と住んだ所［花筐」參照。驪山宮は唐玄宗が楊貴妃と遊楽した所［楊貴妃」參照。

候

シテ「わらはが参りたる由御申し候へ

ワキヅレ「心得申し候」（ワキの前に出で辭儀して）いかに申し上げ候。熊野の御參りにて候

ワキ「此方へ來れと申し候へ

ワキヅレ「畏つて候」（眞中へ出で）此方へ御參り候へ

ワキヅレ元の座につく。シテ少し進みて下に居り、（ツレ仕手柱先に下に居る）

シテ「いかに申し上げ候。老母の痛はり以ての外に候とて、この度は朝顔に文を上せて候。便なう候へどもそと見參に入れ候べし（と眞中に進みて下に居る）

ワキ「何と古里よりの文と候や、見るまでもなしそれにて高らかに讀み候へ

シテ文を披きて、

シテ「甘泉殿の春の夜の夢、心を碎く端となり、驪

でになつたのですか」

熊野「私が参つたと申し上げて下さい」

従者「承知しました」

宗盛の前に出で、

従者「申し上げます。熊野がお出でになりました」

宗盛「こちらへ參れといつてくれ」

従者「畏りました。（熊野に）こちらへお出でなされ」

熊野宗盛の前に出て、

熊野「申し上げます。老母の病氣が非常に重いとうございまして、この度は朝顔に手紙を持たせて都に上せましてございます。恐れ入りますが、一寸お目にかけたうございます」

宗盛「なにと申す。故郷から手紙が來たといふのか、自分が讀むまでもない、お前がそこで高い聲で讀んで聞かせよ」

熊野文を披いて、

熊野「――『漢の武帝は李夫人と甘泉殿で春の夜の

○末世一代教主　末代濁世の教主、釋迦如來。

○掟　法則。

○朽木櫻　老の身を喩へた

○老の鶯　同じく老の身を喩へて、鶯の字音「あう」を重ねて「逢ふ」と續けた。

○涙に　逢ふことも無くといひかけた。

○親子は一世—法苑珠林六十一に「父母之恩云何可レ報……一世之恩倘復難レ報」親子の縁は一世、夫婦は二世、主從は三世と信じられてゐた。

○老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな—古今集在原業平の母の歌。伊勢物語にも見ゆ。

山宮の秋の夜の月終りなきにしもあらず。末世一代教主の如來も。生死の掟をば遁れ給はず。過ぎにし二月の頃申しし如く。何とやらんこの春は。年古り增る朽木櫻。今年ばかりの花をだに待ちもやせじと心弱き。老の鶯逢ふ事も涙に咽ぶばかりなり。ただ然るべくはよきやうに申し暫しの御暇を賜はりて。今一度まみえおはしませ。さなきだに親子は一世の中なるに。同じ世にだに添ひ給はずは。孝行にもはづれ給ふべし。ただ返す返すも命の内に今一度。見參らせたくこそ候へとよ。老いぬればさらぬ。別れのありといへば。いよいよ見まくほしき君かなと。古言までも思ひ出の涙ながら書き留む

と文を讀み終りて、次の地上歌に文を卷きて左脇に置く。後見文を引く。ツレシテの後へ行き下に居る。

地上歌「そもこの歌と申すは。そもこの歌と申す

短い夢を結ばれたが、やがては死別なされて、その甘泉殿も悲しい思出の種となり、唐の玄宗は楊貴妃と驪山宮で秋の夜の月を眺め、いつまでも變らないやうにと契りを結ばれたが、やがてはこれも死に別れておしまひになつたのです。末代濁世の教主である釋迦如來でさへ生死の運命はお免れになることが出來なかつたのです。まして自分達はいつ死ぬことやらほんとに分らないのです。この前、二月の頃に申し送つたやうに、何か知ら、この春があぶなくて、年をとつた朽木櫻のやうなこの身は、今年だけの春をも待たないで、枯れてしまひさうで、心細くて、この年寄りがわが子にも逢ふことが出來ないかと思ふと、涙に咽ぶばかり悲しいのです。どうかなるべくならば、よいやうに申し上げて、暫くのお暇を頂戴して、もう一度顔を見せて下さい。さうでなくてさへ、親子の縁はこの世限りであるのに、この現世でさへ親に添ひ遂げないでは、孝行の德にも外れませう。どうかくれぐれも、私の命のある内に、もう一度顔を見せて下さい。——

老いぬればさらぬ別れのありといへば、いよいよ見まくほしき君かな

（別居してゐると、なつかしくて會ひたいものだが、特に年をとると、死別といふ遁れ難い別れがあるので、愈、あなたに會ひたくてたまらない）

○在原の業平　平城天皇の皇子阿保親王の第五子、兄行平と共に在原の姓を賜ひ右近衛中将となつた。伊勢物語の主人公。〔杜若〕〔雲林院〕參照。
○朝　朝廷に。
○長岡　山城國乙訓郡、奈良から平安京へ遷都の間、暫く都であつた地。
○さらぬ別れの――古今集在原業平の返歌「世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため」
【五】
○玉の緒　命に。
○ながき別れと――新古今集藤原知家の歌に「これもまた長き別れとなりやせむ暮を待つべき命ならねば」

は、在原の業平の、その身は朝に隙なきを、長岡に住み給ふ老母の詠める歌なり。さてこそ業平も、さらぬ別れのなくもがな。千代もと祈る子の爲と詠みし事こそ、あはれなれ詠みし事こそあはれなれ

【五】シテ「今はかやうに候へば。御暇を賜はり。東に下り候べし

ワキ「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら。この春ばかりの花見の友。いかでか見捨て給ふべき

シテ「御言葉をかへせば恐れなれども。花は春あらば今に限るべからず。これはあだなる玉の緒の。ながき別れとなりやせん。ただ御暇を賜はり候へ

ワキ「いやいやさやうに心弱き。身に任せては叶

といふ古歌まで思ひ出されて、涙ながらにこの文を書き留めます』

（母の手紙を讀み上げ）

さて、この『老いぬれば』といふ歌は、在原業平が朝廷に出仕して忙しくて、母を見舞ふ隙のなかつた時に、長岡に住んで居られた老母が詠まれた歌で、それで、業平も、

『世の中にさらぬ別れのなくもがな、千代もと祈る人の子のため』

（子たるものは母上が千年も萬年も生きて下さるやうにこそ祈りしてゐるのに、[illegible]この子の爲に、世の中に死別といふやうな[illegible]祈ります）

と詠まれたのであつた。實に親子の情愛が察せられて、あはれなことである。

【五】熊野「今はこのやうな次第でございますから、お暇を頂戴して、東へ歸りたうございます」

宗盛「老母の病氣は氣の毒ではあるが、しかしそなたはこの春の大事な花見の相手であるのに、どうして自分を見捨てて歸ることが出來ますか」

熊野「口答へを申し上げて恐れ入りますが、花は春であれば、いつでも咲くもので、今年に限りませんが、こちらは果敢ない人の命で、永の別れとなつてしまふかも知れないのでございます」

宗盛「いや〳〵、ならぬ。そのやうに心弱

ふまじ。いかにも心を慰めの。花見の車同車にて。『ともに心を慰まんとて

地上歌『牛飼車寄せよとて

ワキ「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「こなたへ車を立て候へ

ワキヅレ「畏つて候

後見、車の作物を脇正面に出す。

地「牛飼車寄せよとてこれも思ひの家の内。はや御出でと勸むれど。心は先に行きかぬる。足弱車の力なき花見なりけり

「はや御出でと勸むれど」に、ワキ・ワキヅレ・シテ・ツレともに立ち、シテは車の内に入り、ツレはその後に、ワキは眞中へ出で車の外に竝び、ワキヅレはその後にツレと竝びて立つ。同車にて花見に出づる態。

【六】

シテ『名も清き。水のまにまにとめくれば

地『川は音羽の。山櫻

く勝手をさせることは出來ない。是非とも氣晴らしに、花見車に一緒に乘つて、二人で心を慰めよう」

といつて、

宗盛「牛飼、車の用意をせよ」

といひつけ、法華經に所謂牛車で火宅を出るやうに、宗盛は車に乘り、從者が熊野に『もはやお出かけでございますぞ』と乘車を勸めるが、熊野は氣が進まず、足も弱々と運びかねながら、是非なく花見に出かけるのである。

宗盛と熊野と車に同乘し、花見に出かける態で、舞臺は宗盛の館から清水觀音まで次第に轉換して行く。車は館の外へ出る。熊野は東山の方を眺めて、

【六】

熊野「名も清らかな清水觀音の方へと、賀茂川の流れに沿うて行くと、河は水音が高く、音羽山には櫻が咲き亂れてゐる。

○牛飼車寄せよ―牛飼は車を引く牛を御する男。牛飼よ車を持つて來いとの意、

○思ひの家―思ひの「ひ」を火にいひかけ、牛の緣で火宅の意を兼ねた。火宅のこと〔葵上〕の語釋參照。

○足弱車―車輪の弱い車。心の進まない喩へとした。

【六】

○名も清き水の―名も清き清水寺といふのを清き水と字を分け、古今集清原深養父の歌「花散れる水のまにまにとめくれば山にも春はなくなりにけり」を引いた。

○とめくれば―もとめ來れば。

○音羽の山―京都東山、清水寺のある山、

○東路―關東、遠江の方を指す。
○春前に雨あつて―百聯抄解の詩句「春前有レ雨花開早秋後無レ霜葉落遲」を引いた
○山外に山あつて―同じく百聯抄解の詩句に「山外有レ山山不レ盡、路中多レ路路無レ窮」
○山青く山白く―同書に「山青山白雲來去、人樂人愁酒有無」
○誰かいひし―和漢朗詠集菅原文時の詩句「誰言春色從レ東到」を引き、東山と續けた。
○色めく花衣―艷やかな花見衣。
○雲かと見えて―遠方から見ればたゞ雲のやうであるが、八重櫻も一重櫻もあるとの意。
○九重―都、八重一重を承けて數を重ねた。
【七】
○河原おもて―賀茂川の岸
○車大路―五條橋の東、大和大路。上の「急ぐ」は車の緣語。
○六波羅―大和大路の東、六波羅蜜寺。空也上人の創建、本尊は上人作の十一面觀音。
○地藏堂―今は堂がなく、

シテ「東路とても東山せめて。そなたのなつかしや（と右の方を遠く眺めてしをり）

地サシ「春前に雨あつて花の開くること早し。秋後に霜なうして落葉遲し。山外に山あつて山盡きず。路中に道多うして道窮まりなし

シテ「山青く山白くして雲來去す

地「人樂しみ人愁ふ。これ皆世上の有樣なり

地下歌「誰かいひし春の色。げにのどかなる東山。

上歌「四條五條の橋の上。四條五條の橋の上。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣袖を列ねて行く末の。雲かと見えて八重一重。咲く九重の花盛り名に負ふ春の、けしきかな名に負ふ春のけしきかな

【七】

地ロンギ「河原おもてを過ぎ行けば。急ぐ心の程もなく。車大路や六波羅の。地藏堂よと伏し拜む

シテ「觀音も同座あり。闡提救世の。方便あらたに

それにしても、わが故鄕の關東が東山の方だと思ふと、同じ方角だと思ふだけでも、あの方がなつかしい。詩の句に、『春先に雨が降つて、花はいつもより早く咲き、秋にはまたいつまでも霜が降らないで、紅葉が長く殘つてゐる。『山の向ふにはまた山が續いて、その山路にはいくらも道があつて、どこまで行つても道の盡きることがない。山つゞきの空に、青雲や白雲が往き來してゐる。人間が或は樂しみ或は悲しむのも、丁度あの雲の往き來するやうなものだ』などといふ詞があるが……さう〳〵、詩の句にまた――『誰やらが春の趣はまづ東の方から來るといつた』とあるが、ほんとに東山の景色はのどかなことだ。……

おゝ、四條や五條の橋の上には、年をとつた人も若い人も、男も女も、貴い人も賤しい者も、誰も彼も、美しい春着を着飾つて、うち續いて花見に出かけること。そして、あの向ふの方には、雲のやうに、八重櫻や一重櫻が咲き揃つて、さすが都の春景色は實に美しいことです」

（と思ひつゝ美しい春景色に見とれて獨言をいふ。）

【七】

（車は次第に進んで行く。）

車の進みは早くて、やがて賀茂河原を

地藏尊は觀音と一堂に安置す。もとは地藏堂が有名であつたと見える。
○闡提―闡提 Icchantika の略、不成佛と譯す。大悲の菩薩が衆生濟度の爲に殊更涅槃に入らないもの、大悲闡提といふ。即ち觀音が救世の方便として闡提となるのである。
○たらちね―母。
○白玉の―命は知らずを白玉に、玉の緒を愛宕にいひかけた。
○愛宕の寺―愛宕念佛寺、一に六道珍皇寺といふ。小野篁の創建、本尊丈六彌陀如來。六波羅の東にある。
○六道の辻―念佛寺の門前六道は地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天の六の世界。
○冥途に通ふ―小野篁が念佛寺から冥途に通つたといふ傳說がある。
○鳥部山―古くから火葬場とせられた所。六波羅蜜寺の南東。
○煙の末―春霞を火葬の煙かと恐れるのである。
○聲も旅雁の―聲も呂といひかけ、和漢朗詠集劉元叔の詩句「北斗星前横旅雁、南樓月下擣寒衣」を引いた。

たらちねを守り給へや
地 げにや守りの末すぐに、頼む命は白玉の。愛宕の寺もうち過ぎぬ。六道の辻とかや
シテ げに恐ろしやこの道は、冥途に通ふなるものを。心ぼそ鳥部山（と右の方を見）
地「煙の末も薄霞む。聲も旅雁の横たはる
シテ『北斗の星の曇りなき
地『御法の花も開くなる
シテ「經書堂はこれかとよ（と左の方を見）
地「そのたらちねを尋ぬなる。子安の塔を過ぎ行けば
シテ「春の隙行く駒の道
地『はや程もなくこれぞこの
シテ『車宿り（と右の下を見）
地「馬留め。ここより花車。おりゐの衣播磨潟。飾

通つて、間もなく大和大路に出ると、熊野は
熊野 こゝが六波羅蜜寺の地藏堂か
　といつて伏し拜み、
熊野 おゝこゝには觀世音が御同座遊ばすのだ。衆生濟度の方便に闡提とおなり遊ばす大悲の觀音樣、どうかあらたかな御利益を以て、母の壽命をお守り下さいますやうに（と祈る）
　まことに、觀音の御守護によつて、母の果敢ない命が助かるやうにと念じてゐるうちに、もはや愛宕念佛寺も通り過ぎた。こゝは六道の辻と呼ばれる所である。
熊野「おゝ恐ろしいことだ、六道の辻といへば、冥途へ通ふ途の名だ。おゝ心細いことだ。向ふには火葬場の鳥部山が見える。あの煙の薄霞んだ空には、雁が悲しげな聲を立てて通つて行くわ。雁の行く北といへば、あそこがありがたい北斗堂で……はやこれが法華經の功德のあらたかな經書堂なのか
　かうして母を思ふ情に満されながら、子安の塔を過ぎて行き、
熊野 車の進みが早くて、はやこゝが清水の車宿りだ、この馬留めで花見車を降り

○北斗の星—北斗堂にいひかけた。堂は妙見菩薩を祀り、六道の東にあつた。
○御法の花も—法華經を和らげ、櫻の花と竝べて「も」といひ、經書堂と續けた。
○經書堂—來光院の俗稱、清水寺西門前の三年坂にある。
○子安の塔—泰産寺。子安地藏ともいふ。三年坂にある。
○春の隙行く駒—人生の極めて短い喩へ。莊子に「人生二天地之間一、若二白駒之過一レ隙、忽然而去」
○車宿り、馬留め—清水西門前にあつた。
○花車—花見車。
○おりゐの衣—車より下りて居るを衣を織るに、衣を裁るを播磨にいひかけた。
○飾磨の徒歩路—播磨國飾磨郡から褐といふ染物を出すので、徒歩路にいひかけた。
○清水の—徒歩にて來るといひかけ[illegible]。
【八】

磨の徒歩路清水の。佛の御前に。念誦して母の祈誓を申さん

「ここより花車」と一同車より下りたる心にて後へ下り、ワキは脇座、ワキヅレは地謡座前、シテは眞中、ツレはその後に行きて一同下に居り、シテは正面に向きて合掌す、この間に後見作物を引く。

【八】

ワキ「いかに誰かある

ワキヅレ「御前に候

ワキ「熊野はいづくにあるぞ

ワキヅレ「未だ御堂に御座候

ワキ「何とて遲なはりたるぞ。急いでこなたへと申し候へ

ワキヅレ「畏つて候。ツレの前へ出で「いかに朝顔に申し候。はや花のもとの御酒宴の始まりて候。急いで御參りあれとの御事にて候。その由仰せられ候へ

て徒歩で清水の佛前に參り、母上の爲にお祈りしませう」

舞臺は清水の境内となり、宗盛と熊野が車を降り、熊野は觀音の佛前へ參り、宗盛は直に酒宴を開く態。

【八】

宗盛「おい誰か」

從者「はいお前に居ります」

宗盛「熊野は何處にゐるのだ」

從者「まだ御堂にお出でございます」

宗盛「なぜそのやうに遲いのだ、急いでこちらへ來るやうに申せ」

從者「畏りました。（朝顔に）朝顔どの、もはや花の下で御酒宴が始まつたのです。すぐお出でになるやうにとの仰せです。熊野さまにさう仰しやつて下さい」

○御當座――即吟の和歌。

○思ひ内にあれば――孟子、告子下に「淳于髡曰、思有二於内一、必形二於外一」

○花前に蝶舞ふ――百聯抄解の詩句「花前蝶舞紛々雪、柳上鶯飛片々金」を引いた。

ツレ「心得申し候。（ワキヅレ元の座に帰り、ツレシテの前へ出でゝ）いかに申し候。はや花のもとの御酒宴の始まりて候。急いで御参りあれとの御事にて候

シテ「何とはや御酒宴の始まりたると申すか

ツレ「さん候

シテ「さらば参らうずるにて候

ツレは笛座前へ行きて下に居り、シテは常座に立ちて右の方を見渡し、

シテ「なうなう皆々近う御参り候へ。あら面白の花や候。今を盛りと見えて候に。何とて御當座などをも遊ばされ候はぬぞ（とワキの方へ向きて）

シテクリ『げにや思ひ内にあれば。色外に顯る

と謡ひながら眞中へ行き下に居り、

地『よしやよしなき世の習ひ。歎きても又餘りあり

シテサシ『花前に蝶舞ふ紛々たる雪

朝顔「承知致しました（熊野の前へ行き）熊野さま、もはや花の下で御酒宴が始まりまして、すぐお出でになるやうにとの仰せでございます」

熊野「何ですつて、もはや御酒宴が始まつたといふのか」

朝顔「さやうでございます」

熊野「それでは参りませう」

熊野は酒宴の場へ来て、

熊野「もうし皆様、もつと近うお寄りなさいませ。おゝほんとに面白い花景色でございますこと。今が丁度眞盛りのやうでございますのに、何故皆様は御即吟なども遊ばさないのでございます」

といつたが、心の中の悲しさを隠せずにはゐられないで、

熊野「ほんとに心の中に悲しい思ひがあると、自然その心持が外に現れるものだ。でも、これも是非のない浮世の習はしで、いかに歎いても致し方のないことだ」

と獨言をいつて、自ら心を励まし、

熊野「――『花の前に舞ひ戯れる蝶の姿は、ちらち

○花は流水に隨つて―以下「聲の至ること遲し」まで詩句であらうが出所未詳。
○清水寺の鐘の聲―以下平家物語卷頭の「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅雙樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」を本として綴つた。
○祇園精舍　須達長者が釋尊說法の爲に寄進した西天竺祇樹給孤獨園の寺。
○諸行無常　四句偈「諸行無常、是生滅法、生滅滅已、寂滅爲樂」の第一句。諸行は一切の現象。
○地主權現　淸水寺境内の社。〔田村〕參照。
○娑羅雙樹　跋提河の邊にあり、釋尊ここで入滅の時、この樹林皆枯れて白色に變じたといふ。
○半ばは雲に　世の中を半ばに、山の上半が雲に隱れて見えぬ意を鷲の冠詞の「上見ぬ」にいひかけた。
○鷲のお山―釋迦が法華經を說いた山、靈鷲山。
○名を殘す寺は―下河原にあつた桂橋寺の山號を靈鷲山といつたから、かう綴つた。
○桂の橋柱―寺の名を承けて、橋柱、柱立ち、立ち出

地「柳上に鶯飛ぶ片々たる金。花は流水に隨つて香の來ること疾し。鐘は寒雲を隔てて聲の至ること遲し

地クセ「淸水寺の鐘の聲。祇園精舍をあらはし。諸行無常の聲やらん。地主權現の花の色。娑羅雙樹の理なり。生者必滅の世の習ひ。げにためしある粧ひ。佛も元は捨てし世の。半ばは雲に上見えぬ。鷲のお山の名を殘す。寺は桂の橋柱。立ち出でて峯の雲。花やあらぬ初櫻の祇園林下河原

「立ち出でて峯の雲」とシテ立ち謠に合せて舞ふ。

シテ「南を遙かに眺むれば

地「大悲擁護の薄霞。熊野權現の移ります御名も同じ今熊野。稻荷の山の薄紅葉の。靑かりし葉の秋又花の春は淸水の。ただ賴め賴もしき春も

らと雲の散るやうであり、柳の枝に飛び交ふ鶯の姿は、黄金の片を飛ばすやうだ。『花は流れに散り浮かんで、早くからよい香を傳へ、夕暮の鐘は雲に隔てられて、その聲が容易に聞えて來ない。かうして早くから遲くまで春を樂しむことが出來る』

と詩句を吟じ、更に、

『淸水寺の鐘の聲は、祇園精舍のそれのやうに諸行の無常を傳へ、地主權現の花は、娑羅雙樹のそれのやうに生者必滅の理を敎へてゐる。まことに世上一切の事必滅を免れないもので、釋迦如來もこの理を觀じて世をお捨てになり、靈鷲山で說法を遊ばしたのである。その靈鷲山の名をわが國に殘したのが靈鷲山桂橋寺である。今この寺に立つてあたりを見ると、山には雲か花か見分けがつかないやうな趣で、初櫻が咲き包うて居り、近くには祇園林や下河原が眺められ、また遙か南の方を見ると、薄霞のたなびいたあたりに、大慈大悲を以て衆生を擁護し給ふ熊野權現を勸請した、御名も御本社と同じ今熊野が拜せられ、同じ南の方に『靑かりしより思ひそめてき』と歌に詠まれた稻荷山の薄紅葉が見渡される。ほんとに『たゞ賴めしめぢが原のさしも草、われ世の中にあらん限りは』と御誓願遊ばされた、淸水觀音の春景色は、花

で続けた。
〇峯の雲—立ち出でて見るといひかけた。
〇花やあらぬ—雲の如く見えるのは花か、さうでないか。
〇祇園林—祇園八坂神社の南。
〇下河原—祇園の南、清水の西。
〇大悲擁護の—平家物語熊野参詣の條に「大悲擁護の霞は熊野山にたなびき」とあるに據つた。熊野權現。紀伊國東牟婁郡にある。
〇今熊野—新熊野社。三十三間堂の東南の、後白河法皇の御願によつて應保元年勸請した。
〇稲荷の山—清水の南、紀伊郡稲荷神社のある山。
〇青かりし葉の—古今著聞集の歌—時雨する稲荷の山のもみぢ葉はあをかりしより思ひそめてき—を借りた。
〇ただ頼め—新古今集清水觀音の御詠—なほ頼めしめぢが原のさしも草われ世の中にあらん限りは—を引いた。
〇千々の—花の千々に咲き亂れる意に、老母を思ふ心の千々に亂れる意を含めた。
【九】〇山の名の—音羽山・嵐山の名の如く、音を立て嵐を吹いて、花を雪と散らすといふ意。

千々の花盛り（と舞ひて常座に立ち、

【九】
シテ「山の名の。音羽嵐の花の雪

地「深き情を。人や知る（と扇にて酒を酌む形をし）

シテ「わらはお酌に參り候べし（とワキの前へ行き）

ワキ「いかに熊野一さし舞ひ候へ

地「深き情を。人や知る（としをりながら橋懸へ行き、舞臺に歸りて、

〔中舞〕（を舞ひて、脇正面に向き、

シテ「なうなう俄かに村雨のして花の散り候はいかに（とワキへ向く）

ワキ「げにげに村雨の降り來つて花を散らし候よ

シテ「あら心なの村雨やな春雨の（と角へ行きて上を見上げ

の頃盛りで、實に美しい眺めだ」

といひ、意味の曲舞を舞ひ、

【九】
熊野「音羽山・嵐山といふ山の名のやうに、大きな音をたてて嵐が吹く、花が雪のやうに散つて行く。それにつけても、私は深い歎きに沈んでゐるのだが、誰も私の心持を察してくれるものはない」

と再び悲しみに閉されたが、また氣を取り直し、

熊野「私がお酌を致しませう」

と宗盛に酌をする。

宗盛「おい熊野、一つ舞を舞つてはどうだ」

熊野「誰も人の心を察するものがない」

といつて、

〔中舞〕
を舞ふ。舞の中途で俄雨が降る。

熊野「もうし、俄かに村雨が降つて來て、花を散らします。これはまたどうした事でございませう」

宗盛「いかにも村雨が降つて來て、花を散らすなあ」

熊野「あゝ察しのない村雨だこと——「春雨の降るは涙か櫻花、散るを惜しまぬ人しなければ」

○深き情を—深い物思ひを誰も知らないといふ意。深きは雪の緣語。
○心なの—心なき、思ひやりのない。
○春雨の降るは涙か櫻花—古今集大伴黒主の歌。下句「散るを惜しまぬ人しなければ」
○言葉の種—和歌。
○いかにせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん—平家物語に載す。解説參照。都の春を宗盛の、東の花を母の喩へとしたのである。
○なかなかの事—然りといふ意。
○御利生—衆生を利益し給ふこと。

地「降るは涙か（と面を伏せて左へ廻りつゝ）降るは涙か櫻花。散るを惜しまぬ。人やある
（と散る花を扇に受くる形をし、右手にてしをりながら右へ廻り眞中に出て下に居り、
〔イロヘ〕に扇をたゝみて、左袂より短冊を出し扇を筆の心にて一行に歌を書き下し、よく見て、短冊を扇にのせてワキの前に出で短冊を渡し、眞中へ歸り下に居る。【短冊の段】。ワキ短冊を取上げて、
ワキ「由ありげなる言葉の種取り上げ見ればいかにせん。都の春も惜しけれど
シテ『馴れし東の花や散るらん（としをる）
ワキ「げに道理なりあはれなり。はやはや暇取らするぞ東に下り候へ
シテ「なに御暇と候や
ワキ「なかなかの事とくとく下り給ふべし（といひて短冊を左袂に入る）
シテ『あら嬉しやたふとやな。これ觀音の御利生

「この花時に春雨の降るのは或は櫻の散るのを惜しんで泣く涙であらうか、其とも花の散るのを惜しまない人とてないのであらうか、皆人同じやうに惜しんで泣くのであらう」と吟じ、
〔イロヘ〕に一首の歌を思ひ浮かんだ心で、短冊に歌を認めて宗盛に渡す。宗盛短冊を手に取つて、
宗盛「何だかわけのありさうな歌だ。取り上げて見ると——『いかにせん都の春も惜しけれど……』」
と上句を讀むと、熊野その後をついで、
熊野『……馴れし東の花や散るらん』
（都の春——あなたのお側——を離れるのも惜しいが、馴れ親しんだ東國の花——母の命——がこのやうに散りはしないかと案ぜられます。あゝどうすればよいのでございませう）と讀む。
宗盛「いかにも尤もだ、氣の毒なことだ。すぐ暇をやるぞ。早く東國へ歸るがよからう」
熊野「えゝ、お暇を賜はるのでございますか」
宗盛「さうだ、早く歸られよ」
熊野「おゝ嬉しいことでございます。あり

なり(と正面に合掌)。これまでなりや嬉しやな

地「これまでなりや嬉しやな。かくて都にお供せば、またもや御意の變るべきただこのままにお暇と(と立ち)。木綿附の鳥が鳴く東路さして行く道の(常座へ行き)。やがて休らふ逢坂の(正面へ出で)。關の戸ざしも心して。明け行く跡の山見えて(と見上げ)。花を見捨つる雁がねのそれは越路われは又(角へ行き)。東に歸る名殘かな東に歸る名殘かな

(と左へ廻り常座にて留拍子を踏む。)

がたいことでございます。これも皆觀世音の御利益でございます」と觀音を拜む。

熊野「それではお暇致しませう、あゝ嬉しいことだ。かうしてまた御館までお供をしたならば、またもや御意の變ることがあつては大變だ、このまゝお暇致しませう」

(獨言のやうにいひ、)

宗盛に暇を申して、東路さして歸つて行く途中、逢坂山で暫く休むと、關守も孝心に感じてすぐ戸を開けてくれるのであるが、「花を見捨てて都を去る雁は北越の方へ行くので、自分はそれとは方角の違つた東へ行くのであるが、自分も同じやうに都を見捨てて行くことだ」と、さすがに名殘を惜しむのである。

(熊野、遠江へ歸る態にて退場。)

○木綿附の鳥―鷄の異名。御暇と言ふといひかけ、鳥が鳴くと續けた。
○鳥が鳴く―東の枕詞。
○逢坂の關―京都から近江へ出る國境にある。
○花を見捨つる雁がね―古今集伊勢の歌に「春霞立つを見すてて行く雁は花なき里に住みやならへる」
○それは越路―雁は北へ歸るから。

〔考異〕

諸流(五流)

【一】ワキ「熊野來りてあら(下懸暇の事を申さ)ば此方へ申し候へ……【二】ツレ「さても熊野久しく……更に御下りもなく(下懸池田の宿の長をば熊野と申し候。宗盛の卿に召し置かれ給ひ。久しく御下りも候はぬ處に。老母の御痛はり以ての外に御入り候程に……ツレ「急ぎ候程に……これなる御内が熊野の御入り候所にてありげに候(下懸ナシ)……【三】シテ「この上は朝顏をも連れて……この文をも(下懸これを上の)御目にかけ……申さうずるにてあるぞ此方へ來り候へ(下懸候)【四】シテ「いかに申し上げ候……そと見參に入れ候べし(下懸老母の方より文を上せて候程に。これをそと御目にかけたう候)ワキ「何と……見るまでもなしそれにて高らかに讀み候へ(下懸さらば

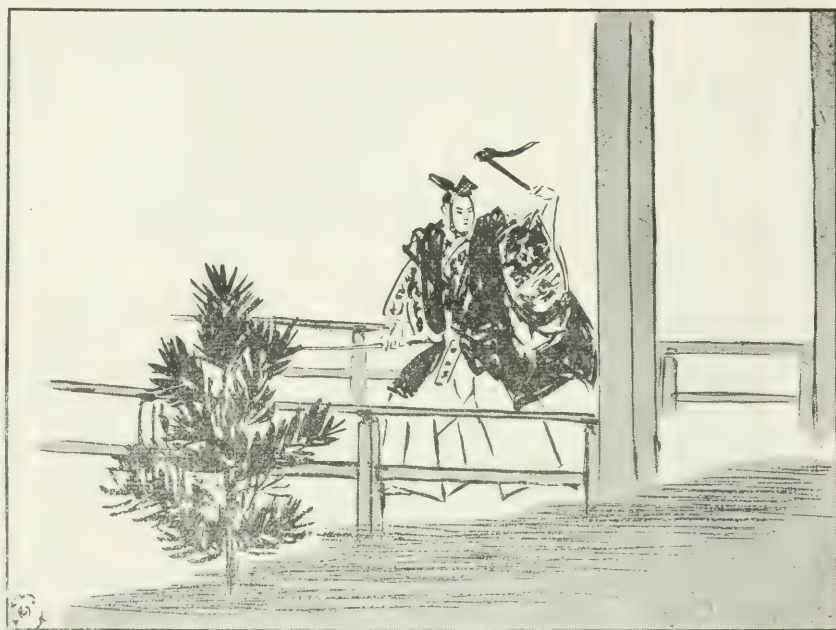
諸共に讀み候べし)…… 【九】シテ「わらはお酌に…… 地「深き情を人や知る(下懸「一つ聞しめされ候へ」ワキ「何と一つ飲めと候や。さらば舞を御舞ひ候へ。シテ「何と舞を舞へと候や。ワキ「なかなかの事)

古諸本 (光悦本)

【一】ワキ「これは平の宗盛……留め置きて候が(光父此程は)老母の……花見の友と思ひ(光いまた都に)…… 【二】ツレ「これは……この程(光ナシ)老母の御いたはりとて(光にて候程に)…… 更に(光ナシ)御下りも…… ツレ(光あら嬉しや)急ぎ候程にこれははや(光ナシ)…… 所にてありげに候(光程に)まづまづ…… 【三】ツレ「池田の宿より(光ナシ)朝顔が(光是迄)参りて候。シテ「なに朝顔と…… さて(光ハ)…… ツレ「以ての外に御入り(光ことなる御事もなく)候…… シテ「この上は…… 御目にかけて(光ともへに)御暇を……

【四】ワキ「ト「誰にて渡り候ぞ(光ナシ)や熊野の…… ワキ「ト「心得申し候…… 熊野の御参りにて候(光ワキ「何と遊屋来りたると申か)トモ「さん候)ワキ「此方へ來れ(光ナシ)トモ…… ワキ「いかに申し上げ候老母の痛はり…… 朝顔に文を上せて候(光又故郷よりあさかほを上せて□痛はりもつての外に候へば。いそぎくだるへきよし申のぼせて候まゝに、權をも見まいらせて参りて候。おかふ参候へ、又古里より文をのぼせて候)便なう候へども…… ワキ「何と古里より…… (光某)見るまでも…… 【五】ワキ「老母の痛はりは(光實々是は)さる事なれどもさりながら(光よも別の子細はあらじ)この春…… 【六】地下歌「誰かいひし(光つらし)春の色…… 【八】ワキ「何とて遅なはりたるぞ(光ナシ)急いで…… ワキ「ト「畏つて候いかに朝顔に申し候(光何とて遊屋は遅く御参り候ぞ)はや…… その由仰せられ(光御申し候へ)ツレ「心得申し候…… 御酒宴の始まりて候(光に何とて遅く御参り候ぞ急いで)…… 【九】ワキ「げにげに村雨の……花を散らし候よ(光ナシ)……ワキ「げに(光理なり)道理なりあはれなり(光ナシ)…… シテ「あら嬉しや(光ナシ)たふとや(光嬉しや)な

夜討曾我　觀（寶春剛喜）

解説

【能柄】四番目　二段劇能

【人物】前ツレ　曾我十郎、前シテ　曾我五郎、前ツレ　團三郎、同　鬼王、狂言　大藤内、同　狩場の者、後ツレ　古屋五郎、同　御所五郎丸、同（立衆）軍兵（二人）、後シテ　曾我五郎

【所】駿河國　富士裾野

【時】建久四年五月

【異稱】〔打入曾我〕ともいつた。

【作者】作者未詳。蔭凉軒日錄に寛正六年九月廿七日春日祭禮の能に「打入曾我」を演じたとある。

【梗概】曾我兄弟は賴朝が關東八箇國の諸侍を集めて、富士の裾野で卷狩をしたのを幸ひに、諸侍の中に紛れて父の敵工藤祐經を討たうと、團三郎、鬼王の兄弟を從へて、富士の裾野へ出かけたが、亡き跡の母の歎きを思ひやつて、團三郎兄弟に形見の品を持たせて、故鄕へ歸す

ことゝした。團三郎兄弟は、主の最後の供をしたいと望んで、曾我へ歸る事を拒んだが、遂に說き伏せられてしまつた。十郎は文を細々と書き認め、五郎は肌の守を取り出して、母への形見に送つた。團三郎兄弟は泣く泣く曾我へ歸つて行つた。

既にして兄弟は敵討の本望を遂げ、兄十郎は新田四郎に討たれたらしい。五郎は多勢の軍兵を相手に奮闘して、剛勇智謀の古屋五郎をも斬り殺したが、御所五郎丸が薄衣を被つてゐたのを、賤の女と見誤つて通り過した爲に、後から捉へられ、遂に多勢の者に繩をかけられて、將軍の前に引立てられた。

【出典】この第一段は、曾我物語卷九「鬼王道三郎曾我へ歸りし事」、第二段は同じ卷の「五郎召捕らるゝ事」に據つたものであらうが、謠曲作者の新しく構想した所が多く、その文章も殆ど原文に手頼つてゐないから、こゝには物語の全文を引くことを差控へ、吾妻鏡に記された史實を抄錄して參考とすれば、

建久四年五月廿八日癸巳、小雨降、日中以後霽、子剋、故伊東次郎祐親法師孫子、曾我十郎祐成・同五郎時宗、致二推參于富士野神野御旅館一、殺二戮工藤左衞門尉祐經一、又有二備前國住人吉備津宮王藤內者一、依レ與二于平氏家人瀨尾太郎兼保一、爲二囚人一被二召置一之處、屬二祐經一訴二申無レ誤之由一之間、去廿日返二給本領一歸國、而猶爲レ報二祐經志一、自二途中一更還來、勸二盃酒於祐經一、合宿談話之處、同被レ誅也、爰祐經・王藤內等所レ令二交會一之遊女、手越少將・黃瀨川之龜鶴等、則喚二此由一、祐成兄弟討二父敵一之由發二高聲一、依レ之諸人騷動、雖レ不レ知二子細一、宿侍之輩皆悉走出、雷雨擊レ鼓、暗夜失レ燈、殆迷二東西一之間、爲二祐成等一多以被レ疵、所謂平子野平馬允・愛甲三郎・吉香小次郎・加藤太・海野小太郎・岡邊彌三郎・原三郎・堀藤太。臼杵八郎、被二殺戮一宇田五郎已下也、十郎祐成者、合二新田四郎忠常一被レ討畢、五郎者、差二御前一奔參、將軍取二御劍一欲レ令レ向レ之給、而左近衞將監能直奉レ抑二留之一、此間小舍人童五郎丸搦二得曾我五郎一、仍被レ召二預大見小平次一、其後靜謐……

廿九日甲午、辰剋、被レ召二出曾我五郎於御前庭上一……此兄弟者、河津三郎祐泰男也、祐泰去安元二年十月之比、於二伊豆奧狩場一不レ圖中レ矢隕レ命、是祐經所爲也、于レ時祐成五歲、時宗三歲也、成人之後、祐經所爲之由聞レ之、遂二宿意一、凡此間每二狩倉一、相二交于御供之輩一、伺二祐經之隙一、如二影之隨一レ形云々……

卅日乙未……又祐成時宗最後事等、送二書狀等於母之許一文、被二召出一之處、幼稚以來欲レ度二父敵一之旨趣、悉載レ之、將軍拭二御感淚一覽レ之、永可レ被レ納二文庫一云々。

【概評】 本曲は「小袖曾我」の後を承けて、曾我傳說の結局を取扱つたものであるが、その主眼である兄弟討入の場面を外して、その前後を題材としたのは、思ひ切つたそして巧みな構想である。第一段の形見送りは、物語にもあはれに描かれてゐるが、本曲の方が、兄弟の性格を描く點に於ても、團三郎兄弟の衷情を描く點に於ても、遙かに物語よりは鮮かである。第二段に於て、十郎を舞臺に登場せしめないで陰にまわし、五郎をして「十郎殿十郎殿」と兄を索めしめるのも、あはれであるが、十番斬の代表として、古屋五郎といふ剛勇無雙の者を假作したのも、巧妙な手法である。間狂言に大藤内を出して、討入の樣を陰から描いたのも、上手な考案である。とにかく本曲は夢幻能を本體とした能樂としての演奏價値は、必ずしもさほど高いものとはいへないが、劇能、戲曲の制作法としては、十分に工夫したものといふべきであらう。——曾我物の謠曲としては、なほこの後に續くものに「禪師曾我」がある。

【一】

次第の囃子にて、ツレ曾我十郎、侍烏帽子・襟淺黄・着附段厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて文を懷中し弓矢を持ち、シテ曾我五郎、侍烏帽子・襟花色・着附段厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて守を懷中し弓矢を持ち、ツレ團三郎及び鬼王、襟萠黄・着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて、舞臺に入り向合ひて、

四人〔次第〕その名も高き富士の嶺の。その名も高き富士の嶺の。御狩にいざや出でうよ

地取に十郎は正面に向き、

十郎「これは曾我の十郎祐成にて候。さてもわが君東八箇國の諸侍を集め。富士の卷狩をさせられ候間。我等兄弟も人並に罷り出で。唯今富士

【一】

第一段

舞臺は初め相模國曾我。ツレ曾我十郎、シテ弟五郎、ツレ從者團三郎及び鬼王登場。

四人「有名な富士山の御狩にさあ出かけよう」

（次第を謡つて目的を述べ、）

十郎「自分は曾我十郎祐成です。さてわが將軍家には關東八箇國の武士達を集めて、富士の裾野で卷狩をなされるので、自分達兄弟も人並の武士と同じやうに仲間入りをしようと思つて、これから急い

【一】○その名も高き—富士山の名高いやうに、名高い御狩といふ意。

○御狩—頼朝の富士の卷狩は建久四年五月八日駿河國駿東郡藍澤の原の狩に始まり、十五日富士郡富士野に移つた。兄弟の夜討はその二十八日である。解說參照。

○曾我の十郎—伊東祐親の孫、幼名一萬。その五歳の時父河津三郎祐泰を工藤祐經に討たれ、後母の再縁した曾我祐信に養はれて、その姓を冒し、十郎祐成と名乘つた。この時年廿二。

○わが君—將軍源頼朝。

○東八箇國—足柄關以東の相摸・武藏・安房・上總・下總・常陸・上野・下野の八箇國。

の裾野へと急ぎ候

といひて、シテ・ツレ四人向合ひ、

シテサシ ツレ「今日出でていつ歸るべき古里と。思へばなほもいとどしく

シテツレ上歌「名殘を殘すわが宿の。名殘を殘すわが宿の。垣根の雪は卯の花の。咲き散る花の名殘ぞと。わが足柄や遠かりし。富士の裾野に着きにけり富士の裾野に着きにけり

ツレ十郎「わが足柄や遠かりし」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて、一同富士の裾野に着きたる心。上歌濟みて十郎は正面に向き、

十郎「急ぎ候程に。これははや富士の裾野にて候。(五郎に)いかに時致。然るべき所に幕を御打たせ候へ

五郎「畏つて候

といひて十郎は脇座に行きて弓矢を下に置き床几にかゝる。他の三人は後見座にくつろぎ、五郎は弓矢を置きて舞臺の眞中に出で下に居る。

富士の裾野へ出かけるのです」と見物人に自己紹介をし、

四人「今日出てしまへば、もういつ故郷へ歸ることか、その見込のたい、最後の門出だと思ふと、一層わが家に名殘が惜しまれることだ。今わが家の垣根に雪のやうに咲いてゐるこの卯の花の、咲いてやがて散るのが、春の花の最後であるやうに、自分達の命もこれが最後だと思へば、さすがに足の運びも鈍りがちであるが、それでも足柄山を越えて進んで行くうちに、富士の裾野に着いた」

といってゐる間に、舞臺は轉換して、駿河國富士の裾野となる。

十郎「道を急いだので、もうこゝが富士の裾野だ。(五郎に)おい時致、都合のよい所に假屋を作らせておくれ」

五郎「畏りました」

やがて幕が張りまはされ、一同こゝに落ちついた態で、

○巻狩—獵場を圍み、獸をその中に追ひ込めて、狩りとること。
○富士の裾野—富士の西麓富士郡の井出・神野の邊。
○いつ歸るべき古里—死を決して故郷を出たのである。
○垣根の雪—垣根に雪のかかつたやうに見えるのは。卯の花はうつぎの花で色が白い。
○咲き散る花の名殘—卯の花は暮春に咲くもので、その咲いて散るのが春の花の最後であるといふ意を、故郷の名殘にいひかけ、又花の如く散り行く命の名殘をも含めた。
○わが足柄や—心の急ぐ爲に、わが足ながら道を遠く感ずるといふ意を足柄山にいひかけた。足柄山は相摸・駿河の國境にある。
○時致—曾我十郎の弟五郎。父を失つたのが三歳、夜討したのが二十歳の時であつた。
○幕を御打たせ—假屋に幕を張り廻すのである。

【三】

○打ち竝べたる幕―關東諸侍の假屋をいふ。曾我物語に「總じて上下の屋形の數、十萬八千軒軒をならべて小埒をやり、甍を竝べて打ちたりけり」

○あらまし―豫定。計畫。

○片時―暫くの時間。

○祐經―工藤左衞門尉、父祐繼から相續すべき領地を祐親に横領せられたと恨み祐親を狙つてその子河津三郎を射たのである。今は賴朝の寵臣となつてゐる。

○いつをいつまで―何時といふあてもなく、のび〳〵に。

○ながらへ―生き延びる、

○御諚―仰せ。長上の詞をいふ。

○夜討がけ―夜討にかけること。

【三】

十郎「いかに時致。今に始めぬ御事なれども、わが君の御威光のめでたさは候。打ち竝べたる幕の内（と駒正面を見渡し。）目を驚かしたる有様にて候。かほどに多き人の中に、我等兄弟が幕の内ほどものさびたるは候まじ

五郎「さん候今に始めぬ君の御威光にて候。さてかのあらましは候

十郎「あらましとは何事にて候ぞ

五郎「あら御情なや。我等は片時も忘るる事はなく候。かの祐經が事候よ

十郎「げにげに某も忘るる事はなく候。さていつをいつまでながらへ候べき。ともかくも然るべきやうに御定め候へ

五郎「御諚の如く。いつをいつとか定め候べき。今夜夜討がけにかの者を討たうずるにて候

【三】

十郎「ねい時致、今に始まつた事ではないが、將軍家の御威光は大したものだなあ。ずらりと竝んだ、この澤山な立派な假屋、驚かされるばかりだ。これほど多勢な人の中で、自分達兄弟の假屋ほど寂しいものは、外にあるまい」

五郎「さうです、將軍家の御威光はいつもながら大したものです。ところで、例の計畫はどうなさるのです」

十郎「計畫といふのは、何の事だ」

五郎「あゝ情ない。私は一寸の間だつて忘れることはありません。あの祐經を討つことですよ」

十郎「なる程、その事ならば自分も忘れたことはないのだ。就てはかうして何時といふあてもなしに、ぐづ〳〵生き延びてはゐられない。お前よいやうに定めてくれい」

五郎「仰せの通り、何時といふあてもなしにぐづ〳〵してはゐられません。今夜、夜討にして、あれを討つてしまひませう」

十郎「それが然るべう候、さらばそれに御定め候へや。思ひ出だしたる事の候。我等故郷を出でし時。母にかくとも申さず候程に、御歎きあるべき事。これのみ心にかかり候間。鬼王か團三郎か。兄弟に一人形見の物を持たせ、古里へ歸さうずるにて候

五郎「げにこれは尤もにて候さりながら。一人歸れと申し候はば。定めてとかく申し候べし、ただ二人ともに御歸しあれかしと存じ候

十郎「尤もにて候。さらば二人ともに此方へ參れと御申し候へ

五郎「畏つて候

五郎立ちて常座に出で、後見座の方に向き、

【三】

五郎「いかに團三郎、鬼王こなたへ參り候へ

團三「畏つて候

○鬼王、團三郎―曾我兄弟の從者。團三郎、曾我物語大石寺本・眞字本には丹三郎とあり、流布本には道三郎とある。

【三】

十郎「それがよからう。それではさう定めませう。……おゝ、思ひ出したことがある。自分達が故郷を出た時、母上にかやうかやうとも申し上げて置かなかつたから、自分達が死んだ後、さぞお歎きになるだらうと、こればかりが氣にかゝる。鬼王か團三郎か、彼等兄弟の中の一人に、自分達の形見の物を持たせて、故郷へ歸すことにしよう」

五郎「いかにもこれは御尤もです。しかし兄弟の中に一人に歸れといへば、きつとかれこれと文句を申しませう。一層のこと、二人ともお歸しになるのがよからうと思ひます」

十郎「尤もだ。それでは二人ともこちらへ來るやうにいつておくれ」

五郎「畏りました」

【三】

五郎「おい團三郎と鬼王、こちらへお出で」

團三「畏りました」

五郎舞臺の眞中へ歸り、團三郎・鬼王臉正面に竝び、三人ともに下に居り、

五郎「團三郎兄弟これへ參りて候（といひて地謡座前へ行き下に居る）

十郎「いかに團三郎。鬼王も確かに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか。又承引すまじきか眞直に申し候へ

團三「これは今めかしき御諚にて候。何事にても候へ御意を背く事はあるまじく候

十郎「あら嬉しや。さては承引すべきか

團三「畏つて候。何事も御諚をば背き申すまじく候

十郎「この上は委しく語り候べし。さても我等が親の敵の事。かの祐經を今夜夜討がけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば。古里の母歎き給はん事。餘りに痛はしく候程に。形見の品々を

五郎「團三郎兄弟をこゝへ連れて來ました」

十郎「おい團三郎、鬼王もよく聞け。今お前達兄弟にいふことがあるが、承知をするか、それとも承知しないか、はつきりといへ」

團三「これは又今更改まつた仰せでございますが、どのやうなことであらうとも、仰せに背きは致しません」

十郎「おゝ嬉しい、それでは承知してくれるか」

團三「畏りました。どのやうなことであらうとも、仰せに背きますまい」

十郎「それでは委しい話をするが、自分達の親の敵、あの祐經を今夜夜討にして討つてしまふのだ。それについて、自分達兄弟が死んだならば、さぞ故郷の母上がお歎きなさるだらうと、餘りにお氣の毒に思ふので、形見の品々を持つて、二人

○承引―承諾。

○今めかしき―今更めいた

○御意―思召。仰せ。

○痛はしく―氣の毒である

○歸るまじい—歸るまじきの音便。

○ふつつと—ふつりと。斷然。

持ちて。二人ながら古里へ歸り候へ

團三「これは思ひも寄らぬ御諚にて候ものかな。御意も御意にこそより候へ。この年月奉公申し候も。この御大事に眞先かけて討死仕るべき爲にてこそ候へ。何と御諚候とも。この儀に於ては罷り歸るまじく候。（鬼王へ面を向け）鬼王さやうにてはなきか

鬼王「なかなかの事尤もにて候。罷り歸る事はあるまじく候

十郎「何と歸るまじいと申すか

團三「ふつつと罷り歸るまじく候

十郎「これは不思議なる事を申すものかな。さてこそ以前に言葉を固めて候に。さてはふつつと歸るまじきか

團三「さん候

とも故郷へ歸つてくれい」

團三「これは意外なことを仰せられます。いかに仰せつけと申しても、事によります。この永い年月御奉公致したのも、この御大切な場合に、眞先に立つて討死致したい爲でございます。何と仰せられますとも、この事だけはお受け出來ません。（鬼王に）なあ鬼王さうではないか」

鬼王「さうです、尤もです。歸ることは出來ません」

十郎「何だと、歸れないといふのか」

團三「斷じて歸れません」

十郎「これは變なことを申すものだ。かやうな事を申しはしないかと懸念して、先程堅い約束をしたのに、それではどうあつても歸らないのか」

團三「さうです」

○不思議なる―奇怪な。不都合な。

○言葉を固め―堅い約束をする。念を押す。

○しかと―確かに。

十郎「汝は不思議なる者にて候。（五郎に）なう五郎殿あれを御歸し候へ

五郎「畏つて候。（團三に）やあ何とて罷り歸るまじいとは申すぞ。さやうに申さうずると思し召してこそ。始めより言葉を固めて仰せられ候に（と立ち）。何とて歸るまじいとは申すぞ。しかと歸るまじきか（と團三郎に詰め寄る）

鬼王（團三に）「まづ畏つたると御申し候へ

團三（五郎に）「畏つて候

五郎「しかと歸らうずるか

團三「罷り歸らうずるにて候

五郎「おうそれにてこそ候へ。（十郎に辭儀して）罷り歸らうずると申し候

十郎（團三に）「何と歸らうずると申すか

團三「さん候

十郎「お前は不都合な者だ。（五郎に）ねい五郎殿、あれを歸しておくれ」

五郎「畏りました。（團三郎に）おい何故歸らないといふのだ。そのやうな事を申しはしないかと御懸念になつて、始めから念を押して仰しやつたのに、何故歸らないと申すのだ。きつと歸らないのか」（團三郎に詰め寄る。鬼王その嚴しさに恐れて、團三郎に、

鬼王「とにかく、畏りましたと申し上げなさい」

團三（五郎に）「畏りました」

五郎「きつと歸るか」

團三「歸りませう」

五郎「おゝそれでこそよいのだ。（十郎に）歸りますと申しました」

十郎「なに、歸らうと申すか」

團三「はい」

五郎もとの座に歸る。團三郎・鬼王向合ひ、

團三「いかに鬼王に申し候

鬼王「何事にて候ぞ

團三「さて何と仕り候べき。罷り歸れば本意にあらず。歸らねば御意に背く。とかく進退ここに谷まつて候

鬼王「仰せの如く。罷り歸れば本意にあらず。又歸らねば御意に背く。我等も是非を辨へず候。但しきつと案じ出だしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら團三郎殿とこれにて刺し違へ候べし

團三「げにげにいづくにても命を捨つるこそ肝要なれ。いざさらば刺し違へう

鬼王「尤もにて候

と二人肩を脱ぎ刺し違へんとす。五郎二人の間に驅け入り、二人の肩を抑へて、

團三郎は鬼王に相談を持ちかけ、

團三「おい鬼王」

鬼王「何です」

團三「さてどうしたものであらう。故郷へ歸るのは不本意だし、歸らなければ主命に背くこととなり、どうすることも出來ない」

鬼王「仰しやる通り、故郷へ歸るのは不本意であり、歸らなければ仰せに背くこととなり、私もよい分別がつきません。……おゝふいとおもひついたことがあります。如何なる場合にしても、命を捨てるといふことが大切です。失禮ながら團三郎殿とこゝで刺し違へて死にませう」

團三「いかにもその通り、どのやうな場合でも、命を捨てるといふことが大切だ。さあそれでは刺し違へて死なう」

鬼王「さうしませう」

と二人は向合つて刺し違へようとする。五郎これを見て驚き、二人の間に入つて、

○進退ここに谷まつて――どちらへも行かれず、途方にくれる。詩經大雅桑柔篇に「人亦有レ言進退維谷」

○是非を辨へず――どうすればよいか分らない。

○きつと――急と。ふいと。

○案じ出だしたる――考へ出した。

五郎「ああ暫く、これは何としたる事を仕り候ぞ
十郎「やあ兄弟の者歸すまじきぞ歸すまじきぞ
五郎大小前に行きて下に居り、團三郎・鬼王、十郎に辭儀。
十郎「まづまづ心を靜めて聞き候へ。今夜この所にて祐經を討ち、我等兄弟空しくならば、さて古里にまします母には誰かかくと申すべきぞ。「敬ふ者に從ふは、君臣の禮と申すなり。これを聞かずは生々世々、永き世までの勘當と
地上歌「かきくどき宣へば。かきくどき宣へば、鬼王團三郎、さらば形見を賜はらんと、いふ聲の下よりも。不覺の涙せきあへず（四人ともしをる）
次のクリに五郎もとの座に歸り、團三郎・鬼王肩を直す、

【四】

地クリ「それ人の形見を贈りし例には、かの唐土の樊噲が、母の衣を着替へしは。永き世までの例かや
十郎サシ「今當代の弓取の。母衣とはこれを名づけ

五郎「おゝ一寸待て、これは何といふ事をするのだ」
十郎「やあ兄弟の者、歸さないぞ、歸さないぞ」
團三郎・鬼王居ずまひを正す。
十郎「まづ心を落ちつけて聞いてくれ。今夜この所で祐經を討つて、自分達兄弟が死んでしまへば、故郷にお出でになる母上へは、誰がこの事を申し上げるのだ。『主の敬ふ者に從ふのが君臣の禮である』といはれてゐるのだ。この事をよく酌み分けてくれ。聞かなければ、死んだ後までも、いつまでも勘當するぞ」
と、言葉を盡していはれるので、鬼王も團三郎も、
團三・鬼王「それでは、形見のお品を頂きませう」
といふやいはずに、われ知らず落ち來る涙が止まないのである。

【四】

十郎「一體人が形見を贈つた先例では、かの支那の樊噲が母から戴いた衣を着替へて、形見に贈つたのが、後世までの例となつたもので、今の世に武士が着ける母衣といふのは、この『母の衣』といふ意味からつけられた名なのだ。自分達のやう

○敬ふものに從ふは君臣の禮―君の敬ふ所に從ふのが臣としての禮である、兄弟の敬ふ母の爲を思ふのが汝等の臣としての禮であるといふ意か。曾我物語には「いかに未練なり、君臣の禮もだし難けれども、心に從ふを以て孝行とせり、その上終に添ひ果つまじき身なれば、名殘惜しき事盡くべきにあらず。急ぎ出で候へ」とある。
○生々世々―死んだ後の來世のその次のずつと後の來世まで。
○不覺の涙―武士として涙を出すまいとしても、覺えず知らず出る涙。

【四】

○樊噲―漢の高祖の臣。武勇の勝れた人。
○母の衣を着替へし―この傳説の出所未詳。
○弓取―武士。
○母衣―鎧の背に負うて敵の後矢を防ぐ、五幅ほどの布帛で作つた嚢狀のもの。

○我等が賤しき身を—自分達兄弟の如き賤しい者を喩に比べるのは不相應であるとの意。
○我等を隔てぬ習ひ—親子の情愛に貴賤の別はない。
○今はの時—最後の際。
○水莖の跡—手跡、筆跡。
○老少不定—人の死は年齢の順序によらない。白氏文集に「浮生都如レ夢、老少亦何殊」觀心略要集に「世人之愚也、於二老少不定之境一、成二千秋萬歳之執一」
○飛花落葉—無常の喩へ。正徹の寄花述懐和歌之序に「それ飛花落葉の春秋は盛者必衰のこの世を觀じ」
○肌の守—膚身につけてゐる守。
○形見は人の亡き跡の—古今集讀人知らずの歌に「形見こそ今はあだなれこれなくは忘るゝ時もあらましものを」

たり
地。然れば我等が賤しき身を。譬ふべきにはあらねども。恩愛の契りの。あはれさは。我等を隔てぬ。習ひなり
地クセ『さる程に兄弟。文こまごまと書きをさめ（十郎懐より文を出し）。これは祐成が（團三郎へ向き）。今はの時に書く文の。文字消えて薄くとも。形見に御覽候へ。皆人の形見には。手跡に勝るものあらじ。水莖の跡をば心にかけて弔ひ給へ。老少。不定と聞く時は若き命も賴まれず老いたるも殘る世の習ひ（團三郎十郎の前へ行き）。飛花落葉の理と思し召されよ（と十郎團三郎に文を渡す）。その時時致も。肌の守を取り出だし（五郎懐より守を出し）。これは時致が（と鬼王へ向き）。形見に御覽候へ。形見は人の亡き跡の。思ひの種と申せども。せめて慰む習

な賤しい者を、奬喩に比べるのは、餘りに不似合なことではあるが、親子恩愛の情は、誰でも變りのないものだ」
かくて、兄弟は母への文を細々と詳しく書き終つて、
十郎「これは祐成が最期の時に書きました文で、文字が消え消えて薄く、見にくうございませうとも、形見として御覽下さい。人の形見には、手跡ほどよいものはございますまい。どうぞこの文をお心におかけ下さいまして、私の亡き跡を御回向下さいませ。世の諺にも『老少不定』と申しまして、年若い者でも長生きするに限らず、年老つた者が却つて後に殘るといふのがこの世の習はしでございます。この世の中は、花の散り葉の散るやうな無常なものだとお思ひ下さい」
（と團三郎へ母への言傳を述べ、文を渡す。）
その時、時致も肌の守を取り出して、
五郎「これは時致の形見として御覽下さい。形見は却つて死んだ人を思ひ出させる歎きの種であるとは申しますが、又一面せめてもの慰めとなるものでございますから、この守をお身につけて、時致がお側にゐるものとお思ひ下さい」

○母上に添ひ申したると―守を母上の御身につけて、時致がお側にゐるとお思ひ下さい。
○その主を守佛の―今までその主時致を守つた守佛の觀世音よといふ意。
○この世の緣なくと―討死して、この世に緣がなくとも。
○諸行無常と―平家物語卷頭の「祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり」に據つた。諸行は一切の現象。
○文の干ぬ間に―この歌の出所未詳。
○思ひ白雲の―思ひ知らるといひかけた。
【問】

ひなれば。時致は母上に添ひ申したると思し召せ。今まではその主を(と守を見て)。守佛の觀世音(鬼王五郎の前へ出で)。この世の緣なくと來世をば助け給へや(と五郎鬼王に守を渡す)

十郎『既にこの日も入相の鐘もはや聲々に。諸行無常と告げ渡る。さらばよ急げ使。涙を。文に卷き籠めてそのまゝやる(團三郎鬼王立ち幕に入る)。文の干ぬ間にと。詠ぜし人の心まで。今更思ひ白雲の。かかるや富士の裾野より。曾我に歸れば兄弟すごすごと跡を見送りて泣きて留まる、あはれさよ泣きて留まるあはれさよ

十郎・五郎「曾我に歸れば兄弟は」と立ち常座へ行きて、團三郎・鬼王を見送り、右の方に向きてしをり、直して中入。

【間】 早鼓の囃子にて、狂言オモ大藤内、烏帽子・着附白練・下袴・脚半の裝束にて赤地縫箔を被り、女帶と尺八を手に持ちて、幕より驅け出でながら、

オモ「かなしやく。助けてくれいく

(と鬼王に母への言傳を述べ、守を戴いて、)

五郎「今まではその持主をお守り下さつた守佛の觀音樣、もはやこの世に緣がなくなつても、どうか來世往生の出來るやうにお助け下さい」

といつて、守を鬼王に渡す。

十郎「もはや、夕暮の鐘が『一切のものがすべて無常である』と告げ知らせるやうに響いてゐる。では、別れよう。急いで行け。歌に『涙を封じこめてそのまゝ送るこの手紙の、その濡れたのが乾かない前に、早く先方へ渡してくれ』と詠まれた心持まで、今更思ひ知られることだ」

かくて、團三郎兄弟が富士の裾野から、曾我へ歸ると、十郎兄弟は跡を見送つて、涙ながら留まつたのは、あはれなことである。

狂言アド狩場の者、着附縞熨斗目・狂言上下・小刀の裝束にて、大藤内の後より駈け出て、

オモ「許してくれい〳〵

といひながら舞臺の眞中へ出で、

アド「某で御座る。まう何となされた

オモ「なに某ぢや。そなたは何として來た

アド「今夜は狩場の廻りでござるが、餘りこなたが取り亂した體ぢやによつて、それ故にこれまで來てござる

オモ「ようこそ來てくれた。胸がたくめいて物がいはれぬ

アド「殊の外取り亂した樣子ぢや。まづ帶を締めさせられい

オモ「手が震うて締める事がならぬ

アド「某が締めて進ぜませう

オモ「締めてくれさしめ

アド「心得ました。(大藤内の帶を締めて)一段とようござる。まう何と致した事でござるぞ

オモ「別の事でもないが曾我兄弟の事よ

アド「曾我兄弟が何としました

オモ「父河津の三郎祐泰は赤澤山の狩くらにて。尾越の矢に當つて死なれたを。工藤左衞門祐經こそ親の敵なれと思うて。つけ狙ふと思し召せ。祐經殿のいはるゝは。某を曾我兄弟がつけ狙ふ。もしもの事があるならば頼むといはれたによつて。某も氣に入らうと思うて。御氣遣ひあられまい。たとへ兄弟の者が狙うたりとも。蟷螂が斧を以て隆車に向ふが如し。その上この大藤内がお側にゐる

○胸がたくめいて―胸に烈しく動悸がして。

○赤澤山―伊豆國田方郡。

○尾越の矢―峯越しに飛んで來た矢。

○蟷螂が斧を以て―文選四十四に「欲㆘以㆓蟷螂之斧㆒禦㆗隆車之隧㆖」蟷螂はかまきり蟲、隆車は勢ひよく走る車。

○大藤内―吉備津宮の神主。往藤内、工藤内とも書く。

○夜前－前夜、昨夜。

○いとうしや－いとしや（氣の毒なことだ）の延音。

○南無三寶－甚しく驚いた時の詞。

からは。指もさゝすることはござらぬといふたれば。某をも頼もしい者ぢやとあつて。お側を離されなんだ。さりながら祐經殿にも餘程心にかゝつたと見えて。この程は夜な〳〵寢間を替へられた。夜前（やぜん）も大酒で謠ひさゞめき。前後も知らず伏したれば。何者が手引をしたか。かの兄弟が忍び入つたと思し召せ。まづ兄弟の者が松明（たいまつ）を振り立てて。祐經殿の寢間へ忍び入り。あゆみの板をどぶ〳〵と踏み鳴らし。いかに祐經起き上れ〳〵といひたれば。さすが祐經殿ぢや。心得たといつて立ち上らんとし給ふ處を。兄祐成がはつたりと斬りつけると。弟の時致がはつたり〳〵と斬りつけて。いとうしや昨日までも今日までも。工藤左衛門祐經といはれた人が。どこが頭やら足やら手も足もなきものになられた

アド「これはいかな事

オモ「某も日頃頼まれたはこゝぢやと思うて。枕刀をおつ取つて（と尺八を振上ぐ）

アド「申しそれは何でござる

オモ（尺八に氣づき）「誠に宵に吹いた尺八ぢや

アド「刀と尺八と取り違ふといふ事があるものでござるか

オモ「それを知る程ならばこのやうに取り亂しはせぬ。さりながら某はよい言葉を番（つが）うて逃げたわ。今夜の夜討は曾我兄弟ぢや。後日にあらかひ給ふな。その證據には大藤内これにあるといひたれば。憎い奴ぢやといつて追つ驅ける程に。やう〳〵これまで逃げ延びたわ

アド「それはようこそいはせられた

オモ「さて某も隨分足早に逃げたれども。背中がひいやり〳〵として氣味が悪い。若し斬れてはないか見てくれさしめ

アド「心得ました。（背中を見て）南無三寶

○聊爾に―かりそめに、うつかりと。

○あまの命を拾うた―「あま」は尼か。或は海士で、漁師の溺死を救つたといふ意か。狂言詞に時々用ゐられてゐる。

オモ「何とした
アド「したゝか斬られた
オモ「あゝ悲しや〳〵（と驚き倒る）
アド「これはいかな事。斬れてはない僞りでござる
オモ「なに斬れてはない
アド「なか〳〵
オモ「それは誠か
アド「眞實でござる
オモ「斬れもので斬つたは痛うないといふ。聊爾に立つて胴が二つにならねばよいが（と立ちてまはり）立つ事は立つたわ。眞實斬れてはないか
アド「なか〳〵

大藤内歩いて見る。

アド「これはいかな事。あの形は何とした事ぢや。さても〳〵臆病な人ではあるぞ
オモ「こゝな者は斬れてもないものを斬れたといふ事があるものか
アド「またわが身の斬れた斬れぬを知らぬ者があるものか
オモ「それを知るほどならば取り亂しはせぬといふに。さりながら某はあまの命を拾うたによつて。壽命は長からう。五百八十年七廻りまでも
アド（幕の方を見て）「やあ〳〵それは誠か眞實か。さて〳〵それは苦々しい事ぢや。急いで戻らう
オモ「これ〳〵そなたは何事をいふぞ
アド「これをいうたならば肝を潰させらるゝでござらう。某は行かねばならぬ

○平に―是非とも。

【五】

○打つ白波の―曾我兄弟を討たうとする軍兵の騒ぎの形容。

○先途―勝敗の決する大切な時。せとぎは。

オモ「平にいうて聞かせてくれさしめ

アド「最前の兄弟の者がそなたを討ち漏らいたが口惜しいとあつて。この所へ斬つて來るといふわ。某は戻らねばならぬ〳〵

オモ「それならば某も連れて行つてくれさしめ

アド「連れて行く事はならぬ〳〵

オモ「あゝ悲しや〳〵腰が立たぬ。連れて行つてくれい〳〵。斬らるゝわ〳〵

アド大藤内を突倒して幕に入る。大藤内後より轉りながら入る。

【五】

一聲の囃子にて、後ヅレ古屋五郎、白鉢卷・着附厚板・側次。白大口・腰帯の裝束、後ヅレ御所五郎丸、白鉢卷・着附厚板。白大口・腰帯の裝束、後ヅレ(立衆)軍兵二人、五郎丸と同樣の裝束にて(内一人繩を懷中し)、四人とも太刀を持ちて橋懸へ出で、

後ヅレ(四人)一聲「寄せかけて。打つ白波の音高く。鬨を作つて。騒ぎけり

と謠ひながら舞臺に入り、脇座より地謠座へかけて立ち並ぶ。

早笛にて、後ジテ曾我五郎、前と同樣の裝束にて太刀を拔き松明を振りながら橋懸へ出で、一の松邊にて舞臺を見込み、

五郎「あら夥しの軍兵やな。我等兄弟討たんと見えて。多くの勢は騒ぎあひて。ここを先途と見え

【五】

第二段

曾我兄弟は既に敵討の本望を達した。後ヅレ古屋五郎、同御所五郎丸、同軍兵多勢、兄弟を捕へようとして登場。

軍兵「白波が高い音を立てて岸に打ち寄せるやうに、われ〳〵は鬨の聲を作つて騒いでゐるのだ。

後ジテ曾我五郎、敵を討ち留め、既に多勢の軍兵を斬りまくつて登場。

五郎「おゝ何といふ多勢の軍兵たちう。自分達兄弟を討たうと思つて、多勢のものが騒ぎあつて、必死になつてゐることだて

たるぞや。十郎殿十郎殿。何とてお返事はなきぞ十郎殿（と幕へ向き）。宵に新田の四郎と戰ひ給ひしが（と正面へ向き）。さてははや討たれ給ひたるよな（と面を伏せ）。口惜しや。死なば骸を一所とこそ思ひしに。『物思ふ春の花盛り。散り散りになつてここかしこに。骸をさらさん無念やな（と松明を捨てて拍子を踏む）

【六】

地上歌『味方の勢はこれを見て。味方の勢はこれを見て。打物の。鍔もとくつろげ時致を目がけてかかりけり（とツレ一同太刀を抜きて五郎へ向く）

五郎『あら物々しやおのれ等よ（と拍子を踏み）

地『あら物々しやおのれ等よ（舞臺へ入り）。前に手竝は。知るらんものをと太刀取り直し。立つたる氣色譽めぬ人こそなかりけれ（と眞中に立つ）。かかりける處に。かかりける處に。御内方の古屋五郎。

……十郎殿、十郎殿（と兄を探して）、とうしてお返事がないのです。十郎殿、宵に新田四郎とお戰ひになつたが、今お返事のないところを見ると、お討たれになつたのだな。あゝ口惜しいことだ。死ぬ時には死骸を一つ所にしてと思つてゐたのに、かれこれしてゐるうちに、散る花のやうに散り散りになつて、あちらこちらと違つた所で骸を曝すこととなつたのか。ああ残念なことだ」

【六】将軍側の軍勢はこれを見て、刀の鍔もとをくつろげ、時致を目がけて斬つてかゝつた。

五郎「なにを貴様達が大層らしい。おれの腕前は先程見たであらうが」

と、太刀を取り直して、つつ立つた勇ましい姿、誰一人譽めないものはなかつた。

かうしてゐる處へ、將軍の近臣古屋五郎が剛勇な樊噲の怒つた時のやうな恐ろしい勢ひで、智謀の秀れた張良のや

○新田の四郎―忠常。伊豆の人、曾我兄弟と親族で、曾我物語に「一河のしるしに同じくは、忠常が手にかけて、後日に勸賞に行はれ給はば、御邊の奉公と思ひ給へ」といつて戰ひ「親しき者の手にかゝらんは本意ぞかし」といつて討たれたとある。

○物思ふ春の花盛り―散り散りの序。

【六】

○打物―打ち鍛へた武器。刀・長刀など。

○鍔もと―刀の身の鍔をつけた邊をいふ。

○物々し―大層らしい。

○手竝―手ぎは。腕まへ。

○御内方―頼朝の近臣。

○古屋五郎―この名、曾我物語には見えない。

○張良―漢の高祖の臣。樊噲が剛勇であつたのに對しこの人は智謀に勝れてゐた〔張良〕參照。

○鎬を削り―鎬は刀の刃と背との間にある高い所。それを削り合ふほど烈しく斬り合ふこと。

○御所の五郎丸―曾我物語に「五郎丸とて御寮に召仕はるゝ童あり、之は京の者なりしが、叡山に住して十六の年師匠の敵を討ち、在京叶はで東國に下り……この君に參りたりしが、究竟の荒馬乘の剛の者、七十五人が力を持ちけり」とある。御所は賴朝の館をいふ。御殿附の五郎丸といふ意。

○御前―賴朝の御前。

○鎧の袖を解き―鎧の袖も腰まわりの草摺も取り捨てて鎧の胴だけを着て。

○薄衣引き被き―鎧の上に薄衣を着て、女と見せかけ。

○唐戸　堅横の棧に入子板を張つた二枚の開き戸。

○運槻弓の―運の盡きを槻弓にいひかけた。

樊噲が。怒りをなし張良が祕術を盡しつつ。五郎が面に、斬つてかかる（と五郎と古屋切組む）。時致も。古屋五郎が拔いたる太刀の。鎬を削り。暫しが程は戰ひしが。何とか斬りけん古屋五郎は二つになつてぞ見えたりける（古屋斬られて切戸より入る）。

かかりける處に。かかりける處に。御所の五郎丸御前に入れたてかなはじものをと肌には鎧の。袖を解き。草摺輕げに。ざつくと投げかけ上には薄衣引き被き。唐戸の脇にぞ待ちかけたる

五郎丸「御前に入れたて」と正面先にて辭儀し、脇座にて白錬薄衣を被ぎて立つ。

〔カケリ〕

五郎、敵を索むる仕科をし、

五郎「今は時致も運槻弓の

地「今は時致も運槻弓の（五郎丸五郎の後へ廻りて）力も落ちて。眞の女ぞと油斷して通るを。やり過し

うに色々と祕術を盡して、五郎に向つて斬つてかゝつた。時致も、古屋五郎の拔いた太刀と、太刀の鎬が削れるばかりに奮鬪したが、暫くしてゐる間に、五郎がどうして斬りつけたものか、古屋五郎は眞二つに斬り割られてしまつた。

かうしてゐる處へ、また御所の五郎丸が將軍の御前へ入れてはならないと、肌に着けてゐた鎧の、袖を解き草摺をざつくと投げ捨て、輕々と鎧の胴ばかりを着て、その上に女の薄衣をかぶつて、唐戸の脇に立つて、五郎を待ち伏せてゐた。

〔カケリ〕に、五郎軍兵を斬りまくつて、將軍の許へ闖入しようとする樣を示したが、

今は時致も運の盡きた悲しさには、戰ひに疲れて力も弱り、五郎丸が薄衣をかぶつてゐるのを、ほんとの女だと油斷して、通り過ぎようとすると、五郎

（押し竝べ―五郎丸の身を五郎の身に竝べて）

○わだがみ―鎧の胴の名所。押付の板から續いて、前の胸板を釣る、左右の兩肩に當る所。

○千筋の繩―幾筋もの繩。

○かけまくも―繩をかけるを言葉にかける意のかけまくもにいひかけた。

○めでたけれ―將軍の御前を汚したものであるから、その捕はれたのを「めでたし」といつたのである。下懸では「ゆゝしけれ」と謠ふ。

押し竝べむんずと組めば（と五郎丸目附柱近くにて薄衣を脱ぎ五郎を後より捉ふ）

五郎「おのれは何者ぞ

五郎丸「御所の五郎丸

地「あら物々しとわだがみ摑んで。えいやえいやと組みころんで。時致上になりける處を。下よりえいやと又押し返し。その時大勢おり重なつて。千筋の繩を。かけまくも。忝くも。君の御前に。追つ立て行くこそ。めでたけれ

（千筋の繩を―と立衆二人五郎に繩をかけ幕へ追り込み、五郎丸常座にて留拍子を踏む。）

丸はこれをやり過してから、五郎に押し竝んで、ぐつと組みついたので、

五郎「貴樣は何者だ」

五郎丸「御所の五郎丸だ」

五郎「何を大層らしい」と、五郎が五郎丸の兜のわだがみを摑んで、えいやえいやと組みころがつて、五郎が上になつたのを、五郎丸がまた下からえいやと押し返した。その時多勢のものが重なりあつて、五郎に幾筋もの繩をかけ、忝くも將軍の御前に追つ立て行つたのは、めでたいことである。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】四人上歌「名殘を殘す……吹き散る花（寶下懸風）の名殘（寶下懸行方）ぞと……」【六】地「あら物々し……追つ立て行くこそめでた（下懸ゆゝし）けれ」

この外。たゞ詞の異同は少くないが、大意には變りない。

古諸本（元祿八年本）

【一】十郎「これは曾我の……我等兄弟（元ナシ）人竝に……　【二】五郎「あら御情なや（元候）……　十郎「尤もにて候さらば……此方へ參れと御申し（元召）候へ　【三】五郎　いかに團三郎鬼王こなた（元御前）へ參り候へ……　五郎「畏つて候……しかと歸るまじき（元ひ）か……十郎「ああ（元ナシ）暫くこれは……　十郎「やあ兄弟の者歸すまじきぞ歸すまじきぞ（元ナシ）　【四】地クリ「それ人の形見を……永き世までの例かや（元なり）　【六】地「あら物々しやおのれ等よ（元ナシ）前に手竝は……

吉野靜(よしのしづか)　觀（寶春刚）

解說

【能柄】　三番目　一段劇能

【人物】　**ワキ**　佐藤忠信、**狂言**　衆徒（二人）、**シテ**　靜御前

【所】　大和國　吉野山

【時】　鎌倉初期　（三月）

【異稱】　〔芳野靜〕又は〔芳野閑〕とも書く。

【作者】　能本作者註文に世阿彌の作、二百十番謠目錄に觀阿彌の作とす。花傳書に觀阿彌が得意に演じたといつてゐる〔靜の舞の能〕、能作書に女體の例として擧げ、世子六十以後申樂談儀に井阿彌の作としてゐる〔靜〕は本曲のことであらうか。

【梗概】　源義經が吉野山を落ちた時、佐藤忠信は靜御前と諜を廻らして、まづ忠信は都道者を裝うて衆徒集會の席へ立ち入り、賴朝義經の不和は解けるらしいので、これまで義經を苦しめてゐた都の人々は先非を悔いてゐる」といつて衆徒を欺き、やがてまた靜御前が出て來て、法樂の舞を舞ひ、義經の忠節を說いて、賴朝の心も解けるであ

らうといつたので、衆徒は或は靜の舞に見惚れ或は義經の武勇に恐れて、終に一人も追討に出ないで、時刻を過してしまつた。

【出典】靜御前が吉野山で舞を舞つたことは、義經記卷五「靜吉野山に捨てらるゝ事」に出てゐるが、それは多くの道者に紛れて藏王權現に參つた時、寺の僧に勸められて舞ふのであつて、しかもその結果靜御前であることが知れて都に護送されるのである。忠信が義經を山から無事に落す爲に、後に留まつて防矢を射たことは、「忠信」の解說に擧げたやうに、義經記に記されてゐるが、こゝで靜と出會つてはゐない。本曲は作者の新しく構想した所が多い。

【概評】觀世・寶生・金剛の三流では、本文に揭げたやうに、一段劇能となつてゐて、「さても靜は忠信がその契約を違へじ」といふのは、いつどういふ約束をしたのか明らかでないが、金春流(喜多流で最近廢曲としたものも)では、この前に、考異に揭げたやうに、忠信と靜とが山中でめぐり合つて衆徒を欺く相談をする一段があつて、忠信との契約が明らかになつてゐるのである。恐らくもと二段劇能であつたものを、觀寶剛の三流では第一段を省略してしまつたものであらう。さてこの曲の構想を見ると、忠信と靜と二人がかりで衆徒を欺くのであるが、その方法はかなり覺束ないもので、現に義經記に據れば、靜はこゝで舞を舞つたが爲に、その素性が知れて捕はれてゐるのである。本曲では靜は初めからこの身分を明かして、忠信の都道者と共に、賴朝との不和が解けるであらうといふことによつて、衆徒をおどかしてゐるのであるが、このやうな威嚇は寧ろ兒戲に類したものである。「忠信」に正々堂々と防矢を射てゐるのに比べて、これは餘りにも弱々しい。本曲の興味はかうした脚色の上ではなく、たゞ靜の舞、衆徒をして恍惚として時を忘れしめる美しい舞にあるのであるが、さうした意味でも、「二人靜」の方がもつと面白いやうに思はれる。古作のやうではあるが、秀れた曲とも思はれない。

【一】 舞臺は大和國吉野山中、狂言衆徒二人登場、衆徒の會合を催してゐる。そこへワキ佐藤忠信一人つて來たので、衆徒の一人がこれを咎めると、

【二】 名乘笛にて、ワキ佐藤忠信、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帶・扇の裝束にて男笠を被りて名乘座に出で、笠を脫ぎて、

ワキ「これは判官殿の御內に。佐藤忠信にて候。さてもわが君判官殿は。この山を賴み御座候處に。衆徒心變り候により今夜この山を御開き候。さる間某この山に殘り防矢仕れとの御諚。弓矢取つての面目と存じ。某一人この山に留まりて候。又承り候へば。大講堂に衆會のある由申し候間。都道

(一)深しい事　大した事。

者にまぎれ。立ち越え衆徒の詮議を聞かばやと存じ候

といひて後見座にくつろぐ。

狂言衆徒二人、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帯・扇・小刀の裝束にて杖を突き、

オモ「つうわい／＼

アド「つうわい／＼

といひながら幕より出で舞臺を大廻りして、

オモ「これ／＼この衆徒達は何をして居らるゝか。殊の外遲い事ぢや

アド「その通り遲い事ぢや

オモ「このやうな時に遲いは。日頃心掛が惡しい故であらう

アド「いかにもその通りぢや

オモ「何にもせよ殊の外草臥れた。ちと休まう

アド「それがよからう

オモ「草臥れた／＼。まづ下に居よ

アド「心得た(と二人下に居り)

オモ「さて判官殿はこの山をいか程にて御開きあるか知らん

アド「某は何とも聞かぬ

オモ「某が思ふは。深しい事もあるまいによつて。恐らく討ち留めうと思ふ

アド「某とてもその通りぢや

オモ「この度判官殿を討ち留めたならば。定めて御褒美があるであらうぞ。さうあらばたれたれと身共

と申し合はせ。遊山に出うぞ

アド「何がさてそれがよからう

ワキこの間に大小前に出で、男笠を被りたるまゝ下に居る、オモこれを見て、

オモ「いやこれに何者やら出た。尋ねて見よう（二人とも立ちワキの前に出で）いかに方々。この衆會の座敷へ案内もなく。濡れ草鞋にて出られ候ぞ

ワキ「これは都道者にて候。衆會の御座敷とも存ぜず候。御免あらうずるにて候

狂言（オモ）「さては都人にて候か。判官殿の御行方をば何と申し候ぞ

ワキ「上は御一體なれば。終には御中直らせ給ふべき由申し候

狂言「さていかやうにて御落ちありたると申し候

ワキ「十二騎とこそ承つて候へ

狂言「十二騎ならば追つかけ討ち留め申さう

ワキ「暫く。十二騎と申すとも。餘の勢百騎二百騎にも向ふべし。かやうに申すは都の者。當山を信じ参る上は。いかにも御寺も宿坊も。難なくおはしませかしと。思へばかやうに申すなり。

忠信「私は都から出て來た道者なのですが、こゝが衆徒御會合のお席だとも存じなかつたのです。どうぞお免し下さい」

衆徒「すると、そなたは都の人なのか。都では判官殿の將來のことを、どのやうに取沙汰してゐるかね」

忠信「何といつても、賴朝公とは御兄弟の御間柄なのだから、結局は御仲直りを遊ばすだらうと噂してゐます」

衆徒「ところで、判官殿はこの山をどの位の人數でお逃げになつたといふ噂だね」

忠信「十二人だと伺つてゐます」

衆徒「十二人位ならば、これから追つかけて討ち取らう」

忠信「いやお待ちなされ。十二人といつても、外の人達に比べれば、百人にも二百人にも當る強い人達なのです。……私がこのやうに御忠告するわけは、都の者が遥々この吉野山を信仰して參ります以上は、どうかこのお寺にもお宿坊にも何のお障りもないやうにとお祈りして、それ

○都道者―道者は多勢連れ立つて神社佛閣に參詣する旅人。都道者はその都から出たもの。

○衆會―衆徒の集會。

◎さては都人にて―以下狂言詞、諸本に從ふ。この狂言詞、光悦本には載せない。

○判官―源義經。義經は檢非違使判官であつた。

○上は御一體―賴朝は義經と兄弟一體の中であるのをいふ。上は賴朝を指す。

○御落ち―落つは逃げのびること。

○當山―この山、吉野山の寺。

○宿坊―參詣人宿泊の爲に設けられた僧坊。

○御はからひぞ吉野山―然るべく御取計らひになるがよしを吉野山にいひかけ、よしなきの序とした。○よしなき―役にも立たない。

○つうわい〳〵―この句は謠本にない。

【三】

○靜―京の白拍子磯禪師の女。義經の妾となり、常にこれに隨從したが、大物浦で別れて吉野山に踏み迷ひ捕はれて鎌倉に送られたが後免されて京で餘生を送つた。〔船辨慶〕〔二人靜〕參照。○忠信―佐藤莊司元治の子繼信の弟。義經の忠臣で、義經吉野落の時、後に留まつて防矢を射、大衆を驚かした。後京都に上り、糟谷有秀の兵と戰つて自刄した。年廿六。〔忠信〕〔攝待〕參照。○法樂の舞―神佛に奉納する舞。○下向道―神佛を參詣しての歸路。○道せばき事―世間に顏出しの出來ない窮屈な境遇。頼朝の追討を受けてゐることをいふ。

『この上はともかくも

地上歌「御はからひぞ吉野山。御はからひぞ吉野山。よしなき申し事。洩れ聞えなば判官の。後のとがめも恐ろしや御暇申し候はん御暇申し候はん

「御暇申し候はん」とワキ・狂言、三人とも立ち、ワキは脇座に行き笠を脱ぎて下に居り、狂言は、

オモ・アド「つうわい〳〵

といひながら幕に入る。

【三】

アシラヒの囃子にて、シテ靜御前、面若女・鬘・鬘帶・靜烏帽子・襟白・着附摺箔・長絹・緋大口・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

シテ「さても靜は忠信が。その契約を違へじと。舞の裝束ひきつくろひ。忠信遲しと待ち居たり

と謡ひながら舞臺に入る。ワキ立ちてシテに向ひ、

ワキ「これは都道者にて候が。法樂の舞の由承り。下向道を忘れて候。はやはや舞を始め給ふべし

シテ『都の人と聞けばなつかしや。判官御道せば

でこのやうに申すのです。

御忠告するだけは致しましたが、この上は如何やうになさらうとも、あなた方吉野山の方々のお考へ一つです。……いや、つまらない事を申し上げて、このやうな事が人に知れたならば、後で判官殿のお咎めを受けるか知れない、恐ろしいことだ。一刻も早くお暇しませう」

といつて、衆徒と別れて出かける態。

【三】

シテ靜御前登場。

さて、靜御前は忠信との約束を違へてはならないと、舞裝束をつけて、忠信の來るのが遲いことだと、待ちかねてゐた。

忠信は靜御前を見て、

忠信「私は都の道者なのですが、こゝで法樂の舞があるといふことを伺つて、歸るのも忘れて、お待ちしてゐるのです。どうか早く舞をお始め下さい」

靜「おゝ都の方と伺へば、おなつかしう存ぜられます。判官樣には今世間狹い思ひ

○人々先非を悔い—これまで義經を迫害してゐた者がその非をさとり後悔して。
○心得給へ—仕度し給へ。
○言葉多き者は品少なし—諺。童子敎に「語多者品少、老狗如レ吠レ友」一品は品位、品格。
○なかなか—却つて。
◎怪しめて—刊行會本には「怪しみて」とある。
○それとか三吉野の—義經方の者と看破られんといふのを三吉野にいひかけ、吉野の勝手明神を「かつて」(少しもの意)にいひかけた。勝手明神は吉野七曲坂にある。「嵐山」參照。
○靜かに囃せ—靜の字を重ねた。
○衆徒も時刻や—衆徒も靜の舞に見惚れて思はず時刻を過すであらう。
○御代も靜が舞—御代も靜かに治まるといひかけた。

き事。世上の聞え如何なるぞ。都人こそ知るべけれ

ワキ「終には御中直らせ給ふべしと。聞くより人々先非を悔いて。『皆々畏れ申すなり

シテ『さては嬉しや委しくも。知らせ給ふか都人

ワキ「あまりに事延び時移りぬ。『心得給へ舞の袖

シテ「げになう言葉多き者は品少なし。かやうに我等言の葉過ぎば。なかなか人も怪しめて。もしもそれとか三吉野の。かつて知らすな

シテ一聲『靜かに囃せや。靜が舞に

地『衆徒も時刻や。移すらん

シテ『神こそ納受ましますらめ

地『げにこの御代も。靜が舞(ワキ下に居り)

〔イロヘ〕

を舞ひて大小前に立ち、

をしていらつしやるのですが、世間ではどのやうな評判を立ててゐます。都の方ならば御存じでせう。どうぞお敎へ下さい」

忠信「結局は御兄弟お仲直り遊ばすだらうといふことなので、これを聞いた人々は判官殿をお苦しめしたことを後悔して、皆畏れ入つてゐるのです」

(と靜に答へる態で衆徒をおびやかす。)

靜「おゝお嬉しい。よく委しくお知らせ下さいました」

忠信「意外な長しやべりで、時刻が過ぎました。さあ舞の仕度をして下さい」

靜「いかにも、世の格言にも『言葉數の多いものは氣品が少い』と申します。このやうに、私達が餘りにしやべり過ぎては、却つて人も怪しんで、或は判官樣の一味ではないかと見てとるかも知れません。氣どられてはなりませんぞ。

(と忠信に注意をし、)

さあ、靜かに舞の囃子をして下さい。靜かに長々と舞つて居れば、衆徒もこの舞に見とれて、思はず時刻を過してしまひませうから」

靜「御代も靜かになるやうにとの祈りをこめて、この靜が舞を舞へば、神樣もきつと願ひをお聞き入れ下さることでせう」(といつて)

〔イロヘ〕

を舞ふ。

【三】

シテサシ「然るにかの判官は。神道を重んじ朝家を敬ひ

地「偏に忠勤を抽んでて。私の心更になし

シテ「人は讒し申すとも

地「神は正直の頭に宿り給ふなれば。靜が舞の袖に。暫くうつりおはしまし。わが君を守り給へと（シテ下に居て合掌）。祈るぞあはれなりける

シテ立ち次の謠に合せて舞ふ―舞クセ

地クセ「抑も景時が。その讒言の水上を。思へば渡邊や。流るる水に滿潮の。逆艪立てんと浮舟の。梶原が申し事。よも順義にて候はじ。されば義經は。すぐに修めし三吉野の。神の誓ひの眞あらば。賴朝も聞し召し。直され義經。執節の勅を受け。洛陽の西南はこれ分國となるべし。さあらば當山の。衆徒悉く參洛し。歸依渇仰の御袖に。

【三】○神は正直の頭に宿り―諺。義經記卷六、靜の法樂舞の條に―神は正直の頭に宿り給ふなれば、かくて空しからん事も恐れあり、舞までなくとも、法樂の事は苦しかるまじ―

○わが君―義經。

○景時―梶原平三。賴朝の權臣。その子景季のこと、〔箙〕に作る。

○水上―起原、原因。

○渡邊―攝津國、今の大阪市天滿橋の邊といふ。義經が八島へ赴く時船出した所

○流るる水に滿潮の―海に注ぐ川水に潮が滿ち寄せてくると、水が逆流するので、逆艪の序とした。

○逆艪―船を逆行せしめ得るやう、艪を艫と舳とに向合せに立てること。渡邊を船出しようとした時、梶原が烈風を避ける爲に逆艪を立てようといつたのを、義經が斥けて、景時等を後に殘して八島に渡つたことをいふ。平家物語卷十一に詳しく見ゆ。

○浮舟の―梶にいひかけて梶原の枕詞とした。

○順義―義理に適つたことと逆艪に對して順の字を用ゐた。

【三】靜「かの判官樣は神を崇め朝廷を敬ひ、ひたすら忠勤を勵んで、少しも私心私慾のない人でございます。だから、たとへ、惡人が讒言を致しましても、神樣は正直の者をお守り下さるのでございますから、きつとこの私心のない判官樣をお守り下さることと存じます、どうか神樣、今私の舞ひまするこの舞袖にのり移つて、わが君判官樣をお守り下さいませ」と、舞ひながらも、判官の安穩を祈る靜の心根はあはれである。（靜は更に舞ひつゞけて）

靜「一體、景時が判官樣を讒言した動機を申せば、かの大阪の渡邊から八島へ船出を遊ばす時、梶原が臆病にも『烈風だから、逆艪を立てて進まう』と申しましたのを、判官樣がお斥けになつたことから起つたのですが、まさかこのやうな逆恨みをして讒言致すものを正義とは申せますまい。これに反して、判官樣は身を正直にお修めになつたのですから、正直な者をお守りになるといふ神樣の御誓約が眞實であるならば、神樣の御加護によつて、賴朝公もお考へ直しになり、地方鎭撫の勅命をも拜して、賴朝公が關東をお治めになるのに對し、判官樣は天下を分けて、都より西南の諸國をお治めになることとなりませう。さうすれば、この吉野は當然判官樣の御領地ですから、山の衆徒達も皆京都に上つて判官樣の御機嫌を伺ひ、判官樣から吉野山を歸依し信仰

○すぐに修めし―正直に修めた身を三吉野にいひかけた。
○神の誓ひ―正直を守り給ふといふ神の誓約。
○執節―持節。地方を鎭めるべき任命。光悦本には「しつてき」とある。
○分國―賴朝と國を分けて領すること。
○參洛―都に參ること。義經へ伺候する意。
○歸依渇仰―神佛を信心すること。
○御科は候はじ―賴朝からの咎めはあるまい。
○片岡增尾鷲尾―討ち留め難しを片岡にいひかけた。片岡は八郎弘常、增尾は十郎權頭兼房、鷲尾は三郎經春。いづれも義經の忠臣。
【四】
○賤や賤の苧環繰り返し昔を今になすよしもがな―義經記卷六「靜若宮八幡へ參詣の事」に靜の謠つた和歌、伊勢物語の歌、初句「古の」とあるのをかへて用みたのである。この歌は實は鎌倉で謠つたのであつて、義經記に據れば、吉野では「ありのすさみのにくきだに」といふ今樣を謠つたの

恚みをいだき給ふべしあなかしこ。不忠なし給ふな御科は候はじ
シテ二「但し衆徒中に。なほ憤り深うして
地「進みて追つかけ給ふとも。その名聞ゆる人々を。討ち留め申さんは。片岡增尾鷲尾さて。忠信は雙びなき。精兵ぞよ人々に。防ぎ矢射られ給ふなと。語ればげには衆徒中に。進む人こそなかりけれ

とクセを舞ひ上げて常座に立ち、

【四】
シテ『賤や賤

〔序舞〕（又は中舞）

を舞ひ、引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ「賤や賤。賤の苧環。繰り返し
地「昔を今に。なすよしもがな。餘りに舞の。面白さに。時刻を移して進まぬもありけり。又は判官の武勇に恐れてよし義經をば。落し申せと、詮

遊ばす印として、澤山の御寄進をお受けなさることでせう。あゝ恐れ多いことです。輕率な考へから、判官樣に不忠の振舞をなさつてはいけませんよ。今判官樣をお討ちにならなくても、賴朝公のお咎めはございますまい。
或は衆徒の中には、判官樣をなほ深く恨む人があつて、進んで判官樣を追つかけ討たうとする人もあるかも知れませんが、あの武名の高い人達を討ち留めることは容易ではありませんぞ。例へば、片岡、增尾、鷲尾、或は佐藤忠信などといづれも勝れた武士ですぞ。さうした人達に防矢を射られて、わが身をお誤りになつてはいけませんぞ」
と舞ひながらも、から語り聞かせたので、衆徒の中から誰一人進んで判官を追はうと進み出るものはなかつた。

【四】
靜『しづやしづ賤のをだまき繰り返し、昔を今になすよしもがな』
（賤しい女の卷く環の苧絲を繰るやうに、今の世を昔のやうに繰り返して見たい物、あればよいが）と和歌を謠ひ、
〔序舞〕
を舞ふ。
かうした、靜の舞が餘りに面白いために、思はず舞に見惚れて時刻を過し、討手に進まないものもあり、又判官の武勇に恐れをなして「義經を逃がした方がよい」と相談する衆徒もあり、（結

議を加ふる衆徒もありけり。さるほどに。時移つて。主君も今は忠信が。はかりことにて難なく遂かに。落し申しつ。心靜かに願成就して都へとてこそ。歸りけれ

と舞ひ納めて常座にて袖をかへし留拍子を踏む。

局誰一人判官の討手に向ふものはなかつた）そのうちに、時刻は過ぎて行つて、主君判官は忠信の計略によつて、無事に遠くまで逃げのびることが出來たので、靜も願望の成就したことを喜び、安心して都へ歸つて行つた。

である。
○よし義經を―「よし」の音を重ねた。
○心靜かに―靜の名を含ませた。

〔考異〕

諸流（觀寶春剛）

金春流には本文の前に左の一段を加ふ。

（ワキ次第）定めなき世のなかなかに。定めなき世のなかなかに憂き事や頼みなるらん。サシげにやたとへても憂きは變らぬ習ひとて。その古は淨見原の、天子の御身なりしかども、大友の王子に襲はれて、吉野の宮を出で給ひ、山野に迷ひ給ふとかや。痛はしや判官も、世の讒言の晴れやらで、雲も奥ある吉野山隱れ家ながら置きかぬる。御身のほどこそ悲しけれ、さるにてもわが君は、いづくの國如何なる所にかおはすらんと、覺束なくもそなたの空を。上歌三吉野の霞のうちの花の瀧。霞のうちの花の瀧、落ち行く方は白雲の、誰に吉野の奥やらんわが身の爲は恨めしや、隔てしものを君とわが。心一つの二道を誓しはたどる迷ひかな誓しはたどる迷ひかな。ワキや。これに渡り候は靜御前にて御入り候か。シテさて忠信は何とこの山には留まり給ふぞ。ワキさん候わが君この山を御開き候に。防ぎ矢射よとの御諚、弓取つての面目と存じ、一人この山に留まりて候、さて靜は何となり給ふべき。シテ「返す返す御痛はしうこそ候へ。シテ「さればこそもろこしの、吉野の山にこもるとも、後れじとこそ思ひしに、女の身とてはかなくも、捨て殘さるる三吉野の、山野に迷ひ里に忍びて、今までかうて侍らふ。ワキあら夥しの螺鐘の音や候、聞し召され候へ、大講堂に當つて夥しう螺鐘の音の聞え候、立ち越え聞いて參り候べし。いかにあれなる道行き人。大講堂に當つて夥しう螺鐘の音の候は何事にて候ぞ。シカジカ何わが君をおつかけ申すべきとの集會の螺鐘と申すか、いかに申し候、人に尋ねて候へば、わが君をおつかけ申すべきとの集會の螺鐘と申し候。シテあら悲し

やさて何と候べき。ワキ「きつと物を案じ出だしたる事の候。某は都道者の眞似をして。集會の座敷へ出で候べし。定めて都の事を尋ね候はんずる時。わが君御兄弟の御中直りある由申し候べし。その隙に靜は舞の裝束を持たせられ候いて。勝手の御前にて法樂の舞を御舞ひ候はば。定めて貴賤群集なすべし。さやうに時刻を移し。わが君を御心靜かに落し申さばやと存じ候。シテ「もしその中に忠信を見知りたらん者あらば。御身は何となり給ふべき。ワキ「いや忠信一人討たん事も拔群の時刻にて候べし。ただ靜は勝手の御前に御參り候へ。シテ「さらば末めでたうやがて御見參に入り候べし。ワキ「かやうに心はめぐれども。身はただ獨り忠信が。思ひめぐらす謀の。末顯ればいかにせん。シテ「思へば涙もろこしの。よし遁れつつ君をだに。ワキ「落し申さば。シテ「それまでと。地上歌「思ひきりつつ忠信は。思ひきりつつ忠信は。衆徒の僉議に參らんと。大講堂に出でければ。シテ「靜はそのまま。地「勝手の御前に參りけり勝手の御前に參りけり」

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「これは都道者……御免あらうずるにて候（光さて衆會はなにのためにて候ぞ。光狂言詞ナシ）……ワキ「十二時とこそ承つ（光り）て候へ。ワキ「暫く（光候）……思へばかやうに（光しらせ）申すなり……地上歌「御はからひぞ……吉野山（光よしの山／＼）　【二】ワキ「これは都道者……法樂（光しつか御前の勝手のこせむにて。しんからして）の舞の由承り……はやはや舞を始め舞ふべし（光今少まひを御はやめ候へ）……ワキ「終には御中直らせ給ふべし（光上は御一體）と聞くより人々（光都は）……地「神こそ（光もや）納受ましますらめ（光ん）　【三】地「偏に（光頗）忠勤を抽んでて私の心（光かへりみ）更になし人は（光ナシ）……わが君（光義經）を守り給へと……地クセ「抑も景時……執節（光しつてき）の勅を受け……　【四】地「昔を今に……餘りに（光大方）舞の面白さに……忠信が（光かしこきはかりことにて（光ナシ）難なく遙かに（光君を）落しつ……

吉野天人　観

解説

【能柄】　三番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　都の者、**ワキツレ**　都の者(二人)、**前シテ**　女(天人)、**狂言**　里人(吉野山神)、**後シテ**　天人

【所】　大和國　吉野山

【時】　春(三月)

【作者】　能本作者註文には觀世小次郎、二百十番謠目錄には日吉安淸の作とす。演能の古記錄は見當らない。

【梗概】　都の人々が吉野山の花見に出かけて、山深く分け入ると、美しい女性が一人出て來て、言葉をかけ、都人と共に同じ木蔭で花を賞し、日が暮れかけても、なほ歸らうともしないので、都人がこれを怪しむと、女は「自分は眞は天人である。信心せられるならば、今宵、昔天子の叡覽に入れ奉つた五節の舞を見せよう」といつて消え失せる。やがて夜になると、虛空に音樂が聞え、花が降り下つて、天人が現れ出て、舞を舞つて、春を賞し御代をたゝへた後、花の雲に乘つて

消え失せる。

【出典】典據といふべきほどのものもない。

【概評】花やかな美しい春の曲である。しかしたゞそれだけで、同じく春の曲である〔嵐山〕のやうな剛健な趣を持つてゐないし、また〔佐保山〕のやうな優雅な内容も持つてゐない。極めてあつさりした輕い曲である。ワキが、〔嵐山〕は勅使、〔佐保山〕は藤原俊家であるのに對し、この曲は市井の都人であることによつても、その輕重が察せられる。從つて演能上の取扱も、前二曲が脇能であるのに對し、これは三番目を本格とし、脇能を略式としてゐるのである。その文章も、初同は〔右近〕の文を殆どそのまゝ採り、後段は〔羽衣〕に據つて居り、五節の舞も〔國栖〕に暗示せられてゐるやうである。構想も行文も莊重なものでないが、しかし全體を極めて輕やかに取扱つたところに、春の曲にふさはしい祝言が味はれるのである。

【一】

後見、丸輪に櫻の立木を立てたる作物を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ都の者、着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束、ワキヅレ都の者二人、着附無地熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ次第「花の雲路をしるべにて。花の雲路をしるべにて。吉野の奧を尋ねん

地取にワキは正面に向き、

ワキ「これは都方に住居する者にて候。さてもわれ春になり候へば。ここかしこの花を一見仕り候。中にも千本の櫻を年々に眺め候。この千本

【一】　前段

舞臺は初め京都で、ワキ都の男、ワキヅレ同じく都の男二人と連れ立つて登場。

次第を謠つて、旅の目的を述べ、

男「櫻の花が咲き亂れて雲のやうに見える所を目當にして、吉野の山奧へ花見に行かう」

男「私は都に住んでゐる者です。さて、私は春になると、あちらこちら、花見に出歩くのですが、殊に嵐山の千本の櫻は毎年缺かさず見に行くのです。ところで、この千本の櫻は吉野の櫻の種を移し植ゑ

【一】

○花の雲路を—古今集序に「吉野山の櫻は人麻呂が心には雲かとのみなん覺えける」

○吉野—大和國吉野郡吉野山。

○都方—都。都の郊外といふ意ではない。

○千本の櫻—京都の西嵐山の櫻。嵐山の櫻が吉野の一目千本の櫻を移植したものであるといふこと、〔嵐山〕に作らる。

○和州―大和國。
○花心―花を思ふ心、花に浮き立つ心。
○深綠―色香に染まることが深いといひかけた。
○絲捻りかけて―古今集僧正遍昭の歌「淺綠絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か」に據つた。
○花色―花の色。
○氣色立つ―際立つて美しく見える。

○尾上―こゝでは嶺に對して麓をいふ。

【三】

の櫻は、「吉野の種取りし花と承り及び候間。若き人々をも伴ひ。この度は和州に下向仕り候

といひて、ワキ・ワキヅレ向合ひ、

ワキ・ワキヅレ道行「この春は。殊に櫻の花心。殊に櫻の花心。色香に染むや深綠。絲捻りかけて青柳の露も亂るる春雨の。夜降りけるか花色の朝じめりして氣色立つ。吉野の山に着きにけり吉野の山に着きにけり

ワキ「夜降りけるか花色の」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて吉野に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや吉野の山に着きて候。御覽候へ嶺も尾上も花にて候。なほなほ奥深く分け入らばやと思ひ候

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座の方へ行きかゝる。

【三】

シテ女、面增・鬘・鬘帶・襟白・箔附摺箔・唐織着流・扇の裝束にて幕より出でながら、

たものだと聞きましたので、若い人達を連れて、今度はその大和の方へ出掛けるのです」

と見物人に自己紹介をし、

男「今年の春は、櫻の花が殊に色も香も勝れてゐて、わけても、あの絲を捻つたやうだといはれてゐる青柳の枝に露の玉を降り置く春雨が、昨夜降つた爲か、花の色が朝露にしめつて、際立つて美しく見える、この吉野山に着いた」

と花を眺めながら旅をしてゐるうちに吉野に着いた態で、舞臺は大和國吉野山となる。

男「道を急いだので、思ひの外早く吉野の山に着きました。（連の男に）御覽なさい、山の頂も麓の方も一面の花です。もつと奥深く登つて行きませう」

と連れ立つて山上へ登つて行く態。

【三】

こゝではシテ天人が里女の姿をして登場。

○やごとなき―やんごとなき、貴い。

○さながら―すべて、終日。

○花の友人は他生の縁―平家物語巻三「少将都がへりの事」に「花の下の半日の客、月の前の一夜の友、旅人が一村雨の過ぎ行くに、一樹の蔭に立ち寄りて、別るゝ名殘も惜しきぞかし」とあるに據つた。

○見もせぬ人や―以下「いざいざ馴れて眺めん」まで〔右近〕の上歌と殆ど同文。〔右近〕の文を借りたのであらう。

シテ〔呼掛〕ならうならうあれなる人々は何事を仰せ候ぞ

ワキ脇座に立ちて、（ワキヅレはその次に下に居る）

ワキ「さん候これは都の者にて候が。この三吉野の花を承り及び。始めてこの山に分け入りて候。又見申せばやごとなき御姿なるが。この山中に入らせ給ふは。如何なる人にて渡り候ぞ

シテ これはこのあたりに住む者なるが。春立つ山に日を送り。さながら花を友として。山野に暮らすばかりなり　と常座に立つ。

ワキ「げにげに花の友人は。他生の縁といひながら。我等も同じその心

シテ『所も山路の

ワキ『友なれや

地上歌「見もせぬ人や花の友。見もせぬ人や花の

女「もうしもし、そこへいらつしやる方々は何をいつていらつしやるのです」

男「はい、私共は都の者ですが、この吉野の花のことを聞いて、今度始めてこの山に登つて來たのです。ところで、お見受けすると、あなたは貴いお姿の方ですが、そのやうな貴い方でありながら、このやうな山中へお出でになるのは、一體どういふ方でいらつしやるのです」

女「私はこの邊に住んでゐるものでございますが、春の山に日を過し、一日中花を自分の友のやうにして、野山で暮らしてゐるだけの者でございます」

男「なる程、花見友達は前世からの宿縁だと申しますが、私達もあなたと同じ心持の者で……」

女「さういふ方と、所も同じこの山でお目にかゝるのは……」

男「いや全くよいお友だちです」

女「これまでお會ひしたこともない方と

○相宿り―同宿。同じ花の蔭に居ることをいふ。
○花の下に―和漢朗詠集白樂天の詩句「花下忘レ歸因ニ美景一、樽前勸レ醉是春風」を引いた。

【三】

○五節の舞―昔毎年十一月中丑の日常寧殿で五人の舞姫に舞はせしめ給うた舞。後には御即位後の大嘗會にのみ行はせられることとなつた。この舞は吉野山に天女が天降つて天武天皇を慰め奉つた舞に始まるといふので、こゝに出した。〔國栖〕の解説參照。
○小忌の衣―神嘗會新嘗會などの神事に祭官舞人の着る上衣。
○羽袖―天人の羽衣の袖。

友、知るも知らぬも花の蔭に。相宿りして諸人の（と正面に出でつ）いつしか馴れて花衣の。袖觸れて木のもとに。立ち寄りいざや眺めん（と開き）、げにや花のもとに（角へ行き）。歸らんことを忘るるは（左へ廻り）。美景によりて花心。馴れ馴れ初めて眺めんいざいざ馴れて眺めん（と常座に立つ）

ワキは地上歌の初めに下に居り、

【三】

ワキ　いかに申すべき事の候。かやうに家路を忘れ花を眺め給ふこと。いよいよ不審にこそ候へ

シテ　げに御不審は御理。今は何をか包むべき、眞はわれは天人なるが、花に引かれて來りたり。今宵はここに旅居して。信心を致し給ふならば。その古の五節の舞。小忌の衣の羽袖を返し。月の夜遊を見せ申さん。暫くここに待ち給へと（ワキへ詰め）

お花見友達となり、知つてゐる方も知らない人も、みんな一緒に同じ花の木蔭に休んで、いつの間にかみんな仲よく馴れ親しんで、さあ御一緒に木蔭に立ち寄つて、花を眺めませう」

ほんとに『花見に行つて家に歸ることを忘れるのは、その景色が餘りに美しいからだ』といふ詩がありますやうに、皆様とお近しく願つて、時を忘れて花見を致しませう」

ご一緒に花を眺めて時の移るのも氣がつかない態。

【三】

男「お伺ひしたいのですが、と申すのは、このやうに家へ歸ることをも忘れて、花を眺めていらつしやる事が、愈〻不審に思はれてならないのです」

女「いかにも御不審は御尤もです。今は何を隱しませう、私はほんとに天人なのですが、花の面白さに心を引かれて、こゝへ來たのです。今晩はこゝに滯在して、よく御信心なさつたならば、あの昔の五節の舞、――小忌衣の袖を飜す月夜の遊樂をお見せしませう。暫くこゝにお待ちなさい。――

○迦陵頻伽　梵語Kalaviṅka妙音鳥と譯す。雪山（又は極樂）に棲む美聲の鳥。

◎本曲を三番目物として演ずる時は、前ジテ中入に來序なく、脇能として演ずる時は來序にて中入。

【間】

◎間狂言は三番目には里人（長上下の裝束）であるが、本書の底本には脇能の「山の神」の詞を記してゐるので、これに從つた。

地上歌「夕映匂ふ花の蔭。夕映匂ふ花の蔭。月の夜遊を待ち給へ。少女の姿現して。必ずここに來らんと。迦陵頻伽の聲ばかり雲に殘りて、失せにけり雲に殘りて失せにけり

と右へ廻りて常座にて開き、（來序の囃子にて）中入。

この夕日に照り映えた花の木蔭で、月夜の遊樂の始まるのをお待ちなさい。天女の姿を現して、きつとこゝへ來ませうから

――と、迦陵頻伽のやうな妙音でいふ聲だけは雲の中ながら聞えて、姿は見えなくなつてしまつた。

【間】　末社來序の囃子にて、狂言山の神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。吉野山に住む山の神にて候。唯今これに出づる事餘の儀にあらず。さてもわが住む吉野山は。天下に隱れなき花の名所にて候間。花の盛りは申すに及ばず。梢々は白雲の棚引いたるに異ならず。散り方になり候ても雪か花かと疑はれ。見事さ申すも愚かに御座候により。貴賤群集をなし見物仕り候。中にも千本の櫻と申すは。隱れなき名木にて候へば。上界の天人天降り。この花の梢を宿りとして。花に戯れ眺め居られ候處に。諸人さやうの者とは夢にも知らず。女性の身として家居を忘れ花に眺め入り給ふこと。近頃不審なりと申せば。われはこれ上界の天人なるが。この花の色香に愛でて天上の事を忘れたりさりながら。今宵はこゝに旅居して信心のなし給はば。花に戯れ。往昔五節の舞に。小忌衣の羽袖を返せし。月の夜遊を奏せんとて。少女は天に昇り給ふ。誠に不思議なる事にて候。かやうに奇特なる事にて候間。我等も見物致さうと存じてこれまで出て候。何かと申す内に。異香薫じ音樂聞え。たゞならぬ氣色になり申して候。皆々心を靜めて拜まれ候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【四】

○いひもあへねば―いひもあへぬに。謠曲では常にかういふいひ方をしてゐる。
○和琴―七絃の琴。
○笙―數管を合せた、竪にして吹く笛。
○篳篥―笛の一種。
○羯鼓―腰につけて打つ鼓
○絲竹―絃と管の樂器。
○撫でし巖も―佛説に、劫といふ長久の時間を說いて天人が百年に一度づつ來て四十里四方の巖を柔い羽衣で撫で、終にその巖が擦り減り盡してしまふ時が來ても、一劫はなほ盡きないといふ、この佛說に據つて詠んだ拾遺集讀人知らずの歌「君が代は天の羽衣まれにきて撫づとも盡きぬ巖ならなん」を引いた。
○上なき―この上なき。
○天つ風―古今集僧正遍昭の歌―天つ風雲の通ひ路吹

【四】

ワキ「不思議や虚空に音樂聞え。異香薫じて花降れり

地「これ治まれる御代とかや

出端（脇能には下端）の囃子にて、後ジテ天人、面増・鬘・鬘帯・天冠・着附摺箔・長絹・縫箔腰巻（脇能には緋大口）・腰帯・扇の装束にて橋懸一の松へ出で、

地「いひもあへねば雲の上。いひもあへねば雲の上。琵琶琴和琴笙篳篥。鉦鼓羯鼓や絲竹の。聲澄み渡る。春風の。天つ少女の羽袖を返し（と舞臺に入り）。花に戯れ。舞ふとかや（と常座にて開き）

〔中舞〕

を舞ひ、引續き次の謡に合せて舞ふ。

地「少女は幾度君が代を。少女は幾度君が代を。撫でし巖も盡きせぬや。春の花の。梢に舞ひ遊び。飛び上り飛び下る。げにも上なき君の惠み。治まる國の。天つ風。雲の通ひ路吹き閉づるや。

【四】　後　段

男「これは不思議だ、空中に音樂が聞え、靈妙な香がして花が降つてくる。これは實にめでたい泰平の御代だ」

後ジテ天女登場。

都の男がかういふやいはずに、雲の上に琵琶・琴・和琴・笙・篳篥・鉦鼓・羯鼓など管絃の音樂の聲が澄み渡り、天女は輕やかな袖を春風に飜して、花に戯れながら舞ふのである。

〔中舞〕

を舞ふ。

かうして、天女は幾度撫でても擦り盡きることのない巖のやうに限りのない大御代をたゝへて、春の花の梢に飛びあがつたり飛び下りたりして舞ひ遊ぶ。まことに、この上もないわが大君の御恩惠御仁政の餘光を以て、空吹く風も天女の雲への通ひ路を吹き閉ぢ

少女の姿。留まる春の。霞もたなびく三吉野の。吉野の山櫻うつろふと見えしが。又咲く花の。雲に乗り。又咲く花の。雲に乗りて行方も知らずぞ。なりにける

と常座にて袖を返して留拍子を踏む。

て、天女は暫くの間こゝに留まつてゐたが、春霞のたなびき渡る吉野の山櫻の、散るかと思ふとまた咲く花の雲に乗つて、行方知れずに消え失せてしまつた。

きとぢよ少女の姿暫しとゞめむ」を引いた。○うつろふ―色の褪せること、花の散る意。

〔考異〕

古諸本（貞享三年本）

【一】ワキ「これは都方……若き人々をも（貞ナシ）伴ひこの度は（貞ナシ）和州に……　ワキ道行「この春は……色香に染むや（貞みて）深緑……　ワキ「急ぎ候（貞く）程に……　【二】ワキ「さん候これは……又見申せば（貞ふしぎやな）やごとなき……この山中に入らせ給ふは（貞そも）……　【三】シテ「げに御不審は……貞はわれは（貞上界の）天人なるが（貞此）花に引かれて（貞のこずゑ）を宿りとして唯今こゝに（来り）たり……五節の舞（貞其）小忌衣　【四】地「いひもあへねば……絲（貞笛）竹の……天つ少女の羽袖を返し……舞ふとかや（貞まのあたり天くだるこそふしぎなれ）地「少女は……幾度君が代を（貞天女は幾度君か代を〳〵）……

頼政
観（寶　春　剛　喜）

解説

【能柄】　二番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　旅僧、**前シテ**　老翁（源頼政の靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　源頼政

【所】　山城國　宇治平等院

【時】　五月廿六日

【異稱】　古く〔源三位〕又は〔源三位頼政〕ともいつた。

【作者】　世子六十以後申樂談儀に世阿彌の作とし、能本作者註文、二百十番謠目錄も同樣に記す。能作書に軍體の例にこの名を擧げ、禪竹の歌舞髓腦記に軍體、寵深花風、拔群體として本曲を擧げてゐる。演能の古記錄は見當らないが、言經卿記文祿四年四月一日に註標のことが見えてゐる。

【梗概】　諸國遊歷の僧が京都から奈良へ行く途次、宇治に立ち寄つてあたりの風光を眺めてゐると、一人の老翁が出て來て、僧に言葉を掛け、僧の尋ねるがまゝに宇治の名所舊跡を敎へた後、僧を誘つて平等院へ

來て、扇の芝を示して、賴政はこの所で自害したのであつて、宛も今日はその命日であると語り、自分がその幽靈であるとうち明けて消え失せる。僧がこゝで讀經して假寢してゐると、その夢に、賴政が甲冑を着けて現れ出で、治承の夏、高倉宮に勸め奉つて平家の討滅を企て、事顯れて、この宇治で平家と對戰したが、味方に利がなく、終にこゝで辭世の一首を遺して自害したと語り、なほも回向を請うて、扇の芝の草蔭に消え失せる。

【出典】大體平家物語卷四に據つたもので、その主要な部分を抄出すれば、

さる程に宮は宇治と寺との間にて、六度まで御落馬ありけり。これは去んぬる夜御寢ならざりし故なりとて、宇治橋三間引き放し、平等院に入れ奉り、暫く御休息ありけり。六波羅には、「すはや宮こそ南都に落ちさせ給ふなれ、おつかけて討ち奉れや」とて……その勢二萬八千餘騎木幡山うち越えて、宇治橋のつめにぞおし寄せたる。敵平等院にと見てければ、鬨を作ること三個度なり。宮の御方にも同じう鬨をぞ合せたる。……平家の方の侍大將上總守忠淸大將軍の御前に參り「あれ御覽候へ、橋の上の戰手いたう候。今は川を渡すべきにて候が、折ふし五月雨の頃水まさつて候へば、渡さば馬人多く亡び候ひなむ、淀・一口へや向ふべき、また河内路へや回るべき、いかゞせむ」と申しければ、下野國の住人足利の又太郎忠綱生年十七歲にてありけるが、進み出でて……眞先にこそうち入れたれ。……足利大音聲をあげて、「弱き馬をば下手に立てよ、強き馬をば上手になせ、馬の足の及ばう程は手綱をくれて步ませよ……」と掟てて、三百餘騎一騎も流さず、向の岸へさつとぞうち上げたる（橋合戰の事）

……こゝに伊賀・伊勢兩國の官兵等、馬筏おし破られて、六百餘騎こそ流れたれ。……その中に緋縅の鎧着たる武者三人、網代に流れかゝりて、浮きぬ沈みぬゆられけるを、伊豆守（仲綱）見給ひて、かくぞ詠じ給ひける。

伊勢武者はみな緋縅の鎧着て、宇治の網代にかゝりぬるかな

……源三位入道は七十に餘つて軍して、弓手の膝口を射させ、痛手たれば、心靜かに自害せむとて平等院の門の内へ引き退く處に、……次男源大夫の判官兼綱は……平家の兵ども十四五騎落ち重なつて、遂に兼綱を討つてけり。伊豆守仲綱もさんざんに戰ひ、痛手あまた負うて、平等院の釣殿にて自害してけり。……三位入道……西に向ひて手を合せ、高聲に十念唱へ給ひて、最後の言葉ぞあはれなる、

埋木の花咲くこともなかりしに、みのなるはてぞ悲しかりける

これを最後の言葉にて、太刀の先を腹に突き立て、うつぶしざまに貫かつてぞ失せられける。（宮の御最後の事）

著名な扇の芝のことは平家物語諸本に見えない。應永の頃このやうな傳説があつたものか、或は謠曲作者の創案したものか。

【概評】本曲は應永年間の古作で、「朝長」「實盛」と合はせて三修羅と呼ばれ、特に位の重いものとして取扱はれてゐるのである。なる程、この曲は、その主人公が老将であること、しかも武骨一邊の人ではなく優にやさしい歌人でもあつたこと、その場所が都近い名所であること等、普通の修羅物と同列に取扱ふことの出來ない要件を幾つかと持つてゐるので、この演奏者は武将としての雄々しさと、歌人としての優しさと、老人としての寂しさと、そして所にふさはしい花やかさと、かうした様々の錯綜した情趣を按配統合して、底知れぬ味ひを表現しなければならないのである。この曲の面白味はかうした所にあるのであるが、その詞章を見ると、前段で、宇治の名所舊跡を語り合つた後、殊更舞臺を平等院に改めて、頼政敗死の事を述べた上、後段では、クセと語と二節續けて、官軍の様を餘りにも委しく語つてゐるのである。脚色がやゝ冗漫に流れた嫌ひがあるのである。しかし、かうした缺點ゆとりのある所に、主演者の藝力を思ふがまゝに發揮する自由が與へられてゐるのであつて、一讀冗漫の如くに見られるその詞章も、なほ讀み返して見ると、前後よく連絡してゐて、「知章」のやうに少しも重複してゐない。そこに脚色行文の苦心が窺はれて、結局凡作と見なすことが出來ないのである。

【一】

名乗笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・水衣・腰帯・扇・數珠の装束にて出で、名乗座に立ち、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は都に候ひて。洛陽の寺社殘りなく拝み廻りて候。又これより南都に參らばやと思ひ候

ワキ道行「天雲の。稲荷の社伏し拝み。稲荷の社伏し拝み。なほ行く末は深草や。木幡の關を今越

【一】 前段

（舞臺は初め京都、ワキ旅僧登場。）

僧「私は諸國を遊歴してゐる僧です。私はこの間うちは京都に居つて、都の神社佛閣を殘らず參拝して廻りました。そしてこれから奈良へ參らうと思ふのです（見物人に自己紹介をし、）

僧「稲荷のお社に參拝して、それから深草を過ぎ、木幡の關を越え、伏見の澤田を眺め、その川の流れに沿うて行くうちに、

【一】○洛陽―京都。周の都が洛陽にあつたので、日本の都を唐風にかういひ習はしたのである。
○南都―奈良。京都の南に當るからかういつた。
○天雲の―「いかづち」「いほり」など「い」に冠する枕詞。
○稲荷の社―山城國紀伊郡京都の東南稲荷山にあり、和銅年中の創建、倉稲魂神を祀る。（小鍛冶參照）
○深草―紀伊郡、稲荷山の南。

○木幡の關―同郡伏見山の東面、木幡山の麓にあつた。今關山といふ。
○伏見の澤田―同郡、伏見町の南の澤地。その南部に巨椋池がある。

○宇治の里―宇治郡宇治村久世郡宇治町の邊一帶をいふ。
○遠の里―遠くに見え渡る里。宇治町の彼方（宇治橋の東北）を匂はせた。

【二】

えて。伏見の澤田見え渡る水の水上尋ね來て、宇治の里にも、着きにけり宇治の里にも着きにけり

伏見の澤田見え渡る」と右の方に向きて二三足出でまたもとに歸りて宇治に着きたる心。舞臺の眞中に出で正面に向きて、

ワキ「げにや遠國にて聞き及びにし宇治の里。「山の姿川の流れ。「遠の里橋の氣色。見所多き名所かな。「あはれ里人の來り候へかし

といひて脇座に行きかゝる。

【三】

シテ老翁、面朝倉尉・尉髪・褸浅黄・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）「なうなう御僧は何事を仰せ候ぞ

ワキ脇座に立ちて、

ワキ「これはこの所始めて一見の者にて候。この宇治の里に於て。名所舊跡殘りなく御教へ候へ

シテ「所には住み候へども。賤しき宇治の里人な

宇治の里に着いた」

（旅行を進めてゐる間に旅は進んで、舞臺は山城國伏見の里となる。僧はあたりの風景を眺めて、

僧「さすがに遠國に居つた時から噂に聞いてゐたこの宇治の里。山の姿といひ、川の流れといひ、遠く見渡される村里といひ、宇治橋の樣子といひ、見所の多い名所だ。あゝ誰か里人が來てくれるとよいが」

（里人を待つてゐる。

【三】

（シテ源頼政の靈、老翁の姿をして登場。

老翁「もうしもし、お僧は何をいつていらつしやるのです。

僧「私はこの所へ始めて見物に來た者です。この宇治の里の名所舊跡を殘らず教へて下さい」

老翁「この宇治の里には住んで居りますも

○「いさ白波の」いさ知らずといひかけた。
○宇治の川―久世、宇治二郡の間を流れる。上流は近江の勢田川で、下は木津川となる。
○舟と橋―宇治の柴舟、宇治橋はともに著名である。
○勸學院の雀は蒙求を囀る―「門前の小僧は習はぬ經を讀む」と同じ意の諺。この語平康頼の寶物集上にも見ゆ。勸學院は藤原冬嗣の創立した同族の爲の學校。蒙求は唐の李瀚の撰んだ書で、童子の讀物とす。
○御心にくう―御心ゆかしく。
○喜撰法師―古今集序に「宇治山の僧喜撰」とある六歌仙の一人。橘諸兄の後で、良殖の子。
○住みける庵―無名抄に「三室戸の奥二十餘町ばかり山中へ入りて、宇治山の喜撰が住みける跡あり」今喜撰獄といふ。
○「大事の事」―むつかしい事。
○わが庵は都の巽しかぞ住む世を宇治山と人はいふなり―古今集雜下にある。
○尉―老人。丈人（杖をつく人）の意。
○「槇の島」―宇治町小倉村の北、宇治川と巨椋池との間にある。

れば。名所とも舊跡とも、いさ白波の宇治の川に。舟と橋とはありながら。渡りかねたる世の中に。住むばかりなる名所舊跡。何とか答へ申すべき（と舞臺に入り常座に立つ）

ワキ「いやさやうには承り候へども。勸學院の雀は蒙求を囀るといへり。所の人にてましませば御心にくうこそ候へ。まづ喜撰法師が住みける庵はいづくの程にて候ぞ

シテ「さればこそ大事の事をお尋ねあれ。喜撰法師が庵は。わが庵は都の巽しかぞ住む。世を宇治山と人はいふなり。人はいふなりとこそ。主だにも申し候へ。尉は知らず候

ワキ 又あれに一村の里の見え候は槇の島候か（と右の方を見て問ふ）

シテ「さん候槇の島とも申し（と右の方へ向き）。又宇治

のの、賤しい里人のことですから、どれが名所やら舊跡やらも知らず、宇治川には舟や橋があつても、私自身は世の中を渡りかねてゐる、ほんの生きてゐるといふばかりの身上ですから、名所舊跡をお尋ねなされても、何とお答へしてよいやら、お答へも出來ない次第です」

僧「いやそのやうにいはれるけれど、諺にも『勸學院の雀は蒙求を囀る』などといつて、その場所に居れば、自然と覺えるものです。あなたはこの名所の人なのだから、さぞ色々御存じだらうとゆかしく思はれるのです。まづ第一に、喜撰法師の住んだ庵はどの邊にあるのです」

老翁「それそのやうにむづかしい事をお尋ねになる。喜撰法師の庵は――『わが庵は都の巽しかぞ住む、世を宇治山と人はいふなり』（自分の庵は都の東南にあつて、ここにこのやうに住んでゐるのである。それを、世間の人は口うるさく、世を憂しと思つて宇治山に隠れたのだなどと噂を立ててゐる）と詠んで、喜撰法師自身でさへ『世間の人がいふ』と他人事にいつてゐるのです。だから勿論私は知りません」

僧「又あそこに一かたまりの村里が見えますが、あれは槇の島ですか」

老翁「さうです、槇の島ともいひ、又宇治

○橋の小島が崎―宇治橋の西詰、橋姫社のある邊。〔浮舟〕參照。
○慧心の僧都の―朝日山にある慧心院をいふ。慧心は比叡山横川の高僧源信のことで、往生要集等を著し、寛仁元年七十六で寂す。〔草薙〕〔仲光〕參照。
○名にも似ず―朝日といふ名にも似ず。
○朝日山―宇治川の東岸。
○山吹の瀬―夫木抄鳥羽院御製「秋風の山吹の瀬の岩波にぬる夜よそなる宇治の橋姫」など詠まれてゐるが、今所在不明。
○雪さし下す―雪を舟の上に載せて川下へ下る。この雪は月光の形容である。
○島小舟―柴小舟の誤り。金春では柴小舟と謠つてゐる。
○是非を分かぬ―優劣をつけられない、すべて秀れた眺めである。
【三】
○平等院―宇治橋の西岸南二町許の所にある。もと源融の別莊であつたのを、永

の河島とも申すなり（とワキへ向く）
ワキ「これに見えたる小島が崎は（と脇正面に向き）
シテ「名に橋の小島が崎（と脇正面に向き）
ワキ「向ひに見えたる寺は（と正面に向き）。いかさま慧心の僧都の。御法を説きし寺候な
シテ『なうなう旅人。あれ御覧ぜよ（と東の方脇柱の上を見）
シテ上歌「名にも似ず。月こそ出づれ朝日山
地「月こそ出づれ朝日山。山吹の瀬に影見えて。雪さし下す島小舟（正面へ出で）。山も川も（と見渡し）。おぼろおぼろとして是非を分かぬ氣色かな（と遠く見やり）。げにや名にし負ふ。都に近き宇治の里聞きしに勝る、名所かな聞きしに勝る名所かな（と左へ廻りて常座に立つ）
【三】
シテ「いかに申し候。この所に平等院と申す御寺

の河島ともいひます」
僧「こちらに見える小さな島崎は……」
老翁「有名な橋の小島が崎です」
僧「向ふに見える寺は、成程慧心僧都が佛法を説かれた寺ですな」
老翁「もし〳〵旅の方、あれを御覧なさい。あの朝日山から、朝日といふ名前には不似合な月が出ました。そして山吹の瀬に月影がさして、川を下つて行く柴小舟は、月の光で雪を載せてゐるやうです。おゝ山も川もおぼろな月影に包まれて、どれもこれも優り劣りのない眺めです」
僧「いかにも、さすが都近くの有名な宇治の里だけあつて、噂に聞いた以上な、實に結構な名所です」
【三】
老翁「もうし、この所に平等院といふお寺

承七年藤原頼通が寺とした
その佛殿を鳳凰堂といふ。

○釣殿―川の流れに突き出した、釣をすることの出來る建物。

○宮軍―高倉宮以仁王を奉じて頼政の起した戰。
○源三位頼政―多田滿仲の後、兵庫頭仲政の子。宇治で自刄した時年七十五。近衛天皇の御時帝を惱まし奉つた怪物を射殺したこと[鵺]に作らる。

の候を御覽ぜられて候か
ワキ「不知案内の事にて候程に。未だ見ず候御教へ候へ
シテ「こなたへ御出で候へ(と二三足出で正面に向きて)。これこそ平等院にて候へ。(右の方を近く見て)又これなるは釣殿と申して。面白き所にて候よくよく御覽候へ
ワキ「げにげに面白き所にて候。(正面の方を見て)又これなる芝を見れば扇の如く取り殘されて候は。何と申したる事にて候ぞ(とシテへ向く)
シテ「さん候この芝について物語の候語つて聞かせ申し候べし。(眞中に出で下に居り、ワキも下に居て)昔この所に宮軍のありしに。源三位頼政合戰にうち負け給ひ。この所に扇を敷き自害し果て給ひぬ。されば名將の古跡なればとて。扇の形に

がありますが、御覽になりましたか」
僧「全く土地の案内を知らないのですから、まだ見ません。教へて下さい」
老翁「では、こちらへお出でなさい」
(と、やがて平等院へ案内した態で、舞臺は平等院となり、)
老翁「これが平等院です。それからこれが釣殿といつて面白い所です。よく御覽なさい」
僧「いかにも面白い所です。それから又この芝を見ると、扇のやうな形に取り殘してありますが、これはどうしたわけなのです」
老翁「はい、この芝についてはお話があります。お聞かせ致しませう(とくつろいで)。昔この所で高倉宮樣が戰爭を遊ばした時、宮方の源三位頼政が戰爭にお負けになつて、この所に扇を下に敷いて、自害をしてお果てになつたのです。それで、名將の舊跡だといふので、扉の形に芝を取り殘して、今でも扇の芝といつてゐる

○文武に名を得し—賴政は歌にも秀れてゐて、詞花集以下の勅撰集に五十九首採られてゐる。
○行人征馬の—往來の旅人や驛馬の行つてしまつた後の如く、誰も氣に留めない。
○月も日も今日—この戰は治承四年五月廿六日。
○中宿—宇治は京都から奈良へ行く途の中宿となつてゐた。源氏推本の卷に「宇治のわたりの御中宿」現世は六道に輪廻する衆生の中宿のやうなものであるから「夢の浮世の」と冠したのである。
○宇治の橋守—古今集讀人不知の歌「千早ぶる宇治の橋守なれをしぞあはれとは思ふ年の經ぬれば」を借りた。
○うち渡す遠方人に—古今集旋頭歌「うち渡す遠方人に物申すわれ、そのそこに白く咲けるは何の花ぞも」を借りた。遠方人は遠方からの旅僧ワキを指す。

取り殘して。今に扇の芝と申し候
ワキ「痛はしやさしも文武に名を得し人なれども。跡は草露の道のべとなつて。行人征馬の行くへの如し。あら痛はしや候
シテ「げによく御弔ひ候ものかな。しかもその宮軍の月も日も今日に當りて候はいかに
ワキ「何とその宮軍の月も日も今日に當りたると候や
シテ「かやうに申せばわれながら。よそにはあらず旅人の。草の枕の露の世に。姿見えんと來りたり。現とな思ひ給ひそとよ
地上歌「夢の浮世の中宿の（シテ立ち）。夢の浮世の中宿の（常座へ行き）。宇治の橋守年を經て。老の波もうち渡す遠方人に（と立ち歸り）、もの申すわれ賴政が幽靈と名乘りもあへず、失せにけり名乘りも

のです」
僧「あゝお氣の毒なことだ。あのやうに文武兩道に秀れた有名な人であつたのに、道ばたの草の露のやうに果敢なく消えてしまはれて、道を往來する旅人や馬の行つてしまつた後のやうに、誰も氣に留めるものがないのだ。あゝお氣の毒なことだ（ト回向す）」
老翁「おゝよく御回向なさいました。不思議なことに、その宮軍のあつたのは、月も日も丁度今月今日なのですよ」
僧「何ですて。その宮軍のあつたのが、今月今日に當るといふのですか」
老翁「このやうにお話してゐると、自分ながら他人事と思はれなくなつて來ました。實は旅の方の假寢の夢に姿を見せようと思つて來たのです。これを現とお思ひになつてはいけませんよ。宇治といへば、都から奈良へ行く者の中宿となる所で、丁度この娑婆は衆生生死の中宿のやうなものです。私はその宇治に長い年月を過した老人で、かうして遠方の人に物をいつてゐる私は、賴政の幽靈なのです」と、名乘るや否や、消え失せてしまつた。

あへず失せにけり

と右へ廻りて常座にて正面へ開き、静かに中入。

【問】　狂言所の者、着附縞熨斗目・狂言上下・腰帯・扇の装束にて名乗座に出で、

狂言「かやうに候者は。宇治の里に住居する者にて候。今日は平等院の邊へ出で。心を慰め申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは遠國方より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか〳〵この邊の者にて候

ワキ「さやうに候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。扇の芝の謂れ宮軍の樣體。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を仰せ候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程にこの所に於て宮軍の御座ありたる樣體は。源三位頼政の御子息。伊豆守仲綱の御持ちありたる木の下鹿毛といふ名馬を。宗盛御所望候へども。仲綱同心なく候ふ。頼政御異見あつて。かの馬を上げ給ふに。初め所望の折は上げもせで。今この馬を贈ること滿足になしとて。その馬を鬣を切つて仲綱と鐵燒させ。御厩に立て給ふ。頼政仲綱口惜しく思し召し。宮に御謀叛を勸め給ひ。

【問】

○同心なく候―賛成しない、承諾しない。

○亡心―亡靈、亡魂。

三井寺へ引き籠り給ふ。その時賴政の侍に。競の瀧口と申すもの。六波羅へ行き宗盛を誑かし。南鐐と申す名馬を取つて。その馬の鬣を切り。昔は南鐐今は平の宗盛と鐵燒して追ひ返す。この馬名馬なれば。六波羅に驅け戻り。もとの御厩に立ち候間。宗盛御覽じ。さては瀧口に誑かされしこと無念なりとて。三井寺へ押し寄せ給ふに。山門の衆徒心變りの由聞えしかば。宮は南都の衆徒を語らひ。大和路さして落ち給ふ處に。再々御落馬なされ候間。平等院に御陣のすゑられ。橋を引いて戰ひ給ふが。宮方敗け軍になり候間。賴政はこの寺に扇を敷き。御腹召されて候。名將の果て給ひたる跡なればとて。扇の形に取り殘して。扇の芝と申し候。宮は南都へ落ち給ふ途にて。討たれ給ひたると承り及びて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく老人一人來られ。所の名所など敎へ。この所へ同道申され。扇の芝の謂れ懇に語り。賴政の幽靈といひもあへず。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは言語道斷奇特なる事を仰せ候ものかな。總じてこの邊にさやうの御方は御座なく候が。我等の推量申すに。御僧貴くましますにより。賴政の御亡心現れ給ひ。御言葉を交はされたると存じ候間。暫く御逗留あつて。賴政の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等もさやうに存じ候間。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば。重ねて御用仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【四】

ワキ「さては頼政の幽靈假に現れ、われに言葉を交はしけるぞや『いざや御跡弔はんと。上歌（待謡）「思ひ寄るべの波枕。思ひ寄るべの波枕。汀も近しこの庭の扇の芝を片敷きて。夢の契りを、待たうよ夢の契りを待たうよ

【五】

一聲の囃子にて、後ジテ源頼政、面頼政・頼政頭巾・金襴鉢卷・襟白淺黄・着附無色厚板・法被・半切・腰帶・扇・太刀の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテ『血は涿鹿の河となつて。紅波楯を流し。白刃骨を碎く。世を宇治川の網代の波。あら閻浮戀しや（と右の方を見返りて面を伏せ）。伊勢武者は（と正面に直し）。皆緋縅の鎧着て。宇治の網代に。かかりけるかな（と二足つめ）。うたかたの。あはれはかなき世の中に

地『蝸牛の角の。爭ひも

【四】

○思ひ寄るべの—思ひ寄るを寄るべの波（寄りくる波）にいひかけた。

○波枕—水邊で寢ること。

○片敷きて—片袖を下にして寢ること。扇の芝の上で假寢する意。

【五】

○血は涿鹿の河となつて—戰の激しく死傷の夥しい形容、涿鹿は支那黄帝が蚩尤と戰つた所。

○世を宇治川の—世を憂しといひかけた。

○網代—川瀬に網のやうに竹を編み列ね、そのはてに簀をあてて魚を捕るもの。宇治の名物。

○あら閻浮戀しや—波荒しを感動の「あら」にいひかけた。閻浮は須彌四洲の一閻浮提の略、轉じて娑婆の意に用ゐる。

○伊勢武者は皆緋縅の鎧着て宇治の網代にかかりけるかな　平家物語—宮の御最期の事」に頼政の子仲綱の詠んだ歌。平家方伊賀伊勢の武士の鎧の緋縅を氷魚に見立てて嗤つたのである。

○うたかた—泡沫。泡をあはれにいひかけた。

○蝸牛の角の爭ひ—愚かな

【四】

後　段

僧「さては頼政の幽靈が假に現れて來て、自分に言葉を交はしたのであつた。さあその御囘向をしよう。」から思ひついて、波のうち寄せる水邊、水際に近いこの庭の扇の芝の上で、假寢をして、約束通り夢で會ふのを待たう」

といつて假寢してゐる態。

【五】

後ジテ源頼政、僧の夢に現れる態で登場。

頼政「死傷した者の血で戰場は河のやうになり、血の波が楯をも流し、なほも鋭い刃が骨をうち碎くのだ。その辛い情ないと思つた宇治川の網代に打ちかかる波。今はあの娑婆が戀しいことだ。——『伊勢武者は皆緋縅の鎧着て、宇治の網代にかかりけるかな』

（緋縅の鎧を着た平家方の伊勢武者が、氷魚のやうに宇治の網代に引つかかつてゐる）

と嘲つたが、思へば、泡沫のやうなあはれな世の中で、小ぜり合ひをしたのは、蝸牛の角の爭ひのやうな、實に果敢ない

小ぜりあひの喩へ。白氏文集廿六に「蝸牛角上爭二何事一」

○紅は園生に植ゑても—この句〔安宅〕にもある。義經記二に「壁に耳岩に口といふことあり、紅は園生に植ゑても隱れなし」

○五十展轉の功力—法華經を次から次へといひ傳へて五十人目に及んでも、其功力の衰へないこと。法華經隨喜功德品に「若人於二法會一得レ聞二是經典一、乃至於二一偈一隨喜爲レ他說、如レ是展轉教至二於第五十一、最後人獲レ福一」

○直道—展轉したものでなく、直接經文を聽聞すること。

○佛在世—釋迦存命の時代

シテ「はかなかりける。心かな。あら尊の御事や（とワキへ向き）。なほなほ御經讀み給へ

ワキ「不思議やな法體の身にて甲冑を帶し。御經讀めと承るは。いかさま聞きつる源三位の。その幽靈にてましますか

シテ「げにや紅は園生に植ゑても隱れなし、名乘らぬさきに。賴政と御覽ずることそ恥かしけれ。ただただ御經讀み給へ

ワキ「御心安く思し召せ。五十展轉の功力だに。成佛まさに疑ひなし。ましてやこれは直道に

シテ『弔ひなせる法の力

ワキ『合ひに合ひたり所の名も

シテ『平等院の庭の面（脇正面の下を見廻し）

ワキ『思ひ出でたり

シテ『佛在世に

愚かなことであつた（といつて僧に向ひ）。あゝ貴い、ありがたい事じや、どうぞもつと御經を讀んで下さい」

僧「これは不思議だ、入道姿に甲冑を着て、御經を讀めといはれるのは、成程先程伺つた、源三位賴政の幽靈でいらつしやるのですか」

賴政「いかにも『紅花は色んな草の中に植ゑて置いても、すぐ知られる』といふ諺の通り、この仁體を見てとつて、まだ自分の名乘らない前に、賴政だとお分りになるのは恥かしい次第です。どうか是非お經をお讀み下さい—」

僧「御安心なさいませ。このお經の功德の力によれば、次々へいひ傳へて行つて、第五十番目に當る人でさへ確かに成佛することが出來るのです。まして、今は私が直々にお經を傳へるのですから……」

賴政「御回向下さつた功德の力によつて……」

僧「殊にこゝは所の名も佛の御教へにふさはしい……」

賴政「平等院といふ所で……おゝこの庭を見て、釋尊御存命の時御說法遊ばした靈

地上歌「佛の説きし法の場。佛の説きし法の場。ここぞ平等大慧の。功力に頼政が。佛果を得んぞありがたき

【六】

シテ（クリ）「今は何をか包むべき。これは源三位頼政。執心の波に浮き沈む。因果の有樣現すなり（と左へ廻り）

地サシ「抑も治承の夏の頃。よしなき御謀叛を勸め申し。名も高倉の宮の内。雲居のよそに有明の月の都を忍び出でて（と眞中に出で床几にかゝり、）

シテ『憂き時しもに。近江路や

地『三井寺さして落ち給ふ

（居クセ）

地クセ「さるほどに。平家は時を廻らさず。數萬騎の兵を。關の東に遣はすと。聞くや音羽の山續く（と少し右へ向き）。山科の里近き。木幡の關を、よ

鷲山を思ひ出しました。確かにこゝは寺の名の通り、佛の平等な大智慧の功德に浴する所で、その功德の力によつて、この頼政が成佛することの出來るのは、ありがたいことです」

【六】

頼政「今は何を隱さう。自分は源三位頼政で、執着の念から迷妄に浮沈してゐるのです。今惡業の報いに苦しむこととなつた次第を話しませう。

さて、治承四年夏の頃、つまらない御謀叛をお勸め申し上げて、その結果、有名な高倉宮は御殿を外にして、五月の下旬都を人に忍んでお出ましになり、辛い思ひをして、近江の三井寺へ向つてお逃げになつたのです。——

ところが、平家の方から、すぐさま數萬騎の兵を逢坂山の東に遣はしたといふ事が知れたので、また音羽山を越えて、山續きで山科の里の方へ出て、近くの木幡の關をも避けて、誠に人生は辛い旅だと

○佛の説きし法の場—平等院を釋迦が法華經を説いた靈鷲山に見立てたのである

○平等大慧—佛の智慧の差別のないこと。これに寺の名を含めた。

○功力に頼政が—功德の力に頼るを人名にいひかけた

【六】

○因果の有樣—戰爭をした惡因の報いで、修羅道に墮ちて苦しむ有樣。

○治承の夏の頃—治承四年五月。

○高倉の宮—後白河天皇第二皇子以仁王。この戰ひに流れ矢に中つて薨じ給うた御年三十。名も高しを高倉にいひかけたのである。

○雲居のよそに—都の外に

○近江路や—憂き時に逢ふといひかけた。

○三井寺—近江國滋賀郡、園城寺。

○關の東—關は逢坂關。

○音羽の山—山城國宇治郡山科にあり、逢坂山の峯續きである。

○山科—逢坂の西。

○寺と宇治との—三井寺と宇治との。
○關路の駒の—隙もなくの序。
○宇治橋の中の間—宇治橋の中程の橋板を引き外して敵の渡れないやうにするのである。
○下は川波上に立つも—橋の下には白い川波が立ち、橋の上にも同じ白色の源氏の旗を靡かして。

【七】
○南北の岸—源氏は南、平家は北。
○矢叫びの音—矢を放つ聲。
○波にたぐへて—波の音と一緒になつて。
○行桁—橋の長さにそつた桁。
○筒井の淨妙・一來法師—共に三井寺から賴政に從つて來た勇僧。

そに見て(ト右の中程を見)。ここぞ憂き世の旅心宇治の川橋うち渡り(ト正面に直して拍子を踏み)。大和路さして急ぎしに
シテ『寺と宇治との間にて
地 關路の駒の隙もなく。宮は六度まで御落馬にて煩はせ給ひけり。これは前の夜御寢ならざる故なりとて。平等院にして。暫く御座を構へつつ宇治橋の中の間、引き離し(ト扇にて形を示し)。下は川波(下を見)。上に立つも(扇を左肩に寄せて上を見)。共に白旗を靡かして寄する敵を待ちゐたり(ト正面をしつかと望む)

【七】
シテ(語)「さるほどに源平の兵、宇治川の南北の岸にうち臨み。鬨の聲矢叫びの音。波にたぐへて夥し。橋の行桁を隔てて戰ふ。「味方には筒井の淨妙。「一來法師。敵味方の目を驚かす。かくて

思ひたから、宇治橋を渡つて、大和の方へ急いで行つたのですが、その間、三井寺と宇治との間で、高倉宮は絶え間もないほど、六度まで馬からお落ちになつたのです。これは前夜お寢みにならなかつた爲であるといふので、平等院に暫くの御座所を設け、宇治橋の中程の橋板をとり外して、敵の渡れないやうにし、橋の下に白い川波の立つやうに、橋の上にわが源氏の白旗を靡かして、攻め寄せてくる敵を待ち構へてゐたのです。

【七】
頼政「かうしてゐる間に、源平の兩軍は宇治川の南北の岸に對峙して、鬨の聲・矢叫びの音、それに川の波音までが一緒になつて、大きな騷ぎをして、橋を隔てて戰ひあつたのです。この戰ひに、味方では筒井の淨妙・一來法師が奮鬪して、敵も味方も目を驚かせてゐたのです。

○左右なう―雜作なく、容易に。
○田原の又太郎忠綱―俵藤太の後で、下野の住人足利太郎俊綱の子。この時年十七。
○鑣―轡のこと。
○下知―指圖。
○下手に立て―弱い馬を下流へやつて。
○弓筈―弓の兩端、弦をかける所。

平家の大勢。橋は引いたり水は高し（と少し右へ引き）。『さすが難所の大河なれば。左右なう渡すべきやうもなかつし處に。田原の又太郎忠綱と名乘つて。宇治川の先陣われなりと。名乘りもあへず三百餘騎（と正面を見廻し）地。鑣を揃へ川水に。少しもためらはず。群れゐる群鳥の翅を竝ぶる羽音もかくやと（拍子を踏み）、白波に。ざつざつと（形を示し）。うち入れて。浮きぬ沈みぬ渡しけり

シテ『忠綱。兵を。下知して曰く地』水の逆卷く所をば。岩ありと知るべし。弱き馬をば下手に立てて。強きに水を。防がせよ。流れん武者には弓筈を取らせ。互に力を合はすべしと。唯一人の。下知によつて。さばかりの大河なれども一騎も流れず此方の岸に（と橋懸を見渡し）。

平家の大勢の軍は、橋の橋板は外され、水嵩は高く、流れの急な大河であるので、容易には渡ることも出來さうに見えなかつたところ『自分は田原又太郎忠綱である』『宇治川の先陣は自分が立てるのである』と名乘るや否や、三百餘騎の軍勢が馬の轡を揃へて、このやうな川水を少しも躊躇せず、群れ集まつてゐる群鳥が翅を竝べた時の羽音がこのやうであらうかと思はれる音を立てて、白波にざつざつと飛び入つて、浮いたり沈んだりしながら、渡つてくるのです。――

その時、忠綱は部下の軍勢に『水の逆卷く所には岩があるのだから氣をつけよ。弱い馬は下流の方にやり、强い馬を上流にやつて水の急な流れを防がせよ。水に流れさうな武士には弓筈を持たせて引き寄せ、お互に力を合はせて渡つて行け』と指圖をする。その唯一人の指圖によつて、あれほどの大河であるのに、唯の一人も水に流されないで、全部うち揃つてこちらの北岸に、鬨の聲を擧げて上つて

○をめいて—騷いで。鬨の聲を擧げて。
○踏みもためず—踏み留まることも出來ず。
○しさつて—退いて。
○兄弟の者 頼政の子、仲綱・兼綱の兄弟。但し盛衰記では仲綱は頼政の後に自害してゐる。
○さすが名を得し—歌の名人であつたことをいふ。
○埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてはあはれなりけり—平家物語諸本に見ゆ。身に實をいひかけたのである。

をめいて上れば味方の勢は。われながら踏みもためず（と立ちて正面先へ出で）。半町ばかり。覺えずしさつて（後へ下り）。切先を揃へて（と太刀を拔き）。ここを最期と戰うたり（と切る形をし）。さる程に入り亂れ。われもわれもと戰へば（と左へ廻り）

シテ『賴政が賴みつる

地『兄弟の者も討たれければ

シテ『今は何をか期すべきと

地『唯一筋に老武者の

シテ『これまでと思ひて（と太刀を捨て）

地『これまでと思ひて平等院の庭の面（正面へ出で）。これなる芝の上に（と下を見）。扇をうち敷き鎧脫ぎ捨て座を組みて（と安坐し）。刀を拔きながら（扇を刀の心にて見）。さすが名を得しその身とて

シテ『埋木の。花咲くこともなかりしに、身のなる

來たので、味方の軍勢はわれ知らず踏み留まることが出來ないで、半町ばかり思はず知らず後に退き、刀の切先を揃へて、これを最期と必死に戰つたのです。——

かくして、兩軍入り亂れて、われもわれもと戰つてゐる間に、自分の賴みにしてゐた、わが子仲綱・兼綱兄弟も討たれてしまつたので、もう今は何を目當てに生きる甲斐もないと、老武者の一徹に、かうあきらめてしまつて、平等院の庭、この芝の上に扇を敷き、鎧を脫ぎ捨てて坐り、刀を拔きながら、さすが歌の名人といはれたものであるから、——

『埋木の花咲くこともなかりしに、身のなるはてはあはれなりけり』

はては、あはれなりけり（と面を伏せ）

地「跡弔ひ給へ御僧よ（と片膝立ててワキへ向き）。假初ながらこれとても（と立ちて左へ廻り）。他生の種の緣に今。扇の芝の草の蔭に（と扇を投げ）。歸るとて失せにけり立ち歸るとて失せにけり

と右膝をつきて袖を被ぎ、立ちて右へ廻り常座にて留拍子を踏む。

○他生の種の緣―前世からの宿緣。前の花に對して種の字を出したのである。
○扇の芝の―今逢ふといひかけた。

（自分は埋木のやうに、花の咲くやうな時代もなかつたのに、あはれな最期を遂げることとなつた）

（と辭世の歌を遺して自害したのです）。お僧、どうぞ御回向下さい。假初ながら今かうしてお逢ひするのも、前世からの宿緣です。

といつて、扇の芝の草蔭に歸るやうに見えて、消え失せてしまつた。

［考異］

諸流（五流）

【一】ワキ「道行」天雲の……木幡の關を今越えて（春闕よそに見）て……着きにけり（春ワキ）急ぎ保程にこれははや、宇治の里に着きて候、あら面白の所や候、心靜かに一見せばやと思ひ候（喜ニ春ニ略同ジ）　【四】ワキ「さては賴政の幽靈……いざや御跡弔はんと（春闕ナシ）

【五】後ジテ「血は涿鹿の……白刃骨を碎く（寶下懸ナシ）

古謠本（光悅本）

【一】ワキ「道行」天雲の……木幡の關を今越え（光打すぎ）て……　【三】ワキ「不知案内の事にて候程に（光ナシ）未だ……　シテ「こなたへ御出で候へ（光ナシ）これこそ平等院にて（光御入）候へ……釣殿と申して面白き（光隠れなき）所にて候……　ワキ「げにげに（光あら）面白き（光の）所にて（光や）候（光なふ）又これなる……扇の如く（光なりに）取り殘されて候（光是）は何と申したる事（光謂）にて……　シテ「さん候……されば名將の古跡なればとて扇の形に取り殘して（光ナシ）……　シテ「げによく御弔ひ……今日に（光あひ）當りて候はいかに（光ナシ）ワキ「何とその宮軍の月も日も（光ナシ）今日に……　【五】ワキ「不思議やな……御經、光を讀めと承るは……　【七】シテ「血……るほど
に（光かくて）源平の兵（光ナシ）……

弱法師

觀（寶 春 剛 喜）

解說

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】**ワキ**　高安通俊、**狂言**　同從者、**シテ**　一子俊德丸

【所】攝津國　天王寺

【時】二月

【異稱】題名は普通「よろぼふし」といふが、謠の本文では「よろぼし」といひ、題名も古くは「よろぼし」ともいつた。

【作者】能本作者註文、二百十番謠目錄ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀に「よろぼしのくせ舞、そこしやうねはくせ舞也」といひ、禪竹の五音三曲集に闌曲第二若障體曲味骨味の例として、本曲の【一】シテサシ「それ鴛鴦の衾の下には」からシテ上歌の終り「いざ立ち寄りて拜まん」までを擧ぐ。（現行曲との異同は考異に掲ぐ。）看聞御記に永享四年三月十五日演能のことが見えてゐる。

【梗概】河內國高安の左衞門尉通俊は、人の讒言を信じて、一子俊德丸

を追ひ出したが、さすが不便に思つて、その二世安樂の爲に、天王寺で一七日の施行をした。俊德丸は悲しみの餘り盲目となり、今は弱法師と綽名せられる乞食に落ちぶれて、施行を受ける仲間に立ち交り、天王寺の曲舞を謠ふ。通俊はこれを見て、わが子であることに氣づいたが、人目を憚つて、それとなく日想觀を拜ませると、俊德丸は感興に乘じて、目にこそ見えれ心に映する浦々の風光を賞して狂ひ舞ふ。そのうちに夜も更け人々も立ち去つたので、通俊は父であることを名乘り明かして、高安へ連れて歸る。

【出典】家出して盲目となつた說話に、今昔物語卷四「狗拏羅太子抉レ眼依二法力一得レ眼語」があるが、本曲の典據といふほどのものではない。吉田東伍博士は、太平記卷五「相摸入道弄二田樂一並鬪犬事」に「拍子を替へて歌ふ聲を聞けば、天王寺のやうれぼしを見ばやとぞはやしける」とある「やうれぼし」は弱法師の訛で、田樂に旣に弱法師といふ狂ひ物があつたのであるといつて居られる。申樂談儀にも前揭の通り、弱法師の曲舞は、底性根は曲舞であるといつてゐるが、本曲の曲舞が弱法師を謠つたものでなく、天王寺の來歷を語つてゐるところを見ると、天王寺に集まる弱法師達がこの寺の曲舞を謠つたものであらうか。兎に角、當時天王寺では弱法師が一つの名物であつたので、これを主にして親子再會物を脚色したのであらう。

【概評】本曲の脚色と類似した曲を他に求めると、人の讒言によつて父から追放せられたものに〔雲雀山〕があり、盲目となつて苦しむものに〔蟬丸〕があり、僧となつて雜藝を演じてゐるわが子に再會するものに〔花月〕がある。本曲をそれらに比べると、家庭悲劇としては〔雲雀山〕ほど深刻でなく、盲人としては〔蟬丸〕ほど哀痛でなく、雜藝としては〔花月〕ほど輕快でない。一曲の構想としては、人の讒言、父の後悔、子の盲目、曲舞、日想觀、物狂など種々の要素を含んでゐるに拘らず、その脚色、父子の劇的葛藤は誠に淡々としたものであるが、主人公の性格取扱に於て特異なものがある。主人公俊德丸は少年である。そして父に捨てられて盲目となつた可憐兒である。しかし稚が香に心留める雅情を失つてゐない。日想觀を拜んで、浦々の景致を心に思ひ浮かべる風流者である。運命の不幸兒ではあるが、その闇から悟りを開き得た、悟つたとはいつても靜寂に沈んでしまふのではなくて、風雅にうち興ずる、寂しくてやさしい性格なのである。かうした性格の感得に、本曲の特異な興趣が求められるやうに思ふのである。

【一】

【一】名乘笛にて、ワキ高安通俊、着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の裝束にて出で名乘座に立ち、狂言從者、着附縞熨斗目・

【一】舞臺は攝津國天王寺で、ワキ高安左衞門尉通俊、狂言從者を隨へて登場。

狂言上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて太刀を持ちてワキの後に從ひ、

ワキ「かやうに候者は。河内の國高安の里に。左衛門の尉通俊と申す者にて候。さても某子を一人持ちて候を。さる人の讒言により暮に追ひ失ひて候。餘りに不便に候程に。二世安樂のため天王寺にて一七日施行を引き候。今日も施行を引かせばやと存じ候

といひて眞中へ出で狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言（辭儀して）「御前に候

ワキ「今日滿參にてある間。猶々施行を引き候へ

狂言「畏つて候

ワキ脇座へ行きて下に居り、狂言は名乘座に立ちて、

狂言「皆々承り候へ。左衛門の尉通俊殿の施行は今日滿參にて候ぞ。急いで罷り出で施行を受け候へ〳〵

や

といひて地謠座前に坐す。

通俊「私は河内國高安の里に住んでゐる左衛門尉通俊といふ者です。さて私は子を一人持つてゐたのですが、或人の讒言を信じて、夕暮に人知れず追ひ出してしまつたのです。しかし、思へば餘り可哀想なので、その子が現世では安穩に暮らし、後世では極樂往生の出來るやうに祈つて、天王寺で七日間の施しをしてゐるのです。今日も施し物をやらせようと思ひます」

と見物人に自己紹介をし、從者に人々に施しをするやうにといひつける。

○高安の里—河内國中河内郡、今南北中の三村に分る。大阪市から約三里東南の地

○左衛門の尉通俊—假作の人名。

○さる人—或人。繼母と解せられる。

○不便—かわいさう。

○二世安樂—現世安穩、後生善所。

○天王寺—大阪市荒陵の東の丘上にある四天王寺。もと聖德太子が持國・增長・廣目・多聞の四天王に祈つて、物部守屋を誅伐せられた報恩に、難波玉造の岸に創建し給ひ、推古天皇元年今の地に遷されたもの。

○施行を引き—施行は人に物を施して善根を積む行法。引くは與へること。

【二】

一聲の囃子にて、シテ俊徳丸、面弱法師・黒頭・黒地錦卷・襟淺黄・着附無色縫箔・紺水衣・腰帶・扇の裝束にて、盲杖をつきながら橋懸に出で、三の松にて正面に向き、

シテ「一聲」出入の。月を見ざれば明暮の。夜の境をえぞ知らぬ。「二句」難波の海の底ひなく。深き思ひを。人や知る

シテサシ「それ鴛鴦の衾の下には。立ち去る思ひを悲しみ。比目の枕の上には波を隔つる愁ひあり。況んや心あり顏なる。人間有爲の身となりて。憂き年月の流れては。妹背の山の中に落つる。吉野の川のよしや世と思ひも果てぬ心かな。淺ましや前世に誰をか厭ひけん。今又人の讒言により。不孝の罪に沈む故。思ひの涙かき曇り。盲目とさへなり果てて。生をもかへぬ。この世より。中有の道に。迷ふなり（と面を伏せ）

シテ下歌「もとよりも心の闇はありぬべし。上歌「傳

【二】

シテ一聲にて俊徳丸、盲目の俊徳丸登場

俊徳 目が見えないで、月の出入も見ることが出来ないので、いつ夜が明けるやら、いつ日が暮れるやら、夜の境目も分らないのだ。かうして自分は難波の海のやうな限りもない深い歎きに沈んでゐるのだが、誰もこの心持を知つてくれるものはないのだ。

夫婦親子の愛情は如何たるものにてもあるもので、鴛鴦は夫婦共寢をしてゐても、別れる時の淋しさを思つて悲しみ、ひらめは夫婦竝んで寢てゐても、波の爲に隔てられはしないかと心配するのである。鳥や魚でさへもこの通りなのだから、まして愛欲の情のある、煩惱に支配せられてゐる人間の身に生まれたものが、親子の情をせかれて、辛い年月を過してゐては、――

『流れては妹背の山の中に落つる、吉野の川のよしや世の中』

（吉野川の流れが、妹山・背山の中へ落ちて隔てるやうに、人間男女の間も、いつも睦まじい時ばかりではないのだ。しかしそれも世の中の習はしで、是非ないことだ。）

などといふやうに、あつさりとあきらめてしまふわけにはいかないのだ。あゝわれながら淺ましいことだ。自分は前世で誰を厭ひ嫌つた爲に、このやうな報いを受けることとなつたのであらう。今人の讒言によつて、不孝の罪に沈み、悲しみの涙に目は曇つて、終には盲目にさへな

【二】

○出入の――盲目で明暮の月の出入も知らないとの意。

○底ひなく――そこへ（退き方）無くの轉。どこまでも際涯なく。

○鴛鴦の衾の下には――以下「波を隔つる愁へあり」まで〔砧〕にも同じ文がある。その出所は未詳。もと夫婦の戀愛を喩へたものであるのを、こゝでは親子の愛情の喩へとした。

○比目――ひらめ魚。

○心あり顏――こゝでは愛欲の情のある意。

○有爲の身――因緣によつて生じた、諸現象に支配せられる身。

○流れては妹背の山の中に落つる――古今集讀人知らずの歌。下句「吉野の川のよしや世の中」。妹背の山は紀伊國那賀郡にある。

○思ひも果てぬ――右の歌のやうにあきらめきれない。

○生をもかへぬこの世より――死んだ後の來世までもなく、まだ死なぬ内から。

○中有の道――死んだ後、未だ次の生を受けない間。中陰。觀世以外は「中有の闇」と謠ふ。

○心の闇――迷ひの心を喩へた語。後撰集藤原兼輔の歌

へ聞く。かの一行の果羅の旅。かの一行の果羅の旅。闇穴道の巷にも。九曜の曼荼羅の光明。赫奕として行末を照らし給ひけるとかや（と舞臺に進み）。今も末世といひながら。さすが名に負ふこの寺の（仕手柱を行き越し）。佛法最初の天王寺の石の鳥居ここなれや（と杖の先にて仕手柱を探り當てて）。立ち寄りて拜まんいざ立ち寄りて拜まん

と常座に立つ。ワキ立ちて正面に向き、

【三】

ワキ「頃は二月時正の日。誠に時ものどかなる。日を得て遍き貴賤の場に。施行をなして勸めけり

シテ「げにありがたき御利益。法界無邊の御慈悲ぞと。踵を接いで群集する（と二足つめ）

ワキ「や（とシテを見て）。これに出でたる乞丐人は。いかさま例の弱法師よな

シテ「又我等に名をつけて。皆弱法師と仰せある

に「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな」

○一行の果羅の旅—唐の高僧一行阿闍梨が果羅國に流され、闇穴道に入つた時、九曜星に照らされたといふ故事、委しくは本曲の末に記す。果羅國は火羅國とも書く。西域にあつた國といふ。

○九曜の曼荼羅—日月火水木金土の七星及び羅睺、計都の二星の九曜星とこれに屬する神像を描いた佛畫。曼荼羅は梵語Mandalaで、圓輪具足と譯す。佛の種々相を描いたもの。

○末世—釋迦が入滅して佛法の衰へた時代。

○佛法最初の—天王寺はわが國の佛法の流布した最初の寺である。

○石の鳥居—西門外にあり永仁二年釋忍性の建造したもの。

【三】

○時正の日—晝夜の時間の等しい日で、陰曆二月八日、彼岸の中日。この日天王寺の西門から拜む入日の方角が正に極樂に當るといふので、古來こゝに參拜する人が多く、彼岸會もこれから起つたものともいふ。日想

つてしまつて、まだ死なない前から、生きながらにして中有の道に迷つてゐるのだ。いや人は盲目とならないでも、迷ひの心、心の闇はあるのだ。しかし、話に聞けば、かの一行阿闍梨は流されて果羅國に赴き、眞暗な闇穴道に入つたが、九曜の佛達が赫奕たる光明を放つて、その行先をお照らしになつたといふことだ（といひながら寺に近づき）。末世といひながら、今でも佛德の盛んな有名なこのお寺、佛法の最初に行はれた天王寺の、石の鳥居はここらしい。さあ傍へ行つて拜まう」

（といひつゝ寺に入る。）

【三】

通俊「今日は二月彼岸の中日、折よく空も晴れ渡つたのどかな日だから、貴い人も賤しい者も皆集まつて來る。その群集してゐる所で、人々に施しをするのだ」

俊德「おゝありがたい佛の御利益、はてしもない廣大な佛のお慈悲を仰いで、引きもきらずうち續いて、人々が寄り集まつてくることだ」

（と俊德も群集の場所に入る。父通俊はこれを見て、）

通俊「やあ、こゝへ出て來た乞食は、なる程例の弱法師だな」

俊德「皆の人が私達にあだ名をつけて弱法

觀の語釋參照。
○日を得て―善い日に逢ひ得て。
○利益　衆生を利益する惠み。
○法界無邊―法界は事理物心すべての世界、無邊は限度のないこと。觀世以外は「法界無緣」と謠ふ。
○乞丐人―乞食。もの貰ひ。
○弱法師―よろぼふ法師の意。よろ〳〵として歩く盲目又は老衰の乞食坊主を罵つていふ普通名詞。
○足弱車―車輪の弱い進みの遲い車。
○片輪―車の片輪を不具者のかたはにいひかけた。
○心ありげに　風雅な心があるらしく。
○うたてやな―雅情のない興ざめたことだ。
○難波津の春ならば―古今集序に―難波津に咲くやこの花冬籠り今を春べと咲くやこの花―とあるから、殊に難波では梅などと斷らずとも、單にこの花といへばよいといふ意。
○梅花を折つて―和漢朗詠集橘在列の詩句―折二梅花一而挿レ頭、二月之雪落レ衣―を引いた。二月の雪は梅の花だから。

ぞや。「げにもこの身は盲目の。足弱車の片輪ながら。よろめきありけば弱法師と、名づけ給ふは理なり

ワキ「げにいひ捨つる言の葉までも。心ありげに聞ゆるぞや。まづまづ施行を受け給へ

シテ「あらありがたや候。や（と大小前の方へ向き）、花の香の聞え候。いかさまこの花散りがたになり候な（と見上ぐ）

ワキ「おうこれなる籬の梅の花が、弱法師が袖に散りかかるぞとよ

シテ「うたてやな難波津の春ならば。ただこの花とこそ仰せあるべきに。「今は春邊も半ばぞかし。梅花を折つて頭に挿しはさまざれども。二月の雪は衣に落つ。あら面白の花の匂ひやな

ワキ「げにこの花を袖に受くれば。花もさながら

師と仰しやることだ。しかし　なる程目分は盲目で、片輪の足弱車のやうに、足の運びの悪い不具者で、よろ〳〵として歩くのだから、弱法師と名づけられるのも尤もなことだ」

通俊「おゝこの男は、一寸いふ言葉までが、普通の乞食とは違つて、風雅な心がありさうに思はれることだ。それは兎に角、まあ施しをお受けなさい」

俊德「ありがたうございます（と通俊の前に出かけて）。おや、花の香がする。なる程この花が散り出して來たのだな」

通俊「おゝ、この垣根の梅の花が弱法師の衣の袖に散りかゝつたわ」

俊德「まあ無風流な。他所ならば兎に角、この難波津では、梅などとはいはず、ただ單にこの花と仰しやればよいものを。今は丁度春の眞盛りだ。別段古詩の句のやうにわざ〳〵梅花の枝を折つて頭に挿しはしないのだけれど、二月の雪――落花が衣に散りかゝる。おゝ面白いよい匂ひだ」

通俊「いかにもこの花を袖に受ければ、花

○花もさながら―落花も米錢と同樣施行の一となる。
○なかなかのこと―然りといふ意の時代語。
○草木國土―中陰經にありといふ四句偈文「一佛成道、觀見法界、草木國土、悉皆成佛」
○御法も施行―米錢の施行ではなく、佛の道を敎へ施すこと。
○梅衣―梅襲の衣の意ではない。木葉衣などと同じ用法で、梅の花の散りかゝつた衣をいふ。張るにいひかけて春の序とした。
○なにはの事か―後拾遺集宮木の歌「津の國のなにはの事か法ならぬ遊び戯れまでとこそ聞け」を引いた。
○誓ひの網―苦海に溺れる衆生を救ふ佛の誓願を網に喩へた語。
○盲龜―法華經妙莊嚴王本事品に「佛難レ得レ値、如二優曇波羅華一、又如三一眼之龜値二浮木孔一」不遇な盲目の身を盲龜に比べて引いたのである。

施行ぞとよ
シテ「なかなかのこと草木國土。悉皆御法も施行なれば
ワキ『皆成佛の大慈悲に
シテ『洩れじと施行に連なりて
ワキ『手を合はせ
シテ『袖を廣げて

とシテ水衣の左袖を右手にて持ち添ふ。ワキ扇を開き、次の地上歌にかけてシテの前へ行き施行の心にて扇にてシテの袖の上へあけ、脇座に歸り下に居る（狂言も施行す）

地上歌『花をさへ。受くる施行の色々に。受くる施行の色々に（シテ袖を直し）。匂ひ來にけり梅衣の。春なれや（と五六足前へ出で）。なにはの事か法ならぬ。遊び戯れ舞ひ謠ふ。誓ひの網には洩るまじき。難波の海ぞ頼もしき（と正面を見る心）。げにや盲龜の我等まで（大小前へ向き）。見る心地する梅が枝の

も施しの一つとなるのだ」
俊德「その通りです。草も木もすべてのものが、佛の施しを受けるもので……」
通俊「皆佛の大慈悲によつて成佛するのだ……」
俊德「私もその慈悲に洩れないやうにと思つて、施しを受ける仲間に入り、手を合はせ袖を廣げて、色々の施し、梅の花をさへ受けるのです。――

おゝ、よい香が匂つてくる。梅の花が衣に散りかゝる春の眞盛りだ。すべての事、何事でも佛法に適はないものはなく、私達の遊び戯れ舞ひ謠ふことまでが、佛の御趣旨に適つて、その御濟度を受けることが出來るのであらう。このやうな廣大な御惠みはほんとに頼もしいことだ。經文に、佛の敎へに逢ひがたいことの喩へに引かれた盲龜と同樣な、盲目の私達にも、佛の御光によつて、梅の花が見え

【四】
○佛日—釋迦を日輪に喩へた語。
○慈尊—彌勒菩薩。
○三會—今都率の内院にある彌勒菩薩が釋迦入滅後五十六億七千萬年してこの世に現れ、衆生濟度の爲に行ふ三度の法會。
○中間—前佛（釋迦）が死んで後佛（彌勒）の現れるまでの時間。
○心を延ばへ—「延ばへ」は延べの延言。心を延べ樂しませること。
○上宮太子—聖德太子。皇居の南の上宮に住み給うたので上宮とも申す。推古天皇の皇太子となり萬機を攝政して、國政を革新し佛教を興隆し給うた。
○僧尼の姿を—佛教に反對した物部方の捕虜男女二百七十三人を教化して僧尼となし給うたことをいふ。
○金堂—一寺の本尊を安置する本堂。
○如意輪—六觀音の一、如意輪觀音。如意輪を轉じて衆生に福德を授ける觀音。
○救世觀音—世間苦を救ふ觀世音。救世は觀音の汎稱である。

（香を聞く心。）花の春ののどけさは難波の法によも洩れじ難波の法にも洩れじ

と舞臺の眞中に出て下に居る。

【四】
地ツリ それ佛日西天の雲に隱れ。慈尊の出世遙かに。三會の曉。未だなり
シテサシ 然るにこの中間に於て。何と心を延ばへまし
地 ここによつて上宮太子。國家を改め萬民を教へ。佛法流布の世となして。普く惠みを弘め給ふ
シテ 然れば當寺を御建立あつて
地 始めて僧尼の姿を顯し。四天王寺と。名づけ給ふ
（居クセ）
地クセ 金堂の御本尊は。如意輪の佛像。救世觀音

るやうな心持がすることだ。この花盛りの、のどかな春のやうな佛法の惠みには、誰も洩れはしないだらう」

【四】
（地謠は佛德をたゝへて、次のやうな曲舞を謠ふ）
佛日、前佛の釋迦如來は西天の雲に隱れるやうに入滅なされ、後佛の彌勒菩薩がこの世に現れて、龍華樹下で三度の法會をなさるのは、まだ〳〵遠い未來のことだ。我々はこの前佛と後佛との間、佛のない時代に生まれたのであるから、何によつて心を延ばし樂しませることが出來よう。
そこで、聖德太子がこれを濟ふ爲に、國家の政を改革し、萬民に教へを垂れ、佛法の行はれる世の中として、普く佛の惠みをお弘め遊ばしたのである。
即ちこの寺を御建立になつて、始めて僧及び尼を置き、これを四天王寺とお名づけになつた。——
この御本堂の御本尊は如意輪觀音で、ま

○震旦―支那。
○思禪師―支那天台の第二祖南岳の慧思禪師。太子をこの禪師の御再生とすること元亨釋書等に見ゆ。
○出離の佛像―本尊如意輪觀音が百濟國から渡來したことをいふ。
○日域―日本。
○御作りの品々―建築の材料をいふ。
○赤栴檀―香木の一種。法華經分別功德品に「以赤栴檀作諸宮殿」
○塔婆―塔。五重の塔をさす。
○金寶―塔の屋上に飾る金色の九輪の意であらう。
○閻浮檀金―閻浮樹の下の河から出る沙金。最上の金。閻浮は印度にある木の名。檀は河の意。
○萬代に―後拾遺集雜の乳母の歌「萬代をすめる龜井の水やさは富の小川の流れなるらん」を借りた。龜井の水は寶藏の南にあり、白石玉出水又は影向の水ともいふ。
○水上―佛法の起原をいふ。
○西天―西方天竺。
○無熱池―阿耨達池、大雪山の北にあり、金銀等を以て岸となし、清涼水を出すといふ想像上の池。

とも申すとか。太子の御前生。震旦國の思禪師にて。渡らせ給ふ故なり。出離の佛像に應じつつ。今日域に至るまで。佛法最初の御本尊と。顯れ給ふ御威光の。眞なるかなや末世相應の御誓ひ。然るに。當寺の佛閣の。御作りの品々も。赤栴檀の靈木にて塔婆の金寶に至るまで。閻浮檀金なるとかや

シテ「萬代に。すめる龜井の水までも

地「水上清き西天の。無熱池の。池水を受けつぎて流れ久しき代々までも五濁の人間を導きて。濟度の船をも寄するなる（杖を持ちて立ち）。難波の寺の鐘の聲（面を伏せて聞き）。異浦々に響き來て。普き誓ひ滿潮の。おし照る海山も皆成佛の姿なり

【五】ワキ立ちて正面に向き、

ワキ「あら不思議や。これなる者をよくよく見候

た救世觀音とも申すのである。聖德太子の御前生が支那の思禪師で、生をかへてこの日本にお渡りになつたのであるからまた御本尊もこれに應じて、その本國の百濟國を離れて、日本に渡り、わが國佛法の最初に行はれたこの寺の御本尊としてお顯れになり、御威光をお放ちになつたもので、まことにその御誓願は末世に相應した實にありがたいものなのである。このやうな次第で、この寺の佛殿建築の材木も赤栴檀といふ靈木を用ゐられ、五重塔の金の寶輪まで、結構な閻浮檀金で作られたものだといふことである。それから、いついつまでも透りたく澄んでゐる龜井の水も、その水源は西天竺の無熱池の清らかな水から發したもので、その流れの絶えないやうに、いつの時代までも五濁に惡化して行く人間を導き濟つて極樂の彼岸に渡されるのである。なほ又天王寺の鐘の聲は遠い他所の浦々へまでも響き渡つて、佛の誓願の普く廣いことを示し、潮の寄せる難波の海も山もすべてが成佛の姿を示してゐるのである」

【五】（ワキ立つ。通俊はこれを聞いてゐて、）

通俊「これは不思議だ。この者をよく見る

へば。某が追ひ失ひし子にて候はいかに。思ひの餘りに盲目となりて候。あら不便と衰へて候ものかな。人目もさすがに候へば。夜に入りて某と名乘り。高安へ連れて歸らばやと存じ候

（この間にシテの仕手柱先へ出るを見かけて、）

ワキ「やあいかに日想觀を拜み候へ

シテ「げにげに日想觀の時節なるべし（とワキへ向き）、盲目なればそなたとばかり（少し正面へ出で）。『心あてなる日に向ひて（幕の方へ向き下に居り）。東門を拜み南無阿彌陀佛（と合掌す）

ワキ「なに東門とは謂れなや。ここは西門石の鳥居よ

（この間にシテ立ちて常座へ行き、）

シテ「あら愚かや天王寺の。西門を出でて極樂の。東門に向ふは僻事か

ワキ「げにげにさぞと難波の寺の。西門を出づる

と、自分が追ひ出した子であつた。これには驚いた。悲しさの餘りの盲目となつたのだ、おゝ可哀想にひどく痩せ衰へたものだ。今すぐ名乘つては外聞にもかゝはるから、夜になつてから、自分だと名乘つて、高安へ連れて歸りませう」

（と獨言をいふ。俊徳丸はやうやく牀几から立ちあがらうとするに、通俊は呼び留めて、）

通俊「おい、入日を拜みなさい」

俊徳「いかにも入日の時刻でせう、盲目のことですから、方角もよくは分らないが、あて推量に、入日はそちらだらうと思ふ方に向いて、東門を拜み、南無阿彌陀佛を唱へませう」（と合掌する）

通俊「なんだと、東門とは分らないことをいふ。こゝは西門の石の鳥居だよ」

俊徳「あなたこそ分らないことを仰しやる。天王寺の西門を出て、極樂の東門に向ふといふのが、間違ひでせうか」

通俊「いかにもその通り、天王寺の西門、

○五濁—人間の身心に起る劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五つの惡い事。

○濟度の船—佛が衆生を濟つて極樂の彼岸に渡すことを舟に喩へた語。

○難波の寺—天王寺の別名

○普き誓ひ—鐘の善く響き渡るを佛の惠みによそへ、その滿ち渡るを滿潮にいひかけた。

○おし照る—難波の枕詞であるのを直に難波の意に用ゐた。

【五】

○日想觀—觀無量壽經に、釋尊が韋提希夫人に極樂往生を願ふものの修行として教へたといふ十六觀法の初觀で、西に向つて正坐し日沒の相狀を觀て、淨土を觀想すること。

○心あてなる—入日の方角をあて推量に考へてといふ意。

○極樂の東門—天王寺西門の聖德太子自筆と傳へてゐる額に「釋迦如來轉法輪處、當極樂土東門中心」などとあり、天王寺の西門は極樂の東門と相對すといはれてゐる。

○阿字門―阿は梵語四十二字母の第一で、佛門で最も尊ぶ文字。阿字門は最も大切な門といふ意。
○彌陀の御國―阿彌陀如來の御國、極樂淨土。
○入日の影も舞ふ―時正の日には日輪が廻轉しながら沒するといふのを舞ふといつたのである。
【六】
○難波江に―疑ひもなしといひかけた。
○江月照らし―唐の永嘉大師(玄覺)の證道歌「江月照松風吹、永夜淸宵何所ㇾ爲」を引いた。
○住吉の松の隙より眺むれば月落ちかかる淡路島山 源三位頼政の歌。家集には第二句「松の木間より」とある。

石の鳥居
シテ『阿字門に入つて
ワキ『阿字門を出づる
シテ『彌陀の御國も
ワキ『極樂の
シテ『東門に。向ふ難波の西の海
地『入日の影も。舞ふとかや
【六】
シテ「あら面白やわれ盲目とならざりし前は。弱法師が常に見馴れし境界なれば『なに疑ひも難波江に。江月照らし松風吹き。永夜の淸宵何のなすところぞや（と拍子を踏み）
〔イロヘ〕
を舞ひて常座に立ち、
シテワカ『住吉の。松の隙より。眺むれば
と謡ひ、次の謡に合せて舞ふ（物狂）
地『月落ちかかる。淡路島山と

石の鳥居を出れば……」
俊德「やがて最も貴い門、極樂の東門に入ることとなるのでして……」
通俊「この世に於ける最も貴い門、天王寺の西門を出れば……」
俊德「そのまゝ阿彌陀如來の御國極樂淨土の東門に向ふこととなるのでして、あの極樂の方、難波の西の海のかなたでは、入日も極樂の姿をうつして、舞を舞つてゐるのです」
【六】
俊德「あゝ面白いことだ。このあたりは私がまだ盲目とならなかつた前には、いつも見馴れてゐた所なので、はつきりと知つてゐるのだが、難波江に月影が映じ、松風が吹き渡る、春の夜長の淸らかな景を眺めては、何の邪念も起りはしないのだ」
〔イロヘ〕
風光を賞し舞ひ、物狂ひらしい心持になつて、
俊德「歌に——
『住吉の松の隙より眺むれば、月落ちかかる淡路島山』
（住吉の岸の松の木の間から遙々と眺め渡すと、淡路島のあたりへ月が入りかゝつてゐる、
と詠まれてあるが、それは月の入る様を

シテ「詠めしは月影の、今は入日や落ちかかるらん。
地「日想觀なれば曇りも波の。淡路繪島、須磨明石、紀の海までも。見えたり見えたり、滿目青山は、心にあり
シテ「おう。見るぞとよ見るぞとよ
地「さて難波の浦の致景の數々
シテ「南はさこそと夕波の。住吉の松影
地「東の方は時を得て
シテ「春の綠の草香山
地「北はいづく
シテ「難波なる
地「長柄の橋の徒らにかなた、こなたとありく程に、盲目の悲しさは。貴賤の人に行きあひの（日
（附柱の方へよろ〳〵と行き）轉び漂ひ難波江の（たら〳〵と

○詠めしは月影の―右の歌は月の入る景を詠んだのであるが、今見るのは入日の景であるとの意。
○曇りも波の―曇りもなきを波に、波の泡を淡路にいひかけた。
○繪島―淡路島の海邊にある岩島。
○須磨・明石―須磨は攝津國武庫郡、明石は播磨國明石郡。
○紀の海―紀伊の海。
○滿目青山―黃檗山斷際禪師の傳心法要に「心外無法、滿目青山」
○見るぞとよ―目には見えないが、心には見えるぞ。
○致景―風景。
○さこそと夕波の―さこそ美しからんと言ふを夕波にいひかけ、波の澄むを住吉にいひかけた。
○住吉―攝津國東成郡、今大阪市に入る。
○時を得て―春の季節に逢つて。
○草香山―草香、日下とも書く。河内國中河内郡生駒山の北。〔蘆刈〕參照。
○長柄の橋―攝津國西成郡今の豐崎村にあつた。
○徒らに―橋の板をいひかけた。
○行き合ひの―新古今集住

詠んだものであるが、今は夕日が入りかからうとしてゐるのであらう。日想觀はたゞ目で見るのではない、心で見るのであるから、自分のやうな盲目の者にも、少しの曇りもなく、美しい淡路繪島も、須磨も明石も、紀伊の海までもよく見えるのだ。すべての風光が皆心の中に描き出されるのだ。

おゝよく見える、よく見える。

この難波の浦から見渡される景色の數々を擧げれば、

南には評判の高い、夕波の岸邊に打ち寄せる住吉の松があり、

東の方には、今丁度春の季節のこととて、綠の濃い草香山があり、

さて又北の方には、難波の長柄の橋があつたが、それは徒らに朽ち果ててしまつたのだ。

そして自分も徒らにあちらやこちらへと歩きまわるうちに、盲目の悲しさには、貴い方や賤しい人に突き當つてはころび、足もとがよろ〳〵としてゐるので、いかにもあれかは〳〵との弱法師だと人か

下り杖を捨て安坐)。足もとはよろよろと(杖を探りて立ち上り足下りつ)。げにも眞の弱法師とて。人は笑ひ給ふぞや。思へば恥かしやな今は狂ひ候はじ今よりは更に狂はじ(と兩手を打合して下に居る)

【七】

ワキシテに向きて、

地ロンギ 今ははや、夜も更け人も靜まりぬ。如何なる人の果やらん。その名を名乘り給へや

シテ 思ひよらずや誰なれば。わが古を問ひ給ふ。高安の里なりし。俊德丸が果なり

地 さては嬉しやわれこそは。父高安の通俊よ

シテ そも通俊はわが父の。その御聲と聞くよりも

地 胸うち騷ぎあきれつつ

シテ こは夢かとて(と杖を探りて立ち)

地 俊德は。親ながら恥かしとてあらぬ方へ逃げ

吉明神の神詠「夜や寒き衣や薄きかたそぎの行合のまより霜や置くらむ」により、まろびと續けた。
○足もとは—難波江の蘆といひかけた。
○更に—全く。決して。

【七】
○あらぬ方—父のゐない方

お笑ひになるのだ。思へば恥かしいことだ。もうこれからは狂ひますまい。これからは決して狂ひますまい」(といつて坐る)。

【七】

通俊「今はもう夜も更け、人も皆歸つてしまつて、誰に遠慮することもいらない。一體そなたはどういふ人のなれの果なのだ、名をお名乘りなさい」

俊德「これは思ひがけない、どなたなれば私の素性をお尋ね下さるのです。私はもと高安の里に住んだ俊德丸のなれの果です」

俊德「やはりさうであつたか、おゝ嬉しい。自分は父の高安の通俊だよ」

俊德「えゝ、通俊と仰しやると、私の父上の……」

と、父上の御聲と聞くや否や、餘りの意外さに、胸もどきどきして、

通俊「これは夢であらうか。わが親ながらこのやうな姿を見られて恥かしい」

と、俊德丸は父を避けて逃げて行くと、

○何をか包む—何も包み隱す必要はない。何をか、難波寺と同じ音を重ねた。
○夜まぎれ—夜の暗さに紛れ忍んで。

行けば（ト常座へ逃げ行き）。父は追ひつき手を取りて（ワキ跡を追ひてシテの左袖を提へ）。何をか包む難波寺の鐘の聲も夜まぎれに（眞中へ行きて向合ひ）。明けぬさきにと誘ひて高安の里に、歸りけり高安の里に歸りけり

「明けぬさきにと」とシテ高安へ歸る心にて幕へ入り、ワキ「高安の里に歸りけり」と仕手柱先にて喜びの心にてゆうけん扇して留む。

父はこれを追ひかけ、その手をとつて、〔通釋〕何を遠慮することがいるものか。と、天王寺の鐘が響き渡つて、夜も深くたつたくらやみに紛れて、〔通釋〕さあ夜の明けない前に歸らうと、わが子を連れて高安の里に歸つた。

〔考異〕

諸流（五流）

【一】シテ二句「難波の海の底ひなく深き思ひを人や知る（寶ナシ）……　【三】シテ「あらありがたや候　寶下懸受け參らせ候はん」や花の香の聞え候いかさまこの花散りがたになり候な（下懸ナシ）

古諸本（元祿八年本）

【三】ワキ「げにいひ捨つる言の葉までも心（元情）ありけ……シテ「あらありがたや候（元請參らせ候はん）　【四】地ク「それ佛日……慈尊の出世遙かに（元またはるか）……シテサシ然るに……何と心を延ばへ（元の）まし……クセ金堂の御本尊は……渡らせ給ふ故なり（元ナシ）……　【五】ワキ「なに（元や）東門とは……

五音三曲集

【二】シテサシ「それ鴛鴦の……人間有爲の身となりて（五むまれ）……よしや世と（五も）思ひもはて（五わか）ぬ心かな……中有の道（五ちごくのたび）に迷ふなり。下歌「もとよりも（五の）心の闇は……上歌「傳へ聞く……立ち寄りて拜ま（五まいら）んいざ立ち寄りて拜ま（五まい

いらん。

附記

○一行の果羅の旅―平家物語巻二「一行阿闍梨の事」に、「昔唐土の一行阿闍梨は玄宗皇帝の御持僧にておはしけるが、玄宗の后楊貴妃に名を立ち給へり。昔も今も、大國も小國も、人の口のさがなさは、跡方もなき事なりしかども、その疑ひによつて果羅國に流されさせ給ふ。件の國へは三つの道あり、輪地道とて御幸道、幽地道とて雑人の通ふ道、闇穴道とて重科の者を遣はす道なり。さればかの一行阿闍梨は大犯の人なればとて、闇穴道へぞ遣はされける。七日七夜が間、月日の光も見ずして行く所なり。冥々として人もなく、江浦に前途迷ひ、森々として山深し、たゞ澗谷に鳥の一聲ばかりにて、苔の濡衣ほしあへず、無實の罪によつて、遠流の重科を蒙り給ふ事を、天道憐み給ひて、九曜の象を現じつつ、一行阿闍梨を守り給ふ。時に一行右の指をくひ切り、左の袂に九曜の象をうつされけり。和漢兩朝に眞言の本尊たる九曜の曼荼羅これなり。

雷電（らいでん）　觀（寶剛喜）

解説

【能柄】五番目　複式劇能

【人物】ワキ　法性坊、前シテ　菅公の靈、狂言　法性坊從者、後シテ　雷神（菅公の怨靈）

【所】前段　近江國比叡山、後段　京都御所

【時】平安初期（八月）

【異稱】寶生流では「來殿」、金剛流では「妻戶」といふ。

【作者】作者未詳。演能に關する古記錄も見當らない。

【梗概】比叡山延曆寺の座主法性坊尊意僧正が仁王會を執行してゐると夜更けて、菅公の靈が訪れ、在世當時の師恩を謝し、種々うち解けて語り合つた後、「自分は雷となつて內裏に飛び入り、自分に辛く當つた公卿殿上人を蹴殺さうと思ふ。その時僧正を召されるであらうが、決して參內せられるな」といふ。僧正が「一二度までは參るまいが、三度にも及べば參らなければならない」と答へると、菅公は怒つて、本尊に供へてあつた柘榴を嚙み碎いて、妻戶に吐きかけ、火焰を起したが、

僧正に灑水の印を結んでこれを消し止め、菅公の靈は煙に紛れて消え失せる。やがて、僧正が召されて紫宸殿に參内すると、菅公の怨靈は雷神となつて現れ、僧正を避けながら、内裏の彼方此方に物凄く鳴り轟いたが、千手陀羅尼の功力によつて、その威力も衰へた上、帝から天滿大自在天神と贈官を賜はつたので、怨靈も死後の恩寵を拜謝して、黒雲に乘つて空に上つて行つた。

【出典】太平記卷十二「大内裏造營事附聖廟御事」に、

抑もかの天滿天神と申すは、風月の本主、文道の大祖たり。……その始めを申せば、菅原宰相公是善卿の南庭に、五六歳ばかりなる小兒の容顏美麗なるが、前栽の花を詠じて、唯一人立ち給へり。菅相公怪しと見給ひて「君はいづれの所の人、誰が家の男にておはしますぞ」と問ひ給ふに、「われは父もなく母もなし、願はくは相公を親とせんと思ひ侍るなり」と仰せられければ、相公嬉しく思し召して、手づからかき懷き奉りて、鴛鴦の衾の下に、恩愛の養育を事としてはごくみ奉り、御名を菅少將とぞ申しける。……同年(菅公薨去の延喜三年)夏の末に、延暦寺第十三の座主法性坊尊意贈僧正、四明山の上、十乘の床の前に觀月を照らし、心水を清めおはしけるに、持佛堂の妻戸をほと〳〵と敲く音しければ、押し開きて見給ふに、過ぎぬる春筑紫にて正しく薨逝し給ひぬと聞えし菅丞相にてぞ御座しける。僧正怪しく思して、「まづ此方へ御入り候へ」と誘ひ奉り、「さても御事は、過ぎにし二月二十五日に筑紫にて御隱れ候ひぬと慥かに承りしかば、悲歎の涙を袖にかけて、後生菩提の御追善をのみ申し居り候處に、少しも替らぬ元の御形にて御入候へば、夢幻の間辨へ難くこそ覺えて候へ」と申されければ、菅丞相御顏にはら〳〵とこぼれてかゝりける御涙を押し拭はせ給ひて、「われ朝廷の臣となつて、天下を安からしめん爲に、暫く人間に下生する處に、君時平公が讒を御許容あつて、終に無實の罪に沈められぬる事、瞋恚の焰劫火より盛んなり。これによつて五蘊の形は壞ると雖も、一靈の神は明かにして天に在り。今大小神祇梵天帝釋四王の許を得て、その恨を報せん爲に、九重の帝闕に近づき、われにつらかりし佞臣讒者を一々に蹴殺さんと存ずるなり。その時定めて山門に仰せて、總持法驗を致さるべし。たとひ勅諚ありと雖も、相構へて參内あるべからず」と仰せられければ、僧正の曰く、「貴方と愚僧と師資の義淺からずと雖も、君と臣と上下の禮尚深し。勅請の旨一往辭し申すと雖も、度々に及ばばいかでか參内仕らで候べき」と申されけるに、菅丞相御氣色俄かに損じて、御前にありける柘榴を取つてかみ摧き、持佛堂の妻戸に颯と吹きかけさせ給ひければ、柘榴の核猛火となつて、妻戸に燃えつきけるを、僧正少しも騷がず、燃ゆる火に向ひ灑水の印を結ばれければ、猛火忽ちに消えて、妻戸は半ば焦げたるばかりなり。この妻戸今に傳はつて山門に在りとぞ承る。その後菅丞相座席を立つて、天に昇らせ給ふと見

えければ、やがて雷内裏の上に鳴り落ち鳴り騰つて、高天も地に落ち大地も裂くるが如し。一人百官身を縮め魂を消し給ふ。……法性坊の贈僧正を召さる。一兩度までは辭退申されけるが、勅宣三度に及びければ、力なく下洛し給ひけるに……僧正參内し給ふより、雨止み風靜まりて、神の忿りも忽ちに宥まり給ひぬと見えければ、僧正叡感に預つて登山し給ふ。……神慮尚も御納受なかりけりと驚き思し召して、一條院より正一位太政大臣の官位を賜はらせ給ふ。勅使安樂寺に下つて、詔書を讀み上げける時、天に聲あつて、一首の詩聞えたり。

昨爲北闕蒙悲士、今作西都雪恥尸、生恨死歡其我奈、今須望足護皇基

その後よりは、神の瞋りも靜まり、國土も隱かなり。

とあるに據つた。

【概評】題材は前掲太平記の記事をそのまゝ採つたもので、作者の見解で新しく構想した點はないが、師弟情誼の描寫が原據よりは數段深く且つ鮮やかである。脚色の形式も類型を離れた自由なものであるが、手際よく滑かに纏められてゐる。作の内容はともかく、その脚色行文は餘り拙いものとは思はれない。——寶生流では、德川時代、その有力なる保護者加賀前田侯が菅公の後であるので、その祖神を雷電とすることを憚つて、後段を全く作りかへ、題名も「來殿」と書きかへた。考異參照。

【一】前段

舞臺は近江國延暦寺。——法性坊登場。

法性「私は比叡山延暦寺の座主、法性坊尊意僧正です。さて私は天下泰平の御祈禱の爲、百座の護摩を焚いてゐたのですが、今日は丁度滿了となるので、これから仁王會を執行したいと思ふのです」

（見物人へ自己紹介をし、

【一】ワキ法性坊、角帽子・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り眞中に立ち、

ワキサシ「比叡山延暦寺の座主。法性坊の律師僧正にて候。さてもわれ天下の御祈禱のため。百座の護摩を焚き候が。今日滿參にて候程に。やがて仁王會を執り行はばやと存じ候

【一】○比叡山延暦寺—比叡山は近江山城の兩國に跨る山。山上の延暦寺は延暦七年桓武天皇の勅願により、王城の鎭護として傳教大師の創建した寺。天台宗の本山。○座主—一山の寺務を總理する僧職。後世は延暦寺に限つて用ゐることとなつた。○法性坊—名は尊意。延暦寺第十三代の座主。天慶三年七十歲で寂す。

といひて脇座へ行き床几にかゝり、

ワキサシ「げにや惠みもあらたなる、影も日吉の年古りて。誓ひぞ深き湖の。さざ波寄する汀の月

ワキ上歌「名にしおふ、比叡の御嶽の秋なれや、比叡の御嶽の秋なれや。月は隈なき名所の都の富士と三上山。法の燈火おのづから。影明らけき惠みこそ。人を洩らさぬ、誓ひなれ人を洩らさぬ誓ひなれ

【三】ワキ上歌の間に、シテ菅公の靈、面天神・黒頭・色鉢卷・襟淺黄・着附無地熨斗目・水衣・腰帶・扇の裝束にて橋懸一の松に出で、

シテサシ「ありがたやこの山は。往古より佛法最初の御寺なり。げにや假初の値遇も空しからず。わが立つ杣に冥加あらせてと。望みを叶へ給へとて。滿山護法一列し。中門の扉を敲きけり

ワキ「深更に軒白し。月はさせども柴の戸を。敲く

〇律師僧正ともに僧官、僧正最も高く、律師は僧都の次位。尊意は大僧都に進み、死後僧正を贈られた。律師といふのはをかしい。或は尊意僧正の誤りか。
〇百座の護摩—護摩は密教修法の一で、火を焚いて佛に祈る法。百座はこれを百度行ふこと。
〇滿參—百回の修法の滿了。
〇仁王會—仁王護國般若經を講説する法會。
〇あらたなる—あらたかな
〇影も日吉の—惠みの普きを日影に喩へ、日吉にいひかけた。日吉は比叡山麓近江國滋賀郡坂本村にある日吉神社、即ち山王權現。
〇誓ひぞ深き—神佛の誓願の深きを琵琶湖の深きにいひかけた。
〇さざ波寄する—千載集藤原顯家の歌に「月影は消えぬ氷と見えながらさざ波寄する志賀の浦波」
〇比叡の御嶽の—玉葉集源惠の歌に「世を祈るわが立つ杣の峯晴れて心より澄む秋の夜の月」
〇三上山—近江國野州郡にあり、山の形が富士に似てゐる。都の富士と見るといひかけた。
【三】〇佛法最初の御寺—日本に於て天台宗の開け始めた寺であるからいふ。

法性「まことに佛の御惠みのあらたかなことは日の光のやうで、山麓には日吉明神が古くから鎭座なされ、その御利益の深いことは、あの琵琶湖のやうだ。おゝ、さういへば、さゞ波のうち寄せる湖畔に月が照り映つてゐる。さすが比叡山の秋景色だけあつて、月は隈なくあたりの名所々々に照り渡り、都の富士と呼ばれる三上山も眺められることだ。かうして比叡の法燈は明らかに輝いて、佛は一人も洩らさず、すべての者に惠みを與へようと御誓約遊ばすのだ」

と佛德をたゝへてゐる。

【三】その間に、シテ菅公の靈登場。

菅公「あゝありがたいことだ。この比叡山はわが國に始めて佛法の開けた古いお寺だ。そのお寺に自分も假初ながら御緣故があつたので、またこゝへ來ることとなつた。……どうか御佛の御加護によつて、私の望みをお叶へ下さいませ」

と、滿山の護法神に一禮して、中門の扉を敲いた。

法性「夜は更けて、月の光で軒も白く見え

○假初の値遇―生前師弟の關係であつたことを指す。
○わが立つ杣に―新古今集傳教大師が比叡山に根本中堂を建てた時の歌「阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ杣に冥加あらせ給へ」を引いた。
○護法　佛法を守護する善神。
○一列　辭併に、一禮の誤りで、滿山護法に一禮しとの意であらうといふ。
○深更に軒白し―和漢朗詠集紀長谷雄の詩句―「空夜窓閑螢度後、深更軒白月明初」を引いた。
○月はさせども―月のさし入るを戶をさすにいひかけた。
○丞相―大臣の唐名。こゝでは右大臣菅原道眞。
○心騷ぎておぼつかな―餘りの驚きに心が亂れて、よく見定められない。
○明けやすき―夜の明くを戶の開くにいひかけた。
○夕月の―此方へと言ふといひかけた。
○影珍しや―月影を人の面影にいひかけた。
○客人の稀に―「まれ」の音を重ねた。

べき人も覺えぬに。如何なる松の風やらん。「あら不思議の事やな
シテ「聞けば內にもわが聲を。怪しめ人の咎むるぞと。『重ねて扉を敲きけり
ワキ「餘りの事の不思議さに。物の隙よりよくよく見れば。これは不思議や丞相にてましますぞや。心騷ぎておぼつかな
シテ「頃しも今は明けやすき。月に引かれてこの庵の。『樞を敲けば內よりも
ワキ「不思議やさては丞相か。はや此方へと
シテ『夕月の
地『影珍しや客人の（シテ舞臺に入り眞中に坐しワキも床几を外して向合ひ下に居る）影珍しや客人の。稀に逢ふ時は。なかなか夢の心地して。いひやる言の葉もなし。上人も丞相も。心解けて物語。世に嬉しげ

る。かうして月は內へさし入るが、今頃戶を敲く人があらうとも思はれないのに、どうしたことであらう。松風の音か知らん。不思議なことだ」
菅公「樣子を聞いてゐると、內の人が自分の聲を聞き咎めてゐるぞ」
といつて、また扉を敲いた。
法性「餘り不思議だから、物の隙間から覗いて見ると、これは不思議だ、菅丞相が立つて居られるのだ。餘りにも意外なことで、よくも見定められない」
菅公「今は夜も明け方になつた月の光に誘はれて、この庵へ來たのです」
と戶を敲くと、庵の內からも、
法性「これは不思議だ、やはり菅丞相たつたのですか、どうぞこちらへ」
といつて、（庵へ請じ入る）
法性「これはお珍しいお客人だ。たまさかに逢ふと、嬉しさの餘り、却つて夢のやうな心地がして、何といふ言葉も出ない―」
と、上人も菅丞相もうち解けて話し合はれ、いかにも嬉しさうにお見えになつた。あゝこれが亡靈との對面でなく、

に見え給ふ。あはれ同じ世の。逢瀬とこれを思はめや逢瀬と、これを思はめや

【三】

ワキ「さて御身は筑紫にて果て給ひたる由承り候程に。色々に弔ひ申して候が屆き候やらん

シテ「なかなかの事御弔ひ悉く屆きてありがたう候。サシ『秋に後るる老葉は風なきに散り易く。愁ひを弔ふ涙は問はざるにまづ落つ。されば貴きは師弟の約

ワキ『切なるは主從

シテ『睦しきは親子の契りなり

シテ・ワキ『これを三悌といふとかや

シテ『中にも眞實の志の深き事は。師弟三世に若くはなし

地下歌『忝しや師の御影をばいかで踏むべき

（居クセ）

同じこの世に生きてゐて、會ふのであつたならば、どんなに嬉しいことであらう。

【三】

（二人はなほ話を續けて、）

法性「ところで、あなたが筑紫でお果てになつたといふ事を伺つたので、色々と御回向致しましたが、そちらへ屆きましたでせうか。」

菅公「はい、御回向はすつかりこちらへ屆きまして、ありがたうございました。それにつけても、『秋の末まで枯れ殘つた老葉は、風が吹かなくても散り易いやうに、悲しい時にお見舞を受けると、またお見舞の詞を聞かない前に涙が落ちるのです。まことに貴いのは師弟の契約で……」

法性「情の切實なのは主從の間柄であり……」

菅公「仲の睦しいのは親子の關係で……」

菅公・法性「この師弟、主從、親子の情誼を三悌と申しますな。」

（と語り合ひ、）

菅公「その中でも、眞實の志の深い點では、師弟三世の契りに上越すものはありません。師恩は實にありがたいもので、師の御影など踏むことの出來るものではありません。──

○あはれ同じ世の──道眞は既に故人であるからかういつた。

○思はめや──思はれないでは「心解けて物語」云々の句と照應しない。「思はばや」の誤りであらう。

【三】

○筑紫にて──道眞は延喜三年筑前國太宰府で薨じた。

○なかなかの事──然りといふ意の時代語。

○秋に後るる老葉は──詩句らしいが出所未詳。

○三悌──師弟、主從、親子の情義。

○師弟三世──主從の緣は三世といふのを轉用した。

○師の御影をば──教誡律儀に「若隨レ師行、不レ得ニ喧笑一、不レ得レ踏ニ師影一、相去可ニ七尺一」童子教に「弟子去七尺、師影不レ可レ踏」

地クセ『幼かりしその昔は。父もなく母もなく。行方も知らぬ身なりしを。菅相公の養ひに。親子の契りいつの間に。有明月のおぼろけに。憐み育て給ふこと眞の親の如くなり。さて勸學の室に入り僧正を賴み奉り。風月の窓に月を招き。螢を集め夏蟲の。心のうちも明らかに

シテ「筆の林も枝茂り

地「言葉の泉盡きもせず。文筆の堪能上人も。悦び思しめし。荒き風にもあてじと御志の今までも。一字千金なりいかでか忘れ申すべき

【四】

シテ「われこの世にての望みは叶はず。死しての後梵天帝釋の御憐みを蒙り。鳴る雷となり內裏に飛び入り。われに憂かりし雲客を蹴殺すべし。その時僧正を召され候べし。かまへて御參り候な

私は幼少の時、父もなければ母もなく、行末どうなることか分らない身上であつたのを、菅原是善公に養はれ、いつの間にか深い親子の契りを得て、眞實の親のやうに、一方ならず寵愛して、御養育して下さつたのです。それから學問の道に入つて、僧正をお賴り申し上げることとなり、螢雪の功を積んで、風雅な心を養ひ、學問の道を明かにし、詩文も數多く作り、豐かな詩想を持つやうになりました。かうして文筆に達したのを、上人はお悅びになつて、荒い風にもあてないばかりに御寵愛下さつた、その御親切、一字千金にも値ひする師恩をお忘れする筈もないのであります」

【四】菅公「私はこの世での望みが遂げられなかつたので、死んだ後、梵天王・帝釋天のお憐みを受けて、鳴る雷となり、これから御所に飛び入つて、自分に辛く當つた公卿殿上人を蹴殺さうと思ふのです。その時御所から御祈禱のために僧正をお召しになりませうが、決して參內なされてはいけませんよ」

◎その昔は——刊行會本には「その時は」とある。
○父もなく母もなく—道眞は五六歲の頃菅原是善に拾ひ養はれたのだと傳へられた。「太平記」聖廟の御事に「われは父もなく母もなし、願はくは相公を親とせん」
○菅相公—參議菅原是善。
○有明月の—契りありといひかけた。
○おぼろけに—「おぼろげならず」とありたい。
○勸學の室に入り—學問の爲に法性坊に師事したことをいふ。勸學は學校の勸學院の意ではない。
○風月の窓—詩想を養ひ詩文を作る所。
○月を招き—南史、南齊の江泌が月の光で讀書した故事。
○螢を集め—晉書、晉の車胤が螢の光で讀書した故事。
○夏蟲の心のうちも—螢の身の明らかな意に、學問の道の明らかな意を兼ねた。
○筆の林—詩文の數多いことをいふ。
○言葉の泉—詩想の豐かなことをいふ。
○荒き風にもあてじ—大切に寵愛する喩へ。
○一字千金—師恩の廣大な

喩へ。明衡往來に「一字千金、徳隣難忘」その註に「人學二一字一以二千金一可レ報也」

【四】
○「望みは叶けず」—「望みは叶ひて候」とも謡ふ。
○梵天—色界初禪天の大梵天王。佛法の守護神。
○帝釋—須彌山の頂上忉利天の主。佛法歸依の人を護る。
○われに憂かりし—生前自分に辛く當つた。
○雲客—公卿殿上人。
○妻戸—兩開きの戸。
○洒水の印—水を注いで火を消す意味の行法。印は手指で種々の形を造る行法。
○鑁字の明—唵縛曰駄都鑁と大日如來に歸依する眞言鑁は大日如來の意、明は眞言。手で印を結び口に眞言を唱へるのである。

ワキ「たとひ宣旨はありといふとも。一二度までは參るまじ
シテ「いや勅使度々重なるとも。かまへて參り給ふなよ
ワキ「王土に住めるこの身なれば。勅使三度に及ぶならば。いかでか參內申さざらん
シテ「その時丞相姿俄かに變り鬼の如し
ワキ「をりふし本尊の御前に。柘榴を手向け置きたるを
地「おつ取つて嚙み碎き（シテ扇開きて立ち）。おつ取つて嚙み碎き（拍子を踏み）。妻戸にくわつと（目附柱に向き扇はねて見込み）。吐きかけ給へば柘榴忽ち火焰となつて扉にばつとぞ燃え上る（と突立ちて見込み）。僧正御覽じて（ワキ立ち）。騷ぐ氣色もましまさず（ワキ下に居り）。洒水の印を結んで（印を結び）。鑁字の明を。

法性「たとひ宣旨が下つても、一二度までは參內しますまい」
菅公「いや勅使を度々遣はされても、決して參內なされてはいけません」
法性「天子の御國に住んでゐる以上は、勅使を三度も遣はされゝば、參內しないわけにはいきません」
かういふと、菅丞相の姿が俄かに變つて鬼のやうになつた。そして折から本尊の御前に柘榴を供へてあつたのを取つて、嚙み碎き、開き戸にくわつと吐きかけられると、柘榴は忽ちに火焰となつて、扉にぱつと燃え上つた。
僧正はこれを御覽になつたが、とり騷ぐ樣子もなく落ちつき拂つて、水を注ぐ印形を結び、大日如來に祈る呪文を唱へられると、火焰は消えてしまつた。そして菅丞相はその煙の中に隱れて、

唱へ給へば火焰は消ゆる。煙の內に。立ち隱れ
丞相は。行方も知らず、失せ給ふ。行方も知らず
失せ給ふ

シテ「鍐字の明を」と右へ廻りて眞中へ出で、「火焰は消ゆる」と小廻りし、「行方も知らず」と幕へ走り入る。ワキも續いて中入。

行き方も見えずに消えてしまはれた。

シテ菅公の雲消え失せる態にて退場。ワキ法性坊も「延暦寺の場」を終つたので退場。

【間】　狂言法性坊從者、着附段熨斗目。長上下・腰帶。扇。小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。法性坊に仕へ申す者にて候。さても僧正は天下の御祈禱のため。七日の護摩を焚き給ふ處に。不思議なる事の候。筑紫にて、果て給ひし菅丞相御出であつて。妻戶をほとほとと敲き給ふ間。僧正は何者ぞと思し召し妻戶を明け給ふに。菅丞相にて御座候間。その時僧正御身は筑紫にて果て給ひたるに。何とてこれへ來り給ふぞと御申し候へば。その時菅丞相。われ濁れる世に生まれ。無實の讒言力なく。筑紫まで流されし無念の散ぜん爲。梵天に祈誓せし處。法號降り下り候間。雷となつて內裏へ行くならば。定めて僧正に御出であつて御祈禱あれとの勅使あるべし。われと師弟の契約淺からねば。たとへば如何なる勅使なりとも。必ず御出で候な。この事を御斷りの爲參りたりと宣へば。僧正の仰せには。尤もの御事なり。さりながら當山と申すは。天子の御祈禱所なり。然れどもかやうに承る上は。勅使二度までは參るまじ。勅使三度に及びなば。普天の下率土の內。いづれ王土にあらずといふ事なければ。さのみはいかゞと仰せ候へば。その時菅丞相の御氣色變り。われ恨みの程を見せんとて。佛前にありし柘榴をおつ取つて。はらはらと嚙み給へば。火焰となつて燃え上る。僧正御覽じて。灑水の印の結んでかけ。鍐字の明を誦せられしかば。火焰はそのまゝ消え失せぬ。菅丞相はその煙に紛れ。雷電黑雲を棚引かせ。內裏に行き惡事をなし給ふ。

【間】この間語なしにも。

○讒言力なく。讒言により致し方なく。

案の如く僧正へ勅使立つて。御祈禱あれとの御事なり。僧正も初めは遲滯申され候へども。勅使度度に及び候間。この上は是非に及ばず御出であるべきとの御事なり。皆々御供の用意仕り候へ。この分心得候へ〳〵

といひて引く。

【五】

後見、一疊臺を脇座と脇正面とに出す。

後ワキ法性坊、金入角帽子・着附小格子・紫水衣・白大口・掛絡・腰帶・扇・數珠の裝束にて出で、脇座一疊臺の上に坐し、

後ワキ「さても僧正は紫宸殿に坐し。數珠さらさらとおし揉んで。普門品を唱へければ

地「さしも黑雲吹き塞がり。闇の夜の如くなる内裏。俄かに晴れて明々とあり

ワキ「さればこそ何程の事のあるべきぞと。油斷しける處に

地「不思議や虚空に黑雲覆ひ。不思議や虚空に黑雲覆ひ。稻妻四方に閃き渡つて。内裏は紅蓮の闇の如く。山もくづれ。内裏は虚空に遡るかと。震動ひまなく鳴神の。雷の姿は、現れたり

【五】

○紫宸殿―内裏の正殿。

○普門品―法華經卷第八、觀世音菩薩普門品第二十五。

○紅蓮の闇―紅蓮地獄の闇。紅蓮地獄は八寒地獄の第七。

【五】

後段

舞臺は京都御所で、一疊臺が二つ出してある。脇座にあるのが紫宸殿、脇正面の方は清涼殿の態、であらう。

後ワキ法性坊は勅命によつて參内した態。

さて、法性坊僧正は紫宸殿に坐つて、數珠をさら〳〵とおし揉み、法華經普門品を唱へると、今まであれほど黑雲が吹き塞がり、闇の夜のやうであつた御所が、俄かに晴れ渡つて、あか〳〵として來た。

法性「やはり思つてゐた通りだ。なに大した事のあらう筈はない」と油斷してゐると、不思議にも、空には黑雲が覆ひ、稻妻が四方に閃き渡つて、御所の内は紅蓮地獄の闇のやうに眞暗になつて、山もくづれ、御所も空へ引き上げられるかと思ふばかり、絶え間なく震ひ動いて、やがて鳴神、雷神の姿が現れた。

【六】

地謡の間に、後ジテ雷神、面顰・赤頭・襟紺・着附色入厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて、打杖を持ち熨斗目を被きて出で、常座に立ち、（現れたり）と熨斗目を脱ぎ捨つ。ワキシテに向ひ、

ワキ「その時僧正雷に向ひて申すやう。率土四海の内は王土にあらずといふ事なし。況んや菅丞相昨日までは。君恩を蒙る臣下ぞかし。内恩外忠の威儀未練なり靜まり給へ。あらけしからずや候

後ジテ「あら愚かや僧正よ。われを見放し給ふ上は。僧正なりとも恐るまじ。われに憂かりし雲客に

地「思ひ知らせん人々よ。思ひ知らせん人々とて。小龍を引き連れて。黒雲にうち乘りて（角へ行き）。内裏の四方を鳴りまはれば（左へ廻り大小前にて小廻りし）。稻光稻妻の。電光頻りに閃き渡り。玉體危く

【六】

後ジテ雷神登場。

その時、僧正は雷神に向つて、

法性「この國土は海の涯までも皆天子の御國であつて、この内に住む者は皆大御恵に浴してゐるのである。殊に菅丞相はつい昨日まで天子の御恩寵を辱うしてゐた臣下なのだ。内には佛恩を報じ、外には忠誠を致さなければならないのに、その心掛が不十分ですぞ。お靜まりなさい。不都合ですぞ」

雷神「おゝ愚た事をいはれる、僧正まで自分をお見棄てになつた以上は、僧正であらうと恐れはしませんぞ。さあ自分に辛く當つた公卿殿上人に思ひ知らせてやらう」

と、雷神は小龍を引き連れて、黒雲にうち乘り、御所のあちらこちらへ鳴り廻ると、稻光・稻妻が頻りに閃き渡つて、天子の玉體さへ御危くお見えになつたのに、僧正の居られる所だけは、雷が恐れて鳴らなかつたのは、實に不思議なことである。

【六】

○率土四海の内—詩經小雅「普天之下莫レ非二王土一、率土之濱莫レ非二王臣一」に據つた。

○内恩外忠—内は佛教、外は儒教、佛恩を報じ君忠を致すこと。

○威儀未練—善い行ひが不足である。

○けしからず—不都合である。

見えさせ給ふが。不思議や僧正の（ワキへつか〳〵と寄り）。おはする所を雷恐れて鳴らざりけるこそ奇特なれ（と脇正面の臺に上り袖を被きて下に居り）。紫宸殿に僧正あれば（ワキ立ち脇正面へ行く）。弘徽殿に神鳴する（と立ちて拍子を踏み）。弘徽殿に移り給へば清涼殿に雷鳴る（とワキと反對に脇座臺に飛上りて拍子を踏み）。清涼殿に移り給へば梨壺梅壺（脇正面臺に飛上り常座に飛下り）。晝の間夜の御殿を。行き違ひ廻りあひて（とワキにつき廻り）。われ劣らじと、祈るは僧正鳴るは雷（ワキ祈りシテ拍子踏み）。揉みあひ揉みあひ追つかけ追つかけ互の勢ひ譬へん方なく恐ろしかりける有樣かな（とワキを脇座に追込み一ノ橋懸にて袖被き下に居り）。千手陀羅尼を滿て給へば。雷鳴の壺にもこらへず（と立ち）。荒海の障子を隔て（舞臺へ入り）。これまでなれやゆるし給へ。聞法祕密の法味に預か

そして、僧正が紫宸殿に居られると、雷は弘徽殿で鳴り、僧正が弘徽殿に移られると、清涼殿で雷が鳴る。僧正がまた清涼殿に移られると、雷は梨壺で鳴り、かうして或は梅壺、或は晝の御座、或は夜の御殿と、僧正と雷神とは行き違つたり廻り合つたりして、僧正が祈れば、雷はこれに劣らず鳴り渡り、互に揉み合ひ、追つかけ合つて、その兩方の勢ひは譬へやうもない恐ろしい有樣であつた。

しかし、僧正が千手陀羅尼を讀み終られると、さすがの雷神も威力が衰へて、雷鳴の壺にも居たゝまらず、荒海の障子に隔てられながら、

雷神「もう鳴り騷ぎません、どうぞおゆる

○弘徽殿―清涼殿の北隣、女御のおはす後宮。
○清涼殿―主上常の御座所紫宸殿の西北に當る。
○梨壺―昭陽舍。内裏五舍の一で、女官の居所。紫宸殿の東北に當る。庭に梨を植ゑられた。
○梅壺―凝華舍。同じく五舍の一、弘徽殿の西北にあり、庭に紅白の梅を植ゑられた。
○晝の間―晝の御座。清涼殿の内、主上晝間の御座所。
○夜の御殿―清涼殿の内、主上夜の御寢所。
○千手陀羅尼―千手千眼觀世音菩薩廣大圓滿無礙大悲心陀羅尼の略。千手觀音に祈る經文。
○滿て―滿たせの約、讀み終る意。
○雷鳴の壺―梅壺の北にある襲芳舍の異稱。
○こらへず―我慢が出來ない。雷神が雷鳴の壺にも居たゝまらずとの意。
○荒海の障子―清涼殿の萩の戸の前の廣廂にある衝立障子。荒海の濱で手長足長の者が魚を捕る繪を描いてある。雷神の力が衰へてこれより内へ入ることが出來ないのである。

り帝は天滿大自在。天神と贈官を、菅丞相に下されければ(下に居て正面に辭儀)。嬉しや生きての恨み(と立ち)。死しての悦びこれまでなりやこれまでとて(橋懸へ行き)。黑雲にうち乘つて虛空に上らせ給ひけり

と乘り込み飛び廻り袖を被きて留む。

し下さい。秘密眞言のありがたい御法を伺つた上、帝から菅丞相へ天滿大自在天神とお贈り賜はつたのですから、實に嬉しうございます。生前は恨めしく思つたが、死後この悅びを得ました。ではお暇します」

といつて、黑雲にうち乘つて、空に上つてしまはれた。

○聞法秘密の法味—眞言秘密の法を聞き味ふこと。

○天滿大自在天神—延喜五年八月味酒安行が神託によつて社殿を建て、この神號をつけた。一條天皇が勅使を安樂寺に遣はし、正一位太政大臣を贈り給うたので神號をも天皇から賜はつたものと思ひ謬つたのである。

○生きての恨み…安樂寺に勅使を賜はつた時、天より聞えて來たは詩の句。その全文は脣亡に揭げた。

[考異]

諸流(觀寶剛喜)

剛。喜は觀と略同じであるが、寶生は、【四】シテ「われこの世にて……」以下シテ「その時丞相姿俄かに變り鬼の如し」までを、(シテ)「さても われ無實の罪を蒙る事。偏に時平の讒奏と思へば。恨みは今にも盡きじ。」ワキ「げにげに仰せは理なりと。いふより早く色かはり」と改め、後段【五】以下は全く左の通り作り替へた。

(ワキ)『猶も奇特を松梅の。猶も奇特を松梅の。色香妙なる音樂の。聞ゆる事ぞありがたき聞ゆる事ぞありがたき、後シテ「抑もこれは。是善卿の第三子なり。さてもわれ延朝元年に。大富天神の神號を賜はる。その君恩の惠みを普く。(地)道ある御代の。ありがたさよ。地「その時虛空に管絃聞え。その時虛空に管絃聞え。神さび渡れる折からなれば舞曲を奏して。舞ひ遊ぶ。早舞。地「風雅の舞曲も時過ぎて。風雅の舞曲も時過ぎて。光を四方に天滿てる。神靈北野に移らせ給ふ。げにありがたや神と君。國土安全長久と。幾千代までも榮うる春の。幾千代までも榮うる春の。神の末こそ。久しけれ)

古諸本(元祿八年本)

【三】クセ 幼かりしその昔(元當時)は……

【四】ワキ「われこの世にての(元ナシ)望みは叶はず(元ひて候)」

【六】地「思ひ知ら

せん人々よ……千手（元の）陀羅尼を……

羅生門（らしやうもん）　觀（寶　剛　喜）

解説

【能柄】　五番目　二段劇能

【人物】　**前ワキツレ**　源頼光、**前ワキツレ**　保昌・貞光・季武・公時、**前ワキ**　渡邊綱、**狂言**　綱の從者、**後ワキ**　渡邊綱、**後シテ**　鬼神

【所】　**第一段**　京都　頼光館、**第二段**　同　羅生門

【時】　平安盛期　春（二月）

【異稱】　〔綱〕ともいふ。

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目録ともに觀世小次郎の作とす。言繼卿記に天文元年四月二十九日演能のことが見えてゐる。

【梗概】　源頼光は大江山の鬼神を平らげた後、常に保昌・貞光・季武・綱・公時等の勇士を集めてゐたが、今宵も、春雨の降りつゞく徒然に、これらの武士に酒を勸めて、何か珍しい話はないかと尋ねると、保昌が、近頃羅生門に鬼神が住んでゐるとの噂があるといふ。綱は聞き咎めて、さやうな事のある筈がないと保昌をたしなめる。互にいひ募つ

で、結局綱は人々の引き留めるのも聽かず、頼光から證據の札を貰つて、羅生門へ檢分に行く。その夜の明け方、綱はたゞ一騎羅生門へ來て、札を壇上に立てて歸らうとすると、鬼神が兜の錣をつかんで引き留める。そこで綱は太刀を拔いて鬼神と渡り合ひ、鬼神の片腕をうち落したので、鬼神は恐れて空へ逃げ上り、綱は武名を轟かした。

【出典】平家物語劍の卷に、「鐵輪」の解說に擧げた、或公卿の女が嫉妬の餘り、貴船の社に丑の刻詣をして鬼女となつた事を記して、

その比、攝津守賴光の內に、綱・公時・貞道・末武とて四天王を仕はれけり。中にも綱は四天王の隨一なり。武藏國の美田といふ所にて生れたりければ、美田源次とぞ申しける。一條大宮なる所に賴光卿が用事ありければ、綱を使者に遣はさる。夜陰に及びければ、髭切を佩かせ馬に乘りてぞ遣はしける。彼處に行き尋ね、問答して歸りけるに、一條堀川の戾橋を渡りける時、東のつめに齡二十餘と見えたる女の、膚は雪の如くにて、誠に姿優なりけるが、紅梅の打着に守懸け、佩帶の袖に經持ちて、人も具せず、たゞ獨り南へ向ひてぞ行きける。綱は橋の西のつめを過ぎけるを、はた〳〵と叩きつゝ、やゝ何地へおはする人ぞ、我等は五條わたりに侍り、頻りに夜更けて恐ろし、送りて給ひなんや、と馴れ〳〵しげに申しければ、綱は急ぎ馬より飛び下り、御馬に召され候へ、といひければ、悅しくこそ、といふ間に、綱は近く步みよりて、女房を搔抱きて、馬に打乘せて、堀川の東のつめを南の方へ行きけるに……やがて嚴しかりし姿を替へて、恐ろしげなる鬼になりて、いざわが行く所は愛宕山ぞ、といふまゝに、綱が髻を摑みて提げて、乾の方へぞ飛び行きける。綱は少しも騷がず、件の髭切をさつと拔き、空ざまに鬼が手をふつと切る。綱は北野の社の廻廊の棟の上にどうと落つ。鬼は手を切られながら、愛宕へぞ光り行く。

とあるに據つたもので、この戾橋の鬼女を羅生門の鬼に代へたのは、羅生門は今昔物語卷二十四「玄象琵琶爲レ鬼被レ取語」その他に屢〻鬼の栖として傳へられてゐるのを取り合はせたものであらう。

【概評】この曲の原據、平家物語の記事では、綱は一時戾橋の鬼女に誑されるのであるが、それを、酒宴の場の言葉爭ひから、一つには君の御爲と思つて、堂々と眞僞檢分に出かけることとしたのは、作者のよい働きであつた。第二段の鬼神退治は勿論豪壯であるが、殊に第一段酒宴の場には、武士の面目が躍如としてゐて、誠に爽快な感を與へてゐる。謠曲はすべてシテを中心としたものであるのに、本曲では大部分ワキ・ワキヅレの演奏となつてゐるのは珍しいことである。

【一】

○花の都―花は春の花と都の美稱と兩意を兼ねた。
○風も音せぬ―太平の相。王充の論衡に「太平之世、五日一風、十日一雨、風不レ鳴レ條」
○源の賴光―源滿仲の子。圓融・花山・一條・三條・後一條の五朝に仕へ、左馬權頭正四位下に昇つた。武勇を以て聞えた人。〔大江山〕〔土蜘蛛〕參照。
○丹州大江山―賴光が保昌等と共に丹波丹後の國境にある大江山の鬼神を退治したこと〔大江山〕に作らる。
○貞光、季武、綱、公時―所謂賴光の四天王。碓井貞光・卜部季武・渡邊綱・坂田公時。貞光は諸書に定道とある。綱は源融の玄孫、敦の子。
○參會―會合。
○四海の安危は―和漢朗詠集白樂天百錬鏡の詩句「四海安危照二掌内一、百王理亂懸二心中一」百王は諸侯。天下諸侯の安危治亂を見ること鏡の如き聖天子の御代を祝つたのである。
○久方の―空の枕詞。御影は久しといひかけた。

【一】

次第の囃子にて、ワキヅレ源賴光、黑風折烏帽子・着附厚板・長絹・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束にて金札を懷中し、ワキヅレ保昌・貞光・季武・公時、侍烏帽子・着附厚板・掛直垂・白大口・腰帶・扇・小刀の裝束、ワキ渡邊綱、保昌・貞光等と同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

綱・保昌・貞光・季武・公時〔次第〕治まる花の都とて。治まる花の都とて風も音せぬ春べかな

地取に賴光は正面に向き、その他の者は下に居り、

賴光「これは源の賴光とはわが事なり。さても丹州大江山の鬼神を從へしよりこの方。貞光季武綱公時。この人々と日夜朝暮參會申し候。殊更この程は晴れ間も見えぬ春雨にて候程に。酒を勸めばやと存じ候

賴光サシ「ありがたや四海の安危は掌の中に照らし。百王の理亂は心の中に懸けたり

と謠ひながら向合ひ、(ワキ・ワキヅレ立ち)

綱・保昌・貞光・季武・公時上歌「曇りなき。君の御影は久方の。君の御

【一】

第一段

ワキヅレ源賴光、ワキヅレ保昌・貞光・季武・公時、ワキ渡邊綱、登場。綱以下保昌等は主人賴光の館を訪ねて、その傍に集まる態で、

賴光の臣一同「天下泰平で、花の都の春景色が實にのどかなことだ」

と次第を謠つて御代の泰平を祝ひ、賴光は、

賴光「自分は源賴光です。さて先達丹波國大江山の鬼神を退治した後は、いつも貞光・季武・綱・公時などの人達と寄り集まつてゐることだが、殊にこの頃は晴れ間もなく春雨が降り續いて氣づまりだから、今日はこの人達に酒を飲ませようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

賴光「大君の御威德によつて、天下の危難も忽ちに平らげられ、國の亂れもたやすく治まるのは、ほんとにありがたいことだ」

と獨言をいふ。綱・保昌等は、

賴光の臣一同「御惠みの深い大君の御稜威によつ

影は久方の。空ぞのどけき春雨の。音も靜かに都路の。七つの道も末すぐに。八洲の波も音せぬ九重の春ぞ、久しき九重の春ぞ久しき

頼光「八洲の波も音せぬ」と正面に向きて先へ出でまたもとへ歸り、「九重の春ぞ久しき」と謠ひながら一同脇座の方へ行き、頼光は脇座にて床几にかゝり、他のワキヅレはその次に順々に坐し、ワキは名乘座に坐す。

【三】頼光「いかに面々(とワキへ向きワキ頼光に辭儀)。さしたる興も候はねども。この春雨の昨日今日。晴れ間も見えぬつれづれに。「今日も暮れぬと告げ渡る。聲も寂しき入相の鐘。

地上歌『つくづくと。春のながめの寂しきは。春のながめの寂しきは(ワキ右の方へ向き)。しのぶに傳ふ(と見やり)。軒の玉水音すごく。ひとりながむる夕まぐれ(扇を開き)。伴ひ語らふ諸人に(酒を酌みて立ち)。御酒を勸めて盃を(頼光へ酌をし)。とりどりなれや

に、天下靜謐、空ものどかで、降る春雨の音までが靜かで、都の町々はいふまでもなく、日本全國、國の端々までも御仁政の行き亘つた、誠に穩かなめでたい春だ」

と語り合ひながら頼光の館へ着いた態で、舞臺は頼光の館となる。

【三】頼光「いや各々方、別段これといふ催しもないのだが、この頃春雨が降りつゞいて、昨日も今日も晴れ間が見えず、何の所在もなし、そこへ入相の鐘が、『また今日も暮れてしまつた』と響き渡つて、寂しい思ひをさせるのだ。かういふ春雨の降り續く時、つくづくと寂しく感じられるのは、軒の忍草を傳つて落ちる雨水の音で、このやうなもの凄い夕暮、獨りぼんやりしてゐるのもつまらないから、一つ一緒に話し合つて、酒でも飲まうかと思つて、お招きしたわけだ。全く、御同様素一本の武士がうち解けて酒盛をするのは、愉快だからな」

○七つの道—東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の七道。以下、八洲、九重と數字を重ねて文のあやとした。
○八洲—日本の別名。
○九重—帝都。

【三】
○面々 各々方、皆の人達。
○今日も暮れぬと—拾遺集讀人知らずの歌に「山寺の入相の鐘の聲毎に今日も暮れぬと聞くぞ悲しき」新古今集和泉式部の歌に「暮れぬめり幾日をかくて過ぎぬらん入相の鐘のつくづくとして」
○つくづくと春のながめの寂しきはしのぶに傳ふ軒の玉水—新古今集大僧正行慶の歌。鐘をつくといひかけてこの歌を引いた「ながめ」は長雨と眺めとを兼ねた。「しのぶ」は軒に生える忍草
○とりどり—それぞれ。盃を取りといひかけた。

○梓弓―やへの枕詞に用ゐた。
○一つなる―一筋な。一徹な。
○心のそこひなく―心の分け隔てなく。
○つれづれと―源氏物語帚木の巻に―つれづれと降り暮らしてしめやかなる宵の雨に」とあるを引いた。
○雨夜の物語―帚木の巻に雨夜の徒然に源氏が頭中將右馬頭等と女の品定めをしたのをいふ。
○しなじな―種々様々。雨夜の物語に女の等級を品評したのを承けて「しなじな」といつたのである。
○深き紅―酒に醉うて顔の赤くなつたことをいふ。
【三】

梓弓（保昌に酌をし）。やたけ心の一つなる（名乘座へ歸り）。つはものの交はり頼みある中の酒宴かな（と下に居て扇をたゝむ）

（居クセ）

地クセ『思ふ心のそこひなく。ただうち解けてつれづれと。降り暮らしたる宵の雨。これぞ雨夜の物語

頼光『しなじな言葉の花も咲き

地『匂ひも深き紅に。面もめでて人心。隔てぬ中の戲れは。面白や諸共に。近く居寄りて語らん

（とワキ眞中に出て下に居る）

【三】

頼光（ワキに）『餘りに寂しき夜にて候程に。皆々近う寄つて御物語り候へ

ワキ『畏つて候（と頼光に辭儀）。仰せにて候程に（と保昌へ向き）。皆々近う御參り候へ

頼光「かうして、心に思ふがまゝを分け隔てなくうち解けて話し合ふのは、それがしと〳〵と雨の降りつゞく夕暮なのだから、一寸源氏物語の雨夜の品定といふ感じがするね」

頼光「いや全く、かうして話の花を咲かせ、酒に醉うては顔を赤くし、心置きなく遊ぶのは、實に面白いものだ。さあ皆、もつと近く寄つて話さうぢやないか」

【三】

頼光「實に寂しい夜だ。さあ皆近う寄つて、色々面白い話を聞かせてくれ」

綱「畏りました」

（保昌等に向ひ、）

綱「各々方、御主の仰せだから御遠慮に及ぶまい。さあもつと近くお寄りなされ」

同「……」

○九條—京都南端の東西に通ずる通り。
○羅生門—正しくは羅城門。光悅本にも羅城門とある。京都外郭の正南に設けられた門。朱雀通の南端にあり、北端の朱雀門と相對する。京都の規模は餘りに宏大で、この邊は人家の少い淋しい所であつた。
○保昌—藤原致忠の子で、丹後・大和・攝津守に歷任した。實は賴光の家臣でない。[大江山]には家臣としてゐない。
○筋なき事—條理に適はぬこと。つまらないこと。
○土も木も—太平記十六、日本朝敵の事、紀朝雄の歌「草も木もわが大君の國なればいづくか鬼の住家なるべき」を引いた。
○粗忽—輕卒。

賴光　いかに申し候。この程珍しき事はなく候か
保昌　さん候この頃不思議なる事を申し候。九條の羅生門に鬼神の住んで。暮るれば人の通らぬ由を申し候
ワキ　いかに保昌。筋なき事な宣ひそ。さすがに羅生門は。都の南門ならずや。土も木もわが大君の國なれば。いづくか鬼の宿と定めんと聞く時は。たとひ鬼神の住めばとて住ますべきにもあらず。かかる粗忽なる事を仰せ候ぞ
保昌　さては某僞りを申すと思し召し候か。この事世上に隱れなければ申すなり。まこと不審に思し召さば。今夜にてもあれかの門に御出であつて。眞か僞りか御覽候へ
ワキ　さては某參るまじき者と思し召され候か。その儀にて候はば。今夜かの門に行き。眞か僞

賴光「どうだ、近頃何か珍しいことはないか」
保昌「さやうでございます。この頃不思議な噂がございます。九條の羅生門に鬼神が住んで、恐ろしいので、日が暮れゝば人が通らないとの事でございます」
綱「これ保昌、馬鹿なことをいはるな。羅生門といへば都の南門ではないか。古歌にも『土も木もわが大君の國なれば、いづくか鬼の宿と定めん』と申すではないか。たとひ鬼神が住まうとしたところで、住ましてなるものか。そのやうな輕卒なことをいはれるものではないわ」
保昌「それでは、自分をうそをいふものとでも思はれるのか。この事は世間に知れ渡つた話だから申すのだ。さうだ、不審に思はれるならば、早速今夜のうちにでも、あの羅生門へ行つて、うそかほんとか、見て來られるがよいわ」
綱「何ぢやと、それでは自分がよう參るまいと思つて居られるのか。それならば、早速今夜あの門へ行つて、うそかほんと

○しるし―證據の品。

○ささへ―抑へ止める。

○野心―不快の心といふほどの意。

○陸奥の安達が原―人の心を見るといひかけ、拾遺集平兼盛の歌「陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか」を引いた。安達原は岩代國安達太良山の麓〔安達原〕參照。

りかを見候べし。しるしを賜はり候へ

貞光・季武・公時『滿座の輩一同に。これは無益とささへけり

ワキ「いや保昌に對し野心はなけれども、一つは君の御爲なれば（と賴光に辭儀して）しるしを賜べと申しけり

賴光「げにげに綱が申す如く。一つは君の御爲なれば。しるしを立てて歸るべしと（懷中より金札を取出し）。『札を取り出で賜びければ（とワキへ差出す）

綱上歌『綱はしるしを賜はりて（と賴光の前に出て金札を受取り）

地『綱はしるしを賜はりて（と眞中へ下り）御前を立つて出でけるが（と仕手柱際へ行き）立ち歸り方々は（とワキヅレへ振返り）。人の心を陸奥の（と脇座の上を見上げ）安達が原にあらねども。こもれる鬼を從へずは。

か、見て來よう。何なりと證據にする品を下さい」

これを聞いて、貞光等その座に居合はせた者が皆、

貞光等「それはつまらないことだ」

と留めた。

綱「いや保昌に對して別段意地を持つのではないが、その實否を檢べるのが、一つにはわが大君の御爲だから、是非證據にする品を下さい」

といつた。

賴光「いかにも綱のいふやうに、一つにはわが大君の御爲だから、證據を立てて歸るがよからう」

といつて、札を取り出して綱に與へられると、綱はこの證據の品を戴いて、賴光の御前を退いたが、また立ち歸つて來て、

綱「各々方、私の心を見て下さい。こゝは陸奥の安達原ではないが、この都の内に鬼が籠つてゐると聞いたからには、これを討ち平らげない以上は、二度とお目にかゝりますまい。ではお暇致します」

○梓弓—引きの序。

○やたけ心—矢をいひかけた。

【間】

○聊爾なる—粗忽な。輕率な。

二度また人に（保昌へさし）。面を向くる事あらじ（ツキヅレを見）。これまでなりや梓弓（賴光に手をつき）。引きはかへさじ武士の（と立ち）。やたけ心ぞ、恐ろしきやたけ心ぞ恐ろしき

と舞臺先へ行き右へ廻り、早鼓にて中入。賴光以下ワキヅレ一同も續いて幕に入る。

【間】 早鼓にて、狂言綱の從者、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帶・扇の裝束にて杖をつきて出で、名乘座に立ち、

狂言「かやうに候者は。渡邊の綱の御内に仕へ申す者にて候。唯今これへ出る事餘の儀にあらず。さても賴光雨中の徒然の餘り。兵を集め給ひ御酒宴のなされ。仰せ出さるゝ樣は。都に於て何事か珍しき事やあると御尋ね候へば。その時保昌申され候は。この程京童の唄を承り候へば。東寺の羅生門に鬼神住んで。日暮れば人を通さぬ由御申し候へば。賴うだる人申さるゝは。御前にて聊爾なる事を御申し候ものかな。たとへ鬼神の住めばとて。方々我等のこれに居て住ませて置くべきか。日の本の内にさへ置くまじきに。殊更都の内には思ひも寄らず。近頃聊爾を御申し候と。苦々しく申されしかば。保昌さては某御前にて無き事を申すと思し召すか。唯今にても羅生門へ御出であつて。眞か僞りか御覽候へと申されしかば。賴うだる人。さては某參るまじき者と御覽じさやうに御申し候か。今更保昌に遺恨はなけれども。一つは君の御爲なり。羅生門へ參り樣子を見申すべし。しるしを賜はり候へと御申し候へば。滿座の人々も一同に。これは無用と申されけれども。賴光は綱の心中尤もと思し召し。しるしの札を賜はり候間。賴うだる人唯今より羅生門へ御出で候。なんぼう

と、一度いひ出しては後へ引かない武士の一途な心は、勇ましいものである。

綱鬼神退治に赴く態にて退場。第一段終って、他の一同も退場。

荒けなき口論にて候。誠に天下に兵多しと雖も。頼光の御内に綱保昌貞光季武この四人は。隱れもなき兵にて候。さる間頼光も頼もしく思し召す御事にて候。（脇正面に向き）やあ〳〵何と申すぞ。御供はいらずたゞ獨り御出でと申すか。それは一段の事ぢや（と正面に直し）。總じてさやうの所へ行けば。肝を消す事があると申すによつて。これは幸ひな事ぢや。さりながらもし御尋ねもあらば。これまで參りたる由御申しあつて給はり候へ。その分心得候へ〳〵

といひて幕に入る。

後見、一疊臺を大小前に出し、引廻を掛けたる小宮を臺の右側に載す。

一聲の囃子にて、後ワキ渡邊綱、黑頭・鍬形・白鉢卷・着附厚板・法被・半切・腰帶・太刀の裝束にて金札を懷中し、鞭を持ちて橋懸に出で一の松に立ち、

【四】

後ワキ「さても渡邊の綱は。ただ假初の口論により。鬼神の姿を見んために。物の具取つて肩にかけ。同じ毛の兜の緒をしめ。重代の太刀を佩き

地「たけなる馬にうち乘つて（と二三足出でゝ）舍人をも連れず唯一騎（と元へ戻り）。宿所を出でて二條大宮を。南がしらに歩ませけり（と二足つめ）

【四】

第二段

後ワキ渡邊綱、武裝を整へて登場。

さて、渡邊綱はたゞ一寸した口論の結果、鬼神の姿を見るために、鎧を身につけ、これと同じ色の縅絲の兜の緒をしめ、先祖傳來の銘刀を佩き、逞しい大きな馬に乘つて、馬の口取なども連れず、たゞ一騎で家を出で、二條大宮を南へとつて進んで行つた。

【四】

○假初の—一時の、當座の。
○物の具—鎧。
○肩にかけ—鎧を着ること
○同じ毛の兜—毛は縅の絲、鎧の縅絲と同じ色の絲で綴ぢた兜。
○重代の—先祖から代々傳はつて來た。
○たけなる馬—たけの高い馬。
○舍人—こゝでは馬の口取の如き下人。
○二條大宮—京都の西北部である。
○南がしらに—馬の頭を南に向けて。

○東寺―大宮の西、八條の南にある眞言宗總本山金光明四天王敎王護國寺。
○九條おもて―九條通り。
○錏―兜の鉢の左右及び後に垂れて、頸を被ふもの。
○すはや―驚いた時に發する感動詞。

地上歌「春雨の。音も頻りに更くる夜の（と拍子を踏み）。音も頻りに更くる夜の。鐘も聞ゆる曉に。東寺の前をうち過ぎて（と舞臺に入り）。九條おもてにうつて出で（名乘座に立ち）。羅生門を見渡せば（作物へ向き）。物凄しく雨落ちて（正面に出で上を見）。俄かに吹きくる風の音に。駒も進まず（鞭をうち）。高嘶きし。身ぶるひしてこそ立つたりけれ（と鞭をうちて名乘座に立つ）

地「その時馬を。乘りはなし（と右足を上げ馬より下りる形をして鞭を捨て）。その時馬を。乘りはなし。羅生門の。石壇に上り（と一疊臺に上り）。しるしの札を。取り出だし（と金札を作物の中に入れ）。壇上に立て置き歸らんとするに。後より兜の錏を摑んで引き留めければ（後見ワキの黒頭を引く）。すはや鬼神と太刀拔き持つて（太刀を拔き）。斬らんとするに（上を斬り）。取りた

春雨のしと〳〵と降りしきる眞夜中に家を出て、曉の鐘の鳴る頃東寺の前を過ぎ、九條通りへ出て、羅生門を見渡すと、雨はもの凄く降り、風も俄かに烈しく吹いて來て、馬は進まず、たゞ高嘶きして、身震ひをして、立ちすくんだ。

○羅生門へ着いた態で、舞臺は羅生門となり、羅生門の作物が出てゐる。

その時、綱は馬を飛び降りて、羅生門の石壇にあがり、證據の札を取り出し、壇の上に立て置いて歸らうとすると、後から兜の錏を摑んで引き留めるものがあるので「さては鬼神だな」と、太刀を拔いて斬らうとしたが、兜に手をかけられたので、綱は思はず兜の緒を引きちぎつて、壇から飛び下りた。

【五】

○衡門　冠木門。

○太刀さしかざし　太刀を振り上げ。

る兜の緒を引きちぎつて（黒頭を脱ぎ）覺えず壇より飛び降りたり（と飛び降り脇座へ行く）

【五】

後ジテ鬼神、面顰・赤頭・金緞鉢卷・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帶・打杖の裝束にて作物の中に居り、次の地謠にワキの黒頭を左手に持ちて、作物の後より出で一疊臺の上に立ち、

地「かくて鬼神は怒りをなして。かくて鬼神は怒りをなして。持ちたる兜をかつぱと投げ捨てそのたけ衡門の（と黒頭をワキへ投げ）軒に等しく兩眼月日の如くにて。綱を睨んで。立つたりけり（と打杖を振上げ臺より下り）

〔舞働〕

シテとワキ互に爭ひ合ひたる後、シテは臺に上り、ワキは脇座にて構へ、

ワキ「綱は騒がず太刀さしかざし

地「綱は騒がず太刀さしかざし。汝知らずや王地を犯す。その天罰は。遁るまじとてかかりければ（ワキ太刀を振上げ）鐵杖を振り上げ。えいやと打

【五】

後ジテ鬼神、作物の羅生門から現れ出る。

かうして、鬼神は怒つて、手に持つた兜をどつと投げ捨て、突立つた樣は、その丈は羅生門の軒と同じ高さで、兩眼は月日のやうに輝き、綱を睨みつけた。

〔舞働〕に鬼神と綱とが戰り合ふ。

綱は落ちつき拂つて、太刀を上段に構へ、

綱「貴樣は分らないのか。王地を犯す天罰は遁れることが出來ないぞ」と斬つてかゝると、鬼神は鐵杖を振り上げて、えいやと打つと、綱は飛んで身をかはし、ちやうと鬼神を斬りつけた、鬼神は斬られながら綱に組みつい

○ひるむ—氣力がくじけるよわる。
○わきつぢ—脇築土。門の脇の土塀。
○時節を待ちて　鬼神の詞。
○かすかに聞ゆる—鬼の聲の幽かに聞ゆるを普に聞ゆる名高きとの意にいひかけた。

つを（シテ臺を下りつゝ）飛び違ひちやうと斬る、斬られて組みつくを（と互に形をし）拂ふ劍に腕うち落され、ひるむと見えしがわきつぢにのぼり虛空をさして。あがりけるを（とシテ手を斬られて幕に走り入り）。慕ひ行けども黑雲覆ひ（ワキ橋懸へ追ひ行き）。時節を待ちて（舞臺へ歸り）。又取るべしと（臺へ上り）。呼ばはる聲も。かすかに聞ゆる鬼神よりも（臺を下り）。恐ろしかりし。綱は名をこそ。あげにけれ

と太刀をかたげて名乘座にて留拍子を踏む。

に來たか、綱にこれを拂つてその腕をうち落すと、鬼神は一寸たぢろぐやうに見えたが、忽ち門脇の土塀に上り、虛空をさして飛び上つて行つたので、綱はこれを追ひ驅けたが、鬼神は黑雲に身を掩ひ隱して、

鬼神「よしまた時機を窺つて、取り返してやるぞ」

と叫ぶ聲だけが幽かに聞えて、姿は消え失せてしまつた。

シテ鬼神黑雲に身を隱す態で退場。

かうして、有名な鬼神よりもなほ恐ろしい力を持つた渡邊綱は、勇名を天下に揚げたのであつた。

ワキ綱、功名を立てて退場。

〔考　異〕

諸　流　（觀寶剛喜）

【三】賴光（剛喜いかに保昌）餘り寂しき夜にて候程に皆々近う御參り候へ（剛ナシ）ワキ「畏つて候……近う御參り候へ（剛喜ナシ、剛保昌「御前に候。喜保昌畏つて候）……ワキ「いかに保昌……土も木もわが大君の國なればいづくか鬼の宿と定めんと聞く時は（喜ナシ）……

古諸本　（光悅本）

【一】賴光（光抑）これは源の……さても（光此度）丹州大江山の……綱公時この（光かやうの）人々と（光に）日夜（光ナシ）朝暮參會申し（光仕）候殊更この程（光一兩日）は……春雨にて候程に（光かのめんめんをめしあつめ）酒を勸め……上歌「異りなき……空ぞ（光も）のどけき……

【二】賴光「いかに面々さしたる（光誠に）興も候はねども……　【三】賴光「餘りに（光いかに面々）寂しき夜にて候程に（光へは）皆々

（光ナシ）近う寄つて御（光ナシ）物語り候へ。ワキ「畏つて候仰せにて候程に皆々近う御參り（光各參て御物語申）候へ。頼光「いかに申し候
この程（光さて此ころ都に）珍しき事はなく候か（光候はぬか）保昌「さん候……九條の羅生門に（光こそ）……人の通らぬ由を（光とこそ）申し
候（光へ）。頼光「ふしきなる事にてこそ候へ。それは眞にて候か。保昌「さやうに承及て候）ニ「いかに保昌（光に申へき事の候）筋なき事な
宜ひ（光御申し候）そさすがに羅生門は都の南門ならずや（光それをいかにと申に）土も木も……と聞く時は（光さすがに羅城門は、都の南
門ならずや）たとひ……住ますべきにもあらず（光せ置るへきか）かかる粗忽（光ふしき）なる事を仰せ候ぞ（光御申候物かな）保昌「さては某
（光御前にて）僞りを申すと思し召し候かこの事世上（光都）に……今夜にてもあれ（光候へ）かの門に御出で……御覽候へ（光羅城門へゆき
て御覽し候へかし）ワキ「さては（光かやうに承候は）某參るまじき……その儀にて候はば……しるしを賜はり候へ（光是は御前にて候へは
爭ふにてはなけれ共。まこと僞は今夜の中に其せうせきをみせ申さんと。さもあらけなく申ければ）眞光等「滿座の輩……無益とさゝへけ
り（光れは）ワキ「いや保昌に對し野心（光いこむ）は……頼光「（光其時頼光綱にむかひ）げにげに綱（光汝）が申す如く一つ（光かつう）は君
の御爲なればしるを立てて（光り、是をたてをき）歸るべしと……地「綱はしるしを……これまでなりや梓弓（光といふ鹽か）……
【四】後ワキ「さても渡邊の綱はただ（光ナシ）假初の口論（光人のことはのあらそひ）により

龍虎　觀（喜）

解説

【能柄】　五番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　入唐僧、**ワキツレ**　從僧（二人）、**前シテ**　樵翁（虎）、**前ツレ**　樵夫、**狂言**　仙人、**後ツレ**　龍、**後シテ**　虎

【所】　支那

【時】　春（無季）

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目録ともに觀世小次郎の作とす。

【梗概】　日本國中を殘らず遊歴した僧が、更に入唐渡天して佛法流布の跡を尋ねようと志して、筑前博多から便船に乘つて支那に渡ると、かなたの竹林の上に黒雲が覆ひかゝつて、そら恐ろしい氣色なので、折から山を下りて來た樵翁に「これはどうしたことであらう」と尋ねる。すると、樵翁は「あれは龍虎が戰ふのである」といつて、龍虎ともに勢ひの盛んな位の高いものであるといふ例證を擧げて語り、「もつと近くへ行つて御覽なさい」と勸めて、自分は谷陰へ下つて行く。

僧は敎へられたまゝに、竹林の近くへ來ると、果して山の頂に黒雲が起つて金龍が降り、竹林の巖洞からは虎が出て狂風を吹き出し、龍虎相搏つ盛んた爭ひを見せた後、龍は雲中に昇り、虎はまた巖洞に歸る。

【出典】　龍虎相搏つ古圖から思ひついて、作者の創作したものであらう、典據といふべきほどのものは見當らない、

【概評】　虎溪三笑圖に據つて作つた〔三笑〕とともに、畫題を謠曲の題材に移したものであらう。そして〔三笑〕が常に三人鼎座談笑の畫を見るやうな、靜かた和やかた場面を作つてゐるのに對し、本曲の後段はどの場面を切りとつて見ても、勇ましい恐ろしい龍攫虎躍の畫を見る感じを與へてゐるのである。兩曲とも畫題に據つた曲にふさはしい畫趣の深いものであるが、〔三笑〕が靜的で、あまりにも畫に近いのに比べて、これは動的であるだけ、戲曲らしい變化に富んでゐるのである。龍虎ともに勢ひの盛んなものであるから、本曲は略脇能としても取扱はれてゐる。

【一】

前　段

舞臺は初め前博多で、ワキ入唐僧、ワキヅレ從僧を隨へて登場し

次第の囃子にて、ワキ入唐僧、角帽子・着附小格子・絓水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ　ワキヅレ〔次第〕法の道にと思ひ立つ。法の道にと思ひ立つ。波路遙けき船路かな

地取にワキは正面に向き、

ワキ　これは諸國一見の僧にて候。われ若年の時よりも。諸國修行の志あるにより。日の本をば殘らず見廻りて候。又承り及びたる佛法流布

○法の道にと—法に乘りを含ませ、佛法修行の道と、旅行の道とを兼ねて綴つた。

と次第を謠つて、船旅の心持を述べ、

僧「佛道の修行は末の遠い容易たことでないが、その爲に出掛けようと思ふ支那・印度への船旅も、行先の實に遠いことだ」

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧ですが、年の若い時から、諸國へ行脚修行することを心掛けてゐたので、もはやわが日本國は殘らず見廻つてしまつたのです。それで、今度は、話に聞いてゐた佛法の弘通

○入唐渡天　支那に行き印度に渡ることと。
○博多の津―筑前國、今福岡市に入る。支那と交通する要港であつた。
○天の原八十島かけて―風雅集小野篁の歌「わたの原八十島かけて漕ぎ出でぬと人には告げよ海士の釣舟」を引いた。
○不知火の―筑紫の枕詞。末も知らぬといひかけた。
○雲の波―波の如き雲。空と海と相接してゐるのをいつた。
○行進安穩―旅中無事。
○江霞浦を隔てて―和漢朗詠集橘直幹の詩句「江霞隔レ浦人煙遠、湖水連レ天雁點遙」を引いた。

の跡を尋ね。入唐渡天の望みあつて。この間は九州博多の津に候處に。よき便船の候間。この春思ひ立ち渡唐仕り候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「天の原。八十島かけて漕ぎ出づる。八十島かけて漕ぎ出づる。船路の末も不知火の。筑紫を跡になしはてて。行くへに續く雲の波霞を分くる海原に。又山見えて程もなく。はや唐土に着きにけりはや唐土に着きにけり

ワキ「又山見えて程もなく」と正面に向きて先へ出でまたもとへ歸りて唐土に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ「あら嬉しや候。遙々と思ひしに。佛神の御加護もやありけん。行進安穩に布帆恙もなく渡唐仕りて候。心靜かに所々を一見せばやと存じ候。げにや江霞浦を隔てて人煙遠し。湖水天に連なつて雁點遙かなり。眺めやる遠山もとの群

した古跡を尋ねる爲に、支那・印度へ行きたいと思つて、先達來九州の博多港に居りましたところ、丁度都合のよい船ついでがあつたので、この春思ひ立つて支那へ渡るのです」

と見物人に自己紹介をし、

僧「廣々とした海に船出して、幾つも幾つも島を通り過ぎ、筑紫の方を遠く跡に距ててしまつて、どこだか見當もつかない船路を進み、なほも空と水と相接してゐる霞の中を漕ぎ分けて行つて、海のかなたに又山が見え出して來たと思ふと、間もなく支那に着いた」

と船旅の様を述べてゐる間に、やがて支那に着いた態で、舞臺は支那となる。僧は上陸した態で、

僧「あゝ嬉しいことだ。大變遠い所だと思つてゐたのに、神佛の御加護を賜はつたせいでもあらう、道中無事、船路の障りもなく支那に渡つた。ゆつくりと、あちらこちら見物しませう」とあたりの景色を眺めて「ほんとに、詩の句に『浦には霞がたちこめて、人里をなほ一層遠く距てて居り、海の水は空と相接して、雁が遙か遠い空

○岨　山の崖道。
○山人—樵夫。

【三】

○折を得て—時節を得て、花咲く春となつて。花を折る心を兼ねた。

○五嶺蒼々として—和漢朗詠集菅原文時の詩句—五嶺蒼々雲往來、但憐大庾萬株梅—を引いた。五嶺は大庾・始安・臨賀・桂陽・揭陽の五山。大庾萬株梅は、英州の司冠であつた人が大庾嶺に數十株の梅を植ゑたので梅の名所となつたのをいふ。

竹の。霞こめたる面白さよ。（右の方に向き）又これなる岨傳ひを山人の來り候。この者を待ち名所をも尋ねばやと存じ候（とツレへ向く）

ワキヅレ「然るべう候

といひて一同脇座の方へ行き、順次竝びて下に居る。

【三】

一聲の囃子にて、シテ樵翁、面笑尉・尉髪・襟淺黃・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて柴を負ひ杖をつき、ツレ樵夫、直面・襟赤・着附無地熨斗目・淺黃縷水衣・腰帶・扇の裝束にて、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレ一の松、シテ三の松にて向合ひ、

シテツレ一聲『折を得て。春の薪にさす花の。匂ひを運ぶ。山颪

ツレは正面に向き、

ツレ『谷の下庵遙々と。（シテツレ向合ひ）「霞に遠き。眺めかな

と謠ひて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ『五嶺蒼々として雲往來す。ただ憐む大庾萬株の梅。シテツレ（向合ひ）『梢も殊に色深き。木蔭に寄

に點々として飛んで行く』と詠まれた通りの景色だ。……おゝ遠くの山の麓の竹藪に霞のたちこめてゐるのが實に面白い……又こちらを見ると、崖傳ひに木樵がやつてくる。あの男がこゝへくるのを待つてゐて、名所なども尋ねませう」

と脇座へ行つて、木樵の來るのを待つ態。

【三】

シテ木樵の老人、肩に柴を負つて、ツレ年若い樵夫と共に山から下りてくる態で登場。

樵翁「丁度花の咲く春なので、薪に花の一枝をさして、山から下りてくると、山おろしの風が花の匂ひを運んでくれるやうだ」

樵夫「遙か向ふの、谷の下の家が霞に包まれてゐる樣は、遠くから見て、ほんとに面白い眺めです」

樵翁「詩の句に『どの山もどの山も青々として、その頂には雲が往き來してゐるが、大庾嶺の何萬本もある梅が殊に面白い』といはれてゐるが、實際花の色も際立つて美しい木蔭に立ち寄ると、風雅な心の

○心なき身にも―風雅な心のない者にも。新古今集西行法師の「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮」の詞を借りたか。
○あはれは有明の―雅趣はありを有明にいひかけた。古今集壬生忠岑の「有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものはなし」を借りたか。
○知んぬ―知りぬの撥音便
○見る度に―續千載集藤原成實の歌「よしさらば涙に曇れ見る度に變る鏡の影もはづかし」に據つたか。
○ます鏡―眞澄鏡。變り方が增すといひかけた。
○うつる月日は―影の映るを月日の過ぎ移るといひかけた。
○昨日は少年―唐の許渾、秋思の詩「高歌一曲掩二明鏡一、昨日少年今白頭」を引いた。
○春の光にあたれども―古今集文屋康秀の歌「春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき」に據つた。
○柴取りて―業をしてを柴にいひかけた。
【三】
○沙門―僧侶。

れば心なき。身にもあはれは有明の。つれなき命ながらへて。又廻り逢ふ春べかな。誠に知んぬ老も。風情少き。有様を

シテ ツレ 上歌「見る度に。變る姿やます鏡。變る姿やます鏡。うつる月日は程もなく。昨日は少年今日白頭の雪とのみ。積り積りて老が身の。春の光にあたれども。わびしき業を柴取りて。歸る山路の、苦しさよ歸る山路の苦しさよ

「わびしき業を柴取りて」と、シテ・ツレ入替り、シテは眞中、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

ワキ「いかにこれなる山人に尋ね申すべき事の候

シテ「不思議やな見馴れ申さぬ御姿なり。いかさまこれは入唐の沙門にて御座候な

ワキ「げによく御覽じて候ものかな。われ日の本よりこの國に渡り。佛法流布の古跡を尋ね。こ

ないものにも、雅趣を味ふことが出來るのだ。かうして、自分達も生きながらへて來て、又この面白い春景色に廻り逢つたことだ。さういへば、年寄りといふものは風情の少いものだといふことに、今更氣がついたことだ。鏡を見る度毎に、姿は月日と共に變つて行くもので、つい昨日少年であつたものが、今日は早白髪の老人となつて、春の光に當つても、頭の雪の解ける時は來ないのだ。かうして、樂しい筈の春にも、しがない仕事をして、柴をとつて、險しい山路を歸つて行くのは、實に苦しいことだ」

といひながら、僧の佇んでゐる近くへ來る。

【三】

僧「申し、こゝな木樵にお尋ねしたいのだが……」

樵翁「これは不思議だ、見馴れない様子の方だが、成程、あなたは支那へ渡つていらつしやつたお坊さまですな」

僧「おゝよくお分りになつたものだ。私は日本からこの國へ渡つて、佛法の廣かつた古跡を尋ね、それから更に印度へ渡り

れより渡天の志あるにより。遙々思ひ立ちて候
シテ「さては渡天の御爲かや。昔は聞きつ近き世
には。ありがたかりける御事かな
ツレ「げに痛はしや遙々と。行方も遠き旅衣の
シテ「立ち出で給ひし日の本の。佛法東漸を振り
捨てて
ワキ『去り來し法の跡遠き
シテ『昔語を今更に
ワキ『誰か委しく
シテ『夕月夜
地上歌『星の國にと行く雲の。星の國にと行く雲
の。はてしはあらじ人心。心せよ胸の月。よその
光を尋ねても。何にかはせん目のあたり。見る
を尋ぬる、はかなさよ見るを尋ぬるはかなさよ

ツレ地上歌の初めに笛座前に行きて下に居る。

たいと思つたので、遠い所を思ひ立つて來たのだ」
樵翁「それでは印度へお渡りになる爲にこちらへお出でになつたのですか。昔はさういふ奇特な方があつたといふことだが今の世には珍しいありがたいことです」
樵夫「行先の遠い旅にお出になつて、さぞおつらかつたことでせう」
樵翁「あなたのお立ちになつた日本こそ、佛法の次第に進んで行く東方の國であるのに、それを振り捨てて……」
僧「遠い昔の佛法の古跡を尋ねて來たのです」
樵翁「今更そのやうな昔話を……」
僧「誰か委しく教へてくれるものがないでせうか」
樵翁「いえ、誰が委しくいふことが出來ませう。それに、印度へ行かうと思へば、大變な道のりです。それよりも第一、佛道を外に求めようとするのは、はてしのないつまらないことで、よくわが胸に手を當てて悟らなければ駄目です。よその光を尋ねても、何の役に立ちませう。眼の前に見えるものを棄てて置いて、外に尋ね求めるのは果敢ない淺はかなことです」

○痛はしや―氣の毒なことだ。
○立ち出で給ひし―衣の縁語裁ちを立ちにいひかけた
○佛法東漸―佛法が印度に始まつて、支那から日本へと次第に東方に傳はつてくること。
○夕月夜―委しく言ふといひかけ、星を呼び起す料とした。
○星の國―空。天竺を星の國に擬へたのである。
○はてしはあらじ―徒らに佛道を外に求めても效果がない意と、天竺への道のりの遙かに遠い意と。
○心せよ胸の月―心を用ゐて佛道をわが心の中に求めよとの意。胸の月は心を月に喩へた語。

【四】

○さながら―すべて、一體に。

○氣疎き―「キヨオトキ」と謠ふ。恐ろしい。

【四】

ワキ「かかる面白き御答へこそ候はね。まづまづ尋ね申したき事の候。見え渡りたる山河の氣色。いづれも妙なる眺めのうちに。(正面の方に向き)あれに霞める遠山もとの向ひに見えたる竹林に。俄かに雲のうち掩ひ。風凄しく吹き落ちて。さながら氣疎きその氣色。これは如何なる事やらん(とシテへ向く)

シテ「げに御不審は御理。(右の方を遠く見て)あの竹林の巖洞は虎の栖にて候を。向ひに見えたる高山より。常々雲の掩ひつつ。龍虎の戰ひあるものを(とワキへ向く)

ワキ「不思議の事を聞くものかな。音に聞きしを目のあたり。龍虎の爭ふその有樣を。今見る事の不思議さよ

シテ「畜類なれどもかくの如く。その勢ひをあら

【四】

僧「これは實に面白いお答へだ。しかしそれは兎に角、まづお尋ねしたい事があるのです。こゝから見渡した景色、山も河も皆面白い勝れた眺めですが、その中でも、あそこの、霞み渡った遠くの山の麓の、向ふに見える竹藪に俄かに雲が覆ひかゝつて、風がもの凄く吹き、あたり一面大變恐ろしい樣子に見えるが、あれは一體どうしたことなのでせう」

樵翁「成程、變にお思ひになるのは御尤もです。あの竹藪の岩穴は虎の栖なのですが、向ふの方に見えます高山から、始終黒雲が覆ひかゝつて來て、龍と虎との戰ひがあるのです」

僧「これは不思議なことを伺ふものです。人の話に聞いてゐた龍虎の爭ひを、今眼の前に見るとは、實に不思議なことです」

樵翁「龍虎は畜類ですが、このやうにそれ

はして

ワキ『何をかさのみ

シテ『争ひの

地上歌「蝸牛の角の上にして。はかなや何事を。争ひは人の身も。變らぬものを世の中の。習ひなればや畜類の。戰ふことも、理や戰ふことも理や

とシテ舞臺の眞中へ行き下に居り柴を下す。ワキは地上歌の初めに下に居る。

【五】

ワキ「猶々龍虎の戰ひの有樣委しく御物語り候へ

地クリ「それ生を受くる者。その身の威勢を爭ふこと、人間以てこれに同じ。必ず龍虎に限るべからず

シテサシ「然れば金龍雲を穿ち。猛虎深山に風を起す

ぞれその勢ひを示して戰ふのです」

僧「どうして、そのやうに爭ひなどをするのであらう」

樵翁「爭ひ事といふものは、いづれにしても蝸牛が角を突き合ふやうな、果敢ないつまらないことなのですが、さうした爭ひ事の人間にも誰にもあるのが、世の中の習はしといふものでせうから、畜類が戰ふのも無理のないことです」

【五】

僧「龍虎の戰ふ樣子をもつと委しく話して下さい」

樵翁「すべて生類が、その身の威勢を競爭するのは、人間もすべて同じことで、必ずしも龍虎に限つたことはないのです。

ところで、金色の龍が雲を作り、強い虎が深山に風を起すさまは、いづれもその勢ひの實に盛んなもので、お互の威勢

○蝸牛の角の―和漢朗詠集白樂天の詩句「蝸牛角上爭二何事一、石火光中寄二此身一」に據つた。

【五】

○金龍―金色の龍。傳燈錄に「現一大金龍一奮發威神震動山嶽」太平記卷廿四天龍寺建立事にも見ゆ。

○雲を穿ち―易經乾卦文言に「雲從レ龍、風從レ虎」

○龍虎の紋―天子の禮服には龍の模樣を織り、袞龍の御衣と申す。虎は添へ字である。
○龍顏 史記高祖紀に「高祖爲レ人隆準而龍顏」
○龍駕―屈原の九歌に「龍駕兮帝服、聊翔遊兮周章」太平記卷三に「龍駕を廻らして六波羅へ成し進らせん」
○內の淸き―竹の中空を心の淸いのに見立てた。
○羅漢に仕へ―羅漢は小乘の悟りを得た者。虎は十六羅漢の六番目跋陀羅尊者の愛獸。
○四睡 豐干禪師、寒山、拾得、虎の熟睡してゐる圖を世に四睡といふ。
○龍吟ずれば 易疏に「龍吟則景雲出、虎嘯則谷風生」淮南子にも「虎嘯而谷風至、龍擧而景雲屬」
○和國の物語―日本國への土產話の意であらう。

地「いづれも勢ひ妙にして。互の勢を爭ふこと畜類と雖も位高く。雲居に住めば龍虎の紋
シテ「帝の御衣にもこれを織り
地「殊に天子の御顏を龍顏と申し御乘物を。龍駕とも又。名づけたり

（居クセ）

地クセ「さて又虎はかりそめに。住むも千里の道しめて。住家と定むとか。もとより竹は直にして。內の淸きをわが友と。賴む千尋の影淸く。曇らぬ法の道を知る。羅漢に仕へ奉る。又は四睡の一つにも。あらはれけると聞くものを。龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば風生ずと。聞きしも目のあたり見るこそ不思議なりけれ
シテ「これぞ和國の物語
地「委しくなほも見給はば。この山陰の岨傳ひ。

爭ひをする態度が、畜類ながらも實に堂堂たるものです。そして龍は位の高いものでて、雲の中に住んでゐるので、この龍の模樣を天子の御衣にも織り、殊に天子の御顏を龍顏と申し上げ、天子の御乘物を龍駕とも申し上げるのです。――

それから又、虎は一寸住むにしても、千里の道を往き來する所に住家を定めるといふことです。そして竹は眞直な、中の淸らかなものであるので、これをわが友として、その廣々とした淸らかな所に住み、曇りのない佛道を心掛けて、羅漢にお仕へし、又四睡圖の四睡の一としても描かれてゐるといふことです。その虎や龍の『龍が鳴けば雲が起り、虎が吼えると風が起る』といふ文句通りな光景を眼の前に見るのは、實に不思議なことです。これこそ日本へのよいお土產話になりませう。もつと委しく御覽になりたいならば、この山陰を崖傳ひに行つて、あの竹藪のこちら側の巖陰に立ち寄つて、からだを隱して御覽なさい。……おゝもう夕

○夕日も―見給へと言ふといひかけた。
○結ふ柴の―これも言ふを結ふにいひかけた。

【間】

【六】

竹の林のこなたなる。巖の陰に立ち寄りて。身を隠し見給へと。夕日も傾きぬ暇申さんと結ふ柴の。薪を肩にうちかけて。谷の下道遙々と。家路をさして、下りけり家路をさして下りけり

シテ―「夕日も傾きぬ」と西の方橋懸を見やり、直して柴を負ひ杖を持ちて立ち、「谷の下道」と右へ廻り正面に開き杖をすて、來序の囃子にて中入。ツレも續いて入る。

日も傾いて來ました。では、お暇しませう―

といつて、束ねた柴を肩に負ひ、遠い谷の下道をわが家へさして下つて行つた。

樵翁、樵夫、谷陰のわが家へ歸る體で、樵翁は竹藪の中に入る。

【間】末社來序の囃子にて、狂言仙人、面見徳・仙人頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

シテ「かやうに候者は。この國の傍に住む仙人にて候。こゝに面白き事の候。龍虎の戰ひの候が。人間の威勢を爭ふに少しも變る事なく候。いづれも餘の畜類に變り勢ひ強きものにて。金龍雲を穿ちて猛虎深山に風を起すと申し。誠に位高きものなれば。天子の御衣にも雲龍を織りつけ。又天子の御乘物を龍駕と申す。又虎は千里を驅くる竹林に住みて。竹を友と仕り候。總じて竹は素直にして内の清きものなれば。竹の林に住み佛法の明らかなる事をも知り。羅漢の内に交はり四睡のうちにも入る。誠に龍虎の二つは春の花秋の月の如くにして。いづれ勝負はなきものと申し候。されば龍吟ずれば雲起り。虎嘯けば風を生ずとも申し候へば。戰ひの勝負あるまじく候。（脇正面へ向き）いや漸く戰ひの時刻にならん。風吹き雲起り恐ろしき體になりて候。皆々罷り出で見物仕り候へ。その分心得候へ〳〵

といひて引く。

【六】後見、一疊臺を大小前に出し、竹林の作物（山の作物の屋根

【六】後段

○煙葉蒙籠として―和漢朗詠集白樂天の竹の詩句―煙草蒙籠侵レ夜色、風枝蕭颯欲レ秋聲」煙葉は綠滴る竹の葉蒙籠は葉が茂つて小暗いこと。夜を侵すは晝も夜のやうに暗いこと。風枝は風に吹かれる枝。蕭颯はさらさらと音のすること。

【七】

及び左右に生莚を附く）に引廻を掛けてその上に置く。後ジテ虎、面獅子口・白頭・虎の立物・金地鉢巻・襟花色・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて、作物の内に坐し居る。

ワキ立ちて作物へ向き、

ワキ「さても不思議や山人の。教へのままに山路を分け、竹林を遥かに見渡せば。煙葉蒙籠として。夜の色を侵す。風枝蕭颯として。秋の聲よりすさましや

地上歌「あれあれ嶺より雲起り。あれあれ嶺より雲起り。俄かに降りくる雨の音。鳴神稻妻天地に輝く光のうちに。現れ出づる。金龍の勢ひ。遥かによそめも肝を消し。身の毛もよだつ。ばかりなり

地上歌の間に、後ヅレ龍、面黒髭・赤頭・龍の立物・赤地鉢巻・着附厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて打杖を持ち、無地熨斗目を被ぎて橋懸に出で一の松に立つ。

【七】

地「かくて黒雲竹林に覆ひ。かくて黒雲竹林に覆ひ（ツレ被衣を脱ぎて舞臺に入り）。覆ひかかると見えつ

僧は先程の樵翁に教へられた通り、竹藪の近くの岩陰へ來た態。舞臺には竹藪の作物が出てゐる。

僧「實に不思議なことだ。木樵が教へてくれた通りに、山路を分けてこゝまで來て、遠くの竹藪を見渡すと、綠滴る竹の葉が生ひ茂つて、晝でも夜のやうに暗く、竹の枝はさら〳〵と鳴つて、秋風よりもなほもの寂しいことだ。――

あれ〳〵、山の頂から雲が起つて、俄かに雨が降り、雷、電が天地に閃き輝く。その光の中から現れて來たあの金龍の恐ろしい勢ひ。ずつと離れたこの所から見てゐても、肝がつぶれ身の毛がよだつばかりだ」

後ヅレ龍が登場する。

【七】

かうして、黒雲が竹藪に覆ひかゝつたと思ふと、竹藪の中の岩穴に籠つてゐ

○惡風　烈しい風。

○惡虎—猛虎。

○虎亂—戰鬪の術語に、獅子奮迅、虎亂入といふのがあるから、文字通り虎の猛鬪の形容に用ゐた。

ゐが（脇座下に居て作物へ向き）、竹林の巖洞に籠れる虎の（作物の引廻を下し）。現れ出づれば岩屋の内より惡風を吹き出だし（シテ左袖を返し）。一方に雲を。吹き返し（竹杖を持ちて作物を飛出で）。敵を追風に勢ひ勇む。恐ろしかりける。氣色かな（とシテ常座にて小廻り、ツレも飛返る）

地「かかりける處に。かかりける處に、金龍雲よりおり下つて（ツレ立上り飛び開き）。惡虎を取らんと飛んでかかり（シテ・ツレ互に打違ひ）。飛龍の戰ひ。隙もなし

〔舞働〕

シテとツレ、シテは竹杖、ツレは打杖を以て互に打ち違ひ、龍虎相搏つ様を示し、

後ジテ『もとより虎亂の勢ひ猛く

と拍子を踏み、引續き、シテ・ツレ次の謠に合せて仕科し

地『もとより虎亂の勢ひ猛く。左も右も。劍の如

た虎が現れ出た。

後ジテ虎、作物の竹林から現れ出る。

そして岩屋の中から烈しい風を吹き出して、龍の起した雲を一方へ吹き返して、追手の風に乘じて、敵の龍を勇ましく攻め寄せて行くさまは、實に恐ろしい勢ひである。

さうしてゐると、金龍が雲から下りて來て、猛虎を取らうと、飛んでかゝり、隙間もなく飛びまわる。

〔舞働〕に龍虎相搏つ物凄い樣を示す。

もとより虎は勢ひの盛んなものであるから、左も右も劍のやうに竹の枝を折

くに竹枝を折つて。金龍にかかれば。悪虎を巻かんと。覆ひかかるを背けて追つつめ食はんとすれば。金龍雲居に遙かに上れば（ツレ幕に入る）。悪虎は勢ひ巌に上り（シテ臺に飛上りて幕を見やり）。遙かに見送り無念の勢ひあたりを拂ひ（飛下り）。又竹林に飛び歸り（小廻り）。又竹林に。飛び歸つて（左へ廻り）。そのまま巌洞に。入りにけり

と常座にて飛返りて下に居り、直に立ちて留拍子を踏む。

つて、金龍に斬りかゝつて行くと、金龍は猛虎を巻かうと思つて、その上に覆ひかゝるが、猛虎はこれを外して追ひ詰め、食ひ取らうとするので、金龍は空高く逃げ昇つてしまふ。猛虎は勢ひ強く巖の上に上り、金龍の空に昇るのを遙かに見送つて、いかにも殘念さうな樣子であつたが、又竹藪の中に飛び歸つて、そのまゝ岩穴の中に入つた。

後ヅレ龍、空に昇る態、こゝで退場、後ジテ虎、巖洞に入る態で退場。

〔考異〕

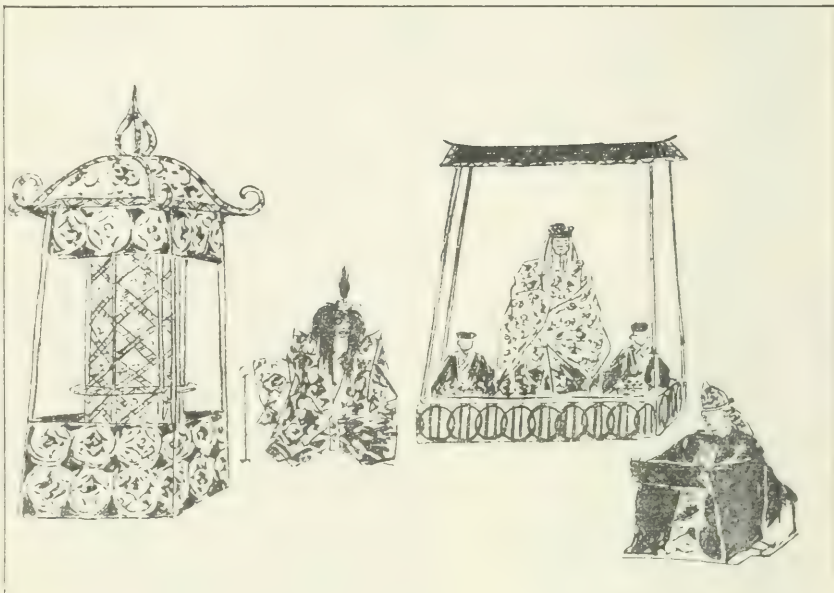
諸流（觀 寶）

殆ど全く同じである。

古謡本（元祿八年本）

【一】ワキ これ（元か様に候者）は諸國一見の……日の（元ナシ）本をば……よき便船の（元ナシ）候間……　【二】シテ 一聲 折を得て……句ひを運ぶ山嵐（元あらし）　【六】地 かかりける處に……飛龍の戰ひ隙もなし（元けれ共）後ジテ もとより虎亂の勢ひ猛く（元ナシ）

輪藏（りんざう） 觀

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 太宰府僧、**ワキツレ** 從僧（二人）、**狂言** 門前の者、**前ツレ** 老翁（火天）、**狂言** 末社福部の神、**後シテ** 傅大士、**子方** 普建、**子方** 普成、**後ツレ** 火天

【所】 京都　北野天神

【時】 （無季）

【作者】 能本作者註文、二百十番謠目錄ともに觀世彌次郎の作とする。

【梗概】 筑前太宰府の僧が京都に上り、北野天神に參詣して、輪藏を拜んでゐると、その守護神火天が老翁の姿で現れ出で、輪藏の謂れを說き、僧の乞ふまゝに、五千餘卷の經文を一夜のうちに拜ませることを約束して消え失せる。その月夜、紫雲がたなびき靈香が薰り滿ちて、法華經守護神の御厨子から、傅大士が普建・普成の二童子を伴つて現れ出て、釋迦一代說法の經箱を悉く僧に與へて、樂を舞ふと、やがて天上から火天が天降つて來て、僧を輪藏に誘つて、經文を悉く轉讀せ

しめる。

【出典】　見當らない。作者の創作したものであらうか。

【概評】　輪藏といふ珍しいものを題材とした曲で、實演を觀ても、輪藏に擬へた特異な作物をくる〳〵と廻すのは、目新しい興味を起させるのであるが、登場人物の取扱ひ方については、考慮が足りなかつたやうに思はれる。第一に同じやうに五千餘卷の御經を守護する、妙經の守護神である、傅大士と火天とをシテ及びツレとして併列させたのが拙い。古謡本ではこのシテとツレとを反對にしてゐるが、それによれば、シテは前後兩段に出るが、傅大士は愈々力の弱いものとなり、現行曲のやうにすれば、役柄の輕重が逆になつて、いづれにしても兩立し難いものである。龍神と天女とを併演させると同樣な考へて、かうした脚色を試みたものとすれば、淺慮の譏りを免れないであらう。第二に、このワキを上人といつて、傅大士も火天も非常に尊敬してゐるが、菩薩天神から尊敬せられる僧としては、餘りにも無名である。前段に「御身父母の胎内を出でしよりこの方、五戒を亂さず慈悲を起し、佛道修行し給ふこと、その功既に、年久し」とはいはれてゐるが、これだけの消極的な修行だけでは、未だ高僧として承認するに足りない。要するに、シテもツレもワキも、輕重の正鵠を失つたものといはなければならないと思ふ。本曲はめでたい曲柄として脇能として取扱つてはゐるが、佛教臭味の甚しいものであるから、「翁」附には用ゐない。

【一】

前段

舞臺は初め筑前太宰府で、ワキ太宰府の僧、ワキヅレ從僧を隨へて登場。

後見、一疊臺を大小前に出し、上に引廻をかけたる大宮の作物を置き、輪藏の作物を目附柱近くに置く。次第の囃子にて、ワキ太宰府僧、角帽子・着附小格子・水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束、ワキヅレ從僧二人、角帽子・着附無地熨斗目・縷水衣・白大口・腰帶・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ　次第「東に殘る法の道。東に殘る法の道。迷はぬ、教へ頼まん

○東に殘る法―西方印度に起つた佛法が東漸して、その本國では既に亡び、東方の日本に殘り傳はつてゐるのをいふ。

僧「佛法發祥の地西方印度では既に亡びてしまつて、東方の日本に傳へ殘つてゐるこの御教へを受けて、道に迷はないやうにしよう」

○宰府―太宰府の略。菅原道眞の廟所安樂寺の所在地

○洛陽―京都を唐風に呼んだ稱。洛陽はもと支那古代の都の名。

○北野の天滿天神　京都の北野神社。菅原道眞を祀る。今官幣中社。〔老松〕參照。

○當社―太宰府天滿宮。

○筑紫舟―九州路の舟。

○法の爲―舟に乘りを法にいひかけた。

○難波の浦　今の大阪。

○日も重なれば―衣の緣語紐を日もにいひかけた。重なるも衣の緣語。

地取にワキは正面に向き、

ワキ　これは筑前の宰府に居住の僧にて候。われ若年の昔より。佛法修行の志淺からず候へども。未だ都を見ず候程に。洛陽の寺社に參り。殊には北野の天滿天神は。當社御一體の御事なれば。參詣申さんと唯今思ひ立ちて候

といひてワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ　〔道行〕筑紫舟。法の爲にと思ひ立つ。法の爲にと思ひ立つ。雲路に續く天の原。出づる日影の程もなく。難波の浦に着きしかば。これよりやがて旅衣。日も重なれば程もなく都に早く、着きにけり都に早く着きにけり

ワキ「難波の浦に着きしかば」と正面に向きて先へ出で、またもとに歸りて都に着きたる心。道行濟みて正面に向き、

ワキ　急ぎ候程に。都に着きて候。これより北野に參らばやと思ひ候

――次第を謠つて佛道修行の心持を述べ、

僧「私は筑前の太宰府に住んでゐる僧です。私は年の若い頃から佛法修行に熱心だつたのですが、まだ都へ行つたことがないので、京都の神社佛閣に參詣し、殊に北野の天滿天神はこちらの太宰府天滿宮と同じ御神體だから、是非參詣したいと思つて、今度上京を思ひ立つたのです」

――見物人に自己紹介をし、

僧「佛法修行の爲と思つて、筑前から舟に乘り、廣々とした海に出て、幾日か過してゐるうちに、間もなく難波の浦に着いたので、そこからまた陸路の旅を續けて、日を過して行くうちに、もはや都に着いた」

――旅程を述べてゐるうちに旅は進んだ態で、舞臺は京都となる。

僧「道中を急いだので、もはや都に着いた。これから北野天神に參詣しませう」

ワキヅレ「然るべう候

といひて、ワキヅレは脇座の次へ行きて坐し、ワキは仕手柱際へ出で、

ワキ「門前の人の渡り候か

狂言門前の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇の装束にて橋懸一の松邊に立ち、

狂言「所の者と御尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「これは筑前の宰府より出でたる僧にて候。この所に於て承り及びたる輪藏を拜ませて給はり候へ

狂言「さん候當社の輪藏は卽ち我等の預かりにて候間。拜ませ申さうずるにて候。まづかう〳〵御通り候へ

ワキ「祝着申して候

ワキ・狂言入替りて舞臺に入り、狂言扇を開きて、

狂言「さら〳〵〳〵。これこそ天下に隠れもなき輪藏にて候。よく〳〵御拜み候へ

ワキ「心得申し候

狂言引き、ワキは作物の前に立ち、

ワキサシ『ありがたや釋迦一代の藏經を。大唐よりも渡しつつ。末世の衆生濟度の爲に。輪藏に納

といつて、やがて北野に來て憩ふ。舞臺は北野天神となり、社殿と輪藏の作物が出てゐる。僧は門前の者に輪藏を開いて貰つて、その前に立ち、

僧「あゝありがたいことだ。釋迦如來御一代の御說法を集めた一切經を支那から日本へ渡したので、末世澆季の衆生を救つ

○釋迦一代の藏經—釋迦が一代に說法した一切の經典藏經は大藏經の略、大小乘の三藏(經・律・論)を藏めたもので、卽ち一切經。
○大唐—支那。
○濟度—生死の苦海に迷ふ衆生を救つて極樂の彼岸に渡すこと。
○輪藏—轉輪藏の略。八角の回轉式書架。一切經の取出しを便利にする爲に傅大士の考案したもの。

○結縁の手に觸れ—佛縁を結ぶ爲に、輪藏に手を觸れさせて。
○傅大士—姓は傅、名は翕、字は玄風。佛道を修め、梁武帝に金剛經を講じ、自ら雙樹林下當來解脱善慧大士と號した。陳の大建元年七十二歳で卒。輪藏を創案したので、その中に像を祀られてゐる。
○普建普成—傅大士の二子母は劉氏。元祿本（間語にも）には普成を普文とす。
○現受無比樂—現世では無比の快樂を受け、後世では淸淨土即ち極樂に生まれるとの意。

【三】

○おろかの—迂濶な。
○朝夕白雲の—朝夕知り居るといひかけた。

め結縁の。手に觸れ緣を結ばせんとの。御神の誓ひぞありがたき（と下に居て合掌）。南無や傅大士普建普成。現受無比樂後生淸淨土

と謠ひて手を直し立ちて脇座へ行きかゝる。

【三】

ツレ老翁、面小牛尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出でながら、

ツレ「なうなうあれなる御僧。御身は筑前の宰府より來り給ひて候か

ワキ脇座に立ちてツレに向ひ、

ワキ「不思議やな都始めて一見の者を。宰府の者とは何とて見知り給ふらん

ツレ「あらおろかの仰せやな。そなたは知ろしめされずとも。われは朝夕白雲の。迷はぬ法の友人なれば。などかは知らで候べき

ワキ「これは不思議の御事かな。さてさてかやうに承る。御身は如何なる人やらん

て極樂へ導く爲に、この一切經を輪藏に納めて、これに手を觸れることによつて、佛縁を結ばせようと思し召す、この神様の御利益は實にありがたいことだ。……どうか傅大士竝に普建普成童子、現世に於てはこの上もない快樂を得、來世では極樂淨土に生まれることが出來ますやうに—

と合掌す。

【三】

そこへ、前ヅレ火天が老翁の姿を裝つて登場。

老翁「もし〳〵、そこに居られるお僧さま、あなたは筑前の太宰府からお出でになつたのですか」

僧「これは不思議だ。都へ始めて見物に來たもので、顔見知りもないのに、太宰府の者だとは、どうして御存じなのでせう」

老翁「これは迂濶な事を仰しやる。あなたが御存じなくても、私は朝夕知合になつてゐるもので、私はもと〳〵迷ひのない佛道の友なのですから、知らない筈はないのです」

僧「これは不思議なことを仰しやる。一體そのやうな事を仰しやるあなたは、どういふ方なのです」

○五千餘卷―一切經の卷數唐の智昇が大藏經を五千四十八卷に整頓した。
○十二天―地天、日天、毘沙門天、風天、水天、羅刹天、梵天、月天、伊舍那天帝釋天、火天、炎魔天。
○火天―十二天の一。火神の形を示現したもので、青牛に乘り、滿身火焰に包まる。
○天部―天界に住むものの總稱。
○隨喜渴仰―隨喜は他人の善をわが善の如くに喜ぶこと。渴仰は渴いた者が水を望む如くに仰ぎ慕ふこと。
○三界唯一心―華嚴經十地品に「三界所有唯是一心」自行略記に「夫三界唯一心、心外無二別法一、心佛及衆生、是三無差別」三界は欲界・色界・無色界で、衆生の生死輪廻する迷界。
○北の宮居―北野神社。北より北辰、北辰より天滿つ空を出した。
○北辰―北極星。
○天滿つ星―空に一面にある星。天滿の神號をきかせ、星の廻るを輪藏の廻るにいひかけた。
【三】

ツレ「今は何をか包むべき。五千餘卷の御經を。晝夜に守護し奉る。十二天のその中に。火天これまで來りたり

ワキ「そも火天とは目のあたり。天部を拜み申すことよと。感涙肝に銘じつつ現とも更に辨へず

ツレ「こなたも御身の貴さに

ワキ「隨喜渴仰

ツレ「樣々に

地上歌「說き置きし。御法の花も色々に（ワキ下に居る）。御法の花も色々に。敎へは多き道ながら。悟りは一つぞ胸の月。曇らじや三界唯一心の外ならじ。所は北の宮居。北辰は動かず。天滿つ星の廻るなる。輪藏を開きて。靜かに拜み給へや

【三】

ワキ「あらありがたの御事や。五千餘卷の御經を。一夜に拜ませおはしませ

老翁「今は何を隱さう、五千餘卷の一切經を夜晝となく御守護申しあげてゐる、十二天の一である火天がこゝまでやつて來たのです」

僧「一體火天とは……天の神樣を目のあたり拜むとは。たゞありがた淚にくれるばかりで、夢だか現だか、全く分りません」

老翁「いや、私もあなたが貴い高僧だから、敬つてこゝへ來たのです」

僧「私はたゞ〳〵ありがたくて、深く信心するばかりです」

老翁「佛のお說きになつた結構な經文は種種樣々あつて、佛の御敎へは色々道の多いものですが、眞の悟りはたゞわが心一つにあるのです。悟りの心を以て觀れば、欲界・色界・無色界、すべての迷ひの世界もわが心より外にはないのです。それにしても、この北野のお社は京都の北にあつて、譬へば北極星は少しも動かないで、多くの星がその周圍を廻るやうに、ぐるぐるとまわる、このお社の輪藏を開いて、よくお拜みなさい」

【三】

僧「あゝありがたいことです。どうぞ五千餘卷の一切經を一晚のうちに拜ませて下さいませ」

○おほけなき—不相應な。
○五戒—殺生、偸盗、邪婬、妄語、飲酒を犯さないとの佛法の戒律。
○その身は俗體なりといへども—傅大士は居士で剃髪はしなかつた。
○心筑紫の—心盡しといひかけた。
○北の宮寺—北野神宮寺。社の南にあり觀世音を本尊としてゐた。宮寺は神佛混淆、兩部習合の社をいふ。

ツレ二 五千餘卷の御經を。一夜にお僧の拜まんとは。おほけなき御事なれどもさりながら。「御身父母の胎內を出でしよりこの方。五戒を亂さず慈悲を起し。佛道修行し給ふこと

地「その功既に。年久し

と一疊臺の前に行きて下に居り、

ツレサシ「然るにこの御經に於て。大唐よりも渡されし

地「傅大士普建普成とて。その身は俗體なりといへども。この三人の如何なれば。かの御經に値遇の緣。深き心の。隙もなく。晝夜に經を。守護し給ふ

(居クセ)

地クセ「その後日の本に。渡りし法の舟の內。波路遙かに漕がれ來し。心筑紫のはてよりも。佛法東漸の。都の北の宮寺に

老翁二「五千餘卷のお經を一晩のうちに拜みたいとは、お僧に分不相應な望みではあるが、あなたは母の胎內を出て以來、佛のお戒めになつた五戒を犯すことなく、慈悲の心を起して、佛道を修行せられ、既に長い年月功德を積まれたのだから、お拜ませしませう。——

さて、この一切經を支那から渡されたのは、傅大士・普建・普成といふ人で、この人達は剃髮しない俗體の居士であつたのですが、三人ともどうしたわけか、この一切經と深い御因緣があつて、夜も晝も、絕間なくお經を守護せられたのです。——

その後、支那から日本へ渡るにつけても、遠い海路を渡つてくる途中、隨分心を盡されたのですが、佛法は次第に東方に移つて行くといふ大勢につれて、筑前からまた都の北野神宮寺にお納めになることとなつたのです。

ツレ「納め給ひし昔より

地「今末の世といひながら。類ひ稀なる上人の結縁の利益仰ぎつつ。衆生を濟度し給へ。われも姿を改めて（と居立ち）。必ずここに來りつつ行道の利益（と立ちて右へ廻り）、なさんといふかと見えて失せにけり。いふかと見えて失せにけり

その當時から見れば、今はまたなほ一層末世となつたわけですが、お上人は例の少い高德のお方だから、この輪藏と佛緣を結んだ功德を仰いで、今後よく衆生を濟度なされませ。私も姿をかへて、きつとこゝへ來て、行道の功德を致しませう」

といふかと思ふと消え失せてしまつた。

と常座にて正面へ開き、來序の囃子にて中入。

【間】　末社來序の囃子にて、狂言末社神、面登髭・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。北野の末社福部の神にて候。さる程に當社の古は。延喜の臣下菅丞相にておはします。即ち菅丞相と申すは。凡人にあらねども。衆生濟度の御方便にて假に人間と顯れ。智慧才覺人に勝れ給ふ故。時平の讒言により。筑紫安樂寺に流され給ふ。その後梵天に祈り給ひ。雷となつて都に上り。讒奏の輩を平らげ。今は北野の天滿宮と顯れ給ひ。靈驗あらたに御座候。さる程に筑紫太宰府に不思議の沙門の候が。氏神と當社とは御一體なれば。唯今當社へ御參詣にて。輪藏を拜まんとの御事なり。この輪藏と申すは。釋迦一代の藏經五千卷を籠め置き給ふ。この御經と申すは。月氏國より震旦に渡りしを。傅大士普文普建と申す人。衆生を佛道に引き入れん爲。わが朝に渡し。始めは筑紫安樂寺へ納め給ふが。かほど妙なる御經を田舍に置くはいかゞなりとて。都に上せこの所に納め給ふ。さて又かの御方は。佛の志深く殊勝なる御方なれば。一童子に仰せつけ一

○上人―太宰府の僧を指す

○行道の利益―行道は讀經しながら佛像の周圍をめぐり歩く佛法の儀式。利益はその功德。こゝでは輪藏の周圍を行道するのである。

【間】

○菅丞相――菅原道眞。〔雷電〕參照。

【四】
○後夜　今の午前四時。
○あらた　あらたか。
○いひもあへねば　いひもあへぬに。謠曲では常にかういふいひ方をしてゐる。
○妙經　妙法蓮華經。
○御厨子　佛像を安置した櫃。

【五】
○二童子　普建と普成。

切經を拜ませんとの御事にて候間。この分心得候へ／＼
といひて引く。

【四】
ワキ上「月は隈なき後夜の鐘。聲澄み渡る折節に
地上「不思議や異香薫じつつ。音樂聞え紫雲たなびく絶間より。花降り下るぞあらたなる。いひもあへねば妙經の。（宮の作物へ向きて）いひもあへねば妙經の。守護神の御厨子の扉は忽ち四方へ開けて。傅大士二童子現れたり

【五】
後見「傅大士二童子現れたり」に宮の引廻を下す。シテ傅大士、面皺尉・白垂・輪藏頭巾子・金入鉢卷・襟淺黄・着附無色厚板・白袷狩衣・茶地半切・掛絡・腰帶・唐團扇の裝束にて、作物の中に床几にかゝり居り、その左右に、子方普建・普成、黑頭・黑鉢卷・襟赤・着附縫箔・箔入水衣・腰帶・扇の裝束にて坐す。

シテ「釋迦一代の。御法の御箱
地「釋迦一代の御法の御箱をかの上人に（子方二人經箱を持つて作物を出で）。悉く與へんと。普建普成の。二童子に持たせ。上人の御前にさし置き給へば

【四】　後段
僧「月が隈なく照つて、明方の鐘の聲が澄み渡る折から、不思議にも、靈妙な香が薫り滿ち、音樂が聞え、紫雲がたなびいて、その絶間から花が降り下つてくる。實にあらたかなことだ」
と、いふやいはずに、法華經の守護神を安置した御厨子の扉が急に四方に開いて、傅大士と普建・普成の二童子が現れ出た。

【五】
シテ傅大士、子方普建・普成、作物の中から現れ出る。
大士「釋迦如來御一代の經文を入れた御箱を、この上人に皆與へよう」
といつて、普建・普成の二童子に經箱を持たせて、上人のお前にお置かせになる。

と子方經箱をワキの前に置きて一疊臺の兩角へ行きて立つ、

ワキ右の方の一卷を取りて戴く。(樂に經卷を下に置く)

シテ〔一〕傅大士座を立つて(と鹿背杖をつきて作物を出で)

地〔一〕傅大士座を立つて。竹杖にすがり。膝をかがめて(下に居り)。上人を禮し(ワキへ面を下げ)。かの御經を(伸びて箱を見)。讀誦し給へば善哉なれや(杖をつきて立ち)。善哉なれと。夜遊を奏して舞ひ給ふ(と臺の前へ歸り)

〔樂〕

子方二人、樂の初段までシテと相舞して、扇をたゝみながら

地謠座前へ行き下に居る、

地、いづれも妙なる舞の袖。いづれも妙なる舞の袖。月も照り添ふ。雲間より。天部の姿は隱れもなく。天降るこそ。ありがたけれ

と幕の方を見、次の早笛に子方の前へ行きて床几にかゝる。

【六】早笛にて、後ヅレ火天、面天神・黑垂・輪冠(火焔を戴く)・金緞鉢卷・襟花色・着付段厚板・法被・半切・腰帶の裝束にて打杖を持ち橋懸一の松へ出で、

そして傅大士は座を立つて、竹杖にすがりながら前に出て、膝をかゞめて上人に敬禮をせられ、上人が經文を讀誦せられると、『おゝ實に結構なことだ』といつて、夜の舞樂を奏せられる。

〔樂〕を傅大士が喜んで舞ふ。普建・普成の二童子も一緒に舞ふ。

いづれも誠に美しい舞ひ振りで、月も照り添ふやうに思はれる折しも、その雲間から天人が姿をはつきり現して、天降つて來られたのは、實にありがたいことである。

【六】後ヅレ火天登場。

○かの御經を讀誦し給へば—太宰府の僧が讀經するのである。

○善哉—褒めたゝへる時に發する語。傅大士がいふのである。

【六】

後ヅレ「抑もこれは。釋迦一代の藏經の守護神。十二天のそのうちに。火天の姿を。現すなり

地「火天忽ち天降り。火天忽ち天降り（と舞臺に入り）。程なく目前に現れ出でて（常座にて開き）。上人に向ひ（ワキに向ひ下に居り）。卽ち結緣の。行道の利益。めぐらし給へとおのおの立ち寄り（ワキを始め一同立ち）。上人を誘ひ。輪藏に御手をかけまくも（ツレ輪藏に手をかけて廻し）。忝しと。互に押し廻り。廻り廻るや日月の光。曇らぬ御法の。あらたさよ

「忝しと」と、ワキ・シテ・子方・子方・ツレと續いて輪藏を一廻りし、それぞれ元の座に歸る。ツレは輪藏を廻りて常座へ行き、

〔舞働〕

ツレ「これはこれ妙經の守護神なれば（と拍子を踏み）

地「これはこれ妙經の守護神なれば。夜の間に轉經の儀式をあらはし（と下に居立ち）。上人悉く披見

○かけまくも―輪藏に手をかけるを、言葉にかけていふ意のかけまくもにいひかけた。

○廻り廻るや日月の―輪藏の廻るを日月の空を廻るに日月の光の曇らぬを御法の光の曇らぬにいひかけた。

○轉經―轉讀に同じ。經文を通讀しないで、經卷の初中後を少しづつ讀むこと。

火天「自分は釋迦如來御一代の御說法大藏經を守護する神で、十二天神の一人である火天が姿を現したのである」

と、火天が忽ちに空から天降つて來て、間もなく上人の前に現れ出て、上人に向つて、

火天「佛緣を結ぶ爲に、輪藏の周圍をめぐつて、行道の功德をお積みなさい」

と、傅大士等とともに傍へ立ち寄り、上人を誘つて、輪藏に手をかけ、「おゝありがたいことだ」といひながら、互に輪藏を押し廻らすと、その廻り廻るさまが、宛も日月の光が空を廻るやうで、まことに佛法の曇りのない光はあらたかなことである。

〔舞働〕

に火天はなほ自分一人で輪藏を廻し、

火天といへば、法華經の守護神であるから、一夜の間に轉讀の儀式によつて、上人に經文を全部見させ、その後、童子達がそれぞれ經卷の御箱を持つて、

のその後おのおの御箱をとりどりに（子方立ち經箱を臺の上に載せて下に居り）。遥かの神前に運び給ふ。傅大士伴ひ（シテ立ちて作物前へ行き）。神前に積み置きいよいよ當社（ツレ立ち）。當寺の佛法。繁昌の靈地を。崇め給へと上人に教へ（とツレワキへ開き）。天部は雲居にあがらせ給へば（ツレ幕へ走り込み）。七寶莊嚴の瑠璃の座の上に（シテ子方を伴ひて橋懸へ行き）。傅大士二人の童子を伴ひ傅大士二人の童子を伴ひ。歸り給ふぞ。ありがたき

と一の松邊にて留拍子を踏む。

神前に運ばれる。そして傅大士がこれを連れて、神前に積み重ねられる。すると、火天かうして、この宮寺はいよ〳〵佛法の繁昌する靈地であるから、よく〳〵崇敬なさい。と上人に教へて、火天は天にあがつてしまはれると、傅大士はまた二童子を連れて、七寶で飾り立てた瑠璃の座牀、極樂淨土へお歸りになつた。實にありがたいことである。

○とりどりに―それ〴〵に御箱を手に取りといひかけた。

○雲居―天。

○七寶莊嚴の瑠璃の座閣を七寶で飾り立てた、瑠璃で作つた座牀。極樂淨土をいふ。觀無量壽經に「上有二金剛七寶金幢一擎二瑠璃地一」七寶の種類は經文によつて種々異つてゐる。

〔考異〕

古謠本（元祿八年本）

【一】ワキ「これは筑前の……未だ都を見ず候程に（元此度）洛陽の……ワキ「急ぎ候程に（元是ははや）都に……ワキサシ「ありがたや……傅大士普建普成（元普文普建、以下之ニ準ズ）現受無比樂……【二】ツレ（元シテ以下之ニ準ズ）「なうなうあれなる御僧御身（元ナシ）は……ツレ「あら（元ナシ）おろかの仰せやな（元ナシ）【三】ワキ「あらありがたの御事や（元候）……ツレ「五千餘卷の御經を一夜にお僧（元御身）の……

籠太鼓（ろうだいこ）　觀（寶 春 剛 喜）

解説

【能柄】四番目　一段劇能

【人物】**ワキ**　松浦何某、**狂言**　同従者、**シテ**　關清次の妻

【所】肥前國　松浦

【時】（無季）

【異稱】〔弄太鼓〕とも書いた。

【作者】能本作者註文、二百十番謡目録ともに世阿彌の作とす。飯尾宅御成記に寛正七年二月廿五日演能のこと、言繼卿記に文祿四年三月廿七日註釋のことが見えてゐる。

【梗概】九州松浦の何某は、その召使の關清次が他郷の者と口論してこれを殺してしまつた爲、入牢させて置いたところ、一夜清次は牢を破つて遁げてしまつた。それで、身代りとして清次の妻を牢に入れ、夫のありかを糺したが、女は「たとへ夫のありかを知つてゐても、これを告げることは出來ない、まして全く知らないのだから、答へられ

よう筈がないといつて、實を告げない。そして夫を戀ひ慕つて心が亂れ、牢にかけてある鼓を打つて舞ひ狂つた。松浦もこの様を見て憐れに思ひ、終に夫婦ともに赦すといつたので、女は始めて夫のありかを明かし、夫を尋ね歸つて、睦しい一生を送つた。

【出典】或はかうした巷説が傳はつてゐたのでなからうかと思ふが、文献には見當らない。

【批評】謠曲の狂女物は大抵女がわが子を慕つて狂亂に陷るのであるが、中には〔花筐〕〔班女〕など、夫を戀慕する曲も二三あつて、濃やかた情緒を描いてゐるのであるが、それらは懸隔の甚しい夫を戀慕する、優しい弱さがあるだけであつて、妻として内助の功を立てるといつたやうな凛とした所はない。たゞ本曲のシテは脱獄した夫の身代りとなつて入牢の苦しみを受けながらも、夫の身を思つて、苦難に堪へる。しかしながら戀慕の情に思ひ餘つて狂亂する。ワキはその優しい心根に同情して、女自身の苦難を免れしめる一方、その夫のありかを白狀させようとする。女は斷じてこれを受けつけない。そして夫を思ふ狂態は愈々募つて行く。ワキをして終に全く惻隱の情に堪へられなくさせてしまふ。かくて夫の罪を救ふといふ、謠曲に描かれた女性の中で最も優しい強さを持つてゐるものである。脚色は純世話物として、韻文の少い、やゝ散漫に陷つた嫌ひがないではないが、シテの性格描寫に於てこれを償つて十分な成功を見せて居ると思ふ。

【一】

後見、籠屋の作物を大小前に出す。

名乘笛にて、ワキ松浦何某、梨打烏帽子・白鉢卷・着附厚板・長直垂上下・込大口・扇・小刀の裝束にて、狂言從者（着附縞熨斗目・狂言上下・腰帶・扇の裝束）に太刀を持たせて舞臺に出で、眞中に立ち、

ワキ「これは九州松浦の何某にて候。さても某召し使ひ候關の清次と申す者。他郷の者と口論し。念なう敵をば討つて候。さりながら科人の事に

【一】

舞臺は肥前國松浦で、ワキ松浦何某、狂言從者を隨へて登場。

松浦　私は九州松浦の何某です。さて私の召し使つてゐる家來の關清次といふ者が、他所の者と口喧嘩をして、易々と相手を殺してしまつたのです。相手に勝つたとはいへ、人を殺した罪人なので、す

【一】

〇松浦の何某―松浦の領主何某。松浦は肥前國松浦郡。
〇關の清次―假作の名であらう。
〇念なう―心を用ゐるほどもなく、易々と。
〇科人―罪人。

◎やがて―刊行會本にはない。

○籠者させ―入牢者とする入獄させる。古來「牢」の字を忌んで籠又は弄の字を用ゐた。現行本に牢の字に改めたのは、さかしらごとであらう。

○大剛の者―非常に力の強い者。

◎畏つて候―以下狂言詞、刊行會本にはないが、檜本(元祿本にも)にはある。

さてもさても―以下「申し上げう」まで檜本にもない。

○言語道斷―言葉でいひ表しやうもない驚き呆れた時に發する語。瓔珞經の「言語道斷心行所滅」から出た語。

て候間。やがて籠者させて候。かの者大剛の者にて候間。番の事かたく申しつけばやと存じ候

といひて、狂言に向ひ、

ワキ「いかに誰かある

狂言(膝をつきて)「御前に候

ワキ「かの者大剛の者にてある間。番の事かたく仕り候へ

狂言「畏つて候

ワキは脇座に行きて下に居る。狂言仕手柱先に立ち、

狂言「さてもさても清次は由なき口論し。その身は入籠し。某までに苦勞をかける。さりながら日頃心安う致した者なれば。かやうの時分に世話を致さねばならぬ事にて候。(作物に向ひ)なうなう清次。湯も茶も嫌か。何なりとも用の事があるならば某にいはしめ。清次々々。(作物の中をとくと見て)南無三寶。清次が籠を破つて拔けて候。これはまづ捨てては置かれぬ。申し上げう。(ワキに辭儀して)いかに申し上げ候。清次が今夜籠を破り拔けて候

ワキ「何と清次が籠より拔けたると申すか。言語

ぐさま牢へ入れました。しかしあの男は大變力の強い者ですから、嚴重に番をするやうにいひつけようと思ひます」

と見物人に自己紹介して、事件の概略を報告し、從者に向ひ、

松浦「おい誰か」

從者「はい」

松浦「あの男は非常に力の強い男だから、嚴重に番をするやうに」

從者「畏りました」

從者は牢屋へ行つて、淸次に詞をかけたが返事がないので、不審に思つて中を見ると、淸次が居ない。驚いて松浦の前へ出て、

從者「申し上げます。淸次が今夜牢を破つて拔け出しました」

松浦「何だと、淸次が牢から拔け出したと

◎やれ〳〵一段の事―以下狂言詞、檜本にもない。

【三】

○先繰りな事―先を案じ過したこと。取越苦労。

道断の事。さてこそ以前よりかたく申しつけてあるに。さやうに油断仕りてあるぞ。さてかの者の子はなきか

狂言「いや子はなく候

ワキ「妻はなきか

狂言「それは御座候

ワキ「さあらば急いでその女を連れて来り候へ

狂言「畏つて候。（名乗座にて）やれ〳〵一段の事にて候。急ぎ清次が妻を召して参らう。（橋懸へ行き一の松にて幕に向ひ）いかにこの内に清次が妻の渡り候か。松浦殿の御召しにて候。御参り候へ

【三】

シテ清次妻、面深井・鬘・鬘帯・襟浅黄・着附摺箔・無色唐織着流・扇の装束にて幕より出でながら、

シテ「科人を召し籠められ候上は。女までの御罪科は餘りに御情なうこそ候へ

狂言「さて〳〵先繰りな事をおしやる。左様ではない。何やら尋ねさせらるゝ事があるとの事にて候。急ぎ御参り候へ

いふのか。これは驚いた、だから、先程から、厳しく番をするやうにいひつけて置いたのに、どうしてそのやうに油断をしたのだ。……ところで、あの男に子どもはないか」

従者「いえ、子どもはございません」

松浦「妻はないか」

従者「それはございます」

松浦「それならば、急いでその女を連れて来い」

従者「畏りました」

といつて、清次の宅へ行き、その妻を呼び出す。

【三】

シテ清次の妻登場。

女「罪人を牢へお入れになつた上に、女までお罰しになるのは、餘りお情なうございます」

従者「いやはや取越苦労な事をいはつしやる。呼び出したのは、そのやうなわけではない。何やらお尋ねなさることがあると

○落居—事の結末のつくこと、こゝでは清次の捕はれるまでといふ意。

狂言「いかに申し候。清次が妻を召して參りて候

ワキ「心得てある

狂言は地謡座前に坐す、シテ舞臺の眞中に下に居る、ワキ立ちて、

ワキ「いかに女、さても汝が夫の清次。今夜籠を破り失せぬ。夫婦の事なれば知らぬ事はあるまじ。まつすぐに申し候へ

シテ「もとより賤しき者なれば。わが身の助かり候をこそ喜び候べけれ。わらはにはかくとも申さず候程に。夢にも知らず候

ワキ「いやいや何と申すとも知らぬ事はあるまじ。まづまづ落居のあらん程。夫の代りに籠者させ、その在所を糺さんと

地上歌「今の女を引き立てて

ワキ「いかに誰かある

狂言「御前に候

の仰せだから、すぐお出でなさい」

と清次の妻を連れて歸る。

松浦「おい女、お前の亭主の清次が今夜牢を破つて逃げてしまつたのだ。お前は夫婦の仲だから、知らないことはあるまい。正直にいへ」

女「もと／＼下賤た者のことでございますから、わが身の助かることを喜ぶだけで、ひとの事など構つてくれは致しません。私には何とも申しませんので、少しも存じません」

松浦「いや／＼何と申しても、知らぬ事はあるまい。とにかく事件のはつきりするまで、亭主の代りに牢へ入れて、あの男のありかを糺問しよう」

といつて、今の女を引き立てて、

○あらけなき—荒々しい。
○無慙—罪を犯して恥ぢないこと。轉じて殘酷なこと三轉して氣の毒に思ふこと

【三】

◎何事を致すぞ—檜本には「何事を申すぞ」
◎そのさげなるによつて清次をも籠より逝いてあるぞ—檜本にはない。元祿本・刊行會本に從ふ。
○のさげ—野者氣で、野者は野良者、教養のない者、薄馬鹿者の意であらう。
○鼓—昔支那で時を報ずるのに鼓を用ゐ、わが倣でもこれに倣つた。

ワキ「この女を籠者せさせ候へ
狂言「畏つて候。（シテの後より手を添へ）お立ちやれ〳〵（と作物へ連れ行く）
地「今の女を引き立てて。急ぎ籠者になすべしと。さもあらけなき人心。情なしとは思へども殺害の科を遁れ得ぬ。報いの程ぞ無慙なる報いの程ぞ無慙なる
ワキ作物の方へ二三足出で、シテを牢に入れたる心にて脇座に歸り、狂言シテを作物の内に入れ、太刀に手をかけて、

【三】

狂言「やいお主が夫の清次こそ油斷して拔かいたれ。女なりとも油斷はせぬぞ
ワキ（狂言に）「やあいかに汝は女に向ひ何事を致すぞ。そのさげなるによつて。清次をも籠より逝いてあるぞ。所詮今よりは鼓をかけて。一時づつ時を打つて番を仕り候へ
狂言「畏つて候。（立ちて名乘座に出で）やれ〳〵一段の事を仰せ出されて候。急いで太鼓を打つて番を致さう。（後見座へ行き翔

松浦「すぐ牢へ入れてしまへ」
といふ荒々しい人心。女はさすがに情ないと思つたが、人を殺した罪の報いは遁れることが出來ない。誠に可哀想なことである。
松浦の從者は清次の妻を牢へ入れて、

【三】

從者「やい、お前の亭主の清次は、こちらが油斷して、拔けられてしまつたが、今度は相手が女でも、油斷はしないぞ」
と刀に手をかけて嚇す。松浦はこれを見て、
松浦「これ〳〵、お前は女に向つて何といふ事をするのだ。さういふ薄馬鹿だから、清次を牢から遁してしまつたのだ。これからは鼓を牢屋にかけて、一時間毎に時の知らせを打つて、そして番をしろ」
從者「畏りました」
といつて、牢屋に鼓をかけ、「これならばよい」と安心して眠る。

○思ひ内にあれば—孟子告子下に「淳于髡曰、思有二於内一必形二於外一」
○包めども袖にたまらぬ白玉は—古今集安倍清行の歌下句「人を見ぬ目の涙なりけり」
◎いや言語道斷—以下次の「さん候」までの狂言詞、檜本に記す。
○やがて—そのまゝ。すぐさま。
○不便や—可哀想なことだ

鼓を持ち來りてまづ太鼓を釣らう（と作物の柱にかけて）。最初よりかやうに太鼓を打つて番を致したならば。清次をも拔かすまいものを。殘念な事を致した。これで一段とようござる。さらば打たう。どん一つよ（と鼓を打ち）。どん二つよ。どん三つよ。どん七つ。どん八つ。どん九つ。どん十を。一つ打ち過した。これは明日の足しに致さうと存ずる。さらばちと休まう

といひて作物の側に安坐す。

シテサシ「げにや思ひ内にあれば。色は外にぞ見えつらん。包めども。袖にたまらぬ白玉は。人を見ぬ目の涙かな

狂言「かしましや。籠の女がくどき言を申すによつて。寢らるゝ事ではない。（立ちてシテを見）いや言語道斷籠中の女が狂氣になりて候。やがてこの由を申さうずるにて候。（ワキの前に出で膝をつきて）いかに申し上げ候。籠中の女が以ての外狂氣仕り候

ワキ「これは眞にてあるか

狂言「さん候

ワキ「あら不便や立ち越え見うずるにて候

女「ほんとに諺にいふ通り、心の中に思ふことがあれば、自然外に現れるものらしい。夫に逢へない悲しさは、どう我慢しても我慢がしきれず、袖で隱すことが出來ないばかり、涙が溢れ出ることだ」

（夫を戀ひ慕ひ、喚き叫んで狂ふ。（實は松浦を欺く爲の作狂である）

從者「あゝやかましいことだ。牢の女がくど〳〵と愚痴言をいふので、やかましくて寢ることも出來ない。（女を見て）これは驚いた。牢の女が氣違ひになつた。早速御主人に申し上げよう。（松浦に）申し上げます。牢の女が大變な氣違ひになりました」

松浦「それはほんとか」

從者「さうでございます」

松浦「あゝ可哀想なことだ。牢屋へ行つて見てやらう」

狂言「一日御覧あれかしと存じ候。（作物の前へ行き）やあ／＼松浦殿の御出でにて候間。籠の邊を立ち退き候へ／＼」といひて引く。

○人の心の花ならば—古今集小野小町の歌に「色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける」とあるやうに、人の心が花であるとすれば、風の爲にも狂ふとの意。
○偕老同穴—共に長生きして死後は同じ穴に埋められようといふ夫婦の契り。保元物語法皇崩御の條に「偕老同穴の御契り淺からざりし法皇も」
○道せばき—世間狹い。
○僻事—理に外れた事。

ワキ立ちて作物へ二三足出で、

ワキ「やあいかに女。何故さやうに狂氣してあるぞ

シテ「何故狂氣するぞと承る。人の心の花ならば。風の狂ずる故もあるべし。況んや偕老同穴と。契りし夫も行方知らで。殘る身までも道せばき。なほ安からぬ籠の中。思ひの闇のせん方なさに。物に狂ふは僻事か

ワキ「げにげに夫の別れ籠者の思ひ。一方ならぬ身の歎きに。物に狂ふは理なりさりながら。いづくに夫の在所を。知らせばやがて呼び取つて。汝は籠より出だすべし眞直に申し候へ

シテ「これは仰せとも覺えぬものかな。たとひ夫

（といつて[illegible]へ行き、）

松浦 おいこれ女、なぜそのやうに氣が狂つたのだ」

女「なぜ氣が狂つたと仰しやるのでございますか。歌に詠まれたやうに、人の心が花であるならば、風の爲にでも狂ひませう。まして、友白髪と契りあつた夫の行方が分らないで、あとに殘されたものが世間狹い思ひをしてゐる上に、苦しい牢に入れられて、悲しさに心が眞暗になつて、慰めるすべもなければ、氣の狂ふのも當り前ぢやありませんか。これが無理でせうか」

松浦 いかにも夫に別れた上に牢に入れられた悲しさ。一通りでない不仕合に、氣の狂ふのも尤もだ。しかし亭主のありかはどこなのだ。それを知らしたならば、すぐ清次を呼び寄せて、お前は牢から出してやらう。正直にいへ」

女「これは分らない事を仰しやいます。た

○雨の夜の　詞花集僧都覺雅の歌「影見えぬ君は雨夜の月なれや出でても人に知られざりけり」を借りて、牢から出ないことと夫に逢はれないことを雨夜の月に喩へ、月を盡きぬにいひかけた。
○西樓に月落ちて　和漢朗詠集菅原文時の詩句「西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏聲」を引いて、花間を時の短い喩へに、殘燈を夫と別れた身の喩へに用ゐた。
○影　姿、燈火の縁語。

の在所を知りたればとて。あらはし夫を失ふべきか。その上夫の在所を。夢現にも知らぬものを

ワキ「優しき女のいひ事かなと（作物へ行き）「手づから籠の戸を開き（と戸を開き）、はやこれまでぞ疾く出でよ（と二三足下る）

シテ「御志はありがたけれども。夫に代れるこの身なれば。この籠の内をば出づまじや。「これこそ形見よなつかしや（と居立つ）

地「無慙やわが夫の。身に代りたる籠の内。出づまじや雨の夜の。盡きぬ名殘ぞ悲しき（としをり）。西樓に月落ちて。花の間も添ひ果てぬ。契りぞ薄き燈火の。殘りてこがるる影はづかしきわが身かな（と面を伏す）

ワキこの間に脇座に歸りて立ち、

とひ夫のありかを知つてゐたところで、それをばらして、夫を殺すやうな事が出來ませうか。その上、夫のありかをまるで知らないのですから、申し上げられる筈がありません」

松浦「おゝ優しい事をいふ女だ」

といつて、自分で牢の戸を開けて、

松浦「もうよい、許すから早く出て行け」

女「御親切はありがたうございますが、夫の身代りになつたのでございますから、この牢の内を出ますまい。これが夫の形見です。あゝなつかしい。——いとしいわが夫の身代りに入つた牢から外へ出ますまい。出ないといへば、雨夜の月のやうに、逢ふことの出來ない夫の事が偲ばれて、この上もなく悲しいことだ。ほんの短い間さへ添ひ遂げることが出來ず、夫婦の縁が薄くて、あとに唯一人殘されて、夫を思ひ焦がれてやつれ果てたこの姿、ほんとに恥かしいことだ」

（と狂ひて泣く。）

【四】
ワキ「言語道斷かかる優しき事こそ候はね。この上は夫婦ともに助くるぞ疾く出で候へ
シテ「かほどに情ましまさば。始めよりかく憂き目を見せ給ふべきか。『さるにてもわが夫はいづくにあるやらん。なう心が亂れさむらふぞや
と右肩を脱ぎて作物を出で、
シテ一聲『亂るるは。柳の髪か春雨の（と眞中へ出で）
地「涙に咽ぶ。心かな
常座にて作物の羯鼓を見てワキに向ひ、
シテ「なうなうこれなる鼓は何の爲に懸けられて候ぞ
ワキ「あれこそ時守の時を知る相圖の鼓よ
シテ「面白し面白し。異國にもさる例あり。かやうに鼓を懸けて時を守りし事もあり。その心を得て古き歌に。『時守の打ちます鼓聲聞けば。時にはなりぬ。君は遲くて（と前へ出で）

【四】
松浦「實に感じ入つた。このやうな優しいことはない。この上は夫婦とも助けてやるぞ、早く出て行け」
女「そのやうにお情深い方であつたならば、始めからこのやうな辛い目にお遭はせになる筈はありまん。（今のお言葉は信じられません）それにしても、わが夫はどこにいらつしやるのか知ら、あゝ氣が狂ふ」
と狂氣になつて牢屋を出で、
女「心はこの髪のやうに亂れ、涙は春雨のやうに流れ出ることだ」
といつて、牢屋にかけた鼓を見て、
女「もうしこゝにある鼓は何の爲にかけてあるのです」
松浦「あれは時を知らせる番人が時刻を知らせる爲の鼓なのだ」
女「これは面白い。支那にもさういふ例があります。このやうに鼓をかけて、時を知らせた例があります。この心持を採り入れた古歌に——
『時守の打ちます鼓聲聞けば、時にはなりぬ君は遲くて』
（時の番人のお打ちになる鼓の音を數へて聞くと、約束の時間にはなつたが、戀しい君は遲くてまだ見えない）
とありますが、それでも遲くても戀しい

【四】
○亂るるは柳の―心の亂れを髪の亂れにいひかけ、黒髪を柳に喩へていひ慣はしてゐるので、柳の髪といつて春雨を呼び出し、更に春雨を涙に喩へた。
○春雨の涙に―古今集大伴黒主の歌「春雨の降るは涙か櫻花散るを惜しまぬ人しなければ」に據つた。
○時守―時の鼓を打つ番人
○相圖の鼓―時を知らせる鼓。
○異國にも―支那でも時の鼓を打つた例があるとの意蘇東坡の詩に「長夜默坐數二更鼓」
○時守の打ちます―萬葉集卷十一に「時守の打ち鳴す鼓よみ見れば時にはなりぬ逢はなくもあやし」とあるを少し變へて引いた。

○音に立てて―聲を出して人の泣くを鶯の鳴くにいひかけた。
○青葉の竹―鶯の緣で出し次の娥皇女英の故事を呼び起す料とした。
○娥皇女英―堯の二人の女で、共に舜の后。舜の崩じた事を悲しんで楚國湘江（今の湖南省）の邊で死んだするとその涙が竹にかゝつて、湘浦の竹は皆斑になつたといふ。和漢朗詠集張讀の句に「竹斑二湘浦一、雲凝二鼓瑟之蹤一」
○諫鼓苔むす―和漢朗詠集大江音人の詩句「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚」に據つた。諫鼓は天子を諫める鼓で、堯の時にこれを行つたが、天下泰平でその用がなかつたので、苔が生えたとの故事をいふ。
○現もなや―鼓を打つといひかけた。狂亂して正氣がないのをいふ。
○時ふりて―時が過ぎて。
○六つ―今の午後六時。
○五つ―今の午後八時。偽りと「い」の音を重ねた。
○妻琴―夫をいひかけた。
○引き離れ―引きは彈きにいひかけた琴の緣語。
○忍び音―妻が聲を抑へて

地『遲くも君が。來んまでぞ（と常座へ下り）

〔カケリ〕

シテ「なうこの鼓を打つて心が慰みたう候

ワキ「易き間の事いかやうにも打つて慰め候へ

シテ一聲「鼓の聲も音に立てて（と作物へ行き扇にて鞨鼓を打ち）

地「鳴く鶯の青葉の竹（脇正面を見）

シテ「湘浦の浦や。娥皇女英（と前へ出で）

地『諫鼓苔むすこの鼓（右へ廻りて作物へ向ひ）

シテ『現もなやなつかしや（と作物の柱にもたれてしをり）

地上歌「鼓の聲も時ふりて。鼓の聲も時ふりて。日も西山に傾けば（橋懸の方を見やり）。夜の空も近づく六つの鼓打たうよ（拍子を踏み）。五つの鼓は僞りの（正先へ出で）。契りあだなる妻琴の（兩手を寄せ）。引き離れいづくにか（兩手を引分けて面を遣ひ）。わが如く忍

人が來てさへくれゝばよいのだが」

といつて、

〔カケリ〕

に夫を戀ひ慕つて狂ふ樣を示し、

女「もうし、この鼓を打つて氣を紛らしたうございます」

松浦「おゝ、易いことだ。好きなだけ打つて、氣を晴らすがよからう」

女「鼓の聲も音高く、わが泣く聲も音高く、思ふ存分泣きませう。夫戀しい思ひには、支那の娥皇女英も、湘浦の浦で歎き死に、青葉の竹を斑に染めたとか。――御代太平のこの鼓、打つにつけても正氣なく、夫の事がなつかしい。――

時は次第に過ぎて行き、日も西山に傾いて、夜の時刻に近づいた。六つの鼓を打ちませう。五つといへば僞りの、あだな契りの仲となり、夫婦別れてしまつたが、夫はどこでどのやうに、忍び隠れてござるやら。夫のありかの知れぬやう、私の忍び泣くやうに、音も靜かに打ちませう。四つといへ

泣く意に、夫が世間に忍び隠れる意を兼ねた。
○やはらやはら―静かに。
○四つ―今の午後十時。世の中と「よ」の音を重ねた。
○九つ―今の午後十二時。
◎なりたりや―刊行會本には「なりたるや」とある。
○面影に立つ―まぼろしに見える。
○二世―現世と來世と兼ねた夫婦の契り。
【五】
○諏訪八幡―ともに武神。諏訪神社も八幡宮も肥前國長崎市にある。
○御知見―御照覧に同じ。神に誓ひを立てる詞。

び音のやはらやはら打たうよややはらやはら打たうよ（左へ廻りて羯鼓を打ち）。四つの鼓は世の中に（正面へ向き）。四つの鼓は世の中に。戀といふ事も（脇座へ出で）。恨みといふ事もなき習ひならばひとり物は思はじ（右へ廻りて眞中へ出で）

シテ「九つの

地「九つの（正先へ出で）。夜半にもなりたりや。あら戀しわが夫の。面影に立ちたり（面を遣ひ）。嬉しやせめてげに。身代りに立ちてこそは二世のかひもあるべけれ（右へ廻りて作物へ向き）。この籠出づる事あらじ（と内へ入り戸を締め）。なつかしのこの籠や。あらなつかしのこの籠（と平坐してしをる）

【五】

ワキ「この上は諏訪八幡も御知見あれ。夫婦ともに助くるぞはや疾く出で候へ

シテ「げにこの上はさればとて。御僞りはよもあ

ば世の中に、戀も恨みもないならば、ひとり悲しい思ひして、歎くこともあるまいに。歎きのうちに九つの、はや夜半どきともなつた。――

あゝ戀しいわが夫、夫の影が眼に浮かぶ。せめてのことに身代りに、妻が牢屋に入つてこそ、二世を契つたかひもあろ、思へば嬉しいこの牢屋、この牢屋をば出ますまい、あゝなつかしいこの牢屋」
（と人を慕つて泣き狂ふ。）

【五】

松浦「このうへはうそ僞りはない、諏訪八幡も御照覽あれ、夫婦とも確かに助けてやるぞ。早く出て行け」
（女は正氣になつて、）
女「もはやこの上は、まさかお欺きになり

○宰府―筑前國の太宰府。
○いしくも―いみじくも。殊勝にも、感心にも。
○助け舟―罪を赦すことを佛の弘誓の舟に擬へたのである。
○松浦の川―唐津川ともいふ。待つといひかけた。
○彼の國―西方極樂淨土。
○彌陀誓願―阿彌陀如來が衆生を救つて極樂へ迎へるとの誓願。
○末久に松浦の―夫婦の行末を末久しい松の榮えに喩へて松浦にいひかけた。
○二世の緣―夫婦の緣。川の緣語瀨にいひかけた。

らじ。眞は夫の在所。筑前の宰府に知る人あれば。そなたへ行きてや候らん

ワキ「いしくも隱さず申したり」しかも今年はわが親の。十三年に當りたれば。「科ありとても助け舟の

シテ「松浦の川や西の海

ワキ「彼の國近き

シテ「極樂の（と立ち）

地「彌陀誓願の誓ひかや（と作物を出で）。科を助くる憐みのあらありがたの御慈悲や（と眞中に坐してワキへ合掌）

地（キリ）「やがて時日を移さずやがて時日を移さず（と立ち）。隱れし夫を尋ねつつ。もとの如くに歸りゐて。結ぶ契りの末久に。松浦の川や二世の緣。げにありがたき、心かなげにありがたき心

ますまいから申し上げますが、ほんとは夫のありかは、筑前の太宰府に知るべがありますから、そちらへ行つたのでございませう」

杉浦「おゝよく感心に隱さないでいつた。今年は丁度自分の親の十三年に當るのだから、罪があつても助けてやらう」

女「ありがたいお助けでございます。この松浦川からは、極樂の彼岸へ渡るのも、近いやうに思はれますが、私にとつては、唯今のお言葉こそ極樂の阿彌陀如來のお慈悲でございます。罪をお助け下さる憐み深いお慈悲、ほんとにありがたうございます」

女はそのまゝ時刻をも移さず、隱れてゐた夫を尋ね探して、もとのやうに故鄕に歸り、この松浦で幾久しく二世の契りを結んだ。まことにありがたい心掛である。

かな

と常座にて留拍子を踏む。

〔考 異〕

諸 流 （五 流）

【一】ワキ「これは九州松浦の……さても某召し使ひ候（下懸が知行のうちに）……　【四】ワキ「言語道斷かかる優しき……夫婦ともに助くるぞ（下懸僞りと思ふか）……　シテ「ならうこの鼓を打つて心が慰みたら候　ワキ「易き間の事いかやうにも打つて慰め候へ（下懸ナシ）

古謠本 （元祿八年本）

【三】ワキ「優しき女のいひ事かな（元や）と手づから……　【四】地「涙に咽ぶ心かな（元イロへ）

井筒（ゐづつ）

觀（寶　春　剛　喜）

解説

【能柄】三番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　旅僧、**前シテ**　里女（有常の女の靈）、**狂言**　櫟本の者、**後シテ**　紀有常の女

【所】大和國　石上在原寺

【時】秋（九月）

【作者】能本作者註文、二百十番謡目録ともに世阿彌の作とし、世子六十以後申樂談儀に、「井筒道盛などすぐれたる能也」といふ。金春禪竹の五音三曲集に幽玄第一、心詞幽玄曲味の例に、本曲の二ノシテサシ「さなきだに」及びシテ上歌の終り「何の音にか覺めてまし」までを擧げてゐる。「現行曲「秋の夜の」のかたにとある外同じ。演能の古記録は見當らないが、言經卿記文祿四年三月卅日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】諸國遊歷の僧が奈良から初瀬へ參る途次、石上の在原寺に立ち寄つて、在原業平と紀有常の女夫婦の舊跡を弔つてゐるところへ、一人の女性が來て、古塚に花水を手向けるので、怪しんで詞をかけると、女は業平の塚であるから弔ふのであると答へ、なほ尋ねられるまゝに、伊勢物語の「風吹けば」の歌、「筒井筒」の歌などの物語をし、實は私がその有常の女で、筒井筒の女といはれたのである

とうち明けて、井筒の陰に隠れてしまふ。そしてその夜、僧の夢に、有常の女が業平の形見の冠直衣を着て現れ出て、業平を偲んで舞を舞ひ、わが姿を井戸の水に映して業平の面影をなつかしがるうちに、夜がほのぼのと明けて来て、僧の夢は覚めてしまつた。從つて有常の女の姿が見えなくなつてしまつた。

【出典】本曲は伊勢物語二十三段の、

昔田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、おとなになりにければ、男も女も互に恥ぢかはしてありけれど、男はこの女をこそ得めと思ひ、女もこの男をこそと思ひつゝ、親のあはするをもきかでなむありける。さてこの隣の男のもとより、かくなむ、

筒井筒井筒にかけしまろがたけ、生ひ（イ過ぎ）にけらしな妹見ざる間に

女かへし、

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべき

などいひ／＼て、つひに本意の如くあひにけり。さて年頃ふるほどに、女の親なくなりて、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらんやはとて、河内國の高安の郡に、いき通ふ所出できにけり。さりけれど、このもとの女あしと思へる氣色もなく、暮るれば出したててやりければ、男こと心ありて、かゝるにやあらむと思ひ疑ひて、前栽の中に隠れゐて、かの河内へいぬるかほにて見れば、この女、いとようけさうして、うちながめて、

風吹けば沖つ白波龍田山、夜半にや君がひとり越ゆらむ

と詠みけるを聞きて、限りなくかなしと思ひて、河内へもをさ／＼通はずなりにけり。

から出たのである。しかし、この男主人公については、釋契沖の勢語臆斷にも、

業平は阿保親王の男、田舎わたらひしける人の子と書くべきやうなし。殊に、さて年頃になる程に、といふより下、いよ／＼業平のことにあらずと見えたり。

といつて居り、殊に紀有常の女については、その父有常がほゞ業平と同年輩の親交のあつた友で、その女と幼友達である筈はないのであるが、古今集にも、

業平の朝臣紀の有常がむすめに住みけるを、恨むことありて、しばしの間、晝は來て夕されば歸りのみしければ、よみて遣しける。

と詞書して、二人の贈答歌を載せて居り、二人の間に戀のあつたのは事實であるから、謠曲製作以前から、この物語を業平と紀有常の女との事として傳へて居り、謠曲作者はその傳說に從つて脚色したものであらう。

【概評】 幼な友達の友愛がやがて戀愛に成長して行つて、それが滯りなくとり結ばれ、その後、男の方に一寸したあだし心が出たが、女の思ひやりのある情の深い貞淑によつて、男の心を完全にとり戾すといふ、澄みきつたもの靜かな秋の夜にふさはしい和やかな戀物語である。謠曲作者はかうした心持で、この題材を取扱つてゐるのである。シテの性格についても、さほど重々しくは取扱つてゐないが、暖かい氣品を持たせてゐる。戀物語ではあるが、この女性には墮獄の苦を與へてゐない。脚色も普通の複式能の定型に從つてゐて、別段省略したところもないが、尾鰭もない。文章は大部分伊勢物語の原文に從つてゐるが、衒學的な痕跡はない。しんみりとした、淸らかな、美しい曲柄である。

【二】

後見、井筒の右隅に薄をつけたる作物を正面先に出す。

名乘笛にて、ワキ旅僧、角帽子・着附無地熨斗目・絓水衣・腰帶・扇・數珠の裝束にて名乘座に出で、

ワキ「これは諸國一見の僧にて候。われこの程は南都七堂に參りて候。又これより初瀨に參らばやと存じ候。(作物へ向き)これなる寺を人に尋ねて候へば、在原寺とかや申し候程に。立ち寄り一見せばやと思ひ候

舞臺の眞中へ行き作物に向き、

【二】 前段

舞臺は初め奈良で、ワキ旅僧登場。

僧「私は諸國を遊歷してゐる僧です。この間うちは奈良七大寺に參詣して、又これから初瀨へ參詣しようと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、やがて在原寺に着いた態で、舞臺は大和國石上、在原寺となり、

僧「こゝの寺を人に尋ねると、在原寺だといふことなので、これから立ち寄つて見ようと思ひます」

僧は在原寺に入つて、

【一】

○南都七堂―奈良七大寺。即ち東大寺・興福寺・元興寺・大安寺・藥師寺・西大寺・法隆寺。

○初瀨―大和國磯城郡の長谷寺。元正天皇養老五年の草創で、本尊は十一面觀世音。

○在原寺―大和國山邊郡山邊村にあつたといふ。玉葉集爲子の歌に「形ばかりその名殘とて在原の昔の跡を見るもなつかし」。今その古趾の傳へてゐるものに、石上の在原山光明寺と布留の良峰山石上寺と二ある。

○業平　平城天皇の皇子阿保親王の第五男、兄行平と共に在原の姓を賜ひ、左近衞中將に任り、元慶四年五十六歳で薨じた。著名な歌人で、伊勢物語は主としてこの人のことを記す。
○紀の有常　紀名虎の子、從四位下周防權守、元慶元年六十三歳で卒す。その娘のことは解說にいふ。
○石の上—今山邊村の大字
○風吹けば　この歌、後に出る。
○龍田山　大和國生駒郡、波立つを山の名にいひかけたのである。
○常なき世　はかない無常なこの世。有常の常を承けて綴つた。
○妹背をかけて　夫婦ともに。
【三】
○閼伽—梵語 Argha 水と譯す。佛に供へる淨水をいふ。
○さなきだに—さうでなくても。人目の稀でない所でも。
○更け過ぎて—夜更け、時過ぎて。
○月も傾く—軒も傾くといひかけた。
○忘れて過ぎし—草の緣で

ワキ「さてはこの在原寺は。古業平紀の有常の息女。夫婦住み給ひし石の上なるべし。風吹けば沖つ白波龍田山と詠じけんも。この所にてのことなるべし
ワキ下歌「昔語の跡訪へば〔と居立ち〕。その業平の友とせし。紀の有常の常なき世。妹背をかけて〔と合掌して〕弔はん妹背をかけて弔はん
〔と謠ひて脇座へ行きて下に居る。〕

【三】
〔次第の囃子にて、シテ里女、面若女・鬘・鬘帶・襟白・着附箔・唐織着流の裝束にて、木葉を入れたる水桶を持ちて出で、常座に立ちて大小前の方に向き、〕
シテ次第「曉ごとの閼伽の水。曉ごとの閼伽の水。月も心や澄ますらん
〔地取に正面に向き、〕
シテサシ「さなきだに物の寂しき秋の夜の。人目稀なる古寺の。庭の松風更け過ぎて。月も傾く軒端の草。忘れて過ぎし古を。忍ぶ顏にていつま

僧「この在原寺は、昔在原業平と紀有常の女との夫婦が住まれた石上といふ所であらう。『風吹けば沖つ白波龍田山』と、有常の女が歌を詠んだのも、この所であらう。かういふ昔物語の舊跡を訪ねたのだから、その業平と、業平の友の紀有常の女で、業平の妻となつた人と、この夫婦の後世を弔はう」
〔業平夫婦の爲、回向する。〕

【三】
〔シテ紀有常の女の靈、里女の姿を裝うて、供花と水桶とを持つて登場。〕
女「每朝こゝへ來て、佛に御供へする水を汲む每に、この水に映る月を見ると、私の心も月のやうに澄み淸まりませう。秋の夜といふものは、このやうな所でなくても寂しいものだが、ましてこゝは人通りもめつたにない古寺で、寺の庭に吹き渡る松風もものの淒く、夜が更けて行くに從つて、月も西に傾いて行く、この軒の傾いた古寺の氣色を見てゐると、忘れてゐた昔の事が思ひ出されるが、何の待

忘草・忍草にかけて、忘れて、忍ぶ顔といつたのである。
○一筋に―ひたすら。絲の縁語。
○佛の御手の絲―佛が絲を引くやうに衆生を極樂へ引き導くことをいふ。榮華物語御法に、御堂殿御臨終の時、御手には彌陀如來の御手の絲を引かさせ給ひて―
○御誓ひ―佛の衆生を濟度利益し給ふ誓願。
○有明の行方は―夜明方の月の行くのは、極樂淨土と同じ西方であるとの意。
○嵐はいづくとも―嵐の方角を定めずに吹き廻るのを人生の定まらぬ意にいひかけた。

【三】
○なまめける―優美な。
○板井―板で圍つた井戸。
○掬び上げ―汲み上げ。
○花水―手向の花を入れる水。
○本願―寺を建立した願主。

でか待つ事なくてながらへん。げに何事も。思出の。人には殘る。世の中かな

シテ下歌「ただいつとなく一筋に頼む佛の御手の絲導き給へ法の聲。上歌「迷ひをも。照らさせ給ふ御誓ひ。照らさせ給ふ御誓ひ。げにもと見えて有明の。行方は西の山なれど眺めは四方の秋の空。松の聲のみ聞ゆれども。嵐はいづくとも。定めなき世の夢心。何の音にか覺めてまし。何の音にか覺めてまし

「定めなき世の」と謠ひながら正面先へ行き、下に居て木葉を置き合掌して、常座へ歸る。ワキこれを見て、

【三】

ワキ「われこの寺に休らひ。心を澄ます折節。いとなまめける女性庭の板井を掬びあげ花水とし。これなる塚に回向の氣色見え給ふは。如何なる人にてましますぞ

シテ「これはこの邊に住む者なり。この寺の本願

つ甲斐もないのに、いつまで生き永らへてゐることであらう。ほんとに人間といふものは、何かにつけて思出が殘つて、執着の心の離れ難いものです。

いや／＼そのやうな迷ひの心を起さず、たゞ絶えず一心に佛の御導きをお願ひしませう。佛樣は我々の迷ひを照らしてやらうと仰しやる。あの有明月の行方を見ても、極樂淨土の西方へ向つてゐるのです。けれども、今見る秋の空には、たゞ松吹く風の音が聞えるばかりで、その嵐がどこと方角を定めずに吹き廻すやうに、我々の人世はほんとに定め難いものです。そして秋の夜の夢は嵐の音に覺めもしようが、迷ひの夢を覺ましてくれるものはないのです」

[illegible]塚前に花を手向ける。

【三】

僧はこの里女の様子を見て、

僧「私がこの寺に休んで佛を念じてゐると、大層優美な女が、庭の井戸水を汲み上げて、供花の水とし、この塚に回向してゐるやうだが、一體あなたはどういふ人なのです」

女「私はこの邊に住んでゐる者で[illegible]

在原の業平は。世に名を留めし人なり。されば
その跡のしるしもこれなる塚の陰やらん（と面を
伏せ）。わはらも委しくは知らず候へども。花水を
手向け御跡を弔ひ参らせ候

ワキ「げにげに業平の御事は。世に名を留めし人
なりさりながら。今は遥かに遠き世の。昔語の
跡なるを。しかも女性の御身として。かやうに
弔ひ給ふこと。その在原の業平に。いかさま故
ある御身やらん

シテ「故ある身かと問はせ給ふ。その業平はその
時だにも。昔男といはれし身の。ましてや今は
遠き世に。故もゆかりもあるべからず

ワキ「尤も仰せはさる事なれども。ここは昔の舊
跡にて

シテ『主こそ遠く業平の

○跡のしるし—墓じるし。

○故ある—緣故のある、

○昔男—伊勢物語は毎段「昔男ありけり」といふ句で始まつて居り、その主人公はすべて業平であると解されてゐたので、業平をその當時から昔男と呼んだやうにいひ做したのである。

○遠く業平の—遠くなりといひかけた。

ます。この寺の開基在原業平は名を後世に殘した方で、この塚の陰がその墓じるしてございませう。私も委しい事は存じませんが、花や水を手向けて、その御跡をお弔ひ申し上げてゐるのでございます」

僧「いかにも業平は名を後世に殘した偉い人です。しかし、今はもはや時代も遠く距つた昔物語の人であるのに、殊にあなたは女の方であるのに、かうしてお弔ひになるのは、定めし在原業平と緣故のある方でせう」

女「緣故のある者かとお尋ねになりますが、業平はその在世當時でさへ昔男といはれた人でございますのに、まして時代も遠く距つた今日、私に何の緣もゆかりもあらう筈がございません」

僧「なる程、あなたの仰しやるのは一應御尤もですが、こゝは昔の舊跡でもありますから……」

女「その人は遠い昔の人となつてしまはれたのですが……

○跡は殘りて―業平の住んだ舊跡は殘つて。
○名ばかりは―名だけは殘つて、今も寺の名にありを在原にいひかけた。前掲爲子の歌を借りたのであらう
○草茫々として―白氏文集に「草茫々土蒼々、驪山脚下秦皇墓」

【四】

○年經てここに石の上―ここに居るを石の上にいひかけた。
○古りにし里も―古今集布留今道の歌「日の光やぶしわかねば石の上古りにし里に花も咲きけり」を借りた。

ワキ『跡は殘りてさすがに未だ
シテ『聞えは朽ちぬ世語を
ワキ『語れば今も
シテ『昔男の
地上歌『名ばかりは。在原寺の跡古りて。在原寺の跡古りて。松も老いたる塚の草。これこそそれよ亡き跡の（と少し出でゝ）一村薄の穂に出づるはいつの名殘なるらん。草茫々として露深々と古塚の（と下を見て）まことなるかな古の。跡なつかしき氣色かな跡なつかしき氣色かな（と下りてしをる）

【四】

ワキ「猶々業平の御事委しく御物語り候へ
シテ舞臺の眞中に出でて下に居り、
地クリ「昔在原の中將。年經てここに石の上。古りにし里も花の春。月も秋とて。住み給ひしに
シテサシ「その頃は紀の有常が娘と契り。妹背の心

僧「その名は後の世に殘つて、今に至るまで絶えずいひ傳へられてゐるのですから……」
女「いかにも世に語り傳へられて、昔男の名は今だに殘つてゐますけれど、その舊跡の在原寺はこのやうに古くなつて、松も老い、草も生ひ茂つてゐるこの塚が、僅かにそのしるしに殘つてゐるのでございます。この塚に生えてゐる薄一むらは、いつの世の名殘でございませう。ほんとに、この草茫々と生ひ茂り、露の一面に置いてゐる塚を見ますと、昔なつかしい心持がするのでございます」

【四】

僧「業平のことを、もつと委しくお話し下さい」
里女はくつろいで、
女「昔、左近衛中將在原業平は、永年この石上に春の花秋の月を眺めて暮らして居られたのでございますが、その頃は紀有常の女と契りを結び、夫婦の仲も睦まじ

○高安の里—河内國中河内郡高安山の麓。○知る人—心を知る人、戀人。○二道—有常の女の許と、河内國高安の里と。○風吹けば沖つ白波龍田山夜半にや君がひとり行くらん—伊勢物語の歌。解說參照。「風吹けば沖つ白波」は、白波の立つを龍田にいひかけた序詞。○おぼつかなみの—覺束なしを波に、波の寄るを夜にいひかけた。○行方を思ふ心遂げて—男の行先を思ひやり案じた親切の心が通じて。○よその契り—高安の女との契り。○かれがれ—離れ〳〵。○うたかたの—情知る歌をうたかた(泡沫)に、泡をあはれにいひかけた。○うなゐ子—幼い子。うなゐは子どもの垂髪。○心の水も底ひなく—水のはてしなく深いやうに、心の底にも隔てなくとの意。○うつる月日も—水に影のうつるを、月日の過ぎ移るにいひかけた。○おとなしく—大人らしく○恥ぢがはしく—お互に恥

浅からざりしに

地「又河内の國高安の里に。知る人ありて二道に。忍びて通ひ給ひしに

シテ『風吹けば沖つ白波龍田山

地「夜半にや君がひとり行くらんとおぼつかなみのよるの道。行方を思ふ心遂げてよその契りはかれがれなり

シテ『げに情知る。うたかたの

地『あはれを述べしも。理なり

(居クセ)

地クセ「昔この國に。住む人のありけるが。宿を竝べて門の前。井筒に寄りてうなゐ子の。友達語らひて。互に影を水鏡。面を竝べ袖をかけ。心の水も底ひなく。うつる月日も重なりて。おとなしく恥ぢがはしく。互に今はなりにけり。その

かつたのですが、又河内國高安といふ所に戀人が出來て、二道かけて、高安の方へも忍んで通はれたのでございました。ところが、有常の女が——

『風吹けば沖つ白波龍田山、夜半にや君がひとり行くらん』

[illegible]

と歌を詠んで、夫の行先を案じた親切な心が夫に通じて、その後は外の女との契りは殆どなくなつたのでございます。[illegible]に、あはれを述べた歌は、人に情を知らせるものでございます。——

さて、昔この大和國に住んでゐた人で、隣同志の幼い子が、門の前の井戸側に寄りかゝつて友達遊びをし、井戸の水に顔を竝べて映し、井戸側に袖をかけたりして、心の分け隔てなく遊んでゐましたが、次第に年月がたつて、大人らしくなつて、お互に恥かしくなり、一緒に遊ばなくなりました。しかし、その後、この貫意のあ

かしく思ふ意。
○まめ男―眞情のある男。伊勢物語に用ゐられた語。
○言葉の露の玉章―手紙。言葉より葉の露、露の玉、玉章といひかけて行つた。
○心の花―和歌。花の縁で色添ひてといつた。
○「筒井筒井筒にかけしまろがたけ生ひにけらしな妹見ざる間に」―伊勢物語、男の歌。「まろ」は第一人稱の代名詞。
○くらべこし振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあぐべき―伊勢物語、女の歌。「誰か」は誰にか、誰のために」といふ意。「あぐ」は人妻として結髪の粧ひをすること

【五】
○戀衣―衣を着るを紀にいひかけた。
○いさ白波の―いさ知らずを白波にいひかけて、前出「風吹けば」の歌詞を借りて夜半にと續けた。
○色にぞ出づる―龍田山は紅葉の名所であるから、名を表す意を含めて、紅葉の色づくといひ、紅葉の木を紀にいひかけた。

後かのまめ男。言葉の露の玉章の。心の花も色添ひて

シテ『筒井筒。井筒にかけしまろがたけ

地「生ひにけらしな。妹見ざる間にと詠みて贈りける程に。その時女もくらべこし振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして。誰かあぐべきと互に詠みし故なれや。筒井筒の女とも。聞えしは有常が。娘の古き名なるべし

【五】
地ロンギ『げにや古りにし物語。聞けば妙なる有樣の。あやしや名乘りおはしませ

シテ「まことはわれは戀衣。紀の有常が娘とも。いさ白波の龍田山夜半に紛れて來りたり

地「不思議やさては龍田山。色にぞ出づるもみぢ葉の

シテ『紀の有常が娘とも

る男が女に手紙を贈り、歌を詠んで――
『筒井筒井筒にかけしまろがたけ、生ひにけらしな妹見ざる間に』
（御一緒に井戸端で遊んでゐた頃はまだ小さかつた私も、あなたに會はないでゐるうちに、隨分大きくなりました）
といつてやりますと、女も――
『くらべこし振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰かあぐべき』
（あなたと髪の長さを比べあつて來ましたが、私の振分髪も、今は肩より下までとゞく程に長くなりました。しかしあなた以外の人の爲には、この髪を結ひ上げようと思ひません）
と返歌致しました。この女が即ち紀有常の女で、それで有常の女のことを筒井筒の女とも申したのでございませう」

【五】
僧「大層結構な昔話を伺つて、ありがたうございました。それにつけても、あなたの御樣子が不思議ですが、どうかお名前を仰しやつて下さい」
女「私は實はこの戀物語の紀有常の女で――夜に紛れて參つたのでございます」
僧「これは不思議だ、それでは、あなたはほんとは紀有常の女で……」

地「又は井筒の女とも

シテ「恥かしながらわれなりと

地「いふや注連繩の長きよを（とシテ立ちて）。契りし年は筒井筒井筒の陰に隠れけり井筒の陰に隠れけり

一井筒の陰に一と常座にて腰を少し折りて隠るゝ心持を示し、直して靜かに中入。

女「井筒の女といはれたのも、お恥かしながら私のことでございます。契りを結んだのは、十九の時で……」といつて、井筒の陰に隠れてしまつた。

【間】　狂言櫟本の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて出で、名乘座に立ちて、

狂言「かやうに候者は。和州櫟本に住居する者にて候。某宿願の子細あつて。在原寺へ參詣仕り候。今日も參らばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづくよりいづ方へ御通りなされ候へば。これには休らうて御座候ぞ

ワキ「これは一所不住の僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中へ出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古業平紀の有常の娘夫婦の御事につき。樣々の子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を仰せ候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。さやうの事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すもいか

〔 〕いふや注連繩の—言ふを結ふにかけて、注連繩といひ、その縁で長きと續けた。〔 〕契りし年は筒井筒—契つた年は「つゝ」十九歳、といひかけた。「つゝ」は眞は十であるが、十九と用ゐ誤るやうになつた。

【間】

○櫟本—山邊郡石上村（今の山邊村）に隣接した所。この地に柿本寺人丸塚がある。

がにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候
ワキ「近頃にて候
狂言「さる程に在原の業平と申したる御方は。阿保親王の末の御子にて御座ありたると申す。即ちこの所に住ませ給ふが。その頃紀の有常と申す御方の御息女の御座ありしが。業平常に伴ひ給ひ、これなる井筒に立ち寄り。影をうつして御遊ありしが。おとなしくなり給ひては。互に恥ぢがはしく思して。出會ひ給ふこともなく候に。ある時業平の方より。歌を詠みて息女の方へ贈らる。その御歌は。筒井筒井筒にかけしまろがたけ。生ひにけらしな妹見ざるまに。かやうに遊ばしければ。息女の御返歌に。くらべこし振分髪も肩過ぎぬ。君ならずして誰かあぐべきと。かやうに御返歌あつて。程なく夫婦の語らひをなし給ひ。御契り淺からずありたると申す。又その頃業平は高安の里にとある女と契り給ひて。高安へ通ひ給ふに。息女は嫉み給ふ心もなく。高安へ通ひ給ふ折節は。機嫌よくして出で立たせ給ふ間。業平不審に思し召し。もし二心やあると思し召し。河内へ通ひ給ふ風情にて。庭なる一村の薄の陰に立ち寄り。内の體を御覧あるに。息女はいつよりも美しく出で立ち。香を焚き花を供へ。縁に出でて高安の方を御覧じ。一首の歌に。風吹けば沖つ白波龍田山。夜半にや君がひとり行くらんと詠み給ひ。いかにもあぢきなき體にて奥へ御入り候を。業平御覧じて。さては二心なきものをと。河内通ひを留まり給ひたると申すが。またその後息女も業平も。空しくなり給ふにより。その跡に寺を建て。在原寺と名づけ申し候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて御座候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候
ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく女性一人來られ。これなる板井を掬び花を清め香を焚き。あれなる塚に回向なし申され候程に。いかなる事ぞと尋ね候へば。業平紀の有常が息女の御事。唯今御物語りの如く懇に語り。何とやらん身の上のや

うに申されしが、井筒の邊にて姿を見失うて候よ

狂言「さては御息女の御亡心現れ給ひたると存じ候間、暫く御逗留あつて、業平夫婦の御跡御弔ひあれかしと存じ候

ワキ「我等もさやうに存じ候間、暫く逗留申し、ありがたき御經を讀誦し、かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば。重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】

ワキ上歌(待謠)〔上〕更け行くや。在原寺の夜の月、在原寺の夜の月。昔を返す衣手に。夢待ちそへて假枕、苔の莚に、臥しにけり苔の莚に臥しにけり

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ紀有常の女、面若女・鬘・鬘帶・初冠・卷纓追懸・襟白・着附摺箔・紫長絹・縫箔腰卷・腰帶・扇の裝束にて出で常座に立ち、

後ジテ〔一〕「あだなりと名にこそ立てれ櫻花。年に稀なる人も待ちけり。(ワキに向ひ)かやうに詠みしもわれなれば。人待つ女ともいはれしなり。われ

【六】

〇昔を返す衣手に　古今集小野小町の歌「いとせめて戀しき時はうばたまの夜の衣を返してぞぬる」に據つて綴つた。

【七】

〇あだなりと名にこそ立てれ櫻花年に稀なる人も待ちけり　伊勢物語に「年頃訪れざりし人の櫻の盛りに見に來りければ、あるじ」と詞書して載せた歌。古今集にも讀人知らずとして收む。

〇人待つ女―この名「杜若」にも見ゆ。有常の娘の異名とするのは、謠曲作者の假作。

【六】

後段

月も更けて來た深夜、旅僧は在原寺て、昔物語の夢を見ようと、衣を裏返しにし、苔の筵に假枕をして寢た。

【七】

後ジテ紀有常の女、旅僧の夢に現れる心で登場、

女「――

『あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年に稀なる人も待ちけり』

(櫻の花は咲くと間もなく散つてしまふので、頼み難いあだなものだといはれるけれども、私はその櫻の花のお蔭で、一年に一度逢ふか逢はぬか分らない珍しい人に逢ふことが出來ました)

といふ歌を詠んだのも、私でございます

○眞弓槻弓―年の序。伊勢物語の歌に「梓弓眞弓槻弓年を經てわがせしがごとうるはしみせよ」
○直衣―公卿の平服に用ゐられた裝束の名。
○移り舞―人に眞似て舞ふ舞。
○雪を廻らす―舞容の美しい形容。
○月やあらぬ―伊勢物語の歌「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身にして」を指す。この歌古今集にも業平の詠として載す。
○見みえし―見、見せし、相會つた。

筒井筒の昔より。眞弓槻弓年を經て。今は亡き世に業平の。形見の直衣。身に觸れて恥かしや。昔男に移り舞

地『雪を廻らす。花の袖

〔序舞〕

舞ひ上げて仕手柱先に立ち、

シテワカ『ここに來て。昔ぞ返す。在原の

これより謠に合せて舞ふ。

地「寺井に澄める。月ぞさやけき。月ぞさやけき

シテ「月やあらぬ。春や昔と詠めしも。いつの頃ぞや。筒井筒

地『筒井筒。井筒にかけし

シテ『まろがたけ

地『生ひにけらしな

シテ「老いにけるぞや

地『さながら見みえし。昔男の。冠直衣は。女とも

ので、人待つ女ともいはれたのでございます。私が幼い時から永い年月馴れ親んだ業平、今は亡くなつたその業平の形見の直衣を身に着けて、お恥かしながら、昔の業平に眞似て舞を舞つてお見せしませう」

その舞姿の美しいこと。

〔序舞〕

（有常の女、業平の舞に擬へ舞ふ）

女「この在原寺に來て、昔の事を思ひ出してゐると、月も澄み渡つて明らかなことでございます。月といへば、業平が、

『月やあらぬ春や昔の春ならぬ、わが身一つはもとの身にして』

とお詠みになつたのは、いつの頃のことでございましたでせう。その業平は、

『筒井筒井筒にかけしまろがたけ、生ひにけらしな妹見ざる間に』

とお詠みになりましたが、それも遠い昔になりました」

（井戸に女が姿を映し、）

女「丁度あの時のやうに、水に姿を映して

見えず。男なりけり。業平の面影（と井筒の前へ行き扇にて薄をかき分け井の中を見）

シテ『見ればなつかしや

地『われながらなつかしや（と後へたら〳〵と下り）。亡婦魄靈の姿は凋める花の（と右へ廻り）。色なうて匂ひ（左袖を巻きて腰を折り）。殘りて在原の寺の鐘もほのぼのと（と立ちて鐘を聞き）。明くれば古寺の松風や芭蕉葉の夢も。破れて覺めにけり夢は破れ明けにけり

（明くれば古寺の――と常座へ行きて脇座の上を見、明けにけり――と留拍子を踏む。

見ると、業平の面影を寫したこの姿は、女とは見えない、全くの男姿で、業平の面影そのまゝで、見ればなつかしい、われながら懐しい心地がします」

といふうちに、女の幽靈は花の凋んで匂ひだけ殘つてゐるやうに、おぼろになつて、やがて在原寺の明方の鐘が鳴り、夜もほの〴〵と明けると、この寂しい古寺で見てゐた旅僧の夢も覺めてしまつたのである。

○亡婦魄靈―死んだ女の幽靈。

○凋める花の―古今集序に―在原業平はその心あまりて言葉足らず、凋める花の色なくて匂ひ殘れるが如し―とあるに據つた。

○殘りて在原の―殘りてありを在原にいひかけた。

○芭蕉葉の―古寺の寂しい様を形容して、葉の破れるを夢の破れるにいひかけた。

〔考　異〕

諸　流（五　流）

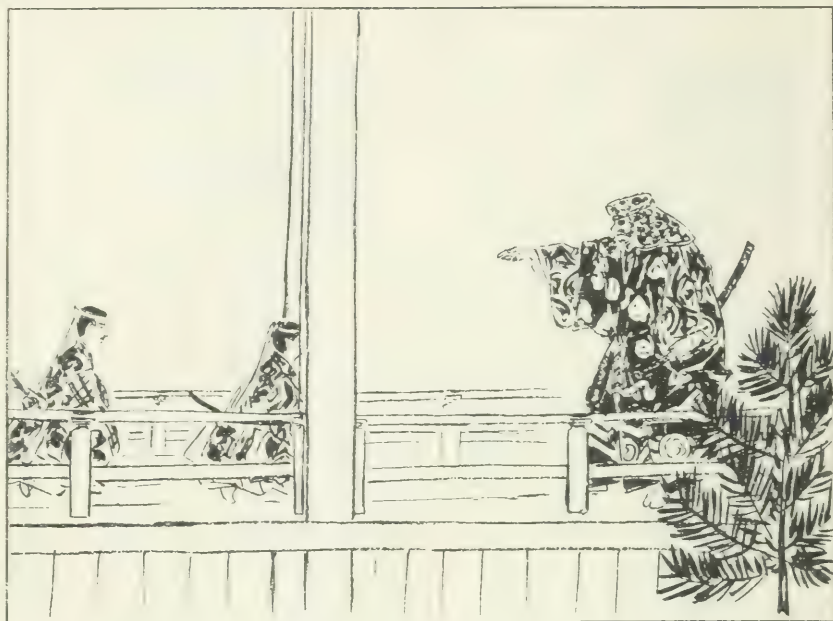
殆ど相違がない。

古諸本（光悦本）

【一】ワキ「これは諸國一見の……初瀬に參らばやと存じ（光思ひ）候

【四】ワキ「猶々業平の御事委しく御物語り候へ（光ナシ）

烏帽子折（えぼしをり）　觀（寶剛喜）

解說

【能柄】四・五番目　二段劇能

【人物】**ワキ**　三條吉次、**ワキツレ**　弟吉六、**子方**　牛若丸、**狂言**　早打、**前シテ**　烏帽子屋亭主、**前ツレ**　同妻（鎌田正淸妹）、**狂言**　宿屋亭主、**狂言**　熊坂輩下の者（三人）、**後シテ**　熊坂長範、**後ツレ**　熊坂輩下の者（多勢）

【所】**第一段**　近江國　鏡の宿　**第二段**　美濃國　赤坂

【時】平家時代　（九月）

【作者】二百十番謠目錄に宮增の作とす。看聞御記に永享四年三月十四日仙洞御所で演じたとある「九郎判官東下向」は本曲のことであらうか。

【梗概】三條の吉次信高が弟吉六を連れて、奧州へ下らうとすると、鞍馬山を脫れ出た牛若丸が呼び留めて、一行に加へて貰ふこととなつた。やがて近江國鏡の宿まで來ると、都から牛若を捕へよとの觸れがまは

つたので、牛若は急いで髮を切り烏帽子を着けて、東男に身をやつして下らうと考へ、とある烏帽子屋を訪れて、左折の烏帽子を所望した。烏帽子屋は左折は源氏にめでたい嘉例があるといつて、祝言を述べてくれたので、牛若は烏帽子の代金として一刀を與へた。烏帽子屋が喜んでこれを妻に見せると、妻はさめざめと泣いて、私は實は鎌田正清の妹あこやの前で、先年牛若が生まれられた時、父義朝殿から守刀を與へられる使者となつたが、この刀はその「こんねんだう」の刀であると語る。亭主は驚いて妻と共に牛若の後を追つて、わが素性をうち明けて、その刀を返した。次で吉次一行が美濃國赤坂の宿に泊つてゐると、熊坂長範が多勢の手下を引連れて、吉次の財寶を奪はうと襲つたが、牛若丸はたゞ一人でこれを悉く斬り殺し、長範をも斬り伏せてしまふ。

【出典】　牛若丸元服の事及び強盜誅戮の事は、平治物語卷三「牛若奧州下向の事」にも見えてゐるが、それには、

或時奧州の金商人吉次といふ者、京上りの次には、必ず鞍馬へ參りけるに(牛若)逢ひ給ひて、「この童を奧へ具して下れ」ゆゝしき人を知りたれば、その悦びには金を乞ひて得させんずる」と宣へば……「子細なし」と約諾して、生年十六と申す承安四年三月三日の曉、鞍馬を出でて、東路遙かに思ひ立つ心の程こそ悲しけれ。その夜鏡の宿に着き、夜更けて後、手づから髮取り上げて、懷より烏帽子取り出し、ひたと着けて打出で給へば……黃瀨川に着きて、……こゝに一年忍びておはしけるが、武勇人に勝れて、山だち強盜をいましめ給ふこと、凡夫の態とも見えざりしかば……。

とあるだけで、強盜討ちの場所も本曲とは違つてゐる。義經記の記事はこれよりは遙かに委しく、強盜討ちも吉次の旅宿を襲つたのを討つのであるが、その場所は美濃の赤坂ではなく、近江の鏡の宿で、強盜の名も藤澤入道とあつて、熊坂の名は見えず(卷二「鏡の宿に強盜入る事」)、そして元服は強盜討ちの後、熱田の大宮司の手ですることとなつてゐる(卷二「遮那王殿元服の事」)。即ち本曲は義經記を本としたのであらうが、新しく創作した所の多いものである。たゞ幸若舞曲の「烏帽子折」は本曲と同工のもので、元服・強盜討ちの場所も同じく、鎌田正清の妹の事も同樣に記してゐて、本曲と母子關係のあることが疑へないのであるが、そのいづれが先であるかは明かにし難い。或は舞曲の方が先かとも思はれるが、證材を提出することは出來ない。本曲の後段を夢幻能にした「熊坂」は本曲以後のものであらう。同曲の解說參照。

【概評】　二つの義經傳說を一つの曲にまとめたものである。主題のちがつたものを一つに結びつけたものである。傳說の主人公たる牛若丸は子方として前後の二段に通じてゐるが、戲曲の主役たるシテは、第一段と第二段と全く別趣の人物である。それが本曲の最も大きな

缺點である。戯曲として「鉢木」のやうなまとまりを持つてゐないのである。しかしながら、著名な傳說を舞臺化したものとしては、觀客に相當の興味を與へてゐる。かうした興味本位のものとしては、頗る變化に富んだ、――同一人物でない別な狂言を二度まで出してゐるのは外に例がない――、そして筋の運びの滑かな、よい出來榮えである。現在物、劇能の一つにこのやうな曲のあることは、決して悪いことでないと思ふ。

【一】

次第の囃子にて、ワキ三條吉次、着附段熨斗目・掛素袍・白大口・腰帯・扇の裝束にて笠を被り、ワキヅレ弟吉六、着附無地熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束にて、舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 次第「末も東の旅衣。末も東の旅衣日も遙々と急ぐらん

地取にワキは笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「これは三條の吉次信高にて候。われこの程數の寶を集め。弟にて候吉六を伴ひ。唯今東へ下り候

といひてワキヅレに向ひ、

ワキ「いかに吉六。高荷どもを集め東へ下らうずるにて候

ワキヅレ「委細心得申し候。やがて御立ちあらうず

【一】

第一段

舞臺は行かぬ京都で、ワキ三條吉次、ワキヅレ弟吉六と共に登場。

二人「行先の遠い東國の旅に出かけるのだから、これから長い日數のかゝることと思ふと、自然氣ぜはしく感じられることだ」

と次第を謠つて、遠旅の心持を述べ、

吉次「私は三條の吉次信高です。私はこの間から澤山な財物を買ひ集めたので、弟の吉六を連れて、これから東國へ下るのです」

と見物人に自己紹介をし、

吉次「おい吉六、大きな荷物を寄せ集めて、東國へ下らう」

吉六「皆心得て仕度を整へて置きました。

【一】

○末も東の――この次第、「隅田川」のとほゞ同文。「隅田川」のは、末句「遙々の心かな」

○日も遙々と――日もは紐、遙々は張るにいひかけた衣の縁語。

○三條の吉次――義經記巻一に「その頃三條に大福長者あり、その名を吉次信高とぞ申しける。毎年奥州に下る金商人なり」とある。

○數の寶――數多くの財物。

○吉六――この名、義經記には見えない。

○高荷――高く積み上げた荷物。

○やがて――そのまゝ。早速。

るにて候

といひて脇座に行きかゝる。

【三】

子方牛若丸、襟赤・着附厚板・長絹・白大口・腰帯・扇の装束にて幕より出でながら、

子方「なうなうあれなる旅人。奥へ御下り候はば御供申し候はん

ワキ脇座に立ちて、

ワキ「易き間の御事にて候へども。御姿を見申せば。師匠の手を離れ給ひたる人と見え申して候程に。思ひも寄らぬ事にて候

子方この間に舞臺に入り常座に立ちて、

子方「いやわれには父もなく母もなし。師匠の勘當蒙りたれば。『ただ伴ひて行き給へ

ワキ「この上は辭退申すに及ばずして。この御笠を參らすれば（と笠を子方に渡す）

子方「牛若この笠おつ取つて。今日ぞ始めて憂き旅に（と笠を被り）

早速御出立なさい」

といつて京を出立する。

【三】

子方牛若丸登場。吉次等を呼び留めて、

牛若「おういおい、そこへ行く旅の方、陸奥へお下りになるのならば、私も連れて行つて下さい」

吉次「お易い御用ですが、お姿を見るのに、師匠の許を逃げ出して來た方だと思はれますから、とてもお連れするわけには參りません」

牛若「いや私には父もなければ母もなく、その上師匠に勘當せられてしまつたのだから、是非連れて行つて下さい」

吉次「それならばお斷りするにも及びますまい」

といつて、お笠を牛若に上げると、牛若はそれを取つて、

牛若「いよいよ今日始めて辛い旅に出かけることとなつた。そして、粟田口から松坂、四の宮河原と通つて、逢坂關へ來た

【三】

○奥―陸奥。

○勘當―勘罪當罰から轉じた語で、君父師などから縁を切つて追ひ出されること。

○ただ―是非。

○粟田口―山城國愛宕郡、山城名勝志に「從二三條白川橋東一迄二山際一號二粟田口一、通二江州大津驛一」憂き日に逢ふといひかけた。
○松坂―粟田口の東、蹴上の坂。
○四の宮河原―松坂の東、愛宕郡山科村の內。
○逢坂の關―山城近江の國境にある。
○駒の後に立ちて―吉次の乘馬の後に從つてといふ意。拾遺集紀貫之の歌「逢坂の關の清水に影見えて今や引くらむ望月の駒」によつて「關路の駒」といつたのである。
○藁屋の床の古―〔蟬丸〕に作られた、延喜帝の皇子蟬丸が逢坂山に捨てられたといふ傳說をいふ。
○粟津の原―近江國滋賀郡義仲の討死した所。思ひ合はすを粟津にいひかけた。
○駒もとどろに―風雅集平兼盛の歌に「貢物絕えず供ふる東路の勢田の長橋音もとどろに」
○勢田の長橋―琵琶の湖尻勢田川に架けた橋。その夕照は近江八景の一。
○野路―瀨田村の東北、栗太郡老上村の字。

地下歌「粟田口松坂や。四の宮河原逢坂の。關路の駒の後に立ちて。いつしか商人の主從となるぞ悲しき（子方しをり）。上歌「藁屋の床の古。都の外の憂き住居。さこそはと今思ひ粟津の原をうち過ぎて。駒もとどろと踏み鳴らし。勢田の長橋うち渡り。野路の夕露守山の。下葉色照る日の影も傾くに向ふ夕月夜。鏡の宿に着きにけり

「駒もとどろと踏み鳴らし」とワキ先に立ちて、ワキヅレ・子方の順に舞臺を左へ大廻りして、ワキは眞中（ワキヅレはその後）子方は仕手柱先正面に出で向合ひ、上歌濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。鏡の宿に着きて候。（子方に）この所に御休みあらうずるにて候

といひて、ワキ・ワキヅレは囃子方の後、子方は後見座にくつろぐ。

【三】

狂言早打、着附縞熨斗目・狂言上下・脚半・腰帶・扇・小刀の裝束にて竹杖をつき、

が、かうして吉次の馬の後について、いつの間にやら商人の家來となつてしまつたのは悲しいことだ。この逢坂關といへば、昔蟬丸が都から追ひ出されて、こゝの藁屋で辛い住居をなされたのだが、それがどんなにお辛いことであつたらうと、自分の今の身上から推してお察しせられることだ。……そのうちに粟津原を通り過ぎて、馬の踏む足音のどんどんと高く鳴る勢田の長橋を渡つて、夕露のかゝる野路を通り、日の光で木々の下葉まで色美しく照つてゐる守山を過ぎて、日が西に傾いて夕月の出た頃、この鏡の宿に着いた」

こ道中の景趣を眺めながら行くうちに、旅程は進んだ態で、舞臺は近江國鏡の宿となる。

吉次（牛若に）「道を急いだので、もう鏡の宿に着きました。こゝでお休みなさい」

こ一同休息の態。

【三】

ここへ狂言早打が來て「牛若を召し捕へよ」こ觸れる。

○夕露—野路の縁で出し、守山を呼び出す料とした。
○守山—近江國野洲郡の宿驛。
○下葉色照る—古今集紀貫之の歌「白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らず色づきにけり」に據つた。
○夕月夜—月影を鏡に見立てて鏡の宿を呼び起した。
○鏡の宿—蒲生郡鏡山村。平治物語巻三「牛若奥州下向の事」にはこゝで元服したとあるが、義經記にはこゝで强盗を討つたとある。解説參照。

【三】
○早打—馬を驅けて急報する使者。
○髪を切り—童髪を切つて大人姿となること。
○東男—優美な京男に對して、田舍びた關東の男姿をいふ。
○やつして—見すぼらしい姿に變へて。

狂言「なう忙しや／＼
といひながら名乘座に出で、
狂言「かやうに候者は。六波羅の早打にて候。この宿の面々承り候へ。義朝の御子牛若丸。鞍馬の寺に御座ありしが。奥へ御下りの由平家聞し召し。急ぎ召し捕つて出すものあらば。望みを御叶へあるべきとの御事なり。皆々その分心得候へ
といひて引く。
子方早打の詞を聞きて仕手柱先へ出で、
子方「唯今の早打をよくよく聞き候へば。我等が身の上にて候。このまゝにては叶ふまじ。急ぎ髪を切り烏帽子を着。東男に身をやつして。下らばやと思ひ候
といひて橋懸一の松へ出で幕に向ひ、
子方「いかにこの内へ案内申し候
シテ烏帽子屋亭主、直面・襟淺黄・着附段熨斗目・素袍上下・扇・小刀の装束にて幕より出で、
シテ「誰にて渡り候ぞ

牛若「今の急使のいつてゐるのをよく聞くと、私の身上に關した問題なのだ。あゝいふ觸れが出た以上は、このまゝでは居られまい。急いで髪を切つて烏帽子を被り、田舍臭い東國男のやうに姿を落して、東國に下ることにしませう」
と獨言をいつて、橋懸烏帽子屋へ行き、
牛若「申し、お頼みします」
シテ烏帽子屋亭主登場。
亭主「どなたでございます」

○明日折り―侍烏帽子は一種の折烏帽子で、折るとは烏帽子の頂を折つて、侍烏帽子を作ること。

○何番―烏帽子の大小によつて、一番、二番、三番などといふ。

○左折―頂を左に折つた侍烏帽子。これが源氏の吉例であることは、後に述べてゐる。

○子細―事情。

子方「烏帽子の所望に參りて候

シテ「何と烏帽子の御所望と候や。夜中の事にて候程に。明日折りて參らせうずるにて候

子方「急ぎの旅にて候程に。今宵折りて給はり候へ

シテ「さらば折りて參らせうずるにて候。まづ此方へ御入り候へ

（二人とも舞臺に入り、子方は地謡座前、シテは眞中に下に居り、）

シテ「さて烏帽子は何番に折り候べき

子方「三番の左折に折りて給はり候へ

シテ「これは仰せにて候へども。それは源家の時にこそ。今は平家一統の世にて候程に。左折は思ひも寄らぬ事にて候

子方「仰せは尤もにて候へども。思ふ子細の候間。唯折りて給はり候へ

牛若「烏帽子が欲しくて來たのです」

亭主「えゝ、烏帽子が御入用だと仰しやるのですか、今日はもう夜のことだから、明日作つて進ぜませう」

牛若「急ぎの旅だから、今晩作つて下さい」

亭主「それでは作つてあげませう。では、どうぞこちらへお入り下さい」

（二人とも舞臺に入り、從つて舞臺は烏帽子屋の一室となる。）

亭主「ところで、烏帽子は何番に作りませう」

牛若「三番の左折にして下さい」

亭主「折角の御注文ですが、左折は源氏の盛んな頃ならば兎に角、今は平家が天下を支配してゐる時勢なのですから、左折なんどになさるものぢやございません」

牛若「御尤もですが、少し考へがあるのですから、是非左折に作つて下さい」

亭主「小さい方のことだから構ひますまい。ここは左折に作つて進ぜませう」

（烏帽子を作りながら、

○嘉例―めでたい先例。
○三條烏丸―京都市の内。
○八幡太郎義家―源頼義の長子で、石清水八幡の社前で元服したので、八幡太郎といつた。永承中父に從つて安倍貞任を討ち、康平五年遂にこれを滅した。功によつて出羽守となる。天仁元年六十八で卒す。
○安倍の貞任―安倍頼時の長子。父の代から陸奥を押領してゐたが、頼義・義家に討たれた。
○宗任―貞任の弟、
○左折の烏帽子を折らせられ―盛衰記卷二十二大太郎烏帽子事に「源氏の先祖八幡殿は左烏帽子を着給ひしより、當家代々の大將軍左折の烏帽子なるに、今流人落人の身ながらこれを着るこそありがたけれ」
○なのめに―斜ならず、格別に。
○御代に出羽の―御代に出るといひかけた。

シテ「幼き人の御事にて候程に。折りて參らせうずるにて候。この左折の烏帽子について。嘉例めでたき物語の候語つて聞かせ申さうずるにて候

子方「さらば御物語り候へ

シテ（謡）「さても某が先祖にて候者は。もとは三條烏丸に候ひしよな。いでその頃は八幡太郎義家。安倍の貞任宗任を御追罰あつて。程なく都に御上洛あり。某が先祖にて候者に。この左折の烏帽子を折らせられ。君に御出仕ありし時。帝なのめに思し召し。その時の御恩賞に。奥陸奥の國を賜はつて候。我等も又その如く。嘉例めでたき烏帽子折にて候へば。この烏帽子を召されて程なく御代に

地「出羽の國の守か。陸奥の國の守にかならせ給

亭主「この左折の烏帽子については、先例のめでたいお話があるのです、お聞かせ致しませう」

牛若　それではお話し下さい。

亭主　一體私の先祖といふのは、もとは京の三條烏丸に居たのですよ。さうです、丁度その頃、八幡太郎義家が安倍の貞任・宗任を御征伐になつて、間もなく都へお歸りになり、私の先祖の者にこの左折の烏帽子をお作らせになり、それを着て參内なさると、大層帝の御意に叶つて、その時の御褒美に陸奥國を賜はつたのです。――

私もその子孫で、先祖同様なめでたい烏帽子作りなのですから、この烏帽子をお召しになつて、間もなく御出世なされて、出羽守とか陸奥守とかにおなりになるやうな御幸運が向いて來た時は、さうだ、あの男が昔お祝ひを申し上げた烏帽子屋

○御果報—善果善報、よい仕合。
○引出物—贈り物。
○爭ひしにや—春秋月雪の爭ひを源平の爭ひに轉じた
○保元—保元の亂。この時源義朝は平清盛と共に勝を得たが、敵方となつた父爲義及び弟達は悉く誅せられ、次で平治の亂に義朝も清盛に敗れた。
○報いあらば—前世で善をなした報いによつて、幸ひを得る時が來れば。
○折知る—花の咲くべき時節を辨へ知る。折烏帽子にいひかけた。
○烏帽子櫻—櫻の名であらう。「元服曾我」に「咲く頃の梢時めく折に着て、烏帽子櫻の花を見ん」
○三色組の—白赤青の三色を交へて組んだ組紐をいふ
○懸緒—烏帽子を頭にかけて結ぶ紐。

はん御果報あつて。世に出で給はん時。祝言申しし烏帽子折と。召されてめでたう引出物賜ばせ給へや。あはれ何事も。昔なりけり御烏帽子の左折のその盛り。源平兩家の繁昌花ならば梅と櫻木。四季ならば春秋月雪の眺めいづれぞと。爭ひしにやいつの間に。保元のその以後は。平家一統の。世となりぬるぞ悲しき。よしそれとても報いあらば。世變り時來り。折知る烏帽子櫻の花、咲かん頃を待ち給へ

シテ『かやうに祝ひつつ（と立ち）

地『程なく烏帽子折り立てて（後見座へ行き）。花やかに三色組の烏帽子懸緒取り出だし（小結烏帽子を持ちて正面へ出で）。氣高く結ひすまし召されて御覽候へとて（子方に烏帽子を着せ）。お髪の上にうち置き立ち退きて見れば（一二三足下り）。あつぱれ御器量や（子

だとお召しになつて、めでたい引出物を下さいませよ、――
あゝ思へば、何も彼も昔の夢となりました。この左折の烏帽子の盛んに召された頃は、源氏と平家とが相竝んで御繁昌なされ、花で申せば梅と櫻、四季で申せば春と秋、眺めで申せば月と雪、いづれ勝り劣りのない御威勢であつたのですが、いつの間にやら競爭となつて、保元の亂よりこの方といふものは、平家が天下を統一する時勢となつてしまつたのは、悲しいことです。いや／＼、たとへ一時は零落なされても、また／＼善い御運に向いて來たならば、時勢も變化して、春が來て烏帽子櫻が咲くやうに、御繁昌なさることでせうから、その時機をお待ちなさいませ」

と、このやうに祝ひながら、間もなく烏帽子を作り上げて、花やかな三色で組んだ烏帽子の懸緒を取り出して、品よくこれを結んで、

亭主「さあ召して御覽なさいませ」

と、おつむりの上に載せて、少し下つて見て、

亭主「おゝ實に立派な御器量だ。これこそ

方へ扇扱ひつゝこれぞ弓矢の、大將と申すとも不足よもあらじ（と眞中にて下に居る）

【四】

シテ「日本一烏帽子が似合ひ申して候

子方「さらばこの刀を參らせうずるにて候（と懷中より刀を取出してさし出す）

シテ「いやいや烏帽子の代りは定まりて候程に。思ひも寄らず候

子方「ただ御取り候へ

シテ「さらば賜はらうずるにて候（と子方の前へ行きて刀を戴き）。さこそ妻にて候者の悦び候はん

と橋懸一の松へ行き幕に向ひ、

シテ「いかに渡り候か

ツレ烏帽子屋妻、面深井・鬘・鬘帶・襟朽葉色・着附摺箔・唐織着流の裝束にて幕より出で、

ツレ「何事にて候ぞ

シテ「幼き人の烏帽子の御所望と仰せ候程に。折

【四】○日本一—最上といふ意に用ゐ慣れた時代言葉。

○代り—代金、

武門の大將と申しても、少しの不足もない御立派な御器量だ」

と感歎する。

【四】

亭主「烏帽子がこの上もなくよく似合ひました」

牛若「それでは、お禮にこの刀を上げませう」

亭主「いえ〳〵、滅相なこと、烏帽子の代金はほんの僅かな、定まつたものですから、このやうな結構なお品など、存じも寄らぬことです」

牛若「是非取つて下さい」

亭主「それでは頂戴致しませう（と刀を戴き）、さあ妻が悦ぶことでございませう

と妻を呼ぶ心持、橋懸へ行き、

亭主「おうい」

ツレ烏帽子屋の妻登場。

妻「何です」

亭主「小さい人が烏帽子が欲しいと仰しゃ

りて参らせて候へば。この刀を賜はりて候。なんぼう見事なる代りにてはなきか。よくよく見候へ

と刀をツレに渡す。ツレ手に取りて見てしをる。

シテ「あら不思議や。かやうの事をば天の與ふる事とは思ひ給はで。さめざめと落涙は何事にて候ぞ

ツレ「恥かしや申さんとすれば言の葉より。まづ先だつは涙なり。(クドキ)今は何をか包むべき。これは野間の内海にて果て給ひし。鎌田兵衛正清の妹なり。常磐腹には三男。牛若子生まれさせ給ひし時。頭の殿よりこの御腰の物を。御守刀にとて参らさせ給ひし。その御使をば。わらは申してさむらふなり。痛はしや世が世にてましまさば。かく憂き目をば見まじきものを。あらあさ

つたので、作つてあげたら、この刀を下さつたのだ。實に見事な烏帽子代ではないか。よく御覧」

(と刀を妻に渡す。妻これを手に取りて見て、さめざめと泣く。)

亭主「これは變だ。このやうな結構なものが手に入つたのを、天の與へとも思はないで、さめざめと泣くのは、どうしたことなのだ」

妻「お恥かしいことですが、お話しようと思つても、言葉より先に涙にくれてしまふのです。今は何を隠しませう。私は實は野間の内海でお果てになつた鎌田兵衛正清の妹なのです。以前、常磐腹の御三男牛若様がお生まれになつた時、頭の殿(義朝)から、この御刀を牛若様の御守刀にお與へになつた、そのお使を私が致したのです。……あゝお氣の毒な、世が世であつたならば、こんな辛い目に遭ふこともなかつたでせうのに、あゝあさましいことです」

○なんぼう——いかほど。非常に。
○野間の内海——尾張國知多郡の南岸。今野間村と内海町とに分る。源義朝が長田忠致に殺された所。
○鎌田兵衛正清——義朝の家臣。主と共に殺された。
○妹——正清の妹が烏帽子屋の妻となつてゐたといふこと、幸若舞曲の「烏帽子折」も本曲と同工。
○常磐腹には三男——義朝の子の中で、常磐の腹から生まれたものの第三番の子。兄は今若と乙若。
○頭の殿——左馬頭殿。義朝を指す。
○腰の物——腰にさすもの、刀。

○言語道斷—いひやうもなく驚き呆れた時に發する語

○しかと—確かに。

○こんねんだう—古年刀の音便で、古刀といふ意、それをこの刀の名稱のやうに用ゐたのであらう（伊勢貞丈）。

○鞍馬の寺—京都の北、山城國愛宕郡鞍馬山にある寺。［鞍馬天狗］參照。

○おこと—そなた。

ましや候（としをる）

シテ「何と鎌田兵衛正淸の妹と仰せ候か

ツレ「さん候

シテ「言語道斷。この年月添ひ參らすれども。今ならでは承らず候。さてこの御腰の物をしかと見知り申されて候か

ツレ「こんねんだうと申す御腰の物にて候

シテ「げにげに承り及びたる御腰の物にて候。さては鞍馬の寺に御座候ひし。牛若殿にて御座候な。さあらば追つつきこの御腰の物を參らせ候べし。おことも渡り候へ

シテ・ツレ舞臺に入り子方（この間に立つ）を見て、

シテ「や。未だこれに御座候よ（とシテは眞中、ツレは脇正面、子方はその場に下に居り）。これに女の候が。この御腰の物を見知りたる由申し候程に。召し上げら

亭主「何だと、鎌田兵衛正淸の妹だと仰しやるのですか」

妻「はい」

亭主「これは驚いた。永い年月連れ添つて來たのに、今始めて伺ふのです。ところで、この御刀は確かに見覺えがあるのですか」

妻「こんねんだうといふお刀です」

亭主「成程、私も話に伺つてゐたお刀です。すると、あの方は鞍馬の寺にお出でになつた牛若殿でいらつしやるのだな。それならば追つついて、この刀を差し上げよう。あなたもお出でなさい」

二人は牛若の跡を追つかける態で舞臺に入り、牛若の出かけるのを見て、

亭主「おゝ、まだこゝにいらつしやつた」

ご夫婦とも牛若の前に出て、

亭主「こゝに居ります女が、このお刀に見覺えがあると申しますから、どうぞお取り上げ下さいませ」

○行方も知らぬ—素性も分らない。
○少人—稚兒。
○御目の程の—眼識の鋭いことをいふ。
○あこやの前—假作の人名この名、舞曲にも見えない。
○身のなる果ての牛若—憂しを牛若にいひかけた。
【五】

れて給はり候へ
子方『不思議やな行方も知らぬ田舍人の。われに情の深きぞや
シテツレ『人違へならばお許しあれ。鞍馬の少人牛若君と。見奉りて候なり
子方『げに今思ひ出だしたり。もし正清がゆかりの者か
ツレ『御目の程のかしこさよ。わらはは鎌田が妹に
子方『あこやの前か
ツレ『さん候
子方『げに知るは理われこそは
地『身のなる果ての牛若丸。人がひもなき今の身を。語れば主從と。知らるる事ぞ不思議なる
【五】
地ロンギ『はや東雲も明け行けば（三人とも立ち）。はや

牛若「これは不思議だ、素性も知らない田舍の人が、自分に大層親切にしてくれるが」
二人「もしお人違へであつたならば、御免し下さいませ。あなた樣を鞍馬の稚兒の牛若君とお見上げ申したのでございます」
牛若「成程、今思ひ出した。もしや正清の縁故の者ではないか」
妻「まあお目の お高いことでございます。私は鎌田の妹の……」
牛若「あこやの前か」
妻「さやうでございます」
牛若「成程それでは知つてゐるのは尤もだ。自分は牛若丸のなれの果てなのだ。人と生まれた甲斐もないかうした今の身上ながら、話し合つて見ると、主從だといふことが分つたのは實に不思議なことだ」
【五】
牛若「もはや夜も明けて來て、東雲の空と

○影うつる―影がうつるといふ緣で、鏡の宿にいひかけた。
○飾磨の―播磨國飾磨郡は褐色に染めた布の名産地であつたので、旅をしてを飾磨に、褐を徒歩にいひかけた。
○時代に變る―時勢につれて變る。
○身をば捨衣―源氏衰微の時勢の爲に零落して身を捨てるといふ意。
○恨みと―衣の緣語裏をいひかけた。
○おはなむけ―御餞別。
○力なし―止むを得ない。
○美濃の國―やつれはてたる身といひかけた。
○赤坂―不破郡の宿驛。

東雲も明け行けば。月も名殘の影うつる鏡の宿を立ち出づる

ワキ・ワキヅレこの間に脇座に出でて立つ。

シテ・ツレ二「痛はしの御事や。さしも名高き御身の、商人と伴ひて。旅を飾磨の、徒歩跣足目もあてられぬ御風情（としをる）

子方「時代に變る習ひとて。世の爲身をば捨衣。恨みと更に思はじ

シテ『東路のおはなむけと思し召され候へとて

地』この御腰の物を強ひて參らせ上げければ（とシテ子方に刀を渡し）。力なしとて受け取りわれ若しも。世に出づならば。思ひ知るべしさらばとて商人と伴ひ憂き旅に。やつれはてたる美濃の國赤坂の宿に着きにけり赤坂の宿に着きにけり

シテ「思ひ知るべしさらばとて」と子方と別れたる心にて中入。ツレ續いて幕に入る。ワキ・ワキヅレ・子方旅を進むる

なつたから、名殘惜しいが、この鏡の宿を出立しよう」

二人「まあお氣の毒なことだ、あのやうな御身分の高い方が商人と連れ立つて、徒歩跣足で旅をなさる、目もあてられないおいたはしいお姿だ」

牛若「時勢につれて變つて行くのが世の中の習はしで、源氏の衰微した爲に、かうして零落するのも、自分は少しも恨めしくは思つてゐないのだ」

亭主「東へお下りになります御餞別と思し召し下さいませ」といつて、このお刀を無理にさし上げると、

牛若「それでは是非がない」とこれを受け取つて、

牛若「もし世に出ることもあつたならば、禮をしよう、それではお別れしよう」と、牛若は商人と連れ立つて、辛い旅にやつれてしまつて、やがて美濃國赤坂の宿に着いた。

牛若等は美濃へ行つた態で、舞臺を持り、烏帽子屋夫婦は退場。

【六】

心にて舞臺を大廻りして、子方は後見座にくつろぎ、ワキ・ワキヅレは「赤坂の宿に着きにけり」と舞臺にて向合ふ。

ワキ正面に向きて、

【六】

ワキ「急ぎ候程に。赤坂の宿に着きて候。(ワキヅレに)いかに吉六。この所に宿を取り候へ

ワキヅレ「畏つて候

ワキヅレ仕手柱際に出で橋懸に向ひ、

ワキヅレ「いかにこの内へ案内申し候

狂言宿屋亭主、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて橋懸一の松に立ち、

狂言「案内とは誰にて渡り候ぞ。いや吉六殿にて候か。御下向めでたう候

ワキヅレ「唯今下向申して候。いつもの如く宿を貸して給はり候へ

狂言「易き御事にて候。先かう〳〵御通り候へ

ワキ・ワキヅレ脇座へ行きて下に居り、狂言は名乘座に立ちて、

狂言「やあ〳〵それは誠か眞實か。それは苦々しい事ぢや。この由申さう。(ワキの前へ出で下に居て)いかに申し候。今夜御泊り候を所の惡しき者ども聞きつけ。夜討をかけうずる由申し

【六】

第二段

舞臺は美濃國赤坂の宿。

吉次「道を急いだので、赤坂の宿に着いた。おい吉六、こゝで宿屋を取つてくれ」

吉六「畏りました」

と宿屋を求めて、舞臺はその宿屋の一室となる。ところが、狂言宿屋亭主が「今夜盗賊が襲つてくるらしい」と知らせる。

○是非を辨へず—どうすればよいか、分別がつかない。

○面々—各々方。あなた方。

○談合—相談。

○面に立たん—正面に先立つて向つて來る。

○やはか—いかでか。

○物の具して—武裝して。

○大手—敵を防ぐ表口。

候。御用心候へ

といひて切戸より引く、

ワキ「これは何と仕り候べき

ワキヅレ「我等も是非を辨へず候

子方常座に出で、

子方「面々は何事を仰せ候ぞ(と眞中に出で下に居る)

ワキ「さん候我等この所に泊り候を。このあたりの惡黨ども聞きつけ。今夜夜討に討たうずる由申し候程に。さやうの談合仕り候

子方「たとひ大勢ありとても。面に立たん兵を。五十騎ばかり斬り伏すならば。やはか退かぬ事は候まじ

ワキ「これは頼もしき事を仰せ候ものかな。悉皆頼み候

子方「面々は物の具して待ち給へ。『われは大手に向ふべしと(居立ち)

吉次 これはどうしたものだらう

吉六「私も、どうすればよいか、分別がつきません」

牛若「あなた方は何をいつていらつしやるのです」

吉次「はい、私達がこの所に泊りましたのを、この邊の惡黨どもが聞きつけて、今夜夜討に討ち寄せるといふことなので、それで、このやうに相談をしてゐるのです」

牛若「なに、たとへ多勢で押し寄せて來ようとも、正面に先立つてくるものを、五十騎ばかり斬り伏せたならば、大丈夫引き退くでせう」

吉六「これは心丈夫なことを仰しやる。それではすつかりお願ひ致します」

牛若「あなた方は武裝して、こゝでお待ちなさい。私は大手へ出掛けませう」

といつて、もはや夕刻も過ぎて、あたり一面暗くなつた頃、

牛若「鞍馬山で長い年月稽古した兵法の秘術を顕すのは今だ」

と、引戸を開けて、盗賊の押し寄せてくるのを、今や遅しと待ち構へてゐた。

○夕も過ぎて—向ふべしと言ふといひかけた。

○鞍馬山—暗くなるといひかけた。

○あらはし衣の—術を現すといひかけ、衣の縁語褄を妻戸にいひかけた。

○妻戸—引き戸。

○沖つ白波—沖つは白波の序、白波は後漢黄巾の賊が西河の白波谷から起つた故事から出た、盗賊の異名。

【間】

地「夕も過ぎて鞍馬山（子方立ちて）夕も過ぎて鞍馬山、年月習ひし兵法の術を今こそは。あらはし衣の妻戸を（と正面に出で）。開きて沖つ白波の打ち入るを遅しと待ち居たり打ち入るを遅しと待ち居たり

と右へ廻りて常座にて幕の方を見込み、直して脇座へ行きてくつろぎ、烏帽子・長絹を脱ぎ、白鉢巻・モキドウになる。

ワキ・ワキヅレは地謡の初めに切戸より引く、

【間】 早鼓にて、狂言熊坂の輩下三人、オモは燕尾頭巾・髭掛け・着附厚板・厚板壺折・括袴・脚半・腰帯・扇・小刀の装束にて長刀を持ち、アドは烏帽子・上頭掛・着附大縞熨斗目・掛素袍・括袴・脚半・腰帯・扇・小刀の装束、二のアドは着附縞熨斗目・括袴・脚半・腰帯・扇の装束にて松明を持ち、

オモ「續け／＼／＼

アド二人「心得た／＼／＼

といひながら舞臺へ出て、

オモ「何と續いたか

二人「まんまと續いた

オモ「さてそち達は今夜の様子を知つて續いたか。但し知らいで續いたか

アド「子細は知らねども。そなたが續け／＼といふによつて。それ故續いた

オモ「これはいかな事。それならば子細をいうて聞かせう。まづ都に三條の吉次吉六として金商ふ者あり。高荷を造り奥へ下るを。頼うだ人御存じあつて。都を出る時より日附をつけて置かれたが。今

夜この宿へ着いたによつて。夜討をかけうとあつて。我々三人へ先手を仰せつけられたが。何とめでたいことではないか

二人「これは一段とめでたいことぢや

オモ「それならば時分もよいによつて。いざ行かう

二人「それがよからう

オモ「さあ〳〵おりやれ〳〵

二人「參る〳〵

三人とも舞臺を大廻りしながら、

オモ「さて今夜の夜討を仕了せたならば。定めて御褒美が出るであらう

二人「さうであらう

と橋懸へ出で、オモは一の松に立ちて、

オモ「何かといふ內にこれでおりやる。まづ某がこの塀を乘り越さう

二人「それがよからう

オモ「手傳つておくりやれ

二人「心得た

オモ「やつとな

と舞臺に入り、長刀を遣ひながら子方の前へ行くと、子方長刀を打ち落す。オモ一の松に戾り、

オモ「これ〳〵今夜吉次が泊つたならば。內も賑やかさうなのに。ひそ〳〵として妻戶がくわつと開いてある

二人「それは合點の行かぬ事ぢや

オモ「今度は二人一緒に這入つて見よう
二人「それがよからう
　三人とも舞臺に入り、くらがりの中にて色々演じて、また橋懸へ戻り、
オモ「これ／＼何にもせよ。まつくらで物のあいろが知れぬ
二アド「身共は松明を用意した
オモ「それならば出さしめ
二アド「心得た
　三人とも松明を持ち、
オモ「これは一段の事ぢや。まづ身共が一の松明を入れて參らう
二人「早う入れさしめ
　オモ舞臺に入り、子方に松明を振り落さる、驚きて橋懸へ逃げ戻り、
オモ「これ／＼合點の行かぬ事がある。十一二の幼き者が。氷のやうな太刀を拔いて。身共の松明を切つて落した
二アド「それは曲物ぢや。何にもせよ二の松明を入れさしめ
アド「心得た
二アド「氣をつけてくれさしめ
アド「心得た
　一のアド舞臺に入り、子方に松明を踏み消されて橋懸へ戻り、
アド「これ／＼某が松明は踏み消したわ
オモ「いよ／＼曲者であらう

○物のあいろ　物のあやめ、物のけじめ。

二のアド拔足して幕の方へ行く。

オモ「これ〳〵そなたはいづ方へ行くぞ

二アド「某は松明の樣子を賴うだ御方へ申し上げう

オモ「これはいかな事。三の松明が大事ぢや。入れて渡らしめ

二アド「某は蟲腹が痛む。許してくれい

オモ「おのれそのつれないふならば。兩人してこの所で切つて捨てるぞ

二アド「まづ待つてくれい〳〵

オモ「待てとは

二アド「さては松明を入れぬに於ては切つて捨てるといふか

オモ「なか〳〵

二アド「それならばこゝで切らるゝもあれで切らるゝも同じ事ぢや。入れて見よう

オモ「それがよからう

アド「さりながら氣をつけてくれい

二アド「心得た

二のアド舞臺に入る、子方太刀にて二のアドの背を切る、

オモ（橋懸にて）「これは迷惑なことぢや

アド「殊の外手間が取るゝが。何をして居るか知らん

二アド（舞臺にて）「あゝ切れたわ〳〵。死ぬるわい〳〵

オモ・一のアド舞臺に入り、二のアドを見て、

アド「さればこそ仕損じたさうな。こちへおりやれ〳〵

○そのつれ——その種類のこと。そのやうなこと。

オモ「これ〳〵氣を確かに持て〳〵。某は後詰の者を觸れう程に。そなたは手負を連れて行てくれい

アド「心得た。疵は淺い。氣を確かにせい〳〵

二アド「あゝ死ぬるわい〳〵

といひながら、一のアドの肩にかゝりて幕に入る。オモ名乘座に立ちて、

オモ「皆々御聞き候へ。先手の者は皆々仕損じて候。その上麿針太郎も討たれて候間。後詰の輩出でられ候へ。その分心得候へ〳〵

といひて幕に入る。

【七】

一聲の囃子にて、後ジテ熊坂長範、面長靈癋見・長範頭巾・金地鉢卷・襟緋・着附無色厚板・法被・半切・金緞襷・腰帶の裝束にて大太刀を持ち、後ヅレ熊坂の輩下多勢、白鉢卷・着附厚板・白大口の裝束(內、火振一人側次を着る)にて、二三人は松明を持ち、一人は長刀を持ちて出で、一同橋懸に立並び、

後ヅレ(一同)一聲「寄せかけて。打つ白波の音高く。鬨を作つて。騷ぎけり

後ジテ「いかに若者ども

後ヅレ「御前に候(一同下に居る)

シテ「大手がくわつと開けたるは。內の風ばし早いか

ヅレ「さん候內の風早くして。或は討たれ。又は重

【七】

後ヅレ熊坂長範、後ヅレ輩下の者多勢を引連れて登場。

輩下(一同)「波が岸に打ち寄せるやうに、大きな聲で鬨を作つて、我々盜賊が打ち寄せて行くのだ」

といつて吉次の宿の前へ來る。

熊坂「おい若者ども」

重だ輩下の者(火振)が前に出て、

輩下「はい」

熊坂「表口がからりと開いてゐるが、敵の勢ひが強いのか

輩下「さうです。敵の勢ひが強くて、味方

【七】

○寄せかけて—盜賊の白波を海の白波によそへて綴つた。

○內の風ばし早いか—家內の勢ひが手強いか。風を力といふ意の盜賊の隱語として用ゐた。

○重手—重傷。

手負ひたると申し候

シテ「不思議やな内には吉次兄弟ならではあるまじきが。さて何者かある

ツレ「投松明の影より見候へば。年の程十二三ばかりなる幼き者。小太刀にて斬つて廻り候は。さながら蝶鳥の如くなる由申し候

シテ「さて磨針太郎兄弟は

ツレ「これは火振の親方として一番に斬つて入りしを。例の小男渡り合ひ。兄弟の者の細首を。ただ一打に打ち落したる由申し候

シテ「えいえい何と何と。かの者兄弟は餘の者五十騎百騎にはまさうずるものを。「ああ斬つたり斬つたり彼奴は曲物よ

ツレ「高瀬の四郎はこれを見て。今夜の夜討悪しかりなんとや思ひけん。手勢七十騎にて退いて

○投松明―敵の様子を探る爲に内へ投げ込む松明。

○磨針太郎―間狂言二のアドに出てゐる。この名「熊坂」にも出てゐる。

○火振の親方―松明を振り照らして打ち入る一隊の隊長。

○えいえい―口惜しくて發する歎聲。

○まさう―勝らう。

○曲者―尋常でない者。したゝか者。

○手勢―直屬の部隊。

の者が討死したり重傷を負つたりしたとの事です」

熊坂「變だな、この内には吉次兄弟の外には誰も居ない筈だが、一體誰がゐるのだ」

部下「松明を投げた光で見ますと、年の頃十二三ばかりの小さな子が小太刀で斬り廻るのですが、その早業はまるで蝶か鳥のやうだといふことです」

熊坂「して、磨針太郎兄弟はどうした」

部下「これは火振の隊長となつて、第一番に斬り込んで行つたのですが、例の小男が斬り合つて、兄弟の者の細首をたゞ一打に打ち落したとの事です」

熊坂「えゝ忌々しい、何だと、あの磨針兄弟は外の者の五十人にも百人にも當る強い男だのに、よくも斬つたものだ。そいつは餘程のしたゝか者だぞ」

部下「高瀬の四郎はこの様子を見て、今夜の夜討は具合が悪いと思つたのでせう、自分の部下七十人を引連れて逃げて歸り

○松明の占手—松明を投げ込んで、その燃え續くのを吉、消えるのを凶とした勝負の占ひ。

○一の松明—第一番に投げ込んだ松明。

○さてよな—さては負けに極まつたよな。

○たまるまじ—堪へられまい、對抗し得られまい。

歸りて候

シテ「彼奴は今に始めぬ臆病者。さて松明の占手はいかに

ツレ「一の松明は斬つて落し。二の松明は踏み消し。三は取つて投げ返して候が。三つが三つながら消えて候

シテ「それこそ大事よ。それ松明の占手といつぱ。一の松明は軍神。二の松明は時の運。三は我等が命なるに。三つが三つながら消ゆるならば。今夜の夜討はさてよな（と膝を打つ）

ツレ「御諚の如く。このままにては鬼神にてもたまるまじく候。ただ退いて御歸り候へ

シテ「げにげに盜みも命のありてこそ。いざ退いて歸らう

ツレ「尤もにて候

ました」

熊坂「うん、あいつは昔からの臆病者だ。ところで、松明で占つた結果はどうだ」

輩下「第一番の松明は斬り落され、第二番の松明は踏み消され、第三番の松明は取つて投げ返され、結局三つが三つながら消えてしまひました」

熊坂「これは大變だ。一體松明の占ひといふものは、第一番の松明では軍神の御加護があるかどうか、第二番の松明ではその時の運がどうであるか、第三番の松明では自分達の命に別條がないかどうかを占ふものであるのに、三つが三つながら消えたのでは、今夜の夜討はとても駄目だな」

輩下「仰せの通り、このまゝではたとへ味方が鬼神であつても、叶ひますまい。是非退いてお歸りなさい」

熊坂「さうだ、盜みも命があつてこそ意味があるのだ。さあ退いて歸らう」

輩下「御尤もです」

○熊坂の長範―假作の人名〔熊坂〕の解說參照。
○面を向くべきぞ―世間に顏出しがならない。

【八】
○物々しや―仰山らしい。相手を嘲つた詞。
○手並―腕前。
○八幡も御知見あれ―武神八幡大菩薩も御照覽あれ。武士の誓詞。

シテ「いや熊坂の長範が。今夜の夜討を仕損じて。いづくに面を向くべきぞ、ただ攻め入れや若者どもと。大音上げて呼ばはりけり（とツレへあしらひ、ツレ一同立上り）

ツレ〔一同〕「鬨を作つて。斬つて入りけり

と橋懸を一廻りして入替り、シテは幕際にて床几にかゝる、子方立ちて、

【八】

地「あら物々しやおのれ等よ（と子方拍子を踏み）、あら物々しやおのれ等よ。さきに手並は知りつらん。それにも懲りず打ち入るか（と眞中へ出で）。八幡も御知見あれ一人も助けてやらじものをと小口に立つてぞ待ちかけたる

八幡も御知見あれと下に居て辭儀し、立ちて橋懸に向ひ、太刀を拔き鞘をすてて、

〔カケリ〕

に子方、ツレと様々に切組みて、一人一人斬り殺す。

地「熊坂の長範六十三（シテ床几を離れ）。熊坂の長範

熊坂「いや〳〵、熊坂長範が今夜の夜討を仕損じたとあつては、世間に顏出しが出來ない。どうあつても攻め入れ、さあ若者ども」と、大きな聲でわめき立てた。

そして一同は鬨の聲を作つて、內へ斬り込んだ。

【八】

牛若「貴樣達が生意氣な、何を大層らしい事をするのだ。先程おれの腕前は分つたらうに、それにも懲りないで討ち入るのか。八幡大菩薩も御照覽下さい、一人も助けてやらないぞ」と、小口に立つて、敵を待ち受けた。

〔カケリ〕

に牛若、熊坂の部下と斬り合つて、向つてくる者を皆斬り殺してしまふ。

熊坂「熊坂長範は今年六十三になつたのだ

○鐵屐－鐵で作つた下駄。
○をほどり歩み－躍り歩みの延音で、調子に乘つて運ぶ歩き方。
○はかばかしや－殊勝らしい。
○めだれ顏なる－弱い者いぢめをする卑怯なといふ意この語〔安宅〕にもある。
○さそくをつかつて－「さそく」は左足か。〔熊坂〕に「熊坂左足を踏み鐵壁も徹れと突く長刀を」とある。
○十方斬－以下「花重ね」まで、いづれも斬合の樣をいつた語。
○三つ頭－刀の切先。
○鎬を削つて－鎬は刀の刄と背との間にある高い所。それを削り合ふ程の激戰をいふ。
○御曹子－部屋住みの公達牛若をいふ。

六十三。今宵最後の夜討せんと（舞臺へ進み）。鐵屐を踏ん脱ぎ捨て五尺三寸の（形をし）。大太刀を。するりと拔いてうちかたげ（太刀を拔き放してかたげ）。をほどり歩みにゆらりゆらりと歩み出でたる有樣は（と拍子を踏みて舞臺に入りつゝ）如何なる天魔鬼神も面をむくべき樣ぞなき（と常座にて太刀かざして開く）

地三 あらはかばかしや盗人よ（と子方拍子を踏み）。あらはかばかしや盗人よ。めだれ顏なる夜討はするともわれには叶はじものをとて（と太刀を振上げ）。隙間あらせず斬つてかかる（とシテの前へ出で）。熊坂も大太刀遣ひの曲者なれば。さそくをつかつて十方斬（とシテ子方切組み）。八方拂ひや腰車。破扻の返し。風まくり。劍降らしや獅子の齒がみ。紅葉重ね。花重ね三つ頭より火を出だして。鎬を削つて戰ひしが。祕術を盡す大太刀も御曹子の小

が、いよ〳〵今夜最後の夜討をしてやらう」と鐵で作つた足駄を脱ぎ捨て、五尺三寸の大太刀をするりと拔いて、肩にかつぎ、どしんどしんと、調子をとつて歩き出した樣は、實に恐ろしくて、どのやうな天魔・鬼神でもまともに顏を向けることが出來ないだらうと思はれる勢ひであつた。

牛若 何だ、その尤もらしいざまは。弱い者いぢめの卑怯な夜討は出來ても、このおれには叶ふまい」

と、隙間もなく熊坂へ斬つてかゝる。熊坂も大太刀遣ひのしたゝか者である。から、左足を使つて身構へを外し、或は十方斬、或は八方拂ひ、或は腰車・破扻の返し・風まくり・劍降らし・獅子の齒がみ・紅葉重ね・花重ねなどと、千變萬化、色々に斬り合つて、刀の切先から火花を放ち、刀の鎬も削られるばかり、烈しく戰つたが、祕術を盡して斬りまくる大太刀も、牛若丸の小太刀に斬り

太刀に斬り立てられ受太刀になつてぞ見えたりける

と切組みて、シテは安坐、子方は橋懸一の松に立つ、

地「打物業にて叶ふまじ。打物業にて叶ふまじ、組んで力の勝負せんとて太刀投げ捨てて（とシテ太刀を捨て）。大手を廣げて飛んでかかるを（と兩手廣げて子方の方へ行き）。諸膝薙ぎ給へば（子方シテの裾を拂ひ）。斬られてかつぱと轉びけるが（シテ佛倒れ）。起き上らんとてつつ立つ處を眞向よりも（シテ立ちて幕へ行くを子方斬りつけ）。割りつけられて。一人と見えつる熊坂の長範も二つになつてぞ失せにける

シテ「一人と見えつる」と膝つきて直に幕に入り、子方は常座に歸り太刀をかたげて留拍子を踏む。

立てられて、次第に受太刀になつて來たやうである。

熊坂「刀での斬り合ひでは叶はないやうだ。とつ組んで、力づくで勝負をきめてやらう」

と、熊坂は太刀を投げ捨てて、兩手を廣げて牛若に飛んでかゝつたが、牛若はこれを外して、熊坂の兩膝を斬つたので、熊坂は斬られてころんだが、やがて起き上らうとするのを、牛若が眞正面から斬り下したので、今まで一人であつた筈の熊坂長範も二つに割られて死んでしまつた。

○打物業―刄物での斬り合ひ。打物は鑄物に對して打ち鍛へた鐵をいふ。

○諸膝―兩膝。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ次第「末も東の……日も遙々と急ぐらん（寶剛の心かな）……ワキ「急ぎ候程に……この所に御休みあらうずるにて候（寶ナシ）

【三】シテ「何と烏帽子の御所望と候や……子方「急ぎの旅にて……折りて給はり候へ（寶ナシ）シテ「さらば（寶易き間のこと）折りて……

【四】ツレ「恥かしや申さんと……先だつは涙なり（剛ナシ）……痛はしや世が世にてましまさばかく憂き目をば見まじきものを（寶剛ナシ）

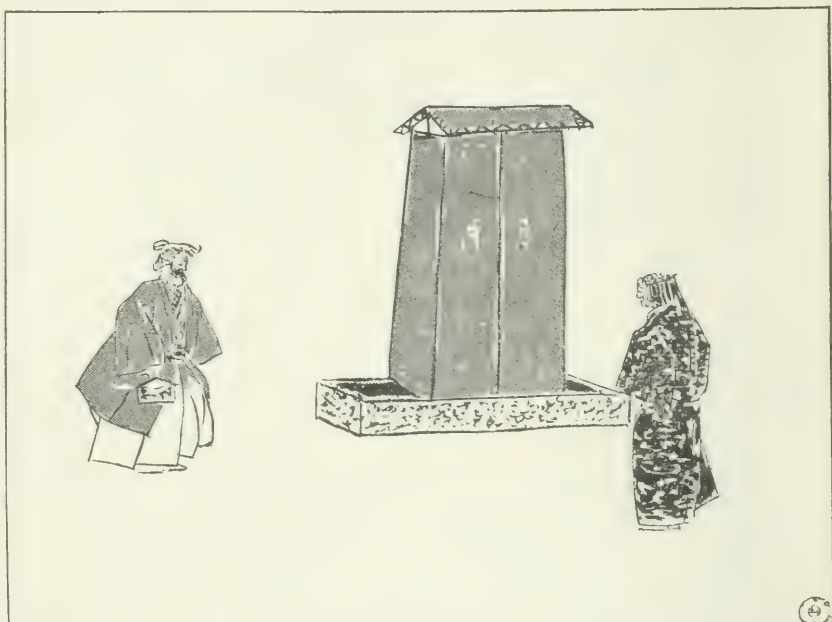
【七】ツレ「高瀬の四郎はこれを見て……シテ「彼奴は今に始めぬ臆病者（剛ナシ）

古謠本

元祿以前の古謠本、未だ索め得ない。

繪馬

観（寶・剛・喜）

解說

【能柄】 脇能　複式夢幻能

【人物】 ワキ　當今勅使、ワキツレ　同從者（二人）、前シテ　老翁（天照大神）、前ツレ　姥（月讀尊）、狂言　蓬萊島の鬼（二三人）、後シテ　天照大神、後ツレ　天鈿女命、後ツレ　手力雄命

【所】 伊勢國　齋宮

【時】 節分

【作者】 作者及び演能に關する古記錄は見當らない。

【梗概】 時の帝（刊行會本及び寶生・金剛・喜多の諸流では淳仁天皇）に仕へ奉る臣下が勅命を奉じて伊勢參宮に旅立ち、やがて齋宮に着いた。折しも今夜は節分で、この所で繪馬を掛ける行事があるので、その樣を見ようと逗留してゐると、老人夫婦が出て來て、雨の占方を示す黒繪馬と、日照りの占方を示す白繪馬と、互に掛け爭つたが、結局萬民快樂の世にしようといつて、二つの繪馬を掛け竝べ、自分達は伊

勢二柱の神が夫婦と現れ來たの一あるといつて消え失せる。やがて夜になると、月光が輝いて、天照大神が天鈿女命・手力雄命を隨へて影向して、自ら舞を奏し給ひ、又かの天岩戸の故事、——天鈿女命が神樂を奏して大神の御興を誘ひ奉り、手力雄命が大神の御袂に縋つて引き連れ奉つて、天地は二度明らかにのどかな春となつた趣を示し給ふ。

【出典】 節分の夜、伊勢齋宮て繪馬を掛けたことは、勢陽雜記に、

繪馬齋宮にあり、毎歳元日、雞鳴にかくる古例あり。

伊勢參宮名所圖會にも、

齋宮の森に小舍あり、十二月三十日夜繪馬をかくる例なり。……昔齋宮に十二月晦日大祓あつて、祓馬奉りしを、齋宮の儀廢れての後、繪にかける馬を奉りし事の例になれるにやあらん。

又、碧山日錄に、

詣二両宮一、宮前有二畫馬一、路人相傳曰、年々分歳夜、除レ舊置レ新、而不レ識二誰某掛一レ之也、玄黄白黑不レ定也、白則大旱、黑則大水、一歳豐儉、皆以レ此爲レ讖也、今繪馬駄馬也、不レ雨不レ日豐登之瑞也。

などとあり、かうした行事が古くからあつて、謠曲作者はこの行事を前段とし、後段に天岩戸の故事を採り入れて、本曲を脚色したものであらう。

【概評】 前段には五穀豐穰萬民快樂の泰平を祝ひ、後段にはその起原とも見奉るべき天岩戸の神話を描いた、神事物・祝言物の謠曲の中でも、規模の最も雄大なものである。脚色の工夫からいつても、前段の繪馬は新奇な興味を與へ、後段のシテ中舞、ツレ神樂、ツレ急舞は清爽莊麗な趣に滿ち、全體に亘つて、のどかな神々しい曲である。

【一】

【二】

後見、一疊臺に小宮の作物を大小前に出す。

次第の囃子にて、ワキ當今勅使、大臣烏帽子・上頭掛・着附厚板・袷狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、ワキヅレ從者二人、ワキと同樣の裝束にて舞臺に入り、向合ひて、

【一】 前段

舞臺は初め京都で、ワキ勅使、ワキヅレ從者を隨へて登場。

○伊勢の宮居―伊勢大神宮
◎當今に仕へ奉る―以下「下向仕り候」まで、刊行會本には「大炊の帝（淳仁天皇）に仕へ奉る臣下なり。偖も我が君伊勢大神宮を信じ給ひ、數の御寶を捧げ給ふ。其勅を蒙り、唯今伊勢參宮仕候」とある。
○風は上なる―風は梢の上を吹くといふ意で、松の序とした。
○松本―近江國滋賀郡、大津の東部。
○粟津野―同郡、馬場から勢田へ至る迄。
○勢田の長橋―粟田郡瀬田村、琵琶湖尻に架けた橋。
○野路、篠原―同郡、瀬田村の東。
○齋宮―伊勢國氣多郡にあり、大神宮に奉仕し給ふ皇女の御居所、今この古蹟の地を齋宮村といふ。
○繪馬―神社佛閣等に奉納する馬の畫の額。もと神馬を獻ずる代りに奉納したものである。

ワキ ワキヅレ 〽次第「治めしままに世を守る。治めしままに世を守る。伊勢の宮居に參らん

次第三遍返しの後、ワキは正面に向き、（ワキヅレは下に居り）

ワキ「抑もこれは當今に仕へ奉る臣下なり。さてもこの度伊勢兩宮へ。數の御寶を奉らせ給ふにより。勅使として唯今勢州へ下向仕り候

といひて、ワキヅレ（立ち）と向合ひ、

ワキ ワキヅレ 〽道行「風は上なる松本や。風は上なる松本や。雲雀落ち來る粟津野の草の茂みを分け越えて。勢田の長橋うち渡り野路篠原の草枕。夢も一夜の、旅寢かな夢も一夜の旅寢かな

ワキ「勢田の長橋うち渡り」と正面に向きて先へ出で、またもとへ歸り、道行濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや勢州齋宮に着きて候。今夜は節分にて。この所に繪馬を掛くると申し候間。今夜はこの所に逗留し。繪馬を掛く

勅使「わが國をお開きになつて、それよりこの方、代々の御治世をお守りになる伊勢大神宮にお參りしよう」

と次第を謠つて旅の目的を述べ、

勅使「自分は今上陛下にお仕へ申してゐる臣下です。さてこの度伊勢內宮外宮へ色色の御寶物を御獻進遊ばすので、その勅使として、これから伊勢國へ下るのです」

と見物人に自己紹介をし、

勅使「梢の上を風のそよ吹く松本や、雲雀の高く飛んでは落ちる粟津野の草深い所なとを通り、勢田の長橋を渡り、野路篠原のあたりに一夜寢て、旅を續けて行つた」

と旅程を述べてゐるうちに、勅使は伊勢へ着いた態で、舞臺は伊勢齋宮となり、宮の作物が出てゐる。

勅使「道を急いだので、思ひの外早く伊勢國の齋宮に着いた。今夜は丁度節分で、この所に繪馬を掛けるといふことだから、今晩はこゝに泊つて、繪馬を掛けるものを見ませう」

る者を見ばやと存じ候

ワキヅレ「尤も然るべう候

といひて、ワキは脇座、ワキヅレはその次に行きて下に居る。

【三】

眞一聲の囃子にて、シテ老翁、面小尉・尉髪・襟淺黄・着附小格子・茶絓水衣・白大口・腰帶・扇の裝束にて白繪馬を持ち、ツレ姥、面姥・姥髪・鬘帶・襟朽葉・着附無色摺箔・無色唐織・淺黄縷水衣の裝束にて黑繪馬を持ち、ツレを先に立てて橋懸に出で、ツレは一の松、シテは三の松にて向合ひ、

シテ・ツレ一聲『あらたまの。春に心を若草の。神も久しき。惠みかな

正面の方に向きて、

ツレ二句『霞も雲も立つ春を。シテ・ツレ（向合ひ）『去年とやいはん。年の暮

アシラヒの囃子にて舞臺に入り、ツレは眞中、シテは常座に立ち、

シテサシ『それ馬を華山の野に放ち。牛を桃林に繋ぐこと。シテ・ツレ（向合ひ）『皆聖人の諺かな。それはかしこき世の習ひ。時にひかれて四方の海の。濱の

といつて、この所に休む態。

【三】

シテ天照大神の神霊、老翁の姿で、白繪馬を持ち、ツレ月讀尊の神霊、姥の姿で黑繪馬を持つて登場

翁「年も改まつて春になれば、人の心も自然若々しくなるのであらうが、それにつけても、年久しい神のお惠みは實にありがたいことだ」

姥「雲も霞もはや春らしくなつて、今は去年といつた方がよいやら、新年といつた方がよいやら分らない、ほんとにのどかな年の暮ですこと」

翁「經書に、『世を泰平にして、これまで戰爭に使つた牛馬を、馬は華山の野に放ち、牛は桃林に繋ぐ』といふことがあるが、それは單に支那上代の話だけではなく、いつの聖天子の御代も同じことで、現に唯今の大御代も天下泰平で、誠にありがたいことだ。どうかわが大君の御代が―

―『わたつみの濱の眞砂を數へつゝ、君が

（二）今夜は―刊行會本には「今宵は」とある。

【三】

○あらたまの―春の枕詞。

○春に心を若草の―春になつて心を若がへらすを若草にいひかけた。

○去年とやいはん―古今集在原元方の歌「年の内に春は來にけり一年を去年とやいはん今年とやいはん」を引いた。

○馬を華山の野に放ち―書經に周武王の盛德を稱へて「歸二馬于華山之陽一、放二牛于桃林之野一」とあるを引いた。干戈を斂めて農に歸する太平の樣をいふ。

○かしこき世―聖天子の御代。

○時にひかれて―時世につれて。

○濱の眞砂を數へても―古今集讀人知らずの歌「わた

つみの濱の眞砂を數へつゝ君が千年のあり數にせん」を引いた。
○千早ぶる—神の枕詞。
○久方の—天の枕詞、年久しといひかけた。
○天津日嗣—皇位の御繼承
○ありし惠み—神代の惠み

眞砂を數へても、君が千年のある數を、たとへてもなほありがたや
シテツレ下歌「千早ぶる神代を聞けば久方の、上歌「天津日嗣の代々ふりて。天津日嗣の代々ふりて、人皇末代の子孫までありし惠みを受け繼ぎて、治まる御代のわれ等まで。及ばぬ君を仰ぎつつ。夜晝仕へ奉る夜晝仕へ奉る

「及ばぬ君を仰ぎつつ」と謡ひながら、シテとツレと入替り、シテは眞中に、ツレは脇正面に立つ。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】
ワキ「いかにこれなる人々に尋ぬべき事の候
シテ「此方の事にて候か何事にて候ぞ
ワキ「今夜はこの所に繪馬を掛くると申し候は眞にて候か
シテ「さん候卽ちわれ等が繪馬を掛け候よ
ワキ「それは何の謂れによつて掛けられ候ぞ

千年のあり數にせん』
（濱邊の砂の數へきれないやうに、お、大君の御壽命の限りのないやうにお祈りしよう）
といふ歌のやうに、幾久しく御榮え遊ばすやうにお祈りして、限りなく感謝しよう。
遠い神代に皇位を御繼承遊ばしてよりこの方、非常に長い年月を經たことだが、人皇の、ずつと後代の御子孫まで、神代の御惠みをお受け繼ぎ遊ばして、それで天下泰平にうち治まり、下々の私達までが大君の御恩澤を仰ぐことの出來るのは、誠にありがたいことで、かうして毎日毎夜ありがたく宮仕へしてゐることだ」

【三】
勅使は老夫婦を見て、
勅使「もうし、あなた方にお尋ねします」
翁「私の事ですか、何の御用です」
勅使「今夜はこの所に繪馬を掛けるのだと聞いたが、それはほんとですか」
翁「さうです。私達がその繪馬を掛けるのです」
勅使「それはどういふわけにお掛けになるのです」

○愚癡―道理の分らないこと。
○馬の毛により明年の日を相し―白繪馬であれば旱天であり、黑繪馬であれば雨が多いと判斷するのである。
○よみぢの黑の―勇みある代をよみぢにいひかけた。よみぢは夜道で、夜道の暗きといひかけて、黑の枕詞としたのである。
○耕作の道の直なるを―耕作の道のひたすらに隆んになるとの意に、歌めかさず率直なのがよいとの意を含めた。
○力をも入れずして―古今集序―力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛きもののふの心をも慰むるは歌なり―を引いた。
○八雲をさきとして―古今集序に―人の世となりて須佐の男の尊よりぞ三十文字餘り一文字は詠みける―とある―八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を―の御歌を指す。
○天ぎる雪の―古今集讀人知らずの歌―梅の花それとも見えず久方の天ぎる雪のなべて降れれば―を指す。

シテ「これはただ一切衆生の愚癡無智なるを象り。馬の毛により明年の日を相し。又雨滋き年をも心得べきためにて候
ワキ「さてさて今夜は如何なる繪馬を掛け。明年の日を相し給ふ
ツレ「誓ひはいづれも等しけれども。まづ雨露の惠みを受け。民の心も勇みある。よみぢの黑の繪馬を掛け。「國土豐かになすべきなり
シテ「暫く候。耕作の道の直なるをこそ。神慮も悅び給ふべけれ。まづこの尉が繪馬を掛け。民を悅ばせばやと思ひ候
ツレ「さやうに謂れを宣はば。此方も更に劣るまじ。「力をも入れずして。天地を動かし目に見ぬ鬼神の。猛き心を和らぐる。『歌は八雲をさきとして。天ぎる雪のなべて降る。これ等はいかで

翁「それは人間といふものはすべて愚かな無智な事理の分らないものだから、馬の毛色によつて、明年の天氣具合を占ひ、雨の多い年には又その用意をさせる爲です」
勅使「して、今夜はどういふ繪馬を掛けて、來年の天氣具合をお占ひになるのです」
姥「神の御惠みはいづれも變りはないのですが、まづ第一に、雨露の惠みを受けて、民も勇み喜ぶやうに、よみぢの黑の繪馬を掛けて、この國土を豐かにしたいと思ふのです」
翁「一寸お待ちなさい。(そなたはよみぢの黑のたどと歌めかしい、ひねくれた詞をいはれるが)、耕作は素直なのが神の思召にも叶ふのです。まづ第一に私が繪馬を掛けて、民を悅ばせてやらう」
姥「そのやうに理窟を仰しやるなら、私の方にもこれに劣らぬ理由があります。歌といふものは力をも入れないで天地を動かし、目に見えない鬼神の恐ろしい心をも和らげる功德のあるもので『八雲立つ』の歌を初めとして、『天ぎる雪のなべて降る』の歌にせよ、雲は雨を降らし、雪は

「天ぎる」は空の霞み曇ること。
○これ等はいかで―雲は雨を降らすものであり、雪は豐年の兆であるから、上の二歌はともに耕作を助ける歌であるとの意。
○隙行く駒―時の速く過ぎ去る喩に用ゐる語であるが、こゝでは隙どつて埒のあかない意に用ゐた。
○雨をも降らし―姥の掛ける黒い繪馬の占。
○日をも待ちて―翁の掛ける白い繪馬の占。
○かけまくも―口にかけて申すも。御惠みをかけといひかけた。
○神垣　こゝでは神社の意

嫌ふべき
シテ「かくしも互に爭はば。隙行く駒の道行かじ。
『いざや二つの繪馬を掛けて。萬民樂しむ世となさん
ツレ『げにいはれたりこの程は。一つ掛けたる繪馬なれども
シテ『今年始めて二つ掛けて。雨をも降らし
ツレ『日をも待ちて
シテ『人民快樂の
ツレ『御惠みを
地『かけまくもかたじけなや。これをぞ頼む神垣に。繪馬は掛けたりや。國土豐かになさうよ

「かけまくもかたじけなや」と、シテ・ツレ作物の前へ行き、シテは作物の左の方に、ツレは右の方に繪馬を掛け、シテは常座に行きて立ち、ツレは笛座前に下に居る。（ワキも下に居る。）

豐年の兆となるもので、かういふ歌は少しも嫌ふことはないぢやありませんか」
翁「いや、このやうにお互にいひ爭つてゐては、たゞ時が移るばかりだ。さあ二つの繪馬を掛けて、天下萬民すべてが樂しむ世としよう」
姥「ほんとにさうでございました。これまでは繪馬を一つだけ掛けてゐたのですが……」
翁「今年は始めて二つ掛けて、雨をも降らさう」
姥「日も照りますやうに……」
翁「かうして、人民が安樂の御惠みを受けるやうに、神にお祈りして、繪馬を掛け、國土を豐かにしよう」
（こゝで二人とも作物の宮に繪馬をかける。）

【四】〇賀茂の御あれ—山城國愛宕郡賀茂神社の四月中酉の日の祭。御あれは神のお生まれになつた日で、祭日。
〇ひをりの日—五月五日左近衞舍人、同六日右近衞舍人が大内馬場で競馬騎射する日。これを賀茂祭の競馬に結びつけた。
〇物見—見物。
〇御隨身—大官に隨從する近衞舍人。
〇色めく紙の—隨身の裝束の花やかな意と、駒につけた紙の色めくとを兼ねて用ゐた。
〇駒くらべ—競馬。
〇掛けてやさしく聞えしは—繪馬をかける、競馬の馬の驅ける、などと「かける」といふ詞を用ゐるものの中で、優しいことに用ゐる場合はといふ意。
〇松風の上の藤波—松の枝にかゝつた藤の花。藤波は藤の花を波に喩へた語。
〇尾上の花に咲き添へて—山にかゝつた白雲が美しい花のやうに見えるとの意。尾上は山の巓。
〇僧正遍昭は—古今集序—僧正遍昭は歌の樣は得たれども、まこと少し。たとへば繪にかける女を見て、

【四】地上歌「賀茂の御あれのひをりの日。賀茂の御あれのひをりの日。これを物見に御隨身（と右へ向き）色めく紙の四手つけて掛けならべたる駒くらべ（と正面へ出で）。掛けてやさしく聞えしは松風の上の藤波（左へ廻り）。尾上の花に咲き添へて（常座へ行き）。たなびく白雲又掛けて色をますなり（とワキへ向きて開き、眞中へ行きて下に居る）（居クセ）

地クセ「僧正遍昭は。歌の樣は得たれども誠少したとへば繪に描ける遊女の姿にめでて徒らに、心を動かすは。淺緑絲よりかけて繋ぐ駒は二道かけてなかなか恨みしは。戀路のそら情。逢ふさへ夢の手枕

シテ『忍ぶ今宵のあらはれて

地「言葉をかはすこの上は。何をか包むべきわれ等は伊勢の二柱。夫婦と現じ立ち出づる（とシテ・

【四】[illegible]

翁・「賀茂の祭の競馬の日、これを物見の隨身は、いと花やかに裝束し、幣をかけたる競馬に列をつらねて驅け出だす。言葉にかけて美しく、聞ゆるものは、小風吹く松にかゝれる藤の花。花にまじりて山の端に、たなびきかゝる白雲も優なるものに數ふべし。僧正遍昭が詠み歌には、歌の形はよけれども、誠の心少くて、喩へていへば繪に描ける遊女の姿に目をとめて、あだし心を徒らに動かす者に似たるたり。この遍昭が詠み歌に、「淺緑絲よりかけて」といふがあり。驅け行く駒を繋ぐとも、繋ぎがたきは人心。二道かけて通ふをば恨みはすれど、戀心いとせめくればうば玉の夢に逢ふさへ忍ばるる』

翁（こゝにて勅使に向ひ、）繪馬を掛けるのは、これまで人目を忍

ツレ立ち。信ずべし信ぜば疑ひ波の川竹の(シテ常座へ行き)。夜も明け行かば内外にて(ワキへさし)。待ち得てまみえ申さんと夜半に紛れて、失せにけり

夜半に紛れて失せにけり

と正面へ開き、來序の囃子にて中入。ツレも續いて中入。

【間】狂言蓬萊島の鬼二三人、面武悪・鬼頭巾・着附厚板・厚板壺折・括袴・脚半・腰帶・扇の裝束にて、オモは槌をかたげ、一同橋懸に立ち竝び、

オモ「ありがたや。立衆「ありがたや。治まる御代のしるしとて。蓬萊の島よりも。鬼こそ出でてこの君に。寶物を捧げんや。寶物を捧げんや

オモ「皆々かう渡り候へ

アド「心得て候

と一同舞臺に入り、

オモ「定めて子細を聞いたであらう

アド「いや聞かぬほどに語らしめ

オモ「まづめでたい子細といふは。大炊の御門當宮を御信仰あつて。右大臣公能御參宮なされ。齋宮に御着あつた處に。大神宮へ節分の夜。繪馬掛くる者を御覽あるべしとて。神前に御通夜ありしを。二柱の御神嬉しく思し召し。假に老人と顯れ御言葉を交はし給ふ。大臣殿仰せには。當社に繪馬を掛くる事は。如何なる子細ぞと御尋ね候へば。さん候繪馬を掛くる事は。天道より雨露の惠みを以て。その年の草木の善惡を與へ給ふを辨へず。人間のあさましき迷ひにより。雨多き年は黑き繪馬

んでしてゐたのであるが、今夜はその様を示し、詞まで交はしたのであるから、何も隱さずにいはうが、自分達は實は伊勢の二柱の神が夫婦として現れ出たのだ。よく信ずるがよからう。信ずれば疑ひもなく、夜明け頃、大神宮に待つてゐて會はう」

といつて、老夫婦は夜に紛れて消えてしまつた。

シテ・ツレ消え失せる態で退場。

徒らに心を動かすが如し。僧正遍昭は六歌仙の一人。俗名良峯宗貞。仁明天皇の崩御を悲しんで出家し、花山元慶寺の座主となつた。寛平二年寂、年七十六。

○淺緑絲よりかけて―古今集僧正遍昭の歌―淺緑絲よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か―を引いた。心を動かすは淺しといひかけて遍昭の歌を引いた。

○繫ぐ駒は―「蜘蛛のいに荒れたる駒は繫ぐとも二道かくる人は賴まじ」といふ古歌に據つた。この歌〔鐵輪〕にも見ゆ。

○二道かけて―一人の男が二人の女を愛するをいふ。繪馬を二つかける事からこの詞を出し、二柱を呼び起す料とした。

○戀路のそら情―仇な戀に深い思ひをかけること。

○忍ぶ今宵のあらはれて―忍ぶ戀が顯れるとの意を、繪馬をかけることは常は人目を忍ぶのであるが、今宵はその様をも示し、詞を交はすとの意にいひかけた。

○伊勢の二柱―內宮外宮の事を申し、從つて天照大神と豐受大神であるべきであ

るが、こゝでは日神(天照大神)と月神(月讀命)とし、且この二柱を夫婦神として作つたのである。○疑ひ波の川竹の—疑ひなし、波の川、川竹、竹の節、夜も明けといひ續けた。○内外—内宮、外宮。

【四】

【五】

○雲は萬里に斂まりて—詩人玉屑四「千里好山雲乍斂、一樓明月雨初晴」をいひかへて月の序とした。この詩句〔羽衣〕にも見ゆ。○月讀の明神—書紀に據れば、伊弉諾神が右の眼をお洗ひになつた時お生まれになつた神。月界主宰の神で、社は内宮七別宮の一。○秋津島の大棟梁—秋津島は日本の異稱。大棟梁は首位にあるもの、統治者。○地神五代の祖—天照大神忍穂耳尊・瓊々杵尊・彦火々

を掛け。雨少き年は白き繪馬を掛け。來年の善惡を知らせんが爲なりと御物語あり。大臣殿御申しには。さればなき當宮の御威光正しくましまさば。日もよき程に照らし。雨もよき程に降るやうになされて然るべしと御申し候へば。二柱の御神の御返答に。天地始まりてよりこの方。ある事はあるやうになくては叶ひがたしさりながら。かやうに承る上は。今よりは黒白の二つの繪馬をともに掛け。懇に知らせ申すべしとの御事なり。かゝるめでたき折からなれば。寶物をうち出だし。君に捧げ申さうと思ふが。何とあらうぞ

アド「これは一段にて候。されば急ぎうち出ださう

オモ「蓬莱の島なる。〳〵。鬼のもつ寶は。隱れ蓑に隱れ笠。打出の小槌。諸領無量上無量。月氏國にうつつたり。「一段とめでたい。こちらへ渡らしめ〳〵

アド「心得た〳〵

【五】

といひて幕に入る。

後見、作物の繪馬を引く。

出端の囃子にて、後ヅレ天鈿女命、面連面・黒垂・天冠・襟赤・着附摺箔・紫長絹・緋大口・腰帶の裝束、後ジテ天照大神、面増・鬘・鬘帶・襟白・着附白綾・白單狩衣・緋大口・腰帶・扇の裝束、後ヅレ手力雄命、面三日月・黒垂・透冠・襟紺・着附厚板・法被・半切・腰帶・扇の裝束にて出で、橋懸に立ち並び、

地「雲は萬里に斂まりて。月讀の明神の。御影の尊容を照らし。出で給ふ

後ジテ「われは日本秋津島の大棟梁。地神五代の

【五】

後段

後ジテ天照大神、後ヅレ天鈿女命・後ヅレ手力雄命を隨へて登場。

空には一點の雲もなく、月讀神がその御姿たる月光を照らして出現し給ふ。

大神 自分は日本の統治者、地神五代の祖

出見尊・鸕鷀草葺不合尊を地神五代と申す。天照大神は卽ちその始祖におはす。○和光利物―和光は佛菩薩が本來の德光を和らげてこの濁世に現れること。利物は萬物を利益すること。○御裳濯川―伊勢內宮の神域を流れる五十鈴川の別名。

○しどろに木綿四手の　神垣をしどろに結ふを木綿にいひかけた。しどろは亂れた樣。木綿四手は楮の皮から作つた布又は紙の御幣。

【六】○昔天の岩戸に閉ぢ籠り―天照大神が素盞嗚尊の亂行を憤り給ひ天岩戸にお隱れになつた爲、天下が常闇となつたので、八百萬の神達が愁へ惑うて、色々と大神を慰め奉り、殊に天鈿女命が面白く舞を舞はれると、大神は少し岩戸を開いて御覽になつた、その隙に手力雄命が大神の御手を取つて出し奉り、こゝに再度天下が明らかになつたといふ神話。古事記。日本書紀に見ゆ。

祖。天照大神

地「和光利物は御裳濯川の。和光利物は御裳濯川の。水を蹴立つる波の如し。されども誓ひは虚空に滿ち來る五色の雲も。輝き出づる。日神の御姿。ありがたや

（と天女（天鈿女命）・シテ舞臺に入り、天女は笛座前にて床几にかゝり、シテは常座に立ち、力神（手力雄命）は一の松に進みて床几にかゝる。）

シテ「所は齋宮の名に古りし（と拍子を踏み）

地「所は齋宮の名に古りし（と正面に出で）。神垣しどろに木綿四手の。あらはに神體現れ給ふ（と右へ廻り）。ありがたや

〔中舞〕（シテ舞ふ）

【六】

シテ「昔。天の岩戸に閉ぢ籠りて

地「天の岩戸に閉ぢ籠りて。惡神を懲らしめ奉らんとて、日月二つの御影を隱し（と兩袖にて顏を掩ひ）。

先、天照大神である。一切衆生を利益すること、この御裳濯川の水を蹴立てる波のやうであらう」と仰せられて、空には五色の雲が輝き渡つて、日の大神の御出現遊ばされたのは、實にありがたいことである。

こゝは齋宮として昔有名な所であつたが、既に年が經つて、神垣も亂れがちになつてゐるところへ、大神の御神體が明らかに御出現になつたのは、實に勿體ないありがたいことである。

〔中舞〕

大神が舞を舞ひになる態。

【六】

大神は神代の様を示しになる態、

大神「自分は昔天の岩戸に閉ぢ籠り、惡神をお懲らししようと思つて、日の光月の光二つとも隱し、世の中を眞暗にしたが、神々はいつまでもこの世のくらやみであることを歎いて、どうにかして自分の機

常闇の世のさていつまでか（作物の扉を開きて内に入り）荒ぶる神々。これを歎きていかにも御心とるや榊葉の。青和幣。白和幣。色々様々に謠ふ神樂の韓神催馬樂。千早ぶる

雨ヅレ「常闇の世の」に立ち、天女は脇座、力神は常座にて「これを歎きて」と向合ひ「色々様々に」と力神は後見座にくつろぎに榊枝（四手つけ）を持ちて常座に平坐し、天女は笛座前にくつろぎ幣を持ちて常座へ出で、

〔神樂〕（天女舞ひ）

幣を捨てて笛座前へ行き、神樂濟みて力神立ち、

〔急舞〕（力神舞ひ）

シテ『面白や（雨ツレ作物へ向く）

地』おもて白やと覺えず岩戸を少し開いて（シテ扉を少し開き）。感じ給へば。いつまで岩戸を手力雄の命は引き開け御衣の袂にすがり（と力神作物の前に下に居てシテ袖に両手をかけ）。引き連れ現れ出で給ふ有様（シテ作物を出で）。又珍しき神遊びの。面白かり

嫌をとらうと思ひ、榊葉に青や白の幣をつけて、色々の歌、神樂の韓神や催馬樂等を謠つたのである。

後ヅレ天鈿女命、

天女『千早ぶる……』と謠つて、

〔神樂〕を舞ひ、次で後ヅレ手力雄命、

〔急舞〕を舞ひ、天岩戸隱れの神代の様を示す態。

大神　おゝ面白いことだ。

と、われ知らず天岩戸を少し開いてお悦びになると、いつまでも岩戸を閉ぢて置いてはならないと、手力雄命が岩戸を引き開け、大神の御衣に縋つて、お連れ出し申しあげた有様。

この珍しい神遊びの面白かつた事をお

○荒ぶる—神の枕詞。いつまでかあらんといひかけた。

○御心とるや　大神の御機嫌をとる意と、榊葉を手に取り持つ意とを兼ねた。

○青和幣白和幣—和幣は幣の美稱で、その麻で作つたものを青和幣、穀皮で織つたものを白和幣といふ。古事記に「於下枝、取垂白丹寸手青丹寸手而」

○韓神—神樂の曲名。韓神とは大年神の御子の名から出た名。

○催馬樂—神樂の餘興に奏せられた古代の謠ひ物。

○千早ぶる—神の枕詞。神樂歌の文句を謠ひ初めた意。

○おもて白—古語拾遺に「當此時、上天初晴、衆俱相見、面皆明白、伸手歌舞、相與稱曰、阿波禮、阿那於茂志呂」

○手力雄の命—岩戸の脇に隱れてゐて、大神の御手を取り奉つた神。いつまで岩戸を立て置かんといひかけた。

○高天の原 神話に神々のいますといふ所。

しを（兩ヅレを見）。思しめし忘れず高天の原に神とどまつて（正面に出で）。天地二度開け治まり國土も豐かに月日の光の。のどけき春こそ。久しけれ

と常座にて留拍子を踏み、シテ・天女・力神の順にて幕に入る。

忘れにならず、高天原にお留まりになり、それより以來、天地は二度明らかになり、國土も豐かに、月日の光ものどかに、天下泰平の春の幾久しく續くのは、誠にめでたいことである。

天照大神以下退場。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ「そもそもこれは當今に仕へ奉る臣下」寶剛喜大炊の帝の左大臣」剛は右大臣」喜はナシ」公能とはわが事なり

小鹽（をしほ）

觀（寶　春　剛　喜）

解　説

【能柄】　三・四番目　複式夢幻能

【人物】　**ワキ**　下京の男、**ワキツレ**　同（二人）、**前シテ**　老翁（在原業平靈）、**狂言**　所の者、**後シテ**　在原業平

【所　】　山城國　大原野

【時　】　春（三月）

【作者】　能本作者註文　二百十番謡目錄ともに金春禪竹の作とす。毛端私珍書、禪鳳習道目錄などにもこの曲名が出てゐる。蔭涼軒日錄寛正六年九月廿七日春日社祭禮に竹田太夫の演じた「小原花見」は本曲のことであらう。言經卿記文祿四年三月三十日の條に本曲註釋のことが見えてゐる。

【梗概】　京都下京の人々が誘ひ合はせて、大原野へ櫻狩に行くと、年寄つた老翁が花の枝をかざしさも花やかた樣子をして、群集の中に立ち交つてゐるので、詞をかけると、老翁は古歌を引いて戲れ、大原や

小鹽の山も今日こそはといふ業平の歌を思ひ出したりして、うち興じてゐたが、やがて夕暮になると、霞の中に消え失せてしまつた。花見の人々は、今の老翁は業平の假の姿であらうと察して、花の木蔭でなほも奇特を待つてゐると、果して業平が昔ながらの姿で現れ出で、昔を偲んで歌をうたひ舞を舞つた後、また夢のやうに消え去る。

【出典】 伊勢物語第七十六段に、

昔二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛づかさにさぶらひける翁、人々に祿たまはるついでに、御車よりたまはりて、詠みて奉りける。

大原や小鹽の山も今日こそは、神代のことを思ひ出づらめ

とあり、古今集にもこの歌を業平の詠として、

二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる

と詞書してゐる。そしてこれを業平が二條后との古事を詠んだものと解釋する俗說が行はれてゐたので、謠曲作者はこれを骨子とし、小鹽山の櫻花を背景として、業平の歌物語を一篇の戯曲に脚色したものである。

【概評】 まことに優麗典雅な曲である。主人公は男性であるが、修羅道に苦しむ武士ではなくて、櫻花爛漫の中に序舞を舞ふ貴公子である。題材は戀物語であるが、邪婬の妄執を描くのではなくて、歌舞菩薩の影向を仰ぐのである。氣品と優美とを兼ね備へた曲である。類曲に「雲林院」があるが、その伊勢物語に即してゐるのに對して、これは寧ろ春の景を主にしたところに特色を示してゐる。

【一】

櫻の立木を正面先に出す。

次第の囃子にて、ワキ下京の男、着附段熨斗目・素袍上下・小刀・扇の裝束、ワキヅレ同下京の男二人、ワキ同樣の裝束にて舞臺に入り向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 次第「花にうつろふ嶺の雲花にうつろふ嶺の雲かかるや、心なるらん

【一】 前段

舞臺は初め京都下京で、ワキ花見男、ワキヅレ同じく花見男を作つて登場。

男「あの小鹽山の雲に櫻花の映つた美しい景色が、すつかり氣に入つてしまつた」

と次第を謠つて春の景を述べ、

【一】

○花にうつろふ嶺の雲―花の色が雲に美しく映じてゐるのをいふ。

○かかるや―雲が嶺にかゝると、花にのみ心のかゝると、兩方に兼ねて用ゐた。

○下京―京都市の四條通以南。
○大原野―山城國乙訓郡にある。この地に大原野神社即ち小鹽明神がある。仁明天皇嘉祥三年藤原冬嗣が參拜の便宜の爲に、奈良の春日明神を勸請したもの。間狂言參照。
○いづくはあれど―花の名所はどこどこと數多あるが
○所から　桓武天皇が大原野の附近長岡に奠都遊ばされたことがあるので、所からといひ、又都とつゞけた。
○名にし負へる―花の都といふ名の通りに、
○木綿花―木綿（楮）で造つた造花で神に供へるもの、盛りと言ふといひかけて、手向の序とした。
○手向の袖―神に參詣する人々の袖、古今集素性法師の歌「手向にはつゞりの袖も切るべきに紅葉に飽ける神やかへさん」に據つた。
○神も交はる塵の世―和光同塵（佛が衆生濟度の爲に德光を和らげて世塵に交はること）の意を借りて、神も人間と同じやうに櫻花を賞し給ふといつたのである

地取にワキは正面に向き、

ワキ「かやうに候者は。下京邊に住居する者にて候。さても大原野の花。今を盛りなる由承り及び候間。若き人々を伴ひ申し。唯今大原山へと急ぎ候

ワキサシ「面白やいづくはあれど所から。花も都の名にし負へる。大原山の花櫻

と謠ひながらワキヅレと向合ひ、

ワキ ワキヅレ上歌「今を盛りと木綿花の。今を盛りと木綿花の。手向の袖も一入に。色添ふ春の時を得て。神も交はる塵の世の。花や心に、任すらん花や心に任すらん

ワキ「神も交はる塵の世の」と正面に向きて先へ出で、またもとへ歸りて大原山に着きたる心。上歌濟みてワキは正面に向き、

ワキ「急ぎ候程にこれははや大原山に着きて候。心靜かに花を眺めうずるにて候

男「私は下京邊に住んでゐる者です。さて大原野の櫻が、今が眞盛りだと聞きましたので、若い人達を連れて、これから大原野へ急いで行かうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

男「花の盛りはどこもこゝも面白いものではあるが、殊に花の都といはれてゐるだけあつて、舊都大原山は櫻が今眞盛りだといふので、小鹽明神へ參詣かたがた來る花見の人達は、皆美しい裝ひを凝らして春を樂しみ、神樣までがこの俗界に降つて、花をお樂しみになるやうだ」

といつてゐるうちに、大原山へ着いた體で、舞臺の大原山となる。

【二】

○しをりして―「しをり」は木の枝を折つて地に立て、歸り道を迷はぬしるしとすることであるが、こゝでは單に「手折つて」といふ意。

○かざしの袖―「かざし」は頭に挿して飾りとすることと袖はかざしの緣で出しただけである。

○年ふれば齡は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし―古今集藤原良房の歌、

○白雪を―知らるゝを白雪にいひかけ、白雪を白髮の喩へとした。

○光にあたる春の日の―古今集文屋康秀の歌「春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき」を借りた。

○散りもせず―「鞍馬天狗」に引いてゐる「今日見ずは悔しからまし花盛り咲きも殘らず散りも始めず」に據つたのであらう。この歌拾葉抄に定賴卿の詠といふ。

○情の道―風雅な心。

ワキヅレ「然るべう候

といひて脇座へ行き下に居る。

【二】

一聲の囃子にて、シテ老翁、面朝倉尉・尉髮・襟淺黃・着附無地熨斗目・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて櫻の枝をかたげて出で常座に立ち、

シテ一聲「しをりして。花をかざしの袖ながら。老木の柴と。人や見ん

櫻の枝をおろして、

シテサシ「年ふれば齡は老いぬしかはあれど。花をし見ればもの思ひも。なしと詠みしも身の上に。今白雪を戴くまで。光にあたる春の日の。のどけき御代の時なれや

シテ上歌「散りもせず。咲きも殘らぬ花盛り。咲きも殘らぬ花盛り。四方のけしきも一しほに。匂ひ滿ち色に添ふ。情の道に誘はるる。老な厭ひそ、花心、老な厭ひそ花心

「四方のけしきも一しほに」と右の方に向きて二三足出で「老な厭ひそ」と正面に直す。ワキ立ちてシテに向ひ、

【三】

（こゝ在原業平の靈、老翁の姿を借りて登場、）

翁「花の枝を折つて、このやうに頭にかざしてゐるのだが、自分のやうな老人には不似合で、外の人には柴をのせてゐるやうに見えることだらう。

古人が――

『年ふれば齡は老いぬしかはあれど、花をし見ればもの思ひもなし』

（年月を經つて老人とはなつたが、花を見てゐると、心ものどかになつて、何の心配もない）

と詠んだ心持も、その年頃になつた今の自分にはよく了解が出來るのだ。それにしても、このやうに白髮の老人になつても、のどかな春を樂しむことの出來るのは、聖代の賜物でありがたいことだ。

散りもせず咲きも殘らぬこの花の眞盛りの景色、匂ひまでが一際勝れてゐるやうに思はれる（と獨言をいひ）。この面白さに誘はれて、風雅な心持でやつて來たのだから、老人だからといつて嫌はずに、仲間に入れて下さい」

（と多勢の花見衆の中へ入つて來た態。）

ワキ花見男はこの老人を見て、

【三】
○心なき—情の道を知らぬ風雅な心のない。
○姿こそ山のかせきに—古今集兼藝法師の歌に「形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなん」拾葉抄には夫木抄紀友則の歌として「姿こそ山のかせきに似たりとも心は花になさばならめや」を引いてゐるが、見當らない。「かせき」は鹿。
○埋木の—世に埋れてゐる身ではあるが、心までは朽ち果ててゐないとの意。續千載集藤原冬平の歌に「わが戀はみ山がくれの埋木の朽ちはてぬとも人に知られじ」
○色をも香をも—古今集紀友則の歌「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」を引き、人の心をも知らないで問ひ給ふなといつた。
○いふに及ばぬ　言葉にいひ現せない。

【三】
ワキ「不思議やな貴賤群集のその中に。殊に年たけたる老人花の枝をかざし。さも花やかに見え給ふは。そもいづくより來り給ふぞ
シテ「思ひよらずや貴賤の中に。わきて言葉をかけ給ふは。さも心なき山賤の。身にも應ぜぬ花好きぞと。お笑ひあるか人々よ。『姿こそ山のかせきに似たりとも。心は花にならばこそ。なさばならめや心からに
地『をかしとこそは御覽ずらめ。よしやこの身は埋木の朽ちは。果てしなや心の。色も香も知る人ぞ知らずな問はせ給ひそ
ワキ「あら面白の戲れやな。よも眞には腹立て給はじ。いかさま故ある心言葉の。奥ゆかしきを語り給へ
シテ「何と語らん花盛り。いふに及ばぬけしきを

【三】
男「これは不思議だ。この多勢の花見の人達の中でも殊に年をとつた老人が、花の枝を頭に挿して、いかにも花やかな様子をして居られるが、一體あなたは何處からお出でになつたのです」
翁「意外なことに、この多勢の人の中から、特に私に向つて言葉をおかけになるが、それはいかにも情知らぬ賤しい者が、不似合な花見をすると思つて、お笑ひになるのですか。成程この姿は山の鹿に似てもゐませうが、自分の心持一つで、花やかな心持にならうと思へば、なれないものでもありません。外見にはをかしいとお思ひになりませうが、たとひこの身は埋木のやうになつても、心まで朽ち果てはしないのです。人のほんとの心持を知らないで、そのやうな事をお尋ねなさるものではございません」
男「面白い冗談を仰しやる方だ。私のお尋ねした事を、よもや心からお腹立てになつたのではございますまい。今の風雅なお話振りがいかにも奥床しく思はれます。どうぞもつとお話し下さい」
翁「何ともいひやうがないぢやありませ

○うつろふ影も—花の色の映じた美しい影が多いといふのを大原にいひかけた。
○大原や小鹽の山の—後撰集紀貫之の歌—大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千代の影見ん」を引いた。
○家櫻—山櫻に對して庭に移し植ゑた櫻をいふ。
○あかねさす—日の枕詞。
○日も紅の—日も暮るといひかけた。
○八重九重の—盛りの花が雲霞の如く八重九重に咲き匂ふといふのを九重の都にいひかけた。
○都邊はなべて錦となりにけり—下句「櫻を折らぬ人しなければ」で、藤原定家の家集拾遺愚草の歌。
○大原や小鹽の山も—伊勢物語、古今集に收めた在原業平の歌。解說參照。

ば。いかがは思ひ給ふらん

ワキ『げにげに妙なる梢の色。うつろふ影も大原や

シテ「小鹽の山の小松が原より。煙る霞の遠山櫻

ワキ『里は軒端の家櫻

シテ『匂ふや窓の梅も咲き

ワキ『あかねさす日も紅の

シテ『霞か

ワキ『雲か

シテ『八重

ワキ『九重の

地上歌『都邊は。なべて錦となりにけり。なべて錦となりにけり。櫻を折らぬ人しなき。花衣きにけりな。時も日も月も彌生。あひにあふ眺めかな。げにや大原や。小鹽の山も今日こそは神代

んか。この花盛りは言葉にはいひ表せない美しい景色ぢやありませんか。一體あなたはどうお思ひになります」

男「いや御尤もです。あの梢の色の照り映えた景色は實によいものです—

翁「小鹽山の小松原から煙のやうに霞んで見える遠山櫻の景色といひ……」

男「人家にある家櫻と申し……

翁「窓の梅も咲き匂うてゐますし……

男「日も紅に照り映えてゐますし……」

翁「雲か霞のやうに、櫻花が八重九重に咲き匂うてゐる都の景色は、全く錦のやうです。その美しい景色に誘はれて、花を手折らない人はなく、皆美しい着物を着飾つて居ります。時は三月、全く申し分のない時候で、今日の大原山の景色を見ては、ほんとに神代の事さへ想像されるのです」

【四】○大原野の行幸―伊勢物語に「昔二條の后のまだ東宮の御息所と申しける時、氏神に詣で給ひけるに」とあるを指す。從つて行幸といふのは穩かでない。
○在原の業平―平城天皇の皇子阿保親王の第五子。和歌の名人、伊勢物語はこの人の自叙傳の如くいひ傳へられ、二條后との情話もまことしやかに傳へられたのである。
○后 二條后、藤原高子。
○神代の事とは―前出の歌を、表には藤原氏の子孫が東宮の御息所として榮え給ふのを見て、氏神春日明神も神代の事を思ひ出されるであらうと祝ひ、裏には二條后と業平と契りを結んだ頃の事を思ひ出して下さいとの意を含めたものと解釋したのである。
○名殘小鹽の―名殘惜しといひかけた。
○山深み―契り淺からぬを承けて深みといつた。
○のぼりての世―昔の世。のぼりては山の縁語。
○昔男―伊勢物語は毎段「昔男ありけり」と書き出してゐるので、昔男を業平の異名の如くに解した。

も思ひ、知られけれ。神代も思ひ知られけれ

【四】

ワキ「かかる面白き人に參りあひて候ものかな。このまま御供申し。花をも眺めうずるにて候。又唯今の言葉の末に。「大原や小鹽の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめ。今所から面白う候。これは如何なる人の御詠歌にて候ぞ

シテ「事あたらしき問ひ事かな。この大原野の行幸に。在原の業平供奉し給ひし時。忝くも后の御事を思ひ出でて。神代の事とは詠みしとなり。「申すにつけてわれながら。そら恐ろしや天地の。神の御代より人の身の。妹背の道は淺からぬ

シテ次の上歌に大小前へ行きて下に居り、櫻の枝を置く。ワキも下に居る。

地上歌「名殘小鹽の山深み。名殘小鹽の山深み。のぼりての世の物語。語るも昔男。あはれふりぬ

【四】

男「實に面白い方に お出會ひ申したことだ。これからお供して、御一緒に花見をしませう」

（シ、これより花見をしながら話し合ふ心持で、）

男「唯今、小鹽山の景色を見ては神代の事が想像されると、――『大原や小鹽の山も今日こそは、神代の事も思ひ出づらめ』といふ歌の心を仰しやつたが、場所柄實に面白いことと思ひました。一體この歌は誰が詠まれたものです」

翁「今更らしいお尋ねですが、これは二條の后がこの大原野へお成りになつた時、在原業平がお供をして、后との御契りを思ひ出して「神代の事」（昔の事）と詠んだのです。このやうな事を申すと、われながらそら恐ろしい氣がしますが、夫婦の情といふものは、天地の開けた始め、神代から今に至るまで變りのない、深いものです。――

かうしてお話をしてゐると、お別れするのが惜しい氣がします。いや古い昔話、名も昔男といはれた業平の昔話をしてゐ

る身の程歎きても。かひなかりけり歎きても、かひぞなかりける

【五】

地ロンギ「げに山賤のさしもげに。しばふる人と見ゆるにも。心ありける姿かな

シテ「心知ればとても身の。姿に恥ぢぬ花の友に馴れてさらば交らん（と花をかたげて立ち）

地「交れや交れ老人の。心若木の花の枝

シテ『老隱るやとかざさん（と常座へ行き）

地「かざしの袖を引き引かれ。このもかのもの蔭ごとに（前へ出で）

シテ「貴賤の花見

地「輿車の。花のながえをかざしつれて（と左へ大廻りし）。よろぼひさぞらひとりどりに廻る盃の。天も花にや醉へるらん紅うづむ夕霞。かげろふ人の面影ありと見えつつ、失せにけりありと見

ると、古い昔の事が思ひ出されるのですが、過ぎ去つた今日いくら歎いても致し方のないことです」

【五】

男「一寸お見かけした所は、賤しい老人のやうだが、いかにも風雅な心の方ですね」

翁「私の心持がお分り下されば、老人の身をも恥ぢず、花見友達の親しい仲間に入れて貰ひませう。お若い人の仲間に入つて若い氣持になり、若木の花をかざして、老が隱れるかどうか、試して見ませう」

といつて、袖を引きつ引かれつして、かたたこなた、多勢の花見車の中を、花見酒に醉うて、よろよろしながら縫つて歩いた。かうして、天も花に醉うたやうに、夕霞の紅くなつた頃、この老人は影の消えるがやうに、いつの間にか見えなくなつてしまつた。

前ジテ老翁消え失せる態で退場。

【五】

○しばふる人―源氏物語榊の巻の「このもかのもに怪しきしばふる人ども集まりて」から出た語。その語意については、木葉など搔き集める賤男、皺のある老人、しばぶきする人など諸說あつて一定しない。

○姿に恥ぢぬ―老人の身をも恥ぢず、花見の仲間に加はるをいふ。

○老隱るやと―古今集源常の歌「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老隱るや」と」の梅を櫻の事にかへて引いた。

○このもかのも―こなた、かなた。

○花のながえ―車の轅を花の長枝にいひかけた。

○よろぼひさぞらひ―酒に醉つてよろめきさまよひ。

○天も花にや醉へる―和漢朗詠集菅原道眞の句に「春之暮月、月之三朝、天醉于花、桃李盛也」この句「田村」にも見ゆ。

○かげろふ人―影のやうに薄く消えて行く人。

えつつ失せにけり

と常座にて花を捨て、靜かに中入。

【間】　狂言所の者、着附段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。この邊に住居する者にて候。今日は大原山の邊へ出で、心を慰めばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御方の御座候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「これは下京邊に住居する者にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なか／＼この邊の者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ね申したき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。古この所に於て。在原業平の御事につき樣々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。初めて御目にかかり御尋ねなされ候ものを。何とも存ぜぬと申すもいかがにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「まづこの大原野に於て小鹽の明神と申すは。本地春日の大明神にて御座候。その子細は。閑院の左大臣冬嗣は。藤原氏にて御座候間。春日大明神を御信仰にて候へども。南都までは程遠きとて。勅を請けて嘉祥三年正月三日に。この所へ御勸請あり。即ち藤原氏の御祖の神と崇め申し候。四月卯の日十一月子の日御神事の御座候。又人皇五十五代文德天皇の御宇。仁壽元年辛未の年。二月に始めて臨時の祭を執行申し候。又二條の后も藤原氏にて御座候によつて。この大原野へ行啓の時。業

【間】

○本地—本體。常には垂跡化現せられた神佛の本體をいふが、こゝでは神體、本社の意。

○春日の明神—奈良にあり、その祭神四座の一、天兒屋根命は藤原氏の祖先神、〔采女〕〔春日龍神〕參照。

○閑院の左大臣冬嗣—神祇正宗に「人皇五十四代仁明帝嘉祥三年、爲二王城守護一、閑院左府冬嗣申二沙汰一、勸二請之一」又云ふ「和州春日社遠二帝闕一、后妃夫人有二參詣之便一故、移二于大原野一」

○御婢衣—女官の衣であらう。他の人々には女官の服を賜はつたが、業平には后の御衣を賜はつたのである。

【六】○和光の影に業平の—業平を神佛の如くに考へ、その徳光を和らげてこの世に影向するといつたのである。光の影、影になり、業平といひかけた。

平も御供なりしが。この所にて供奉の人々には。御婢衣を參らせられしに。何と思し召し候やらん。業平へは御衣を參らせられたると申す。その時業平の御歌に。大原や小鹽の山も今日こそは。神代の事も思ひ出づらめと。かやうに詠み給ふ。下心は。后未だ上童にて御座ありし時。業平へ御心を通はし給ふによりて。その昔をいはんとて。神代の事と詠み給ひたると申す。又在原の業平を。大原の明神に祝ひたるとも承り候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前に老人一人。花の枝をかざし來られ候程に。卽ち言葉をかはして候へば。色々古歌など詠まれ。業平の御事を懇に語り。何とやらん由ありげにて。そのまゝ姿を見失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。さては疑ふ所もなき當社明神現れ給ひ。御言葉をかはし給ひたると存じ候。さやうに候はば。暫くこの所に御座候て。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。花の木陰に候ひて。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「御用の事候はば重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【六】
ワキ「不思議や今の老人の。ただ人ならず見えつるが。さては小鹽の神代の古跡。和光の影に業平の。花に映じて衆生濟度の。『姿現し給ぶぞと

【六】　後段

畧、實に不思議なことだ。どうも今の老人は普通の人ではないと思つたが、さては小鹽の昔話の主人公業平が本地佛菩薩の姿を代へ、花に紛れて衆生を救はんが爲

○たまさか─稀なこと。露の玉を承け、玉の縁で光と續けた。
○妙なる法─花心の花を承け、妙法蓮華經に通はせた。

【七】

○月やあらぬ春や昔の春ならぬ─古今集在原業平の歌下句「わが身一つはもとの身にして」
○やごとなき─貴い。車の輪といひかけた。

ワキ ワキヅレ 上歌(待謠)二 思ひの露もたまさかの。思ひの露もたまさかの。光を見るも花心。妙なる法の道のべに。なほも奇特を待ち居たりなほも奇特を待ち居たり

【七】

後見、花車を脇正面に出す。
一聲の囃子にて、後ジテ在原業平、面中將・初冠・金紗鉢巻・襟白・着附赤地縫箔・單狩衣・指貫・込大口・腰帶・扇・眞太刀の裝束にて出で、車の内に入り、

後ジテ 一聲三 月やあらぬ。春や昔の春ならぬ。わが身ぞもとの。身も知らじ

ワキ二 不思議やな今までは。立つとも知らぬ花見車の。やごとなき人の御有樣。これは如何なる事やらん

シテ二 げにや及ばぬ雲の上。花の姿はよも知らじ。ありし神代の物語二 姿現すばかりなり

ワキ二 あらありがたの御事や。他生の緣は朽ちも

に、姿をお現しになつたのだ」
から思つて、花見男にこの珍しい樣を見ることの出來たのも、法華經の功德によるものと、御經を讀誦して、なほも奇蹟の現れるのを待つてゐた。

【七】

後ジテ在原業平登場。

業平「月も春も昔ながらの姿であるが、自分だけは昔に變る姿となつてしまつた」
男「これは不思議だ、今まではこんな花見車のあつたことにも氣がつかなかつたのに、この花見車に貴い方のお見えになるのは、どうした事でせう」
業平「いかにも、そなた達の思ひも及ばぬ貴人の姿は、よもや誰だか分るまい。先程話をした昔話の主人が姿を現して出たのだ」
男「これは實にありがたいことです。前世

○今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし―古今集在原業平の歌。下句―消えずはありとも花と見ましや」
○皆白雲の上人―花も雪も皆白雲の如くに見えるを雲の上人（殿上人）にいひかけた。
○櫻かざしの―新古今集山部赤人の歌―百敷の大宮人は暇あれや櫻かざして今日も暮らしつ」に據つた。
【八】
○春宵一刻値千金―蘇東坡の詩句―春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰」を引いた。
○思ふことといはでただにや止みぬべきわれに等しき人しなければ―伊勢物語の歌、但原歌第四句―われと等しき」
○思ひ内より―詩經に―思有二於內一、必形二於外一

せで
シテ『契りし人も樣々に
ワキ『思ひぞ出づる
シテ『花も今
地上歌『今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし。消えずはありと。花と見ましやと詠ぜしに。今はさながら花も雪も。皆白雲の上人の櫻。かざしの袖ふれて花見車、暮るより月の、花よ待たうよ
「花見車暮るより」と車を出で大小前へ行く。後見車を引く。
【八】
地クリ『それ春宵一刻値千金。花に清香月に陰。惜しまるべきはたゞこの時なり
シテサシ『思ふことといはでたゞにや止みぬべき
地『われに等しき人しなければ。とは思へども人知れぬ。心の色はおのづから思ひ內より言の葉

からの宿緣があつて、お目にかゝることが出來るのでございませう」
業平「宿緣といへば、自分が緣あつて契りを結んだ人の事が、あれやこれやと思ひ出されるのだが、それはさて置き、今この花を見て思ひ出すのは、――
『今日來ずは明日は雪とぞ降りなまし、消えずはありと花と見ましや』
（今日花見に來なかつたならば、花は[illegible]やうに散つて[illegible]だらう。[illegible]花は[illegible]消えないにしても[illegible]、散つた後のは、花として面白く眺めることは出來まい）
と詠んだが、今は丁度その通りの花盛りで、雪か雲かと見紛ふ景色だ。さあこの殿上人も花見車を降りて、月の出るのを待ち、月夜の花見をしよう」
【八】
業平「春の宵は實によいもので、花にはよい匂ひがあり、月には清い影があり、實に一刻千金の値打がある。このよい折は寸時をも惜しんで樂しみたいものだ。私は歌にも――
『思ふことといはでたゞにや止みぬべき、われに等しき人しなければ』
（自分と全く同じ考への人はないのだから、自分の思ふ事をいつたところで、誰も分つてはくれない。たゞ默つてゐよう）
と詠んで、實際さう思つてゐるのではあるが、人知れず心の內に思ふ事を忍びあ

○春日野の若紫のすり衣（伊勢物語の歌、下句「しのぶの亂れ限り知られず」）若紫は紫草の若葉。すり衣はその若葉の汁で模樣を摺つた衣。しのぶは岩代國信夫郡にあり、しのぶ摺の名産地、亂れは摺り方の亂れと心の亂れとを兼ねていふ。上句から「しのぶの」までは亂れの序。
○陸奧の忍ぶもぢずり誰ゆゑに亂れんと思ふわれならなくに（古今集源融の歌、但し原歌の第三句「誰ゆゑに」）伊勢物語にも前揭の歌の次に出てゐるので、この二つを男女贈答歌の如くに取做した。
○紫の色に染み―戀に憧れる意。前の歌の若紫を承けた。
○唐衣着つつ馴れにし妻しあれば遙々來ぬる旅をしぞ思ふ（古今集、在原業平の歌、伊勢物語にも）
○いさ白雲の―以下いさ知らず、白雲、雲のくだり、下り月、月の都、都の東山、東の涯、はてしなと順次いひかけた。
○くだり月―十五日以後の月。

の。露しなじなに洩れけるぞや

これより謡に合せて舞ふ。（舞クセ）

地クセ『春日野の。若紫のすり衣。しのぶの亂れ。限り知らずもと詠ぜしに。陸奧の忍ぶもぢずり誰ゆゑ亂れんと思ふ。われならなくにと。詠みしも紫の色に染み香にめでしなり。又は唐衣。着つつ馴れにし妻しあれば。遙々來ぬる、旅をしぞ思ふ心の奧までは。いさ白雲のくだり月の都なれや東山。これもまた東のはてしなの人の心や

シテ『武藏野は。今日はな燒きそ若草の

地『つまもこもれりわれもまたこもる心は大原や。小鹽に續く通ひ路の。行方は同じ戀草の。忘れめや今も名は昔男ぞと人もいふ

と舞ひ上げて大小前に立ち、

へず、色々歌に詠んだことである。例へば――

『春日野の若紫のすり衣、しのぶの亂れ限り知らずも』
（限りなく戀しい思ひをしてゐます）

と詠んで來たのに對して、

『陸奧の忍ぶもぢずり誰ゆゑに、亂れんと思ふわれならなくに』
（私は外の人の爲には少しも思ひ亂れはいたしません、ただあなたの爲にばかり心が亂れて居ります）

と詠んだのも、戀心が現れて歌となつたのだ。又例へば、

『唐衣着つゝ馴れにし妻しあれば、遙々來ぬる旅をしぞ思ふ』
（馴れ親しんだ妻を京に殘して來たので、遠い旅に出て心細く思ふ）

と詠んだのも、心の底の思ひが自然歌に現れたのだ。いや人の心といふものは、どこまで思ひ込んでも、果てしのないものだ。――

『武藏野は今日はな燒きそ若草の、つまもこもれりわれもこもれり』
（この武藏野には、妻も籠つてゐるのだから、今日は草を燒いてくれるな）

とも詠まれたが、人の思ひは色々あるが、結局落ち行く先は戀心で、昔戀に亂れたことが今だに忘れられず、人も自分のことを昔男といつていひ傳へてゐるのだ」

【九】シテ『昔かな

〔序舞〕

シテワカ『昔かな。花も所も。月も春

引續き次の謠に合せて舞ふ。

地『ありし御幸を

シテ『花も忘れじ

地『花も忘れぬ

シテ『心や小鹽の

地『山風吹き亂れ、散らせや散らせ。散り迷ふ木のもとながら。まどろめば。櫻に結べる夢か現かよひと定めよ。夢か現かよひと定めよ。寢てか覺めてか。春の夜の月。曙の花にや。殘るらん

と常座にて留拍子を踏む。

【九】

〔序舞〕

業平、昔の事を思つて舞ふ。

業平「思ひ出の深い花も所も、月も春も、遠い昔の事となつた。しかし、あの二條后が小鹽山へお成りになつた時のことは、いつまでも〳〵忘れられないのだ。それにつれて、花も忘れられないのだ、いや何もかも忘れられないのだ」

花見男達が、山風の吹くにつれて、櫻花の散り亂れる木の下蔭に寢てゐると、このやうな業平の姿を、夢か現か、寢てゐて見たのか、覺めた眼に見たのか、たゞ朧にこのやうな姿を見てゐたと思ふうちに、その姿は消えてしまつて、春の夜の月は白んで行き、たゞ明方の空に櫻花が匂つてゐるのであつた。

○武藏野は今日はな焼きそ若草の―下句「つまもこもれりわれもこもれり」伊勢物語には二條后、古今集には初句―春日野は―讀人知らずとして記す。

○大原や―思ふ心の多い（深い）を大原にいひかけた。

○戀草―戀しく思ふ種。忘草にかけて忘れめやと續けた。

【九】

○夢か現か―古今集業平と女の贈答歌、女―君やこしわれや行きけん思ほえず夢か現か寢てかさめてか」。業平―かきくらす心の闇にまどひにき夢現とは世人定めよ―を引いて、ワキが夢現に業平を見た由をいふ。

〔考異〕

諸流（五流）

著しい異同はない。

古謡本　（光悦本）

【一】ワキ「かやうに候……住居す（光仕）る者にて候……

【三】ワキ「不思議やな（光さても大原野の花）貴賤群集のその中に……さも花やかに見え給ふは（光たるよそほひ、心ありけるけしき哉）そもいづくより……ワキ「あら面白の……腹立て（光ち）給はじいかさま（光殊に）故ある……

【四】シテ「事あたらしき問ひ事かなこの大原野の（光さん候いにしへこの所に）行幸に（光のありし時）在原の業平供奉し給ひし時（光か）……妹背の道は淺からぬ（光す）

【六】ワキ「不思議や今の老人のただ人ならず見えつるが（光ナシ）さては小鹽の……

姨捨(をばすて)

觀(寶 剛 喜)

解說

【能柄】 三番目 複式夢幻能

【人物】 **ワキ** 都の男、**ワキツレ** 都の男(二人)、**前シテ** 里女(老女の靈)、**狂言** 山下の者、**後シテ** 老女

【所】 信濃國 姨捨山

【時】 八月十五夜

【異稱】 金剛・喜多の二流では〔伯母棄〕又は〔伯母捨〕と書く。

【作者】 能本作者註文、二百十番謡目錄ともに世阿彌の作とす。世子六十以後申樂談儀後人加筆の項に永正十一年十月廿八日南都兩喜びの能に本曲を演じたこと、言經卿記文祿四年四月一日の條に註釋のことが見えてゐる。

【梗概】 都の男が中秋の名月を眺めようと志して、遙々信濃國に下り姨捨山に登ると、一人の里女が現れ出て言葉をかけ、「わが心慰めかねつ更科や」と歌を詠んだ老女の舊跡はこゝであると敎へ、都の人であるならば、今宵の月と共に再び現れて夜遊を慰めようといひ、自分が昔

この山に捨てられた老女であると仄かして消え去る。やがて月が出ると、果して白衣の老女が現れて、月に關係のある傳說を委しく語り、月下に舞の袂を飜したが、次第に曉方になると、旅人は歸り去つて、老女一人淋しく山に殘された。

【出典】姨捨の傳說は、もと古今集雜上に、題知らず、讀人知らずとして、

わが心慰めかねつ更科や、姨捨山に照る月を見て

とあるのを、大和物語に潤色して、

信濃國更科といふ所に男住みけり。若き時に親は死にければ、伯母なん親の如くに若くよりあひ添ひてあるに、この妻の心いと心憂き事多くて、この姑の老いかゞまり居たるを常に憎みつゝ、男にもこの伯母のみ心のさがなく惡しき事を言ひ聞かせければ、昔の如くにもあらず、疎(おろか)なる事多く、この伯母のためになりゆきけり。この伯母いといたう老いて二重にて居たり。これを猶この嫁所せがりて、今まで死なぬ事と思ひて、よからぬ事をいひつゝ「もていまして、深き山に捨てたうびよ」とのみ責めければ、責められ侘びて、さしてんと思ひなり、月のいと明き夜「嫗(おうな)どもいざ給へ、寺に尊き業するなる見せ奉らん」と言ひければ、限りなく喜びて負はれにけり。高き山の麓に住みければ、その山に遥々と入りて、高き山の嶺の下り來べくもあらぬに置きて逃げて來ぬ。「やゝ」といへど答(いら)へもせで、家に來て思ひ居るに、言ひ腹立ちてかくしつれど、年比親のごと養ひつゝあひ添ひにければ、いと悲しく覺えけり。この山の峽より月もいと限りなく明くて出でたるを眺めて、夜一夜いも寢られず悲しくおぼえければ、かく詠みたりける。

わが心慰めかねつさらしなや、姨捨山に照る月を見て

と詠みてなん、又往きて迎へもて來にける。それより後なん姨捨山といひける。

と記してゐるのが最初で、今昔物語卷三十「信濃國姨母弃山語」にも同樣の事を記してゐる。しかしこの二書では、甥が歌を詠んで伯母を再び連れ歸ることとなつてゐるが、俊頼の無名抄には、

信濃國更科の郡に姨捨山といふあり。昔人の姪を子にして年來養ひけるが、母のをば年老いてむつかしかりければ、八月十五夜の月の隈なかりけるに、この母をば山にすかし登せて歸りけり。唯一人山の頂にゐて、夜もすがら月を見てよみける歌なり。

と記してゐる。即ち本曲はこれを參酌したものと思はれる。

【概評】八月十五夜、明月の皎々と照り渡つた中で、山深く捨てられた老女が白衣をまとうて、靜かな舞を舞ふのである。殆ど愚痴は洩ら

してゐない、たゞ世の中をあきらめ悟つて佛說を述べるだけである、まことにさび／＼とした冷えたる曲である、世阿彌の所謂幽玄の極致はこのあたりにあるのであらうと思はれる曲である。

【一】

次第の囃子にて、ワキ都の男、着附段熨斗目・素袍上下・腰帯・扇・小刀の裝束にて笠を被り、ワキヅレ都の男二人、ワキと同様の裝束(着附は無地熨斗目)にて舞臺に入り向合ひて、

ワキ・ワキヅレ 次第「月の名近き秋なれや。月の名近き秋なれや。姨捨山を尋ねん

地取にワキは笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「かやうに候者は。都方に住居仕る者にて候。われ未だ更科の月を見ず候程に。この秋思ひ立ち姨捨山へと急ぎ候

といひて笠を被りワキヅレと向合ひ、

ワキ・ワキヅレ 道行「この程の。暫し旅居の假枕。暫し旅居の假枕。又立ち出づる中宿の。明かし暮らして行く程に。ここぞ名に負ふ更科や。姨捨山に着きにけり姨捨山に着きにけり

【一】

○月の名近き―名月八月十五夜に近いとの意。
○姨捨山―信濃國更級郡にある山。但しその山の所在については異說があり、鹽崎村の小長谷山の轉訛であらうともいふ。今昔物語には「姨捨山其前は冠山と云ひける。山の形冠の巾子に似たり」といふ。
○更科の月―姨捨山の月。更科、或は更級とも書く。
○中宿―旅の途中の宿。

【一】

前段

舞臺は初め京都で、ワキ都の男、ワキヅレ同じく都の男を伴つて登場。

男「おゝはや八月十五夜に近い秋となつた、姨捨山へ見物に行かう」

と次第を謡つて旅の目的を述べ、

男「私は都の方に住んでゐる者ですが、私はまだ更科姨捨山の月を見たことがないので、この秋見物に姨捨山へ行かうと思ふのです」

と見物人に自己紹介をし、

男「都を出て、この間中旅の宿に暫く假寢の夢を結んでは、またその宿を出發し、かうして道中の宿を明かし暮らして行くうちに、名高い更科の姨捨山に着いた」

と旅の途を進んで行くうち、舞臺は信濃國姨捨山に移る。

【三】

――ここぞ名に負ふ――とワキは正面に向きて先へ出で、またもとに帰りて姨捨山に着きたる心、道行済みてワキ笠を脱ぎて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや姨捨山に着きて候

ワキヅレ「尤もにて候

といひて、ワキヅレは脇座の次に行きて坐し、ワキは舞臺の眞中に出で、

ワキ「さてもわれ姨捨山に來て見れば。嶺平らかにして萬里の空も隔てなく。千里に隈なき月の夜。さこそと思ひやられて候。いかさまこの所に休らひ。今宵の月を眺めばやと思ひ候

といひて脇座へ行きかゝる。

【三】

シテ里女、面深井・鬘・鬘帯・襟白・着附摺箔・無色唐織・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ(呼掛)「なうなうあれなる旅人は何事を仰せ候ぞ

ワキ脇座に立ちて、

ワキ「さん候これは都の者にて候が。始めてこの

都の男はあたりの景色を眺めて、

男「私がかうして姨捨山へ來て見ると、成程嶺が平らかで、涯もない空には一點の雲もない。この空に遥か遠くまで澄み渡つた美しい月夜の景色、さぞかし美しいことでござらうと思ひやられる。どうれ、こゝに休んで、今宵の月を眺めませう」

と月を眺める態。

【三】

シテ老女の亡靈里女の姿を裝うて登場。

女「もうしもし、そこの旅の方は何をいつていらつしやるのでございます」

男「はい、私は都の者ですが、始めてこゝ

○秋の半ば――中秋、八月十五夜。

○面白からんずらん――面白くあるであらう。

○在所――姨を捨てた所。

○わが心慰めかねつ更科や姨捨山に照る月を見て――古今集雜上に題知らず讀人知らずとして出てゐる歌。ここには姨の詠歌として出す。解説參照。

○桂の木――月の緣で出した

所に來りて候。さてさて御身はいづくに住む人ぞ

シテ「これはこの更科の里に住む者にて候。今日は名に負ふ秋の半ば。暮るるを急ぐ月の名の。殊に照り添ふ天の原。隈なき四方の氣色かな。いかに今宵の月の面白からんずらん

ワキ「さては更科の人にてましますかや。さてさて古姨捨の。在所はいづくの程にて候ぞ

シテこの間に舞臺に入りて常座に立ち、

シテ「姨捨山のなき跡と。問はせ給ふは心得ぬ。わが心慰めかねつ更科や。姨捨山に照る月を見てと。詠ぜし人の跡ならば。これに小高き桂の木の。蔭こそ昔の姨捨の。その亡き跡にて候へとよ

ワキ「さてはこの木の蔭にして。捨て置かれにし

へ參つたのです。して、あなたは何處にお住みになる方なのです」

女「私はこの更科の里に住んでゐるものでございます。今日は名高い中秋で、日も早く暮れて、十五夜の名月が照り輝き、空一面晴れ渡つて雲一つない、何といふ美しい景色でせう。ほんとに今宵の月はどんなに面白いことでございませう」

男「さては、あなたはこの更科の人だつたのですか。それではお伺ひしますが、昔姨を捨てた所はどの邊ですか」

女「姨捨山の姨を捨てた跡とお尋ねになるのは、餘り不躾な仰せのやうに思はれますが、――

『わが心慰めかねつ更科や、姨捨山に照る月を見て』

（この姨捨山に照る月を見てゐると、……私の心を慰めることが出來ない）

といふ歌を詠んだ人の亡き跡ならば、この小高い桂の木の蔭がそれでございます。それが昔捨てられた姨の亡くなつた跡でございますよ」

男「さてはこの木の蔭が捨て置かれた人

○土中に埋れ草―身を土中に埋むを埋草に、草を刈るを、假の世にいひかけた。
○秋の心―秋の寂しい感じ
○緑も殘りて―松や桂などは常磐樹で緑の色を殘してゐるとの意。
○一重山―姨捨山十三景の一で、地藏峠をいふと。一重を紅葉の染め方の薄い意にいひかけ、薄霧を呼び出した。
○凄しく―淋しくもの凄いこと。
○雲つきて―雲がなく空が晴れ渡つて。
【三】

人の跡の
シテ「そのまま土中に埋れ草。假なる世とて今ははや
ワキ「昔語になりし人の、猶執心や遺りけん
シテ『亡き跡までも何とやらん
ワキ『物すさましきこの原の
シテ『風も身にしむ
ワキ『秋の心
地上歌『今とても。慰めかねつ更科や。慰めかねつ更科や。姨捨山の夕暮に。松も桂もまじる木の。緑も殘りて秋の葉のはや色づくか一重山。薄霧も立ち渡り。風凄しく雲つきて寂しき山の、氣色かな寂しき山の氣色かな
【三】
シテ「旅人はいづくより來り給ふぞ
ワキ「されば以前も申す如く。都の者にて候が。更

の亡き跡ですか」
女「姨はそのまゝ土中に埋められて、人生無常、今ははや昔語となつてしまつたのでございます」
男「それでもさぞ今もなほ執心が殘つてゐることでせう」
女「さうでございます、死んだ後まで、この邊は何となくもの凄くて、身に泌む秋風までが淋しい感じを誘ふのでございます。そして、今になつても心を慰めることも出來ず、この姨捨山の夕暮の景色は、松や桂などの木は緑の色を殘してゐますが、その外の木は秋葉になつて、はや少しづつ色づいて來まして、薄霧は一面にたちこめ、風はもの凄く吹き渡り、そして空には雲とてはなく、ほんとに寂しいことでございます」
【三】
女「旅の方はどちらからお出でになつたのでございます」
男「先程も申しましたやうに、私は都の者

科の月を承り及び。始めてこの所に來りて候よ

シテ「さては都の人にてましますかや。さあらばわらはも月とともに。現れ出でて旅人の。夜遊を慰め申すべし

ワキ「そもや夜遊を慰めんとは。御身は如何なる人やらん

シテ「まことはわれは更科の者

ワキ『さて今は又いづ方に

シテ『住みかといはんはこの山の

ワキ『名にし負ひたる

シテ『姨捨の

地上歌『それといはんも恥かしや（と面伏せて）それといはんも恥かしや。その古も捨てられて。唯ひとりこの山に（と少し出で）すむ月の名の秋毎に執

ですが、更科の月が面白いといふことを聞いて、始めてこゝへ來たのです」

女「それでは都の方でいらつしやるのですか。それでは、私もこの月の出る頃にこゝへ出て參つて、旅の方の夜のお遊びをお慰めしませう」

男「何と仰しやる、夜の遊びを慰めようとは、一體あなたはどういふ方なのです」

女「私はほんとは更科の者で……」

男「して、今は又何處にお住みで……」

女「住みかと申せば、この山の、あの名高い姨捨の、その姨で……と申すのもお恥かしい次第でございます。昔こゝに捨てられて、たゞ獨りこの山に住みましたものの、中秋十五夜の月毎に昔のことが思はれて、執心が離れません。その迷ひを晴らしたいと思つて、今宵こゝへ出て來たのでございます」

○夜遊―夜の歌舞。

○名にし負ひたる―山の名となつてゐる。

○それといはんも―姨と名乘るのも。

○すむ月の―住むを月の澄むにいひかけた。

心の闇を晴らさんと。今宵現れ出でたりと。夕蔭の木のもとにかき消すやうに、失せにけりかき消すやうに失せにけり

といふや、夕暮の木陰にかき消すやうに去つてしまつた。

前シテ中入する態。一場。

○執心の闇―この世に殘す心の迷ひ。月の縁で闇を晴らすといつた。
○夕蔭の―夕暮の暗くなつた物蔭。いふを夕といひかけた。

【間】

と右へ廻りて常座にて開き、靜かに中入。

狂言山下の者、着附段熨斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。この山の麓に住居する者にて候。今夜は明月なれば山へ登り。月を眺めばやと存じ候。（ワキを見て）いやこれに見馴れぬ御方の御座候が。いづくよりいづ方へ御通り候へば。月に眺め入りて御入り候ぞ

ワキ「これは都方の者にて候。さて御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「さやうに候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。如何やうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。この更科の月を賞翫の事。又姨捨山の子細。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひも寄らぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊に住居仕り候へども。左樣の事委しくは存ぜず候さりながら。始めて御目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存ぜぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に姨捨山と申す子細は。古この在所に和田の彦長と申す者の御座候ひしが。稚き時に兩

○合點せず―承知しない、聞き入れない。
○數年の恩―多年の恩。

親に後れ。伯母の養育にて人と成り候が。妻を語らひてよりこの伯母を憎み。それに色々讒言しけれども。彦長更に合點せず候。然れども餘りに強くいはれ。數年の恩を忘れ。今の執緣にひかれ。或時伯母に申すやう。この山の邊(あたり)に尊き御佛の坐して御入り候。いざや供して拜せんとて。この山に連れ來り。とある所に捨て置き。山を見れば月は晴れて隈なく候間。迎へに行かんと存じ候へども。女の心さがしく候間。思ひながら行き過ぐる程に。伯母は空しくなり執心石となり申して候。その後彦長尋ね來り。これを見て恐ろしく思ひ。出家仕りたると申す。それよりこの山を伯母捨山と申し候。卽ち麓の在所をも伯母捨の在所とも申し候。その昔は更科山と申したるげに候。まづ我等の承りたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ　近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。最前も申し如く。これは都方の者にて候が。この更科の事を承り及び。月を見んとてわざと來りて候。最前月待つ頃に。いづくともなく老女一人來られ。伯母捨山の古歌などを詠まれ。月の夜遊を慰めんと申され候程に。いかなる人ぞと尋ねて候へば。古は更科の者。今はこの姨捨山に住む者なるが。執心の闇を晴らさん爲。今宵現れ出でたりといひもあへず。これなる植木の蔭にて姿を失うて候よ

狂言「これは奇特なる事を仰せ候ものかな。さては疑ふ所もなき伯母の執心現れ出で。御言葉を交はされたると存じ候。左樣に候はば暫くこの所に御座候て。ありがたき御經をも御讀誦なされ。かの伯母の跡を懇に御弔ひありて。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「我等も左樣に存じ候間。月をも眺め心を澄まし。重ねて奇特を見うずるにて候

狂言「又御用の事候はば。重ねて仰せ候へ

ワキ「賴み候べし

狂言「心得申して候

【四】○いづくの秋も隔てなき―秋は何處でも變りなく。○夜もすがら―「詩などを吟ぜん」といふ句が省かれてゐるのである。○三五夜中の新月の色―和漢朗詠集白樂天の詩句―三五夜中新月色、二千里外故人心―を引いた。三五夜は八月十五夜。新月は今空に出初めた月。故人は友人。

【五】○明けば又秋の半ばも過ぎぬべし　新勅撰集藤原定家の歌。下句―かたぶく月の惜しきのみかは―○名を望月の―類ひなき名を持つを望月にいひかけた。望月は十五夜の月。宗砌連歌の發句に―たぐひなき名を望月の今宵かな―○見しだにも覺えぬほど―これまでこれほど晴れ渡つた月は見たことがないと思はれるほど。○あまりに堪へぬ―たまらないほど面白く思はれる。○昔とだにも―昔捨てられた夜と同じ月とは思はれない。○白衣の女人―月宮に白衣の天女がゐるとの傳說によ

といひて狂言は引く。

【四】ワキ・ワキヅレ上歌（待謠）「夕陰過ぐる月影の、夕陰過ぐる月影の、はや出でそめて面白や萬里の空も隈なくて。いづくの秋も隔てなき、心も澄みて夜もすがら。三五夜中の新月の色。二千里の外の故人の心

【五】一聲の囃子にて、後ジテ老女、面姥・姥髪・鬘帶・着附摺箔・白地長絹・白大口・腰帶・扇の裝束にて舞臺に入り常座に立ち、

後ジテ「あら面白の折からやな。あら面白の折からやな。明けば又秋の半ばも過ぎぬべし。今宵の月の惜しきのみかは。さなきだに秋待ちかねて類ひなき、名を望月の見しだにも。覺えぬほどに隈もなき姨捨山の秋の月。あまりに堪へぬ心とや。昔とだにも思はぬぞや

ワキ「不思議やなはや更け過ぐる月の夜に。白衣の女人現れ給ふは。夢か現かおぼつかな

【四】後段

男「夕暮時も過ぎて、はや月が出初めた、あゝ面白い、見渡す限り空には少しの雲もなく、中秋の名月はどこまでも澄み渡つて、ほんとに自分の心までもすつきりする、一夜中詩でも吟じて樂しまう、『三五夜中新月の色、二千里の外の故人の心』」

（八月十五夜の、今出初めた月の面白いこと、この澄み渡つた月を見てゐると、二千里も距つた遠くにゐる友達の事も懷しく思ひ出される）と詩を吟じる。

【五】（後ジテ老女、夢に現れる心で登場し）

姨「あゝほんとに面白い時だ。――『明けば又秋の半ばも過ぎぬべし、今宵の月の惜しきのみかは』

（この一夜が明けたら、秋も半分過ぎてしまふのだから、今宵の月を徒らに見過すことが一層惜しい氣持がする）

と古歌に詠まれたやうに、いつだつて、秋は待ち遠しく思はれるのに、殊に今宵は、類ひのない中秋の名月で、これまで見たことがないと思はれるほど晴れ渡つた、この姨捨山の月の面白さ、何ともいひやうのないたまらない氣持だ。ほんとに昔見たと同じ月だとは思はれない」

男「これは不思議だ、はや時も更けて來たこの月の夜に、白衣を着た女性がお見えになるが、これは自分が夢を見てゐるのだらうか、或は事實なのだらうか、何だかわけが分らない」

シテ「夢とはなどや夕暮に。現れ出でし老の姿。恥かしながら來りたり

ワキ「何をかつつみ給ふらん。もとより所も姨捨の

シテ「山は老女が住み所の

ワキ「昔に歸る秋の夜の

シテ「月の友人まどゐして

ワキ「草を敷き

シテ「花に起き臥す袖の露の

シテ ワキ「さも色々の夜遊の人に。いつ馴れ初めてうつつなや

地上歌「盛りふけたる女郎花の。盛りふけたる女郎花の。草衣しほたれて（と正面へ出で）。昔だに捨てられし程の身を知らで。又姨捨の山に出でて（向ふを見やりて）面を更科の。月に見ゆるも恥かしや（と

つて、白衣の語を出した。〔羽衣〕參照。

○夕暮に—夢とはなどやいふを夕といひかけた。

○何をかつつみ給ふらん—何の御遠慮がいりませう。

○昔に歸る—昔のことが眼の前に思ひ浮べられる。

○月の友人—月見の友達。

○まどゐ—一座に居竝ぶこと。

○花に起き臥す—秋草の花の上に起きたり臥したりして遊ぶまゝに、袖が草の露で濡れてゐる意。起きを露の置くにいひかけた。

○色々の夜遊の人—露を置く草に色々あるとの意を夜遊の人が色々あるとの意にいひかけた。

○いつ馴れ初めて—いつの間に親しくなつたか、夢のやうである。

○盛りふけたる女郎花の—花の盛りの過ぎた女郎花を女盛りの過ぎた老女に喩へていふ。

○草衣—女郎花をうけていふ。

○しほたれて—衣の萎えしをれること。

○面を更科の—顏を人にさ

姨「どうして夢だなどと仰しやるのです、夕暮お目にかゝつた私が、お恥かしながら老の姿を現して、出て參つたのでございます」

男「あゝさうですか、それたらば恥かしいなどと御遠慮に及びません、この所は勿論名も姨捨と呼ばれた、あなたの住家で……」

姨「いかにもこの山は姨の住家でございますが……」

男「秋の夜の月を見ると、昔のことが偲ばれます」

姨「かうして月見の方と御一緒になつて、草を褥代りに敷いて、草花の上に起きたり寢たりして草の露に濡れながら、面白く御一緒に月夜を過す……まあいつの間に、このやうに月見の方々とお親しくなつたのか、ほんとに夢のやうでございます」

地「まあ私のやうな、盛りの過ぎた女郎花のやうな婆が、しほたれた着物を着て、昔さへ捨てられた身の程を忘れて、又してもこの姨捨山に出て來て、顏をさらし、月の光で人に見られるのは、ほんとに恥かしいことでございます。……いやいや

らすを更科にいひかけた。
○月に見ゆる―月影で見られる。
○よしや―氣を取り直す意の發語。
○思ひ草―女郎花、露草などの異名に用ゐられる語。「思はじや」の思の音を重ねた。
○月にそみて―月に心を染めて。

【六】
○興にひかれて來り―昔の王子猷が雪晴れて月清き夜小舟に乘つて戴安道を訪ねたが、その門まで來て引返したので、人がその故を尋ねると、「乘レ興而來、興盡而反、何必見二安道一耶」と答へたといふ故事に據る。
○一輪滿てる清光の影―賈島の詩「團々離二海嶠一、冉々出二雲衢一、此夜一輪滿、清光何處無」を引いた。一輪は月、海嶠は海邊の山。
○諸佛の御誓ひ―三世の諸佛が衆生を濟度利益する誓願。
○超世の悲願―世に勝れた慈悲の誓願。阿彌陀佛の誓願をいふ。無量壽經重誓の偈に「我建二超世願一」
○彌陀光明―阿彌陀經に「彼佛光明無量照二十方國一、

面を伏せ」よしや何事も夢の世の。なかなかいはじ思はじや（と常座に立ち）思ひ草花にめで月にそみて遊ばん（と上を見上ぐ）

【六】
シテ次のクリに大小前へ行き、

地クリ「げにや興にひかれて來り。興盡きて歸りしも。今の折かと知られたる。今宵の空の氣色かな

シテサシ「然るに月の名所。いづくはあれど更科や

地「姨捨山の曇りなき。一輪滿てる清光の影。團團として海嶠を離る

シテ『然れば諸佛の御誓ひ

地「いづれ勝劣なけれども超世の悲願普き影。彌陀光明に。しくはなし

シテ次の詞に合せて舞ふ（舞クセ）

地クセ「さる程に。三光西に行くことは。衆生をして西方に。勸め入れんがためとかや。月はかの

構はない、何れこの世は夢の世だ、何事もいはず思はない方が、却つてい〻、ただ花をめで月を眺めて遊びませう」

【六】
姨「ほんとに、昔の人が月夜の興に乘じて友を訪ねに出かけ、またその月夜の興にひかされるまゝ、その友には會はないで歸つたといふ話がありますが、それはきつと今宵のやうな景色であつたことでございませう。
それはともあれ、月の名所はあちらこちら幾つもありますが、この更科の姨捨山の月の面白さ、曇りのない淸らかな月が丸々として山を離れて上つて行く面白さ。さう申せば、佛樣の御慈悲は、いづれ勝り劣りはありませんけれど、世に勝れた慈悲を與へようと御誓願遊ばされた阿彌陀如來の光明に上越すものはございません。それで、日月星の三つの光が西の空へ進んで行くのも、衆生に西方淨土へ行くやうお勸めになる爲だとか伺つて居ります。殊に月——勢至菩薩は、この阿彌陀如來の右の脇士で、有緣の衆生をお導

無ㇾ所ニ障礙一、是故號ニ阿彌陀一」
○三光　日・月・星の三をいふ。白虎通に「天有ニ三光一、日月星」
○衆生をして　舊本「衆生應しに」とあるは「を」を長く謠ふ爲に文字を誤つたのであらう。今改訂本に從ふ。
○月はかの如來の右の脇士として―阿彌陀如來の右の脇士(本尊の脇に立つ大士)は勢至菩薩で、觀經に「觀世音・大勢至是二大士侍ニ立左右一」また「想ニ一大勢至菩薩像坐ニ右華座一」とある。月を勢主菩薩とすることは、天地本紀經に「阿彌陀佛遣ニ應聲吉祥二菩薩一爲ニ日月一、應聲是觀音、吉祥是勢主」とあり、「羽衣」にも「南無歸命月天子本地大勢至」といふ。
○有緣を殊に導き―有緣は有緣の衆生で、佛と因緣のある者をいふ。觀經に「擧身光明照ニ十方國一作ニ紫金色一、有緣衆生皆悉得ㇾ見」
○天上の力―以下この節の語釋、本曲の末に記す。

如來の右の脇士として、有緣を殊に導き。重き罪を輕んずる天上の力を得る故に。大勢至とは號すとか。天冠の間に。花の光かかやき。玉の臺の數々に。他方の淨土を現す。玉珠樓の風の音絲竹の調めとりどりに。心引かるる方もあり。寶の池のほとりに、立つや並木の花散りて。芬芳しきりに亂れたり

シテ「迦陵頻伽の類ひなき

地「聲をたぐへて諸共に。孔雀鸚鵡の。同じく囀る鳥のおのづから。光も影もおしなめて。至らぬ隈もなければ無邊光とは名づけたり、然れども雲月の。ある時は影滿ち、又ある時は影缺くる。有爲轉變の、世の中の定めのなきを示すなり

きになり、重い罪科をも輕めて下さる、無上の力をお持ちになつてゐるので、大勢至と申すのだといふことでございます。そしてこの菩薩の天冠には、玉の花が光り輝き、その花にはまた玉の臺があつて、その臺には西方以外の十方世界の淨土を現して居ります。そして、この珠玉の樓閣では、風の音も管絃の調べを奏して、それ〲人の心を引きつけ、又紅蓮白蓮が色とり〲に咲きまじり、寶の池の邊には寶の並木が立ち並んでゐて、そこへ花が散つて、かんばしい薫りが滿ち〲て居り、極樂鳥の迦陵頻伽が妙なる音樂を奏でると、それに眞似て孔雀や鸚鵡も同じやうに囀り、かうして御光の至らぬ隈もないので、勢至菩薩のことを別名無邊光――限りのない光とも申すのでございます。しかし、その雲間の月が、或時は滿ち或時は缺けるといふのは、諸の現象は移り變つて、この世の中は無常であるといふことをお示しになるのでございます」

とクセを舞ひ上げ、

【七】シテ『昔戀しき夜遊の袖

〔序舞〕

を舞ひ、引續き次の謠に合せて舞ふ。

シテワカ『わが心。慰めかねつ。更科や

地『姨捨山に照る月を見て照る月を見て

シテ『月に馴れ。花に戯るる秋草の。露の間に

地『露の間に。なかなか何しに現れて。胡蝶の遊び

シテ『戯るる舞の袖

地『返せや返せ

シテ『昔の秋を

地『思ひ出でたる妄執の心。やる方もなき。今宵の秋風。身にしみじみと。戀しきは昔。忍ばしきは閻浮の。秋よ友よと。思ひ居れば。夜も既にしらしらとはやあさまにもなりぬれば。われも見え

【七】

姥「おゝ昔の事がなつかしく思ひ出されます。月夜の舞でも致しませう」

〔序舞〕

昔を偲んで舞を舞ひ、

姥「──

『わが心慰めかねつ更科や、姨捨山に照る月を見て』

と歌つて舞ひつゝある

姥「あゝ私としたことが、月を眺め秋草の花をめでて、時の移るのも知らずにゐたことだ。この位ならば現れて來なければよかつた。このやうなはかない短い時間だのに、何を樂まうと思つて、胡蝶の舞などをして、夢うつゝの時を過したのであらう。

あゝ昔が戀しい、昔がとり返したい、昔の事を思ひ出すと、迷ひの心の晴れる術もない。今宵の秋風が身に泌みたゝと感じられるにつけても、昔が戀しい、娑婆がなつかしい。秋が戀しい、友が戀しい……と思つてゐるうちに、はや夜も白々とあかるくなつてくると、私の姿は人に見えなくなり、旅人は歸つてしまふ。─

○露の間─僅かの時間、露は草の縁。

○なかなか何しに現れて─何と思つてこゝに現れて、胡蝶の遊びをしたか、今は却つて恨めしい。

○胡蝶の遊び─高麗樂胡蝶舞の意に、莊周が夢に胡蝶となつたといふ故事を合めていふ。

○返せや─袖を飜すに、昔の時を呼び返す意を兼ねていふ。

○閻浮─生前の娑婆世界。

○あさま─朝間と明らさまと兼ねていふ。

ず旅人も歸るあとに（ワキ立ちて幕に入る）

シテ『ひとり捨てられて老女が（ワキを見やりてしをり）

地『昔こそあらめ今も又姨捨山とぞなりにける。

姨捨山となりにけり

と常座にて開き、拍子を踏まずして留む。

そして結局自分獨り後に殘されて、昔捨てられたと同じやうに、今も又姨捨山としてしまはれた」と悲しむさまで退場。

○昔こそあらめ—昔も捨てられたが、今又旅人に見捨てられてとの意。

〔考異〕

諸流（觀寶剛喜）

【一】ワキ次第 月の名近き……姨捨山を尋ねん（剛喜に急がん）。かやうに候者は……姨捨山へと急ぎ候（剛これは陸奥信夫の何某にて候。われこの程は都に候ひて、洛陽の名所舊跡一見仕りて候。これより北陸道にかゝり善光寺に參り。秋の半ばの折に逢ひて候程に、承り及びたる姨捨山により月を眺めばやと思ひ候）　【三】シテ 夢とはなどや……恥かしながら來りたり（剛ワキ さては現の夕暮に、ありつる人にてましまさば。かほど隈なき月の夜遊の友人とならせ給へとよ シテ げにや夜遊の月ともに、猶執心は殘れども、老の姿は恥かしや）

古諸本（光悅本）

【一】ワキ次第 月の名近き……姨捨山を尋ねん（光に急かむ）。かやうに候者は都方に住居仕る（光の）者にて候われ未だ更科の月（光姨棄山）を……姨捨山へと急ぎ（光の月を詠めはやとおもひ）候……さてもわれ姨捨山（光我此所）に來て見れば……萬里の空も隔て（光異）なく……　【二】ワキ さん候これは都の……いづくに住む人ぞ（光ふしきやな山路も見えぬかたよりも。女性一人顯れて。われに言葉をかけたまふは。いかなる人にてましますぞ）シテ これ（光わらは）はこの更科の里に住む者にて候（光者なるか）……ワキ さては更科の……さてさて古（光承及たる）姨捨の在所は……シテ 姨捨山の亡き跡と……詠ぜし（光なかめし）人の跡ならば……　【三】シテ（光投々）旅人はいづくより（光いつかたへ）來り給ふ（光御とをり候）ぞ ワキ されば以前も申す如く（光さん候是は 都の者にて候が更科の月を承り及び

(光ナシ)……来りて候よ(光ナシ)　【五】ワキ不思議やなはや更け過ぐる(光影もてりそふ)月の夜に……　【六】……然るに(光れば)月の……　【七】シテ昔戀しき夜遊の袖(光地)月にとかへす袂かな)

附記

○天上の力—無上の力を書き誤つたのであらう。觀經に「以二智慧光一普照二一切一、令レ離二三途一得中無上力上、是故號二此菩薩一名二大勢至一」とある。

○天冠—觀經に「此菩薩天冠、有二五百寶華一、一々寶華、有二五百寶臺一、一々臺中、十方諸佛、淨妙國土廣長之相、皆於レ中現」とあるに據つた。

○他方の淨土—彌陀の西方淨土以外の十方諸佛の淨土。

○玉珠樓—珠玉の如く美しい樓閣。これより天冠にあらはれた淨土の樂しみをいふ。

○心引かるる—絲の緣で引くといつた。

○はち色々に—はちは「はちす」(蓮)を略したもので、恐らく傳へ誤つたのであらう。

○寶の池—淨土にある八功德池。七寶より成り、水中に紅蓮白蓮が咲き匂ふといふ。

○立つや並木の—木の立つと波の起つとを兼ねていふ。並木は七重行樹といつて、七寶の樹が七重に極樂を繞ると傳ふ。

○芬芳—かんばしい薫り。

○迦陵頻伽—極樂に居る六種の鳥の一で、妙聲鳥又は妙音鳥といひ、妙なる音樂を奏す。

○たぐへて—眞似して。

○おのづから—鳥の尾といひかけた。

○孔雀・鸚鵡—これも極樂六鳥の内。以上三種と白鵠・舍利・共命を極樂の六鳥とす。

○無邊光—大勢至菩薩の異名。觀經に「但見二此菩薩大毛孔光一、即見二十方無量諸佛淨妙光明一、是故號二此菩薩一名二無邊光一」

○雲月—雲間の月。

○有爲轉變—諸現象の變化して常住しないこと。有爲は因緣によつて生じる諸現象。

女郎花（をみなめし）

觀（寶　春　剛　喜）

解説

【能柄】四番目　複式夢幻能

【人物】ワキ　松浦僧、前シテ　老翁（小野頼風の靈）、狂言　山下の者、後シテ　小野頼風、後ツレ　頼風の妻

【所】山城國　男山

【時】秋（八月）

【異稱】〔頼風〕ともいつた。

【作者】能本作者註文には世阿彌の作、二百十番謡目錄には龜阿彌の作とす。粟田口猿樂記に永正二年四月十六日〔頼風〕を演じたこと、言經卿記に文祿四年三月三十日本曲を催したことが見えてゐる。

【梗概】九州松浦潟の僧が都見物に出で立ち、やがて男山の麓に來る。折から秋のこととて千草の花の咲き亂れてゐる中に、殊に女郎花の一際美しく咲いてゐるのを見て、一本折り取らうとすると、一人の老翁が現れ出てこれを留める。そして互に古歌を引いて爭つた後、老翁は僧を石清水八幡に案内し、又男塚・女塚を教へて、自分がその男塚の主小野頼風であると告げて消え失せる。僧がその跡を弔つてゐると、やがて頼風とその妻の亡靈が現れ出て、頼風と契りを結んだ都の女が男の中絶えを恨んで放生川に身を投げ、その亡骸が女

郎花となつたこと、頼風もその心根を憐んで女の跡を追ひ、かくて男塚・女塚に築きこめられたことを語り、今は邪婬の悪鬼に責められてゐる様を示して、僧の回向を乞ふ。

【出典】　古今集の序に、

男山の昔を思ひ出でて、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける。

とあるを骨子として、能作書にいはゆる、名所舊跡に事寄せた作り能を構想したものである。藻鹽草に、

平城天皇の御時、小野頼風といふ人、男山に住みけり。京の女と契りしのち、かの女八幡へ尋ね行きて、頼風がことを問ふ。家なるもの答へていふ、「この程はじめたる女房ましますが、そこへ行き給ふ」と答ふ。この女怨めしく思ひて、八幡の川の端に山吹重ねの衣ぬぎ捨てて、身を投げ死にけり。その衣朽ちて女郎花生ひ出でたるなり。

とあるが、この書は謠曲以後のもので、本曲から出た傳説を記したものに過ぎない。

【概評】　〔通小町〕〔定家〕〔船橋〕たとと同様、男女邪婬の妄執を描いた曲であるが、この事はキリに少しばかり寧ろ唐突に述べてあるだけで、類曲中、呵責の程度の最も輕いものといふべきであらう。第二節に古歌を多く引いてゐるのは、本曲創作の動機が那邊にあつたかを察せしめるだけで、別段わづらはしい感じを起さしめたいが、第三節に男山八幡の緣起を說いてゐるのは、この曲柄には餘り似合はしい感を與へない。後段第六・七節は本曲の主想で、敘述も甚だ滑かに行つてゐる。

【一】○松浦潟—肥前國唐津灣の總名。

【一】名乘笛にて、ワキ松浦僧、角帽子・着附無地熨斗目・緒水衣・腰帯・扇・數珠の裝束にて舞臺に入り名乘座に立ち、

ワキ「これは九州松浦潟より出でたる僧にて候。われ未だ都を見ず候程に。この秋思ひ立ち都に上り候

【一】　前段

舞臺は初め九州松浦潟、ワキ九州松浦潟の僧登場。

僧「私は九州の松浦潟から出て來た僧です。私はまだ都を見たことがないので、この秋思ひ立つて都に上るのです」と見物人に自己紹介をなし、

ワキ道行「住み馴れし。松浦の里を立ち出でて。松浦の里を立ち出でて。末不知火の筑紫潟いつしか後に遠ざかる。旅の道こそ、遙かなれ旅の道こそ遙かなれ

「末不知火の」と右の方に向きて二三足出で、またもとに歸りて旅の心を示し、道行濟みて正面に向き、

ワキ「急ぎ候程に。これははや津の國山崎とかや申し候。（右の方に向き）向ひに拜まれさせ給ふは。石清水八幡宮にて御座候。わが國の宇佐の宮と御一體なれば。參らばやと思ひ候。（正面の方に向き）又これなる野邊に女郎花の今を盛りと咲き亂れて候。立ち寄り眺めばやと存じ候

といひて舞臺の眞中に出で、

ワキ「さても男山麓の野邊に來て見れば。千草の花盛んにして。色を飾り露を含みて。蟲の音までも心あり顏なり。野草花を帶びて蜀錦を連ね。

○不知火の―筑紫の枕詞。末を知らぬといひかけた。

○山崎―攝津國三島郡にあり、淀川を隔てて男山を望む。

○石清水八幡宮―山城國綴喜郡男山にある。貞觀元年行敎和尚が宇佐八幡を勸請した宮で、應神天皇・神功皇后・玉依姫の三座を祀る。

○わが國の宇佐の宮―宇佐八幡宮は豐前國宇佐郡宇佐にある。今官幣大社。ワキの出生地と同じ九州であるから、わが國のといつた。

○野草花を帶び―詩句らしいが、出所未詳。

僧「住み馴れた松浦潟を出發し、筑紫潟を次第に遠ざかつて、かうした長旅をすると、いかにも果ての知られない遠々しい氣持がする」

と旅の心持を[illegible]うちに、舞臺は攝津國山崎となる。

僧「旅を急いだので、はやこゝは攝津國山崎とかいふ所です。向ふに拜まれるのが、石清水八幡宮です。この宮はわが九州の宇佐八幡宮と御一體だから、參詣しませう」

と男山の麓へ來た態で、

僧「おゝこの野原には女郎花が今を盛りと咲き亂れてゐる。あそこへ行つて眺めませう」

といつて野邊[illegible]態で、

僧「さて／＼、この男山の麓の野に來て見ると、色々の草の花盛りで、みな露を含んで色とり／＼に面白く、草の間に鳴く蟲の音までが、いかにも風雅な趣である。この草花の美しいことは恰も蜀江の錦を

○古歌にも詠まれたる―後に引いてゐる古今集布留今道の歌「女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば」を指す。
○家づと―家への土產。

【二】

○花の色は蒸せる粟の如し―本朝文粹卷一源順の詠二女郎花一詩に「花色如二蒸粟一、俗呼爲二女郎一、聞レ名戲欲レ契二偕老一、恐惡二衰翁首似一レ霜」（和漢朗詠集にも收む）を引いた。
○多かる花に―古今集小野良材の歌「女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をやたちなん」を借り、種々花の多いのに、何故女郎花の一本を手折るかとの意に用ゐた。

桂林雨を拂つて松風を調む、この男山の女郎花は。古歌にも詠まれたる名草なり、これも一つは家づとなれば。花一本を手折らんと。この女郎花のほとりに立ち寄れば

と脇座へ行く。

【三】

シテ老翁、面朝倉尉・尉髮・襟淺黃・着附小格子・茶絓水衣・腰帶・扇の裝束にて幕より出でながら、

シテ（呼掛）なうその花な折り給ひそ。花の色は蒸せる粟の如し、俗呼ばつて女郎とす、戲れに名を聞いてだに偕老を契るといへり、ましてやこれは男山の。名を得て咲ける女郎花の。多かる花にとりわきて、など情なく手折り給ふ。あら心なの旅人やな

ワキ「さて御身は如何なる人にてましませば。これほど咲き亂れたる女郎花をば惜しみ給ふぞ

シテ「惜しみ申すこそ理なれ、この野邊の花守に

鼓へたやうであり、向ふの林から洩れてくる風の音は琴を彈いてゐるやうだ。その中でも、男山の女郎花といへば、古歌にも詠まれた名草で、故鄉へのよい土產だから、一本折り取らう

といつて、女郎花のもとへ立ち寄る。

【三】

僧が野に女郎花を折らうとすると、一老翁（實は小野賴風の靈）が登場して、

翁「もうし、その花をお折りなさるな。その女郎花といふ花は、昔の人に『花の色は蒸した粟のやうに黃色で美しく、俗に女郎と名づけられてゐる。その名前に戲れて、この花と偕老の契りを結ばう』などといはれたものです。殊にこゝは男山で、女郎花には特別の緣故があつて咲いてゐるのに、外の花が澤山あるのを取りもしないで、何故情の心もなく女郎花を折らうとせられるのです。ほんとに考のない旅人だ」

僧「一體あなたはどういふ方なれば、このやうに澤山咲いてゐる女郎花をお惜しみなさるのです」

翁「惜しむのがあたりまへです。私はこの

○かの菅原の神木にも―新古今集神祇に「建久二年の春の頃、筑紫へ罷りけるものの、安樂寺の梅を折りて侍りける夜の夢に見えけるとなん―と詞書して、「情なく折る人つらしわが宿のあるじ忘れぬ梅の立枝を―とあるをいふ。安樂寺は菅原道眞の廟所、神木はそこにある飛梅をいふ。「老松」參照。
○折りとらば手ぶさに穢る立てながら三世の佛に花奉る―後撰集僧正遍昭の歌。但し原歌の初句―折りつればとある。手ぶさは手、三世の佛は過去現在未來三世の諸佛。
○僧正遍昭　俗名良峯宗貞左近衞少將藏人頭となつたが、仁明天皇の崩御を悲しんで出家し遍昭といつた。六歌仙の一人。
○名にめでて折れるばかりぞ女郎花―古今集僧正遍昭の歌、下句―われ落ちにきと人に語るな」

て候

ワキ「たとひ花守にてもましませ。御覽候へ出家の身なれば、佛に手向と思しめし一本御許し候へかし

シテこの間に舞臺に入り常座に立ちて、

シテ「げにげに出家の御身なれば。佛に手向と思ふべけれど。かの菅原の神木にも折らで手向けよと。その外古き歌にも、「折りとらば手ぶさに穢る立てながら、三世の佛に花奉るなどと候へば。殊更出家の御身にこそ、なほしも惜しみ給ふべけれ

ワキ「さやうに古き歌を引かば。何とて僧正遍昭は。名にめでて折れるばかりぞ女郎花とは詠み給ひけるぞ

シテ「いやさればこそわれ落ちにきと人に語る

野の花守です」

僧「たとひ花守でお出でなさらうと、私は御覽の通りの出家ですから、佛への手向と思つて、一本お與へ下さい」

翁「なる程、御出家の事なれば、佛に手向けたいとお思ひなさるのは御尤もですが、あの菅原天神も、神木の飛梅を手折らないで、そのまゝ手向けにせよとお詠みなされ、その外古歌にも、――

『折りとらば手ぶさに穢る立てながら、三世の佛に花奉る』

(この美しい花を折つてお佛へ上げますれば、折る手で穢れる恐れがあるから、折らないで、この儘で、諸佛へお供へ致します)

とも詠まれてあるのですから、御出家は殊更折るのをお惜しみ下さる筈だと思ひます」

僧「そのやうに古歌をお引きなさるが、それならば、僧正遍昭は何故『名にめでて折れるばかりぞ』(女郎花といふ名前が面白いので、折つたまでだ)と詠まれたのです」

翁「いやいや、僧正遍昭は女郎花を折つたのをよくないと思へばこそ『われ落ちに

○忍ぶの摺衣―忍び隱すを信夫にいひかけ、摺衣を着飾る心で女郎と續けた。信夫は岩代國にあり忍摺の名産地。

○摺衣―草を摺つてその汁で模様を染めた衣。

○女郎と契る草の枕―前掲源順の詩句及び續後拾遺集安藝の歌「女郎花よるなつかしく匂ふかな草の袂もかはすばかりに」に據つた。

○女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる男山にし立てりと思へば―古今集布留今道の歌。

○なまめき立てる―古今集僧正遍昭の歌「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」を引いた。

○うしろめたくや―古今集兼覽王の歌「女郎花うしろめたくも見ゆるかな荒れたる宿にひとり立てれば」を引いた。

○誰偕老を契り―前掲、源順の句。

○邯鄲の假枕―蜀國の盧生といふ者が楚國邯鄲の旅宿で枕を借りて眠り、粟飯一炊の間に五十年の榮華の夢を見たといふ故事を指す。この事〔邯鄲〕に作らる。

なと。深く忍ぶの摺衣の。女郎と契る草の枕を。ならべしまでは疑ひなければ。その御喩へを引き給はば。出家の身にては御誤り

ワキ「かやうに聞けば戯れながら。色香にめづる花心。とかく申すによしぞなき。暇申して歸るとて。『もと來し道に行き過ぐる（正面へ二足出づ）

シテ「おう優しくも所の古歌をば知ろしめしたり。『女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる。男山にし立てりと思へば

地下歌「優しの旅人や。花は主ある女郎花。よし知る人の名にめでて。ゆるし申すなり一本折らせ給へや（とワキへさし）。上歌「なまめき立てる女郎花。なまめき立てる女郎花。うしろめたくや思ふらん。女郎と書ける花の名に。誰偕老を契りけん。かの邯鄲の假枕。夢は五十のあはれ世のためし

きと人に語るな[illegible]ふな）と深く隱したのです。とにかく、その名に戯れて、女郎と契るといつたのに違ひないのだから、この歌を喩へにお引きなさるのは、御出家として御心得違ひでせう」

僧「さう仰しやれば、戯れとはいへ、色香をめでるといふことになつて、かれこれ申すも詮ないことです。ではお暇して歸りませう。もと來た道を行き過ぎませう」

翁「おゝ、これは風流な、この男山についての古歌を御承知ですな。――『女郎花憂しと見つつぞ行き過ぐる、男山にし立てりと思へば』

（この女郎花を[illegible]男山に[illegible]るのでは、ただ折[illegible]かに、觀念[illegible]見過して行かう）

といふ歌を。ほんとにお僧はやさしいお方だ。いかにもこの女郎花は主ある花ですが、いえ構ひません、優しい御賞翫が嬉しいから、さし上げませう、一本お折り下さい。いやこの女郎花は、なまめかしい姿で立つてゐますが、淋しい野にゐては、不安心にも思ふことでせう。女郎といふ名に戯れて、友白髮の契りを結ぶといつた人もあります。さういへば、この花の粟色から思ひ出したことですが、邯鄲の枕に五十年の榮花を夢みたといふこともほんとでせうかしら」

も眞なるべしやためしも眞なるべしや

【三】

ワキ この野邊の女郎花に眺め入りて。未だ八幡宮に參らず候

シテ この尉こそ唯今山上する者にて候へ。八幡への御道しるべ申し候べしこなたへ御入り候へ

シテ・ワキともに舞臺の眞中に出で正面に向きて、

ワキ 聞きしに超えて貴くありがたかりける靈地かな

シテ 山下の人家軒を並べ

（向合ひて）和光の塵も濁江の。河水に浮かむうろくづは。げにも生けるを放つかと深き誓ひもあらたにて。惠みぞ繁き男山。榮ゆく道のありがたさよ（と謡ひて正面に直し）

地下歌 頃は八月半ばの日。神の御幸なるお旅所

○和光の塵 和光同塵の意。神佛が衆生濟度の爲に德光を和らげて世塵に交はり、衆生と緣を結ぶこと。

うろくづ 魚類。

○生けるを放つ―毎年八月十五日にこの八幡山下の放生川に魚を放つ神事をいふ。この事〔放生川〕に作らる。

○男山榮ゆく道―古今集讀人知らずの歌「今こそあれわれも昔は男山榮ゆく時もありこしものを」を借りた。

○神の御幸 神輿の渡御。

【三】

僧 實は私はこの女郎花を眺め入つて、まだ八幡宮へお參りしないで居るのです。

翁 この老人もこれから山上する所です。丁度よい所です、私が御案内しませう。こちらへお出でなさい。

八幡宮の神前に連れ立つて行く心で、舞臺より八幡宮前に出る。

僧 これは評判に聞いてゐたのにもまして、結構なありがたい神境ですな。

翁 山下には軒を並べて人家が並んで、神境を流れるこの川には、生きた魚を放つ放生會と申す儀式が行はれ、神德のあらたかな神様で、神の御惠みによつて、世の中の榮えて行くのは、誠にありがたいことです。

といつて二人は、八月十五日神輿の渡

○久方の月の桂の男山―續古今集卜部兼直の歌。下句「さやけき影は所からかも」。久方のは月の枕詞。月の異名を桂男といふので、桂の男山と續けた。

○日もかけろふの―紅葉の色、月の光で日光もかげる程光を失ふといひかけて、石の枕詞かけろふのに轉じた。

○苔の衣―僧の衣。苔は石の縁語。

○三つの袂―三衣即ち袈裟。大和國大安寺の行教和尚が貞觀元年宇佐八幡に參籠した節、その衣に阿彌陀三尊の影が映じた靈夢を見て、男山に八幡を勸請したといふ故事（今昔物語に見ゆ）をいふ。夫木抄衣笠内大臣の歌に―石清水すみはじめけん月影の三つの衣に影ぞうつりし―

○しるしの筥―御神體勸請の筥。八幡御垂跡のしるしであるから、行教和尚の袈裟を筥に納めて勸請したといふ。

○神宮寺―神社に附屬した寺。

○鳩の嶺―男山の別名。

○三千世界―三千大千世界の略。一切世界の意。

を伏し拜み（と二人とも下に居て合掌）。上歌「久方の。月の桂の男山。（二人立ちワキは脇座に歸り、）月の桂の男山。さやけき影は所から（とシテ右の方を見廻しつゝ）紅葉も照り添ひて日もかげろふの石清水。苔の衣も妙なりや。三つの袂に影うつる（常座へ歸り）。しるしの筥を納むなる。法の神宮寺ありがたかりし靈地かな。巖松峙つて。山聳え谷廻りて諸木枝を連ねたり（と見上げ見下して）。鳩の嶺越し來て見れば（と正面先へ出て見上げ）。三千世界もよそならず千里も同じ月の夜の（見廻し）。朱の玉垣御戸代の。錦かけまくも。忝しと伏し拜む（と常座に歸る）

【四】

シテ「これこそ石清水八幡宮にて御座候へよくよく御拜み候へ。はや日の暮れて候へば御暇申し候べし（と右へ廻り歸る心）

ワキ「なうなう女郎花と申す事は。この男山につ

御せられるお旅所を拜し、（あたりの景色を見、）

翁「靈場所柄とて、この男山では月の光も清く、紅葉の色も一入濃く、日の紅さにも勝るばかりで、この石清水はほんとに結構な所です。それから、あの彌陀三尊の尊影のお映り遊ばされた袈裟を收めた御宮を納めた神宮寺も、誠にありがたい靈地です。山の岩根には松が聳え、峯から谷へかけて、色々な木の枝が生ひ繁つてゐる。かうして鳩の嶺へ來て見ると、全世界が一眸の中に集まつてゐて、隈なく照らす月の光が、赤い玉垣に映えた神々しさ、ほんとにこの山に鎭座まします神樣は、ありがたいことです」

と拜する。

【四】

翁「これが石清水八幡宮です。よく御拜なさい。はや日も暮れたから、私はこれでお暇します」

僧「もうし、この女郎花は男山とどういふ

○千里も同じ―和漢朗詠集白樂天の詩句「三五夜中新月色、二千里外故人心」を借りた。
○朱の玉垣　月夜の明きといひかけた。
○御戸代―神前の御戸帳、
○かけまくも―口にかけて申すも忝い。御戸帳に錦を掛くといひかけた。

【四】
○何ともなや　何ともいひやうのない程驚いたとの意
○男塚女塚―男山の南十町許り志水町の東の田の中に女郎花塚があり、その左にあるを女塚、右にあるを男塚といふ。もとより謠曲以後の假託である。
○小野の頼風―謠曲作者の假作名であらう。

きたる謂れにて候か

シテ「あら何ともなや（とワキへ向き）、前に女郎花の古歌を引いて。戯れを申し候も徒事にて候。女郎花と申すこそ。男山につきたる謂れにて候へ。又この山の麓に。男塚女塚とて候を見せ申し候べし。こなたへ御入り候へ

（シテ正面へ二三足出で、ワキも少し出づ。シテ正面の方に向き、）

シテ「これなるは男塚。（目附柱の方に向き）又こなたなるは女塚。（ワキへ向き）この男塚女塚について女郎花の謂れも候。これは夫婦の人の土中にて候

ワキ「さてその夫婦の人の國はいづく。名字は如何なる人やらん

シテ「女は都の人。男はこの八幡山に。小野の頼風と申しし人

地上歌「恥かしや古を。（ワキ元の座に歸り）。語るもさす

關係があるのです」

翁「これは驚き入つた。今更そのやうな事をお尋ねなさるやうでは、先程から古歌を引いて戯れを申したことも無意義であつた。女郎花は勿論この男山と深い關係があるのです。なほ又この山の麓に、男塚・女塚と申すのがありますから、お見せしませう。こちらへお出でなされ」

（シテ、山の麓へ下りた心で）

翁「これが男塚で、又こちらにあるのが女塚です。この男塚・女塚について、女郎花の物語もあります。これはもと夫婦の人を埋めた塚です」

僧「して、その夫婦はどこの國の人で、名字は何と申します」

翁「女は都の人で、男はこの八幡山に住む小野頼風といつた人です。いや、このやうな昔話をするのはお恥かしいが、と申して、お話しなければ、誰もその亡き跡を弔つてくれる人もなし……實は私が頼

がなり。申さねば又なき跡を。誰か稀にも弔ひの。たよりを思ひ頼風の。更け行く月に木隠れて夢の如くに、失せにけり夢の如くに失せにけり

風の……といつて、更け行く月の木隠に夢のやうに消え失せてしまつた。（中入、[illegible]。）

の思ひ頼風の　思ひ寄るを頼風に、風の吹くを更け行くにいひかけた。

シテ　木隠れて　と右へ廻りて常座にて開き、静かに中入。

【間】　狂言山下の者、肩衣段熨斗目・長上下・腰帯・扇・小刀の装束にて名乗座に出て、

狂言「かやうに候者は。八幡の山下に住居する者にて候。承り候へば。女郎花の盛りの由申し候間、参りて見申さばやと存ずる。（ワキを見て）いやこれに見馴れ申さぬ御僧の御座候が。いづ方より御出でなされ候ぞ

ワキ「これは九州松浦潟より出でたる僧にて候。御身はこの邊の人にて渡り候か

狂言「なかなかこの邊の者にて候

ワキ「さやうにて候はばまづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候

狂言「畏つて候。（舞臺の眞中に出で下に居て）さて御尋ねなされたきとは。いかやうなる御用にて候ぞ

ワキ「思ひも寄らぬ申し事にて候へども。古この所に於いて頼風夫婦の御事につき様々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ

狂言「これは思ひもよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの邊には住居仕り候へども。左様の事委しくは存ぜず候さりながら。初めてお目にかゝり御尋ねなされ候事を。何とも存せぬと申すもいかゞにて候へば。凡そ承り及びたる通り御物語り申さうずるにて候

ワキ「近頃にて候

狂言「さる程に女郎花の子細と申すは。古この八幡に。小野の頼風と申す御方の御座ありしが。訴訟の事候うて。永々御在京なされ候が。とある女と契り給ひ。この所へ御下向の時御申し候は。後より迎へを參らすべき間。御下向候へと御約束なされしが。頼風はよろづ暇なき御身なれば。左樣の事を忘れ給ひ。御音づれもなく候間。かの女尋ね來り。その由申し候に。折節頼風は山上に御座あつて。御留守の事なれば。内よりあらけなく返事を申す間。さては頼風の御心變り行きたり。この上は都に歸りてもせんなしとて。放生川へ身を投げ空しくなり給ひて候。あたりの者ども驚き騒ぎ。取り上げ申す折節。頼風山上より御歸りあり。立ち寄り御覽あるに。都にて契り給ひし御方なれば。先非を悔い給へど返らぬ御事なれど。そのまゝ野邊の土中に築き込み。女塚と申し候。又頼風も程なく空しくなり給ふ間。同じく塚に築き込み。男塚と申し候。又女郎花と申すは。かの女性の身を投げし時。山吹色の衣を召されしを。そのまゝ土中に築き込み候が。その土より生ひ出でたる草なれば。女郎花と申したる。この山の名草にて候。まづ我等の承り及びたるはかくの如くにて候が。何と思し召し御尋ねなされ候ぞ。近頃不審に存じ候

ワキ「懇に御物語り候ものかな。尋ね申すも餘の儀にあらず。御身以前にいづくともなく老人一人來られ候程に。即ち言葉を交はして候へば。色々古歌などを詠まれ。男塚女塚を教へ。頼風夫婦の御事を身の上のやうに申され。そのまゝ姿を見失つて候

狂言「これは奇特なる事を承り候ものかな。總じてこの山下には。左樣の老人は御座なく候が。さては頼風の御亡心現れ給ひ。御言葉をかはし給ふと存じ候間。暫くこの所に御逗留あり。重ねて奇特を御覽あれかしと存じ候

ワキ「近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。ありがたき御經を讀誦し。かの御跡を懇に弔ひ申さうずるにて候

狂言「御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ

ワキ「頼み候べし

狂言「心得申して候

といひて狂言は引く。

【五】

ワキ上歌「待謠ノ一夜臥す、牡鹿の角の塚の草。牡鹿の角の塚の草陰より見えし亡魂を、弔ふ法の聲立てて。（正面へ向き合掌して）南無幽靈出離生死頓證菩提（といひて直す）

【六】

出端の囃子にて、後ジテ小野頼風、面邯鄲男・黒垂・金緞鉢卷・風折烏帽子・襟白・着附厚板・單狩衣・白大口・腰帶・扇の裝束、後ヅレ頼風の妻、面連面・鬘・鬘帶・襟赤・着附摺箔・色入唐織着流の裝束にて、ツレを先に立てて出で、ツレは直に舞臺に入りて常座に立ち、シテは橋懸一の松に留まりて、

後ジテ「おう曠野人稀なり。わが古墳ならで又何物ぞ

後ヅレ「屍を爭ふ猛獸は。禁ずるに能はず

シテ『なつかしや。聞けば昔の秋の風

ツレ『うら紫か葛の葉の

【五】

○牡鹿の角の―新古今集柿本人丸の歌「夏野行く牡鹿の角の束の間も忘れず思へいもが心を」を引き、束を塚にいひかけた。

○「出離生死―生死の迷界を脱離して、速かに菩提を證得せよとの意。

【六】

○曠野人稀なり―九相詩「野外人稀何物有、爭レ屍猛獸不レ能レ禁」を引いた。

○うら紫か葛の葉の―恨むを紫にいひかけ、恨むの縁で葛と續けた。葛の葉は風に裏返り易いから、うらみると續け慣はした語。

【五】

後段

旅僧はこゝに一夜寢て、かの塚の草蔭から現れ出た亡魂を弔はうと、誦經して、

僧「――南無幽靈、生死を出離して、頓に菩提を證せよ」

（幽靈よ、生死の迷界を離れて、速かに成佛せよ）と讀經する。

【六】

旅僧が讀經して、假寢してゐると、その夢に、後ジテ小野頼風、後ヅレ頼風の妻が現れ出る態で登場。

頼風「おうこの廣い野原に往來する人とてはなく、わが古墳の外に何物もない」

妻「その塚も、猛獸がわれ一と爭つて來て、屍を喰ひ散らすのをとめることは出來ませんし……」

頼風「あゝなつかしい。聞けば昔のわが妻の聲だ」

妻「いえ、あなたにはお恨みがあるだけです」

シテ「歸らば連れよ。妹背の波

地「消えにし魂の、女郎花、花の夫婦は現れたり（とシテ常座、ツレ大小前へ行き）。あらありがたの。御法やな（とワキへ合掌）

ワキ「影の如くに亡魂の、現れ給ふ不思議さよ

ツレ「わらはは都に住みし者。かの賴風に契りをこめしに

シテ「少し契りのさはりある。人まを眞と思ひけるか

ツレ「女心のはかなさは、都を獨りあくがれ出でて、猶も恨みの思ひ深き。放生川に身を投ぐる

と謠ひながらツレ正面先へ行き下に居て投身の心を示し、立ちてワキの上に行きて下に居る。

シテ「賴風これを聞きつけて。驚き騒ぎ行き見れば（と正面先へ出で）。あへなき死骸ばかりなり（としをりながら常座に歸り）

賴風「いや夫婦だ、婆婆へ歸るのならば、連れ立つて行かう」（といつて、僧の前に現れ、

二人「亡くなつた女郎花の夫婦が現れて來ました。ありがたいお經でございます」

僧「影のやうに、幽靈の現れて來たのは、實に不思議なことだ」

女「私は都に住んでゐた者で、あの賴風と契りを結んだのでございますが……」

賴風「暫く差支があつて行かなかつたのを、もう全く緣の絕えたもののやうに思ひ込んで……」

女「淺はかな女心に、都を獨りうかれ出て、深く恨めしう思ひ、この放生川に身を投げました」

賴風「私はこれを聞いて驚き騒ぎ、行つて見ると、もはや果敢ない死骸となつてゐたので、泣きの涙で死骸を取り上げて、この麓の土中に埋めました。すると、そ

○歸らば連れよ―婆婆に歸らば連れて行けとの意、葛の葉の裏返るといひかけた。

○妹背の波―波は歸るの緣で出し、下の消えを呼び出す料とした。

○消えにし魂の―魂を玉にいひかけ、玉の緒を女郎花にいひかけた。

○花の夫婦―花やかな夫婦、女郎花に通はせた。

○人ま―人の往來の絕え間、男の暫く通つて來なかつたことをいふ。

○放生川―男山の麓を流れる川。

○あへなき―はかなき。

ツレ「泣く泣く死骸を取り上げて。この山本の土中に籠めしに
シテ「その塚より女郎花一本生ひ出でたり。頼風心に思ふやう　さてはわが妻の。女郎花になりけるよと。なほ花色もなつかしく。草の袂もわが袖も。露觸れそめて立ち寄れば。この花恨みたる氣色にて。夫の寄れば靡き退き又。立ち退けばもとの如し
地「ここによつて貫之も。男山の昔を思つて女郎花の。一時をくねると書きし水莖のあとの世までもなつかしや（としをる）

シテ次の詞に合せて舞ふ。（舞クセ）

【七】
地クセ「頼風その時に。かのあはれさを思ひとり。むざんやなわれ故に。よしなき水の泡と消えて徒らなる身となるも。偏にわが科ぞかし。若か

の塚から女郎花が一本生えて出ました。さてはわが妻が女郎花になつたのだと思つて、やはりなつかしく思はれ、この草に置く露を女の袂の涙と思ひ、わが袖と觸れ合はさうと、その草のもとへ立ち寄ると、花は恨めしさうな様子をして、自分が近寄ると退き離れ、自分が立ち退くと、またもとのやうになります。この様なことを申してゐますと、かの貫之が、男山の昔を思ひ出して『女郎花が一すすねて見せる』と書いたことまで偲ばれて、なつかしいのです

【七】頼風その時、私は妻の心持を察し、あゝ可哀想なことをした　果敢ない身を水に投げて死んでしまつたのも、全く自分の罪だこ一層のこと、自分もこの世を棄てて、同じ冥途へ行かうと決心して、また

(ロ)草の袂も　女郎花の葉に置く露を女の袖の涙に見立てたのである。
(ハ)貫之　紀氏。醍醐天皇頃の歌人、古今集撰者の一人で、その序の筆者。〔蟻通〕〔草子洗小町〕参照。
(ニ)男山の昔を「古今集の序に「男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞなぐさめける」とあるをいふ。尤も原文の「男山の昔」とは前掲「今こそあれわれも昔は」の歌についていつたのを、ここは貫之が男塚女塚の昔語を思ひ起していつたもののやうに附會してゐる。

【七】
(イ)むざん　無慙。罪を犯して慙ぢないこと。轉じて氣の毒なこと。

じ浮世に住まぬまでと同じ道にならんとて

シテ 續いてこの川に身を投げて（ト正面先にて下に居り）

地 ともに土中に籠めしより女塚に對して（ト立ち）、又男山と申すなりその塚はこれ、主はわれ幻ながら來りたり。跡弔ひてたび給へ跡弔ひてたび給へ（ト脇正面にてツキへ向き）

【八】

地 あら閻浮。戀しや（ト袖にて面を掩ひながら常座へ行き）

〔カケリ〕

地（キリ）邪婬の惡鬼は。身を責めて。邪婬の惡鬼は身を責めて。その念力の。道もさかしき劒の山の。上に戀しき。人は見えたり嬉しやとて。行きのぼれば。劒は身を通し磐石は骨を碎く、こはそもいかに恐ろしや。劒の枝の。撓むまで。如何なる罪の。なれるはてぞや。よしなかりける。

女の後を慕つて、この川に身を投げ、同じく土中に埋められたので、女塚に對して、こちらを男山とも申すのです。その塚はこれで、その塚の主は私で、幻の姿で現れて來たのです。どうぞ後世を弔つて下さい」

【八】

韶風 あゝこの世がなつかしい

〔カケリ〕

にその心持を示し、

韶風 死んだ後は、邪婬の惡業の爲に、惡鬼に身を責められて、險しい劒の山の上に、戀しい人の姿が見える、あゝ嬉しいと思つて、女を思ひ込んだ力で、その山へ登つて行くと、劒は身を刺し通し、磐石で身を碎くのです。何といふ恐ろしいことでせう。劒の枝に刺し通されるまでの、恐ろしい罪の報いを受けたのです。思へば、女郎花がちよつとすねて見せるといふのも、つまらない夢でした。でも、

○同じ道—同じ冥途。

【八】○閻浮—閻浮提の略。この世。

○邪婬の惡鬼—邪婬の惡業を責め立てる鬼。

○劒の山—往生要集に「又復獄卒取二地獄人一置二刀葉林一見二彼樹頭一有二好端正嚴飾婦女一如レ是見已即上二彼樹一樹葉如二刀割二其身肉一次割二其筋一如レ是劈二割一切處一已得レ上レ樹已見二彼婦女一復在二於地一以二欲媚眼一上看二罪人一作二如レ是言一念二汝因縁一我到二此處一汝今何故不二來近一我何不二抱我一罪人見已欲心熾盛次第復下刀葉向レ上利如二剃刀一如レ前遍割二一切身命一既到レ地已而彼婦女復在二樹頭一罪人見已而復上レ樹」

○劒の枝の—金葉集和泉式部の歌に、地獄の繪に、劒の枝に人の貫かれたるを見てよめる」と詞書して「あさましや劒の枝の撓むまでこは何のみのなれるなるらん」とあるに據つた。

花の一時を。くねるも夢ぞ女郎花露の臺や花の縁に。浮かめてたび給へ罪を浮かめてたび給へ

女郎花も蓮も同じく花であるから、縁のあるものとして、極樂の蓮華臺に生まれられるやうに成佛させて下さい[illegible]場。

「露の臺や」と常座へ行きてワキに合掌し、直して留拍子を踏む。

(一)露の臺…露臺といふ成語を借りて、露を花の縁で極樂の蓮華臺の意に取り做した。

〔考異〕

諸流(五流)

著しい異同はない。

古諸本(光悦本)

【一】ワキ これは九州……この秋(光度)思ひ立ち……ワキ 急ぎ候程に……宇佐の宮と御一體なれば(にて御座候ほどに)……眺めばやと存じ(光思ひ)候さても……色を飾り露を含み(光んで)……

【二】シテ なら(光ノヽ)その花な……ワキ さて御身は(光そも)如何なる人なればこれほど咲き亂れたる(光おほき)……シテ けにげに……手向と思ふべけれど(光も)……シテ いやさればこそ……その御喩へ(光歌)を…… シテ おら(光あゝ)

【三】ワキ この野邊の……未だ(光ナシ)八幡宮に……シテ この園こそ唯今(光ナシ)山にする……

【四】シテ これこそ石清水……はや日の暮れて(光ナシ)候へば 光程に)御暇申し候べし(光ナシ)……シテ あら何ともなや……徒事にて候(光そや)女郎花(光男山)と申すこそ男山につきたる(光女郎花の)謂れにて……シテ これなるは男塚又(光ナシ)……ワキ さてその……名字は如何なる人やらん(光名をはなにと申候そ)

大蛇（をろち）

寳（剛　喜）

解説

【能柄】　四・五番目　二段劇能

【人物】　**ワキ**　素盞嗚尊、**ワキツレ**　従者（二人）、**前シテ**　手摩乳、**前ツレ**　脚摩乳、**子方**　奇稲田姫、**狂言**　木葉の精、**ワキツレ**　輿舁（二人）、**後シテ**　八岐大蛇

【所】　**第一段**　出雲國手摩乳の家
第二段　同　簸の川上

【時】　神代（無季）

【作者】　能本作者註文、二百十番謡目錄ともに觀世小次郎の作とし、蔭涼軒日錄に寛正六年九月二十七日春日祭に觀世大夫の演じたとある〔出雲十柄〕は本曲のことであらうか。

【梗概】　素盞嗚尊が出雲國へお降りになつたところ、ある賤屋の内で、老人夫婦が一人の少女を中に置いて泣いてゐるので、その事情をお尋ねになると「私どもは手摩乳・脚摩乳、少女は奇稲田姫と申す者ですが、簸の川上に棲む大蛇が年々わが娘を取り、今また最後に殘つたこの子を取らうとしてゐるのです」とお答へした。尊はこれを憐み、姫をわれに得させよとお約束になつて、八艘の酒船を川上に浮

かへさせ、姫の姿をこれにうつして、大蛇を欺き酔はせようとお計りになつた。果して大蛇はこれを飲み干して酔ひ伏したので、尊は十握の剣を抜いてこれを平らげ、その尾にあつた剣を叢雲の剣とお名づけになつた。

【出典】素盞嗚尊の大蛇退治は著名な神話で、古事記・日本書紀ともに詳しく記してゐるが、本曲は主として書紀に據つたものと思はれるから、その文を抄出すると、

是時、素盞嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上、時聞川上有啼哭之聲、故尋聲覓往者、有一老公與老婆、中間置一少女、撫而哭之、素盞嗚尊問曰、汝等誰也、何爲哭之如此耶、對曰、吾是國神、號脚摩乳、我妻號手摩乳、此童女是吾兒也、號奇稻田姫、所以哭者、往時吾兒有八箇少女、毎年爲八岐大蛇所呑、今此少童且臨被呑、無由脱免、故以哀傷、素盞嗚尊勅曰、若然者、汝當以女奉吾耶、對曰、隨勅奉矣、故素盞嗚尊立化奇稻田姫爲湯津爪櫛、而插於御髻、乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒、幷作假庋八間、各置一口槽、而盛酒以待之也、至期果有大蛇、頭尾各有八岐、眼如赤酸醬、松柏生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、及至得酒、頭各一槽飲酔而睡、時素盞嗚尊乃抜所帶十握劍、寸斬其蛇、至尾劍刃少缺、故割裂其尾視之、中有一劍、此所謂草薙劍也。

一書曰、本名天叢雲劍、蓋大蛇所居之上常有雲氣、故以名歟、至日本武皇子改名曰草薙劍。

【概評】素盞嗚尊の仁慈勇猛兩面を說いた、著名なわが神代說話を題材としたもので、本曲と同じ作者の手に成つた〔玉井〕と並び稱せらるべき曲柄である。同じ材料を取扱つた〔源太夫〕が日本武尊の御事蹟と結びつけ、佛說を附會して、脚色の混雜を生じてゐるのに比べて、本曲は神話を原形のまゝ忠實に二段劇能に脚色して、爽快な感を與へてゐる。題材の性質上、叙事文はやゝ多いが、〔玉井〕よりは遥かに滑かに戯曲としての體裁を整へてゐる。神話を脚色したものとして、上乘の作といひ得よう。

【一】

【一】後見、引廻をかけたる藁屋の作物を大小前に出す。シテ手摩乳、面小尉・尉髪・着附小格子・水衣・腰帶・扇の装束、ツレ脚摩乳、面姥・姥髪・鬘帶・着附摺箔・厚板着流・水衣の装束、子方奇稻田姫、鬘・鬘帶・着附摺箔・唐織着流の装束にてその内に居る。

【一】第一段

無臺は初め新羅で、ワキ素盞嗚尊、ワキヅレの従者を随へて登場。

「始めて旅に行く雲の」旅に行くを雲の行くにいひかけ、雲の收まるを國の治まるにいひかけ、雲の字に出雲の意を通はせた。
○伊弉諾—わが國土を生み給うた男神。
○混沌未分に分れしより—混沌はまろかれと訓む。天地が一かたまりになつてゐて、分れてゐなかつたのが、二つに分れた時からといふ意。日本書紀に「古天地未レ剖、陰陽不レ分、渾沌如二雞子一」
○新羅の國に天降り—新羅は今の朝鮮、三韓の一。素戔嗚尊が新羅へお降りになつたことは、書紀の一書に「素戔嗚尊所行無狀、故諸神科以二千座置戸一而遂逐之、是時、素戔嗚尊帥二其子五十猛神一、降二到於新羅國一、居二曾尸茂梨之處一、乃興言曰、此地吾不レ欲レ居、遂以二埴土一作レ舟、乘之東渡、到二出雲國簸川上所在鳥上之峯一」とある。
○思ひ立つ—立つは裁つと同じ音で、衣の縁語。
○あしたの原—大和國葛下郡にある。旅立つ朝といひかけて地名を文飾に用ゐたのである。

次第の囃子にて、ワキ素戔嗚尊、唐冠・色鉢巻・着附厚板・法被・白大口・腰帶・扇の装束、ワキヅレ從者二人、洞烏帽子・着附厚板・狩衣・白大口・腰帶・扇の装束にて舞臺に入り向合ひて、

〔次第〕始めて旅に行く雲の始めて旅に行く雲の治まる國を尋ねん

地取にワキは正面に向き、（ツレは下に居り）

ワキ 抑もこれは伊弉諾の御子素戔嗚の神とはわが事なり

ワキ・ワキヅレ（立ち）向向ひて、

それ治まれる國の始め、混沌未分に分れしより。新羅の國に天降り。それよりやがて旅衣の

ワキ ワキヅレ〔道行〕思ひ立つあしたの原も遙々と。あしたの原も遙々と。見えて漕がるるはにふの小舟の棹のさして猶。行くへの波も八雲立つ。出雲の國に着きにけり出雲の國に着きにけり

「始めて旅に出て、出雲の[illegible]、太平の國へ行かう」

「自分は伊弉諾の神の御子素戔嗚の神である」

「自分はこの太平の日本の國の出來る始め、まだ天地が一かたまりであつたものが、天地の二つに分れた時から、新羅の國に天降つたが、それからすぐと、また旅を思ひ立ち、朝こゝを出て、遙か遠くに見えてゐたかなたへ、粘土で作つた舟に乘り、[illegible]に重たり立つてゐる大海を漕いで來て、こゝ出雲の國に着いた」

○はにふの小舟－はにふは埴生。前揭書紀の一書に「以埴土作舟」とあるを指す。
〔水馴棹〕水に浸つた棹。棹をさすを目指すにいひかけた。
○八雲立つ 波が雲の如く重なり立つといひかけて、出雲の枕詞「八雲立つ」を出した。

【二】
○ながらへて生けるを今は歎くかな－續拾遺集惟宗行經の歌、下句－憂きは命のとがならねども」
〔身は老鶴の〕身は老いたりといふを老鶴にいひかけ鶴の音、音に立ててといひ續けた。鶴は子を愛するものの例に引かれるので出したのである。
○見るからに袂ぞ濡るる櫻花－續古今集藤原實賴の歌この下句－空より外の露やおくらん－原歌は、櫻花を見るにつけても、袂の濡れるのは、空から降りる露の外に、悲しみの涙がこれを濡らす爲であらうとの意。

【三】

ワキ「行くへの波も八重立つ」と正面に向きて先へ出でまたもとへ歸り出雲に着きたる心、道行濟みて正面に向き、
ワキ「急ぎ候程に出雲の國に着きて候 暫く休らひ四方の景色を眺めばやと思ひ候
ワキヅレ「尤も然るべう候
といひて脇座に着く。

【二】
シテ引廻をかけたる作物の内にて、
シテサシ「ながらへて生けるを今は歎くかな。憂きは命の科ならず。とは思へども思ひ子の。別れを慕ふ世の習ひ。我等夫婦に限らめや。身は老鶴の音に立てて。泣くより外の。事ぞなき
地下歌「見るからに袂ぞ濡るる櫻花。上歌「空より外に置く露の。空より外に置く露の。身は幼き嬰子を。誘ふ嵐は風よりも烈しきものを川上の。大蛇の爲に失はん子の別れをば。いかにせん子の別れをばいかにせん

【三】
ワキ「われこの國に來りつつ。四方の景色を眺む

【二】
[illegible]手摩乳[illegible]、[illegible]手摩乳、[illegible]
作物の中[illegible]、
手摩「このやうに長生きはしたが、今は生きてゐることが却つて悲しい。この世は辛いものだ自分だけが辛いのではない、とは心得てゐるけれど、可愛いわが子との別れを悲しむのは、世間一般の人情で、自分達夫婦だけではあるまい。それだのに、このやうな年寄りになつて、わが子に離れては、子を思ふ情に引かされて、たゞ泣くより外はないのだ。櫻の花の散るのを見るにつけても、たゞ空から降りる露の爲ばかりでない、悲しみの涙の爲に袖が濡れるのだ。露といへば、人の身は露のやうな果敢ないもので、幼い子供でも、あの世へ誘はれて行くのは、花の散るよりもなほ脆いものであるのに、その短い一生の終るのも待たないで、大蛇の爲に殺されてしまふとは。あゝどうしてこの子に別れることが出來よう」

【三】
長者夫婦が老人夫婦の泣くのをお聞きになつた態で、
翁「自分がこの國へ來て、あたりの景色を

○柴の戶の―柴の戶の明くを日の明け暮にいひかけた

○久方の―天の枕詞。

○木綿四手の―何といふといひかけ、木綿で作つた幣が榊などに掛かるを、斯かる泣く音にいひかけた。

○恥かしの―恥かしを山城國乙訓郡の羽束師の杜に、杜を漏りにいひかけた。

○おし明け方の―柴の戶を押し開けといひかけて、新古今集藤原良經の歌「天の戶をおし明け方の雲間より神代の月の影ぞ殘れる」を引き、尊の御姿を月に喩へ奉つた。

る處に。ここに怪しき疎屋の內に。いみじく啼哭する聲あり。これは如何なる神やらん

シテ「われならで訪ふ人もなき柴の戶の。明暮泣く音を今更に。尋ね給ふは誰やらん

ワキ「誰とも知らじ久方の。天より降る神なるが。この國始めて見そなはし。ここに尋ねて來りたり

シテ「そもや天より降ります。神とは何と木綿四手の。かかる泣く音は恥かしの。もりける事よいかにせん

ワキ「何をか包み給ふらん。早々姿を現して。謂れを語り給ふべし

シテ「仰せに從ひ夫婦ともに。歎きをとめて柴の戶を

地上歌「おし明け方の雲間より（作物の引廻を下す）お

賤の一ゐると、こゝの粗末な家の中で、ひどく泣く聲がするが、これはどういふ神であらう」

手摩「この家へは誰も尋ねてくる者はなく、たゞ自分達だけで泣き暮らしてゐるのに、今頃お尋ねになるのは、一體誰だらう」

神「誰ともわからない、天から降りて來た神で、この國を始めて見て、こゝへ尋ねて來たのだ」

手摩「これは〳〵、天からお降りになつた神樣とは。まあ何と申しませう、このやうな泣き聲がお耳に入つて、ほんとにお恥かしいことでございませう」

神「いや何もお隱しになることはない。さあ早く出て來て、そのわけをお話しなさい」

素盞嗚尊の仰せに從ひ、夫婦とも泣き止んで、柴の戶を開けて出て來ると、神の御姿の尊いこと、朝夜明け方の雲間から現れ出た月のやうに、すが〳〵しく、實に有難いお姿であつた。

【四】○第四の御子―書紀に、諾冊二尊が國土山川をお生みになつた後、天下之主者を生まんと思し召して、第一に大日孁貴(天照大神)、第二に月神、第三に蛭兒、第四に素戔嗚尊を生み給うたとあるに據る。
根の國とこの國―根の國は地下、黄泉の意、とこの國は常世國の転で、夜の國の意。
○いまし達―汝等。
○國の津神―國津神の訛。この國土に住む神。天つ神に對していふ。
手摩乳―少女の手を撫でてゐた故の名。記紀には妻の名とす。
脚摩乳―少女の足を撫でてゐた故の名。記紀には翁の名とす。

し明け方の雲間より。神代の月の影清く。尊の御姿。あらありがたの氣色やな。かくて夫婦の老人。中に少女をすゑ置き。歎き悲しむ有樣の心許なき氣色かな心許なき氣色かな

【四】

ワキ「いかに夫婦の老人。われはこれ伊弉諾伊弉冊の第四の御子素戔嗚の神なり。されども如何なる故にや御憎まれを蒙り。既に根の國とこの國に赴く。いまし達は如何なる神ぞ。少女を撫でて啼哭する事。そも何の歎きぞや

シテツレ「その時答へて申さく。奴はこれこの國の津神なり

地「名は手摩乳妻の名は。脚摩乳と申す夫婦なり

シテサシ「然るにこの少女はこれわが子なり。名をば奇稲田姫と申す

地「かやうに歎くその故は。先にわが子八人の少

かうして、老人夫婦が少女を中に置いて、歎き悲しんだ様は、實に氣がかりな様子であつた

【四】老人夫婦よ。自分は伊弉諾・伊弉冊の神の第四の御子の、素戔嗚神だが、どうしたわけか、神のお憎しみを蒙つて、今は夜見國へ行かうとするところだ。一體お前たちはどういふ神だ。そして、少女を撫でて泣いてゐるのは、どうしたわけなのだ」

その時手摩乳がお答へ申すには、

手摩「私はこの國に住む神でございまして、名は手摩乳と申し、妻は脚摩乳と申します。そしてこの少女は私の子で、名を奇稲田姫と申します。——

私どもがこのやうに歎いて居りますわけは、前には私どもの子供が娘八人あつた

女あり。年毎に簸の川上の大蛇に吞まれ。今又この姫取られんとす。免るによしなしといふ

（居クセ）

地クセ「その時素盞嗚詔りして宣はく。げに理や老人の歎く心を憐みの。惠みぞ深き川上の。大蛇を從へ治まる國となすべし少女をわれにたび給へと。宣へば老人は。喜悅の色をなし給ふ

シテ「則ち少女を奉る

地「やがて尊は稻田姫の。湯津の爪櫛とりなして鬢づらにさし給ふ。そのまま治まる國津神。ここに宮居の二柱。立つや八雲の妻ともに。八重垣造る言の葉の。三十一文字の詠歌の始めなるべし

【五】

地ロンギ「げにありがたき詔。げにありがたき詔。さてや大蛇を從へんその御方便如何ならん

のでございますが、毎年毎年、簸の川上の大蛇に吞まれて、今もまたこの姫をとられようとして、免れる術がたいのでございます」

といふ。その時素盞嗚尊が仰せられるには、

神「いかにも尤もだ。年寄りの歎くのが可哀想だから、自分が情をかけて、その川上の大蛇を退治して、この國を安穩にしてやらう。だから、その少女を自分にくれ」

かう仰せられたので、老人は大に喜び、

則ちこの姫を尊に奉つた。素盞嗚尊はすぐに、奇稻田姫の姿を齒の密た櫛の形に變へて、鬢にお挿しになつた。

かうして、神はこの儘この國の神として御支配遊ばされ、宮殿をお作りになつて、夫婦の契りをお結びになつた。その時の御歌、

「八雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を」

が我が國三十一文字の和歌の始めである。

【五】

手摩「誠にありがたい仰せでございます。ところで、大蛇を御退治遊ばすのには、どういふ御手段をお用ゐ遊ばすのでございます」

○簸の川—今の斐伊川で、船通山から發して宍道湖に入る。

○湯津の爪櫛—湯津は五百箇の義で、齒の密につまつてゐる櫛。

○とりなして—形を變へて。稻田姫を櫛に化して。

○そのまま治まる國津神—そのまゝ治まる國を國津神にいひかけた。

○立つや八雲の—「立つ」を柱を立つと雲の立つとに兼ねて用ゐた。

○八重垣造る言の葉—古事記に見えたる素盞嗚尊の神詠「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣つくるその八重垣を」を指す。

○三十一文字の詠歌の始め—古今集序に、和歌の起原を述べて「あらがねの土にしては、素盞嗚尊よりぞ起りける」とある。

【五】

○御方便　御手段。

ワキ『畜類の心もかねて白眞弓八しぼりの酒を取り合はせ。さすき八間を結び置き酒船に酒をたたへん

地「さてや八艘の酒船を。簸の川上に浮かめつつ

ワキ『少女の姿うつさんと

地『夕の雲の波煙も立つや簸の川上に。稲田姫を伴ひ上らせ給ふありがたや上らせ給ふありがたや

神「なに、畜生のあさましい心はよく分つてゐる。大蛇を欺く爲に、よく練つた精酒を取り合はせ、八間の棧敷を作つて、酒船にこの酒を一杯盛るのだ」

手摩「それには、八艘の酒船を簸の川上へお浮かめになりまして……」

神「それに少女の姿を映さうと思ふのだ」

と仰せられて、夕暮雲煙の立ち昇つてゐる簸の川上へ、奇稲田姫をお連れになつてお上りになつた。

ワキ素盞嗚神、子方奇稲田姫退場。續いてシテ手摩乳、ツレ脚摩乳等退場。

とワキ子方を先に立てて中入。シテ・ツレも續いて幕に入る。

○白眞弓—兼ねて知らるを白眞弓にいひかけ、弓の矢をやしぼりにいひかけた。
○八しぼりの酒—幾度も糟をしぼり取つた精酒。
○さすき—棧敷。書紀に假庪と記す。

【間】末社來序の囃子にて、狂言木葉の精、面鼻引・末社頭巾・着附厚板・縷水衣・括袴・脚半・腰帯・扇の裝束にて名乘座に出で、

狂言「かやうに候者は。出雲の國神門が嶽の木葉の精にて候。さても素盞嗚の尊。この國に天降り給ふに。簸の川上にて啼哭する聲聞えしかば。怪しみ給ひ到りて御覽あるに。老人夫婦の中に美しき姫を抱きて。歎き悲しみ候間。子細いかにと尋ね給へば。老人申すやう。われは手摩乳脚摩乳と申して夫婦の者なり。この姫は稲田姫と申して。わが姫なるが。この所に大蛇のあり。年々生贄を供へ申し候。當年はこの姫が番に當り候間。かやうに歎くなりと申す。尊聞し召し。さあらばこの姫をわれに與へよ。大蛇の難を救ふべしと宣へば。夫婦は悦び參らすべしと申す。その時尊大蛇の樣體を御尋ね候に。まづ七尾七谷ふさがつて。胴は一つ頭は八つ御座あると申す。尊の御謀にて。大き

【間】
○神門が嶽—簸川郡にある。

なる酒船を八つ御さゝせあり。その中へ酒をたゝへ。その上に棚をかき。稻田姫を置き給はゞ。姫の姿酒船にうつるべし。然れば大蛇生贄は酒船にありと心得て。酒を飲むほどに〱。八つ頭にて酒を飲み。納むる胴は一つなれば。正體なく醉ひ伏すべし。その時尊劍を持つて。御退治あるべきとの御事なり。心あらん人は尊に力を添へ候へ。その分心得候へ〱

といひて引く。

後見、藁屋の作物を引き、酒船の作物を出す。

一聲の囃子にて、後子方稻田姫、ワキヅレ輿舁二人(着附厚板・白大口・腰帶・扇の裝束)に輿をさゝせ、後ワキ素盞嗚尊、前の裝束の大口を半切に改め劍・鞭を持ちて子方の後より出で、舞臺に入り、

【六】 ワキ・ワキヅレ「光散る。玉の御輿を先立てて。尊は馬上に威儀をなし。簸の川上にと。急ぎけり

ワキ「抑もこれは。伊弉諾伊弉冊の御子。素盞嗚の神なり。簸の川上の大蛇を從へ。國土豊かになすべきなり

地「八雲立つ出雲八重垣妻ともに。出雲八重垣妻ともに。鳥上の嶽にうち上り。簸の川上はこれなれや。山聳え岸高く。嵐も波も聲々に。もの凄

【六】 第二段

後ワキ素盞嗚尊、子方奇稻田姫を伴つて登場。

四方に光を放つばかり輝く玉の御輿に奇稻田姫を載せ、これを先に立てて、素盞嗚尊は威風堂々馬にお乘りになり簸の川上へとお急ぎになつた。

尊「自分は伊弉諾・伊弉冊の神の御子素盞嗚神である。今簸の川上の大蛇を退治して、この國土を安穩富裕にしようと思ふのだ」

と、妃奇稻田姫と共に鳥上嶽にお上りになる。これぞ簸の川の水源で、山は高く聳え、川岸は深く、山の嵐も川の波も打亂れて烈しい音を立て、いかにもものの凄い有樣である。その岸に奇稻

【六】

○光散る―光を放つて四方を照らす。

○八雲立つ出雲八重垣―神詠を引いて「妻ともに」の序とした。

○鳥上の嶽―簸の川上、船通山の別名。

じき川岸に。稲田姫を。一人すゑ奉り。波間に浮かめる酒船に、御影をうつし給へば。尊は馬より下り立ちて。岸に上つて密かに出づる大蛇を待ちゐたり出づる大蛇を待ちゐたり

【七】

と脇座に行きて立つ。

早笛にて、後ジテ八岐大蛇、面黒髭・赤頭・色鉢巻・龍・着附厚板・法被・半切・腰帯の装束にて打杖を持ちて出づ。

地「川風暗く水渦巻き。川風暗く水渦巻き。雲は地に落ち波立ち上り、山河も崩れ鳴動して。現れ出づる大蛇の勢ひ年經る角には雲霧かかり、松柏背に生ひ伏して。眼はさながらあかがちの。光を放ち角を振り立てさも恐ろしき。勢ひなれどもさすが心は畜類の。船にうつろふ御影を呑まんと頭を船に落し入れて酔ひ伏したるこそ恐ろしけれ

ツキ「尊は十握の神劔を抜き持ち

○松柏背に生ひ伏して―大蛇の背に松柏の木が生えて枝が垂れ伏してゐることをいふ。この句書紀に見ゆ。解説參照。

○あかがち―書紀に赤酸醤とあり、眞赤なほゝづきをいふ。

○十握の神劔―長い劔一つかーは指四本並べた長さをいふ。

田姫をたゞ一人お置きになつて、川の波間に浮かべた酒船に、姫のお姿をうつすやうにし、素盞嗚尊御自身は馬から下りて、岸にお上りになり、密かに大蛇の出てくるのをお待ちになつていらつしやる。

【七】 後ジテ八岐大蛇登場。

川風が物凄く吹きすさび、水は荒く渦巻き、雲は地に落ち、波は立ち上り、山も河も崩れんばかり鳴り轟いて、現れ出た大蛇の恐ろしい勢ひ。年を經たその角は空高く雲霧の中に聳え、その背には松や柏が生ひ繁つて枝を垂れ、眼は宛も赤ほゝづきのやうな形をして光を放つてゐる。そして角を振り立ててゐる様は、如何にも恐ろしい勢ひであるが、流石は心は畜生のあさましさ、船に映る姫の御姿を見て、まことの人と思ひ、呑まうとして頭を船に落し入れ、酔ひ倒れた様は、實に恐ろしいものであつた。

素盞嗚尊は長い神劔をお抜きになつて、遠くの岸からお下りになると、大蛇は驚き怒つたが、毒酒に酔ひ倒れた爲に飛行自在の神通力を失つて、山河

とこれよりワキ・シテ切組。

地「尊は十握の神劒を拔き持ち遙かの岸より下り給へば大蛇は驚き怒りをなせども毒酒に醉ひ伏し通力失せて。山河に身を投げ漂ひ廻るを神劒を振り上げ斬り給へば。斬られてその尾は雲をうがち。尊を卷かんと覆へば飛び違ひ。卷きつけば斬り拂ひ廻れば廻る。互の勢ひ神は威光の力を顯し大蛇を斬り伏せ忽ちに。その尾にありし劒をとつて。叢雲の劒とは。名づけたり

とシテは斬り伏せられたる態にて切戸より引き、ワキ名乘座にて留拍子を踏む。

の間に身を投げてぐつたりとしてゐる。これを眼がけて、尊が神劒を振り上げお斬りになると、大蛇は斬られながらその尾を空高く上げて神を卷きつけようと覆ひかぶせる。神は飛び越えてこれをお避けになる、またも大蛇が卷きついてくると、神はこれを斬り拂つておしまひになる。大蛇がぐる／＼廻ると、神はそれにつれて廻つてお戰ひになり、暫くの間は、互に物凄い勢ひでお戰ひになつたが、神は威光の力を顯して、忽ちに大蛇を斬りふせておしまひになつた。

そしてこの尾にあつた劒をお取り出しになり、これを叢雲の劒とお名づけになつたのである。

○通力―神通力。飛行自在の不可思議力。

○神―素盞鳴尊。

○叢雲の劒―書紀の一書に大蛇の住んだ所に常に雲が叢つてゐたので、名づけられたものであるといふ。解說參照。

〔考異〕

諸流（寶剛喜）

【一】ワキ「それ治まれる國の始め混沌未分に分れしより（剛喜御代の惠みも久方の。天の御神の敎へを受けて）新羅（剛喜伯耆）の國に……

【六】ワキ「抑も（剛喜われは）これは伊弉諾伊弉册の御子（剛喜天照る神の弟の神）……

古諸本（貞享三年本）

【一】ワキ「抑もこれは……素盞鳴の神（貞尊）とは…… ワキ「それ治まれる……混沌未分に分れ（貞ち）しより（貞御代のめぐみも久かたの。

あめのみかみのをしへをうけて）新羅の……それ（貞是）よりやがて旅衣の（貞ナシ）ワキ道行「思ひ立つ……行く〳〵の波も八雲（貞色）立つ……

……ワキ「急ぎ候程に……思ひ候（貞是は出雲の國とおほえて候。先此所の有様を詠めはやと存し候）【二】サシ なからへて……憂きは命の科ならず（貞て）……【三】ワキ「われこの國に……これは如何なる神（貞事）やらん……ツレ 何をか包み給ふらん早々（貞いそぎ）……

【四】ワキ「いかに夫婦の……既に根の國とこ（貞底）の國に赴く（貞しかれとも今此國に來れり）いまし達……ツレ その時答へて申さく奴（貞やつこ）はこれこの國の（貞ナシ）津神……地「やがて尊は稻田姫の（貞を）湯津の……立つや八雲の妻ともに（貞こめて）

【五】ワキ「畜類の心も（貞は）……地「さてや（貞は）八艘の【六】ワキ「光散る……簸の川上にと急ぎけ（貞くな）り ワキ「抑もこれは伊弉諾伊弉册の御子（貞我は是あまてる神のせうとのしん）素盞嗚の神（貞みことゝは我事）なり【七】地「八雲立つ……尊は馬より下り立ちて（貞たまひ）……大蛇を待ちゐたり……待ちゐたり（貞給ふ〳〵）【八】地「川風（貞かみ）暗く……川風暗く水渦卷き（貞〳〵）……山河も崩れ鳴（貞震）動して……船にうつろふ（貞れる）御影を……叢雲の劒とは（貞そ）名づけたり（貞る）

附祝言

千秋樂は民を撫で。萬歲樂には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞ樂しむ颯々の聲ぞ樂しむ。

昭和六年四月二十日印刷
昭和六年四月廿五日發行

謠曲大観第五卷奥附

（非賣品）

不許複製

著者　佐成謙太郎

東京市神田區錦町一丁目十番地
發行者　三樹退三

東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二
印刷者　守岡功

東京市本所區厩橋一丁目二十七番地ノ二
印刷所　出版印刷株式會社分工場

東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
發行所　株式會社　明治書院

電話神田（25）二二一六番　六六四番　九九一番　六五四番

謠曲大觀總目錄

（曲名の左に括弧のあるものは括弧内の曲を見よ。別卷は索引その他）